平城宮発掘調査報告XII

奈良国立文化財研究所

平城宮発掘調査報告 XII

――馬寮地域の調査

奈良国立文化財研究所

序

『平城宮発掘調査報告XII』として平城宮西辺中門と北門の間の外郭大垣にそった南北に細長い地区の発掘調査報告を世に出すこととなった。この報告は昭和43年から55年にかけての前後計13次にわたる発掘調査を実施した結果を一冊にまとめたものである。昭和43年の第47次，引続いておこなった第50次の発掘で南北に細長い建物と広場状の建物の全く見られない地域があり，平安宮でも宮域の西部に左右馬寮が配置されていることから，この地が平城宮の左右馬寮のいずれかにあたるものと考えられた。特にSB5955・5956とした中央二間を間仕切り南北両側に十間と九間の細長い建物がつづく遺構は，昭和18年に騎兵隊に入隊した私にとっては厩舎の中央に乾草などの飼料置場と不寝番のいる場所があり，両側が長い馬房となっている建物を思い起させ，これは厩に関係がある施設であろうと直感したものであった。その後の調査でこの地域の北部に両廂の東西棟建物が何度にもわたって建替えがありながらつくられていたことがわかり，ここが馬寮としては事務処理的空間であることがはっきりとしてきた。

これまで平城宮内の長年の発掘で，官衙の一ブロックをほとんど発掘した例は，内裏と東大溝をへだてた太政官と考えられる部分と第一次朝堂院北方の大膳職推定部分とここしかない。一つの官衙の

奈良時代における変遷が詳細に検討できる貴重な例を加えたことになる。ただ，左右馬寮がすべてこのブロック内にあったのか，平安宮のように同規模の二ブロックを占有していたのかは今後の問題として残っている。また内厩の墨書土器や主馬の墨書土器の検出によって，平城宮の時代にこの一郭が終始厩に関連した役所によって占められていたことは疑いない。

この一郭に昭和45年に平城宮跡発掘調査部の建物が完成し，その一部に出土品を展示し一般に公開するとともに，出土品の整理・収蔵の施設を設けている。その後，研究所庁舎が春日野町から二条町に移転し，平城調査部の研究室は本庁舎に統合したが，出土品の処理および管理と公開展示部門として平城宮跡活用の一面を荷っており，地下遺構に影響をおよぼさないよう配慮した建物の構造についても附記している。本篇の内容などについて大方諸賢の御叱正をこう次第である。

昭和60年 3 月

奈良国立文化財研究所長

坪　井　清　足

目　次

第Ⅰ章　序　　言 …… 1

1　馬寮地域の調査と整備 …… 1

2　近年における発掘調査の進展 …… 2

3　保存整備の進展状況 …… 5

4　報告書の作製 …… 6

第Ⅱ章　調 査 概 要 …… 7

1　調 査 地 域 …… 7

2　調 査 経 過 …… 9

A　第47次調査…… 9
B　第50次調査…… 9
C　第51次調査……10
D　第52次調査……11
E　第59次調査（北・南）…12
F　第63次調査……13
G　第71次調査……14
H　第127次調査 ……14
I　西一坊大路の調査……14

3　調 査 日 誌 …… 15

A　第47次調査……15
B　第50次調査……16
C　第51次調査……17
D　第52次調査……18
E　第59次北調査……19
F　第59次南調査……21
G　第63次調査……21
H　第71次調査……23
I　第127次調査 ……24

第Ⅲ章　遺　　跡 …… 25

1　遺跡の形成 …… 25

A　発掘前の地形……25　　C　平城宮造営以前の地形…28
B　奈良時代以前の遺構……26

2　遺　　構 …… 29

A　第Ⅰ期（平城宮造営当初）の遺構……30
B　第Ⅱ期（奈良時代初期）の遺構……31
C　第Ⅲ期（奈良時代中頃）の遺構……35
D　第Ⅳ期（奈良時代後半）の遺構……40
E　第Ⅴ期（平安時代初頭）の遺構……47
F　宮廃絶後およびその他の遺構……50
G　西面大垣 SA1600と西一坊大路 SF154……61

3　遺構の相対年代 …… 62

第Ⅳ章　遺　　物 …… 66

1　木　　簡 …… 66

A　SA5950出土木簡 ……66　　D　SD6477出土木簡 ……67
B　SD5960出土木簡 ……66　　E　SD6499出土木簡 ……67
C　SD6155出土木簡 ……67

2　瓦　塼　類 …… 69

A　型式分類……70　　D　道具瓦と塼……86
B　軒 丸 瓦……70　　E　丸瓦・平瓦・文字瓦……87
C　軒 平 瓦……79　　F　小　　結……89

3　土　　器 …… 93

A　平城宮造営以前の土器…96　　B　奈良時代の土器……96

C　平城宮廃絶後の土器… 105　　E　SK1623 出土土器…… 112
D　施釉陶器…… 110

4　木　製　品 ……119

A　奈良時代の木製品…… 119　　C　部　　材…… 123
B　平安時代以降の木製品 122

5　金属製品・石製品・土製品……126

6　銭　　貨 ……127

第Ⅴ章　考　　察 ……129

1　馬寮地域の変遷 ……129

A　第Ⅰ期の遺構…… 129　　D　第Ⅳ期の遺構…… 136
B　第Ⅱ期の遺構…… 130　　E　第Ⅴ期の遺構…… 138
C　第Ⅲ期の遺構…… 133

2　馬寮についての史料的検討……140

A　馬寮の沿革と機能…… 140　　B　平城宮における馬寮… 144

3　土器――旧平城京域における平安時代の土器とその変容――…147

A　SD650B の土器……147　　D　西僧房以降の土器群… 151
B　SD650B に続く土器群…148　　E　小　　結…… 152
C　薬師寺西僧房床面土器…149

4　馬寮地域出土の柱根の年輪年代学による研究……153

A　試料と方法…… 153　　B　結果と考察…… 154

5　結　　語 ……157

補論　平城宮跡資料館および収蔵庫の建設 ……158

1　敷地の選定 ……158
2　地耐力調査 ……158
3　設計と施工 ……161
4　馬寮遺構模型の製作 ……162
別　　表 ……163
英文要旨 ……177

挿　図

1　調査地域…… 8
2　第47次調査地域の地区割と主要遺構…15
3　第50次調査地域の地区割と主要遺構…16
4　第51次調査地域の地区割と主要遺構…17
5　第52次調査地域の地区割と主要遺構…19
6　第59次北調査地域の地区割と主要遺構……20
7　第59次南調査地域の地区割と主要遺構……21
8　第63次調査地域の地区割と主要遺構…22
9　第71次調査地域の地区割と主要遺構…23
10　第127次調査地域の地区割と主要遺構 24
11　お旅所土壇東西断面図……25
12　宮造営以前の地形と遺構……28
13　SX7000とSD6980の関係……30
14　SK6350とSA3680の関係……31
15　SD5960とSK6098の関係……32
16　SA 5950 の柱根と柱抜取痕跡……35
17　SB6360内部の状況（部分）……38
18　SB 6401 柱穴八ホ……48
19　SX 6137 断ち割り図……49
20　西一坊大路関係の遺構……62
21　柱穴の切り合い関係……64
22　重圏紋軒丸瓦……70
23　単弁蓮華紋軒丸瓦……71
24　複弁蓮華紋軒丸瓦(1)……72
25　複弁蓮華紋軒丸瓦(2)……73
26　弁と間弁の関係……73
27　複弁蓮華紋軒丸瓦(3)間弁Ａ系統……74
28　複弁蓮華紋軒丸瓦(4)間弁Ｂ系統……76
29　複弁蓮華紋軒丸瓦(5)間弁Ｃ系統……78
30　重圏紋軒平瓦……79
31　偏行唐草紋軒平瓦(1)……79
32　偏行唐草紋支葉の分類……79
33　偏行唐草紋軒平瓦(2)……80
34　偏行唐草紋軒平瓦(3)……80
35　均整唐草紋軒平瓦(1)……81
36　均整唐草紋軒平瓦(2)……82
37　均整唐草紋軒平瓦(3)……83
38　均整唐草紋軒平瓦(4)……83
39　均整唐草紋軒平瓦(5)……84
40　均整唐草紋軒平瓦(6)……84
41　均整唐草紋軒平瓦(7)……84
42　均整唐草紋軒平瓦(8)……85
43　均整唐草紋軒平瓦(9)……86
44　鬼　瓦……87
45　文字瓦……88
46　軒瓦の出土比率……92
47　宮造営以前の土器類実測図……97
48　特殊土製品実測図…… 104
49　SK 7097・SK7094・SB7060出土土器実測図…… 107
50　施釉陶器実測図…… 111
51　板状・棒状木製品実測図…… 121
52　第Ⅰ・Ⅱ期遺構配置図…… 131
53　藤原宮西方官衙の建物配置…… 132
54　第Ⅲ期遺構配置…… 135
55　第Ⅳ期遺構配置…… 137
56　第Ⅴ期遺構配置…… 139
57　平安宮古図…… 146
58　薬師寺西僧房床面土器と灰釉陶器の対応関係…… 150
59　標準年輪曲線と試料柱根の重複位置 155
60　地質柱状図…… 159
62　平板載荷試験装置図…… 160
61　平城宮跡資料館等建物配置図…… 160
63　遺構面の保護と基礎工事…… 162

表

1 調査期間と発掘面積…… 7
2 遺構の相互関係一覧……65
3 軒瓦編年表……90
4 遺構から出土した軒瓦一覧……91
5 平城宮土器の大別……95
6 SE 6166 出土土器の器種と点数…… 101
7 漆付着土器出土地点…… 102
8 漆付着土器の器種別個体数…… 103
9 墨書土器一覧…… 103
10 馬寮地域出土灰釉陶器一覧…… 112
11 緑釉陶器出土地点…… 113
12 輸入陶磁器一覧…… 114
13 SK 1623 出土土器の器種構成…… 115
14 SK 1623 出土土師器の調整手法…… 116
15 削掛け計測表…… 119
16 板状・棒状木製品計測表…… 121
17 木製・部材一覧…… 124・125
18 銭貨一覧…… 127
19 馬寮官制の変遷…… 141
20 標準年輪曲線と試料柱根とのt値
および最終年輪との差…… 154
21 建築概要と構造…… 160

別　表

1 主要建物一覧表…… 164
2 軒丸瓦分類表…… 165
3 軒平瓦分類表…… 168
4 土器法量分布表…… 171
5 土師器編年表…… 173
6 黒色土器編年表…… 175

図　面

PLAN 1 平城宮跡全域地形図
2 馬寮地域実測図
3 6ADC-G区東半部・H区東北部実測図
4 6ADC-H区東南部・K区東半部実測図
5 6ADC-G区西半部・H区西北部実測図
6 6ADC-H区西半部実測図
7 6ADC-K区西半部・6ADD-L区北部実測図
8 6ADC-L区・M区北端部実測図
9 6ADC-M区中央部実測図
10 6ADC-M区南部実測図

11　6ADC-N区・K区西端部実測図
12　6ADC-O区・M区西端部実測図
13　6ADC-O区南端部・P区実測図
14　6ADD-L区東半部実測図
15　6ADD-L区南端部・P区東端部・M区北端実測図
16　6ADD-M区東半部・N区東北部実測図
17　6ADD-N区東半部・6ADE-A区・6ADE-B区東北隅実測図
18　6ADD-L区西半部・6ADD-O区東半部実測図
19　6ADD-P区中央部実測図
20　6ADD-P区中央部・6ADD-M区西半部実測図
21　6ADD-N区西半部・6ADE-B区実測図
22　6ADD-O区西半部実測図
23　6ADD-P区西半部実測図
24　6ADD-Q区東半部・6ADD-P区南端実測図
25　6ADD-Q区西半部・6ADD-P区南端実測図
26　6ADD-Q区南端部・6ADE-K区実測図

図　版

PL
1　平城宮全域航空写真
2　6ADC-G・H区　1　第63次調査区中央部全景 東から
2　築地SA6510とSA6150の交点（暗渠SX6505）東から
3　築地SA6150 南から
3　6ADC-G・H区　1　馬寮東官衙建物SB6487 東北から　2　同上 北から
3　馬寮東官衙建物SB6500(手前は築地SA6510) 北から
4　6ADC-G区　1　築地SA6475とSA5950B の交点(暗渠SX6504) 西南から
2　同上 東から　3　暗渠SX6504細部 南から
4　暗渠SX6505細部 東北から　5　同上 西南から
5　6ADC-G・H区　1　南北塀SA5950 南から　2～5　SA5950Aの柱根と礎盤
6　6ADC-L・M区　1　第127次調査区全景 東から　2　溝SD6473上層 東から
3　同上下層 東から　4　建物SB9553と塀SA9554 東から
5　同上 西から　6　建物SB6453 東から

7	6ADC-G・H・L・M区	1　建物SB6430 東から　　2　建物SB9552 南から 3　同上 東から　　4　建物SB6429北半部 南から 5　建物SB6469西半部 南から　　6　同上 西から 7　同上 東半部 東から
8	6ADC-H・M区	1　第Ⅱ期正殿SB6450と建物SB6451・6454 南から　　2　同上 東から 3　同上 北東から
9	6ADC-H・K区	1　第Ⅴ期二面廂付建物SB6460 南から 2　第Ⅳ期二面廂付建物SB6175 北から 3　建物SB6172・6173・6175重複状況 南から
10	6ADC-H区	1　第Ⅲ期馬房SB6172南半部と第Ⅴ期建物SB6171との重複状況 南から 2　同上 北から　　3　SB6172北半部 北から
11	6ADC-H・K・M・N区	1　第Ⅱ期前殿SB6180と第Ⅲ期正殿SB6185東半部 西から 2　SB6185・6195東半部 北から　　3　SB6180 東から
12	6ADC-M区	1　第Ⅱ期脇殿SB6425 南から　　2　同上北半部 南から
13	6ADC-M区	1　第59次北調査区北部全景 東南から 2　第Ⅳ期正殿SB6420 東から 3　第Ⅲ期後殿SB6385と第Ⅱ期脇殿SB6425(北半部)重複状況 南から
14	6ADC-M区	1　第Ⅲ期後殿SB6385 西から 2　第Ⅳ期前殿SB6381・6190併存状況 西南から　　3　同上 西から
15	6ADC-O区	1　全景 東から　SB6400・6401・6403　　2　同上 南から 3　SB6401中心部分礎盤(塼)使用状況
16	6ADC-O・P区	1　長方形土壙SK6350と南北塀SA3680 北から　　2　同上 南から
17	6ADC-M・N区	1　第Ⅲ期倉庫SB6340と建物SB6185西妻部分 南から 2　同上 西から　　3　第Ⅱ期倉庫SB6330 南から　　4　同上 西から
18	6ADC-M・N・O・P区	1　第Ⅳ期南北棟建物SB6345と第Ⅲ期南北塀SA6341 東から 2　同上 南から　　3　同上 北から
19	6ADC-P区	工房SB6360　　1　全景 南から　　2　同上 北から 3　同上 東から　　4　細部　　5　同上　　6　同上
20	6ADC-H・K区	1　第52次調査区全景 東から 2　第Ⅱ期馬房SB6170と小規模建物SB6168・6169の重複状況 3　南北塀SA5950 北から　　4・5　同上礎盤
21	6ADC-H・K区	1　馬寮東官衙西限築地SA6150を切る溝SD6155 北から 2　同上細部 東から 3　馬寮東官衙西限溝SD5960の北端屈曲点 北から 4　暗渠SX6514 西から
22	6ADC-H・K区	1　SB6165・6169・6170等重複状況 南から　　2　同上 北から

3　SB6171・6172・6173・6175重複状況 北から

23　6ADC-H・K区　1　第52次調査区北部全景 東から

2　SB6171・6172重複状況 南から　3　SB6173・6175重複状況 南から

24　6ADC-H・M区　1　SB6187・6188・6191重複状況 西から　2　同上 東から

3　SD6181とその南北の建物群 東から

25　6ADD-O・P・Q区　1　南北塀SA3680と東西塀SA6315 南から　2　SA3615 東から

3　第51次調査区北張出部全景 南から

4　第59次南調査区北半全景 南から　5　同上南半全景 北か

6　南北塀SA3680とSB6120の重複状況 南から

7　第Ⅲ期建物SB6120 南から

26　6ADD-L・D区　1　第47次調査区全景 東から

2　南北塀SA5950と馬寮東官衙西限溝SD5960 北から

3　SB5944・5953等宮廃絶後の小規模建物群 北から

4　SB5941南側柱列 東から

27　6ADD-M・N・P・Q区　1・2　第50次調査区全景 東から　3　南北塀SA5950 北から

4 南北溝SD5960と土壙SK6098の交点 北から

28　6ADD-M・N・P・Q区　1　第50次調査区北部中央 西から

2　SB6075・6080等宮廃絶後の小規模建物群 北から

3　SB6095 西から

29　6ADD-P区　1　第51次調査区東部全景 西から　2　南北溝SD5960と土壙SK6098の交点 南から　3　南北塀SA5950 南から

30　6ADD-L・M・P区　1　第Ⅱ期馬房SB5955・5956と南北塀SA5950 南から

2　同上細部 南から　3　SB5955の柱根 南から　4　同上 南から

31　6ADD-P区　1　SB6130南方の小規模建物群SB6131～6134 南から

2　第Ⅴ期南半部正殿風建物SB6130 南から　3　同上 西から

32　6ADD-P区　1　第Ⅴ期脇殿風建物SB6141と第Ⅲ期倉庫SB6140 南から

2　SB6141 北から　3　同左（アゼ除去後） 北から

4　SB6140 南から　5　同左　柱根

33　6ADD-P・Q区　1　第Ⅳ期馬房SB3690北半部 北から　2　同上 南から

3　SB3690南半部 南から

34　6ADD-P・Q区　1　第51次調査区西半部全景 北から

2　南北塀SA3680とその東西にある小建物群SB6101・6102 東から

3　南北塀SA3680と建物SB6302東から

35　6ADD-M・Q区　第Ⅳ期馬房SB6100　1　全景 南から　2　南半部と西廂 南から

3　北半部 北から　4　南半部と西廂 北から　5　同上 西から

36　6ADE-A・B・C・K区　1　第Ⅰ期地割溝SD6980全景 東から　2　同上西半部 東から

3　馬寮東官衙西限溝SD5960南端屈曲点(断割後) 東から

37　6ADD-N, 6ADE-A区　1　南北塀SA5950南端部 南から　2　同上 北から

38　6ADD-N, 6ADE-A区　1　南北塀SA5950南端部 北から

2　同上南から7・8間目細部 西から

39　6ADD-N・Q区　1　第71次調査区全景 東から

2　宮廃絶後小規模建物群SB702・7030等 東から

3　SB7114等宮廃絶後の小規模建物群 北から

40　6ADD-N区　1　宮廃絶後小規模建物群SB7024・7026・7030等 西から

2同上細部 東から　3　平安時代土壙SK7040・7041 北から

4　同上SK7097 東から

41　6ADC-K区　1　井戸SE6166全景 西から　2　同上 南から

3　同上東南隅井戸枠組方の状況

42　6ADD-P・Q区，6ADE-A区

1　井戸SE7094全景 南から　2　同上細部 東から

3　井戸SE6123 東から　4　井戸SE6300 北から

5　井戸SE6988全景 東から　6　同上細部 北から

43　6ADD-P区　1　井戸SE6143(上)・SE6144(下) 北から　2　SE6143細部 東から

3　SE6144細部 北から　4　井戸SE6135(右)・SE6146(左) 西から

5　SE6135細部 東から　6　SE6146細部 北から

44　6ADD-N・P・Q区　弥生時代の遺構

1　住居SB6122・土壙SK6121と奈良時代建物SB6120の重複状況 南から

2　SB6122 東北から　3　土壙SK7124 西から

4　土壙SK7123 北から　5　土壙 SK7101 北から

45　6ADD-M・N・P・Q区　古墳時代の遺構

1　土壙SK7080・7088を中心とした小穴群 東から

2　土壙SK7088 北東から　3　土壙 SK7098 東から

4　溝SD6060北部 南から　5　同上中央部 西北から

46　木簡 1

47　木簡 2

48　軒丸瓦 1

49　軒丸瓦 2

50　軒丸瓦 3

51　軒丸瓦 4

52　軒丸瓦 5

53　軒丸瓦 6

54　軒平瓦 1

55　軒平瓦 2

56　軒平瓦 3

57　軒平瓦 4

58　軒平瓦 5

59　道具瓦

60　土器 1　奈良時代

61　土器 2　奈良時代

62　土器 3　墨書土器

63　土器 4　平安時代

64　土器 5　平安時代

65　土器 6　平安時代

66　木製品 1

67　木製品 2

68　金属製品・石製品・銭貨

平城宮発掘調査報告 XII

馬寮地域の調査

1985

第Ⅰ章　序

この報告は，奈良市佐紀町に所在する特別史跡「平城宮跡」の，西面中門から同北門推定地にいたる西面大垣内側の馬寮跡に比定されている地域における，1968年度の第47次調査から，1980年度の第127次調査にいたる８次，９回分の調査結果をまとめたものである。

＊　次章以下においては，調査の成果を遺跡・遺物に分けて報告すると共に，当地域が奈良時代の馬寮，さらに奈良末から平安時代初頭にかけて主馬寮となった官衙の遺跡であることを明らかにしてゆくが，左右の馬寮が共にこの地域に存在したのか，当地域の南方に左右どちらかの馬寮が広がっていたのではないかという点については，不確定要素が多いため今後の課題として残さざるを得なかった。本書の副題として「馬寮地域の調査」と掲げたが，将来あるいは＊「左（右）馬寮地域の調査」と改める必要が生ずるかもしれない。

1.　馬寮地域の調査と整備

平城宮跡の発掘調査が継続的に開始されたのは1959年７月のことである。当初は，地元佐紀町の協力者の私宅を借用し調査の基地としていたが，調査の進展にともない，現地に発掘調査の拠点が必要となった。当時の国有地東北隅を選定して発掘調査事務所の建設を計画し，この＊地区の発掘調査を行なった（1959年，第３次調査）。遺構の保存に影響を及ぼさないよう配慮したうえ，翌年9月奈良女子大学附属幼稚園の建物を移築して，木造平屋建の平城宮跡発掘調査事務所を建設した。

その後，人員の増加，発見遺物の急激な増加，調査研究の場の確保等の必要から，この地区に遺物収蔵庫・整理室・整図室などのプレハブ建物が逐時増築されたが，調査研究の環境および＊遺物の保管にとっては甚だ不十分であり，また特別史跡の景観保全にも決して好ましい状態ではなかった。1962年に宮域西南隅の開発が計画されたが，発掘調査の進展にともなって遺跡の良好な遺存状況とその重要性が認められ，幅広く保存運動が行なわれた。その結果は国会で取り上げられることとなり，国費による全域買上げの方針が決定され，1963年度から奈良県教育委員会が事務委任を受けて公有化に着手，あわせて同年に保存整備事業も開始された。未指＊定であった宮の西部も追加指定され，発掘調査体制も拡充されて1963年に平城宮跡発掘調査部が発足した。

このような状況のもとに発掘調査は進められたが，将来永く継続的に調査を行なってゆくためには，円滑な推進，出土遺物の整理保存の万全をはかり，内裏地区に逐次増築された多数の仮設建物を撤去しその後を整備するために，別の地域に発掘調査の拠点を求める必要があった。

＊　日本万国博覧会が1970年に開催されることが決まると，これに関連して平城宮跡の整備の促進　とくに発掘調査の成果を公開する施設の設置が要望された。この頃，平城宮跡においては1965年度に第25次調査として西面中門（佐伯門）の調査が行なわれたが，このあたりの遺構は宮内の他の地区と比べるとかなり密度が薄いことが明らかとなった。そのため，この一部に平

城宮跡発掘調査部の研究室・資料展示部門・遺物収蔵庫を建設する計画が持ち上った。本書において報告する8次にわたる発掘調査の大部分はこの事前調査を兼ねて行なったものである。

これらの調査によって，西面中門から同北門推定地に至る宮西辺地区は馬寮であったと推定されるとともに，研究・展示・収蔵施設を設けるにはこの地区が適当と判断された。宮内の展示施設としては，1966年度から1971年度にかけて，文化庁文化財保護部記念物課によって内裏東方官衙地区に遺構覆屋が建設されたが，西方地区では，1968年度に第1・第2収蔵庫，1969年度に研究および展示棟が建設され，1970年4月に落成式を行なった。平城宮跡発掘調査部はここに移り，内裏地区の仮設建物を撤去し，跡地を整備した。1971年度には，研究・展示棟と収蔵庫とを結ぶ渡廊下が建設された。

発掘調査が進むと，第1・第2収蔵庫では手狭で出土遺物の収容保管が及ばなくなり，また，木簡・木製品・金属製品・土器・瓦類などの遺物を整理する場所の確保，木簡・木製品のPEG含浸あるいは真空凍結乾燥法による保存処置およびその他の科学的研究，発掘調査・整備に必要な車輌の収容などのため，1974年度に既存の資料館・収蔵庫の北側に第3収蔵庫，1977年度に第4収蔵庫を建設した。1978・79年度に，県道奈良谷田線（通称一条通り）に沿う佐紀町字大りの宮276-5および279-4番地の土地952㎡が買上げられ家屋が撤去されたため，1980年に第127次調査を行ない，同年度に第4収蔵庫と県道との間を見学者の便益施設として，駐車場・便所・集会広場を整備した。なお，宮跡西側の研究所新庁舎改修工事完了にともない，平城宮跡発掘調査部の研究室は新庁舎に移転，旧研究室部分を見学者説明等に利用する講堂に改修した（資料館・収蔵庫等の建設に関しては巻末の「補論」を参照されたい）。

2. 近年における発掘調査の進展

平城宮跡の発掘調査は，1984年夏の第157次調査までに，約29.5ヘクタール行なったが，これは特別史跡指定面積133.1ヘクタールの約22.2%，公有化面積107.4ヘクタールの約27.5%にあたる。この間の成果は『年報』などで逐次報告する一方，発掘調査に関して7冊，木簡に関して3冊，出土墨書土器に関して1冊，出土古瓦に関して9冊，整備に関して1冊の当研究所学報』・『史料』あるいは『基準資料』として公刊してきた。近年の発掘調査の状況は，さきに『平城宮報告XI』に述べているが，その後の進展のあらましを以下に略記する。

1981年度に水上池尻にあたる民家密集地の東隣りで行なった第129次調査の南に続く地区で，1982年度に第139次調査を行なった。1928（昭和3）年と1932（昭和7）年に岸熊吉氏によって一部調査された東大溝SD2700を約80mにわたって発掘し，大溝の北方に暗渠があり，その前方で東へ分岐する東西方向の大溝があることが判明した。また，内裏北方官衙の東北隅を確認すると共に，東大溝の東方にも官衙の建物が密集していることを知り得た。[3)]

南辺部では，南面大垣復原整備の事前調査として，1981年度の朱雀門東方の第130次調査に

1）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XI』第1次大極殿地域の調査（学報第40冊）1981 p.1～3。以下報告書に関しては『平城宮報告XI』の如く略記する。

2）岸熊吉「平城宮遺構及遺物の調査報告」（奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告12）1934。

3）『奈良国立文化財研究所年報1983』p.19～20。以下年報に関しては『年報1983』等と略記する。

続き，1982年度には朱雀門西方で第143次調査を行ない，朱雀大路の側溝が二条大路南側溝まで延びていることが判明した。1984年度には，1965年度の第32次調査に続く東端部で第155次調査を行ない，南面大垣，二条大路両側溝，東南隅で大垣を横断する大溝，壬生門心から約187.5m東方で大垣築造以前の南北溝などを検出した。

＊　朱雀門北方に展開する推定第1次朝堂院地域は近年特に調査の重点を置いてきたところである（朝堂院の北に続く第1次大極殿地域の調査結果はさきに『平城宮報告XI』として公刊した）。推定第1次朝堂院地域においては，1976年度の第97次調査以降ほぼ毎年のように調査を進め，1981年度の東南隅における第136次調査，1982年度の東第二堂南端部を含む第140次調査まで，6次にわたる調査によってその東半部の調査をほぼ完了している。この結果，推定第1次朝堂院地域
＊にはまず東部に南北の幹線水路SD3765が掘られるが，まもなくこれを埋め立てて東方に移し（SD3715），東西幅120m（400天平尺）の位置に木塀SA8410が計画されて掘立柱掘形が掘られるが，柱を立てずに埋めもどし，東西幅約214m（720尺），南北長約284m（960尺）を木塀で囲む。木塀は後に築垣に造り替えられ，郭内には2棟の長大な基壇建物が南北に並んで建てられた。東第一堂SB8400は桁行10間，4.4m（15尺）等間，第二堂SB8550は桁行21間，4.4m（15
＊尺）等間，梁行はいずれも4間，3.2m（11尺）等間で，両建物とも特殊な基礎地業を行なっている。また，第二堂の南に仮設的な建物が並び，その西に北に向って3条の杭列があり，これは競馬・騎射などの行事に用いられた施設と推定された。

推定第1次朝堂院の南に朝集殿に当る建物とそれを囲む施設が存在したかどうかも，この地域の性格を検討するうえで重要な課題である。そのため1982年度の第146次調査・1983年度の
＊第150次調査・1984年度の第157次調査を行なった。朝集殿自体はまだ確認されておらず，推定第1次朝堂院の前には朝集殿に当る建物はなかった可能性が高くなっているが，朝堂院東面築垣の延長上に凝灰岩切石の暗渠があり，築垣も一部検出されて，朝堂院前方には築垣によって囲まれた空間が存在していたことは確かとなった。第157次調査は朱雀門内東方で行ない，掘立柱塀が東へ延びて大垣との間が宮内道路となることが判明したが，推定第1次朝堂院東面築
＊垣の延長部がこの地区では現水路と重複するため，朝堂院前面区画の東南隅の状況は確認されていない。なお，朝堂院南部および朝集殿推定地の第140・146・150次調査では，4世紀末から6世紀初頭にわたる竪穴住居群，堰状施設をともなう川，溝，土壙などが発見されて，このあたりの古墳時代の様相も明らかになってきた。

第2次大極殿朝堂院地域は，かつて1924（大正13）年に整備に伴う調査によって大極殿回廊
＊基壇と雨落溝の一部を発見し，1955（昭和30）年には回廊東南隅の調査を行なってこれを平城宮の第1次調査にあてている。その後も，大極殿・同後殿および北面回廊東半・大極殿東楼・東朝集殿の発掘調査を行なっているが，大部分は未調査である。大極殿および後殿の調査（第113次・132次）の際に掘立柱の下層遺構が発見され，第1次大極殿＝朝堂院地域と併せて平城宮

1）『年報1983』p.32。
2）『年報1982』p.36～37，『年報1983』p.21～22。
3）『年報1982』p.36～37，『年報1983』p.24，『年報1984』p.21。
4）上田三平『史蹟名勝調査報告』（史蹟調査報告2）1935。
5）『平城宮跡第1次発掘調査報告』（奈良国立文化財研究所学報第10冊）1961。
6）『年報1979』p.1～4，『年報1982』p.6～8，『年報1969』p.38～44，『年報1972』p.31～35。

中心部の複雑な状況は早急に解明すべき重要な問題である。このため，1983年度から，第2次大極殿院＝朝堂院の調査を重点的に進めることとした。1983年度には大極殿院閤門，同南面および東面回廊を中心に第152・153次両調査を行ない，この一郭の規模を明らかにすると共に大極殿前方に複雑に重複する掘立柱遺構を検出している。これらの掘立柱遺構は，烏形・日月の幢，四神の幡を立てた宝幢の跡や舞台状あるいは廊状遺構などで，大極殿で行なわれた儀式に関連する重要な発見であった。掘立柱の下層建物も正殿の前に南門，北に後殿を備え，掘立柱塀で囲んだ状況が明らかとなり[1]，今後の第2次朝堂院地域の調査の進展に期すところがますます大きくなっている。

内裏・第2次大極殿東方の官衙地域は，1964年度から1970年度にかけて9次の調査を行ない，一部では遺構覆屋の建設，建物の復原が行なわれているが，この地域の状況を総体的に明らかにするために1983年度に第154次調査を行ない，大極殿東外郭東門および塼積基壇建物を持つ特異な官衙に接する広場的空間の存在を確認した。また2本の大溝から木簡や木とんぼ，銅製人形など多数の遺物を発見した。

平城京に関する調査はそのほとんどが開発計画に伴う事前調査であるが，近年の大規模なものとしては1983年度の大和郡山市九条町の右京八条一坊十一坪における第149次調査がある。坪内の遺跡の状況は良くなかったが，西一坊坊間路が一坊大路なみの幅員をもち，特に西側溝は約10mの幅があって東堀河に匹敵することが明らかとなった。

その他，中小規模の発掘調査は数多く，重要な成果があがったものも少なくない。1981年度における右京二条二坊十六坪の第137次調査，左京三条四坊三坪の第138次調査では，坪内の地割りや掘立柱建物群の配置・変遷の状況を確認した。1982年度に行なった太安麻呂の居住地であった左京四条四坊九坪の第141-9次調査においては，九坪の一部分の調査ではあったが，四坊坊間路の幅員を確認，3期にわたる遺構の変遷が明らかとなり，また羊を形どった珍しい形象硯や巻銭の状態の100枚近い和同銭などの重要な遺物の発見があった。藤原仲麻呂の田村第推定地に含まれる左京四条二坊十五坪の第145次調査では，3期にわたる遺構のうち第2期は礎石建ちの正殿と脇殿で構成され，この時期には少なくとも西側の十坪を含めて2坪以上の敷地を形成していたことが判明し，同じ九坪内における1984年度の第156-8次調査においても5期の遺構を確認した。

北辺坊における調査では，称徳天皇御山荘跡と伝承する中島を持つ苑池西の，1937年開基勝宝金銭出土地に隣接する右京一条北辺四坊八坪で，1983年度に第156-26次調査を行ない，大型の掘立柱建物を含む計画的配置の建物群が確認された。山荘跡の可能性が強まるとともに，北辺坊の状況の一端が明らかとなった。また，9世紀前半の灰釉骨蔵器が発見され，平安時代にはこの地が葬地となったことも知られた。

1）『年報1984』p.22～25
2）『年報1984』p.26。
3）奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984。
4）『年報1982』p.38～40，奈良国立文化財研究所『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』1982。
5）奈良国立文化財研究所『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』1983。
6）『年報1983』p.26。
7）奈良国立文化財研究所『平城京右京一条北辺四坊六坪発掘調査報告』1984。

このほか，左京二条二坊十三坪の第141-5次（1982年度）および第151-11次（1983年度），同二条二坊三坪の第151-32次（1983年度），同四条二坊一坪の第151-1次（1983年度），同四条二坊三坪の第141-31次（1982年度），同九条三坊三坪の第148次（1982年度），右京二条二坊十六坪の第151-22次（1983年度），同二条三坊十二坪の第156-10次（1984年度），同三条三坊十五坪の第141-26次（1982年度）などで坪内の顕著な遺構を確認した。条坊関係の調査成果では，左京九条三坊条間路と東堀河の交点（第141-23次調査）で，豊富な遺物とともに橋の材料と焼損した建築部材が発見されている。京東南隅に近い五徳池の西における第141-37次および第151-30次調査では九条大路側溝を，羅城門西方では1980年度の第125次，1981年度の同補足調査につづき，1983年度の第125-4次調査においても九条大路北側溝を検出した。また，左京三条二坊二坪の第141-25次調査では朱雀大路東側溝と築垣跡を確認している。

当研究所による調査のほか，奈良市教育委員会の京内の発掘調査でも，1979年度の左京五条二坊十四坪，1981年度の左京五条五坊七坪・十坪，1982年度の左京二条二坊十二坪，1983年度の同三条五坊四坪，1984年度の同五条一・八坪，1981～83年度の東市北辺部をはじめ，各所で貴重な成果が挙げられているが，平城京の調査については今後に残された課題が多い。

京内寺院の調査では，西大寺東塔，薬師寺南大門・同中門・同苑院推定地などの調査があり，とくに1982年度の薬師寺中門は再建計画に伴う全面調査であった。

3. 保存整備の進展状況

平城宮跡の整備は，1963年度に奈良県教育委員会によって始められ，1970年度から当研究所が引き継いでいる。近年の事業では南面大垣の復原が第一にあげられる。1982年度には朱雀門を挟む南面中央部で各々長さ約50mを再現した。いずれも第130次および第143次調査で事前調査を行ない，発掘調査の成果と関係資料により，下幅2.7m，総高5.6mに復原した。地下遺構の保存や管理上などの理由から，基礎は浅い鉄筋コンクリートベタ基礎とし，壁体は本来版築の技法によったものであるが，骨組を鉄骨造，表面は土質の実感を生かすために土塗壁，中塗仕上げとし，桁・梁・軒・屋根は伝統的技法により，木部は朱土塗とした。1983年度には同じ工法によって南面西端部を復原した。その他の南面大垣部分は，凝灰岩切石で大垣と同じ幅の低い壇を作って植栽を行ない，前面には二条大路側溝を復原し，二条大路路面および宮の壇地には適宜植栽して宮南辺部の整備を進め，1982・83年度に西半の大部分を完了した。南面大垣の一部復原によってその中央に建っていた朱雀門やその前面の朱雀大路の復原整備を促進し，南辺部の古都景観が直接的に理解できるようになるものと期待される。

1982年度には第2次大極殿後殿および北面回廊東半部の基壇を復原し，また第139次調査を

1）奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』1984。奈良県教育委員会『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984。奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告』1984。

2）奈良国立文化財研究所『平城京東堀河　左京九条三坊の発掘調査』1983。

3）奈良市教育委員会『市道九条線関係遺跡発掘調査概報(I)・(II)』1983・84。

4）奈良国立文化財研究所『平城京朱雀大路発掘調査報告1982』1983。

5）奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書昭和54年度～58年度』1980～84。

6）『年報1983』p.10～11。

行なった北方官衙地区で，東大溝を含め遺構配置表示を行ない，その地区の構成を理解できるようにした。1984年度には第152・153次調査の成果により，第２次大極殿院閤門および南面回廊東半部・東面回廊の基壇復原を行ない，また内裏東方官衙地区の一部において版築の技法による築垣の一部復原を計画している。その他，未発掘地では将来の発掘調査を期して水系整備，土中の遺構・遺物の保存と修景を兼ねて草園整備などを進めている。

4. 報告書の作製

発掘調査にたずさわった関係者は極めて多く，すでに当研究所を去り他機関において活躍されている者もかなりの数にのぼる。ここでは先に発掘責任者（所長・部長）と発掘調査担当者名を掲げ，その他の関係者については一括して列記する。

次数	発掘年度	所長	部長	発掘調査担当者
第 47 次	(1968年)	林　　剛	坪井清足	高島忠平
第 50 次	(1968年)			石松好雄
第 51 次	(1968年)			佐原　真
第 52 次	(1968年)			森　郁夫
第 59 次北	(1969年)	松下隆章		町田　章 *
第 59 次南	(1969年)			伊東太作
第 63 次	(1970年)			田中哲雄
第 71 次	(1970年)			村上訒一
第 88－1 次	(1974年)	内山　正	鈴木嘉吉	中村雅治
第 88－13次	(1974年)	川　修三		岩本正二
第103-14次	(1977年)	坪井清足	野　久	小林謙一
第 127 次	(1980年)		岡田英男	上原真人

安達厚三　阿部義平　天田起雄　石井則孝　井上和人　稲田孝司　牛川喜幸　小笠原好彦　甲斐忠彦　加藤允彦　加藤優　狩野久　河原純之　鬼頭清明　木下正史　栗原和彦　黒崎直　佐藤興治　沢村仁　菅原正明　巽淳一郎　田辺征夫　東野治之　西弘海　西谷正　西村康　八賀晋　藤井功　藤原武二　藤村泉　細見啓三　松下正司　宮沢智士　宮本長二郎　三輪嘉六　本村豪章　山岸常人　山沢義貴　山中敏史　山本忠尚　吉田恵二　横田拓実　横田義章（あいうえお順） *

報告書の作製は1981年度から開始し，遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり，遺物については考古第一・第二・第三調査室および史料調査室が分担した。1982年度以降，執筆分担者を中心とした検討会を随時行ない，遺構の配置・時期変遷等を中心に討議を重ね，全体の構想をとりまとめていった。この間，研究員の移動があり，執筆分担者の変更を余儀なくされたこともあり，３年間余を費してようやく出版のはこびとなった。執筆分担はつぎのとおりである。

第 I 章　1・2・3　岡田英男，4　山本忠尚
第 II 章　1・2・3　山本忠尚
第 III 章　高瀬要一，2－A～E　亀井伸雄（現 奈良市教育委員会文化財課長）　2－F・G　上野邦一
2－H　山本忠尚
第 IV 章　1　清田善樹（現 福井県立朝倉氏遺跡資料館学芸員）　2　岩永省三，3　巽淳一郎，4～6　杉山洋
第 V 章　1・5　山本忠尚，2　佐藤信，3　巽淳一郎，4　光谷拓実
補　論　内田昭人
英文要旨　山本忠尚

遺構・遺物の写真撮影は八幡扶桑・佃幹雄が，木質遺物の樹種鑑定は光谷拓実が行なった。

本書の編集は，岡田英男の指導のもと山本忠尚が担当し，石川千恵子が助力した。また，図面浄書はそれぞれ執筆担当者が分担し，上野雄一（千葉大学大学院生）・林利治（奈良大学 OB）の補助があった。

第Ⅱ章　調査概要

1. 調査地域

今回報告する調査地域は，平城宮西辺部の西面中門（佐伯門）から同北門（伊福部門）推定地に至る，西面大垣沿いの南北約280m，東西約110mの範囲である。北は県道奈良谷田線（通称＊一条通り），西は県道木津郡山線，東は宮跡内を北から南へゆるやかに蛇行しつつ流下する用水路で画されており，1973年以降，当地域には平城宮跡資料館・収蔵庫等が建設され，現在では発掘調査および遺物整理・収納の基地となっている。

調査地域の区・地区名

本調査地域を当研究所の遺跡表示方法にしたがってあらわすと，6ADC区G・H・K・L・M・N・O・P地区，6ADD区L・M・N・O・P・Q地区，6ADE区A・B・K地区に相当する。この地域の西南隅部分，すなわち西面中門付近は第25次調査区に属し，すでに報告済みだが，馬寮官衙域の遺構を一部含んでいるため，重複をいとわず本報告に一部を再録することとした。西北隅の一画は3軒の民家が現存しているため調査が及んでいない。なお，当地域の西方において西一坊大路にかかわる調査を数件実施している。いずれも小規模な調査であるが，大路の両側溝を検出してその幅員を確認し，また西面大垣の壊地の状況を明らかにするなどの＊成果をあげたものも含まれており，馬寮地域における建物配置等を考える上で重要な関連を有すると思われるので，それらのうち第88-1次，第88-13次および第103-14次調査の成果も本書に収めることとした。調査地区・面積・期間等をとりまとめて Tab. 1 に示す。

西一坊大路の調査

（調査次数）	（調査区・地区名）	（調査期間）	（発掘面積）
47　次	6ADD—L・O	1968・5・16～68・8・26	33.0 a
50　次	6ADD—M・N・P・Q	1968・7・12～68・10・15	33.0 a
51　次	6ADD—L・M・O・P	1968・9・7～68・12・11	37.6 a
52　次	6ADC—H・K・M・N	1968・11・18～69・2・26	35.0 a
52次(補)	6ADC—P・R	1969・5・8～5・14	1.3 a
59次(北)	6ADC—M・O・P	1969・12・20～70・4・3	39.0 a
59次(南)	6ADC—O・P・Q	1970・1・6～70・4・1	16.0 a
63　次	6ADC—G・H・L・M	1970・5・1～70・7・27	44.6 a
71　次	6ADD—Q・N，6ADE—A・B・K	1971・2・22～71・4・10	40.0 a
88—1次	6ADB—I	1974・4・5～4・16	0.8 a
88—13次	6ADB—M	1974・9・19	0.1 a
103-14次	6AGA—P・Q，6AGG—B	1978・1・9～78・3	5.0 a
127　次	6ADC—L	1980・10・13～80・12・1	7.8 a

Tab. 1　調査期間と発掘面積

1）『平城宮報告Ⅸ』。

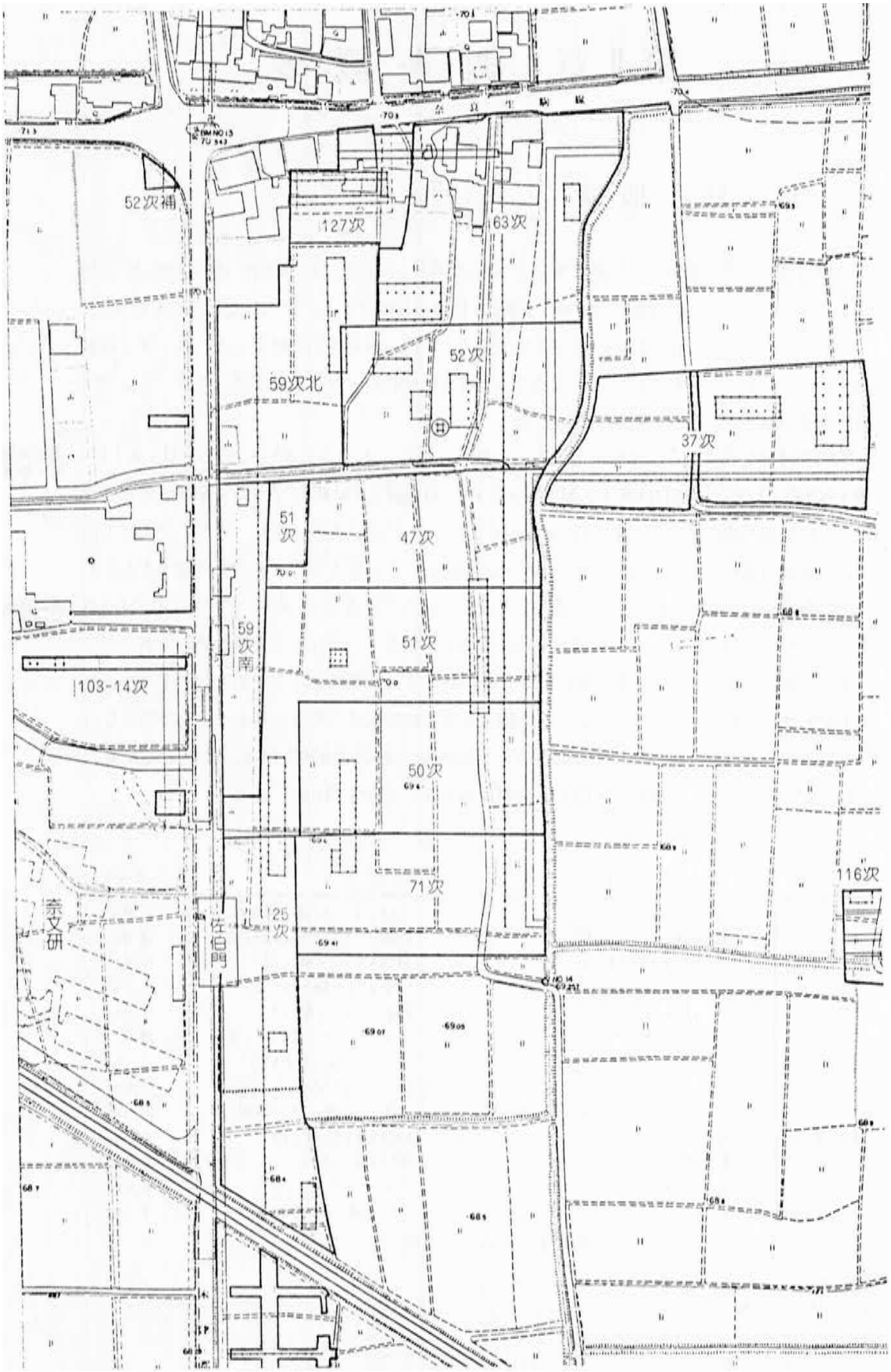

52次補
127次
63次
52次
59次北
37次
51次
47次
59次南
51次
103-14次
50次
71次
116次
125次
佐伯門
奈文研

Fig. 1 調 査 地 域

2. 調 査 経 過

調査を3段階に区分

9回に分けて行なった馬寮地域の発掘調査は，3つの段階に区分してたどることができる。まず，1968年度にあいついで実施した第47次，第50～52次調査を第1段階とすると，翌1969・1970両年度の第59次北・南，第63次，第71次調査は第2段階と捉えられ，第127次調査は約10年後になって補足的に行なったものとみなせるのである。第1段階・第2段階はともに平城宮跡資料館・収蔵庫等の建設に伴う事前調査であり，前者は対象地域のほぼ中央部，後者はその周辺部（北・南および西）の調査にあたる。また第127次調査は，当地域北辺の民家買い上げによって国有地が拡大し，その部分に見学者用の便益施設をつくるために行なった事前調査である。

調査の成果は，次数が進み発掘面積が拡大するにつれ次第に詳しさを増していったが，大きな画期をなしたのは第1段階の末，すなわち第52次調査時のことであった。つまりこの時点ではじめて当地域が馬寮跡に相当することが想定でき，遺構群の分期と大まかな変遷の構図が組み立てられるようになったからである。

以下においては，調査後間もなく作成した調査終了報告や調査概報にしたがって，その間の事情を述べることにしよう。遺構の名称や分期等については調査直後のものを用いるので，本報告の内容とは若干相違する点もある。なお，第1・第2段階の各調査はほぼ継続して行ない，一部は併行して進んだこともあったが，土盛地の関係から，調査区は連続せず飛び飛びになっている。

A 第47次調査

第1段階

調査地域は「西宮」比定地のほぼ中央，前年度に行なった第37次調査区域の西側に接する。平城宮時代に属する遺構としては掘立柱建物3棟，柵2条，溝2条を検出しただけに過ぎない。

発掘区東部では，南北溝SD5960（幅3.0m）と南北柵SA5950（柱間2.7m）が平行して走る。その西側に東西棟の掘立柱建物SB5951（2間以上×2間，柱間2.7m）と南北棟SB5955（1間以上×2間，柱間2.4～2.7m）があり，SB5951から西へ32m離れて南北棟の掘立柱建物SB5965（3間×2間，柱間1.8～2.0m）があった。溝SD5961（幅1.0m）は発掘区中央を東西に横断し，南北溝SD5960に注いでいる。そのほかの遺構としては，柵SA5941（柱間5.6m）と平城宮廃絶後のものと考えられる小規模な掘立柱建物数棟と井戸がある。

出土遺物には瓦・土器があるが，遺構が稀薄なのと同様遺物も少量である。

B 第50次調査

第50次調査は，日時の上では第47次の後半と併行する。土盛地の関係から隣接地では実施できず，第47次調査区の南方において1調査区分だけ間隔を空けた地域で行なった。西面中門を含む第25次調査区の東北に接するところである。なお，調査次数が2次分飛ぶが，第48次は第

○○○○○ 2次朝堂院地区における東朝集殿の調査（1968年5月20日～9月18日）であり，第49次調査は宮跡西北隅に近い民家密集地の一画における住宅建設に先立つ小規模な調査（1968年6月3日～7月30日）である。

第50次調査では，掘立柱建物5棟，同柵1条，溝2条を検出し，その状況から発掘区内を3小区に分けて捉えることができた。 *

東部 南北柵SA5950とその東方約4m隔てて並走する2条の南北溝SD5950・6061を検出した。このうちSA5950・SD5960は，先に北方で行なった第47次調査で検出したものの南への連続部分である。柵SA5950は14間分を検出し，この柵造営時の足場穴かと思われる小型の柱抜取痕跡が一部重複している。SD5960も柵に沿ってさらに南の発掘地域外へ延びている。この溝の埋土からかなりの量の藤原宮式の瓦を採集した。SD6061は著しく削平されており，詳細は不明。柵SA5950の西側では建物の南妻1間分を検出した。これは第47次調査で一部発掘していた南北棟建物SB5955の南妻と推定される。 *

中央部 南半において多数の柱穴を検出したが，建物としてまとめ得るものはSB6075（桁行4間×梁行2間，柱間5.5尺等間），SB6080（桁行・梁行とも2間，柱間8.5尺）の2棟に過ぎない。

西部 SB6100・6095の2棟の掘立柱建物を検出した。SB6100は柱間8尺で，東側柱筋において南へ拡張して追求した結果，桁行16間，梁行2間と判明した。この建物は第25次調査で検出したSB3690と南妻柱筋が揃っており，同時期の造営によるものと推定される。その北西にあるSB6095は桁行3間，柱間10尺，梁行2間，柱間8尺の東西棟建物である。 *

平城宮造営前の遺構として古墳時代の溝SD6060（幅約2m）を検出した。これはSD6100を西北から斜に横切って東南に抜けるが，SB6100の遺構保存のため一部を発掘するに留めた。 *

以上の遺構が互いに時間的にどのような関係にあるのか，あるいは一官衙に属するものとしたばあいどのようなまとまりを示すかについては未だ判断し難い。

C 第51次調査

第25次調査区およびその東北の第50次調査区に北接し，第47次調査区の南に接する位置である。平城宮の遺構としては掘立柱建物8棟，柵2条などがあり，ほかに弥生時代・古墳時代および中世の遺構も検出した。 *

溝と柵 調査区東端には溝SD5960（幅2m）が北から南に流れており，その西7mには南北柵SA5950（柱間2.6m）がある。この溝・柵の南・北延長部は第47・50次調査ですでに検出済である。一方，調査区の西端近くには南北柵SA3680（柱間2.6m）がある。この柵の南延長部は第25次調査でみつかっており，今回の間分を加え総長15間以上となった。北延長部分はさらに未調査地へと続く。SA5950とSA3680との距離は84mある。 *

長い建物 調査区の東端部には，南北柵SA5950の西5.5mのところに，南北棟建物SB5955（8間×2間）とSB5956（9間×2間）が南北に相接して建っている。両棟の間隔は桁行2間分あり，その間にも柱穴が存在することから，両棟は棟続きで，間の部分は馬道をなしたとも考えられる。発掘区の西端近くでも，南北柵SA3680の東側で，南北棟の長大な建物SB3690を検出した。これらの長い建物は第47次調査のSB6100と類似しており，当地区の性格を決定づ *

けるであろう極めて独特なものである。 ○○○○○

その他の建物　7棟検出し，そのうちの6棟は発掘区の北半にある。南半には南北柵SA3680の西側に2間×2間の小建物があるのみ。

以上の建物群をA・B2期に分けることができた。長い建物3棟（SB3690・5955・5956）は
＊ 両南北柵（SA5950・3680）によって区画した地域の東端・南端に配した建物として，柵とともに同時期に属する（A期）と考えられるのに対して，SB6120はその西がSA3680と重複するため新しいものと想定され，SB6140はSB6120と南の妻通りをそろえるのでこれと同時期（B期）と考えるのである。

以上のほかに，前期弥生式土器を含む土壙や竪穴住居のほか，古墳時代の土器を包含した自
＊ 然流路を検出した。

D　第52次調査

この調査は第47次調査区に北接する地域で行なった。調査区東部で検出した南北柵SA5950 **第2段階**
は，第47次調査以来，第50・51次調査においても検出し，連続したものと捉え得る。しかも，すべての掘立柱建物はこの柵の西側にあるので，この柵SA5950がこの地区の東を限るものと
＊ 考えられる。84mへだてて西辺に位置する南北柵SA3680との間が一つの官衙ブロックを形成するのである。また，調査も第4次目を数え，遺構は柱穴の重複関係や建物配置から3時期に大別して捉えられるようになった。

A期　発掘区東端近く，南北柵SA5950の東16mに南北築地SA6150がある。SA5950の西には，6間×2間の南北棟建物SB6170（東3mに10間分の柱穴を伴う），さらに西に北妻をSB6170
＊ の北から3間目の柱筋に揃えたSB6177がある。この建物の北方20mにあるSB6187も小規模ではあるが柱間寸法が上記建物と一致するので同時期と考え，SB6177とSB6187の間にあるSB6180も東妻柱がSB6177の西側柱筋と揃うのでこの時期に入れる。

B期　掘立柱建物4棟と井戸1基がある。SB5951は第47次調査で南妻を見つけていたが，桁行14間，梁行3間の南北棟と判明，この北にあるSB6172，西辺で検出したSB6185は共にSB
＊ 5951と柱筋が揃う。また，SB6185とその北にあるSB6195は東妻を揃えて配置されているので同時期と考えられる。SB5951の西南方に井戸SE6166が掘られている。この井戸から「主馬」と墨書された土師器杯等が出土，4次にわたって調査してきた当地域を「馬寮」跡と見る手懸りが得られた。

C期　第52次調査区内においては，C期およびそれ以降の建物は少ない。SB6190・6165・61
＊ 67・6195・6186などが候補となるが，調査地外にかかり全貌が判明しないものの他はいずれも小規模なものである。SB6170・6171・6173・6188などは時期不明。

2条の南北柵SA5950とSA3680に挟まれた東西約84m（28丈）の官衙ブロックは馬寮と考えられるに至ったが，その北限については調査地外にあるため不明，だが西面北門から東へ延びる道路の位置に仮定できよう。南限については，SA3680の南端が西面中門の北側にあるこ
＊ とからここに考え，とすれば官衙ブロックの南北長は約250m以上となろう。

○○○○○

E　第59次調査（北・南）

馬寮官衙域西辺部の調査である。調査地は第47・50・51次調査の西側（南区）および第47次の北・第52次の西側にあたる南北に長い範囲（北区）で，南・北両調査区の中間は約43mほどあく。

掘立柱建物27棟，柵4条，溝2条，土壙5などほか，鍛冶工房跡を検出。柱穴の重複関係や建物配置から少なくとも4期に分け得ることとなった。

A期　調査区西端部にある南北柵SA3680は24間分検出，さらに北へ延びる。この西約10mの位置に西面大垣の東側溝SD6303（幅1.4m残存）および犬走りSA6370の一部が遺存していた。SA3680の東では長大な南北棟SB6425がある。この建物は当初7間×2間，のちに改造して北に6間分を付け足し，桁行13間となった。南北柵SA6341もこの期に属する。

B期　A期の柵SA3680が取り除かれ，西面大垣に至る範囲まで拡げて利用するようになった。新たに掘立柱建物4棟（SB6403・6380等），土壙1（SK6350，南北42m，東西6m，深さ60cm）が造営される。鍛冶工房SB6360もこの時期に操業された。柱穴は円形で小さく，堅固な建物とはみなし難い。内部や周辺から焼土・鞴羽口片・鉱滓等が多く出土し，建物内のすり鉢状土壙（SK6358・6359・6361・6362）は炉と考えられる。SA3680の廃絶後に設けられた南北に長い長方形の大土壙があり（SK6350），内部には焼土等工房からの投棄物が充満しており，工房に関係するものとみられた。

C期　建物配置はA・B両期に比較して大きく変化し、大規模な改造が認められる。この時期に属するものとしては掘立柱建物5，柵1などがある。調査地西北隅のSB6400は4間×11間以上で東西に廂がつく南北棟である。その東に柱通りを揃えて3棟の東西棟SB6185・6195・6385が並ぶ。それぞれ東半部は第52次調査で検出，今回全規模が判明したものである。

D期　C期とほぼ同位置で似た構造の建物を造営している。掘立柱建物7棟，溝1条が含まれる。調査地西北隅のSB6401は4間×7間の東西両廂付南北棟で，礎盤として塼を用いる。廂は広廂。この東14mにある東西棟SB6190・6381は南北に並び，柱通りが揃う。

今次調査とこれまでに行なった第25・47・50・51・52次調査結果をまとめ，次のような総合的見解がとれるようになった。

宮の西面中門を入ってすぐ左手には，西面大垣と平行して南北に延びる2条の柵がある。北へ約215m確認しており，西面北門に通ずる東西の宮内道路にまで達していたのであろう。両柵の東西間隔は約84mある。建物はこの2条の柵で区画された範囲の周辺部に配置されており，中央部は広い空閑地となる。ここに東西約84m（28丈），南北約250m（80丈余），約2.1haの広さをもつ一つの官衙域が想定できる。官衙の性格を推定する手懸りとして，井戸SE6166（第52次調査）出土の土師器に墨書された「主馬」がある。「主馬」の名をもつ官司には東宮の「主馬署」と令外官の「主馬寮」とがある。「主馬寮」は奈良末から平安初頭までの25年間，「左（右）馬寮」を統合して機能していたと考えられ，墨書土器が奈良時代末期のものである点と符合する。またこのブロックは東宮の一部署である主馬署にしては大き過ぎる。したがって，

ここを主馬寮およびその前身の左（右）馬寮と考えて大過なかろう。平安宮古図における左右馬寮の位置・規模とも類似しており，この点からも上の想定は裏付けられる。なお，平安・平城における当該官衙の東西幅を比較すると，南面西門に通ずる南北の道路と西面大垣との間を平安宮では2分してその1を占め，平城宮では3分の1を占めている。

F　第63次調査

第52次調査区の北，第59次北調査区の東に接する。馬寮と推定している官衙の北限と東北隅の状況を明らかにすることに主眼を置いた。本調査では掘立柱建物14棟，築地2条，柵1条，溝8条などを検出，柱穴の重複関係や建物の配置から，A期・B期・C期およびそれ以降に分けて理解した。

＊ **A期**　調査区中央部東寄りにある南北柵SA5950はこの官衙の東限線で，今回23間分を検出，北端はさらに北へ延びる。調査区西北方にある東西方向の築地SA6475はこの官衙の北を限るものと思われ，東はSA5950に接続する。柵SA5950と築地SA6475の接点がこの官衙の東北隅をなし，この入隅では築地の下に木樋の暗渠を設けて水を北外方へ流すようになっている。築地SA6475の北にある平坦地SX6502は西面北門から東に延びる宮内道路の一部であろう。調
＊ 査区西南部のSB6450は7間×4間の南北廂付東西棟で，A期で唯一の両廂付建物であり区画内における位置からみて馬寮の正庁に近い性格が想定される。この建物の北にあるSB6469は2間×4間以上の東西棟で，SB6450と桁行の柱通りが揃う。

調査区東部は馬寮東方にある別な官衙に属する。第37次調査と一連のものであろう。南北方向の築地SA6150はこの官衙の西辺を画するもので，SA6475のほぼ東延長線上で東に折れ曲
＊ り，調査区外に延び，第37次調査で検出した東西柵SA5270と合するものと見られる。南北柵SA5950と築地SA6150との間は2つの官衙の間にある道路であろう（SF6503）。

B期　新たに掘立柱建物4棟が造営された。東西棟SB6385・6430，南北棟SB6172などである。SB6385は桁行7間の東西棟，SB6430は梁行4間，桁行13間以上の南北両廂付東西棟，SB6172は2間×9間の南北棟である。

＊ **C期および以降**　この期のものとしては，桁行7間，梁行4間の東西両廂付南北棟SB6173と桁行5間，梁行4間の東西両廂付南北棟SB6460がある。両者は柱通りを揃える。SB6175は時期下がる桁行21間，梁行4間の南北に長い建物で，北側柱穴は浅く一部削平されていた。

これまでの調査で，馬寮と推定される官衙の東西幅は84mであることが明らかとなっていた
＊ が，南北長については不明であった。今回検出した築地SA6475をこの官衙の北限とすると，南北長は252mとなる。ただし，柵SA5950はこの築地よりさらに北に延びているので，官衙の北限はさらに北となる可能性も残る。この官衙が馬寮であることを推定してきたが，今回の発掘でも「主馬」「内厩」の墨書土器が出土し，従来の想定を強化した。なお，今回新たに検出したSB6450は，この区画内ではA期で唯一の南北両廂を有する東西棟建物であり，その規模
＊ や区画内における位置からみて，馬寮の正庁に推定される。出土遺物は少ないが，「嶋掃進兵士」が他の仕事に従事したため員数に不足を来した報告の木簡などが出土している。

G　第71次調査

西面中門を含む第25次調査区に東接し，第50次調査区の南にあたる。馬寮の一部で，西面中門との関係からその南限にあたる地域と推測された。掘立柱建物10棟，柵７条，溝２条，井戸４基などが検出され，少なくともＡ～Ｃの３期に区分できる。

A期　調査地の東部を南部に走る柵SA5950は馬寮の東を限るもので，今回13間分を検出すると共にその南端を確認した。その結果，SA5950は西面中門の中軸線から約４ｍ北のところまで延びることとなった。このSA5950の東8.5mの位置で柵と平行する南北溝SD5960は柵の南端に対応する位置で東に折れる。調査地西北部の南北棟SB6100は第50次調査ですでに桁行16間と判明していたが，今回南妻から３間分だけ西に廂を伴うことが判明した。調査地中央部南端，西面中門中軸線上でバラス敷面 SX7000を検出した。これは西面中門から東に通ずる道路敷の一部と推測される。バラス敷に先行して幅1.8mほどの東西溝SD6980がある。この溝は西面中門の中軸線上にあり，地割りに関係するものと考えられる。

Ｂ期の遺構は当調査区内では検出されなかった。

C期　平安時代に属する遺構で，柵３列，土壙３，井戸４などがある。

以上のほか，造営期の不明な小規模建物がいくつかあり，宮造営以前の遺構として弥生時代・古墳時代の穴や溝がある。出土遺物は瓦・土器が主なものであるが，他の地域に比較して量は少ない。瓦では藤原宮式がめだつ。

今回の第71次調査によって官衙の南の境界を明らかにすることができた。これによって，これまで行なった７回の調査を含めて，一つの官衙の全規模を明確にすることができた。

H　第127次調査

第３段階

馬寮推定地北辺中央部にあたり，第63次調査と東および南が接し，第59次調査区とも一部接する。検出した遺構は掘立柱建物５棟，築地塀１条，掘立柱塀１条，井戸状土壙１基である。

掘立柱建物SB6430は，従前の調査で一部が検出されていたが，今回桁行14間以上，梁行４間の南北廂付東西棟であることが判った。SB6469は桁行７間，梁行２間の東西棟で，SB6430より新しい。SB9552は３間×２間の東西棟で，南側柱筋がSB6469の南側柱筋と揃う。築地SA6475は地業の痕跡を検出した。南・北に雨落溝SD6473・6477を伴う。SD6473の埋土上面には凝灰岩の細片が一面に認められた。この築地が馬寮の北限を画すとみられる。

I　西一坊大路の調査

第103-14次調査は幹線下水道工事に伴う事前調査として，県道木津郡山線の西側で実施したものである。小範囲の調査ではあったが，西一坊大路SF154とその両側溝SD152・153を検出し，大路幅員を明らかにした。第52次補足調査はこの北方で行なった小規模調査で，東側溝SD152の一部を検出した。

3 調 査 日 誌

A 第47次調査　6ADD-L・O地区

1968年5月16日～8月26日

5・16 表土の排土開始。肥土，床土（淡褐色砂質土）の順に掘り下げる。

6・3 発掘区西方（O地区）から，暗褐色斑入灰色砂質土面で遺構検出を行なうが，奈良時代の遺構は見あたらない。

6・4 前日より1層さげて遺構検出。暗褐色斑入灰色砂質土は少量の瓦器および瓦片を含み，二番床と思われる。遺構検出面は灰褐色ないし黄褐色の粘質土で，南方では一部粘質土のところもある。68ラインまで達したところで奈良時代のものと思われる柱穴や土壙の存在を確認した。ほかに中世以降の細溝が縦横に走る。

6・5～7 引き続き遺構検出。63ラインのアゼを越えると，暗灰色砂質土の堆積が始まり，徐々に厚さを増して60ライン付近では約30cmある。この土層中には瓦，土器（瓦器，須恵器，灰釉陶器，土釜）が含まれている。北方のDライン以北ではやや薄い．西北隅で小型南北棟SB5945，Bラインでは東西溝SD5961検出。溝はさらに東に延びる。Sラインアゼ以南には，埋土に瓦器・瓦を含む小さな柱穴が多数ある。

6・8 黄褐色粘質土面にて遺構検出続行。発掘区中央部にはほとんど遺構はなく，鍔釜や瓦器の断片の出土が多い。

6・11 55ラインアゼに近づくにしたがって，奈良時代の遺構が多くなる。東西溝SD5961はまだ東へ続き，その北側で小規模な南北棟SB5965を検出。溝の南方には小柱穴が点在する。

6・13 55ライン以東では再び遺構が稀薄となる。55ライン以東，SD5961の南側では土層の堆積状況が変り，一面に灰褐色粘質土がかぶさる。この土層中には瓦・土器片（いずれも奈良時代）が入り，この上面では柱穴等の遺構は見えない。しかも厚さ20～30cmあって一度では取りつくせないので，遺構検出を中断，灰褐色粘質土の排土のみを行なう。その下は黄褐色粘質土だが，東へ行くにしたがって黒味を帯び，褐色に近くなる。

6・14 引き続き灰褐色粘質土の排土。LB49区で東西方向に据えられた木樋検出（SX5947）。浅く埋められており褐色粘質土面から浮いてしまうため，時期の下るものと思われた。

6・18 発掘区東端に達する。東から折り返し遺構検出再開。46ラインで南北溝（SD5960）の東肩を検出。発掘区東辺を南北に縦断する模様。

6・19 南北溝SD5960の西肩を検出する。幅約3mで埋土は黄褐色砂混粘土である。南方LO48・49区にまたがって東西溝あり。南北溝にそそぐものか。溝内には瓦片がつまり，丸瓦の完形品が含まれている。田植が最盛期に入り，作業員の休みが多い。

6・21 50ラインに沿って南北塀かと思われる柱穴列を発見。北半部の7間分を検出。さらに南・北へと延びる模様。掘形は巨大で，柱間は9尺と推定される（SA5950）。

6・22 SA5950の柱穴，Sライン以北を掘る。20～30cmで底面に達し，みるべき遺物ほとんどなし。Sライン以南では柱穴の輪郭が不明瞭であり，そのまま残して様子をみる。

6・27 西方へ進むも北半で東西溝SD5961を確認した他みるべき遺構なし。黄褐色粘質土層には瓦片が含まれていることが確実なため，これを排除して青灰色粘土面まで下げながら遺構検出を行なう。一方，発掘区西南隅において西方へ拡張区を設定する。幅6m，長さ30mで，西面大垣等宮西辺部の状況を確認するためのものである（西区）。

6・29 西区床土取りと並行して主調査区の精査。

7・4 西区において遺構検出。79～80ラインで南北溝，北壁沿いで東西方向の小さな柱穴列（SB5941）を検出。

Fig. 2 第47次調査地域の地区割と主要遺構

7・5　西区遺構検出終了。西面大垣に関する遺構はない。主調査区清掃。

7・10　耐圧試験。

7・22～7・26　実測。

7・27　補足調査。

7・29　補足調査。L地区南端で南北棟建物の北妻部分検出（のちSB5955となる）。

8・5　遺構の再確認。本日にて発掘調査終了。

B　第50次調査　6ADD-M・N・P・Q地区

1968年7月12日～10月15日

7・12　肥土排土開始（西から）。

7・26　肥土取り終了。床土除去にかかる。地区杭打ち。

8・6～7　一番床を取り終り，東から折り返し二番床排土開始。50ライン付近から西では二番床は徐々に薄くなり，二番床を剝ぐと瓦片の散布が認められる。西方では既に奈良時代遺構面に達している可能性がある。

8・8　前日の所見にもとづき，西側から遺構検出開始。黄灰色粘質土面である。東西・南北に幅30cm位の溝が走る。

8・9　68ラインに沿って4個の柱穴を検出。掘形は1m角で柱根の遺存するものもある。黄褐色粘質土を掘り込んでいるが，この上に厚いところで約20cmほどの鉄分を含む褐色の砂がかぶっており，掘形はこの砂を除去しないとみえない。

8・10　68ライン沿いの柱穴と平行して，66ラインでも2個の柱穴検出。梁行2間の東西棟建物となるか。

8・13　66・68ラインに沿う2本の柱穴列は，梁行2間（柱間8尺）の南北棟と確定。Lラインが北妻となり，南は発掘区外へ延びる（10間以上，→SB6100）。

8・14～19　63ラインのアゼを越え，M・N区の遺構検出。南半のN区では小さな柱穴が群在するが，M区部分にはほとんど遺構なし。西北から東南に向って，幅2m位で
帯が認められ，古墳時代の溝と思われる。M区Oライン付近では幅3mほどの黄色土が東西に走るが，性格は不明。その南北は灰褐色土が拡がる。

8・20　55ラインを越え遺構検出。M地区では現検出面下に土器・瓦片の入った層が続く。土器内面に漆の付着したものが多い。

8・21～22　50ラインで南北柵を検出(SA5950)。掘形は大きいが不整形で浅い。柱間は10～7尺で不揃い。埋土も一定しない。NJ49には柱根遺存。49ラインには浅い南北溝あり。雨落溝か。

8・23～24　48～46にかけて遺構検出。Kラインの北側で数個の小穴を検出しただけ。MP47に北から東へ曲る幅2mほどの溝がある。47次で検出しているものに続くと思われる（SK6098）。その南には灰褐色粘質土が溝状に広がるが，SD5960とは確定できない。

8・31～9・5　M地区Oライン付近で検出していた黄褐色土の帯を追う。東は56ライン，西はP地区に入り66ライン付近に及ぶ。版築状に盛られた形跡はなく，また南北側に広がる灰褐色土も56～66ラインで切れる。

9・6　写真撮影。

9・7　遣方設定。

9・8　水糸配り。

9・10～11　平面実測，レベル記入。Q地区で検出したSB6100の南妻を確認するため67ラインを南へ拡張する。

9・12　柱穴セクション，北壁土層図作製。SB6100は14間分まで確認。

9・16　西壁土層図作製。拡張部遺構検出。

9・17　アゼ土層図作製。

9・18　南壁土層図作製。SB6100は梁行2間，桁行16間の建物と判明。南妻には2本柱根が残る。

9・19　拡張部実測。SA5950柱穴の断面図にとりかかる。土層は複雑である。M地区47ラインM～Pにかけて南北に長い土壙発見。P地区古墳時代溝を掘り下げる。

9・20～21　SA5950土層図作製。47ライン土壙

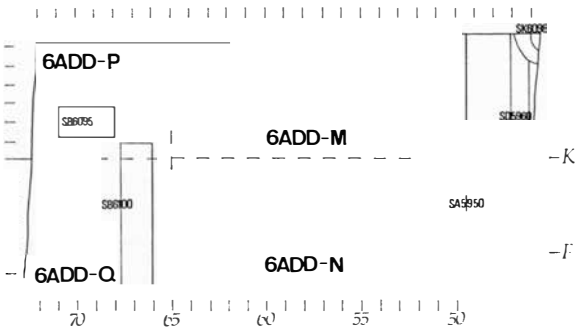


Fig. 3　第50次調査地域の地区割と主要遺構

の下で南北溝検出。これがSD5960で47次につながる東北隅で東に曲ると見た溝はより新しいものであると判明。SD5960はSA5950を検出した面より10～30cmほど灰褐色土を取り去ると見えるのでSA5950より古い。

9・24　P地区西南でSB6095発見。3間×2間の東西棟で，SB6100を検出した面を下げて初めて検出可能なので，SB6100より古い。古墳時代溝の発掘。

9・28　SB6095と古墳時代溝の写真撮影。

9・30～10・2　SD5960の掘り下げ。

10・3　SD5960の写真撮影。各セクションの再検討。SD5960は地山を掘り込んだものでSA5950より古いものであることを再確認。本日にて調査終る。

C　第51次調査　**6ADD-O・P・Q地区**

1968年9月7日～12月11日

9・7　北側（O地区）から肥土排土開始。

9・21　引き続き床土の除去にかかる。

10・11　遺構検出開始。Q地区東南およびP地区南端の2カ所に分れる。Q地区：第25次調査で知られていた柱間9尺の南北棟SB3690の東側柱筋を13間まで検出。P地区：Cラインまで達するが，東西方向の細溝数本があるのみ。P地区東半は床土排土である。

10・12　Q地区：Kラインまでを西に掘り進み，76ラインでSB3690の西側柱列を検出。QH75に円形土壙がある。P地区：Fラインまで達するが，顕著な遺構なし。

10・14　P地区：あい変らず碁盤目状の細溝多く，Gライン以北やや深く掘り下げつつ遺構検出を行なう。PG74～PH75に径4mの大穴あり。P地区中央部でも遺構検出開始するが，まだ手がかり得られず。Q地区：SB3690はKラインアゼを越えてまだ北（すなわちP地区）へのびる。第25次検出の南北柵SA3680を77ラインアゼ下で検出。計6個あるがさらに北へのびると思われる。

10・15　本日からO地区1カ所，P地区3カ所，Q地区1カ所の計5カ所に分散して遺構検出のピッチをあげる。P地区：西南のL～NラインでSB3690の北妻検出。第25次調査のぶんを合せ計15間となる第50次調査のSB6100より1間少ないが柱間が，長いため桁行総長は一致する。この付近には小さな柱穴が多数あるがまとまらず。瓦器の出土が多い。

10・16　P地区：中央部64～66ラインで5間×2間の南北棟検出（SB6141）。PG64，PE64の2カ

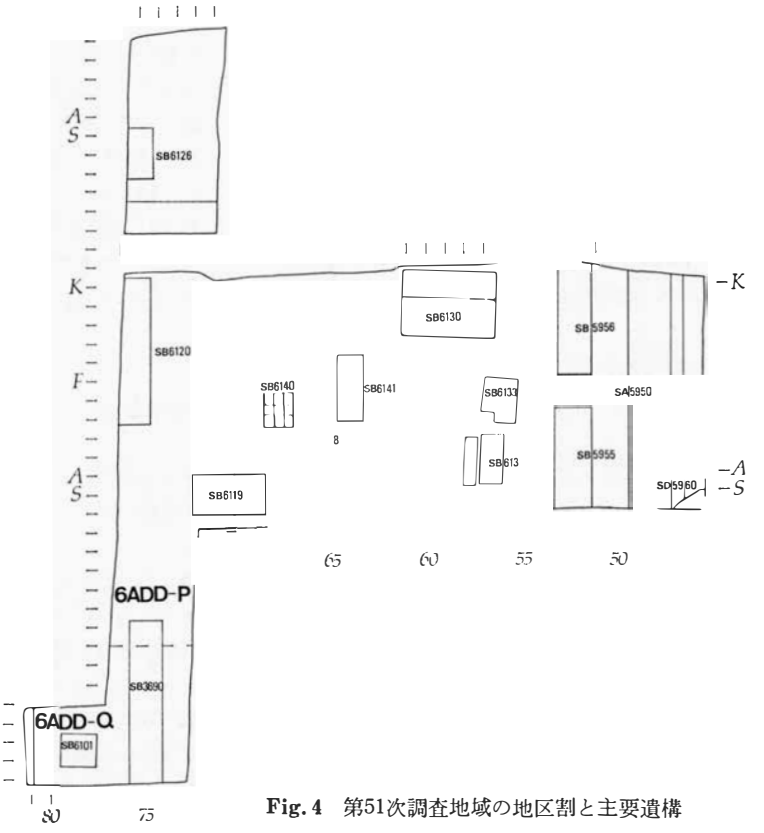


Fig. 4　第51次調査地域の地区割と主要遺構

所に中世の井戸あり。前者は北辺に井戸枠あり，後者の方は曲物の可能性あり。この付近でも瓦器が多い。西南方68～70ラインに数個の柱穴があるが，いまだまとまるまでには至らず。Q地区：Kラインおよび77ラインアゼ土層図作製。SB3690が地山面から掘り込んでいることを確認。西方で小型東西棟まとまる（SB6101）。Q地区西端で西面大垣の残存部と思われる南北方向の高まり検出。東肩かみなので断定はできない。P地区西南部で古墳時代の斜行溝がみつかる（未掘）。

10・17　本日でQ地区全体とP区西半部の遺構検出が一応終了した。Q地区77およびKラインアゼを除去。この状況で写真撮影。

10・18　写真撮影の続き。P地区中央部では併行して遺構検出を行なう。3間×3間の倉庫風総柱建物（SB6140）とその南で東西柵（SA6138）がみつかる。SB6140は柱根が5本残る。O地区東北隅には円形小柱穴が多数あるがまとまらず。中央西寄りで南北にならぶ柱穴4個検出（SB6126の東側柱列）。

10・19　10時までにP地区63ライン以西のすべての遺構検出完了。ただちに写真撮影に入る。午後遣方準備。

10・21　遣方設定。水系配り。

10・22　実測開始。ただしP区西端C～J区については急拠もう一層下げることにする。75ライン上に8個の柱穴がならび8間×2間以上の南北棟にまとまる（SB6120）。PH75の円形大土壙は井戸らしいので一段下げる。

10・23～26　この間連日降雨のため作業できず。

10・28　実測再開。30日までかかる。この間併行してP地区西部の遺構検出を行なう。弥生時代の土壙・住居址がみつかる。

10・30～31　土層図作製。古墳時代の溝を一部掘り下げる。柱穴のチェック等ダメ押調査。

11・1～19　この間，P地区東半部の床土排土作業のみで，実質的な調査はなし。

11・20　P地区63ライン以東において調査再開。西から東へと進む。55～58ラインに細柱の小規模建物2～3棟あり柱穴埋土から鍔釜・瓦器が出土する。PI58を中心に円形の土壙状のものが規則的にならぶ。性格不明の遺構である。その周囲には柱穴がある模様。

11・21　遺構検出東へと進む。53ラインで調査区南北を縦断する形で柱穴列検出。柵と思われるが，第47次南端でみつかっている建物の西側柱列になるかもしれない。

11・22　昨日柵とみたものに並行して51ラインでも柱穴列検出南北棟建物になる。19間ぶんある。PD52とPF52にも柱穴があり，ここを馬道とした2棟に分れる可能性もある（SB5955・5956）。

11・25　19間南北棟の南妻検出のため，南で発掘区を拡張する。20日にみつかっていたPI58を中心とする円形土壙群は5間×2間の東西棟SB6130の内側にあること判明。50ラインで南北柵SA5950の大穴みつかり始める。

11・26　SA5950の検出・発掘。柱穴はその西北隅に西へ尾をひく抜取穴をもつ。

11・27～28　SA5950ほぼ掘り終る。SB6130の精査。

11・29　調査区東南隅に大土壙あり。南北溝SD5960を切る。PC57を中心として小柱穴多数あり，1群は9間×3間の総柱建物となり（SB6133），その西に3間×1間の南北棟がある。

11・30　SB6130には北側に廂がつくこと判明。従って5間×3間となる。47ラインの南北溝SD5960を掘り始める。

12・2　SD5960完掘。発掘区東端に達し，おり返し清掃にかかる。SA5950の精査。

12・3～9　写真撮影。実測。

12・10　レベル記入。柱穴の断ち割り調査に入る。

12・11　東南隅大土壙SK6098は第50次調査で検出していたものにつながるため，再発掘し全体を明らかにする。本日にて調査終了。

D　第52次調査　　6ADC-H・K・M・N地区

1968年11月28 18日～1969年2月26日

11・18～29　肥土排除（実働10日）。

11・29～12・6　床土排土。

12・7　西方の床土排土と並行して東端から遺構検出開始。床土直下の暗褐色斑混入土を取ると黄褐色土になる。この粘質土は瓦片を含み整地土と考えられる。この上面をけずり，41ラインで2条の南北溝を検出。北端は土壙で切られているか。

12・8　西側からも遺構検出を始める。N地区の検出面は褐色砂質土である。

12・11　K地区：P～Oライン以南では黄褐色粘質土が灰褐色土にかわる。H地区東北の土壙はほとんど無遺物。M・N地区西端部では無数の細溝が縦横に走り，その間にいくつか柱穴が認められる。

12・14　H地区東北の土壙は複雑に屈曲して45ライン以西へ延びる模様。北岸に杭列を伴う。M～N区は前日と同じ状況。柱穴が並び始めるがまだまとまらない。

12・16　M地区の柱穴は2棟の東西棟にまとまる。北のSB6195は5間以上でさらに西へ延びる。南のSB6185については規模不明確。Rライン以南K地区になると遺構検出面上に砂の堆積があ

る。

12・17　M地区でSB6188・6180を発見。共に東西棟になりそう。H地区東北の大土壙SK6155は46ラインで南へ屈曲する。HB46で木簡が1点出土した。

12・18　M・N地区は60ラインアゼまで，H・K地区は50ラインまで達する。M地区ではSB6188の南で東西塀SA6186を新たに検出。H・K地区では，49ラインで南北に縦断する溝，その西50ラインにかけてSA5950の掘形3個検出。灰褐色整地土を切っていることが判明した。

12・19～24　50～60ライン間の灰褐色土の排土。

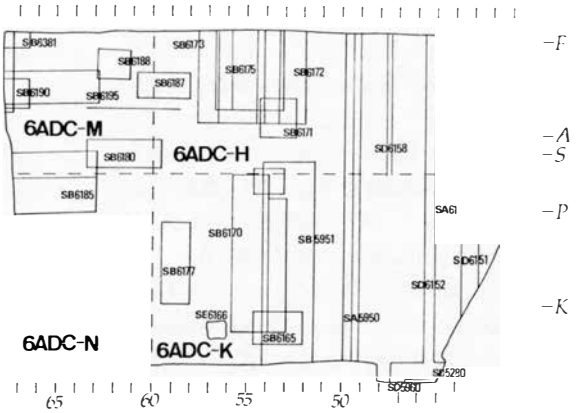


Fig. 5　第52次調査地域の地区割と主要遺構

1・7　謹賀新年。遺構検出再開。H地区西南隅でSB6180の東妻検出。5間×2間東西棟と確定。57ラインで南北にならぶ柱穴5個発見。50ラインアゼの土層図作製。

1・8　50ラインのアゼ除去。下でSA5950の掘形南半の9間分検出。N地区56ラインで比較的大きな柱穴6個が南北に並ぶ。

1・9　SA5950の柱穴ほぼ出そろう。南から4番目のものには柱根遺存。H地区西北の南北柱列は6間以上×2間西廂付南北棟になる(SB6173)。

1・10　SB6173にはさらに東廂がつく。これと重複してさらに南北柱穴列2条あり。K区56ラインで検出していた南北柱穴列に対応するもの54ラインで発見。これに重複して47次から続く南北棟SB5951の北妻柱をHR53で検出。桁行14間となる。

1・16　KJ56で井戸検出（SE6166)。井戸枠は1辺130㎝の方形。本日5段分を掘る。H～M地区にかけてSB6187検出（2間×1間東西棟)。

1・17～18　井戸SE6166の掘り下げ。240㎝で底に達する。バラス敷。側板は10段。45ライン以東の灰褐色土を掘り，清掃を行なう。M・K地区にかけて検出していた東西棟SB6185は南にのびて北廂付建物になる。

1・19～23　雨・清掃の繰り返し。

1・24～25　写真撮影。

1・27　遺方設定。

1・28　水糸配り。

1・30～2・5　平面実測およびレベル記入。

2・6　補足調査。SE6166の東南隅外側を掘り下げ。枠板1段毎に土を叩いて積んでいる。SA5950の部分写真撮影。

2・7　補足調査。写真撮影。

2・8　補足調査。柱穴の断ち割り。45ラインで南北溝検出。整地土層から掘り込んでいるので見えにくい。発掘区東南隅で東へ折れ曲り，37次の東西溝SD5280に接続する模様。

2・12　補足調査。43ラインで幅広の南北溝発見。45ライン南北溝との間は築地となるか。東南隅東西溝内で暗渠ＳX6514発見。

2・13～21　51～57ラインの間，南へ拡張，47次と重複させてSB5951の妻柱を検出。3間×14間となる。

2・25　南拡張部の写真撮影。SD6151・6152を北まで掘り下げる。これらより東西溝SD5280が新。

2・26　築地ＳA6150および雨落溝の写真撮影。実測。本日にて調査終了

E　第59次北調査　　6ADC-M・N・O・P地区

1969年12月20日～1970年4月3日

12・20～1・14　表土排土（実働10日間)。

1・16　床土排土開始。

1・20　床土取りと併行して，O地区西側から遺構検出。検出面は黄褐色粘質土で，整地土と考えられる。

1・21　O地区：81ラインで細い南北溝検出。その東側に4個の南北柱穴列あり。うち3個には底に塼を敷く。東西棟の可能性あり。

1・22～24　O地区：遺構検出75ラインまで達し，塼を敷いた柱穴群は二面廂付南北棟にまとまりそう（SB6401)。

1・26　N・P区北から遺構検出。N区東半で多数の柱穴検出。複雑に重複し，いまのところ建物にまとまらず。P地区ではめぼしい遺構なし。

1・27　M地区も南から遺構検出。柱穴と思われるものはあるがまとまらない。M・P地区は新しい溝などのみ。

1・28　M地区Aラインで東西溝SD6181検出。N・P地区Mラインに東西溝あり。整地土を切り込む。この溝底73・74で柱穴検出。建物にまとま

るか。

1・29〜31　床土取りのみ。

2・ 2　N・P区南端部の調査。確たる遺構検出できず。

2・3〜4　N・P地区。南から折り返し遺構検出。東端で総柱のSB6330を発見。3間×3間か。黄灰砂地山面から掘りこみ，一部に柱根が残る。N・P区境南端でSB6342，SA6341検出。75〜77ラインにかけて地山がさがり厚く整地土堆積（のち大土壙SK6350となる）。鋳造関係の遺物が多い。

2・ 5　SA6341の柱穴を切る2間×4間以上の南北棟SB6345発見。さらに北に延びる。N・M地区境で北廂付東西棟SB6185を新たに検出。52次で検出したものにつながり，桁行7間×梁行2間と判明。これに重複する建物あり。M地区B〜Dラインにかけて3棟以上の建物が重複する。P地区：土壙SK6350はMラインを越えさらに北方へ続く。

2・6〜7　土壙SK6350をPラインまで掘る。埋土は2層からなる。土壙の西側に炭化物混りの小ピットが群在する。M地区：B〜Gラインにかけての多数の柱穴はSB6190・6245・6195などにまとまるが，まだまとまらぬ穴もある。

2・ 9　SK6350をRラインまで掘る。さらに北に続く。

2・10〜12　M地区：H〜Lラインまで遺構検出。SB6195は2間×7間の南北棟にまとまる（のちさらに北へのびることとなる）。6間以上になる4本の東西柱穴列を検出する。いずれも東西棟になる。残り部分（79〜82，H〜Lにかけて）を拡張することとし，表土取りを行なう。

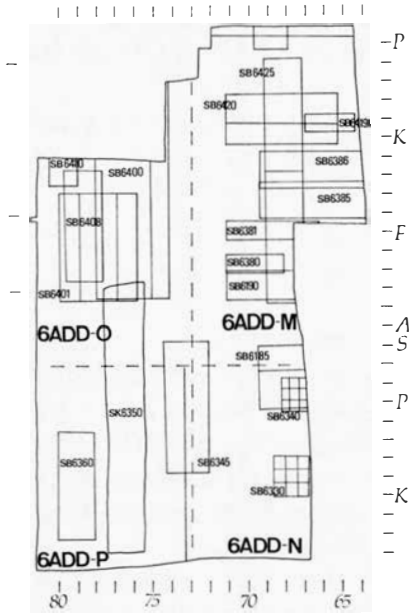


Fig. 6　第59次北調査地域の地区割と主要遺構

2・13〜17　M地区：遺構検出北端まで達する。SB6425は南北7間で終らず，さらに北に延びる。ただし，北では同じ10尺等間だが掘形が小さい。SB6385・6386・6419など東西棟建物が南北に並び，これらに重複してSB6425をはじめ，SB6429など南北棟がある。北端で東西にならぶ9間以上の柱穴列検出。柵になるか東西棟か不明（→SB6430）。P地区：西南拡張部。土壇状の高まりがあり，炭化物まじり，小ピットはこの上に掘られる。これらをとり囲むように南北にならぶ小穴を検出。焼土，フイゴの羽口，鉱滓多く，鋳造所跡と考えられる。小穴はピット群をとりかこむ覆屋であろう（SB6360）。

2・18〜23　O・P地区Oライン以北，73〜75ラインまでの掘り残し部分，表土・床土取り。2・20には鋳造跡部分写真撮影。

2・24　O地区：北から遺構検出開始。M地区にかけて小規模な東西棟3間×2間（SB6428）にまとまる。

2・25〜3・1　雨のため作業進展せず。

3・2〜3　O地区：北半でSB6400，6410がみつかりはじめる。

3・ 6　O地区：SB6400は二面廂付南北棟になり，Gラインよりさらに南へ延びる。Hライン以南には底に塼を敷く別棟が重なる。M・O地区にかけてAライン沿いに東西溝あり。南北土壙SK6350はBラインよりさらに北へ延びるが，東西溝はここを越えさらに西へ延びる。前後関係は不明。81ラインに南北溝検出。位置的に西面大垣に関係するものと思われる（SD6303）。

3・ 7　O地区：南北土壙SK6350はBラインで終る。その北で底に塼を敷いた柱穴のSB6401南妻検出。2間×7間，東西に廂をもつ南北棟に確定。北でSB6400と切り合い，それより新しい。SB6345の妻柱をSラインで検出。桁行6間となる。

3・ 9〜12　M・O地区の遺構精査。SB6400の南妻をBラインで検出。11間以上となる。77ラインで大きな掘形列がみつかる。59次南でみつかっている柵SA3620のものではないか。その東には小さな南北柵SA6402あり。M地区：SB6190・6381・6195・6387等重複する建物の柱穴切り合いを検討する。断ち割り調査で結論を得たい。

3・17　南北土壙SK6350の掘り下げ。規模は6×42m。埋土上面でSB6400，SB6401は検出され，しかもSB6401は6400の柱穴を切るため，SK6350→鍛冶遺物包含層→SB6400→SB6401の順となる。M・N地区境にあるSB6185の内部で総柱建物SB6340発見。黄褐色の整地土を除去すると初めて見えるので，SB6185より古いものと考えられる（切り合いでも古い）。

3・18　SK6350をほぼ掘り終る。底部で南北柵SA3680を検出。したがって土壙より古いことに

なる。

3・19　写真撮影準備。完全に終らぬうちに降雪。

3・20　再び清掃後写真撮影。

3・23～28　遣方設定。実測。

3・30～4・3　補足調査。これにて調査終了。

F　第59次南調査　　6ADD-O・P・Q地区

1970年1月6日～4月1日

1・23　床土を除去しながらO地区西側から遺構検出を開始する。北半部は黒褐色土面であるが，瓦片を含み整地土と考えられる。OR80で柱穴1個検出。整地土面は南端部で急激に落ちる。

1・24～25　O地区遺構検出。OR80から10尺東でさらに柱穴1個発見。南端の落ちは土壙となる。77から78ラインにかけ2条の南北溝検出。溝底で径1mばかりの柱掘形がみえ，南北に並ぶ模様。

1・27　77ラインで南北柱穴列確認。前日検出面より10cmほど削り始めて見つかる。Rラインで見つけていた東西柱穴列は3間分でこの南北柱穴列に重なる。

1・28　午前中清掃。昼写真撮影。P・Q地区耕土とり。

1・29　O地区遣方設定。P・Q地区耕土排土。

1・30～ 2・17　P・Q地区耕土・床土排土。床土は5～7cmと薄い。この間2・3・4両日O地区実測，南北柵と東西柵がクロスするOR77の掘形を断ち割った結果，掘形は一つであり，2本の柵は同時存在と判断した。2月6日O地区埋戻し。

2・18　P・Q地区南から遺構検出開始。77ラインの南北柵（SA3680），南半部6間を検出。76～77にかけて大きな土壙によって失われている。78ラインI～Kにかけて2間分の柱穴列あり。南北棟になるか。

2・19　Cラインまで，P地区南半の遺構検出。PL79で井戸発見（SE6300）。井戸枠内から鬼瓦・瓦器等出土。81ライン西に南北溝検出。59次北で検出のものと一連になるだろう。PJ78付近に古墳時代の溝がある。

この間しばらく調査中断。

3・23～24　P地区北半部の遺構検出。SA3680を10間分検出。その西に重複して新しい南北柱穴列あり。一部に柱根残る。51次調査で検出したものにつながり，8間×3間の南北棟としてまとまる（SB6120）。

3・25～26　写真撮影後，遣方設定。実測。

3・27～28　ダメ押調査。

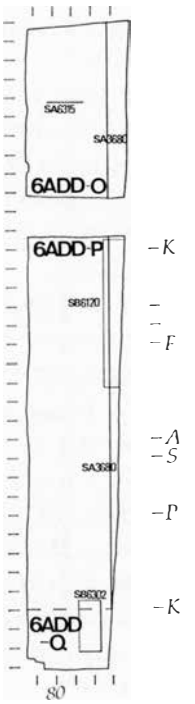


Fig. 7　第59次南調査地域の地区割と主要遺構

G　第63次調査　　6ADC-G・H・L・M地区

1970年5月1日～7月27日

5・ 1　発掘地区設定。肥土除去作業を開始する。

5・11　手作業による肥土排土が進捗しないので，バックフォーを導入する。

5・14　三角測量により基準杭設定。

5・19　地区杭打ち。

5・20～6・1　床土排土。5・22にはバックフォーによる肥土排土終了。G・H区の中央と東とでは床土下位の土層の状況が異なり，中央では灰褐色砂質土，東部では赤褐色土である。

6・ 2　G・H区中央から遺構検出開始。N～R50で南北方向の溝，HK50でSA5950の柱掘形と思われるもの検出。また，G区Cライン以北に沼状の落ち込みがある。東半では床土取り続行。

6・ 3　G地区：A49で柱根の残る大きな柱穴1個とその北に掘形の一部を検出。SA5950の一部であろう。この柱穴は砂層（地山か）から切り込んでおり，その上の青い斑入りの粘土層を取らないと検出できない。H地区：50ライン地山面で幅1mの南北溝を検出。たまりの所で檜皮多数出土。G～I52で柱穴3個検出。南に続く建物の一部である。

6・4　G地区：昨日H地区で検出した南北溝はG地区では幅1.5mで，Cラインで終り西方へ土壙状に広がる。H地区：52ライン沿いの柱穴は4間分となり，Jが北妻となる建物にまとまりそう。

6・5　G地区：A～D49でSA5950の一部と思われる柱穴4個検出。一番北側のものはDラインの東西溝によって切られている。この溝から木簡出土。Cライン50～52に築地様のもの出る。H地区南端53ラインで柱穴3個検出。

6・6　G地区：東西築地はさらに西に続く（SA6475）。南側の溝は53ライン付近で狭くなる。G・H区L～S53ラインで9間分，O～Rラインで3間分の柱穴検出（SB6175の東半部）。H地区南方では52次で検出したSB6172の北妻と思われる柱穴3個などがみつかる。

6・9　H地区：52～54ラインにかけ続々と柱穴がみつかる。SB6175・6172のほかに2棟ほどまとまりそう。

6・10　H地区：56ラインアゼの東側で南北柱穴列11個検出（SB6175身舎西側柱）。その東で54・55ラインにかけ5間×1間の南北棟がまとまる。のちSB6460の東半となる。

6・11　東側の床土取りすべて完了。西側の床土取りに移る。

6・27　M地区西端から遺構検出再開。北で3間×2間の東西棟が1棟まとまる（SB6453）。その東南で南北両廂付の東西棟がでる。1間3mあり正庁か。L地区は何もなし。

6・28　M地区：二面廂付東西棟は4間×7間になると思われる（SB6450）。これに重なる新しい時期の柱穴あり，2間×5間の南北棟にまとまる（SB6451）。H地区56ラインのアゼ西側がSB6450の東妻になるはずだが，妻柱なし。替りに重複しながら南北に連なる多くの柱穴あり。一部はSB6175の西廂，また一部はSB6460のものである。

7・1　50ライン以東で遺構検出。柵SA5950の柱穴はなかなか判別し難く，白味を帯びた砂質土まで掘り下げて検出。

7・2　G・H区双方でSA5950が出かかる。検出面は空色の粘質土で，埋土は黒っぽい色を帯びる。SA5950のすぐ東に南北溝あり，北の築地SA6475をこえて発掘区北端まで延びる。溝中から斎串出土。

7・3　SA5950柱穴検出困難なため，さらに掘り下げてみる。Dライン溝以北でも3個連なった柱穴検出。発掘区外北へさらに延びる模様。東側の南北溝は柵の柱穴を埋め埋土した後に設けられている。盛土を除去し地山まで下げないと柱穴は見えない。H区西南部で，58ラインで西でSB6450のもの以外に4間分の柱穴検出。

7・4　SB6450の柱穴すべて出揃う。北廂部分のみ柱根遺存，すべて八角形に面取りしている。柵SA5960の東側で，52次に続く溝2条検出。GM182これらを切る新しい東西溝検出。H区西南隅に4間×1間の南北棟まとまる（SB6454）が，妻は不明。

7・7　G・H区47～48ラインに南北溝1条検出。Kあたりで途切れる。L・M地区にピット群でるが，現在のところまとまらず。

7・8　GC56で土壙検出。瓦器・木の葉など出土。H区46ラインに溝の西肩でる。

7・9　45・46ラインの溝掘り下げる（SB6152）。G地区でA・Bラインに東西溝検出。西側から続くものと思われる。

7・10　G地区：46ラインで溝の西肩検出。Bラインで東へ折れ，ここで暗渠あり。

7・11　G区40ライン以東，用水路まで拡張（63次補足と呼ぶ）。

7・13　拡張部床土取り。G区42ラインで築地東側の溝が見えはじめる。

7・15　G区40ライン西側で数本の東西溝検出。一番北側の溝から木簡出土（SD6499）。S～Rにかけて南北棟と思われるものの柱穴6個検出。L地区で柱穴2個検出。南北両廂の東西棟か。

7・16　G・H区にかけて昨日みつけた柱穴，25

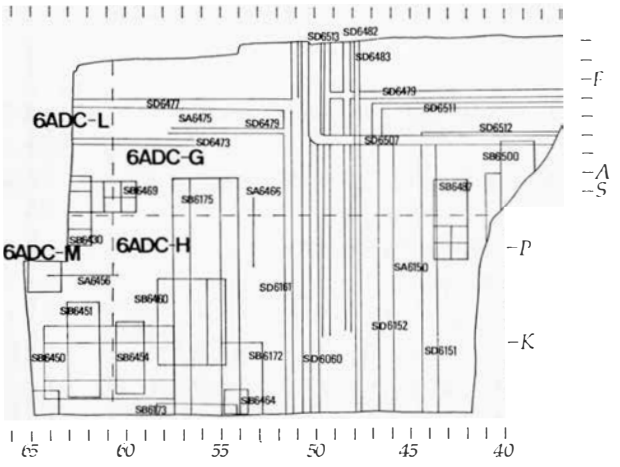


Fig. 8　第71次調査地域の地区割と主要遺構

間×２間でまとまる（SB6487）。G区西端で２間×３間の東西棟検出（SB6453）。写真撮影準備。

7・17　写真撮影。

7・18　遣方設定。

7・20　水糸配り。

7・21～22　平面図作成。

7・23　レベル記入。

7・24～27　土層図作成。柱穴断ち割り等の補足調査。

8・3～5　G区東の拡張部遺構検出。東西溝４本と建物１棟検出。南の２本は重複する。建物は２間×４間以上の南北棟となるが（SB6500），北妻は溝底でみつかったので溝より古い。北の溝は西方で土壙状に広がり，ここから木簡10点出土。兵士関係の記載と天平9・10・11年の紀年あり。

8・3　拡張部写真撮影。

8・19　遺構の再確認。本日にて調査終了。

H　第71次調査　6ADD-N・O，6ADE-A-B・K地区

1971年2月22日～4月10日

2・22　バックフォーによる盛土および表土の除去作業開始。

2・23　上記作業と併行して，手作業によって床土およびその下の茶褐色粘質土を排土しながら遺構検出を開始する（東から）。茶褐色粘質土は多量の瓦を含む。N地区では南北に並ぶ柱穴６個（うち３個に柱根残）を検出するも，一連のものかはまだ不明。A区東端で新しい土壙が半分かかる。

2・24　床土・茶褐色粘質土を取りながら遺構検出。49～52ラインまで進む。50ラインで大きな柱穴（SA5950のもの）が一部あらわれる。埋土は黒褐色土で２～３m大。

2・25　バックフォーによる排土ほぼ終了。引き続き床土および茶褐色粘質土を除去しつつ遺構検出。55ラインに近づく。Nライン以南では茶褐色粘質土の上に土師器細片を含む黒褐色土がのる。遺構はほとんどなし.

2・26　57ラインまで進む。N地区S56を中心に方形の土壙あり。その西に細長い南北溝。B地区Q57でバラス敷検出。さらに西へ続く模様。

2・27　床土・茶褐色粘質土の除去60ラインまで完了。本格的に遺構検出をしながら東へ戻る。B区のバラス敷は幅1.5mで，南北は新溝で切られている。路面の一部であろう。N地区では小柱穴が無数に見つかりつつある。また，古墳時代の溝を一部検出。

3・1　B地区バラス敷は57ライン付近で途切れる。B地区北からN地区Rラインにかけ多数の小柱穴検出。柵４，建物３がまとめられた。

3・2　NS55～NB55にかけ２つの大土壙を掘る（SK7040・7041）。南のものが新しく黒色土器，土師器小皿出土。北のものは奈良末か。NN53の西北で柱根跡と柱穴検出。柵SA5950の一部か。

3・4　Q・K地区西端から床土排土開始。

3・5　東半54～49ラインで遺構検出。49ラインでSA5950の掘形を確認。顕著な遺構あまりなく，NC53に井戸(曲物を伴う)１基があるのみ。

3・6　SA5950の抜穴・掘形を掘り下げる。南端がAR49にあることを確認。その南に小規模な井戸発見。埋土に黒色土器含む。めぼしい遺物なし。

3・8　SA5950の調査。掘形と抜取穴との判別は極めて難行。48ラインC～Sに浅い溝あり。

3・9　W・A地区東端に達する。46～47ラインで幅３mの南北溝検出（SD5960）。西側にオーバーフローしている様子。AQ46でSD5960は東に曲る。Qラインに東西溝がありSD5960に切られている。この東西溝（SD6980）は60ラインのセクション所見でバラス敷の下から切り込んでいる。

3・10　午前中写真撮影準備。午後写真撮影。Q・K地区床土排土。

3・11　写真撮影続行（午前）。引き続き，調査区東半部につき遣方設定。Q・K地区の床土排土。

3・12　午前中水糸配り終了。午後実測開始。プランは８割完了。Q・K地区床土取り。

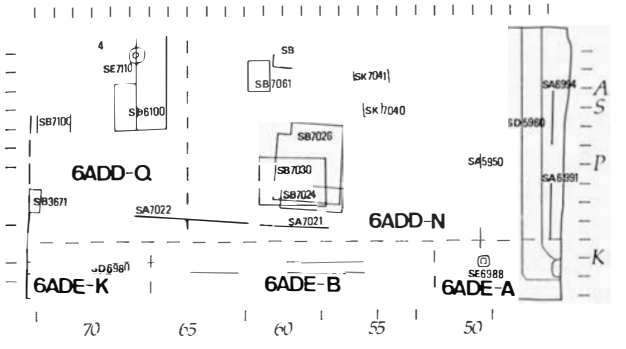


Fig. 9　第71次調査地域の地区割と主要遺構

3・13　プラン終了。レベル記入も終了。Q・K地区床土取り。

3・15～16　SA5950柱穴断ち割り，井戸の写真撮影。土層図作製。Q・K地区床土取り。

3・17　60ライン以西（西地区）床土排土終了。東から遺構検出開始。

3・18～19　遺構検出67ラインまで進む。B地区バラス敷は62ライン付近でなくなる。バラス下層の東西溝は西方へ延びる。N地区西北で建物1棟（2間×2間）の他，弥生時代ピットおよび古墳時代溝があるのみ。古墳時代溝はN・Q区境を北上し50次調査区へ連なる。

3・22　67ラインで，50次調査において北半を検出していた南北棟建物SB6100の西側柱列と南妻を検出。南から6番目の柱穴は大きな土壙によってこわされている。B～K地区南端に古墳時代の東西溝あり。

3・23　SB6100は15間×2間に確定。西側に柱筋を揃えて3間分の柱穴検出。別建物と推定する（のち西廂に訂正）。90ライン以西L～O間には暗灰色土が広がり，遺物を多量に含むため掘り下げる。K区下層の東西層70ラインまで掘る。

3・24～25　遺構検出西端まで達する。Q区西北隅で3間×2間の東西棟建物，QO07で方形の井戸検出。井戸埋土から10世紀後半の土器出土。B区下層東西溝は西端まで存在。

3・26　写真撮影準備。

3・29　写真撮影。のち遣方用杭打ち。

4・2　午前中遣方設定。午後水糸配り。

4・3　西地区平面実測。東地区：SD5960掘り下げ，北端から，青色砂までさげる。出土遺物は瓦のみ。

4・5　午前中にて平面図完了。レベル記入と共に土層図作製にとりかかる。東地区はSD5960の掘り下げ。

4・7　南北溝SD5960掘り下げ。

4・9　遺構の再検討。

4・10　古墳時代・弥生時代の溝を精査。一部掘り下げて実測。建物の柱穴断ち割り。実測。柱根等とり上げ。本日にて調査終了。

第127次調査　6ADC-L地区

1980年10月13日～12月1日

10・13　紐張り。第59次北・63次調査区と一部重複させて調査区設定。

10・15～27　バックフォーなど重機により表土排土開始。

10・23　トラバースにより基準点移動。

10・25　西側から床土を排土しながら遺構検出を開始する。床土下は黄褐色土で，南北に走る耕作溝があるのみ。第63次調査時より一層上である。

10・26　引き続き黄褐色土面で遺構検出。68ラインまで進む。遺構は中世から現代までの溝および土壙のみ。

10・28～30　床土排土東端まで完了。一部では地山（淡茶褐色粘質土）がみえる。東南隅で，既掘部分より高いレベルで掘形検出。SB6430のものと思われる。

10・31　黄褐色土を削り，本格的に遺構検出を行なう（東から）。SB6430の南廂部分が明確化するが，北側はまだ掘り足りないか。SB6430の北半に重複してSB6469を検出。63次調査と合わせ7間×2間の東西棟にまとまる。北半部は整地土厚く今のところ遺構なし。

11・1～5　引き続き遺構検出。SB6430は70ラインまで検出。まだ妻とならず。68・70ラインでSB6430を切る柱穴列あり。南北棟建物になるか。北部で築地の南北雨落らしき2条の溝あり。両者の間は茶褐色砂質土となる。掘込地業か。

11・6　遺構検出西端まで達する。SB6430は西妻にまで至らず，4間×13間以上となる。築地SA6475の茶褐色粘質土上に3間×4間の総柱建物あり。柱穴小さい。南雨落溝は上・下2層ある模様で，上層には凝灰岩くずがつまる。

11・7　検出し足りない遺構の調査のため，薄く削りながら東へと戻る。

11・10　写真撮影準備。午後3時から全景のみ撮影。

11・11　午前写真撮影。午後遣方設定。

11・12　水糸配り。

11・13　実測。平面図終了。

11・14　レベル記入。土層図作製。

11・19　井戸断ち割り。アゼはずし。

11・21　築地南雨落溝の掘り下げ。

11・25　築地北雨落溝の掘り下げ。

11・26　築地およびSB9553等写真撮影。

11・27～28　柱穴等の断ち割り調査。後写真撮影および補足の実測。

12・1　調査終了。砂入れ後埋戻し。

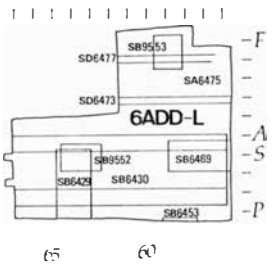


Fig. 10　第127次調査地域の地区割と主要遺構

第Ⅲ章　遺　　跡

1　遺跡の形成

今回報告する調査地域内には西北隅の県道沿いに数棟の民家が建ち並んでいるだけで，残りはすべて水田である。全域小字「大りの宮」に属し，かつて関野貞によって「西宮」の遺址に比定されたことがある。その後，1965年の『平城宮報告Ⅳ』の段階までは一貫してこの関野説を採用していた。しかしながら，その根拠は不確かなものである上，後述のように地形的にはほぼ平坦で奈良時代の遺構の痕跡を示すような水田の地割りは認められず，土壇等の地物も一例を除いて存在しない。そのため，平城宮内において当地域がどのような役割りを果したのかについては，調査前には全く白紙の状態であった。

調査前における想定

A　発掘前の地形

調査地は大和盆地西北隅にあたる盆地底に相当し，ほぼ平坦ではあるが全体に東南方向へ緩やかに傾斜する。海抜高は西北部で70.5m，東南部で69.5mであり，その高低差は南北280mの間で僅か1mに過ぎない。

当地域内において唯一建物跡の存在を窺わせる地物として，西辺部の小土壇がある。西面中門跡から北へ約160mのところに位置し，その大きさは南北14m，東西8mほどで，周囲の水田面との比高は70cm内外である。西面大垣に接する位置にあたるため，宮門跡の一つかと考えられてきたが，発掘調査の結果，この土壇は近世以降の盛土によるものであり，宮域北部に所在する佐紀神社の御旅所に関連するものであろうと推定されるに至った（第59次北調査，Fig. 11）。

唯一の地物

1972年に当研究所が行なった地質ボーリング調査によると，当調査地域を構成する基盤層は北方の奈良山丘陵からのびてくる洪積層台地である。そしてその上を沖積層が覆う。沖積層の厚さは北部では薄く，南へ行くに従って次第に厚くなるが，2～3mの範囲内である。弥生・古墳時代の遺構も含めて，遺跡はこの沖積層上に形成されており，この沖積層が当地域の地山に相当するのである。地山上部の層序を概観してみよう。

地　　山

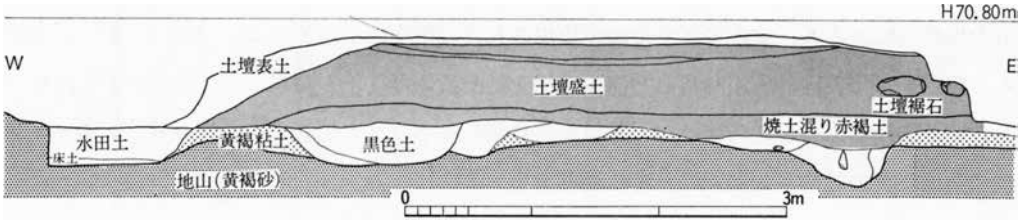


Fig. 11　お旅所土壇東西断面図

1)　関野貞『平城京及大内裏考』（東京帝国大学紀要　工科3）1907　p.152。

2)　『平城宮報告Ⅱ』p.11。

土　　層　調査地域は南北に長いが，層序は北と南での変化は少なく，むしろ東・西での差異が顕著である。とはいえ，西半から中央部にかけての調査地大半の層序は比較的単純で，厚さ20～30cmの耕作土の下に厚さ10～30cmの水田床土が一面に拡がる。この床土を除去すると，厚さ10～50cmの粘質土があらわれるが，この粘質土中には弥生時代・古墳時代の土器片と奈良時代およびそれ以降の瓦片，瓦器の小片などが入り混っており，平城宮廃絶以後に攪乱を蒙った土層と判断できる。さらに下層が沖積層の地山であり，ここに遺跡が形成されているのである。ただし，地山の上面は沖積した土の違いによって，砂から粘土あるいはその中間の土質と場所によって異なり，色調にも様々な変化が認められる。

部分的に存在する整地土層　一方，調査地東部においては，地山との間にさらに別の厚さ10～20cmの粘質土が部分的に存在する。この中には瓦片や土器片が包含されており，かつ少なからぬ奈良時代の柱穴や溝などの遺構はこの上面から掘り込まれている。平城宮の造営あるいは改作に伴って行なわれた整地の際の盛土層と考えられよう（第Ⅰ・Ⅱ期の遺構は地山面において検出されているのに対して，第Ⅲ期以降の遺構は整地土上面で見つかるばあいが多い。しかし，場所によって整地土層の状況が異なるため，何時行なわれた整地土かは特定できない）。

以上のように，今回の調査地では東部において部分的に盛土整地層が存在したものの，大半の地域では地山面が遺構検出面であった。この地山上面では，平城宮およびそれ以降の遺構とともに，平城宮造営以前の弥生時代・古墳時代の遺構も同時に検出している。宮造営前の旧地形にも関連するので，これら宮造営前の遺構についてここでその概要を記すことにしよう。

B　奈良時代以前の遺構

弥生時代の建物1棟，溝2条および土壙6基と，古墳時代の溝5条および土壙6基がある。古墳時代の溝SD6496を除くと，他の遺構はいずれも調査地南部に集中している。また，溝については調査地南端部のSD7016を例外として，すべて西北から東南に向って流れる。土壙のうちいくつかには完形の土器が埋置されており，埋葬施設の可能性が強い。検出した建物が僅かに1棟であるため明確にはなし得ないが，この近辺にそれぞれの時代の集落が営まれていたことを示唆するものである。なお，弥生時代の遺構から出土した土器が畿内第Ⅰ様式のものに限られる点が注目される。宮跡内では第14次調査などにおいて弥生時代の遺構を検出している。これらのうちほとんどは宮西南部に集中し，しかもすべてが畿内第Ⅴ様式に属し馬寮地域のものとは時期を異にしているのである。このことは，弥生時代の居住範囲がごく限られたものであったことを物語ると同時に，弥生時代の期間内において居住地を替えたことを示す。一方古墳時代になると，宮内各所で遺構が検出され，利用空間がはるかに拡大したと判断される。馬寮地域における古墳時代の遺構から出土した遺物は4世紀後半から5世紀の年代を示し，宮内各所のものと変らない。これ以降宮造営に至るまでの遺構は全く存在せず，6～7世紀における此の地の利用状況は全く不明である。

---

1)　宮西南部における弥生時代の遺構については別途報告書を準備中である。また，第Ⅱ～Ⅳ様式（中期）の遺構は宮跡内では未検出である。

2)　『平城宮報告Ⅹ』。

i) 弥生時代の遺構

SB6121 (PLAN 23; PL44)　6ADD-P区

調査地西南部にある奈良時代の建物SB6120内部において検出した不整形な平面の掘立柱建
＊ 物である。径約3mの円形状に柱穴が分布する。竪穴住居の竪穴壁体部が削平されて床面だけが残った可能性が強い。とすれば東北が入口となる。

SD7023 (PLAN 21)　6ADD-Q・N区，6ADE-B区

調査地南辺を鍵の手に折れながら西南に流れる素掘り溝である。幅60cm，深さ20cm内外。自然の流路であろう。堆積土中に畿内第Ⅰ様式の弥生土器片が含まれていた。

＊ **SD6985** (PLAN 17)　6ADE-A区

調査地東南隅で奈良時代の南北溝SD5960の断ち割り調査を実施した際，その下層で検出した素掘り溝である。幅20cm，深さ60cm程度で，西北から東南に流れるものと思われるが全体の状況は判らない。木質有機物を含む黒灰色粘土で埋っているが遺物はなく，埋土の状況と層位から弥生時代ないしはさらに古い溝と判断した。

＊ **SK6122** (PLAN 23; PL 44)　6ADD-P区

SB6121の東南にある長方形の土壙である。長さ3.0m，幅1.4m，深さ20cm。中央部から畿内第Ⅰ様式の壺形土器が出土した。かなり削平されているが，土壙墓の可能性が強い。

SK7067・7123・7124・3676 (PLAN 26; PL 44)　6ADD-Q区

いずれも調査地南部にある不整円形の小土壙で，やはり畿内第Ⅰ様式の壺形土器を内包していた。壺棺墓と考えられようが，どの壺も小型である。

ii) 古墳時代の遺構

SD6496 (PLAN 3・6)　6ADC-G・H・L区

調査地北東部を斜行する素掘り溝である。幅80cm。深さ30cm。延長83mにわたって検出したが，溝底の確認は北部のみで行なった。埋土は均一な砂層で，顕著な遺物もなく年代を特定で
＊ きないが，この溝を切って平城宮の遺構が掘られており，宮造営以前であることは確かである。

SD6137 (PLAN 18・19)　6ADD-P・M区

調査地南半中央を斜行する素掘り溝である。幅2.0m，深さ10cm。後世の削平によって部分的にしか残存していない。溝内から5世紀頃の土師器片が出土している。

SD6060 (PLAN 17・18・21・23・24・25; PL 45)　6ADD-N・P・Q区，6ADE-A区

＊ SD6137の西南をほぼ並走し，調査地東南隅へ至る素掘り溝である。延長140mにわたり，幅2.0m，深さ25cm前後。平城宮の遺構と重複するため，それらを避けて部分的に掘り下げた。溝の堆積は2層に分れ，上層からは5世紀後半の須恵器（高杯脚部，杯身など）が，下層からは5世紀中頃から後半にかけての土師器（高杯，器台，小型丸底壺など）および須恵器（壺など）が出土し，5世紀中頃から後半にかけて存続したことが知られる。西北から東南に向け，地形に
＊ 沿って蛇行しながら流れており，自然流路であろう。

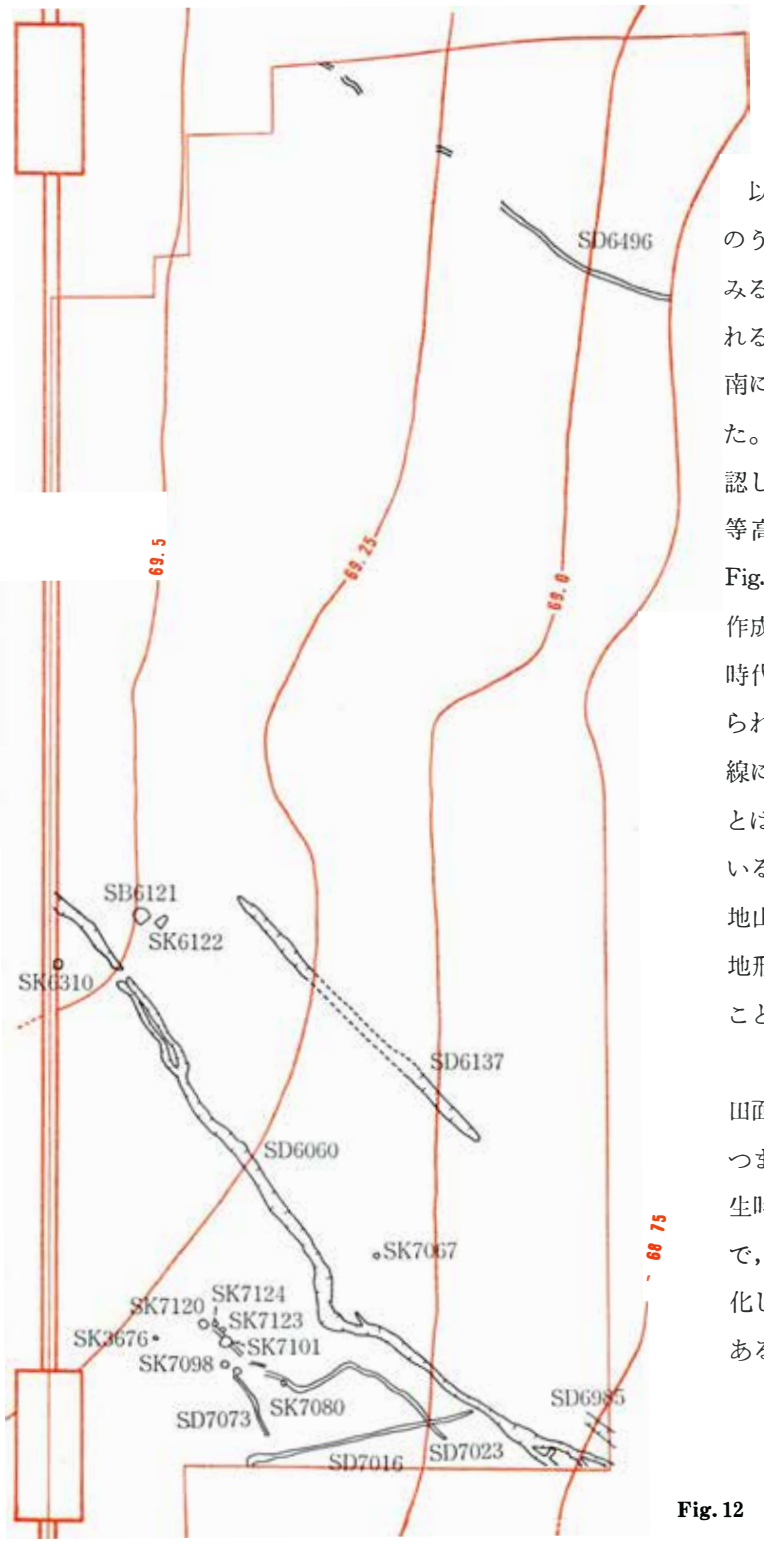
SD7016 (PLAN 26)　6ADE-B・K区

調査地南辺で検出した素掘り溝である。幅70cm，深さ15cm。SD6060に交叉する方向に直線

的に掘られており，また西端部で南に直角に曲がるので，人為的に掘られた溝と考えられる。溝内から5世紀代の土師器高杯・壺・甕が出土した。

SK6310・7120・7101・7080・7088・7098 (PLAN 25･26; PL 45)　　6ADD-Q区

SD6060の西側に分布する土壙群である。平面形は不整円形で，底は丸く窪む。内部に5世紀中頃を中心とする年代の土器を含んでいるが，性格は不明である。



C　平城宮造営以前の地形

以上の宮造営以前の遺構のうち，特に溝に注目してみると，自然流路と考えられる溝はすべて西北から東南に流れていることが判った。また，今回の調査で確認した地山の高さをもとに等高線を描いてみると，Fig. 12のような地形図が作成できる。この図に奈良時代以前の自然流路と考えられる溝を重ねると，等高線にほぼ直交する。このことは，いくらか削平されていると言えども，残存する地山面が奈良時代以前の旧地形を反映したものであることを裏づけている。さらにこの地形図は現況の水田面の傾斜にも近似する。つまり，当地域の地形は弥生時代以降現代に至るまで，基本的にはほとんど変化していないと言えるのである。

Fig. 12　宮造営以前の地形と弥生・古墳時代の遺構

2 遺　　構

報告の対象となる地域が広大なので，遺構の位置表示法等についてあらかじめ触れておくことにしよう。

まず，調査地域東部を南北に縦断する掘立柱塀SA5950あたりを「馬寮」官衙域の東限とみ，その東側の道路SF6503を含む空間は馬寮域外と考える。道路の東側には別な官衙域が想定されるが，西辺のごく一部を調査したのみでその性格については未解明な点が多いため，仮に「馬寮東官衙」と呼んで記述を進める。

馬寮東官衙

個別の遺構の記載にあたっては，調査時の地区割りに準拠して遺構の位置を表示するが，その基本的な構成は以下の通りである。すなわち，おおよそ北半部は6ADC区，南半部は6ADD区にあたり，南端のごく小部分が6ADE区となる。これらの大地区内をさらに水田一枚分程度の大きさの中地区に区分するが，区分法は大地区毎で異なり，6ADC区のばあいは井字状に9中地区に分れる（西北隅には調査が及んでいないので，実際には8区画）。6ADD区の基本はキ字状の6分割であるが，都合でP区の北3分の2ほどが東に張り出し，M区が小さくなっている。このようにして，例えば6ADC-P区といえば西辺の中央やや北寄りの区画を指すことになる(PLAN 2参照)。

調査地域の区分法

奈良時代から平城宮廃絶後12世紀頃までに構築されたと考えられる遺構として，西面中門(佐伯門SB3600)，西面大垣（SA1600）の一部をはじめ，宮内の官衙域を画する築地・塀・建物・溝・井戸・土壙などがある。これらのうち，佐伯門およびその周辺の遺構については『平城宮報告Ⅸ』において既に報告済みであるが，必要に応じて再度取り上げる。また，平城宮西面大垣に接する西一坊大路についても，ごく小面積について調査したに過ぎないが，馬寮の占地や建物配置の問題と抵触する部分があるので，合わせて報告することにしたい。

検出した遺構のうち，建物および塀はすべて掘立柱による。したがって，以下の記述においては単に「建物」あるいは「塀」と称することにし，特に掘立柱であることをことわらない。

掘立柱

また，建物・塀・溝などの遺構の多くはいわゆる平城方位（内裏北面築地廻廊SC060の北雨落溝の東西方位を基準としたもので，この座標系は国土方眼座標第Ⅵ座標系の方眼方位に対してN0°07′47″W振れる）に近い方位をとっている。特に振れ等に言及しないばあいはこの平城方位に則っているものと解釈されたい。以下の報告においてN・E・Wを付して示す数値は，基準点No. 14（国土方眼座標第Ⅵ座標系でX＝−145,500.22，Y＝−18,983.42の値）を基点（0，0）にした平城方位での値である。たとえばN100とは基準点No. 14から北へ100m，W60とは同じく西へ60mという意味である。

方位と基準点

建物規模に関する記述は，「東西」「南北」の全長を実寸法で記し，必要に応じて桁行・梁行・廂の出および柱間間数・尺値を（　）内で述べる方法をとる。「柱穴」・「柱掘形」などの用語については『平城宮報告Ⅶ』に，また個々の柱穴の呼称・位置表示については『平城宮報告Ⅺ』にしたがう。

用　　語

主要遺構の記述にあたっては，遺構を可能な限り時期別に区分し，同一時期のものについては原則として官衙区画施設，主要建物，中小建物，塀，井戸，土壙の順に行なう。検出遺構は大きく平城宮造営当初（第Ⅰ期），奈良時代初期（第Ⅱ期），奈良時代中頃（第Ⅲ期），奈良時代末

記述の順序

期（第Ⅳ期），平城上皇時代（第Ⅴ期）および宮廃絶後（第Ⅵ期）の6時期に区分できるが（第Ⅱ・Ⅲ期についてはさらに細分可能であり，また一部の建物等は複数期にわたって存続したと思われる），時期区分の根拠等については後にまとめて提示する。しかしながら，重複する遺構も出土遺物もないため時期を決定し難い遺構も少なくない。特に小規模建物にその傾向が強い。これらについては「その他の遺構」として宮廃絶後のものと一括して報告する。 *

A　第Ⅰ期（平城宮造営当初）の遺構

宮の造営にあたり，土地造成に伴なう排水路の掘削や官衙区画等を設置するための基準線の設定および仮設的な閉塞施設の構築などが行なわれた時期である。まだ官衙建物等は完成していない。主な遺構として溝2，塀2がある。

SD6980（PLAN 17・21・26；PL 36）　6ADE-A・B・K区 *

馬寮地域南端にある素掘り東西溝で，幅1.7～2.0m，深さ60cmある。東端は調査範囲外へ延び，西端は未確認であるが，延長85mにわたって検出した。このSD6980は，佐伯門SB3600の基壇掘込地業の規模から求めた門基壇南北中軸線の東延長線上にほぼ乗る。年代を決める手懸りとなるような遺物は出土しなかったが，地山面に掘り込まれていること，宮内道路の路面の一部とみられる小礫敷SX7000がSD6980を埋戻した後に設けられていること，また調査地域東南で検出した馬寮東官衙南半部の西限をなすと思われる南北溝SD5960（第Ⅱ期）よりも古いことから，宮造営にかかる地割溝の可能性が強い。ただし，佐伯門の基壇掘込地業との古新関係については未確認である。 *

地割溝

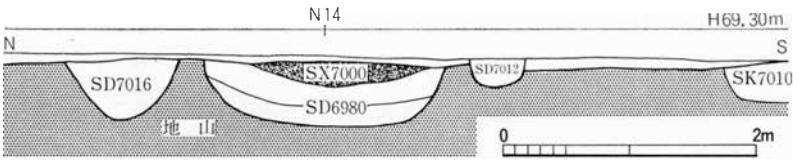


Fig. 13　SX7000とSD6980の関係

SA3680（PLAN 12・13・22・23・25・26；PL 16・25・33・34）

6ADC-O・P，6ADD-O・P・Q区 *

長大な塀

馬寮地域西端近くを南北に縦断する長大な南北塀である。南端は佐伯門SB3600の基壇東北付近から始まり，北端は調査範囲外へ延びるため未確認であるが，延長211m（80間）以上に及ぶ。柱掘形は概して不整形であるが一辺1.2m以上と大きく，深さは50cmほどの浅いものが多い。柱がすべて抜き取られているため柱間寸法は不明確であるが，等間とはならず9尺を標準に前後若干のばらつきがあったと考えられる。多数の遺構と重複し，切り合い関係ではいずれよりも古い。なお，第25次調査で検出した南北塀SA3590とは，佐伯門に対して南北に振り分けの形をとって一直線上に並ぶ。門の位置だけは開くのである。 *

SA3680については，従来奈良時代初期における馬寮官衙域の西限をなす塀と考えられてき

1）模式図の記号　●柱根をとどめる掘形　◉柱痕跡をとどめる掘形　⊘抜取痕跡あり　○掘立柱掘形　……推定（すべて方位は上が北，縮尺約600分の1）

たが，第Ⅱ期の建物配置計画線上には乗らず，しかも第Ⅱ期の土壙SK6350より古いため，西面大垣が完成するまでの仮設的な遮閉施設と解釈する方が妥当である。柱間が不定であり，またすべての柱が抜き取られている点も消極的ながら傍証となろう。 仮設の遮閉施設

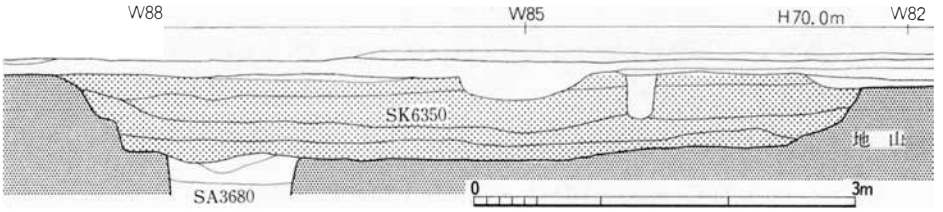


Fig. 14　SK6350とSA3680の関係

SA6315 (PLAN 22; PL 25)　　6ADD-O区

SA3680の南端から47間目の柱穴と柱筋を揃え，その西方に延びる東西塀である。2間分検出，柱間は10尺である。SA3680との間は13尺と広く，これに取り付いたものとは思われない。位置は佐伯門と西面北門推定位置との中間より4.2mほど北にある。性格は不明であるが，大垣造営の際の工区割りのような施設であろうか。柱穴内から軒平瓦6664F型式が出土している。

SD6488 (PLAN 3)　　6ADC-G区

＊　馬寮東官衙域北端近くを東西に走る素掘り溝である。幅約60cm，深さ25cmほどで，西端は馬寮域東限付近にあり，東は調査範囲外へ延びる。この間の長さ24mを検出したが出土遺物はなく，性格は不明である。馬寮東官衙の西面築地SA6150やその両雨落溝SD6151・6152よりも先行して地山面に掘り込まれている。南の地割溝SD6980から北257.6mの位置にあたり，尺値に直すと870尺（1尺＝0.296mとして）となる。

B　第Ⅱ期（奈良時代初期）の遺構

官衙としての体裁がはじめて整った時期で，遺構としては，西面大垣SA1600，佐伯門SB3600のほか，建物7，宮内道路1，溝3などがある。南北二面廂付東西棟建物SB6450はこの時期の正殿と考えられる建物で，他の建物等はこれを基準に整然と配置されている。ただし，宮造営当初に構築された仮設の南北塀SA3680は一時併存したらしく，建物配置は全体に東に
＊ 寄っている。この時期，馬寮官衙域の北・東・南を区画すべき築地ないし塀等の遺構は検出されていない。南と北については宮域門を入って直ぐのところでもあり，何らかの遮閉施設があったはずである。すべて削平されてしまったものと考えざるを得ないが，なお検討を要する問題である。また，井戸が一つも検出されていない点も不可思議なところである。

馬寮東官衙地域では南半部にのみ溝を巡らした区画ができる。

＊ **SX7000** (PLAN 21; PL 36)　　6ADE-B区

馬寮地域南端中央で検出した礫敷面で，東西溝SD6980を埋め戻した後の整地土上面に小礫を敷きつめてある。南北両縁は各々旧水田床土直下に掘られた年代の新しい2条の東西溝によって失われているが，長さ約9m，幅1.5mにわたって東西方向に分布する。部分的にしか遺存していないため断定はできないが，佐伯門の南北中軸線上にあたるので，門から東へ展開す
＊ る宮内道路の路面であろう（Fig. 13 参照）。 宮内道路

SD7013 (PLAN 21; PL 36)　　6ADE-B区

SX7000の北約3 mのところを並行する素掘り東西溝である。幅50cm，深さ25cmほどであるが，SX7000同様部分的に遺存するに過ぎない。年代を決定するに足る遺物は出土しなかったが，SD6980と同じく地山面に掘り込まれ，埋土も互いに類似するため，両者の時期はさほど隔らないであろう。SX7000と併存した可能性が強く，両者の位置関係からみて佐伯門東の宮内道路の北側溝と考えられよう。

SD5960 (PLAN 14・15・16・17; PL 21・26・36・37)

6ADC-K，6ADD-L・M・N・O・P，6ADE-A区

馬寮東官衙南半部の西を画する素掘り南北溝で，幅3～4 m，深さ60cmある。馬寮東官衙北半部との境をなす東西溝SD5280の西端から発し，佐伯門の南北中軸線の東延長上で東へ折れ，全長は160mに及ぶ。溝埋土から木簡1点および多量の土器・瓦等が出土した。木簡は和銅5年と推定されるもので，土器類は平城宮土器IIを主体とし，瓦は藤原宮式が多い。また，SD5960の中ほどで検出したC字形に彎曲する大土壙SK6098はこの溝を切って掘り込まれているが，土壙埋土に含まれていた土器は平城宮土器II・IIIに限られる。したがって，SD5960は宮造営当初からさほど隔らない時点で開削され，奈良時代前半内には埋め戻されたと考えられてきた。しかしながらSD5960からは平城宮土器IVも併せ出土しており，また平城宮瓦編年III期に属する6282F・6719A型式が出土している。したがって，少なくとも第III期までは機能していたと考え直さなければならない。なお，SD5960を馬寮東官衙南半部の西面築地西雨落溝とみるむきもあるが，調査範囲内では築地の痕跡すらみあたらず，もし築地があったとしても，それは東側の未調査のところとなる。今後の検討課題としたい。

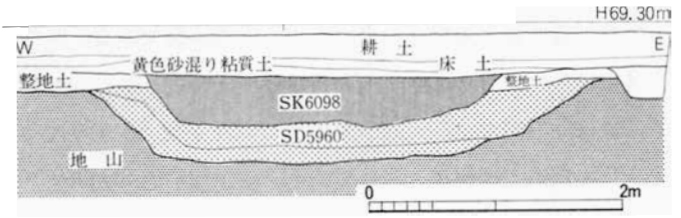


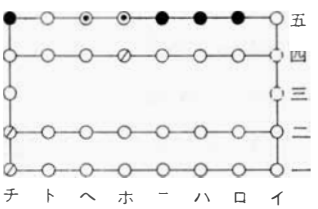
Fig. 15　SD5960とSK6098の関係

SD5960は北端で東に折れ，第37次調査で検出している東西溝SD5280へと連なると思われる。今回検出したSD5280の西端部と思われる溝は幅約3.2m，深さ1.1mほどの規模である。第37次調査においては，SD5280は東方へと115m以上の長さになること，当初は幅約6.5mであったものが，後に北寄りに幅2.4mほどの狭い溝（SD5280B）に改修されていることを確認している。SD5280西端部と思われる溝はSD5280東部と北肩を揃えるものの幅は狭く，改修後のSD5280Bに比定するのが妥当となる。しかし，このSD5280B西端部は第IV期まで存続したことも確実であり，この時期にはSD5960は既に埋っているわけだから連なりようがないことになる。この部分は現水路下にあたり十分な調査が行なえなかった地点でもあり問題点として残さざるを得ない。

SB6450 (PLAN 9; PL 8)　　6ADC-II・M区

正　殿

馬寮地域北部中央にある南北二面廂付東西棟建物で，この時期の正殿と考えられる。東西20.5m（7間，10尺等間），南北11.7m（身舎2間・南北両廂の出とも10尺等間）の規模である。身舎および南の柱掘形は一辺1.2m前後，深さ1 mほどの方形状をなすが，北廂の柱掘形は一辺0.8m，深さ0.5mと小振りで浅

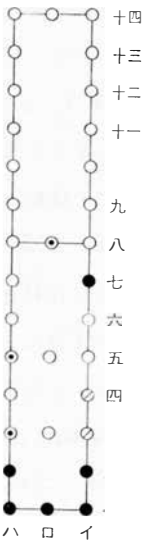


1) 『平城宮第37・39・40・41次発掘調査概報』1967 p. 2

い。北廂は後に追加したものであろう。北廂の柱掘形4カ所に断面八角形状に加工した柱根（径20～30cm，長さ50～80cm）が残り，柱間を計測すると平均2.93mとなる。多くの建物と重複するが，柱穴の切り合い関係ではSB6173・6175・6451・6454・6460のいずれよりも古い。

SB6425 (PLAN 9・10; PL 12)　6ADC-M区

SB6450の西方に建つ南北棟建物で，東西5.9m（2間，10尺等間），南北38.4m（13間，10尺等間）と長大である。正殿SB6450に対する脇殿に相当する建物といえよう。南半7間分の側柱掘形は一辺1.0～1.5m，深さ1m強の方形であるのに対して，北半のものは一辺0.8m，深さ0.6mとひとまわり小さい。同時施工ではなく，北半は後の増築であろう。南半部には，南から2・3・4・7間目の棟通りに柱穴があり，特に7間目のものは側柱の掘形に匹敵する大きさをもつため，これを当初の北妻柱とみるのである。また，棟通りの柱穴のうち南から2・4間目のものは掘形の大きさからみて間仕切柱と考えられるが，3間目のものは著しく小型であるので床束の可能性が強く，SB6425の南半の一部は床張りであったと言えそうである。南端部を中心に6カ所で八角形断面の柱根（径20～30cm，長さ50～130cm）が残り，柱間寸法は平均2.95mである。



脇　殿

北半は増築

SB6450との配置関係をみると，当初の北妻柱筋はSB6450の身舎南側柱筋に揃い，またSB6425の東側柱筋とSB6450の西妻柱筋との距離は11.6m（40尺）であり，10尺を基準に計画的に配置したことは明らかである。なお，SB6425はSB6190・6195・6381・6385・6386・6419・6420と重複するが，切り合いからいずれの建物より古い。

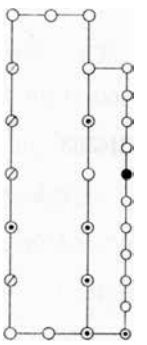
SB6180 (PLAN 10; PL 11)　6ADC-M区

SB6450の南にあり，西妻柱筋を揃えて建つ小規模な東西棟建物である。柱根はおろか柱痕跡さえほとんど残っていないため建物規模は正確でないが，東西12m弱（5間，7.5尺等間），南北4.4m（2間，7.5尺等間）ほどである。柱掘形は南側柱筋では一辺1.0m，深さ0.5mの方形だが，北側柱のものはやや小さく不整形をなす。SB6450の身舎南側柱筋からSB6180の南側柱筋までの距離は29.5m（100尺）であり，両者は計画的な配置関係にあるとみなせる。SB6180はSB6450の前殿相当の建物であろう。他の遺構とは重複しない。

前　殿

SB6170 (PLAN 7; PL 20)　6ADC-H区

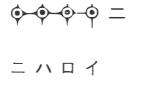
SB6180の東南にある隅欠きの東廂付南北棟建物である。建物規模は東西8.8m（身舎2間・廂の出とも10尺等間），南北24.8m（6間，14尺等間）である。身舎の柱掘形は一辺0.8～1.0m，深さ0.5mであるが，廂のものは一辺0.5～0.7mと小振りで，北端の1個を欠く。廂には半間毎に間柱が立つが，柱穴はさらに小さめである。長大な建物であり，正庁一郭に付随するような位置にあることから馬房と考えられる。SB5951と一部の柱穴が重複しており，SB6170の方が古い。



馬　房

SB6330 (PLAN 11; PL 17)　6ADC-N区

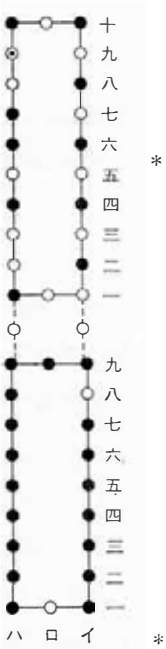
SB6425の南妻から約24m南方にあり，SB6425と東側柱筋を揃えて建つ総柱建物である。東西5.7m（3間，6.5尺等間），南北6.3m（3間，7尺等間）で，南北がやや長い。柱掘形は一辺1m前後，深さ0.8mと規格的で，一部に柱根が残るほか柱痕跡も明瞭である。正庁一郭に付属する倉庫と考えられる。



倉　庫

SB5955・5956 (PLAN 15; PL 28)　6ADD-L・M区

馬寮地域東南にあり，南北に並んで建つ2棟の南北棟建物である。南棟SB5955は東西5.9m（2間，10尺等間），南北19.2m（8間，8尺等間）であるのに対して，北棟SB5956は東西5.5m（2間，9.5尺等間），南北21.3m（9間，8尺等間）で，梁間寸法が異なる。しかし，両者は棟通柱筋を揃えている。柱掘形はともに方形で，大きさは一辺0.8～1.0m，深さ0.8mを標準とし若干のばらつきがある。SB5955の北妻とSB5956の南妻の間は5.4m（18尺）離れるが，両側柱筋中央にも柱穴があるので，両者はこの2間（9尺等間）を馬道として共有する一連の建物であった可能性もある。両者とも柱根の遺存率が良く，断面八角形状をなし，径は14.5～23.5cmと共通するが，SB5956がコウヤマキであるのに対してSB5955はヒノキを用材としている。基準尺もSB5955の方がやや長い[1]。したがって，SB5956がまず建てられ，その南にSB5955を増築した段階で両者を馬道で結んだと考えるのが妥当であろう。正殿SB6450の東妻からSB5956の東側柱筋までの距離は14.9m（50尺），またSB6450身舎南側柱筋とSB5955の北妻との間は101.0m（340尺）であり，これらの建物もまた正庁殿舎群と一体の計画のもとに造営されたものと理解できる。規模と形状から馬房と判断する。



馬道

馬房

SK6350 (PLAN 13; PL 16)　6ADC-M・N区

正庁殿舎群の西南方，倉庫SB6330の西にある長大な長方形の窪みである。東西6.5m，南北45m，深さ0.5mあり，南北方向に規格的に掘られている。同様の遺構は藤原宮西方官衙地区において検出されており（SK1140），建物配置の類似性と合わせて関連が注目される。馬寮にふさわしい性格づけをするとすれば馬の洗い場とでもなろうか。底部に堆積した茶褐色粘土には，全般的に瓦・土器片とともに多量の炭化物がまじる。また，南半部特に西寄りからは，鞴羽口・鉱滓・焼石等，鍛冶に関係する遺物が多量に出土している。しかもこれらの遺物は西側から投棄されたように堆積していた。SK6350を，その機能が終った後に，西側に作られた鍛冶工房の廃棄物捨場として再利用したものとみられる。なお，仮設の南北塀SA3680はこのSK6350の底ではじめて検出されており（Fig. 14 参照），SK6350はSA3680を撤去した後に掘り込んだものである。土壙底から出土した土器は平城宮土器II・IIIでそれ以降のものを含まず，また埋土の状況から投棄場としての役目が終った時点で一気に埋め戻されたと判断できる。SB6400・6401の柱穴はこの埋土上面から掘り込んでいる。

馬の洗い場

SD6303 (PLAN 12・13)　6ADC-N，6ADD-O・P区

馬寮地域西端において断続的に検出した素掘り南北溝である。幅約60cm，深さ35cmあり，検出できた分だけで全長45m以上におよぶ。SK6350の西側あたりで残りが良く，溝埋土は黒色粘質土で，鞴羽口や瓦片等が多量に出土した。南方で部分的に検出された南北溝SD6360はほぼSD6303の南延長上にあり，両者は一連の溝である可能性が強い。これらの溝は西面大垣推定心から東へ約3.5mの位置にあるので，大垣犬走り東側の側溝と考えたい。

大垣犬走り東側溝

1) SB5956のばあいは平均1尺＝0.2958m，SB5955は1尺＝0.300mである。

2) 『藤原宮報告II』p. 27。

C　第Ⅲ期（奈良時代中頃）の遺構

第Ⅱ期の諸遺構のうち，佐伯門から東へ延びる宮内道路や大土壙 SK6350 などは第Ⅲ期になっても存続する。この時期になって新規に造営された遺構としては建物11，塀３，井戸１などがある。これらのうち，馬寮地域の東面を画する南北塀 SA5950 が設けられた点が特に注目される。SA5950 の南は佐伯門東の宮内道路北縁からはじまり，北は西面北門の推定南北中軸線を越え，調査範囲外へと延びる。したがって，区画としては西面北門以北の地域も含んでひとまとまりになっていたと考えざるを得ない。馬寮地域内の建物配置は，北半中央に主要殿舎である東西棟が建ち並び，南半は西側に数棟の建物があるのみで他は広大な空閑地である。

馬寮東官衙においては南半部西限の SD5960 を埋めたてた後，官衙域全体を築地で区画する。

SA5950 (PLAN 5・6・7・14・15・16・17; PL 5・20・26・37・38)

6ADC-G・H・K，6ADD-L・M・N，6ADE-A区

官衙域東限の塀

馬寮官衙域の東を画する南北塀で，先述のように南端の柱穴は佐伯門東の宮内道路北縁にあり，北は調査範囲外へ延びるが，この間約273m (102間) ある。柱掘形は不整形なものが多いが，標準的なもので一辺２mほどの方形状をなし，深さ1.5～2.0mと極めて大きい。全体で３カ所に柱根が残るほかは全て抜き取られており，特に南半部では掘形に匹敵する東西方向の大きな抜取痕跡がある。一部の柱穴底部には数枚の切板を礎盤として敷いている。柱根は下端から0.9～1.2m残存し，太いものは径45cm (1.5尺) ある。いずれも特に面取りはしていない。これらの柱根をもとに柱間寸法を計測すると平均９尺（１尺=0.2976m）の値を得る。

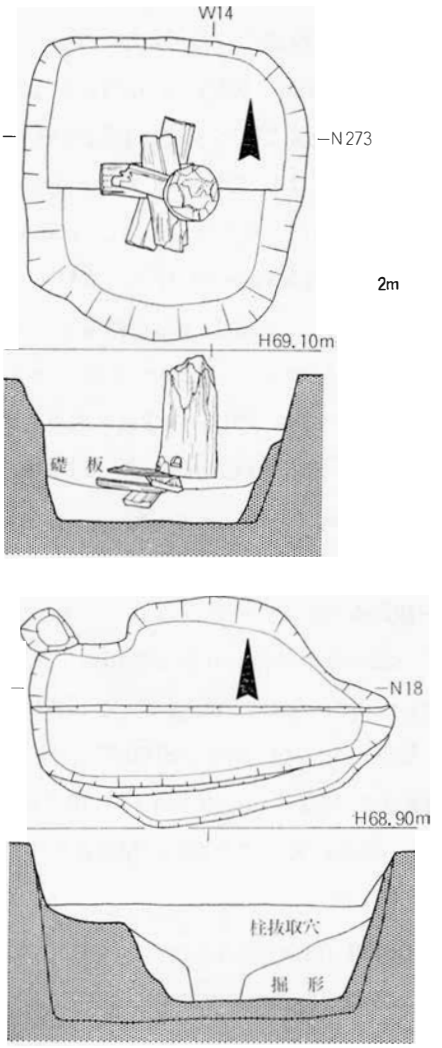


Fig. 16　SA5950の柱根と柱抜取穴

このSA5950については，従来馬寮官衙域における造営当初からの区画塀と考えられてきたが[1]，馬寮東官衙南半部の西辺を限る第Ⅱ期の南北溝 SD5960 の廃絶後に盛られた整地土（灰褐色土）の上面から柱穴は掘り込まれており，造営当初までは遡り得ない。したがって，SA5950 の設置時期は従来の見解よりやや降ることとなる。また，SA5950 の柱穴は，第Ⅳ期に構築される馬寮北限築地 SA6475 の北雨落溝 SD6477 の溝底で検出されているので，この時までは存続し得ない。なお，SA5950 は第Ⅱ期の建物配置計画とはそぐわず，第Ⅲ期のものと合致するが，この点も SA 5950を第Ⅲ期の施設とみる有力な傍証となろう。

1)『年報1971』p. 24～26。

SF6503・SD6483 (PLAN 3・4・5)　6ADC-G・H区

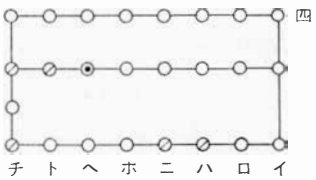
SA5950の東側に接して南北に走り，馬寮域と東官衙域との境をなす道路である。SD6483はその東側溝で，幅1.2m，深さ20cmあり，道路幅は6m内外となる。SD6483はSA5950と並行して調査範囲北端からさらに北へと延びる。南については約85mまでは良好に遺存するが，南半は削平のためほとんど消失している *

SD6499 (PLAN 3; PL 2)　6ADC-G区

SD6483の北端近くから直角に分岐する東西溝で，幅1m前後，深さ25cmの素掘り溝である。東は調査範囲外へと延びる。東端から西約10mの地点を中心に土壙状に広がる溝底から天平10・11年の年紀のある木簡が出土した。

SB6185 (PLAN 10・11; PL 11)　6ADC-M区 *

中心建物群



馬寮地域北半のほぼ中央に建つ北廂付東西棟で，この時期の中心建物である。東西20.9m（7間，10尺等間），南北10.2m（身舎2間，10尺等間。廂の出14尺）の規模である。柱掘形は身舎・廂とも一辺1mほどの方形で，深さ0.7mあり，三へに柱痕跡が残る他は柱痕跡すらとどめないが，一部の柱掘形底に礎盤が遺存する。北方にある2棟の東西棟建物SB6195・6385とは桁行規模が等しく両妻柱筋を揃えており，一連の殿舎群を構成する。この地域に建つ多くの建物は時期を問わずに方位を平城方位に揃えているのに対して，これら3棟だけがE1°56′Nの振れを持つ点が注目される。第Ⅳ期の総柱建物SB6340と一部の柱穴が重複し，切り合いからこのSB6185の方が古い。 *

SB6195 (PLAN 10; PL 11)　6ADC-M区 *

SB6185の北に位置する東西棟建物で，その規模は東西20.9m（7間，10尺等間），南北5.4m（2間，9尺等間）である。柱掘形は方形であるが，一辺0.5～0.8mと大きさにややばらつきがある。前後に建つSB6185の南側柱筋とSB6385の北側柱筋の間は35.7m（120尺）であるが，SB6195の南側柱筋はちょうどその中間に位置する。SB6425・6190と重複し，柱穴の切り合い関係から *
SB6425→6195→6190の順になる。

SB6385 (PLAN 9; PL 13・14)　6ADC-M区

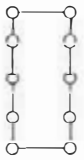
SB6195の北にあり両妻を揃えて建つ東西棟建物である。東西長は20.9m（7間，10尺等間）でSB6195と等しいが，南北は6.0m（2間，10尺等間）あり，SB6195より梁間が1尺ずつ広い。柱掘形 *
は不整形だが，一辺0.8m，深さ0.7mほどのものが一般的で，一部に柱痕跡が残る。SB6381と一部の柱穴が切り合い，SB6385が古い。SB6195・6385はSB6185に対する後殿と考えられよう。

後　殿

SB6419 (PLAN 9; PL 13)　6ADC-M区

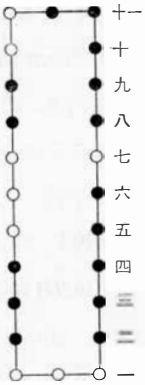
SB6385のさらに北にある小型の東西棟建物である。東西8.1m（3間，9尺等間），南北2.7m（1間，9尺）で，南側柱筋はSB6385の北側柱筋から30尺の位置にあり，東方の南北棟SB6172の北妻と揃う。柱掘形は一辺0.6m前後で，東西にやや長く，一部に柱痕跡が残る。第Ⅱ期のSB6425とは西妻柱掘形が重複し，このSB6419の方が新しい。 *

SB6454 (PLAN 9; PL 13)　　6ADC-II区



SB6419の東方にあり，SB6419の北側柱筋と北妻を揃えて建つ南北棟建物である。妻柱がなく東西は1間であるが，北で4.2m（14尺），南で4.8m（16尺）と歪み，南北は11.1m（4間）で柱間が不揃いなため，仮設的な建物と思われる。柱掘形は円形状
＊で，SB6419と共に3棟の主要殿舎群の付属屋と考えられる。

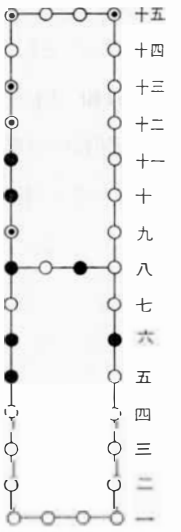
SB6172 (PLAN 6; PL 10)　　6ADC-II区



東脇殿

主要殿舎群の東方にある南北棟建物で，東西6.6m（2間，11尺等間），南北28.6m（10間，9.5尺等間）の規模である。柱掘形は一辺0.8m前後の方形状をなし，深さ0.3～0.5mと浅い。しかし，柱根の残存状況が比較的良く，特に東側柱筋では9本も残っていた。柱間寸法は平均2.844mであり，1尺＝0.2994mとなる。SB6195・6385の東妻からこのSB6172の西側柱筋までの距離は26.9m（90尺）であり，またSB6172の南から1間目の梁行柱筋までの距離も26.9m（90尺）であり，SB6195の南側柱筋と揃う。中心建物SB6185とともに，これらは一連の配置計画によって造営されており，このSB6172はいわば東脇殿に相当する建物と考えられ
＊よう。SB6173・6175・6464と重複し，柱穴の切り合い関係ではいずれよりも古い。

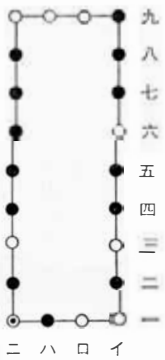
SB5951 (PLAN 7; PL 22)　　6ADC-II区



馬房

SB6172の南にあり，西側柱筋を揃えて建つ南北棟建物である。その規模は東西8.1m（3間，9尺等間），南北40.6m（14間，10尺等間）と長大で，梁行3間の特異な建物である。柱掘形は東西0.8m，南北1.5～1.8mと南北に長い長方形で，深さは0.5m前後である。桁行中央に両妻にあわせて梁行を3間割とする間仕切柱が立つ。一部の柱穴に柱根が残り，桁行の柱間寸法は平均2.97m，梁行は2.70mとなる。北妻からSB6172の南妻までは6.0m（20尺），桁行中央の間仕切柱筋は中心建物SB6185の南側柱筋から11.6m（40尺）の位置にあた
＊り，このSB5951も一連の配置計画に則っている。SB6170およびSB6168と重複し，柱穴の切り合いからSB6170→5951→6168の順に造営されたことになる。建物規模と位置から馬房と考える。

SB6120 (PLAN 23; PL 25)　　6ADD-P区



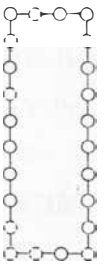
馬房

馬寮地域中央やや南の西面大垣沿いにある南北棟建物で，東西7.9m（3間，9尺等間），南北23.3m（8間，10尺等間）である。柱掘形は0.6×0.8mほどの長
＊方形状のものが多く，深さは平均0.5mである。西側柱の掘形は仮設の南北塀SA3680の柱穴を切る。柱根の遺存率が高いが，柱間寸法は桁行で平均2.93m，梁行で2.63mである。柱根は径20cm内外で細い。この時期の中心建物群SB6185等の西妻からSB6120の西側柱筋までの距離は23.7m（80尺），またSB6185
＊の南側柱筋からSB6120の北妻までは68.1m（230尺）で，かなり南方に隔っているとはいえ同一の計画に基づいて造営されたものといえる。なお，SB9551とならんで，この時期には梁行3間の建物が2棟存在することになる。このSB6120も馬房であろう。

SB6360 (PLAN 13; PL 19)　　6ADC-M区

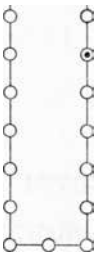
SB6185の西南，大土壙SK6350と西面大垣との間に建つ南北棟建物である。東側柱筋を除き遺存状態は良くなく，柱穴の一部を欠くが，東西5.2～5.6m（3間），南北19.3m（9間，7尺等間）の規模になる。東側柱筋が比較的整然と並ぶのに対し，西側柱には若干の出入りが認められる。柱穴は径0.4～0.5mの円形状で，埋土には焼土が混じる。建物内部の床面，特に南半部は周囲の遺構面より0.5～0.7m高く，焼土が充満した無数の大小ピット群のほか，炉跡と思われる周辺が焼けて固くなった径25cm前後の土壙状の窪みが数基あり，焼土とともに鞴羽口や鉱滓・土器・瓦等がかなりの量出土した。これらは鍛冶工房跡と考えられ，SB6360はその簡単な覆屋であろう。なお，東にある大土壙SK6350にはこの工房からの大量の廃棄物が投入された形跡が窺え，この時期まで存続したことが知られる

鍛冶工房



SB6403 (PLAN 12; PL 15)　　6ADC-M区

SB6360の北方にある南北棟建物で，東西6.0m（2間，10尺等間），南北17.8m（6間，10尺等間）以上あり，北妻は調査範囲外へ出る。柱掘形の大きさは不揃いで，一辺0.6～0.7mの方形状をなす。SB6401と南妻部分が重複し，切り合いからこのSB6403の方が古い。中心建物群等に見られた配置計画にはこのSB6403は乗らない。これは大土壙SK6350によって制約されたためであろう。と言うのは，SB6403のすぐ東にある目隠し塀SA6402は中心建物群の西妻から20.9m（70尺）の位置にあるからである。



SB6140 (PLAN 19; PL 32)　　6ADD-P区

倉　庫

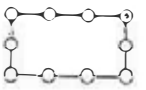
SB6120の東にある総柱建物で，第II期のSB6330と構造的に類似し，倉庫と考えられる。東西4.5m（3間，5尺等間），南北5.4m（3間，6尺等間）で，南北方向が

Fig. 17　SB6360 内部の状況（網は柱穴，断面はN183ライン）

やや長い。柱掘形は一辺0.8mで規格的であり，柱根ないしは柱痕跡が比較的良く残る。南妻はSB6120の南妻と揃い，またSB6120の西側柱筋からSB6140の東側柱筋との間は29.6m（100尺）で，計画的に配置されたことを示す。

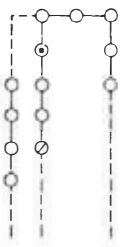
SB6095（PLAN 24；PL 28）　6ADD-P区

＊ SB6140の南妻から26.6m（90尺）南に位置する小規模な東西棟建物である。東西9.0m（3間，10尺等間），南北4.8m（2間，8尺等間）である。柱掘形は一辺0.6～0.7m，深さ0.3～0.5mと小さく浅い。黄褐色粘質土の整地層下位から掘り込まれており，東南脇に位置する第Ⅳ期の南北棟建物SB6100が整地土上面において検出されていることから，それより古いものとみなした。



＊ **SB6500**（PLAN 3；PL 3）　6ADC-G区

馬寮東官衙北部で検出した西廂付南北棟建物である。身舎の規模は東西5.4m（2間，9尺等間），南北10.8m（4間，9尺等間）以上である。柱掘形は一辺1m内外，深さ0.5mほどのものが多い。北妻柱穴はやや小さく，東北隅柱とともに掘形底に木の礎盤を敷く。北妻の柱穴はいずれも第Ⅳ期の東西溝SD6507の底においてはじめて検出されており，この溝より古い。身舎の西2.6m（9尺）に南北に並ぶ径0.8m大の円形柱穴は，従来独立した南北塀とみなしていたが，SB6500の身舎の梁行柱筋に揃うので，西廂と判断した。ただし，北2間分は欠ける。



＊ **SA6341**（PLAN 13；PL 18）　6ADC-N区

大土壙SK6350の東にある南北塀で，全長29.4m（10間，10尺等間）を検出，さらに1～2間南方へ延びる余地がある。柱掘形は一辺0.7m内外で，深さ0.4mと浅く，柱痕跡はほとんど残っていない。第Ⅳ期の南北棟建物SB6345の南妻柱と柱穴が切り合い，このSA6341の方が古い。時期の決め手を欠くが，第Ⅲ期の中心建物SB6185等の西妻から11.9m（40尺）の位置を占めることから，同時期に属し，西方にある鍛冶工房覆屋SB6360および投棄場となったSK6350の目隠塀と考える。

目隠塀

＊ **SA6402**（PLAN 12）　6ADC-O区

大土壙SK6350の北，SB6403の東にある南北塀である。全長12.5m，5間分を検出した。柱間寸法は一定でない。柱掘形は一辺0.4mの方形状でやや小さい。SA6402の南端は西にある南北棟建物SB6403の南妻と揃い，またSB6403の東側柱筋からSA6402は3.0m（10尺）の位置にあるため，同建物の目隠塀と考えられる。

＊ **SA6138**（PLAN 19；PL 32）　6ADD-P区

総柱の倉庫SB6140の南2.9m（10尺）にある東西塀で，全長12.5m（4間）を検出したが，柱間寸法は不揃いである。柱掘形は一辺0.8～1.0mの方形状をなす。はるか北方にある殿舎群の正殿相当建物SB6185の南側柱筋から94.8m（320尺）の位置にあたる。

SE6166（PLAN 7・11；PL 41）　6ADD-K区

＊ 馬房と推定した南北棟建物SB5951の西南脇にある井戸。掘形は一辺2.7mの方形で，深さ2.5mあり，ほぼ中央に井戸枠を据える。井戸枠は長さ1.3m，成25cm前後，厚さ2.5cmの板を蒸籠組としたもので，底から10段目までが遺存する。枠板を一段据える度に裏込めの土をつめるという丁寧な仕事になる。井戸底はバラス混り灰色砂層に達する。井戸の上限については明

1)『年報1971』p.24～25。

らかでないが，建物配置からみて第Ⅱ期のものとは併存し得ず，第Ⅲ期になって掘られたものと考える。井戸枠内堆積土から平城宮土器Ⅳ～Ⅴに属する土師器・須恵器や削り掛け・曲物等の木製品が出土した。なかでも「主馬」の墨書を有する土師器坏1点が注目される。したがって，次の第Ⅳ期まで存続したことは確実である。

墨書土器「主　馬」

SX6119 (PLAN 20)　6ADD-P区　*

倉庫SB6140の西南にある2条の東西方向の柱穴列である。柱掘形は一辺0.5mほどの方形状をなし，5.2～6.5mの間隔で3個宛並ぶ。各々の柱穴は5.2～5.5mの間隔で南・北でも対応する。しかし，柱穴が小さい上に柱間が極端に広いため建物とは考えにくく，性格は不明である。馬房にふさわしい性格を想定するならば，馬を仮につないでおく施設のようなものであろうか。

SX6380 (PLAN 10; PL 11)　6ADC-M区　*

中心建物群中のSB6195の西北部で重複する東西棟建物風の柱穴群である。東西9.0m（3間，10尺等間），南北3.0m（1間，10尺）と小規模ながら整然とならぶ。掘形は一辺1m内外の方形状で，深さ0.8mと大きい。柱穴の重複関係からSB6425（第Ⅱ期）より新しく，SB6190（第Ⅳ期）より古いので，この間のものと判断される。しかし，第Ⅲ期のSB6195とも重複しており，これとは並存し得ない。東南隅柱穴を断ち割った結果，柱痕跡も抜取穴も無いことが判明したので，掘形は掘られたものの計画変更のため埋め戻されたものと考えられた。　*

SX5941 (PLAN 22; PL 25)　6ADD-O区

O区の南西部馬房SB6120の東北にある2列の東西柵状遺構。柱穴はいずれも径0.6mほどの円形状であり，各柱穴は南北で対をなして東西に正しく並ぶ。柱穴の間隔は東西方向が5.7m（19尺），南北が6m（20尺）である。SX6119と同様の機能をもつものと考えられようが，詳細は不明と言わざるを得ない。　*

D　第Ⅳ期（奈良時代後半）の遺構

馬寮官衙として最も充実した様相が窺える時期で，遺構としては建物15，築地4，塀5，溝12，土壙1などがある。井戸SE6166はこの時期まで存続する。馬寮域の東限は掘立柱塀SA5950Aから同位置に築かれた築地SA5950Bに変る。ただし北端は，西面北門から東へ通ずる位置に設けられた馬寮北限の東西築地SA6475と合し，北へは延びない。内部の空間構成は基本的には第Ⅱ・Ⅲ期を踏襲したもので，北半中央北寄りに主要殿舎群を置き，その南に中・小の雑舎を配する。南半中央は何らの遺構もない広場的空間で，南西隅に大型の南北棟建物2棟が並び建つのである。主要殿舎群の周囲は塀で囲まれるが，そのさらに東・西・北には巨大な二面廂付建物が建ちさらにこれを囲む。このように内・外郭の二重構造となっている点はこの時期に固有の配置である。　*

内・外郭の二重構造

馬寮東官衙の西および北も築地によって区画される。北面築地SA6510は馬寮の北面築地SA6475と棟通りを揃えており，この時期には馬寮ばかりでなく，かなり広範に宮内の整備が促進されたようである。

SA5950B，SD6160・6161 (PLAN 5・6・7・14・15・16・17; PL 5・20・26・37・38)　*

東面築地

SA5950Bは掘立柱塀SA5950Aを取り壊した後，同位置に構築された南北築地で，東西両

側に雨落溝SD6160・6161を伴なう。東雨落溝SD6160は幅1.6～2.6m，深さ40cm，北端は別の溝SD6513によって切られているが，西へ曲り東西築地SA6475の北雨落溝SD6477と合していたと思われる。西雨落溝SD6161は幅0.7～1.5m，深さ30cmあり，北はSA6475の南雨落溝SD6479と合するほか，北雨落溝SD6477からも木樋暗渠SX6504を通して水を受けている。西側溝SD6161がこれらと合流する付近はオーバーフローのためか大きくえぐられ，土壙状にひろがっている。東西両雨落溝間の心心距離は約4mであり，細礫混り黄褐色粘土の積土が部分的に遺存している。SD6160から平城宮土器Ⅳ・Ⅴの土器が出土しており，奈良末まで存在したと判断できる。

SA6475，SD6477・6479 (PLAN 5・8；PL 4，6)　6ADC-G・L区

馬寮地域の北を限る築地とその南・北雨落溝である。東端は南北築地SA5950Bに接続する。北雨落溝SD6477は幅1.0～1.5m，深さ約20cm，東端は氾濫のためやや乱れる。一部は木樋暗渠SX6504によって築地下を横断して南北溝SD6161に注ぎ，また一方SA5950Aの柱穴埋土を掘り込んで南北溝SD6160にも注ぐ。南側溝SD6479は全体的に遺存状態が悪いが，幅1.5～2.0m，深さ40cmあり，東端はSD6161に注ぐ。第Ⅲ期の南北塀SA5950Aの柱穴は北雨落溝SD6477の溝底で検出されており，SD6477はSA5950Aより新しい。また，SD6477の埋土から平城宮土器Ⅴの土器が出土している。南雨落溝の直ぐ南に並行する東西溝SD6473がある。この溝は東方にある馬寮東官衙の北面築地が改修された後の南雨落溝と一直線上に並ぶので，あるいは改修後のSA6475Bの南雨落溝であるかもしれない。

北面築地

SA6150，SD6151・6152 (PLAN 3・4；PL 2)　6ADC-G・H・K区

馬寮東官衙の西面を画する南北方向の築地である。東西の雨落溝SD6151・6152に挟まれた幅約4mの範囲に築地基底部のものと思われる褐色粘質土の積土が厚さ20cmほど残存する。築地の北端は西面北門の推定南北中軸線の東延長上にあたり，東へ折れて調査範囲外へ延びる(SA6492)。東西溝SD5280の北岸まで100mほどを検出したが，以南の状況は不明である。SD5280Bには，ちょうどSA6150の南の位置に暗渠が設けられており，築地がさらに南へと延びていた可能性は高い。東雨落溝SA6151は幅2.0～3.0m，深さ30cmほどであるが，南部ではオーバーフローしたため両岸が崩れ，土壙状に拡がっている。西雨落溝SD6152は幅1.0～2.5m，深さ40cmで，両溝間の心心距離は平均7mである。

馬寮東官衙西面築地

SA6150の構築時期については，両雨落溝SD6151・6152の埋土から平城宮土器Ⅱ・Ⅲを主体とした土器が出土していることから第Ⅲ期に遡る可能性も否定できない。しかし，このあたりの整地土を切って2条の溝は掘り込まれており，また両溝からは平城宮土器Ⅴ～Ⅵの土器もあわせて出土しており，第Ⅳ期のものと考えても矛盾はない。次に述べる北面築地は第Ⅳ期の中で改修され，南雨落溝を当初のSD6512から若干南につけ替えてSD6507としているが，南北築地SA6150との交叉点部分に暗渠SX6505を設けている。このSX6505部分での埋土から平城宮土器Ⅳ・Ⅴの土器が出土しており，また，SA6150のほぼ中央部を切るC字形に彎曲する溝状土壙SK6155からは平城宮土器Ⅴ～Ⅵの土器が出土している。このため，SA6150の下限は奈良時代の末におくことができる。

SA6510，SD6511・6512 (PLAN 3；PL 3)　6ADC-G区

馬寮東官衙域の北限築地とその南北雨落溝である。北面築地SA6510は西面築地SA6150の

馬寮東官衙北面築地

北端から始まり，東は調査範囲外へと延びる。北雨落溝SD6511は幅0.4～0.9m，深さ15cm，また南側溝SD6512は幅1.1m以上（次に述べるSD6507によって南岸を切られている），深さ20cmで，両溝心心距離は約4.5mである。北雨落溝SD6511から奈良時代末の土器や土馬が出土した。

SD6507・6513，SX6505（PLAN 3；PL 34）　6ADC-G区

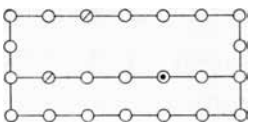
SD6507は馬寮東官衙北面築地SA6510の南雨落溝SD6512の南半に重複し，これを切る東西溝である。西端は馬寮域東面築地SA5950B付近にあり，築地外周の雨落溝東北隅を切りつつ北折して南北溝SD6513となり，調査範囲外北方へ延びる。東も調査範囲外へ延びる。幅約2m，深さ40cmある。東官衙の西面築地SA6150と交叉する部分には暗渠SX6505を設けているため，築地と同時存在とみる。しかし，当初の南雨落溝を切っており，築地を改修して若干規模を大きくした後の南雨落溝と考えるのが妥当であろう。築地の下を暗渠によってくぐり抜け，さらに西北へと続く理由については不明である。暗渠SX6505は溝の南北両岸に沿って径15cm，長さ60cm以上の木杭を約25cm間隔で内傾させて打ち込み，背に側板を置くという簡単な構造をなす。内部の埋土から平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。

SX6514（PLAN 14；PL 21）　6ADC-K，6ADD-L区

馬寮東官衙のほぼ中央部を横断する東西溝SD5280Bに設けられた暗渠である。西面築地SA6510と交叉する地点にあたり，SA6510はさらに以南へと延びていたことになろう。SD5280Bのほぼ中央に幅約1.5m，深さ40cmの掘形を設け，南北両側に径10cm，長さ90cm以上の杭を約40cm間隔で内傾させて打ち込み，側板を背に置く構造はSX6505と同一のものである。設置した時期は同時でSA6510の改修に伴うものと考えられよう。既述のように，この時点でSD5280がどのように機能していたかは不明である。

SB6420（PLAN 9；PL 13）　6ADC-M区

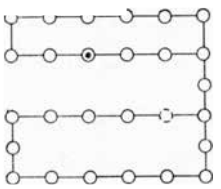
中心建物



馬寮地域北半部中央やや西北寄りにある南廂付東西棟建物である。東西17.9m（6間，10尺等間），南北7.8m（身舎2間，8尺等間。廂の出10尺）とやや小規模だが，この時期の中心建物である。柱掘形は径0.8mほどの円形で，深さは40cm程度のものが多い。柱根はほとんど抜き取られている。第Ⅱ期の脇殿SB6425の柱穴を2ヵ所で切り合い，SB6420が新しい。

SB6381（PLAN 10；PL 14）　6ADC-M区

SB6420の南にあって西妻を揃えて建つ東西棟建物である。東西15.0m（5間，10尺等間），南北3.0m（1間，10尺）と小規模で，柱掘形も一辺0.5mほどと小さい。この建物の北側柱筋は，北のSB6420の南側柱筋と南のBS6190の南側柱筋との中間にあたり，また三者とも西妻を揃えているところから，一体のものとして計画的に配置されたとみなせる。第Ⅲ期の後殿SB6385と切り合い，SB6381が新しい。



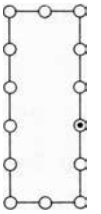
SB6190（PLAN 10；PL 14）　6ADC-M区

2棟の前殿

SB6381の南にあり，SB6420と共に西妻を揃えて建つ東西棟建物である。東西15.0m（5間，10尺等間），南北4.8m（2間，8尺等間）で，SB6381と桁行規模が等しく，東妻柱筋も揃う。一部の柱穴は検出されていないが，柱掘形は一辺0.7mほどある。SB6381との間の東妻柱筋中央でも柱穴を検出しており，少なくとも東側面は連なっていた可能性がある。SB6195・6425・6380と柱穴が重複し，切り合い関係では他のすべてより新しい。SB6381・6190はSB6420に対

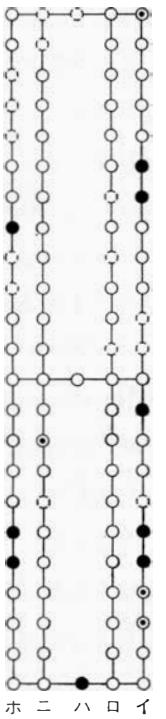
する前殿と考えられる。

SB6451 (PLAN 9 ; PL 8)　6ADC-M区



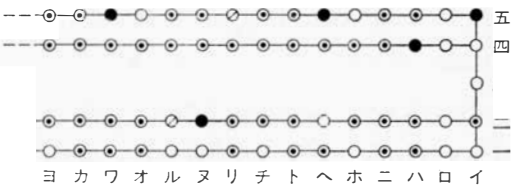
SB6420の東に建つ南北棟建物。東西5.2m（2間，9尺等間），南北14.9m（5間，10尺等間）である。柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形状のものが多く，柱痕跡はあまり明瞭でない。東側柱筋はSB6420の東妻から15.0m（50尺）の位置にあり，北妻柱筋はSB6420の北側柱筋に揃う。SB6451はSB6420の脇殿と言えよう。第Ⅱ期の正殿SB6450と重複し，柱穴の切り合い関係からSB6451が新しい。

SB6175 (PLAN 5・6 ; PL 9)　6ADC-G・H区



SB6451のさらに東方，すなわち馬寮地域の東北隅にある東西二面廂付南北棟建物である。東西10.8m（身舎2間9尺等間，両廂の出8.5尺），南北52.4m（22間，8尺等間）と極めて大型である。南から10間目の梁行中央に間仕切柱があり，これを境に南半10間と北半12間に分れる。南半の柱掘形は一辺0.7～0.9mで南北がやや長い方形状のものが多いのに対し，北半では一辺0.5～0.8mと全体に小振りでしかも若干丸味を帯びる。北半部は増築の可能性があろう。西側柱筋は中心建物SB6420の東妻柱筋から東へ26.8m（90尺），前殿SB6381・6190の東妻柱筋からは29.6m（100尺）の位置にあり，SB6190の南側柱筋に揃えて南妻柱が立ち，さらに間仕切柱筋がSB6420の南廂柱筋に大旨揃うなど，中心建物群と一体の計画のもとに配置されている。柱根の遺存率が悪く，かろうじて9本が残るが，腐蝕著しく径は33.5～17.1cmとばらつく。すべてヒノキ材である。SB6460・6172・6173と重複するが，柱穴の切り合いではSB6172より新しく，SB6460・6173よりは古い。

SB6430 (PLAN 8 ; PL 7)　6ADC-L・M区



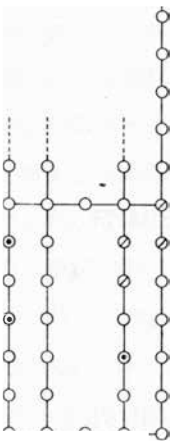
中心建物群の北にある南北二面廂付東西棟建物である。西妻は調査範囲外にあり，東西33.3m（14間，8尺等間）以上，南北10.8m（身舎2間，10尺等間。両廂の出各8.5尺）の規模である。柱掘形は一辺0.8mほどの方形状が一般的で，深さは0.4mと浅い。柱痕跡が明瞭に残るほか，5カ所に柱根が遺存する。北廂柱筋は東方に建つ二面廂付南北棟建物SB6175の北妻柱筋と揃い，南廂柱筋から正殿SB6420の北側柱筋までの距離は8.9m（30尺）である。このSB6430は，第63次調査の段階では第Ⅲ期に属すると考えられていたが，第127次調査において柱掘形から平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器が出土したこと，第Ⅲ期の並行して建つ3棟の中心建物SB6185・6195・6385とは棟の方位を違え，しかもこれら3棟は整地土下位で検出されているのに対してSB6430は整地土上面で検出可能であったことから，第Ⅳ期に変更することとなった。また，東方の南北棟建物SB6175および次に述べる西方のSB6400と共に同じ長大な二面廂付建物であり，柱筋が互いに揃うことからこれらは同時期のものとするのが妥当である。SB6469・9552・6429と重複し，柱穴の切り合い関

1）『年報 1971』p.24～26。

係によればいずれの建物よりもSB6430が古い。

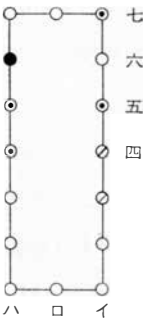
SB6400 (PLAN 12; PL 15・16)　6ADD-O区

SB6420の西方に建つ東西二面廂付南北棟建物である。北半は調査範囲外に出るが，東廂のみは11間分まで検出した。東西11.8m（身舎2間・両廂の出とも10尺等間），南北33.0m（11間，10尺等間）以上の規模となる。柱掘形は一辺0.8m，深さ0.5mほどで，柱痕跡は鮮明でないが，一部の柱穴底部には木製礎盤が遺存する。南妻柱筋の2つの柱穴は第II～III期の大土壙SK6350の埋土上面から掘り込んでいるので，SK6350よりは新しく，また柱穴の切り合いからSB6401より古い。SB6400の東廂柱筋はSB6420等中心建物群の西妻柱筋から9.0m（30尺）の位置にあり，しかも南妻柱筋は前殿SB6190の南側柱筋に揃えており（したがって，東方はるか離れたSB6175とも南妻を揃えることになる），SB6175・6430および6400という3棟の大型二面廂付建物は，中心建物群の周囲に計画的に配置されていることは明らかである。なお，SB6400の東廂南端の柱穴は土壙SK6397によって切られているが，土壙埋土から平城宮土器Vの土器が出土しており，SB6400の下限の時期が窺われる。



SB6345 (PLAN 13; PL 18)　6ADC-M・N・O・P区

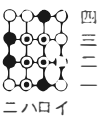
SB6190の西南，SB6400の東南にある南北棟建物である。規模は東西7.1m（2間，12尺等間），南北21.1m（6間，12尺等間）で，桁行・梁行ともに柱間の広いことが特徴である。柱掘形は一辺1.0～1.2mの方形状で，深さ0.5mあり，北半部に柱痕跡が残る。棟の方位はN2°Wほど偏し，第III期の中心建物SB6185等の振れとほぼ等しいが，柱穴の切り合い関係から第III期のSA6341より新しく，また一部の柱掘形から平城宮土器Vの土器が出土しているので，第IV期に属すると考える。SB6345の東側柱筋はSB6190の西妻柱筋から3.0m（10尺）の位置にあり，共通の配置計画に基づいているらしいこともその傍証となろう。



SB6340 (PLAN 11; PL 17)　6ADC-N区

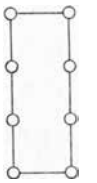
倉　庫

SB6345の東側にある総柱建物で，倉庫と考えられる。第II期のSB6330，第III期のSB6140とよく似た構造をなし，東西4.0m（3間，4.5尺等間），南北5.4m（3間，6尺等間）と南北にやや長い平面であることも共通する。柱掘形は方形状だが大きさは一定せず，一辺0.9m前後，深さ0.7mのものが多い。柱痕跡が明瞭に残るほか，柱根も3本遺存する。第III期のSB6185との柱穴の切り合いからこの建物の方が新しい。SB6345の東側筋柱からSB6340の西側柱筋まで11.8m（40尺），またSB6190の南側柱筋からSB6340の南妻まで17.7m(60尺）であり，中心建物群と一体の計画のもとに配置されたものと理解できる。



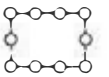
SB6177 (PLAN 11)　6ADC-K区

SB6430の東南方にある南北棟建物。SB6345とは馬寮官衙域中軸線に対してほぼ対称の位置にある。しかし規模は小さく，東西4.5m（1間，15尺），南北12.6m（3間，14尺等間）である。これもSB6345と同様柱間が広い。柱掘形は円形状で，径0.4～0.6mと柱間の割には小さい。しかも妻柱を欠いており，仮設的な建物と思われる。あるいは上部構造を欠いた単なる馬の囲い場のようなものかもしれない。ただし，東側柱筋は内郭



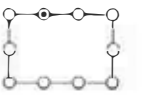
の東を画す南北塀 SA6455と揃い，北妻は内郭南を画す東西塀 SA6186から 17.8m（60尺）の位置にあり，規制が働いていたとみなせる。

SB6168（PLAN 7；PL 22）　6ADC-H・K区



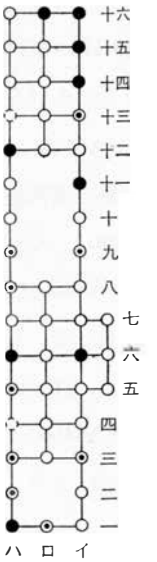
SB6177の東北方に建つ小規模な東西棟建物。東西5.0m（3間，6.5尺等間），南北
＊ 4.2m（2間，7尺等間）で，柱掘形の大きさは一辺0.4～0.8mと不揃いである。柱穴の重複からSB5951より新しい。西側柱筋は北側の長大な東西二面廂付南北棟建物SB6175の東廂柱筋と揃う。

SB6165（PLAN 7；PL 22）　6ADC-K区

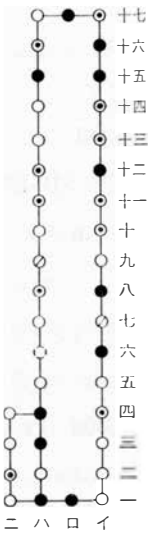


SB6168の南方で，井戸SB6166の東側にある東西棟建物。東西8.1m（3間，9尺等間），南北5.4m（2間，9尺等間）で，柱掘形は方形状のものが多く，一辺0.7m，深さ0.7mある。柱穴の一部が第II期の SB6170と重複し，より新しいことがわかる。SB6168の南側柱筋と SB6165の北側柱筋との間は18.0m（60尺）であり，かつ西妻柱を揃えて建つ。

SB3690（PLAN 25；PL 33）　6ADC-P・Q区



佐伯門の東北，すなわち馬寮地域西南隅にある長大な南北棟建物。東西5.3
＊ m（2間，9尺等間），南北39.7m（15間，9尺等間）である。柱掘形は一辺1.2mの方形状で，深さは0.8～1.0m程度のものが多い。柱穴には柱抜取痕跡を持つものがあるが，一方柱根を残すものもあり，すべてが抜き取られているわけではない。棟通りには間仕切柱のほか，側柱筋に合わせて床束と思われる径0.4m前後の小柱穴が掘られるばあいが多い。特に北から4間目の間仕切柱以北の一
＊ 室は全体に床張りである。南半においては部分的に床束の柱穴を欠くが，恐らく同様に床張りであったものと思われる。なお，東側柱筋南から4～6間目に小廂（廂の出2.1m，7尺）が付く。またこれとは別に，側柱中間の入側および棟通りに規則的に並ぶ一辺0.2～0.4mの小柱穴群がある。建物外部において対応する柱穴が見つかっていない点で問題を残すが，足場穴と理解できよう。このSB3690は東に並ぶSB6100と共に，かつては第II期に属すると考えられていた。遺存する柱根から求められた基準尺が1尺＝0.294mと短い点を主たる根拠としたものである。しかし，この数値は第II期としても短か過ぎるし，建物配置の面からは第IV期と見るのが妥当であろう。まずSB3690の東側柱筋がはるか北方にある大型二面廂付南北棟SB6400の東側柱筋と揃うこと，東に並ぶ
＊ SB6100とは南妻を揃えていて同時期と見られるがこのSB6100の柱穴は整地土上面から掘り込まれ第II期には遡り得ないことがその理由である。建物の形態から馬房と考えられ床張り部階上は倉庫であろう。



馬　房

SB6100（PLAN 24；PL 35）　6ADD-N・Q区

S B3690の東側に並んで建つほぼ同規模の南北棟建物である。東西4.8m
＊（2間，8尺等間），南北38.2m（16間，8尺等間）で，西側柱南端から3間に廂が付く。廂の出は3.3m（11尺）である。身舎の柱掘形は一辺0.8～1.2mの方形状で，深さ0.7m内外であるが，廂の柱掘形は一辺0.6～0.7mと小さい。全体に柱根の遺存率が良く，これらから求めた基準尺は1尺＝0.298m以上

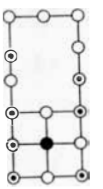
1）『年報 1969』p.34～37。

となり，隣りのSB3690とはかなり相違する。柱穴は整地土上面において検出されており，また一部の柱掘形から平城宮土器Ⅴの土器が出土しており，当期に属すと考える。西側のSB3680とは先述のように南妻を揃え，ほぼ同規模の長大な南北棟建物であることから，両者は対をなして配置され，馬房として機能していたものであろう。

馬　　房

SB6487 (PLAN 3; PL 3)　　6ADC-G・H区

馬寮東官衙の西北隅にある南北棟建物。東西5.4m（2間，9尺等間），南北12.8m（5間，8.5尺等間）である。柱掘形は方形状だが規格的でなく，一辺0.6～0.9mと大きさがばらつく。南2間には棟通りに柱穴があり，そのうち南から1間目のものには柱根が残る。この掘形は一辺0.4mと小さく，床束と考えられる。2間目は間仕切か。西側柱筋は築地SA6150の東雨落溝SD6151の溝底において検出されたが，位置的にみてSB6487は築地と併存した可能性が強い。



SA6186・6455・6456・6317・6318 (PLAN 9・10)　　6ADC-H・M区

内郭を囲う塀

これらは馬寮地域北部中央にならぶ中心建物群を囲う区画塀である。長大な二面廂付建物SB6175・6340・6400が東・北・西にあっていわば外郭を形成しており，これらの掘立柱塀は中央殿舎群を囲って内郭を形成すると考えられる。

SA6186は前殿SB6190の南側柱筋および東方の二面廂付建物SB6175の南妻柱筋を結ぶ線上にある東西塀である。全長15.0mで，柱穴の一部は未検出だが8間分ある。柱間寸法は1.8～2.0mと一定しない。

SA6455はSB6175と脇殿SB6451との間にあり，内郭東を画す南北塀である。全長14.0m（4間）で，柱間寸法は3.3～3.6m（11～12尺）の範囲内でばらつく。柱掘形は一辺0.5mの方形状で，柱痕跡はない。南2間を改修し，柱間を広くしている。

SA6456とSA6317は脇殿SB6451および正殿SB6420の北，すなわち二面廂付東西棟SB6340の南にあり，内郭外面を画する東西塀で，同一線上にあるため両者は一連の塀である可能性も残るが，両者の間が10mほどあくので別扱いしておく。SB6456は全長11.5m（3間），SA6317は14.6m（4間）以上あり，柱掘形はともに一辺0.3～0.4mほどの方形状をなす。

SA6318はSB6420の西，SB6400との間にある南北塀で，内郭西面を画する。全長16.5m（4間）と考えられるが，南から1間目の柱穴は未検出である。柱掘形は径0.3mほどの円形状をなす。

SD6181 (PLAN 10; PL 14)　　6ADC-M区

前殿SB6190および東西塀SA6186の南約3mのところを東西に走る素掘り溝である。幅0.7～2.1m，深さ25cmほどで，西端近くは一部消滅しているが，鍵の手に北へ折れて南北溝SD6408へつながると思われる。東端も削平のため失われているが，全長64mにわたって検出した。時期の決め手を欠くが，整地土である灰褐色砂質土上面から掘り込まれており，SD6408と共に北側の殿舎群を囲むような位置にあるので，これらと一体のものと考える。

SD6408 (PLAN 12; PL 15)　　6ADC-M区

SB6400のすぐ西にあり，これと平行する素掘り南北溝である。幅0.5m，深さ20cmあり，北端は調査範囲外へ延び，南端はSD6181に接続する。SB6400の西廂柱筋心から溝心まで約1.2m（4尺）と近接しており，この建物の雨落溝の可能性もある。

SK6098 (PLAN 16; PL 27・29)　6ADD-M・P区

M・P区境東端にある溝状の大土壙。幅約3m，深さ40cmあり，C字形に彎曲しており，東半部は調査範囲外へ出る。この土壙埋土から平城宮土器II・IIIの土器が出土しているが，馬寮東官衙南半区域の西を限る南北大溝SD5960が埋めたてられたのちの整地土を切って掘り込まれており，実年代は下る。

E　第V期（平安時代初頭）の遺構

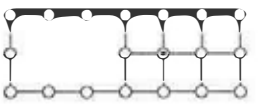
この時期に属する遺構には，建物・溝・井戸・土壙などがある。官衙の範囲は第IV期までと同様であるが，中央部付近に東西溝SD5961があり，これによって南北2つの区画に分割している。北半は，正殿風の東西棟建物SB6386を中央に置き，東西に二面廂付南北棟SB6173・6460およびSB6401を各2棟あて配し，さらに北方に小規模な東西棟を並べ，南方を広場的な空間とする。一方南半では，北東部に北廂付東西棟建物SB6130を正殿，南北棟建物SB6141を脇殿とした1ブロックがあるほかは全くの空閑地になったようだ。南半部においては，前時期までこの官衙域を特徴づけた長大な南北棟建物はなく，官衙の性格の変化したことが窺える。

南北2区画に分割

SD5961 (PLAN 14, 17)　6ADD-L・O区

馬寮地域中央付近を東西に横切る素掘り溝。幅1.2m，深さ20cm前後で，東流して調査区外へ出る。西端は削平されているが，全長70m以上になる。SD5961が南北築地SA5950Bと交差する地点で木樋が検出された。長さ2.2m以上，幅35cm，厚さ3.5～4.0cmの底板および2枚の側板を組合わせたものである。この木樋底のレベルは溝底より25cmほど高いが，周囲の状況からみてSD5961に伴うことは明らかであり，築地SA5950Bを一部改修して再使用した可能性を示唆するものである。なお，溝の西端から約19m東の位置に東西に並ぶ2枚の敷石（幅1.65m，西側のものは凝灰岩切石，東側は扁平な自然石）があり，橋脚の礎石かと思われる。

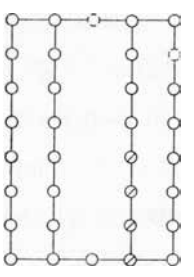
SB6386 (PLAN 9; PL 13)　6ADC-H区



馬寮地域北半中央やや北寄りにある東西棟建物。東西17.6m（6間，10尺等間），南北6.0m（2間，10尺等間）と規模はやや小さいが，この時期の中心建物である。柱掘形は一辺0.4～0.7mの方形状のものが多く，柱間に比べて小さい。東半3間には棟通りにも柱穴があり，床張りの可能性がある。東・西2方に建つ3棟の二面廂付南北棟建物SB6173・6460とSB6401の中心の位置を占め，また，北方の2棟の小型東西棟建物のうちSB9552の西妻と西妻を，SB6469の西妻とは東妻を揃える。第III期の後殿SB6385の一部の柱穴を切っており，このSB6386が新しい。

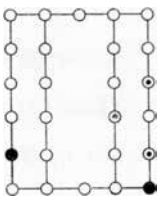
中心建物

SB6173 (PLAN 6; PL 9)　6ADC-H区



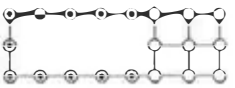
SB6386の東南方にある二面廂付南北棟建物である。北妻柱を含め一部の柱穴は未検出だが，東西12.7m（身舎2間，10尺等間。両廂の出11尺），南北18.9m（7間，9尺等間）の規模である。柱掘形は，身舎東側柱筋のものが一辺1.0m，深さ0.6mと大きく，南寄りに柱抜取穴を伴うが，他はこれらより若干小さい。柱穴の切り合い関係からSB6172・6175より新しく，SB6464より古い。

SB6460 (PLAN 6; PL 9)　　6ADC-H区



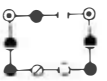
SB6173の北に建つ二面廂付南北棟建物で，東西10.8m（身舎2間・両廂の出とも9尺等間），南北13.6m（5間，9尺等間）の規模である。柱掘形は一辺0.5～0.8mの方形状で，大きさにばらつきがある。ごく一部に柱根が遺存するが，他のばあい柱痕跡さえ明瞭でない。SB6173に比して規模は小さいが，西廂柱筋を互いに揃え，またSB6173の北妻から6.0m（20尺）の位置に南妻柱筋を配しており，両者は一貫した計画のもとに建てられている。

SB6469 (PLAN 8; PL 7)　　6ADC-G・L区



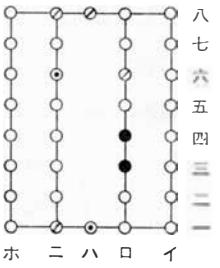
SB6460の西北に建つ東西棟建物である。東西16.6m（7間，8尺平均），南北4.8m（2間，8尺等間）。西4間分の柱掘形は一辺0.6～0.8m，深さ0.5mと大きさが比較的均等で柱痕跡もよく残るが，東端2間分の柱掘形は不整形で，大小の差が著しい。また，柱位置を柱穴中央に想定して東3間の柱間寸法をみると，東から2.4m（8尺），2.7m（9尺），1.8m（6尺）となり，西4間が2.4m（8尺）と均一なのに対して不揃いである。南側柱筋の柱穴位置もやや北寄りにすずれる。したがって，東2間は後の増築かあるいは別棟の可能性もある。柱穴の一部がSB6430と重複し，このSB6469の方が新しい。 *

SB9552 (PLAN 8; PL 7)　　6ADC-I区

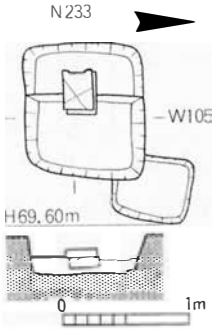


SB6469の西方にある東西棟建物。東西6.4m（3間，7尺等間），南北4.2m（2間，7尺等間）である。柱掘形は後世の攪乱によって一部が失われているが，一辺0.5～0.8mの方形状で，深さ0.5mあり，柱根ないし柱痕跡の残るものがある。SB 6469とは南北両側柱筋を共に揃える。 *

SB6401 (PLAN 12; PL 15)　　6ADC-O区



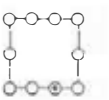
馬寮地域北半西端近くにあり，SB6137と対称をなす二面廂付南北棟建物。東西12.4m（身舎2間，10尺等間。両廂の出11尺），南北17.0m（7間，9尺等間）である。柱掘形は一辺0.6～0.8mの方形状をなし，深さ0.5m前後で，極めて整然とならぶ。柱根は身舎東側柱筋の1本以外は遺存していないが，両廂の柱掘形底に塼を敷き礎盤とするのが特徴的である。柱穴の重複からSB6400・6403より新しい。東方に建つSB6173と北妻柱筋を揃えており，平面規模は異なるが両者は対をなす建物と考えられる。東南隅柱掘形から平城宮土器VI～VIIの土器が出土しており，建物造営の上限を知る好資料となる。 *



塼の礎盤

Fig.18 SB6401 柱穴八ホ

SB6453 (PLAN 9)　　6ADC-M区

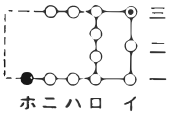


SB6469の西南，SB6386との間にある一辺5.4mの方形建物。東西は1.8m（6尺）等間の三ツ割とするが，南北は2間（9尺等間）なので，東西棟である。柱掘形は一辺0.5～0.7mの方形状をなす。西方の東廂付建物SB6428の身舎部分と規模が等しく，柱筋も揃うので，同時期の建物と考えられる。 *

SB6428 (PLAN 9)　　6ADC-M区

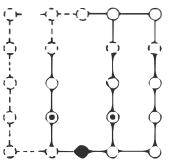
SB6453の西方，SB9552の西南にある東廂付東西棟建物。東西8.1m（身舎3間，6尺等間。廂

の出9尺），南北5.4m（3間，6尺等間）である。柱掘形は一辺0.5mほどの方形状で，一部に柱根が残る。東方SB6453とは，既述のように並存したと考えられる。



SB5945 (PLAN 18)　6ADC-N，6ADD-O

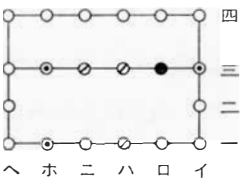
6ADC・6ADD区の境，ほぼ中央にある東廂付南北棟建物。東西8.0m（身舎2間，8尺等間。廂の出11尺），南北10.8m（4間，9尺等間）である。北半部は水路にかかり未調査であるが，北妻柱筋の　部が水路北側で検出されたため規模が確定した。南半部の柱掘形は一辺0.7mの方形状で，整然とならぶ。身舎棟通り柱筋がはるか北方の中心建物SB6386の西妻柱筋と揃う。なお，西廂が存在した可



＊ 能性もある。

SB6130 (PLAN 19；PL 31)　6ADD-O・P区

馬寮域中央やや東南寄り，O・P区東寄りにある北廂付東西棟建物である。東西15.0m（5間，10尺等間），南北10.2m（身舎2間，10尺等間。廂の出14尺）で，北廂が著しく広い。柱掘形は身舎のものが一辺



＊ 0.8～1.1m，深さ0.5～0.6mで，一部に柱根および木製礎盤が残る。北廂の柱掘形はこれらよりやや小さく，南北に長い。棟方向は東で南に若干振れる（E2°40′S）。

身舎内東半部には，半間毎に掘られ左右対称形に整然と並んだ11個の穴（SX6137）がある。いず

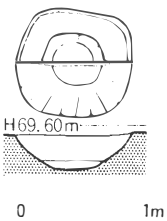


Fig. 19　SX6137 断ち割り図

＊ は柱痕跡らしきものがあって柱穴とみられぬこともなく，調査途時においては建物内に設置した棚の痕跡と考えていたが，断ち割り調査の結果柱痕跡はみあたらず，しかも丸底となっており，穴の配置とも考え合わせ，これらは柱穴ではなくむしろ大甕等を据え置いた痕跡と考える方が妥当であろう。この時期には，周辺にSB6141のほかめぼしい建物がなく，このSB6130は当地域南半区画における正殿と考えられる。

南半区画の正　殿

＊ **SB6141** (PLAN 19；PL 32)　6ADD-P区

SB6130の西南にある南北棟建物。東西4.2m（2間，7尺等間），南北10.4m（5間，7尺等間）である。柱掘形は　辺1.0m，深さ0.5mと建物規模のわりに大きい。北妻柱は後に井戸SE6143が掘られたため失われている。棟方向が北で東に振れるが（N2°12′E），この振れはSB6130のものとほぼ等しく，両者の間には特に計画性は見い出

＊ せないが，配置状況からみてSB6130に伴う脇殿と考えられよう。

脇　殿

SE7110 (PLAN 24；PL 35)　6ADD-Q区

SB6100の西側柱筋に位置する井戸。掘形が3段になる。上段は東西2.6m，南北3.3mの長方形で深さ0.6～0.7m，中段は上段掘形の南寄りに東西2.2m，南北2.4mの大きさで，深さ0.4mほど掘込む。さらにその中央西寄りに3段目の掘形を径1.0m，深さ0.6mほどの円筒形に掘

＊ り込む。下段底部から，曲物（径38.8cm，高さ27.8cm）や木杭のほか，奈良時代中頃から平安時代初めにかけての土器類や瓦片が出土した。SB6100の柱掘形は井戸の掘形によって壊されているので，SB6100廃絶後に掘られたものである。

SK6397 (PLAN 13)　6ADD-O区

O区東南にある長円形の土壙。東西1.3m，南北1.0m，深さ0.65m。この土壙は第Ⅳ期のSB6400の東南隅の柱穴を切って掘られるが，埋土から平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器が出土した。したがって，第Ⅳ期の下限を知る資料となる。

SK6155 (PLAN 4; PL 21)　6ADC-H区

H区東南にある不整形な大土壙。東西18m以上，南北6mあり，最も深いところで0.9mある。北岸に護岸用の木杭が10本ほど不規則に打ち込まれている。奈良時代末期から平安時代初頭にかけての多量の土器片や木簡・瓦等が出土しているので，馬寮東官衙の西面築地は平安時代初頭頃まで存続したことがわかる。

F　宮廃絶後およびその他の遺構

前節までに取りあげた諸遺構は，相互の重複・切り合い関係や配置の状況，出土遺物等によって，時期区分がある程度可能なものであった。調査範囲内では，それら以外にも多くの建物・塀・井戸あるいは土壙などが検出されている。井戸については出土遺物から年代を想定できるものが多いが，建物や塀については時期不明とせざるを得ないものが大半である。井戸・土壙等から出土した遺物や整地土に混入した遺物の年代を総合すると，宮廃絶後から14世紀頃までのものが断続的に調査範囲内をほぼまんべんなく分布しているので，平城宮廃絶後もこの地域が利用され続けたことは明らかである。時期不明の建物・塀等の構築物のうちにはその範疇に含まれるものも少なくないと思われる。

本節においては，出土遺物から9世紀～12世紀末頃までに比定できる遺構と時期不明のものとを一括して扱うこととし，建物・塀などと区分せずに北から順に個別に記載を進めてゆく。ただし，これら諸遺構の中には，ある程度まとまりをもって存在し，その中で重複関係を示すばあいもあり，幾つかのグループに分けることも不可能ではない。これらについては「小結」の項で再度触れることにしたい。

建物はすべて第Ⅱ～Ⅴ期のものより規模が小さく，3間×2間程度，柱間7尺以下のものが大部分であり，また柱穴も小さい。しかしながら，9～12世紀に属する掘立柱建物遺構については従来ほとんど知られておらず，詳細な年代を比定できないとはいえ重要な意義をもつものと考える。

SB9553 (PLAN 8; PL 6)　6ADC-L区

馬寮域北限に第Ⅳ期に設けられた築地SA6475が廃絶した後，その上に建てられた総柱の東西棟建物。東西4.4m（2間，柱間7尺強），南北5.2m（西側面，3間）～5.5m（東側面，3間）と歪んだ平面形である。柱穴は径20cmほどの円形で，柱間寸法は一定でない。柱穴の埋土から平安時代の土器が出土しており，宮廃絶後の簡素な建物と考えられる。

SA9554 (PLAN 8; PL 6)　6ADC-L区

SB9553の南2.5mにある東西方向にならぶ柱穴列で，8.8m（4間分）を検出した。柱穴は径10～20cmと小さく，柱間も等間隔でない。SB9553に伴う塀であろう。

SK6470 (PLAN 8)　6ADC-G区

G区東南隅にある円形土壙。径2.0m，深さ0.7mである。埋土から11世紀末～12世紀初頭の瓦器（椀・皿等）が出土した。井戸の可能性もあろうが浅く，しかも井戸枠等の部材は発見されていない。

SK6509（PLAN 8）　6ADC⁻M区

＊ M区東北隅にあり，第Ⅳ期の二面廂付東西棟建物SB6430の身舎東南隅柱穴を切って掘られた円形土壙。径1.5m，深さ30cmである。12世紀前半の土師器・瓦器が出土している。

SA6457（PLAN 8）　6ADC-H・M区

H・M区境北端にある東西塀で，3間分6.3m（7尺等間）ある。柱掘形は径0.5mの円形で，東端の柱穴に柱根（径14cm）が残る。

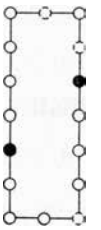
＊ **SA6508**（PLAN 5・6）　6ADC-H・M区

馬寮東限をなすSA5950の廃絶後その北部に重複するように設けられた南北塀で，11間分延べ32.1mあり，全ての柱穴に柱根（径10cmほど）が残る。一辺0.3～0.7mの方形状の掘形を伴うものもあるが一部は未検出であり，柱根の下端は尖っているので，打ち込まれた可能性もある。柱間寸法は2.9～3.1mの範囲でばらつき，北でやや東に振れる（N0°58′E）。

＊ **SK9560**（PLAN 8）　6ADC-M区

M区北端にあり，SB6430の身舎南側柱筋の柱穴（二ヘ）を壊して掘込まれた方形状の土壙。一辺約3.0m，深さ1.0mである。井戸跡の可能性もあるが，性格は不明である。

SB6429（PLAN 8・9）　6ADC-L・M区



L・M区境西寄りにある南北棟建物。東西5.4m（2間，9尺等間），南北16.2m（6

＊ 間，9尺等間）で，一部の柱穴を欠く。柱掘形の大きさは不揃いで，一辺0.5～0.8mの方形状をなす。第Ⅳ期の二面廂付東西棟SB6430と柱穴の切り合いがあり，このSB6429の方が新しい。

SB6464（PLAN 6；PL 10）　6ADC-H区

SA6508の南端付近西側にあり，第Ⅱ期のSB6172北半内に収まる総柱の小型建物。東

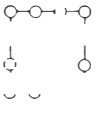
＊ 西3.3m（2間，5.5尺等間），南北3.6m（2間，6尺等間）の規模である。柱掘形も一辺0.5mの方形状と小さい。SB6177および6175を一部の柱穴が重複するものの，新旧関係は明らかでない。

SK6194（PLAN 6）　6ADC-H区

H区中央西端，SB6464の西南方にある不整形土壙。東西3.3m，南北3.1mほどで，深さは

＊ 15cmと浅い。埋土から多数の土器片が出土した。

SB6171（PLAN 10；PL 23）　6ADC-H区



H区西南SB6464の南方にある南北棟建物。東西6.0m（3間，6.5尺等間），南北6.3m（3間，7尺等間）の3間×3間だが，南北が若干長い。南北両妻柱筋の東から1間目の柱穴は未検出であるが，2間目の柱穴は梁行を三ツ割とした位置に立つ

＊ ので，梁行3間の建物である。柱掘形は一辺1.0mの方形状を呈する。SB6172・6173・6175と重複するが，柱穴の切り合いなく新旧関係は判断できない。

SK6413（PLAN 9）　6ADC-M区

M区西寄り中央にある円形状の土壙。径約1.7m，深さ1.3mあり，平安時代の須恵器ほか若

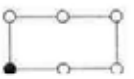
干の遺物が出土した。検出状況からみて年代はさらに新しい。

SB6410 (PLAN 12)　6ADC-O区

O区西北隅の西面大垣沿いにある南北棟建物で，北部は調査範囲外に出る。東西4.8m(2間　8尺等間)，南北3.3m（2間　6尺等間）以上。柱掘形は方形状だが　一辺0.4～0.7mとかなり大小の差がある。 *

SB6187 (PLAN 10)　6ADC-H・M区

SB6171の西北方にある2列の柱穴列。東西8.4m（2間，14尺等間)，南北4.2m（1間，14尺)と柱間が極めて広いため建物とするには疑問が残る。柱掘形は径0.7m前後の円形状で，柱間の割には小さい。SB6171の北妻柱筋とこの建物の南側柱筋が揃うので，両者は同時期と思われる。 *



SB6188 (PLAN 10)　6ADC-M区

SB6187のすぐ西北にある小規模な東西棟建物で，東西5.4m（3間，6尺等間)，南北4.8m（2間，8尺等間）あり，東妻柱は未検出。柱掘形は径0.5～0.8mの円形状。棟方向は東でやや南に振れる。

SA6164 (PLAN 7)　6ADC-K区 *

K区中央北寄りにある南北小塀で，一辺0.4～0.5mの方形状の柱穴が2.1m（7尺）～3.0m(10尺）の間隔で3間分，延べ7.8m並ぶ。柱穴は南北溝SD6161の埋土を掘り込むので，時期は降ることになる。位置からみて，西方にある小規模な建物SB6198・6199と同時期の塀と考えられる。

SB6198 (PLAN 7)　6ADC-K区 *

K区の中央やや西寄りにある南北棟建物で，柱穴の一部は未検出であるが，東西3.3m（2間，5.5尺等間)，南北4.5m（2間，7.5尺等間）の小規模建物となる。柱穴は一辺0.4～0.6mの方形状のものが多い。柱穴の切り合いから第Ⅱ期の南北棟建物SB5951より新しい。

SB6199 (PLAN 7)　6ADC-K区 *

SB6198の北にある南北棟建物である。柱穴は径0.4～0.6mの円形状で一部は未検出だが，東西4.2m（2間，7尺等間)，南北4.8m（2間，8尺等間）の建物になると思われる。

SB6342 (PLAN 13)　6ADC-N・P区

N・P区境南端にあり，東西棟と推定される建物。南半は水路にかかり未発掘であるが，東西9.0m（3間，10尺等間)，南北2.4m（1間，8尺）以上の規模で，恐らく3間×2間程度の建物であろう。柱穴の一部がSA6341の柱穴を切っているので，これより新しいことがわかる。 *

SB5965 (PLAN 7・18)　6ADD-L区

L区北寄りにある南北棟建物で，東西は3.8m（2間，6.5尺等間)，南北5.0m（3間，北2間5.5尺，南1間6.5尺）の平面になる。柱掘形は方形状のものが多いが，一辺0.5～1.0mと大きさにばらつきがある。 *

SB5968 (PLAN 18)　6ADD-L区

SB5965の西方にある建物で，東西3.0m（1間,10尺），南北2.7m（1間,9尺）以上になる。さらに北へ延びるかと思われるが，6ADC-N区で関連する柱穴を検出していないので，最大もう1間分程度ある小規模な南北棟になろう。柱掘形は一辺0.8m前後の方形をなす。

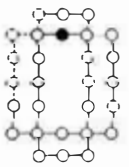
SA5969 (PLAN 18)　6ADD-L区

＊ SB5965の西方にある東西塀である。柱穴の一部は未検出であるが，一辺0.4～0.6mの方形掘形がほぼ2.1m（9尺）等間で東西に並ぶので，延べ7間，全長約19mの東西塀が想定される。位置からみてSB5965・5968と同時期と考えられる。

SB5947 (PLAN 18)　6ADD-L区

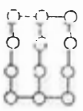
L区中央南寄りにある極めて小型の南北棟建物。東西3.6m（2間，6尺等間），南北
＊ 2.1m（7尺），柱掘形は径0.2～0.3mの円形状である。

SB5953 (PLAN 18; PL 26)　6ADD-L区



L区西南にある南北棟で，北で西に9°35′ほど振れて建つ。東西7.8m（4間，身舎・両廂6.5尺等間，東廂8尺），南北11.3m（6間，身舎6.5尺等間，南廂6.5尺，北廂5尺）で，隅を欠く四面廂が付く。柱穴は径0.2～0.5mと一定でないが，柱筋を正
＊ しく揃える。柱穴の1つには柱根が遺存するし，また柱穴の底には河原石や塼が敷かれている。これらの柱穴の埋土は，周辺に多数分布して瓦器や羽釜片が出土する小穴群のものと類似し，また近くにSE5963・6143・6144といった平安時代末期の井戸が分布するので，これらと一連の住居跡の一つと思われる。

SB5944 (PLAN 18; PL 26)　6ADD-L区



＊ SB5953の南半に重なる南北棟建物。西北部の柱穴は未検出ながら，東側柱との対応から東西4.5m（2間，7.5尺等間），南北6.3m（3間，7尺等間）の規模が想定され，総柱となる可能性もある。柱穴は径0.4m前後と小さい。SB5953同様，平安時代の住居跡と考えられる。

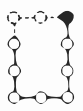
SA5952 (PLAN 18)　6ADD-L・O区

＊ L区西南隅からO区にかけて建つ平安時代の南北塀で，全長約8m，4間分を検出。柱穴は径0.3mほどの円形状で，柱間寸法は1.5～2.4m（5～8尺）とばらつく。

SA5948 (PLAN 18)　6ADD-O区

SA5952の南西にある東西塀。柱穴は径15～30cmと小さい，3間延べ6.7mの小塀である。柱間寸法は2.1～2.4mとばらつくが，そのうち2カ所はSB5947の柱筋に揃い両者が同時期で
＊ あることを窺わせる。

SB5958 (PLAN 18)　6ADD-L・O区



SB5944の西南にある南北棟建物で，北妻柱および西北隅の柱穴は未検出であるが，東西4.2m（2間，7尺等間），南北6.3m（3間，7尺等間）の規模になる。柱穴は径0.4mほどの円形で，東北隅柱穴には径約15cmの柱根が残る。SB5944とは棟方向を同じ
＊ くするので同時期と考えられる。

SB5949・5957・6145 (PLAN 18)　6ADD-L・O・P区

いずれもSB5958の西側に建つ2間×1間の小型建物である。SB5949は東西2.1m（1間，7尺），南北3.9m（2間，6.5尺等間）の南北棟。SB5957は東西3.6m（2間，6尺等間），南北2.1m

(1間，7尺) の東西棟で，これら2棟は互いに重複する。SB6145はやや南に位置し，東西1.5m (1間，5尺)，南北3.0m (2間，5尺等間) の南北棟である。これらの建物の柱穴からは黒色土器・瓦器・羽釜片等が出土しており，平安時代の雑舎と思われる。

SB5974 (PLAN 18)　6ADD-O区

O区北端中央にある小規模建物で，東西4.8m (2間，8尺等間)，南北2.4m (1間，8尺) であるが，さらに北へ延びる可能性がある。柱掘形は径0.6～0.9mの円形状である。 *

SE5963 (PLAN 18)　6ADD-O区

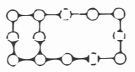
O区中央東寄りにある井戸。掘形は径1.6mの円形で，深さ0.7mほどある。底部は径1.1mで，中央に井戸枠に用いたと思われる長さ50cmの横桟材および曲物が部分的に残存する。出土遺物の量は少ないが，11世紀頃の黒色土器が含まれていた。 *

SA6126 (PLAN 22; PL 25)　6ADD-O区

O区西寄りにある逆L字型の塀。柱穴は一辺 0.6m ほどの方形のものが多く，2.7～3.0m (9～10尺) 間隔で東西2間，南北2間分直角に並ぶ。建物の一部の可能性もある。

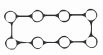
SB6131 (PLAN 19; PL 31)　6ADD-P区 *

P区東半にある東西棟建物である。柱穴の一部は未検出だが，東西8.2m (4間，中央2間6尺，両脇間7尺)，南北3.6m (2間，6尺等間) で，西から1間目の柱通り筋に間仕切柱が立つ平面になる。柱穴は径0.2mほどと小さい。北側に建つSB6133と東側柱筋を揃えるので同時期と考えられる。



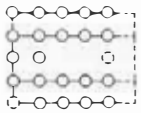
SB6132 (PLAN 20; PL 31)　6ADD-P区 *

SB6131のすぐ南に建つ東西棟建物である。東西6.3m (3間，7尺等間)，南北2.1m (1間，7尺) の規模となる。SB6131とは柱筋をほぼ揃えており，両者は柱間1間分ほどの距離を置いて建つので，同一建物である可能性もないことはない。ただ，SB6132を構成する南北両側柱筋が東で北に振れるのでここでは別棟に扱う。



SB6133 (PLAN 19; PL 31)　6ADD-P区 *

SB6132の北にある南北廂付東西棟建物で，柱間寸法は身舎が東西7.5m (4間，中央2間6尺，脇間6.5尺)，南北7.2m (4間，6尺等間) である。柱掘形は径0.2mほどと小さい。柱穴から11世紀後半頃の土器が出土している。SB6131・6132等と同時期の平安時代の住居跡と認められよう。



SA6134 (PLAN 19・2; PL 31)　6ADD-P区 *

SB6131・6132と重複する南北塀。

SE6123 (PLAN 23; PL 42)　6ADD-P区

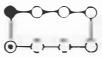
P区西北，南北棟建物SB6120の東側柱筋に掘られた井戸。掘形平面は円形状で，上端の径3.7m。0.3mの深さまで錘状に掘り，さらに径1.5mの円形に掘り込んで遺構検出面からの深さは1mとなる。底部中央に径70cm，成約10cmの曲物を据え置く。埋土から11世紀頃の土師器・須恵器が出土した。 *

SA6079 (PLAN 21; PL 39)　6ADD-N区

SB7060の北方7.5mにある東西塀で，8.4m (4間) を検出した。掘形は径0.3mほどの円形

である。南にある建物群のいづれかの時期に北を区画した塀と考えられる。

SB6070 (PLAN 21 ; PL 39)　6ADD-N区



N区中央やや北寄りにある東西棟建物で，柱穴の一部は未検出であるが，東西6.3m（3間，中央間8尺，脇間6尺），南北2.5m（1間，8尺）の規模になると思われる。

＊ 柱掘形は径0.6～0.7mの円形状である。棟方向は東で南に若干振れる。

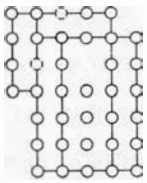
SB6074 (PLAN 21 ; PL 39)　6ADD-N区

SB6070の西隣にある南北棟建物である。東西2.1m（1間，7尺），南北8.4m（4間，7尺）の身舎に南2間の東廂が取付く。廂の出は約2m（6.5尺）である。

SB6075 (PLAN 21 ; PL 39)　6ADD-N区

＊ N区中央北寄りにある南北棟建物で，東西3.0m（2間，5尺等間），南北7.2m（4間，6尺等間）と小規模である。柱穴の一部は未検出である。柱掘形は一辺0.6～0.8mと柱間寸尺に比して大きい。

SB7060 (PLAN 21 ; PL 39)　6ADD-N区



SB7026の北にある建物で，廂が複雑に取付き，その点がSB7026と共通する。径0.4mほどの柱穴が東西2.0m，南北2.1mの間隔で規則的に多数並ぶ。

＊ これらは，東西4.0m（2間，6.5尺等間），南北10.5m（5間，7尺等間）の身舎に東・西・北の三面に廂が付き，西廂の北部に孫廂がつくと考えられる。廂・孫廂の出は各2.0mである。身舎内部には，棟通り筋北から2間目以南に柱穴があるので，南3間は床張りであった可能性が強い。この建物周辺の小穴群から10世紀末以降の土器が数多く出

＊ 土しているので，平安時代中頃の住宅遺構と考えられる。

SB6080 (PLAN 21 ; PL 39)　6ADD-N区

SB7060の北南に接してある南北棟建物である。東西4.8m（2間，8尺等間），南北5.4m（2間，9尺等間）の小規模建物であり，一部の柱穴を検出していない。柱掘形は一辺0.5～0.7mの方形状で，深さ0.2mで一部に柱根が残る。南北中軸線を揃えるの

＊ でSB7061と同時期と推定できる。

SB7061 (PLAN 21 ; PL 39)　6ADD-N区

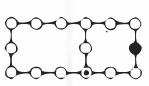
SB6080の南7mほどにある南北棟建物で，東西3.6m（2間，6尺等間），南北4.8m（2間，8尺等間）の小規模建物である。柱掘形は著しく不揃いで，径0.3～0.8mの円形状であり，深さは約15cmと浅い。

＊ **SE7008** (PLAN 21)　6ADD-N区

N区中央東寄りに設けられた井戸。掘形が円形状で二段になる。上段は径1.2m，深さ15cm。下段はやや北寄りに径0.4m，深さ15cmあり，中に径35cm，高さ15cmの曲物を据えるが，井戸枠は残らない。埋土から古墳時代の土師器および奈良時代の須恵器の小片が出土した。これらからでは井戸の年代を特定できないが，近隣に建つ3棟の建物SB6075・7061・6080と同時

＊ 期と考える。

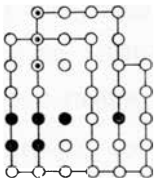
SB7024 (PLAN 21 ; PL 40)　6ADD-N区



N区南端にある東西棟建物である。東西10.0m（5間，6.5尺等間），南北4.0m（2間，6.5尺等間）で，東から2間目の柱通りに間仕切柱が立つ。柱掘形は一辺

0.4～0.7mの方形状だが，東端2間の柱穴はやや長方形状になる。また，桁行柱間寸法は西3間が1.9m前後であるのに対して東2間は2.2m前後と広く，梁行柱間も若干広い。東2間は増築されたものと理解できよう。なお，東妻柱穴に柱根（径約15cm）が残る。

SB7026（PLAN 21；PL 40）　6ADD-N区

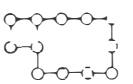


SB7024と重複する位置にある南北棟建物である。東西4.2m（2間，7尺等間），南北10.5m（5間，7尺等間）の身舎に，南を除く3面に廂（廂の出7尺）が付く平面が考えられ，東には孫廂がつく。東廂は北で欠けており，これはSB7027と同時存在していたためであろう。あるいは数棟の建物が連なったものである可能性も否定できず，そのばあいは平面が変ってこよう。柱穴は径0.5m前後の円形状のものが多く，底に礎を敷くばあいがある。柱根は6本残るが，最も遺存状態の良好なもので径20cm，長さ50cmと細い。西南隅柱穴から10世紀末～11世紀初頭の土器が出土しており，年代の一端を示す。 *

SA7056（PLAN 21；PL 39）　6ADD-N区

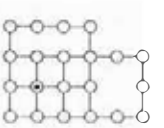
SB7026とSB7060とをつなぐ南北塀で，長さ8.4m（4間）を検出した。SB7026の西側柱筋とSB7060の妻柱中央に取付く。北から2間目は柱間が狭く，他は2.2mと揃う。北から2間目が狭いのは出入口であるかもしれない。 *

SB7027（PLAN 21；PL 40）　6ADD-N区



SB7026の東にある東西棟建物で，柱穴の一部を欠くが，柱穴の並びから東西6.0m（3間，約7尺等間），南北4.4m（2間，8尺等間）の身舎の西北に1間の張り出しのある平面が考えられる。SB7026と同時存在で，計画的に配置されたのであろう。 *

SB7030（PLAN 21；PL 40）　6ADD-N区



SB7026の西南にあり，これと一部重複して建つ建物である。東西10.5m（5間，7尺等間），南北4.8m（2間，8尺等間）の身舎の北面西から3間に廂が付き（廂の出2.4m，8尺），身舎の西3間は総柱になる。柱穴の重複関係からSB7026より古い。 *

SB7024・7026・7030の平面形式を比較すると，SB7024→7030→7026の順に発達しているので，建築年代もこの順とみられる。

SA7021（PLAN 21；PL 40）　6ADD-N区

SB7024の南にある東西塀で，この建物の柱筋と揃うので同時期の存在と考えられる。全長11.2m（6間）あり，柱間寸法は不揃いである。 *

SA7020・7022（PLAN 21；PL 40）　6ADD-N区

6ADD-N区西南端にある東西塀。柱穴はいずれも径20cmほどの小さな円形である。SA7020は全長15.0m（8間）あり，東で南に振れる。SA7022は全長12.9m（7間）であるが，SA7021の西延長上にあり，一連の塀の可能性がある。いずれの塀も北方に建つ平安時代後半期の建物等に関連する区画塀と考えられる。 *

SK7040（PLAN 21；PL 40）　6ADD-N区

N区中央にある東西約3.0m，南北約4.0m，深さ約0.4mの不整形な土壙で，SK7041と重複し，SK7040が新しい。SK7040からは10世紀末葉の土器が出土した。

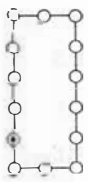
SK7041 (PLAN 21; PL 40)　6ADD-N区

N区中央にあり，SK7040と重複する土壙であり，東西 5.5m，南北7.0m，深さは南端で10cm，北端で25cmである。SK7041の埋土から，奈良末期～平安初期の土器が出土している。

SA6991・6994 (PLAN17; PL 37)　6ADD-N，6ADE-A区

調査区東南隅，馬寮東官衙西辺にある柱穴列である。SA6991は一辺0.6～0.8mの方形状の柱穴が2.4m（8尺）間隔で2間分並んだもの。SA6994は，SA6991の北延長上10.5mの位置にあり，同様の柱穴が2.2m間隔で2間並ぶ。南の間の柱穴に径20cm，長さ40cmの柱根が残る。また両者の間には，柱根の遺存した柱穴が検出されているが，SA6991・6994との関係は明らかでない。どちらの場合もその一部を検出したに過ぎず，建物の一部，たとえば妻柱などにあ
＊ たる可能性もある。

SB6115 (PLAN 25)　6ADD-Q区



SB6106に重複する位置にある南北棟建物で，東西4.8m（2間，8尺等間），南北12m（5間，8尺等間）の規模である。柱掘形は方形状であるが，一辺0.4～0.8mとかなりばらつく。柱穴の切り合いからSB6108より新しい。また，SB6302およびSB6101
＊ とは柱筋を揃えて建つので，同一時期と考えられる。

SB6101 (PLAN 25; PL 34)　6ADD-Q区

SB6115の西8mの位置にある南北棟建物で，東西2.7m（1間，9尺），南北5.4m（2間，9尺等間）の規模である。柱掘形は方形状で，一辺0.4～0.8mとばらつきがある。柱穴の切り合いからSB6104より古い。

＊ **SB6302** (PLAN 25)　6ADD-P区

SB6101の北7mに建つ南北棟建物である。東西3.3m（2間，5.5尺等間），南北7.8m（3間）で，桁行の柱間は北から2.1m（7尺），2.7m（9尺），3.0m（10尺）と一定でない。柱掘形は一辺0.5～0.7mの方形状。南妻柱筋はSB6115の北妻柱筋に揃える。

SB6108 (PLAN 25)　6ADD-P区

SB6115の中央東寄りに重複して建つ小型建物。東西3.0m（1間，10尺）以上，南北3.6m（2間，6尺等間）の規模が考えられる。柱掘形は一辺0.7×0.6mほどで東西に長いものが多い。柱穴の切り合いからSB6115より古い。

SB6106 (PLAN 25)　6ADD-Q区

SB3682の北西にある東西棟建物である。東西4.2m（2間，7尺等間），南北4.1m（2
＊ 間，7尺等間）で規模は小さい。柱穴は径0.4～0.6mの円形状で，柱痕跡がよく残る。北側柱中央柱穴から10世紀末以降と推定される土器が出土している。

SB7114 (PLAN 24)　6ADD-Q区

SB7061の西方にある南北棟建物で，東側柱筋の一部と妻柱は未検出であるが，東西4.2m（1間），南北9.6m（4間）の規模である。西側柱筋の柱間寸法は，南から
＊ 2.1m（7尺），2.4m（8尺），2.1m（7尺），3.0m（10尺）とかなりばらつく。また，柱掘形も一辺0.5～0.9mと不揃いである。

SA7118 (PLAN 25)　6ADD-Q区

SB7100の西にある南北塀で，総長6.3m（3間，7尺等間）を検出した。SB7100の西側柱と

柱筋を揃えているので，両者は関連し合う遺構かもしれず，その場合はSB7100の平面が異なってこよう。

SB3678 (PLAN 25)　6ADD-Q区

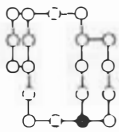
SB7100の西にある小規模な南北棟建物である。東西3.6（1間，12尺），南北4.2m（2間，7尺等間）で，柱穴は径0.6～0.8mの円形状をなす。 *

SB3682 (PLAN 25)　6ADD-Q区

SB3678の北約3m隔ててある南北棟建物である。柱穴の一部は未検出であるが，東西3.0m（2間，5尺等間），南北5.4m（3間，6尺等間）の平面規模となる。

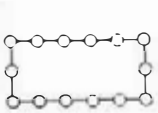
SB7100 (PLAN 25；PL 33)　6ADD-Q区

SB3678の東に建つ東西廂付南北棟建物である。身舎は東西4.2m（1間），南北8.4m（4間，7尺等間）で，東側南3間の隅欠き廂（廂の出2.1m，7尺）および西側北2間分の小廂（廂の出1.2m，4尺）が付く。両妻柱は未検出であるが，他の柱穴も径0.3～0.5mと小さいので，本来妻柱があり，梁行2間であったと考えられる。西廂が南で欠けているのは，SB3678と同時存在していたからと考えられる。 *



SB3671 (PLAN 26；PL 33)　6ADD-Q区 *

西面中門の東北にある東西棟建物である。従来2列の塀と考えてきたが（『平城宮報告Ⅸ』ではSA3671，SA3673），柱穴の形態が類似し，柱筋も揃うので，一棟の建物とみることに変更する。ただし，東妻柱および東西隅柱の柱穴は未検出である。東西6.3m（3間，7尺等間），南北3.6m（2間，8尺等間）の平面とみるが，さらに東方4.2mの位置に柱穴が2個あるので，東西10.5m（5間，7尺等間）の可能性もある。 *



SA3669 (PLAN 26；PL 33)　6ADD-Q区

SB3671の南にある東西塀で，総長12.3m（7間）を検出した。SB3671と接近しているが，SB7024・SA7021の関係に対応するものであり，SA7021とSA3669は東西に柱筋が揃うので同時期と考えられる。

SB6102 (PLAN 25)　6ADD-Q区 *

SB6101に重複する位置にある小型の南北棟建物である。柱穴に大きさのばらつきが目立つ。東西2.7m（1間，9尺），南北4.8m（2間）で，桁行の柱間は等間でない。南妻柱筋はSB6106の東側柱筋と揃うので，両建物は同時存在と推定できる。

SB6104 (PLAN 25)　6DD-P区

SB6101の東北部分に重複する東西棟建物である。東西5.4m（3間，6尺等間），南北2.0m（1間）と小規模で，棟方向は東でかなり南に振れる。柱穴の切り合いから，SB6101より新しい。 *

SE7094 (PLAN 26；PL 42)　6ADD-Q区

Q区南辺SB3671のすぐ東にある井戸である。掘形は一辺6.8mの方形で，深さ1.7mあり，東北寄りに縦板組の井戸枠が残る。井戸枠は内法で方90cm，四隅に丸杭を打ち込み隅柱とし，各面に二段の横桟を渡し，その外側に幅15～20cmの縦板を6枚ずつ置く。板は上端が腐朽していたが下端から約1.5mが残存する。井戸枠の上面周囲には人頭大の河原石や瓦片を配する。埋土は大きく二層に分けられ，主として下部の灰色砂層からは10世紀頃の土器類，上部の黒灰 *

色粘土層からは櫛が出土した。

SK7097 (PLAN 26; PL 39)　6ADD-Q区

SE7094の東北にある長方形の土壙。東西9.6m，南北2.1m，深さ0.3mあり，このあたりの整地層（暗灰色土）の下から検出。埋土から9世紀後半～10世紀初頭頃の土器類が出土した。性
＊ 格は不明。

SE6143 (PLAN 19; PL 32・43)　6ADD-P区

P区北寄り中央にあって，SB6141 廃絶後その北妻柱位置に設けられた井戸。掘形は径約1.7mの円形状で，西南寄りに東西80cm，南北50cmの縦板組の井戸枠が残る。枠板のうち北側のものは一枚板であるが，他は2～3枚を組み合わせている。枠板は暗灰色砂直上に設置され，下端から約50cmが残存するが，この間に横桟等はない。底部中央には少なくとも2段の曲物を据える。上段の曲物は径50cm，高さ15cmあり，その下に径35cm，高さ15cm以上のやや小型の曲物を置く。井戸内埋土から10世紀末頃の土器類が出土した。なお縦板組の井戸枠周囲には，人頭大～拳大の河原石や瓦片が分布するが，井戸廃絶後に投棄されたものと思われる。

SE6144 (PLAN 19; PL 43)　6ADD-P区

＊ SE6143の北4.5mの位置にある井戸。掘形は地山である黄色砂に径1.1mの円筒形に掘られ，深さは0.8m以上ある。中央に縦板7枚を組み合わせた径60cmの円形井戸枠を据える。板は幅15～18cm，厚さ2～3cm，長さ60cm以上ある。井戸枠上端は腐蝕していたが，周縁には平瓦片を立て廻らしており，さらにその周囲に瓦を敷きつめてあった。年代決定をする手懸りになるような遺物は出土していない。

＊ **SE6300** (PLAN 25; PL 42)　6ADD-P区

P区西南にある井戸。掘形は径1.8mの円形で，深さ0.8mあり，底は灰色砂層に達する。掘形の西北寄りに横板組の井戸枠が残存し，その内底部に曲物を据えてある。井戸枠は東西77～79cm，南北74cm，成34cm，厚さ3cmほどの板を突き留めにしただけの簡単なもので，最下段のみが残存する。曲物は枠内やや北寄りにあり，径50cm，成11cm，厚さ3cmほどである。枠
＊ 外は灰色砂（下層）および暗灰色砂質土（上層）で裏込めとする。なお，井戸枠内埋土および裏込めから瓦器片が出土している。

SK6136 (PLAN 25)　6ADD-P区

P区中央部にある方形状の土壙。一辺2.1m，深さ0.4m以上ある。井戸の可能性もある。時期不明。

＊ **SE6135** (PLAN 25; PL 43)　6ADD-Q区

Q区西北にあり，南北棟SB3690の廃絶後，その西側柱筋に設けられた井戸である。掘形は東西1.6m，南北1.9m，深さ5cmほどの浅い方形状の窪みのほぼ中央にあり，一辺1.0mの方形状をなす。井戸枠は縦板組，幅10～50cm，厚さ2～5cmの板材を2～4枚並べ，2段に組んだ横桟で支える構造になり，隅柱はない。底部は未掘のため不明である。井戸内の埋土から瓦
＊ 器椀・羽釜などの遺物が出土した。なお，井戸上面から多数の人頭大河原石が見つかっているが，これらは井戸廃絶後に投棄されたものと思われる。

SE6146 (PLAN 25; PL 43)　6ADD-Q区

SE6135の西北に設けられた井戸。掘形は径2m，深さ10cmほどの不整円形土壙の下から検

出された。一辺1.5mの方形をなし，深さは1.3m以上あって，中央に縦板組の井戸枠を据える。井戸枠は内法一辺1.0mあり，底部から1.2mほど残存する。縦板は幅10～20cm，各辺に5～10枚ほどを適ぎ重ね置き，内側には底および30cm上位に縦支柱で支持した二段の横桟を設ける。井戸底は平たい石を敷きつめ，中央に内径40cm，高さ40cmほどの曲物を据える。井戸枠内埋土からは，土師器・瓦器・白磁片などが出土しており，11世紀後半には廃絶したことがわかる。 *

SK6110 (PLAN 25)　　6ADD-Q区

Q区北西部にある円形状の大土壙。SB3690の間仕切柱を一部壊して掘られたもの。上面は径2.4～3.0mの不整円形だが，2段にわたって掘り込まれ，底部は擂鉢状になる。深さは検出面から約0.8mあって，埋土から奈良時代の土器類が出土した。井戸跡の可能性もある。 *

SE6988 (PLAN 17; PL 42)　　6ADE-A区

A区西北隅にあり，南北塀SA5950の南端柱穴に位置する井戸。掘形は一辺1.7mの方形で深さは北端が深く1.1mあり，南端では95cmと浅い。中央部に縦板組の井戸枠が残る。井戸枠は土圧でかなり歪んでいるが，四隅に木杭を打ち込んで隅柱とし，掘形底から50cmの位置で桟を背合わせに渡して側板を支える。側板は最も良く残る西側で4枚である。側板の上端は腐蝕しているが，下端から平均1mほどが残存していた。 *

小　　結

奈良時代以降の遺構のうちには，出土遺物や柱穴の重複関係から9世紀～11世紀末頃に比定できる遺構があり，また柱筋が揃うもの，建物の振れの同じものを手懸りにして時期分けを考えることができる遺構がある。馬寮地域南辺部の第Ⅴ期以降の遺構群は，こうした考察が可能なので，時期分けと各時期の特徴を抽出してみたい。 *

6ADD-N区，6ADD-Q区に集中する遺構は，

A期　SB7024，SA7021，SB7061，SB6080，SB6075，SB6070，SB3671，SA3669，SB7114
　　SK7041

B期　SB7030，SB6074，SK3682，SA7118 *

C期　SB7026，SB7027，SK7040，SB7060，SB7100，SB3678，SB6102，SB6106

に分かれる。A期に属する建物は，奈良時代の遺構に比べれば柱穴は一回り小さい70～80cmであるが，B期に属する遺構に比べれば一回り大きい。また建物は梁行2間か1間で身舎のみの廂の付かない簡単な建物が多い。建物はB期以降のように振れずに，ほぼ平城方位と合致し，この点もB期以降と性格を異にする。B期は建物密度が薄くなり，平城方位に対してわずかに東や西に振れる。SB7030・6074のように片廂を付けるものが出てくる。C期の建物は平城方位に対して北で東に約12度振れている。またSB7026・7060・7100のように廂の取付き方が複雑で規模の大きい建物がある。これらの一群の中では大型の建物は，それぞれの区画の中心建物として機能していたのであろう。またSB7026やSB7100は近接する同時存在の付属建物のために隅を欠いており，建物群を複雑に，しかし計画的に配置していたことがわかる。 *

G　西面大垣 SA 1600 と西一坊大路 SF 154

馬寮地域においては，第51次調査において西面大垣 SA1600の基壇東縁部と思われる土壇を一部検出している。高さ約30cmで，大半は灰褐色砂質土からなり，上部の約 5 cmが黄色砂質土である。基壇の東端部幅 1 m強を長さ11m余にわたって検出したに過ぎず，したがって築垣本体＊には調査が及んでいないが，玉手門心および佐伯門推定心を参考に多少の振れを考慮すると，大垣心の座標はW111～112の間に想定される。第133次調査で検出した南面西門（若犬養門 SB 10200）から西面大垣心までの計画寸法は820尺であるから，1 尺＝0.295 m とすれば241.9m西方，すなわち W111.0 が大垣心となり（1 尺＝0.296では242.7m西，W111.8），先の想定と違わない結果を得られる。SA1600の基壇東端は W108.3 あたりにあり，これらから復原される基壇＊幅は5.4～7mということになる。

第103-14次調査においては，佐伯門のすぐ北方において西一坊大路とその両側溝を検出している。東側溝 SD152は幅3.8～5.6m，深さ0.5～0.8mの素掘り溝である。粘土と砂が交互に堆積し，大きく 3 層に分れる。上層からは 8 世紀後半の須恵器壺・杯が，中層からは須恵器片のほか軒丸瓦6308型式と 6316型式が各 1 点，平瓦片数点が出土した。西側溝 SD153 は幅1.5～＊2.0m，深さ 0.2mで，埋土は一様な砂質土である。溝中からは 8 世紀後半の須恵器杯が出土した。これらの溝間が西一坊大路 SF154で，路面幅は20.2～20.8m，側溝心心距離は24.0mとなり，80尺（8丈）の大路幅員が想定される。また，大垣推定心から東側溝東肩までは約 11m あるが，これから大垣基底幅の 1/2 すなわち 4.5尺を引いた9.7m（33尺）ほどが塀地の幅となる。なお，条坊計画線は大垣心から西へ80尺，すなわちW135.3のあたりにあったことになり，＊これは西一坊大路の中心ではなく，5 尺西へ寄る。第32次・39次調査で明らかにされている東一坊大路と比較すると，側溝心心距離が 8 丈であること，宮域に近い方の側溝の規模がより大きいこと，大路と宮大垣との間の塀地の幅が約10mであること，以上の諸点では共通する。しかし，東一坊大路西側溝の幅 8 尺に対して西一坊大路東側溝の幅は16尺前後で 2 倍の広さとなり，西一坊大路西側溝の幅も約 6 尺で東一坊大路東側溝幅 4 尺よりも広い。

ところで，西面大垣については以上のほかに第 88-1，88-13 次調査によって，小規模ながらも発掘をおこなっている。どちらも馬寮地域西北方の西面大垣推定線上における個人住宅の建設に伴う事前調査として実施したもので，小面積のため確たる成果を挙げ得なかったが，第88-1次調査においては大垣基壇の一部と思われる遺構を検出しているので併せて報告しておこう。

調査範囲は東西20m，南北 4 mで，近世には墓地であったらしく，3 個の蔵骨器および埋葬＊用土壙と思われるものを発見している。これらの土壙等が奈良時代の遺構を攪乱していたが，調査地の西寄りで，東西幅約 6 mで南北にのびる基壇状遺構を検出した。地山上に約40cm程度の盛土をしたもので，その東西には大量の瓦片が散乱している（軒平瓦6641型式・6727型式各 1 点を含む）ため，大垣基壇と考えた。この基壇を挟んで東西両側に南北方向の溝がある。西側の

1) 『年報1982』p. 9～10。
2) 『昭和52年度平城宮概報』p. 31～33。
3) 平城宮外の遺構に関しては，宮とは別個に，左京側と右京側に分けてそれぞれ独自の遺構番号を付与している。
4) 『昭和49年度平城宮概報』p. 21。

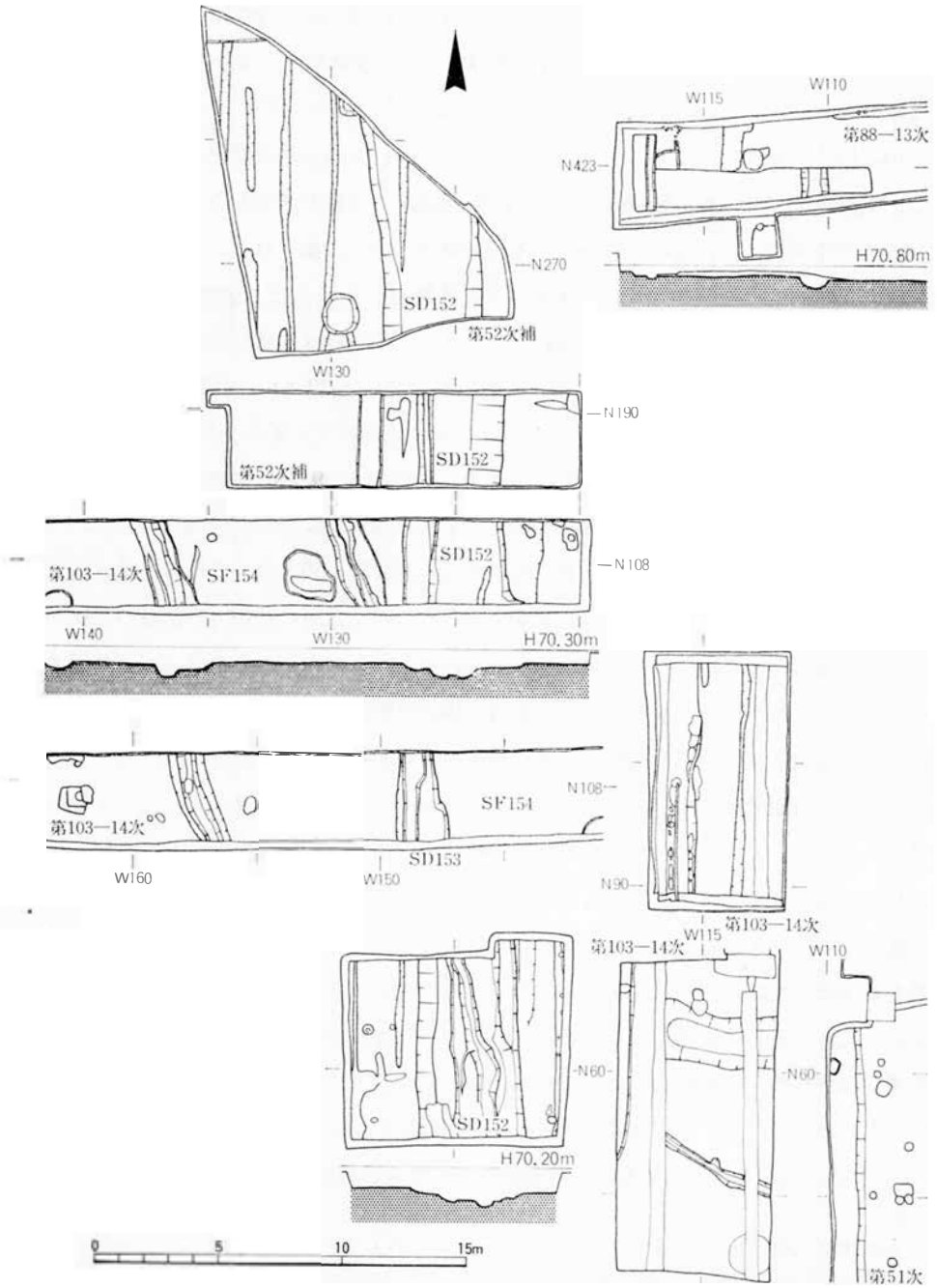


Fig. 20 西一坊大路関係の遺構

ものは基壇の西方1mに，東側の溝は約3m離れて位置する。西のものは雨落溝の可能性がある。基壇盛土を除去して下層の南北溝を検出している。この溝は盛土の東縁下に位置するため，平城宮造営時のものと考えられた。

大垣基壇と考えた盛土の範囲はW110からW116に及び，その幅約6mで先の第51次調査の成果と矛盾しない。しかし，基壇の心はW113付近にあることとなり，2mほど西に偏する。約360mほど北方にあたるため振れを考慮しなければならないが，振れは20′ほどあり大き過ぎる。ただ，大垣本体が基壇の東寄りに構築されたとみれば許容されるところではある。いずれにしても基壇外西方1mにある南北溝を雨落溝とみるのは妥当でない。下層で検出され造営時のものとみた南北溝はW111～112の間にその中心がある。大垣推定心と一致するため地割溝の可能性が強いが，断定はできない。

3　遺構の相対年代

前節まで，何らの説明を加えることなく，平城宮関係の遺構を第Ⅰ期～第Ⅴ期の5期に区分（廃絶後を含めると6期）して各々の記述を進めてきた。ここでは，記述の順序が前後することになるが，遺構相互の前後関係および同時存在についての記載を整理し，遺構の相対年代決定の根拠を提示し，遺構についての事実報告の結びとしたい。

建物等の建つ地面の層位関係については，ほとんどが地山面で検出されており，したがって整地土上面で検出したものは少ないこと，場所によって整地土が異なるため，特に遠く離れた遺構間では比較し得ないことから，ここでは問わないこととし，必要に応じて確実に層位関係から遺構の前後が知れるものについてのみ取り上げる。

まず，遺構相互の切り合いから前後関係の知れるものを抽出，ついで遺構の配置状況（造営方位，棟通り・柱筋の揃い，建物間の距離，柱間寸法）・柱掘形の形態や埋土の類似性等によって同時存在の明らかな遺構をグルーピングする。これらの他にも，切り合いはないが重複し，同時存在ではあり得ないばあいがあり，傍証となる。以下の表示では→は前後を，……は継続を，‖は同時存在の可能性をあらわす。

前後関係　遺構相互の切り合い関係によって前後を決めることができるものを列挙する。

SB6173→SB6454

SB6450　SB6175→SB6460

SB6415

SB6425：SB6195→SB6190

SB6425：SB6385→SB6381

SB6425：SB6420

SB6425：SB6386

SB6172→SB6175→SB6173→SB6464

SB6180→SB6185→SB6386

SB6340

SA6341→SB6345

SB6170：SB5951→SB6168→SB6401

SB6170：SB6165

SB6403→SB6400

SA3686：SK6350→SB6400→SB6401

SA3686：SB6120

SB6400→SK6397

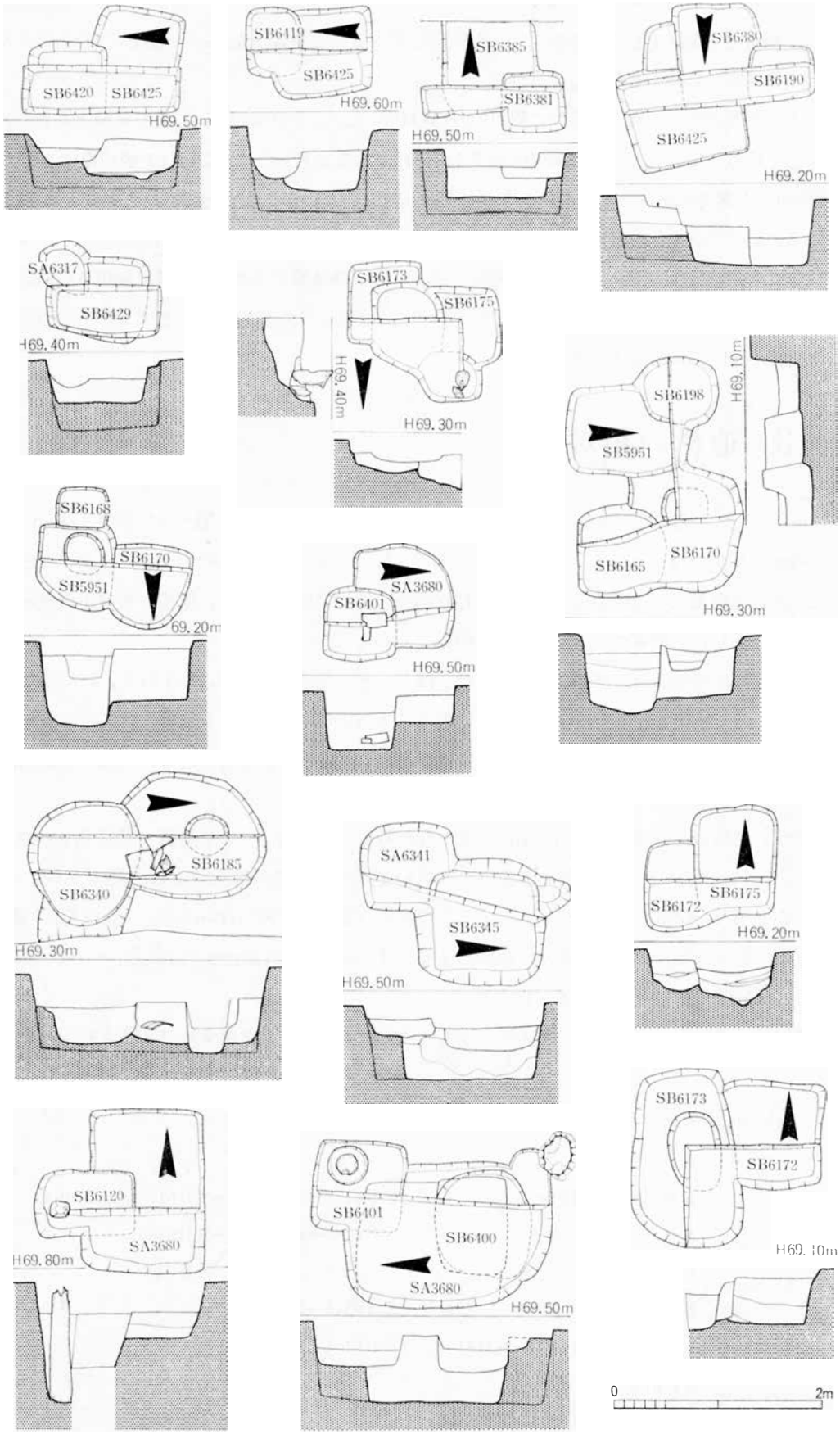
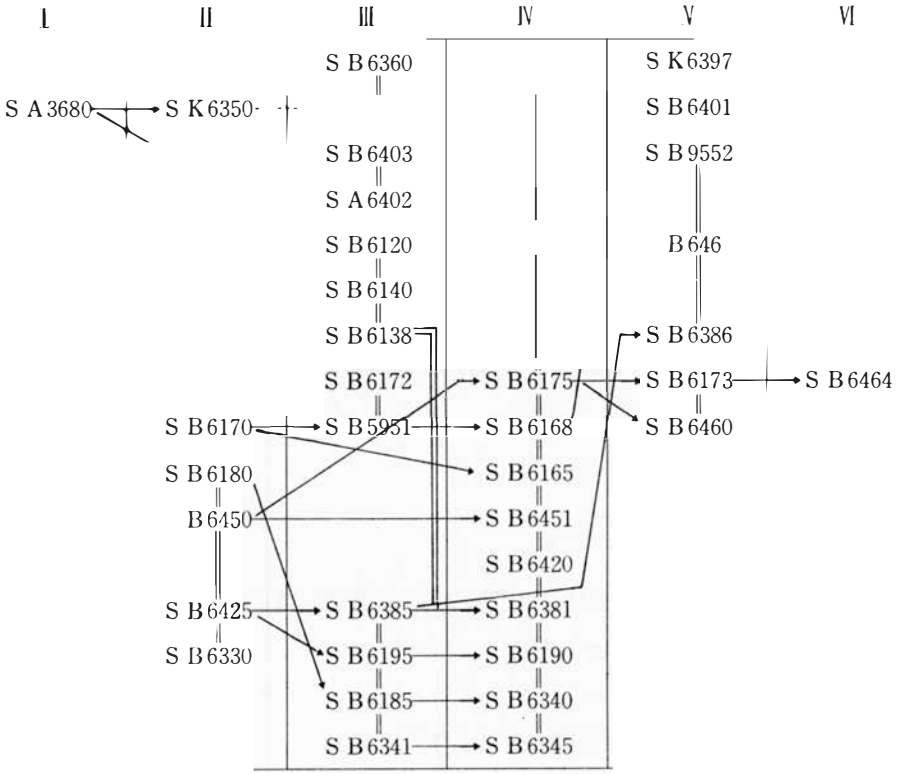


Fig. 21 柱穴の切り合い関係

同時存在　確実に同じ計画によって造営されたと思われる遺構をグルーピングする。

SB5956＝SB6450＝SB6180		SB6385	SB6420＝SB6451	SB6120
	SB6425＝SB6330	SB6195	SB6381	SB6140
SB6460	SB6469	SB6185	SB6190	SA6138
SB6173	SB9552	SA6341	SA6186　SB6340	
SB6401	SB6386		SA6455　SB6345	
	SB5945		SA6456	SB6175
SB3690	SB6130	SB6172	SA6317	SB6430
SB6100	SB6141	SB5951	SA6318	SB6400



Tab. 2　遺構の相互関係一覧

第Ⅳ章　遺　　物

1　木　　簡

木簡は，第50次調査地区（6ADD-M区）から1点，第51次調査地区（6ADD-O区）から4点，第52次調査地区（6ADC-H区）から1点，第63次調査地区（6ADC-G区）から15点，合計21点が出土した。このうち馬寮官衙域内から出土したのは第51次調査（SA5950）の内容不詳な4点のみであり，他はすべて馬寮官衙域外に属する4条の溝（SD5960・6155・6477・6499）から出土した。したがって，木簡には馬寮の性格や機能を示すような内容はみられず，調査地域の大部分を占める官衙を，「馬寮」に比定する手懸りは得られなかった。

以下，遺溝ごとに主要な木簡の出土状況を述べ，釈文を掲げるとともに，記載内容の概要を記すことにする（木簡番号はPL46・47の番号と共通）。

A　SA 5950 出土木簡（第51次調査）

SA5950は，馬寮官衙域の東を画する第Ⅲ期の南北塀である。木簡は南から44番目の柱穴から4点出土した。内容は詳かでないが，文書風の木簡2点がふくまれる。

木簡　　表　記□□□□□□□

　　裏　□[illegible]□□　□　　223×(20)×5mm　6081

表裏は天地逆で異筆。裏面は細身の楷書風の筆で，文書の書止にあたる記載かと思われる。下端は二次的な加工。ヒノキ・板目材。

B　SD 5960 出土木簡（第50次調査）

SD5960は馬寮東官衙域南半部の西辺を画する素掘りの南北溝である。木簡はこの溝の埋土から1点出土した。同溝埋土からは，多数の藤原宮式を主体とした瓦，平城宮土器Ⅱを主体とし同Ⅳまでの土器が出土している。またSD5960を切って掘り込まれた土壙SK6098からは平城宮土器Ⅱ・Ⅲの土器が出土している。したがってSD5960は宮造営当初からさほど隔らない

1）釈文の右の数字は木簡の長さ・幅・厚さおよび木簡の型式番号を示している。法量にパーレンがついているのは木簡が欠損していることを示す。型式番号および釈文の表記方法については『平城宮木簡三』を参照されたい。なお，主な型式番号について簡単に記しておく。011型式：短冊型。019型式：一端が方頭で，他端は折損などによって原形不明のもの。039型式：長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが他端は原形不明のもの。051型式：長方形の材の一端を尖らせたもの。081型式：折損などにより原形不詳のもの。

時期に掘穿され，第Ⅲ期まで存続したと考えられる。

木簡２　　志摩国志摩郡手節里戸主大伴部〔荒カ〕□人□□　□藻根二斗
和□五年四月廿日
(274)×31×6mm　6039

□藻根は海藻根か。その海藻根二斗に付けられた貢進荷札である。年号は朽損のため読みきれないが，郷里制施行（霊亀元年）以前のものであること，年紀に「五年」とあること，さらに元号の第１字目の偏が「禾」であることから，和銅５（712）年と判断できる。手節里は『和名類聚抄』の答志郡答志郷にあたる。志摩国は養老２～３（718～719）年以前には志摩一郡であったと考えられ[1]，本木簡はその時期の一例である。海藻根は賦役令調絹絁条に調の雑物としてみえ（『令義解』），延喜主計上式の志摩国貢進物中でも調の品目として海藻根を掲げており，本木簡が志摩国からの調の貢進物荷札であると思われる。ただし調の貢進月からはずれる４月のものであり，贅的な性格をもった志摩国独特の御調にあたろう[2]。ヒノキ・板目材。

C　SD 6155 出土木簡（第52次調査）

SD6155は，馬寮東官衙域の西辺を画する南北築地 SA6150と，その両雨落溝 SD6151・6152が廃絶したのち，これらの溝を切って掘られた土壙状の短い東西溝である。木簡は SD6155の西端近くの埋土から１点出土した。伴出の土器は平城宮土器Ⅴ～Ⅵで，平安時代初頭に属する。

木簡３　　阿波国阿波郡秋月郷庸米物部小龍一俵　　218×30×5mm　6051

阿波国からの庸米の貢進物荷札である。延喜主計上式の阿波国貢進物中にも庸の品目として米が掲げられている。秋月郷は『和名類聚抄』にも阿波郡秋月郷とみえる。ヒノキ・板目材。

D　SD 6477 出土木簡（第63次調査）

SC6477は，馬寮官衙域の北を画す第Ⅳ期の築地 SA6475の北雨落溝である。この SD6477の黒色粘土層から木簡１点が出土した。平城宮土器Ⅳ～Ⅴの土器類が伴出している。

木簡４　　□十六一又七　七百廿九　八十一　九一　三百廿四□□
(146)×(35)×2mm　6081

数字が列記されているが，何の数を示すか不詳である。ヒノキ・板目材。

E　SD 6499 出土木簡（第63次調査）

SD6499は馬寮東官衙域の北限をなす築地 SA6150の北雨落溝のさらに北に掘られた東西溝

1）『平城宮木簡三　解説』2893号の項参照。
2）東野治之「志摩国の御調と調制の成立」（『日本史研究』192号）1978。

である。切り合い関係から第III期に位置づけられる。このSD6499の東寄りのところから計11点の木簡が出土した。清掃のために派遣する兵士に関する文書木簡がまとまっている点が注目される。これらの木簡は馬寮東官衙と関係するものであろう。

木簡5　（表）〔嶋カ〕□掃進兵士四人依蓮池之格採数欠
（裏）〔状カ〕□注「坂」（異筆）以移「坂坂」（異筆）　天平十年六月九日　197×31×3mm　6011　*

移の文書形式をとっているが，文頭に発信者・受信者の記載がなく，日付の次に署名もないなど，公式令に定める移の書式とは大きく異なる。文章も正規の漢文としては整っておらず，宮内で日常的に使用された簡便な公文書のあり方を示す例といい得る。文意は「蓮池の格（長い枝）を採る数（人数）が欠けたので，嶋を掃く兵士四人を進める」ということであろうか。あるいは「嶋掃」が「嶋掃部所」といった小官司であった可能性もあろう。「嶋」は園池をともなう庭園をさすが，この木簡の「嶋」が宮内のどの位置にあたるかは判らない。ヒノキ・柾目材。　*

木簡6　（表）□進兵士三人依東薗□
（裏）□以移　天平十年閏七月十二□　(145)×29×2mm　6081

上下共に欠損しているが，書き出しは木簡5と同じく「嶋掃」である可能性がある。東薗は平城宮東張出し部東南隅における第99次調査のSD5815（東面大垣東雨落溝）出土木簡にもその名が見え，東張出し部東南隅の庭園をさすと思われる。ヒノキ・板目材。　*

木簡7　（表）嶋掃進兵士四人依人役数欠
（裏）状注以移　天平十一年正月二日　177×14×2mm　6011

木簡8　（表）□□進兵士四人依人□
（裏）□以移□　□　□　(142)×31×3mm　6019　*

木簡9　（表）嶋掃進□
（裏）以移□　(52)×37×3mm　6019

以上5点は内容・記載形式が同じで，形態も長方形の材（6011型式）を基本としており，一連のものといいうる。年紀は天平十・十一年に集中する。諸国から京上する兵士である「衛士」ではなく「兵士」と記していることから，この兵士は左右京の兵士であろうか。宮内でこうした「兵士」が雑使された事実が知られるが，どういう形で兵士が組織されていたかは不詳である。木簡7はヒノキ・柾目材，木簡8・9はヒノキ・板目材。　*

1）岸俊男「"嶋"雑考」（『橿原考古学研究所論集第五』）1979。
2）『続日本紀』にみえる「鳥池塘」「西池宮」にあたると思われる現在の佐紀池と木簡出土地が近接していることも注意される。注1）参照。
3）『平城宮発掘調査出土木簡概報十一』16頁上段。　*

2 瓦 塼 類

9次にわたる発掘調査によって出土した瓦塼類のうち，大部分は丸瓦・平瓦が占める。ついで軒丸瓦・軒平瓦が多く，そのほかに少量の面戸瓦・隅木蓋瓦・鬼瓦などの道具瓦と塼がある。

軒瓦は873点出土し，54型式110種に分類できる。1984年3月現在，平城宮・京内から出土した軒瓦は150型式485種（軒丸瓦80型式263種，軒平瓦70型式222種）あるが，そのうち1/4ほどが出土したことになる。宮内他地域と比較したばあい，総点数のわりに型式・種が多く，特定の型式・種に集中しないことが指摘できる。たとえば，第1次大極殿地域では総点数4591点あるがその内訳は68型式152種であり，また内裏北外郭地域では3399点で56型式120種なのである。

出土量

出土した軒瓦873点を1aあたりに換算すると3.03点になる。馬寮地域の内・外に分けると，馬寮外が1aあたり4.26点であるのに対して馬寮内では2.60点，建物の稠密な馬寮内北半部に限っても2.65点に過ぎない。これを平城宮内の他地域における軒瓦出土量と比較すると，内裏北外郭では17.7点，朱雀門周辺では5.7点，内裏内郭では5.1点，推定宮内省大膳職では5.0点であるから，馬寮地域では極めて少ないことがわかる。瓦葺とみられる一般の寺院遺跡では1aあたり10点を越すことからみて，瓦葺建物は極めて少なかったと考えられる。ただし，丸・平瓦が少なからぬ量出土しているので，本瓦葺建物が全く存在せず棟にだけ瓦を用いた檜皮葺ないし板葺の建物ばかりであった，と断定することはできない。

分布状況

瓦塼類のうち，掘立柱の掘形や抜取穴・溝・井戸など遺構に伴うものはごく僅かで，大部分は調査地域の広範囲にわたる整地土層から出土したものである。馬寮域内の北半部は建物の数が多いが，先述の軒瓦の分布が示すのと同様，瓦塼類総体としてもまばらに分散して出土しており，建物の少ない南半部での分布状況と大差ない。南半部では中央の空閑地および佐伯門の東側から比較的多く出土した。調査地の西辺部は西面大垣に近接するが，ここでも瓦類の出土量は少ない。馬寮域外では，馬寮東官衙の西面を画する築地SA6150に伴う雨落溝SD6151・6152から多量に出土している。

54型式110種の出土軒瓦のうちほとんどのものについては『平城宮報告Ⅰ～Ⅺ』および『基準資料瓦編Ⅰ～Ⅸ』において報告済みであるので記述を簡略化し，新出型式・種については詳しく述べることにしたい。軒瓦個々の記述にあたっては，当研究所がいかにして型式・種別の認定をおこなっているかに意を注ぐこととし，弁数・珠紋数・鋸歯紋数などについては別表2・3にとりまとめ，特別なばあいを除いて本文中からは省いた。また，各種軒瓦の寸法，出土個体数，および相互の出土比率についても別表に示した。なお，本文中に図示した軒瓦拓本は馬寮地域から出土したものとは限らず，宮内各所から出土したもののうち最も残りの良いもので代表させ，縮尺は5分の1に統一してある。

---

1) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』1978，同『平城宮出土軒瓦型式一覧〈補遺篇〉』1983を合わせた数値である。1984年12月現在さらに10数種を追加認定している。

2) 『平城宮報告Ⅸ』p.115。

3) 『平城宮報告Ⅶ』p.60。

A 型式分類

型式番号は4桁の数字とアルファベット1文字の組合わせで表示するが，第1位の数字は時代を示す（6は奈良時代）。第2位以下の数字によって瓦の型式を示す（001～449は軒丸瓦，501～899は軒平瓦）。型式をさらにA以下のアルファベットで細分し種別を表わす（ただし，アルファベットは認定した順序に付しているので，年代順を示すものではない）。以上の分類のうち，軒丸瓦・軒平瓦は時代を問わずその紋様構成によって次の順序に従って配列する。

軒丸瓦	010～039	幾何学紋	370～399	単弁複弁混合紋	420～429	獣面紋
	040～199	単弁蓮華紋	400～409	宝相華紋	430～439	禽獣紋
	200～369	複弁蓮華紋	410～419	横花紋	440～449	その他

幾何学紋軒丸瓦はさらに重圏紋（010～019），輻状紋（020～029），その他（030～039）に細別する。単弁蓮華紋はまず子葉の有無などによって子葉のないもの（040～099，素弁），単に子葉を1個おいたもの（100～119，単子葉弁），子葉をさらに輪郭線によって区画したもの（120～129，重弁），菊花状のもの（130～149），間弁と弁とが重なり合うもの（150～159），凹弁（160～179），忍冬弁（180～199）に分け，さらに外区の紋様によって細別する。複弁蓮華紋のばあいは，単弁とは逆に外区の紋様によってはじめに分類する。素紋縁（200～209），鋸歯紋縁（210～229），珠紋縁（230～259），重圏紋縁（260～269），珠紋＋鋸歯紋縁（270～324），雷紋縁（325～339），平行線縁（340～344），唐草紋縁（345～359），雲紋縁（360～369）である。鋸歯紋縁はさらに面違い鋸歯紋・凸鋸歯紋・線鋸歯紋・複線鋸歯紋に分類でき，また，間弁の形態も分類の重要な要素になる

軒平瓦 501～579 幾何学紋 580～799 唐草紋 800～809 雲紋 810～899 その他

幾何学紋軒平瓦はさらに重弧紋（550～559），変形重弧紋（560～564），剣菱紋（565～569），重圏紋（570～579）に細別する。唐草紋も銀杏紋（580～589），忍冬唐草紋（590～609），忍冬唐草紋くずれ（610～619），葡萄唐草紋（620～629），単位紋（630～639），偏行唐草紋（640～654），偏行唐草の影響を受けた均整唐草紋（655～659），均整唐草紋（660～799）に分ける。偏行および均整唐草紋については，さらに支葉・中心飾等の形状等によって細別する。

B 軒丸瓦 (PL. 48～53, Fig. 22～29)

軒丸瓦は310個体，28型式，55種出土した。これらは，まず瓦当の紋様によって，重圏紋軒丸瓦・単弁蓮華紋軒丸瓦・複弁蓮華紋軒丸瓦に3大別できる。

重圏紋軒丸瓦

1型式1種が出土した。

6018型式は4重圏紋で，A～Cの3種に細分される。Bが出土。圏線を内側から順に第1圏～第4圏と呼ぶと，Bは第1・第2圏の間隔が狭く，第2・3圏および第3・4圏の間隔が広い。圏線の幅は，第1・2圏が細く，第3・4圏が太い。Aは瓦当中央に珠点をもつがCにはなく，Bは瓦当中央に目釘穴があるため珠点の有無は不明である。

Fig. 22 重圏紋軒丸瓦

ii　単弁蓮華紋軒丸瓦

4型式8種が出土した。これらはいずれも外区内縁に珠紋帯をめぐらせるが，外縁の紋様に違いがあり，線鋸歯紋縁のもの，凸鋸歯紋縁のもの，素紋縁のものに3分できる。

線鋸歯紋縁　6130型式は弁が短かめで弁端が丸味を帯び，間弁がこれを囲むようにのびる。
＊ 中房が弁区よりも突出する。A・Bの2種がありBが出土。BはAより小型で，間弁が弁を完全に囲み重弁風になる。蓮子の中央の1顆が大きい。6134型式は6130と似るが中房がへこみ，間弁が弁を囲むようにはのびない点で異なる。A・Bの2種がありAが出土。Aは弁が細く弁端が丸く，間弁がY字状をなす。

凸鋸歯紋縁　6131型式は中房が弁区より一段突出し，瓦当面径が小さい。弁は細長く弁端が
＊ 丸味を帯びる。外区内縁・外縁間には界線がない。A・Bの2種がありAが出土。Aには間弁がありBにはない。

素紋縁　6133型式は間弁がなく弁どおしが接するのが特徴。蓮子数・弁数・珠紋数の差を基準にA～D，Ⅰ～Pの12種に区分でき，A・B・Da・Db・M・Pが出土。Aは弁が短かく弁端が尖り気味。中房と弁区の高さが等しい。BはAに似るが，蓮子数・珠紋数が異なり，弁が
＊ やや細い。A・Bは外区内・外縁の境に界線がめぐる。Dは弁端が丸く，外区の界線がない。Da・Dbの2者があり共に出土。Daは中房と弁区の高さが同じであるのに対し，Dbは中房が突出する。MはA・Bに似て弁端が尖るが，中房が突出し外区の界線がない。PはDに似るが蓮子数が異なる。蓮子に対応する4弁は弁端が尖り弱く反り上るが，他の弁の弁端は丸い。外区内・外縁間の界線がない。

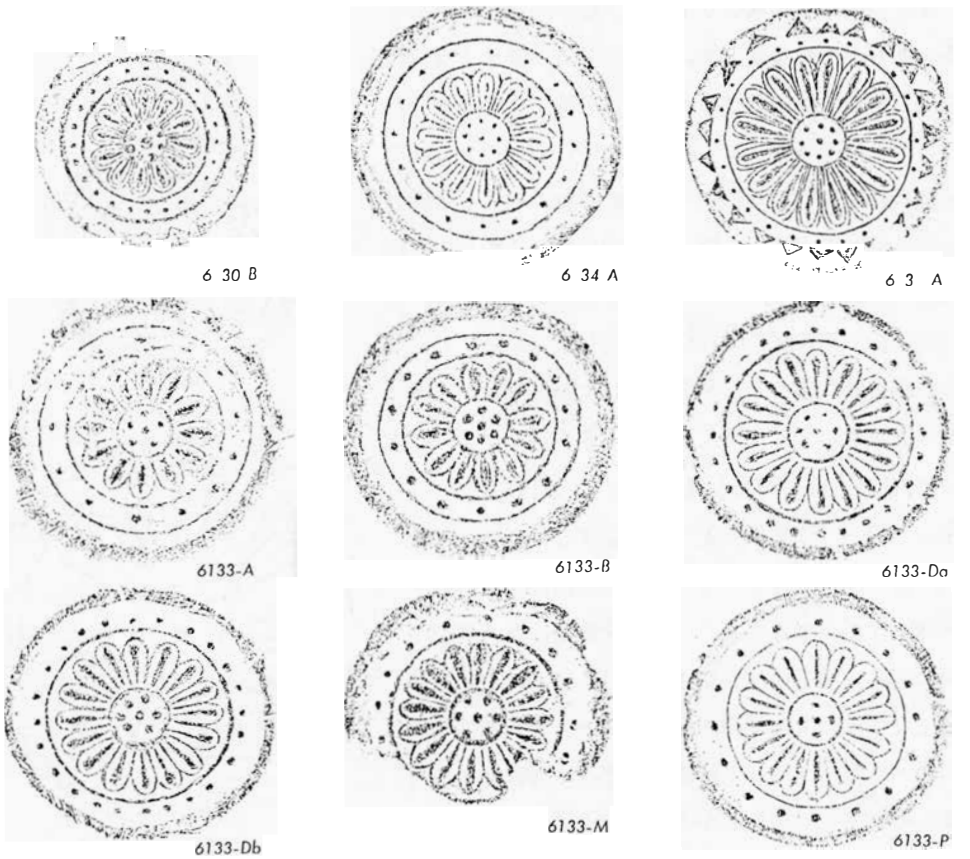


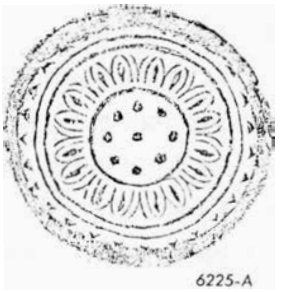
Fig. 23　単弁蓮華紋軒丸瓦

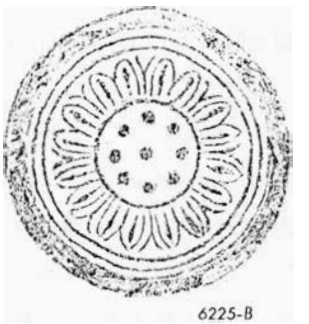
iii　複弁蓮華紋軒丸瓦

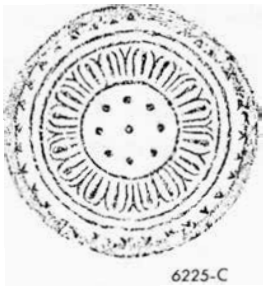
複弁蓮華紋軒丸瓦は23型式46種出土した。これらは外区内・外縁の紋様を基準に，二重圏線＋凸鋸歯紋縁，珠紋縁，珠紋＋素紋縁，珠紋＋凸鋸歯紋縁および珠紋＋線鋸歯紋縁に区分できる。

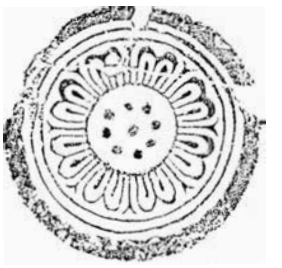
二重圏線＋凸鋸歯紋縁　6225型式はまず第一に中房の径が大きいことを特徴とする。複弁の形状は単弁２つを接合したような形をなし，照りむくりが小さい。中房は外区内縁と同一平面上にある。Ａ～Ｅ，Ｌの６種があり，Ｄを除いた５種が出土した。Ａは弁端が尖る。子葉は短かめで高く突出し，細長い杏仁形を呈する。蓮弁はやや盛り上り，弁端が外方へ垂れ下る。蓮弁中央部にある２つの子葉の輪郭線が合する部分が中央寄りに深く入り込むため，単弁２つを合わせたような複弁の形状の特徴が明瞭である。また，これに対応して，間弁は人字形に大きく枝分れする。蓮子と凸鋸歯紋が大振りで，内・外区の界線が太い。ＢはＡに酷似するがやや大型で，弁・間弁が共に長い。また，蓮子が極めて大きい。Ｃは弁端が丸い。子葉の突出度がＡより小さく，細長い無花果形を呈する。蓮弁がやや盛り上り，弁端が外方へ垂れ下る点はＡと同じであるが，２つの子葉の輪郭線が合する部分がＡほど深くは中房寄りに入り込まないため，蓮弁全体の形状はＡに比してより複弁らしい。これに対応して間弁端部の枝分れが小さい。蓮子と凸鋸歯紋は小振り。Ｌは超大型で，紋様の特徴はＣに似る。Ｅは新種である。従来二重圏線＋素紋縁の6227Ｃと認定していたが，外区外縁に凸鋸歯紋のあることが判明したため変更した。弁は線的に表現し，平板で盛り上りを欠き弁端がやや反り上るので，他種とは若干趣を異にする。子葉は短かめで，蓮子は小振り。間弁細くＹ字状をなす。瓦当は厚手で，瓦当裏面をヘラでえぐりこむ。瓦当側面は横方向にヘラケズリする。丸瓦の瓦当への接合位置は瓦当裏面の中央に近く，多量の接合粘土を用いるため接合線は浅い円弧を描く。丸瓦部凸面は縦方向のナデ，凹面は縦方向のヘラケズリで仕上げる。瓦当面全面に布目痕を残すものがある。同笵品が大和薬師寺にある。

6227Ｃを6225Ｅに変更


6225-A *


6225-B *


6225-C *


6225-E *

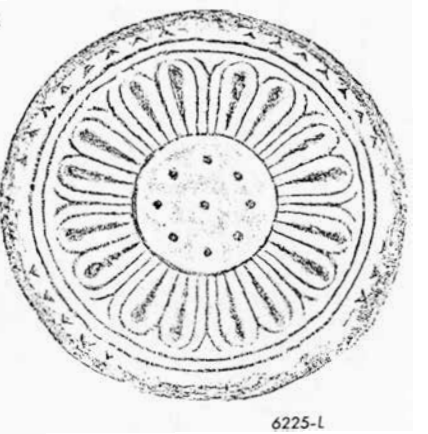
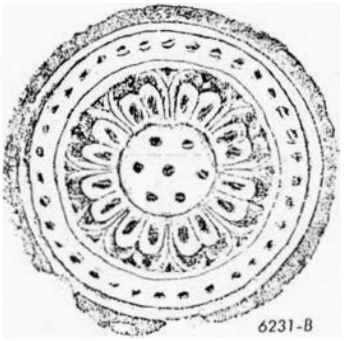
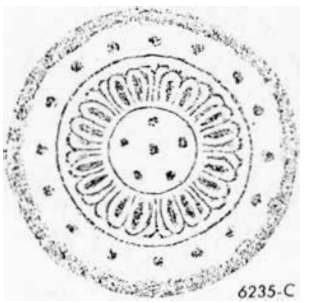

6225-L *

Fig. 24　複弁蓮華紋軒丸瓦(1)

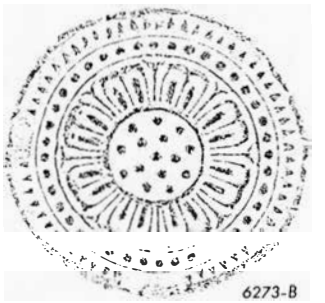
珠紋縁　6231型式はいわゆる大官大寺式の軒丸瓦である。極めて大型，中房が大きく高く突出する。弁の輪廓線が幅広で，弁端が強く反り上る。外区は斜縁で，ここに珠紋が密にめぐる。珠紋帯の内・外に細い界線をめぐらす。外区外縁上面に段をつける。A～Cの3種があり，Bが出土。Bは中房径・弁区径・弁幅・珠紋数が3種の中で最小。


6231-B

珠紋＋素紋縁　6235型式はいわゆる東大寺式軒丸瓦である。中房は大きく弁区より低い。概して弁の照りむくりが強い。間弁はT字状で，枝分れした先端が弁に接する。外区に大振りの珠紋を疎らにめぐらす。A～IIの8種がありCが出土。Cは弁に照りむくりがなく平板で，中房と弁区の高さが等しい。子葉が長く，弁の輪廓線と間弁とを線的に表現する。外区の内・外縁を画す界線はなく，外縁は直立縁。


6235-C

珠紋凸鋸歯紋縁　6273型式は藤原宮式軒丸瓦の一つである。A～Dの4種があり，共に蓮子の配置が1+5+8，弁数が8，外区の珠紋数が40。このうちBが出土した。Bは中房が突出する。弁には照りむくりがなく弁端のみが強く反り上る。珠紋は4種中最も大きいが低い。


6273-B

珠紋＋線鋸歯紋縁　外区に珠紋帯と線鋸歯紋縁を持つ仲間は非常に多い。弁と間弁との関係に注目し，間弁が独立するものをA系統，間弁が界線状に弁をめぐるものをB系統，間弁のないものをC系統としてさらに細別することが可能である。

Fig. 25 複弁蓮華紋軒丸瓦(2)

間弁の分類

イ）間弁A系統

6274型式は藤原宮式軒丸瓦の1種である。中房が突出し，弁が大きい。弁には照りむくりがあり，弁端が強く反り上る。A・Bの2種があり，Abが出土。Aは弁区が盛り上り弁の照りむくりが大きい。外区内・外縁間の圏線が2重。外区外縁上面に凸線をめぐらす。Aはさらに瓦当笵の彫り直しの状況からAa～Acに区別できる。Aaは蓮子の周囲に円圏をめぐらし，外区内・外縁間の界線が2重。Abは笵の磨耗が進行し，蓮子の周囲の円圏が消滅した段階で蓮子を小さく高く彫り直し，外区の界線を2本まとめて1本としたもの。

6275型式も藤原宮式軒丸瓦である。中房が高く突出する。弁は小さく平板で，弁端がわずかに反り上る。外区の珠紋は密だが，線鋸歯紋は粗い。A～E，G～Iの8種がありA・C・Dが出土。Aは蓮子の配置が1+4+12で，これはAのみ。Cの蓮子は1+8+15でこれはCのみ。

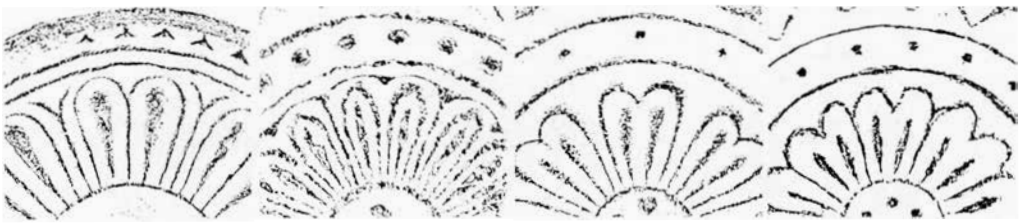

A系統　　B系統　　C系統

Fig. 26　弁と間弁の関係

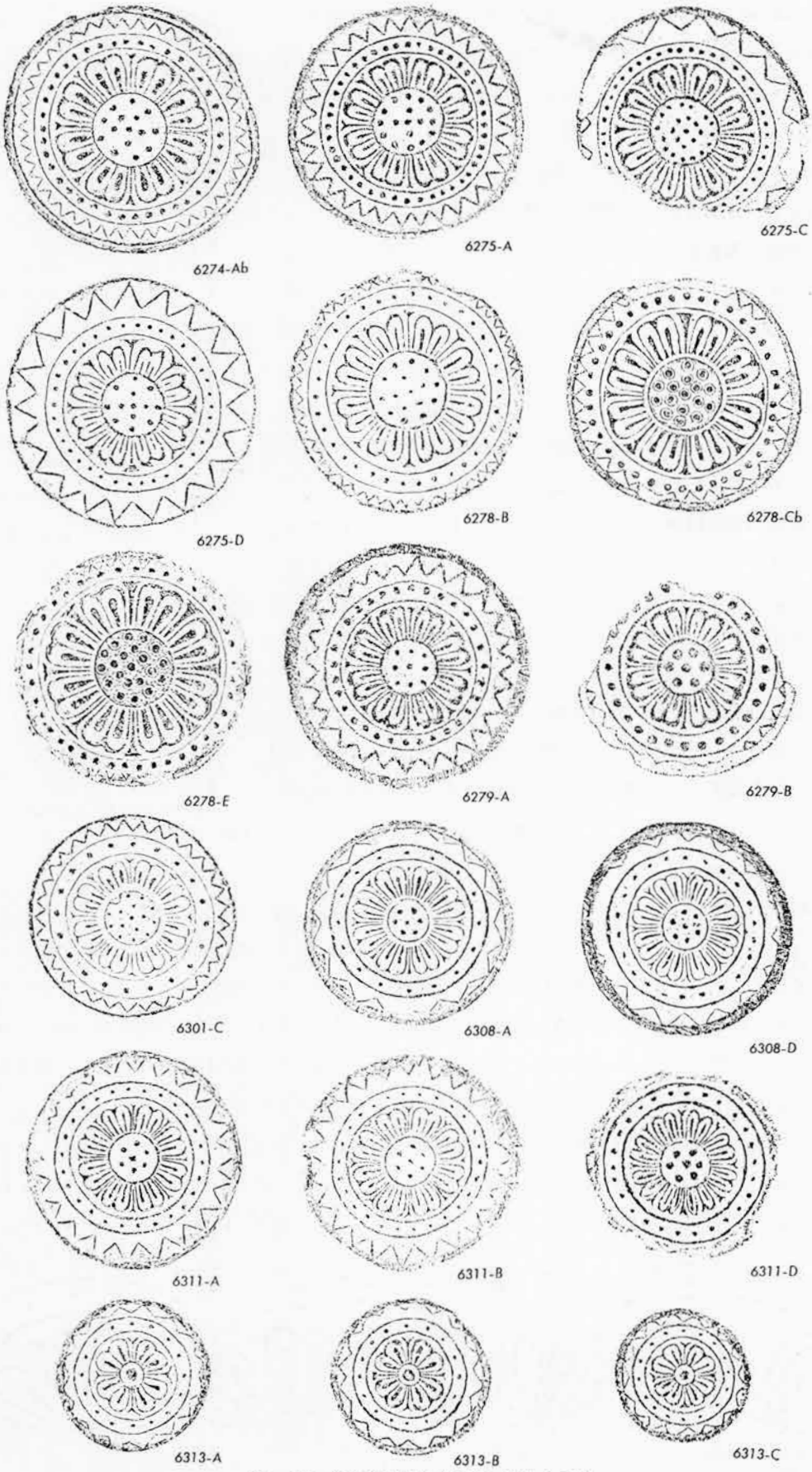


Fig. 27 複弁蓮華紋軒丸瓦(3) 間弁A系統

珠紋が小さい。外区外縁が幅広く，線鋸歯紋が特に粗い。Dは蓮子の配置が1＋4＋8で，中房はあまり突出しない。弁・間弁ともに端部が反り上らず，外側へ向う幅広の緩斜面となる。C同様に外区外縁が幅広く線鋸歯紋が粗いが，Cに比して外区外縁の傾斜がゆるい。

6278型式も藤原宮式である。瓦当面全体が扁平。弁は線的な表現で細長い。間弁の先端が2
＊ 又に分れない。外区外縁の幅が狭く低い。A～Fの6種があり，B・Cb・Eが出土。Bは中房が比較的高い。弁は全く反り上らず，端部が外方へ向う幅狭の傾斜面となる。子葉をかこむ輪廓線の合する部分が2又に大きく分れる。Cは瓦当面全体が凹レンズ状にくぼむ。中房は弁区と同じ高さで，凹線によって弁区と画す。蓮子に円圏をめぐらせる。弁・間弁は太目の凸線で表現し彫りが深い。外区の内・外縁を画す界線がない。Ca・Cbの2者があり，CbはCa
＊ の蓮子・珠紋・弁の一部を彫り直したものである。Eは中房が突出し，蓮子に円圏をめぐらす。弁は長大で弁端・子葉端が反り上る。外区の界線はない。

6279型式も藤原宮式である。中房が小さく，蓮子は中央の1点のまわりに1重にめぐる。これは藤原宮式軒丸瓦では唯一の例であり，その点以外は6275によく似る。A・Bの2種があり共に出土。Aは蓮子を方形に配置する。弁端が反り上るがBほどではない。外区外縁が幅広
＊ く，線鋸歯紋が粗い。Bは蓮子を六角形に配置する。子葉が短く弁端が強く反り上る。蓮子・外区の珠紋が大きい。外区外縁の幅が狭い。

6301型式はいわゆる興福寺式の軒丸瓦である。中房が大きく蓮子を2重にめぐらす点で藤原宮式の6274・6275・6276・6278と同じ。ただし，面径が小さく珠紋・鋸歯紋が粗い点が異なる。弁には照りむくりがある。A～Cの3種がありCが出土。Cは面径が最小で，蓮子数・珠紋数
＊ はAと等しいが，線鋸歯紋が細かい。子葉をかこむ輪郭線と間弁は鋭い稜をもち，弁端はA・Bより強く反り上る。A・Bは外区外縁上面に凹線をめぐらすが，Cにはない。瓦当は薄い。

6308型式は6279の系譜を引き，中房が小さく蓮子を1重にめぐらす。中房は外区内縁と同高ないしやや高い位置にあり，弁区よりわずかに突出する。A～D・F・H・L・Nの9種があり，A・Dが出土。なお旧GはDと同笵と判明したので消去した。Aは弁の根元がしまり末広
＊ がりとなり，弁端わずかに反り上る。8弁のうち3弁については間弁がB系統状を呈し，弁の周囲をとりまく。笵割れ痕のあるものが多く，割れ目に粘土が入りこんでできた突線が中房端を走る。外区外縁上面に凸線がめぐる。DはAによく似るが，中房がやや大きく，より高く突出する。弁は根元がしまるがAより短かい。珠紋数がA・Bより多い。A・Bともに珠紋と鋸歯紋の割り付けが整っているのに対し，Dでは乱れる。

＊ 6311型式は6308によく似るが，中房の高さが外区内縁と同じないしやや低く，くぼみ加減な点で区別できる。A～Dの4種があり，A・B・Dが出土。A・Bは酷似し，ともに中房が深くくぼみ，珠紋・線鋸歯紋が密。両者の差は，弁端がAでは高く反り上りBでは垂れ下る点に認められる。Dは中房がA・Bほどくぼまず，弁幅が狭い。弁端が垂れ下る点はBに似るが，照りむくりは小さい。

＊ 6313型式は複弁4葉，面径11cmほどの小型瓦である。A～Dの4種があり，A～Cは間弁がA系統であるが，DのみB系統に属す。蓮子が1個できわめて大きい点が共通した特徴をなす。A・B・Cが出土した。Aは瓦当径が最大で，内区全体が盛り上る。Bは瓦当径がAに近いが，内区がAに比して平板。Cは瓦当径が最小で，内区はBに似て平板。

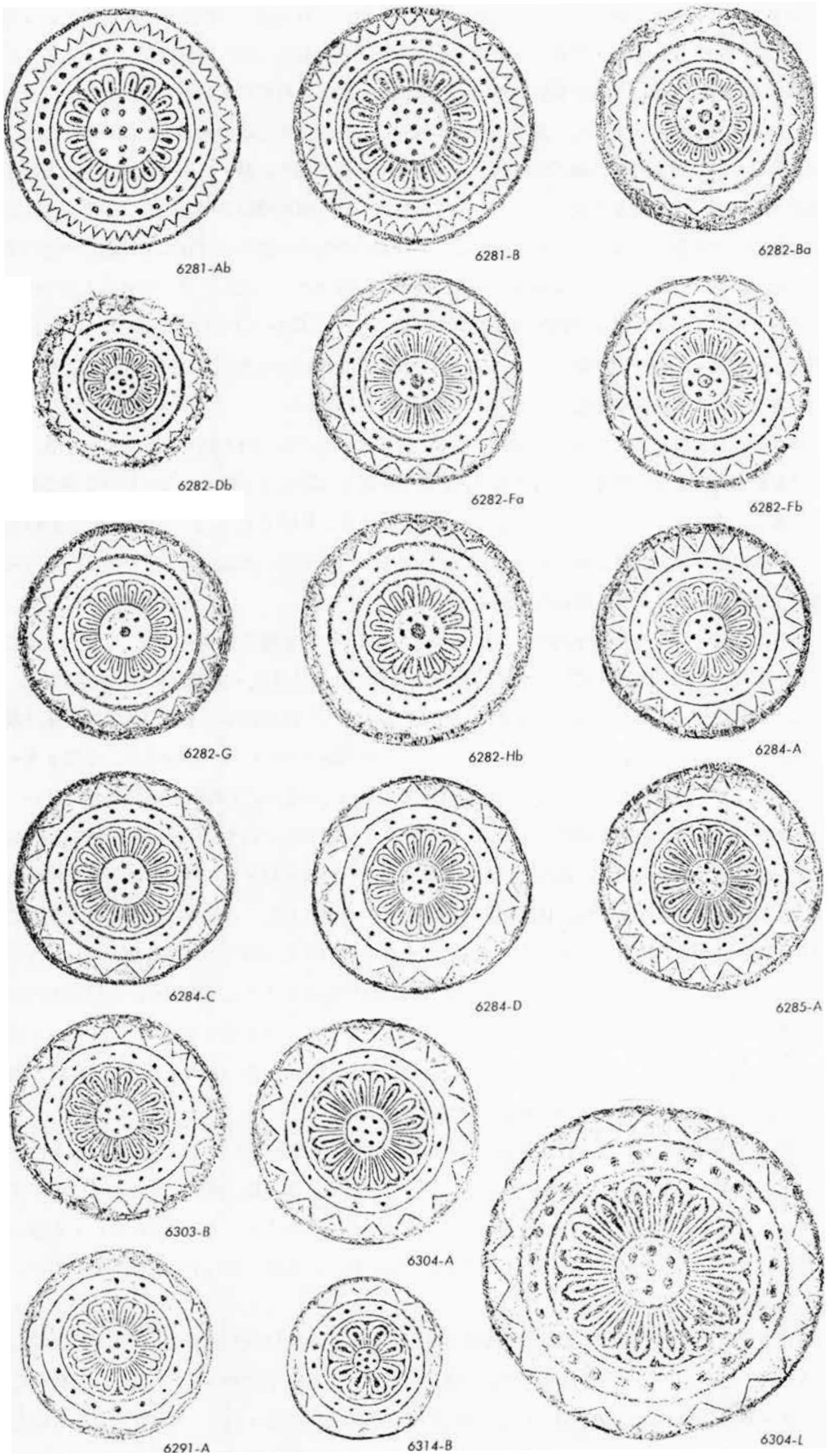


Fig. 28 複弁蓮華紋軒丸瓦(4) 間弁B系統

ロ）間弁B系統

6281型式は藤原宮式の軒丸瓦である。中房が大きく蓮子を2重にめぐらすが，これはB系統中で唯一の例をなす。弁は凸線で表現し，子葉をかこむ輪廓線どおしが離れる。珠紋・鋸歯紋は共に密。A～Cの3種があり，Ab・Bが出土。Aは中房が弁区と等高。弁は短かく，子葉
＊ をとりまく輪廓線をBに比してより線的に表現する。蓮子と珠紋が高く突出する。線鋸歯紋がBより細かい。弁の彫り直しの進行状況からAa・Ab・Acの3段階に区別できる。Bは中房が突出し，弁が長い。蓮子・珠紋はBより低く頭が丸い。

6282型式は6281の系譜を引くが，中房が小さくなり，それに付随するように蓮子は1重である。弁は線的に表現し照りむくりがない。外区の珠紋・線鋸歯紋の数が少なくなる。A・B，
＊ D～Lの9種がある。A・Fを除く7種は瓦当面が凸レンズ状に盛り上り，外区内・外縁間の界線が内区・外区間の界線より太い。また，Aを除く8種は中房の中心の蓮子が大きい。本調査区ではBa・Db・Fa・Fb・G・Hbが出土した。Bは瓦当面の盛り上りが比較的小さく中房が平坦。蓮弁は短かく，子葉を囲む輪廓線どうしが離れる。Ba・Bbがあり，Bbは中房と弁区との境に界線がなくなり，弁を一部彫り直す。Dは小型で，弁の子葉をかこむ輪廓線どう
＊ しが接する。Da・Db・Dcがある。DbはDaの中房の中心蓮子をひとまわり大きくし，弁を一部彫り直す。Fは中房が弁区よりわずかに突出する。弁は長めでわずかに照りむくりがある。子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。Fa・Fbがある。Fbは弁の一部を彫り直し，子葉が細くなる。外区外縁の線鋸歯紋が太くなる。また，笵の磨耗後に弁と中房・弁区間の界線を深く彫り直したため，Faに比して中房が低くなる。Gは瓦当面の盛り上りが大きい。中房は
＊ 弁区より一段低いが，凸レンズ状に中高となる。弁はBとFの中間位の長さで，子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。Hは瓦当面の盛り上りが大きいけれど中房は平坦。弁は長めで，子葉をかこむ輪廓線どうしが離れる。弁をかこむ輪廓線が太く，高く突出する。8弁のうち1弁は紋様が崩れ，子葉がなく，子葉をかこむべき輪廓線の一部が欠ける。Ha・Hbがあり，Hbは弁および間弁を全体的に彫り直す。

＊ 6284型式は6282に似るが，中房が小さく弁が長い。中房中心の蓮子は6282型式のように大きくない。A，C～Fの5種がある。A・D・Fは弁が盛り上り，中房も中高に盛り上る。C・Eは中房・弁が平板で，中房が弁区より一段突出する。A・C・Dの3種が出土。Aは中房が外区内縁より高い位置にある。蓮子相互の間隔が均整でなく，全体に片寄る。弁端が外方へ垂れ下がる。外区の線鋸歯紋が細かい。DはAに酷似するが，中房の高さが外区内縁とほぼ等し
＊ く，凸レンズ状に中高な点で異なる。蓮子は中房の中央に集まる。弁端はAと異なりやや反り上る。Cの特徴は上述の通り。

6285型式は6284よりさらに中房が小さく，弁が長い。中房は外区内縁よりかなり高く，蓮弁が盛り上る。子葉は幅広で，端部が外方に垂れ下がる。蓮子・珠紋ともに小さい。A・Bの2種がありAが出土。Aは弁の盛り上りがBより大きく，中房も凸レンズ状に低く盛り上る。

＊ 6303型式は大阪府船橋遺跡・後期難波宮出土の軒丸瓦と同笵の6303Aを標識とする。6303Aの特徴は，内区全体がきわめて強く盛り上り，中房が弁区より一段高く突出し凸レンズ状に中

1） 大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究』（大阪府文化財調査報告書8） 1958, p. 37。難波宮址顕彰会・研究会『難波宮址の研究6』 1970, p. 108。

高な点にある。ただし，6303Bは6303Aよりむしろ6284A・D・Fに近似する。弁は盛り上るが6303Aほど強くはない。中房は外区内縁上りやや高く6284Aに近い。中房がほぼ平坦な点は6284Cに近い。弁端が反り上る点は6284Dに似る。

6304型式は中房が弁区よりかなり高く突出する点で6284・6285・6303とは大きく異なる。A～E，Lの6種があり，旧FはDと同笵であることが判明したため消去した。中房が外区内縁よりやや高いものが多く，同じ高さのものが少数ある。弁は長めで盛り上るが，弁端が尖り気味な点でも6285と異なる。A・Lが出土。Aは弁が特に長く，子葉をかこむ輪廓線が太い。弁の盛り上りが6304の中では大きく，弁端が垂れる。Lは超大型品。中房は外区内縁とほぼ同じ高さにあり，上面が凸レンズ状に低く盛り上る。弁の盛り上りがかなり大きく，弁端が低く垂れ下る。

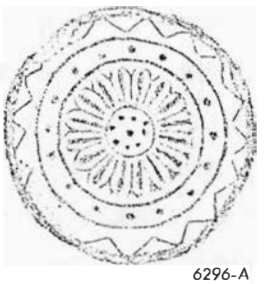
6304Fは6304Dと同笵のため消去

6291型式は，間弁がB系統であるが，弁の形態は間弁A系統の6308・6311型式と類似する。A・Bの2種がありAが出土。Aは中房高が外区内縁よりかなり高く，弁区からも一段高く突出する。外区外縁の断面は蒲鉾形で，その上面に凸線をめぐらす。

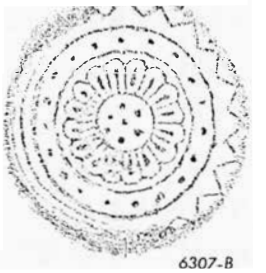
6314型式は複弁4葉の小型瓦。間弁がB系統であるため6313Dに似るが，蓮子が1個ではなく，中心の1顆の周囲に5ないし6個をめぐらす。A～Eの5種がありBが出土。Bは中房が低く突出し，外区内縁よりやや高い。蓮弁は平板。子葉が幅広で，弁端が丸味を帯びる。

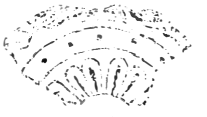
ハ）間弁C系統

6296型式は単弁と区別しにくいが，従来から複弁としてきたものである。子葉が幅広で長く，弁どうしが接する。弁の形状は6133と酷似する。A・Bの2種がありAが出土。Aは中房がくぼむ。弁端が尖り気味で，子葉をかこむ輪廓線が内区・外区間の界線に接する。


6296-A

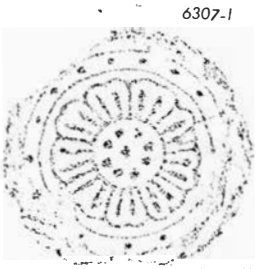
6307型式も間弁がない。A～I，Lの10種がある。複弁の形状には弁中央に凸線のないものと，弁中央に凸線があり，単弁2つを接合したような形のものとの2者がある。また弁と弁との関係においては，すべての弁どうしが離れるもの，すべての弁どうしが接するもの，弁が接する箇所と離れる箇所があるものの3者がある。本調査区からはB・Iが出土。Bは単弁を2つ合わせたような複弁で，弁どうしが接する。中房はくぼみ，外区内縁とほぼ同じ高さ。Iは新種。単弁を2つ合わせた類の複弁で，弁どうしは離れる。中房はくぼみ，外区内縁より若干高い位置にある。丸瓦の瓦当への接合位置はやや低く，多量の接合粘土を用いる。丸瓦部凸面は縦方向にヘラケズリする。


6307-B


6307-I

新種6307I

6316型式は弁の形状に特徴があり，弁の中央に凸線がなく，子葉2本を輪廓線で囲む形をとる。A～Kの11種がありKが出土。Kは新種。中房がくぼみ，外区内縁よりやや高い位置にある。中房径は大きい。弁にはわずかながら照りむくりがある。瓦当はぶ厚く，瓦当裏面は平坦。丸瓦の瓦当への接合位置は低く，多量の接合粘土を用いる。


6316-K

新種6316K

Fig. 29 複弁蓮華紋軒丸瓦(5) 間弁C系統

C 軒 平 瓦 (PL54～58, Fig. 30～43)

軒平瓦は563点，26型式，55種出土した。これらを瓦当の紋様によって大別すると，重圏紋軒平瓦・偏行唐草紋軒平瓦・均整唐草紋軒平瓦に分けられる。

重圏紋軒平瓦

＊ 重圏紋軒平瓦は1型式1種のみ出土した。

6575型式は3重圏紋で，A・Bの2種に細分される。Aが出土。Aは圏線の断面が方形で角張る。圏線間の溝部分の底面は平坦。顎は深い曲線顎。

Fig. 30 重圏紋軒平瓦

11 偏行唐草紋軒平瓦

＊ 偏行唐草紋軒平瓦は4型式15種出土した。これらは唐草の形状を基準に，支葉2個からなる唐草紋と変形忍冬唐草紋とに区分できる。

支葉2個からなる唐草紋 この類はさらに外区紋様を基準にして，上外区珠紋＋下外区線鋸歯紋のもの，上外＊区・下外区とも珠紋のものに2分できる。

イ）上外区珠紋下外区線鋸歯紋

6641型式は唐草が左から右へ展開する右偏行唐草紋である。顎は段顎。A・C・E・F～I・L・N・Oの10種があり，Ab・C・E・F・Oが出土した。Aは茎の＊起点と末端を反転させ，それぞれに1支葉を付す。支葉にはa類・b類がある (Fig. 32)。下外区・脇区の線鋸歯紋が連続する。Aa・Abがあり，Abは脇区・下外区の線鋸歯紋を削り落す。Cは茎の起点が反転せず，遊離した2支葉を置く。茎の末端は反転するが，支葉は付さ＊ない。支葉にはa～c類のすべてが含まれる。下外区・脇区の線鋸歯紋が連続しない。Eは茎の起点が反転し，遊離した1支葉を置く。茎の末端は反転せず，逆方向の支葉を上下各2個配す。支葉はa・b・c類がある。FはEに似るが，茎の末端が反転し1支葉が付く。支葉はa・b・c類。下外区・脇区の線鋸歯紋が連続する。Oは新種。小片のため紋様構成の一部しか判明しないが，支葉がC類で逆方向の小支葉を加える点は＊G・Hに近い。しかし支葉が大振りで巻きが弱く，内区幅が広い点は異なる。

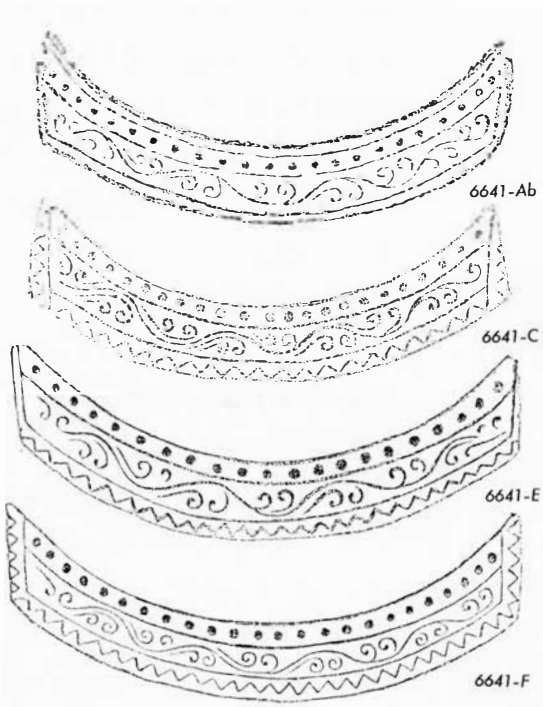


Fig. 31 偏行唐草紋軒平瓦(1)

Fig. 32 偏行唐草紋支葉の分類

ロ）上外区下外区ともに珠紋

6642型式は右偏行唐草紋軒平瓦である。顎は段顎。A～Cの3種がある。3種ともに茎の起点・末端が反転し，支葉はb種に限られるなど，種間の差異は小さい。3種共に出土し，Cは新種。Aは左から4単位目・5単位目の唐草の右側支葉が大振り。6単位目の唐草の左側支葉が小さい。4単位目の唐草の支葉と支葉の中間に上外区の珠紋がくる。Bは上外区の左から7番目と8番目の珠紋との間隔が広い。4単位目・5単位目の唐草の右側支葉が小振りで，5単位目の唐草の左側支葉が大きい。Cは唐草の巻きこみが全体的に強く，唐草の線が太い。4単位目の唐草の支葉，5・6単位目の唐草の左側支葉が大きい。

6643型式は左偏行で，顎は段顎。A～Dの4種があり，共に茎の起点・末端が反転する。Aa・B・Cが出土。Aは唐草が小振りで，支葉はすべてc類。下外区と脇区を画す界線があり，これはAのみの特徴。Aa・Abがあり，Abは唐草各単位の左側支葉が茎に接する。Bは支葉がすべてb類。外区の珠紋数が少なく間隔が不揃い。Cは6643中で支葉が最も大きく，支葉はb類・c類を併用する。

変形忍冬唐草紋　外区紋様は上外区珠紋＋下外区線鋸歯紋のもののみで，上外区・下外区共に珠紋のものはない

6647型式は左偏行の唐草紋である。顎は段顎。A～Gの7種がありA・C・D・Gが出土。Aは渦巻形蕚と蕾の形状が忍冬紋の原型に近いが，花弁は不規則な曲線であらわす。CはFと共に6647中では渦巻形蕚・蕾・花弁すべてが原型をよく残し，忍冬紋の祖型に近い。下外区の線鋸歯紋は上下の界線から離れる。Dは単位紋様がかなり崩れている。右から2単位目・4単位目の唐草の先端が水滴形である点が特徴的。上外区の珠紋・下外区の線鋸歯紋が共に細かい。Gは単位紋様が崩れ，唐草各単位の先端部をひしゃげた扇形につくる点が特徴。瓦当が最も薄く，珠紋・鋸歯紋が最も細かい。

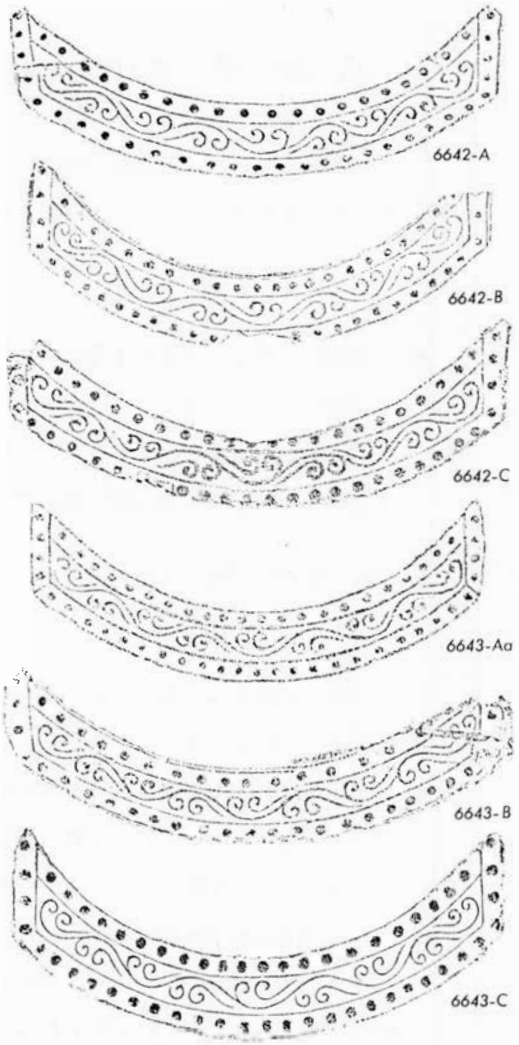


Fig. 33　偏行唐草紋軒平瓦(2)

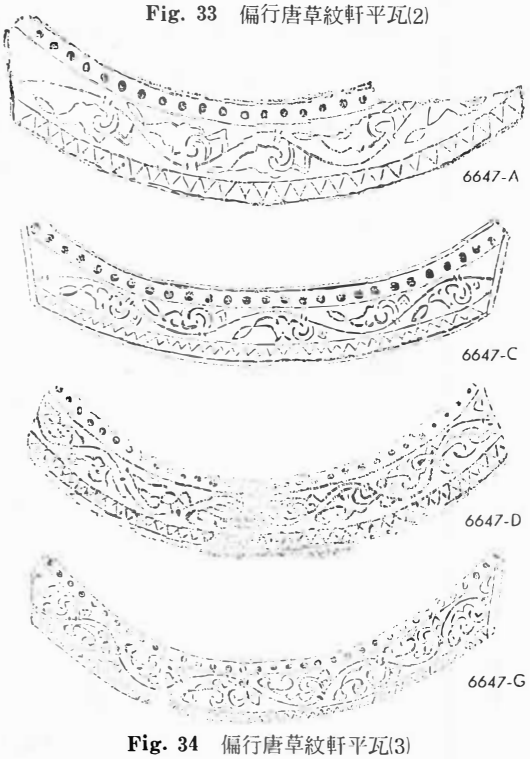


Fig. 34　偏行唐草紋軒平瓦(3)

iii　均整唐草紋軒平瓦

均整唐草紋軒平瓦は21型式39種出土した。これらは中心飾の形状を基準に15の類型に区分できる。

花頭形　花頭形の中心飾を下から上へ巻きこむ唐草で囲んだもの。これらは外区の紋様を基準に，上外区珠紋＋下外区線鋸歯紋のもの，２重圏線のもの，上外区・下外区ともに珠紋のものにさらに細別できる。

イ）上外区珠紋下外区線鋸歯紋

＊　6661型式はいわゆる大官大寺式の軒平瓦である。中心飾は楽譜の四分休符を２つ対称に合したような形である。上外区の珠紋は杏仁形。唐草紋は３回反転。顎は段顎。Ａ～Ｃの３種がありＣが出土。Ｃは上外区の珠紋が細長い。唐草の巻きが弱く，唐草第１単位第１支葉の基＊部が曲折せず滑らかにカーブする。中心飾の花頭形は伸びを欠く。

ロ）外区が２重圏線のもの

6663型式は花頭形の基部を平行線で表現し，基部が内圏線に接する。唐草は３回反転。Ａ～Ｆ，Ｈ・Ｉの８種＊がある。Ｂ・Ｆの一部が段顎で，その他は曲線顎。Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｆが出土。Ａは唐草の主葉・支葉の元が内圏線に接し，そこから流れ出るように派生する。唐草第３単位の主葉・第１支葉の先端が脇区圏線に接する。Ｂは唐草の形状がＡに酷似するが，内区幅がＡより狭いため唐＊草はＡより扁平になる。唐草第３単位の近くに珠紋を置く。本調査区では段顎のものが多く73％を占める。Ｃは唐草の基部が圏線に接しない。唐草第３単位主葉の先端が脇区圏線に接するが，右第３単位第１支葉を欠く。左第２単位第１支葉の巻きこみが通常と逆。Ｆは唐草の基＊部が圏線に接し，唐草はそこから立ち上るように派生する。第３単位主葉・第１支葉の先端が脇圏線に接さずに巻きこむ。今回出土のものはすべて曲線顎。

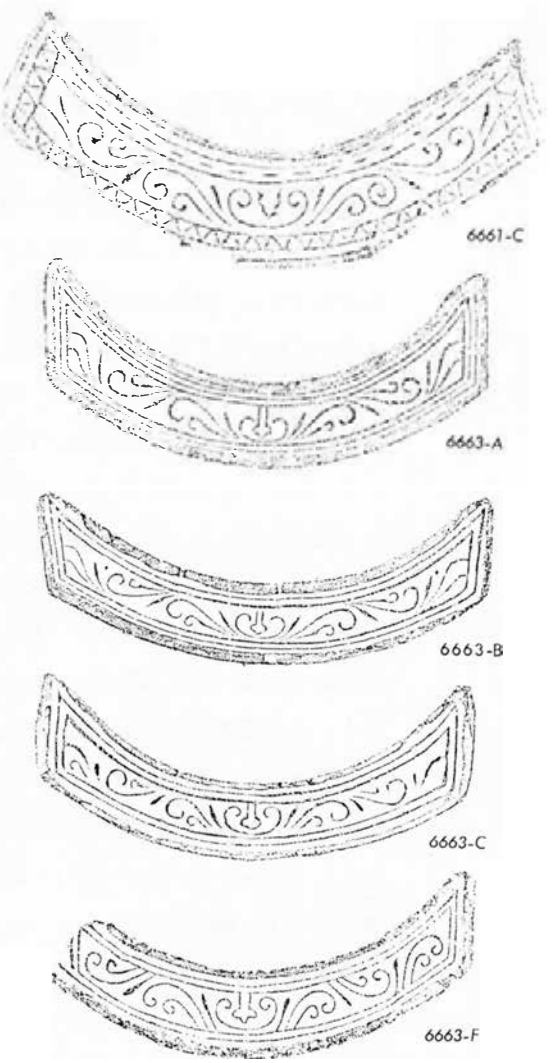


Fig. 35　均整唐草紋軒平瓦(1)

ハ）上外区下外区共に珠紋のもの

6664型式は唐草が３回反転で，唐草の基部が内・外区を画す界線から流れ出るように派生す＊る。唐草第３単位主葉が脇区界線にとりつき，第１支葉は先端を巻きこむ。顎は段顎。Ａ～Ｄ，Ｆ～Ｏの14種があり，Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ga・Ｈ・Ｉが出土。Ｃは中心飾の花頭基部が細く上端が開き，界線には接しない。外区珠紋が大きい。内区幅が狭く，唐草各単位が横長。紋様の彫りは線が浅く細い。外区と脇区の境に凸線を置く。Ｄは中心飾の花頭基部を平行線で表現し，基部上端が界線に接する。唐草主葉の巻きこみが小さい。紋様の彫りは深く線が太い。外区と脇

1)　均整唐草紋の単位分割法と各単位の部分名称は『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』瓦編１解説 p.13 による。唐草紋の各単位は中心部から順に第１単位・第２単位・第３単位のように呼ぶ。唐草の１単位内の部分名称は，中央に流れるものを主葉，他は支葉とし，支葉のうち主葉が巻きこむ側にあるものを第１支葉，反対側のものを第２支葉とする。

区の境の凸線は杏仁形珠紋状を呈する。FはDに酷似するが，中心飾がDに比して多少扁平。また，花頭基部の真上の珠紋が，Dでは花頭基部の中心線に対してやや左に寄るのに対し，Fではやや右に位置する。唐草第3単位主葉と右脇区珠紋の位置関係が明瞭に異なる。珠紋はFの方が密。Gは中心飾の花頭の先端が横に大きく広がる。花頭基部は上方でやや開くが直線的で，界線に接しない。唐草の主葉の巻きこみは小さい。唐草左第1単位が他に比して長い。外区と脇区の境に杏仁形珠紋を置く。Ga・Gbがあり，Gbは唐草を太くする。Hは中心飾の花頭基部が直線的で界線に接しない。花頭の先端は小さい。唐草第1単位主葉の巻きこみが小さく，唐草第2単位主葉の巻き込みが大きい。外区と脇区の境に杏仁珠紋を置く。外区珠紋が密。Iは中心飾の花頭基部が大きく開き，界線に接さない。唐草の巻きこみが6664中最も強く，特に第1単位が強い。外区と脇区の境に杏仁形珠紋を置く。外区珠紋は密にめぐる。

6666型式も3回反転唐草紋であるが，唐草の基部が内・外区間の界線から立ち上るように派生する点で6664と異なる。唐草第3単位主葉が脇区界線にとりつき，第1支葉は巻きこむ。顎は段顎。A種のみがある。中心飾は6664D・Fと同じく，花頭基部を平行線であらわし，界線に接する。唐草各単位は長さが短かく，巻きこみが小さい。外区の珠紋が小さい。

菱形珠点　中心飾が菱形の珠紋で，これを上から下へ巻きこむ唐草によって囲む形のもの。

6671型式は唐草が3回反転で，第3単位が脇区界線にとりつかない。上外区と脇区に杏仁形珠紋，下外区に線鋸歯紋を配する。外区は内区より一段高い。A～Dの4種がありCが出土。Cの唐草は主葉・第1支葉・第2支葉からなり（B・Dと共通），唐草の巻きこみが6671中もっとも強い。内区両端に遊離した小支葉を配す。顎は直線顎に近い曲線顎。

逆十字形　逆十字形の中心飾を下から上へ巻きこむ唐草で囲む形のもの。これには，外区紋様が二重圏線のものと，珠紋のものとがある。

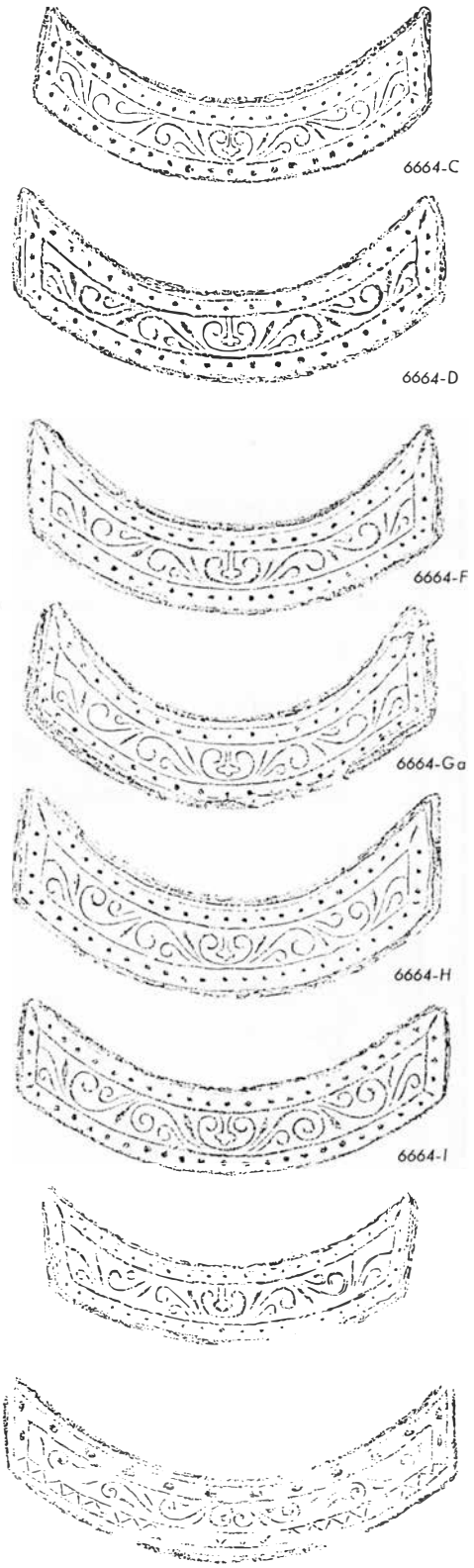


Fig. 36　均整唐草紋軒平瓦(2)

イ）二重圏線

6681型式は唐草が3回反転で，唐草第3単位主葉が脇区界線に接する。A～E，Sの6種が

あり，B・C・E・Sが出土。Bは唐草が界線から流れ出るように派生する。唐草第3単位第1支葉も脇区界線に接する。内区が狭く，唐草第1単位の長さが6681中もっとも長い。顎は曲線顎。Cは中心飾の花頭の先端が，

＊ 花頭をとり囲む唐草と接する。唐草が界線から立ち上るように派生する。唐草第3単位第1支葉も脇区界線に接する。唐草の巻きこみは小さく，左第3単位の主葉と支葉が直線的に平行する。顎は曲線顎。Eは中心飾がA・Bより横長で，唐草が界線から流れ出るように派生する

＊ (A・Bと対

草第3単位が小振り。唐草第3単位第1支葉が脇区界線に接する。顎は曲線顎。Sは超小型品。中心飾の花頭が小さく，基部は界線に接しない。唐草第3単位第1支葉を欠く。顎は直線顎。

＊ **ロ）外区珠紋**

6682型式はA種のみがある。唐草は3回反転，界線から流れ出るように派生する。唐草第3単位主葉が界線に接し第1支葉が巻きこむ。顎には段顎と直線顎の2者があり，本調査区出土のものは直線顎。

＊ 6685型式は6682を小型化したもの。差異は唐草第3単位の主葉のみならず第1支葉も界線に接する点にある。A～Dの4種がありDが出土。Dは中心飾の花頭基部が左に傾く。花頭を囲む唐草の右半が左半より大きく，巻きが強い。上外区の珠紋が粗い。顎は段顎。

＊ **三葉形** 三葉形の中心飾を下から上へ巻きこむ唐草で囲んだもの。

6691型式は唐草が4回反転。唐草第4単位主葉が直線的で，第4単位第1支葉が巻きこむ。外区には珠紋を置く。顎は曲線顎。A・Bの2種がありAが出土。Aは中

＊ 心飾の花頭基部上端が小さく二又に別れ，界線に接しない。内区幅がBより狭く，唐草の巻きこみも小さい。

下方に広がる五葉形 下から上へ巻きこむ唐草で五葉形の中心飾を囲む。

6694はA種のみがある。唐草は3回反転で，第3単位

＊ が脇区界線に接しない。唐草の主葉・支葉がともに界線から立ち上るように派生し，巻き込んだ先端が玉状を呈す。顎は段顎。

中字形 下から上へ巻きこむ唐草で中字形中心飾を囲んだ形のもの。

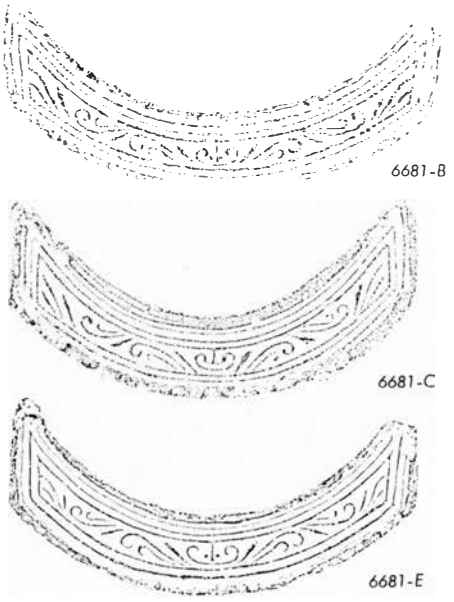


Fig. 37 均整唐草紋軒平瓦(3)

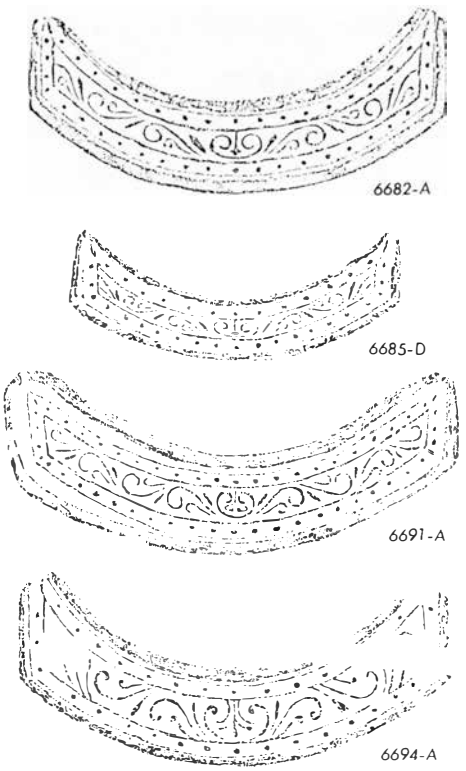


Fig. 38 均整唐草紋軒平瓦(4)

6704型式はA種のみがある。唐草は4回反転で，第4単位が脇区界線に接しない。唐草各単位は主葉・支葉の区別が明確ではなく，左第2単位のみ2葉で，他は3葉からなる。外区に珠紋を置き，顎は曲線顎。

逆V字形　下から上へ巻きこむ唐草で逆V字形を囲む。

6710型式は唐草が3回反転。界線から立ち上るように派生し巻きが弱い。第3単位主葉・第1支葉が脇区界線に接しない。顎は直線顎に近い曲線顎。A・Bの2種がありAが出土。Aは外区に珠紋を置き，上・下外区の珠紋間に各4ヵ所ずつX印を入れる。

逆牛頭形　上から下へ巻きこむ唐草で逆牛頭形を囲む。

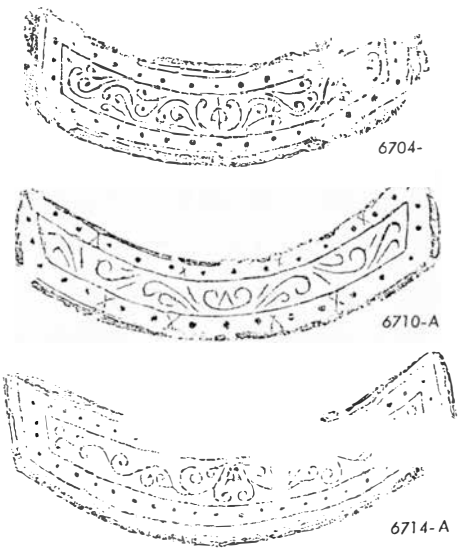


Fig. 39　均整唐草紋軒平瓦(5)

6714型式はA種のみがある。唐草は蔦状で各単位が連続し，5回反転。第5単位は脇区界線に接しない。第2単位に主葉と逆方向に反転する支葉を付す。第5単位にも主葉と逆方向に反転する支葉と遊離した支葉を付す。外区は珠紋帯。顎は曲線顎。

小字形　下から上に巻きこむ唐草で，小字形ないし逆小字形を囲んだもの。これには外区が素紋のものと珠紋のものとがある

イ）外区素紋

6719型式はA種のみがある。唐草は5回反転で巻きが強く，各単位の第2支葉が長い。第5単位が脇区界線に接しない。平瓦の広端面を笵に押しこんで瓦当紋様をつけている。したがって直線顎で，平瓦部凸面には瓦当面近くまで平瓦製作時の縄叩き目が認められる。

Fig. 40　均整唐草紋軒平瓦(6)

ロ）外区珠紋

6721型式は内区紋様が6719に類似する。ただし6719に比して唐草の巻きが弱く，各単位の第2支葉が短かい。A，C～Kの10種があり，C・D・F・Ga・Gb・Hが出土。Cは中心飾の両支葉が上方に開く。この点はJ・Kと共通するが，J・Kでは両支葉の基部が中央葉の基部近くにあるのに対し，Cでは両支葉基部が中央葉の中程の高さにある。脇区は無紋、顎は曲線顎。Dは中心飾の両支葉が太い半月形でやや上方に反り，両支葉が中央葉上半部と同じ高さにある。唐草の線が太く珠紋が大きい。脇区は無紋，顎は曲線顎。Fは中心飾の両支葉がほぼ水平で，両支葉の基部が中央葉の上端より上に出る。中央葉の真上・真下の位置に外区の珠紋がある。脇区は

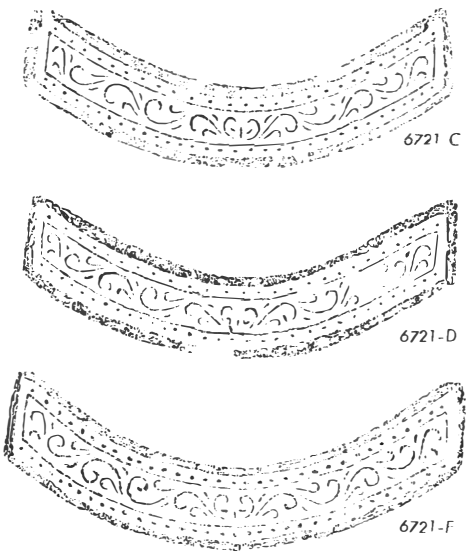


Fig. 41　均整唐草紋軒平瓦(7)

顎は段顎。Gは中心飾の両支様が上向きの半月形でほぼ水平。両支葉の基部は中央葉の上端のやや下にある。中央葉の真上・真下の位置よりもやや左に外区の珠紋がある。唐草右第5単位第2支葉がない。外区珠紋は小さく
＊ 密に配され，珠紋の外側にさらに界線をめぐらす。脇区は無紋。顎は直線顎と曲線顎とがある。GにはGa・Gbがあり，Gbは外区の珠紋の外側の界線を削りとり直ち縁にかえる。Hは中心飾がFに似ており，中心葉の真下の位置に珠紋があるが，真上には珠紋がこない。唐草各
＊ 単位の第1支葉は基部が短かく，脇区に珠紋を3個配する。顎は直線顎。

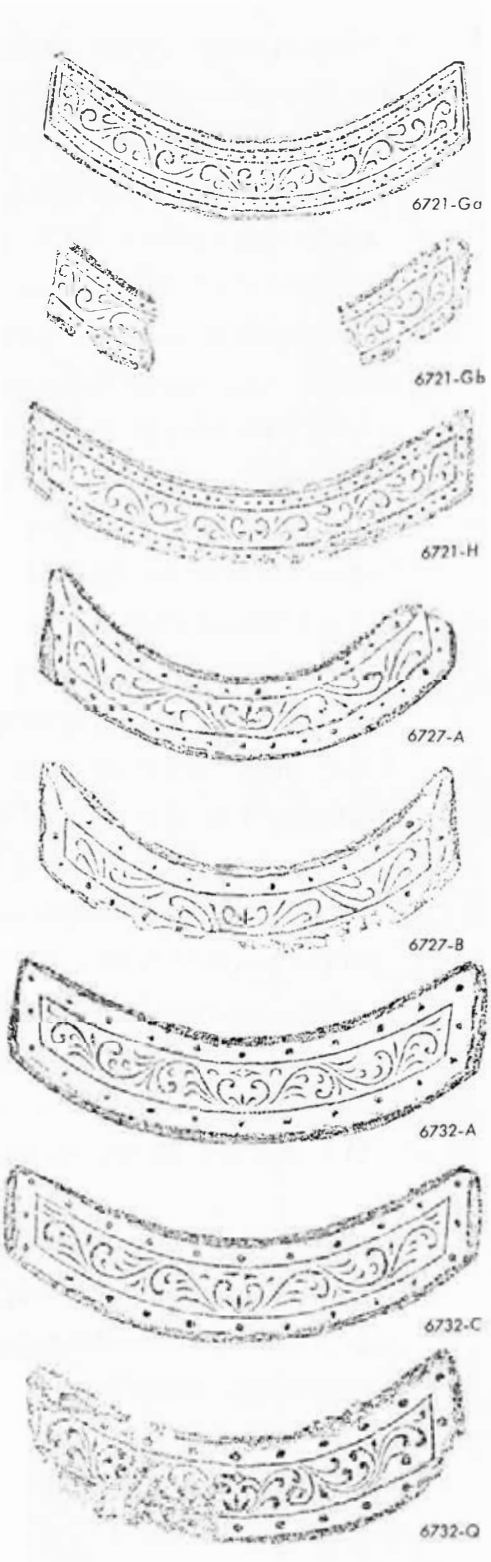
下向き矢印形　下から上へ巻きこむ唐草によって，下向きの矢印形を囲んだもの。

6727型式は外区が珠紋。唐草は3回反転で，界線から
＊ 立ち上るように派生する。唐草第3単位が脇区界線に接しない。顎は段顎。A・Bの2種がありともに出土。Aは中心飾と唐草各単位の主葉が大きい。中心飾の真上に珠紋がある。Bは中心飾と唐草各単位の主葉が小さい。中心飾の真上には珠紋がない。

＊ **対葉花紋**　下から上へ巻き込む唐草で小さなパルメットを囲み，さらにその上に両側から内包するように松葉状の葉を対向させる。いわゆる対葉花紋である。[1]

6732型式は東大寺式軒平瓦である。外区に粗く珠紋をめぐらす。唐草は3回反転で，第3単位は脇区界線にと
＊ りつかない。唐草の支葉数が多い。A，C～F，H～Mの11種があり，A・C・Qが出土。Aは対葉花紋が左右に分離する。唐草各単位は主葉・支葉の別がはっきりしており，第2単位第2支葉が2又に分れる。顎は曲線顎。CはAよりやや小型で珠紋も小さく，唐草の主葉・支葉
＊ の巻きが弱い。また，唐草右第3単位第1支葉の数がCの方が1つ多い。Qは新種。唐草各単位の主葉・支葉の別がはっきりせず，第1単位第2支葉がなく，第2単位第2支葉が2又に分れない。Kとよく似るが，Kより内区幅が狭く，唐草が小振りである。直線顎に近い曲線顎で，平瓦部凸面は縦方向にヘラケズリ
＊ し，平瓦部凹面の瓦当近くは横方向にヘラケズリし，以下は布目が残る。

桐葉形　下から上へ巻きこむ唐草で下向きの桐葉形を囲む形のもの。



新種6732 Q

Fig. 42　均整唐草紋軒平瓦(8)

1)　対葉花紋については川勝政太郎「法華堂本尊の装飾文様」(『法華堂の研究』) 1948，岡本東三「東大寺式軒瓦について—造東大寺司を背景として—」(『古代研究』9)　1976を参照。

6734型式はA種のみがある。外区は圏線を1本めぐらせる。唐草は3回反転で，第3単位が脇区界線にとりつかない。唐草の支葉数が多く，各単位の第1支葉は3個，第2支葉は1個ある。顎は直線顎。

桃実形　対向するC字形で桃実形を囲み，さらにその上に桃実形を置いた中心飾である

6761型式はA種のみがある。外区に粗い珠紋がめぐり唐草は5回反転。唐草第1単位は支葉がなく，第2～第4単位は第1支葉が1個，第2支葉が3個，第5単位は第1支葉が2個，第2支葉がない。顎は曲線顎

上向小字形　中心飾は線的な表現の3葉パルメット。

6763型式は外区に粗い珠紋をめぐらす。唐草は3回反転で，第3単位は脇区界線にとりつかない。顎は曲線顎。A・Bの2種がありAが出土。Bの方が唐草の各単位が崩れておらず，基本形は第1支葉2個，第2支葉3個であるが，Aでは右第2単位第2支葉が2個，左右第2単位第1支葉が1個，左第3単位第1支葉が3個になっている。

花弁形　中心飾が単弁の蓮弁風のもの。

6775型式はA種のみがある。外区に珠紋を粗くめぐらす。唐草は4回反転で，第4単位が脇区界線に接しない。第1単位には第2支葉がなく，第1支葉が1個ある。第2～第4単位には第1支葉がなく第2支葉が1個ある。顎は曲線顎。

Fig. 43　均整唐草紋軒平瓦(9)

D　道具瓦と塼 (PL. 59, Fig. 44)

面戸瓦　25点出土した。いずれも丸瓦製作後に生乾きの段階で加工し面戸瓦に作り替えたものである。形態はいわゆる蟹面戸で，左右下部を切り欠き中央部を舌状につくり出す。完形品はないが復原可能なものが2例あり，長さ29.6cm，幅17.2cmおよび長さ19.8cm，幅12.5cmである。凸面調整は，斜方向のハケメのもの1点を除くとすべてナデで，ナデの方向には縦と横とがある。第2次成形技法の判るものが12点ある。すべて縦位の縄叩き。他はナデないしハケメで第2次成形痕が完全に磨り消されているため不明である。凹面縁部は削って面取りし，その他の部分には布目圧痕を残す。

隅木蓋瓦　1点出土した。11.5cm×9.5cmの断片で，先端隅部にあたる。下面は平坦で，上面の縁辺部に高さ0.3～0.6cmの額縁状の枠をめぐらす。枠の幅は2辺で異なり，5.7cmと7.5cm。枠は内側が高く外へ向って緩く傾斜する。枠の中央部に幅1.5cm，深さ0.5cmの凹線をめぐらす。枠のない部分の厚さは2.9cm。2側面のうちどちらが先端木口面であるかは不明。

類例は大正の保存整備工事，第6次調査（6ＡＡQ区・内裏地区），第70次南調査（6ＡＡＥ区・第2次大極殿東外郭地区），第73次調査（6ＡＡQ区・内裏地区），第97次調査（6ＡＢＦ区・推定第1次朝

堂院地区），第146次調査（6ABK区・推定第1次朝堂院地区南方）において出土している。第6次調査を扱った『平城宮報告Ⅲ』では「異形塼」と報告したが，その後の出土例から隅木蓋と判明した。上記の諸例を参考に復原すると，長さ40cm，幅47cm，刳形の深さ19cm，刳形の2辺のなす角度87°で，かかりは刳形部のみにあり，幅2cm，深さ0.7cmとなる。

鬼瓦　20点出土したが，いずれも破片である。2種あり，そのうちわけは毛利光俊彦分類による平城宮Ⅰ式Aが6点，平城宮Ⅱ式A_1が13点，型式不明が1点である。

平城宮Ⅰ式は鬼の全身をあらわす。鬼は顔を正面に向けて蹲踞し，舌を出す。腹部中央は半球形にあらわす。下顎に巻毛の鬚を配し，体に沿って断面鋸歯状の巻毛をめぐらす。大（A）と小（B）の2種がある。Aは胸・腕の筋肉の盛り上りや関節を写実的にあらわす。体部の巻毛の内側に幅広な傾斜面をつけるのが特徴。外縁は傾斜縁。

平城宮Ⅱ式は鬼の顔面のみをあらわし，しかも顔面のすべてをあらわす。上・下の歯をむき出し，舌を噛んだ態につくる。下顎に放射状の鬚を配し，その外側に2列の巻毛をめぐらす。大（A）・小（B）2種があり，Aはさらに細部の差によってA_1・A_2に分れる。A_1は上瞼が二重で強く曲折し，額の力瘤を一連につくる。周囲の巻毛は巻きが強い。外縁は傾斜縁。

平城宮Ⅰ式A

平城宮Ⅱ式A1

Fig. 44　鬼瓦

塼　59点出土した。そのうち，長さ・幅の双方ないし片方が判明するものが17点ある。法量を基準にA～Dの4類に区分できる。Aは長さ30～31.3cm，幅22.4～23cm，厚さ6.3～6.8cmで7点出土。Bは長さ不明，幅17.6cm，厚さ7.5cmで1点出土。Cは長さ29.5cm，幅15.1～16.5cm，厚さ6.4～7.7cmで7点出土。Dは長さ不明，幅13.2～13.5cm，厚さ7.8～8.3cmで2点出土。4類ともにブロック状の粘土を型枠の中につめこんで形を作り，その後外面をヘラで調整している。

E　丸瓦・平瓦・文字瓦 (Fig. 45)

丸　　瓦

完全なものはほとんどないが，破片から判断するとすべて玉縁丸瓦で，行基丸瓦は一片もない。第1次成形技法を基準に，粘土紐巻きつけ技法を用いるA類，確実な証拠を残すものは少いが粘土板巻きつけ技法を用いたと考えられるB類，小片のためA・Bどちらか不明のC類に

毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦」（『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第38冊）　1980。

大別できる。いずれの類も第2次成形技法および凸面調整手法により以下の4種に細分できる。1) 縦位の縄叩き目が残るような叩きをおこなった後にナデを施すが，第2次成形痕を残すもの。2) ナデで第2次成形痕を完全に消し去ったもの。3) 縦位の縄叩き目が残るような叩きをおこなった後に横方向のカキメを施すが，第2次成形痕を残すもの。4) 横方向のカキメで第2次成形痕を完全に消し去るもの。各類各種ともに内面には布目圧痕をとどめる。側面調整手法は，側面全体にヘラケズリを施し平滑にするものが多いが，C類の2種・4種には分割截面と破面の凹凸をそのまま残すものが少数ある。また，ヘラケズリを施す際に側面の凹面側を面取りするものとしないものとがあり，前者の方がやや多い。

ii 平　　瓦

平瓦は第1次成形技法を基準に，桶巻作りのA類と1枚作りと考えられるB類に大別できるが，B類のばあいには確実な証拠がないものが多い。A類はさらに，粘土板桶巻作りのA_1類，粘土紐桶巻作りのA_2類，どちらか不明のA_3類に細別できる。各類で用いる第2次成形技法を，凸面に残る叩き目の種類を基準に分類すると，A_1・A_3類に平行叩き目，A_3類に格子叩き目，A_1・A_2・A_3・B類に縦位の縄叩き目，B類に横位の縄叩き目がある。いずれの類も内面に布目圧痕をとどめる。凸面調整手法は，A_1類は不調整のもののみで，A_2・A_3・B類には不調整のもの，ナデを施すもの，横方向のカキメを施すものの3者がある。ナデないしカキメを施すばあい，第2次整形痕を全く消し去るものと，そうでないものとがある。側面調整手法では，側面全体にヘラケズリを施し平滑にするものが多いが，A_2類には分割截面と破面の凹凸をそのまま残すものが少数ある。また，ヘラケズリを施す際に側面の凹面側に面取りを施すものと，施さないものとがあり，A_1・B類では面取りを施すもののみである。

文字瓦　丸・平瓦に刻印を押捺したものが14点ある。ヘラ描きはない。文字の種類は「修」が1点，「理」が10点，「伊」が1点，「人」が1点である。

修　「修」は陰刻で，平瓦の凹面に押す。刻印の中心は側縁から4cmの位置にあり，字の向きは側縁に直交する。刻印「修」にはa～gの7種類があり[2]，本例はcで，2.90×2.95cmの大型の印である。第1画が短く屈折し，旁の上部が扁と接し，各字画の幅が広い。

理　「理」は陽刻で，平瓦の凹面に押す。押捺部位の判明するものが6点あり，刻印の中心位置は側縁から3.7～5.9cm，端縁から4.6～7.6cmの範囲内にある。これらのうち広端縁・狭端縁の違いが判るものが2点あり，いずれも狭端縁である。刻印「理」にはa～lの12種類が知られ[3]，そのうちhが5点，iが3点，lが2点出土した。hは1.80×1.85cmで扁の第3・4画が太い。iは2.35×2.25cmの大型の印で，文字が輪郭に対して右傾し，扁が全体に太い。lは1.7×2.3cmの横長の印で，扁と旁が分離し，扁の第1・3・4画が太い。

伊　「伊」も陽刻で，平瓦の端面に押す。広端面か狭端面かは不明である。刻

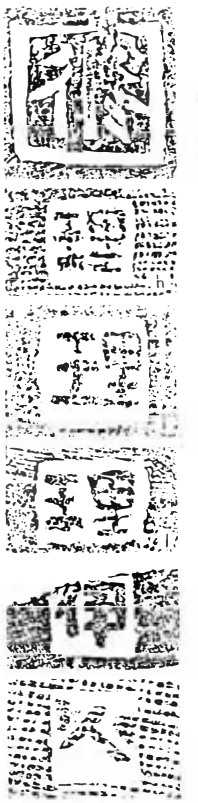


Fig. 45　文字瓦

1) 陽刻・陰刻は瓦面にあらわれた文字の状態でいう。また大きさは瓦面での寸法である

2) 文字瓦の分類は『奈良国立文化財研究所基準資料V』瓦編5による。

印「伊」は1種類しかなく，1.65×1.75cmとやや横長。旁の第4画が太い。

「人」も陽刻で，丸瓦の凸面に押す。刻印の中心位置は狭端縁から8cmにあり，字の向きは側縁に直交する。刻印「人」は1種類しかなく，1.80×1.70cmのやや縦長の印である。第1・2画の下辺が不揃いで，刻印の左右辺・下辺部に盛りあがりがある。 人

＊ これらの刻印を押捺した平瓦はいずれも小片であり，第1次成形技法は明瞭でない。しかし観察し得た範囲では，粘土紐巻きつけの痕跡・粘土板巻きつけ時の合わせ目・布の綴じ合わせ痕跡・模骨痕などを残すものはない。なお刻印「理」を押した平瓦は，宮の西面中門（佐伯門）の東側で6点出土している。この門の修造に「修理」関係の官司がかかわった可能性が考えられることは，すでに『平城宮報告IX』で述べたところである。

＊ F 小　　結

i 軒瓦の編年と組合わせ関係

平城宮出土軒瓦の全般的時期区分および個々の軒瓦の年代観は，『基準資料II』（瓦編2）の解説において提示し，その後『平城宮報告XI』で一部改訂した。今回報告した発掘区の調査成果からは，軒瓦の年代観を改訂したり，年代不明であった軒瓦の年代を決定したりするための
＊ 材料は得られなかった。そこで，ここでは従来の成果に準拠することとし，出土した軒瓦の編年的位置づけをTab. 3に示したが，表作成上の留意点があるので以下に列挙する。 編年的位置づけ

a）6303Bは，すでに述べたように6303Aよりも6284A・D・Fに酷似する。6303Aは聖武朝難波宮所用の軒瓦で，平城宮軒瓦編年第II期に属すが，6284A・Dは第I期であるため，6303Bも第I期とした。

＊ b）『平城宮報告XI』では6304C—6664Kが組合うとした。ところが以前には6304Cは6664D・Fと組合い第II期に属すと考え，6664Kは6664G～J・L～Nとともに第I期に属すとしていたのである。したがって，両者が組合うとすれば，6304Cの年代が溯るか，6664Kの年代が下るかのどちらかでなければならない。今回の調査で出土した6664G・II・Iは内区紋様が6664Kと類似するので6664Kの年代に合わせるべきであろうが，ここでは従来通り第I期
＊ とした。

c）6225A～C・L，6663A～Cの年代を『基準資料II』の解説ではすべて第II期としていた。『平城宮報告XI』では6663A・Bのみ第II期に残して6308に組合うものとし，6225A・C—6663Cを第III期に下げた。6225A・C—6663Cは第2次大極殿院・朝堂院所用の瓦であるが，平城宮第152次調査の結果，第2次大極殿院の閤門・南回廊では6296A—6691Aの組
＊ 合わせを用いていたことが判明した。したがって6296A—6691Aの年代も6225A・C—6663Cと同時期とする。なお，山背恭仁宮・法隆寺東院では平城宮軒瓦編年第II期の段階ですでに6691Aを使用していたが，平城宮での使用は還都後のことであるという見解を『平城宮報告XI』で採用しており，これに従う。

ところで，仮に6296Aを複弁蓮華紋ではなく単弁蓮華紋軒丸瓦とみなせば，単弁12弁蓮華

1）『平城宮報告XI』p. 242～243。

	第Ⅰ期 和銅元年～ 養老5年	第Ⅱ期 養老5年～ 天平17年	第Ⅲ期 天平17年～ 天平勝宝年間	第Ⅳ期 天平宝字元年～ 神護景雲年間	第Ⅴ期 宝亀元年～ 延暦3年	時期不明
軒丸瓦	6231B		6133A・B・Da・Db	6235C		6130B
	6273B	6301C	6134A			6131A
	6274Aa	6308A・B・I	6225A・B・C・L			6133・M・P
	6275A・C・D	6311A・B・D	6282Ba・Db・Fa・Fb G・Hb			6225E
	6278B・Cb・E	6313A・B・C				6307B・I
	6279A・B	6285A	6296A			6316K
	6281Ab・B	6291A				
	6284A・C・D・E・F	6314B				
	6303B					
軒平瓦	6641Ab・C・E・F・L	6575A	6663C	6714A		6663F
	6642A・B・C	6663A・B	6681B・C・E・S	6732Q		6704A
	6643Aa・B・C	6664D・F	6691A	6761A		6727A・B
	6647A・C・D・G	6666A	6694A	6775A		6734A
	6661C	6671C	6710A			6763A
	6664C・Ga・H・I	6682A	6719A			
		6685D	6721C・D・F・Ga・Gb・H			
			6732A・C			

Tab. 3 軒　瓦　編　年　表

紋となる。子葉が細長く，間弁が人字形を呈する点などが6320Aaに類似する。6320Aaは恭仁宮造営時に新調した軒丸瓦（恭仁宮KM01）で，恭仁宮では軒平瓦6691A（KH01）と組合わせて使用した。平城宮では6691Aは6296Aと組み合っている。上原真人は「平城6296Aは瓦当文様においてKM01よりも後出的で，平城6133系の先駆型式と思われる」と指摘しており，注目される。[1] *

d）6681は内区紋様が6682と類似し，外区紋様は6663と同じである。『基準資料Ⅱ』の解説では，内区の紋様構成が第Ⅱ期に属する6682と同じでやや後出的な要素があることから，第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけての頃のものとした。6663が第Ⅱ期から第Ⅲ期のものであるので，6681に第Ⅱ期から第Ⅲ期の幅をもたせて矛盾はないが，6681の内区紋様に6663A・Bよりも退化した形跡が認められることを勘案し，Tab. 3では第Ⅲ期とした。 *

軒丸瓦・軒平瓦の組合わせ

平城宮内における軒丸瓦・軒平瓦の組合わせ関係は，原則的には一定地域内における出土頻度の高いものを選んで判断している。本調査地域のばあい，軒丸瓦と軒平瓦の出土点数に大きな開きがあるため，各型式の出土点数の多寡が，かつて屋根に葺かれていた実態をそのまま示さない可能性がある。したがって，各型式の出土比率を比較してみても無意味であるかもしれないが，一応試みてみた。その結果がFig. 46である。馬寮地区の内・外それぞれの区域における出土比率をみると，馬寮内では平城宮軒瓦編年第Ⅲ期に属する6282 (11.6%)—6721 (13.4%)，6225 (9.1%)—6663C (8%) の2組が成立し，前者は推定大膳職地区，後者は第2次大極殿・朝堂院地区での組合わせと一致する。第Ⅱ期の軒平瓦では6664D・F，6663A・Bが比較的多く，それぞれ6311・6308と組合う可能性があるが，出土点数が少ないため断定できない。第Ⅳ期の軒丸瓦6133・6134は推定大膳職地区・第1次大極殿地区第Ⅱ期で6732と組合うことが判明しているが，馬寮内では6732はほとんど出土せず，組合わせは不明である。 *

馬寮外については，興福寺式系統の6301Cと6671Cが，出土比率には差があるものの，紋様系統が一致する点からみて組合うものと考えられる。第Ⅲ期では，6225—6663C，6282—6721

1) 京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告　瓦編』1984。

の２組の他に6719Aが多い。6719Aは従来から組合う軒丸瓦が不明である。6719Aの大半が馬寮東官衙南半部の西限をなす南北溝SD5960から出土しているが，SD5960から出土した軒丸瓦の中にも特に候補となるものはない。馬寮東官衙の本格的な調査に期したい。

ii　遺構の時期決定に役立つ資料

＊　軒瓦のうち遺溝に伴うものはごく僅かで，大部分は整地層から出土している。後者は二次的に移動していることが予想される。軒瓦の時期区分に基いて，軒瓦の時期別の分布状況を調べ，その変化のあり方と遺構配置の時期的変化との間に何らかの対応関係が認められるか否か検討した結果，両者は対応しないことが判明した。したがって，軒瓦の分布を手懸りにして個々の建物について瓦葺か否かを決定することや，特定の建物に用いられた瓦の型式を決定する＊こと，ひいては建物の時期を決定することは困難である。

ところで，掘立柱建物の柱掘形や柱抜取痕跡から出土した軒瓦が少数ながら存在する（Tab. 4）。もちろん，ある柱掘形ないし柱抜取痕跡から出土した軒瓦のうち，最新のものがその穴を掘削した年代の上限の一点を示すに過ぎないのであって，軒瓦の年代から建物の建立年代が

遺構出土の軒瓦

遺構番号	出土軒瓦・時期		備　考	遺構時期区分
SB5956	6641C	I		II
	6719A	III	柱抜取痕跡内	
SB6180	6664D	II		
SA6315	6664F	II		
SB6425	6664C	I		
SB6450	6225	III	柱掘形内	
SA5950	6663A	II	柱掘形内	III
	6671C	II		
SD5960	6274Aa	I		
	6278C	I		
	6279B	I		
	6641C	I		
	6664F	II		
	6282F	III		
	6719A	III		
	6316K	?		
SD6152	6225A	III		
SB6185	6664D	II		
	6721	III		
SK6350	6663B	II		
	6664D	II		
	F	II		
	6282Fa	III		
	6691A	III		
	6704A	?		
SB6360	6664G	I		
	6311A	II		
	6721C	III		
SD6477	6231	I		
	6641C	I		
	6664F	II		
	6307B	?		

遺構番号	出土軒瓦・時期		備　考	遺構時期区分
SB6385	6663A	II		III
	B	II		
	6282G	III		
	6710A	III		
	6721C	III		
	D	III		
	F	III		
	G	III		
SE6166	6721C	III		III～IV
SB3690	6273B	I		IV
	6284C	I		
	6663C	III	柱掘形内	
SB6100	6303B	I	柱掘形内	
	6641C	I		
SB6173	6291A	II	柱抜取痕跡内	
	6225A	III		
SB6177	6663B	II		
SB6430	6664F	II	柱掘形内	
SD5961	6131A	?		V
SB6386	6721C	III	柱掘形内	
SB6101	6304A	II	柱掘形内	宮廃絶後
SE6143	6761A	IV	井戸埋土内	
SE6300	6664I	I		
SK7040	6225B	III		
	6663C	III		
SK7041	6281B	I		
	6641C	I		
	6225A	III		
	6663C	III		
SE7094	6643Aa	I		
	6671C	II		
SK7097	6714A	IV		

Tab. 4　遺構から出土した軒瓦一覧表

判明するわけではない。しかし，Tab. 4 にまとめた結果と後述の遺構の変遷とは矛盾しない。すなわち，ある建物の年代がその建物の柱掘形から出土した軒瓦の年代を遡らないという原則は保たれている。なお，遺構時期区分第II期（奈良時代初期）の SB5956 から軒瓦編年第III期の6719Aが出土しているが，これは柱抜取痕跡からの出土であり，建物の解体が奈良時代中頃以降であることを示すものである。 *

iii　馬寮地域特有の軒瓦の存否

前節までに報告した軒瓦の大半は，平城宮内で通常出土するものであるが，6301C・6671C・6719Aの3種は，本調査地域で比較的多く出土し，その他の地区ではあまりみられない型式である。これらははたして「馬寮地域の瓦」と呼べるものであろうか。

分布状況を検討すると，6301Cは馬寮内で1点，馬寮外で19点，6671Cは馬寮内で5点，馬寮外で13点，6719Aは馬寮内で8点，馬寮外で17点となり，むしろ馬寮外に多い。しかも馬寮外出土のものの大半は馬寮東官衙西辺部の SD5960や，築地 SA6150に伴う雨落溝 SD6152から出土しており，この築地に葺かれていた可能性が大きい。したがって，馬寮地域独特の軒瓦であるとは言えないことになる。 *

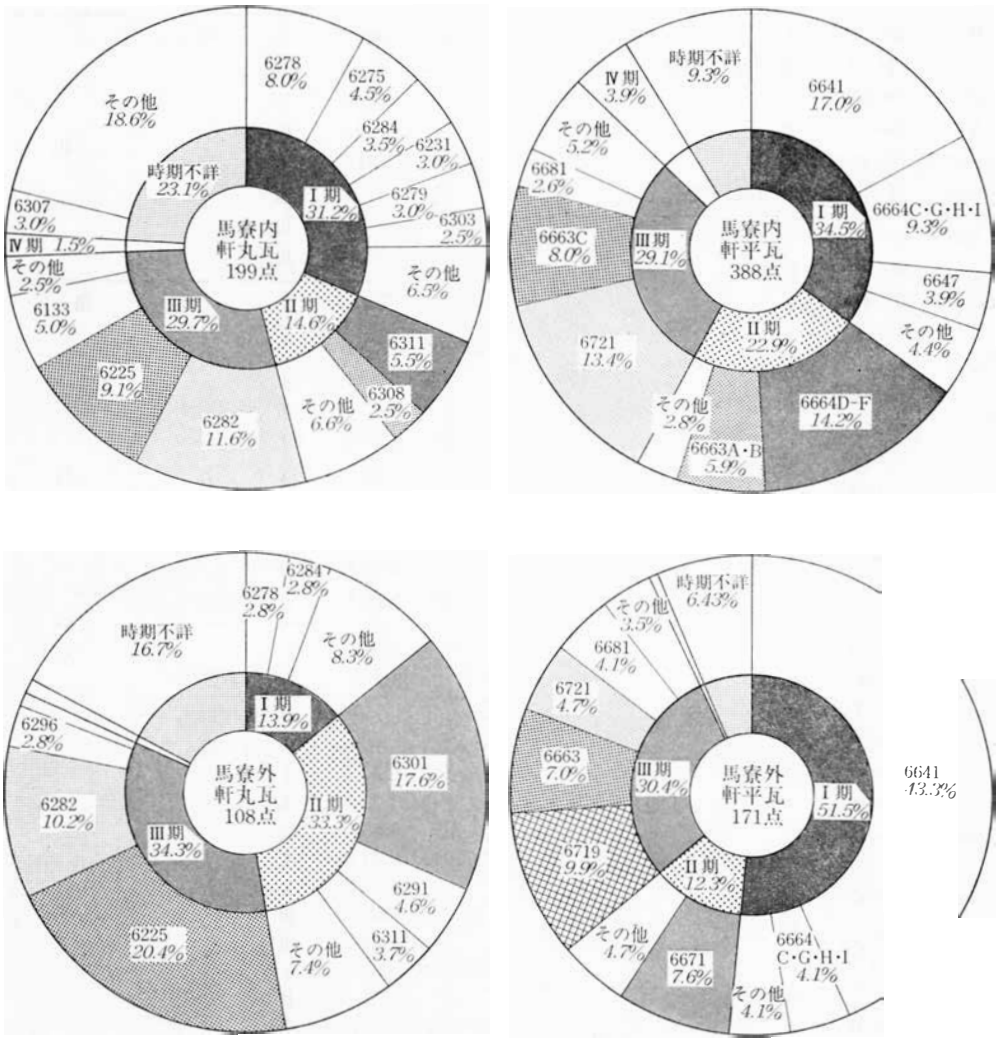


Fig. 46　軒瓦の出土比率（型式名は出土率2.5%以上の型式のみ表示）

3 土　　器

調査地全域から，弥生時代から室町時代に至る各時代の土器類が多量に出土した。これらの土器類は，遺構との関連によって，宮造営以前のもの，平城宮時代のもの，宮廃絶後のものに大きく3分することができる。土器の種類・構成・器種は，当然のことながら時期によって相互に異なり，また使用場所である遺構と深く関連し，遺構の性格を反映していると思われる。したがって記述にあたっては，前述の3段階に分け，まず各段階毎に出土状況を概括し，次に各段階を特徴づける土器類，主として遺構に伴って出土したものを中心に観察結果を報告してゆくことにしたい。なお，宮廃絶後の土器類の検討に資するため，第15次調査で検出し，遺構についてはすでに報告済みである土壙SK1623出土の一括資料を併せ収録することにした。[1)]

記述の順序

土器の説明に先立ち，特に奈良時代の土器類についての記述の煩雑さを避けるため，あらかじめ若干のとりきめをしておく。基本的に土器の成形・調整手法・器種名・時期区分については『平城宮報告Ⅶ』および『平城宮報告Ⅺ』に従うものである。

用語に関するとりきめ

1．平城宮跡から出土する供膳形態土師器の成形法には次の3種がある。一つは大形の木の葉の葉脈のある面（裏面）の上で粘土紐を巻き上げる方法（木の葉成形手法）であり，底部が広い杯・皿類の製作に採用される。第二は同じく粘土紐巻き上げ成形であるが，木の葉を使わない方法で，椀や小型壺（壺B）の製作に採用される（左手手法[2)]）。他のもう一つは須恵器の製作技法と共通するもので，回転台（ロクロ）の上で粘土紐を巻き上げて大方の形を作った後，細部の引き出しや調整をロクロ回転を利用して行なう方法（粘土紐巻き上げロクロ成形法）である。平城宮跡出土の供膳形態土師器の多くは木の葉手法・左手手法で成形されたものであり，ロクロを使った例は極めて少ない。今回報告する地域からは，平安時代のものがわずかに1点出土したに過ぎない。

供膳形態土師器の成形手法

木の葉成形手法後に行なわれる第1段階の調整法には3種あり，a・b・c手法と呼んでいる。a手法は1方の掌にのせ，他方の手を使って口縁部内外面を横方向になでる（ヨコナデ法）。b手法はヨコナデ調整した後，さらに底部外面をヘラケズリする。c手法は外面を全体にわたってヘラケズリする。左手手法に伴う調整法には，片方の掌にのせもう一方の手で口縁部上端を強くなでるだけのe手法がある。e手法で調整後，さらにヘラケズリを加えるものもあるが，b手法に対応する例はなく，ヘラケズリを施すばあいは全面を削る。

第1段階調整法

調整の第2段階として，器面を整えるためヘラミガキを施すが，その及ぶ範囲・部位によって，0手法：ミガキなし，1手法：口縁部外面のみをミガクもの，2手法：底部外面のみをミガクもの，3手法：外面全面をミガクものに分け，第1次段階のa・b・c 3手法と組み合わせて a_0，a_1，a_3，b_1，b_2 等のように表現する。

第2段階調整法

成形・調整手法は時代とともに変遷する。9世紀初頭を境に，それまで優勢だった木の葉手

1）『平城宮報告Ⅸ』p.22。

2）「左手手法」は左手の上で粘土紐を巻きあげることを想定して命名された（田中琢「古代中世における手工業の発達　窯業―畿内」『日本の考古学Ⅵ』p.191）。ここではその手法の存否は問わず，木の葉手法でない粘土紐巻き上げ手法の総称として用いている。

法は姿を消し，左手手法が盛行する。調整手法も次第に手順の省略化が進行し，調整の第２段階（ミガキ）を省く傾向を示す。また奈良時代後半を境に，それまで盛行したｃ手法はｅ手法に取ってかわられ，10世紀後半には完全に姿を消す。

胎土等による群別

2. 平城宮跡から出土する奈良時代の土器の大半は，胎土組成・発色・製作技法の上から，次に述べる２つのグループのいずれかに属す。Ⅰ群の土師器の表面の色調は，白色を帯びた灰色味の強い灰褐色を呈す。断面の色調は橙褐色で，ほとんど砂粒をまじえない胎土組成を示し，均質に焼きしまっている。一方，Ⅱ群の土師器の表面は灰褐ないし暗褐色を呈す。断面は暗茶褐色系の色合いで，白色粒子・くされ礫・チャート礫等を多量に含み，Ⅰ群に比べ多孔質に焼き上がっている。Ⅰ群土師器は９世紀頭以降みられない。Ⅱ群土師器にあっては８世紀後半以降次第に砂の含有量が多くなる傾向を示す。また，９世紀以降10世紀前半頃までの土師器もⅡ群系統に属するという分析結果を得ている。

群別に応じた製作技法の差

群の違いに応じて製作技法にも差が認められる。高杯を例にとって述べよう。杯部と脚部の接合法は，Ⅰ群では杯部底中央に粘土紐もしくは粘土の輪を積み上げる方法をとるのに対し，Ⅱ群では杯部中央に粘土を補塡し，そこに棒を差し込み，棒に粘土を巻きつける方法をとっている。接合後に行なわれるヘラによる脚柱部の面取り方法も異なる。Ⅰ群では杯部と脚部の付け根から裾部に向って削りおろすのに対し，Ⅱ群では裾部から一気に，時には杯部と脚部の付け根でいったん止めるばあいもあるが，棒を固定した補塡粘土の及ぶ範囲まで削りあげる方法をとる。また，Ⅰ群の高杯の脚部内面は裾部をヨコナデ，脚柱部をナデで調整するが，Ⅱ群のばあいには裾部内外面と脚柱部の外面をヘラケズリで調整している。なお，杯・皿等に関しては，８世紀後半以降になると，Ⅰ群でヘラケズリする例は少ないのに対しⅡ群ではほとんどすべてヘラケズリ調整するという相違点も指摘できる。

供膳形態須恵器の成形手法

3. 須恵器の供膳形態（杯・皿・椀）の成形手法は，前に触れたように粘土紐巻き上げロクロ成形であり，粘土塊から直接製品を引き出す水挽きによる例はない。ただし，奈良時代後半には，一部の器種（壺G・壺L・壺M）の製作にこの方法が採用されている。

粘土紐巻き上げロクロ成形法において，ロクロから製品を切り離す際には，ヘラを押し込んで切り離す例（ヘラ切り）が大半を占め，切り離しに糸を使用する例は極めて少ない。成形後に行なわれるロクロ回転を利用したケズリ・ナデをそれぞれロクロケズリ・ロクロナデと呼称する。

須恵器の群別

4. 須恵器についても，胎土組成・調整手法の違いによって，Ⅰ～Ⅳの４群に区分できる。Ⅰ群は暗青灰色を呈する硬質のもので，胎土中に白色粒子・黒色粒子を若干含む。杯・皿類に関しては，わらを器間に挟んで重ねて焼成するため，火襷を持つ例が多い。平城宮跡から出土する須恵器の大半はこの類で，器種も豊富である。Ⅱ群は灰色味の強い灰青色を呈し，砂粒は少ないが黒色の粒子を多量に含む。この黒色粒子はもろく，ロクロナデ・ロクロケズリによって墨をぼかしたような観を呈す。８世紀前半に顕著に見られる傾向であるが，非常に丁寧なヘラケズリを行なっており，土師器の手法に特有なヘラミガキを施す例も多い。Ⅰ群と同様火襷を持つものが多く，ほとんどひずみなく焼きあがっている。平城宮跡では量的にⅠ群に次いで多くを占め，器種は供膳形態のものが主体をなす。Ⅲ群は粗砂粒をかなり含むが，硬質に焼き締

1)『平城宮報告XI』p. 257。

っている。器種は少なく，杯B・同蓋・皿B等に限られるようだ。これらの器種の製作にあたっては，同心円状の刻みを持つあて板を使って粘土塊を平坦にのばして底部を作った上で口縁部・縁部を作る点で他の群と異なる。また，形態的にも他群と異なり，全体に分厚く量感があり，杯B・皿Bでは高台部外側面が内傾し，杯B蓋は扁平でつまみが逆台形である等，一見して他と区別がつく。Ⅳ群は灰白色を呈し，胎土は極めて細かいが焼きが甘く，粉をふいたような焼き上りのものである。8世紀初頭の杯等に若干認められる程度で例外的な存在である。

以上の他，平城宮内では量的に少ないが，Ⅰ～Ⅳ群のいずれにも属さない須恵器が存在する。京内ではこのⅠ～Ⅳ群以外の須恵器がかなりの量知られており，今少し資料の増加を待てばさらに群別が可能な状況である。これらのうち産地が同定できるものとしては，美濃産・猿投産・三重県産・兵庫県産等がある。

平安時代に入ると全体的に須恵器の供膳形態は減少の一途をたどる。9世紀初頭頃までは，Ⅰ群須恵器がまだ若干見られるが，同後半になるとⅠ群に替って黒灰色～暗灰色を呈する別の一群が出現する。この一群は，胎土・技法・器形の上から，京都府亀岡市に所在する篠古窯址群の産と考えられる。

5．黒色土器には内面のみを黒色処理するものと，内外両面を黒色処理するものと2種があり，前者をA類，後者をB類とする。

6．平城宮・京から出土する土器の編年については，技法面の観察・器種構成の上でⅠ～Ⅶの7グループに大別している（Tab.5）。年紀のある木簡等の伴出によってこれらの実年代の一端が知られており，記述にあたっては「平城宮土器Ⅰ」というような表現で型式と年代観を示す。Ⅰ～Ⅴが平城宮時代に属し，Ⅵは長岡京の時期であるが，基準資料となるような土器を検出していない。Ⅶは平城上皇遷都の時期にあたる。Ⅶ以降については，まだ詳細な型式変遷の構図を完成していないが，平城京左京一条三坊における東三坊大路東側溝の下層（SD650A），同上層（SD650B），薬師寺西僧房床面出土一括土器という順で，大きな区別を設定しており，SD650Aが9世紀中頃～後半，SD650Bが9世紀後半～10世紀前半，薬師寺西僧房は10世紀後半代と考えられる（第Ⅴ章3参照）。

大別名称	略年代
平城宮土器Ⅰ	710A.D.
平城宮土器Ⅱ	725
平城宮土器Ⅲ	750
平城宮土器Ⅳ	765
平城宮土器Ⅴ	780
平城宮土器Ⅵ	800
平城宮土器Ⅶ	825

Tab. 5 平城宮土器の大別

7．実測図は原則として1/4に縮尺するが，大型品や細部を表現する必要のあるばあいは，適宜，より大きな縮尺を採用する。実測図に入れる線は，主として稜と凹部および調整の変換線に限定する。また，土師器における手持ちヘラケズリ，須恵器のロクロ目は表現しない。黒色土器で口縁部内面に草花紋の暗紋を持つばあいは，内面ヘラミガキは表現しない。実測図に付した土器番号はPL・Figに共通した通し番号で，土器の種類毎に以下のように分けて表示するようにしている。1～199が土師器（弥生土器），200番代が須恵器，300番代が黒色土器，400番代が瓦器，500番代が灰釉陶器・白瓷系陶器，600番代が緑釉・三彩陶器，700番代が輸入陶磁器，800番代が特殊土製品（硯・土錘・土馬）である。

A　平城宮造営以前の土器 (Fig. 47)

宮造営以前の土器には弥生土器および古墳時代の土師器・須恵器がある。これらは馬寮地域内を西北から東南に向って流れる旧水路ＳＤ6060の埋土およびその両岸にある小土壙や溝などから出土した。

i　弥生土器

弥生土器は主としてSD6060の両岸にあるいくつかの小土壙から完形に近い形で出土した。SD 6060の埋土からも発見されているが，これらは小片である。弥生土器はいずれも遺存状態が極めて悪く，器面が剝落し，調整・施紋等を観察できるものは少ない。器種には壺と甕があり，すべて畿内第Ⅰ様式に属す。8は土壙SK6122から出土したもので，胴部最大径16.2㎝を測る小型壺である。頸部に2条の沈線がめぐる。

ii　土 師 器

土師器はＳＤ6060から大量に出土したが，完形に近いものは少なく，遺存状態が悪いため調整手法を観察できるものは少ない。完形に近いもののみを図示し，他の破片については器形の紹介にとどめたい。

SD6060から出土した土師器には，布留式の範囲に入るもの（4世紀末～5世紀前半）と須恵器の生産が始まって後のもの（5世紀後半代）とがある。両者は共にSD6060の同一層位（上層の荒砂）から出土している。布留式の系統に属するものには椀Ａ（1），高杯Ａ（5・7），高杯Ｘ（6），小型丸底壺Ａ（2・3），器台Ａ，器台Ｂ（4），壺Ａ，壺Ｄ（15），壺Ｅ（16），壺Ｆ（13），甕Ａ，甕Ⅰ，甕Ｘ（9）等がある。須恵器を伴う時期の土師器の器種には高杯Ｂ，高杯Ｃ，小型丸底壺Ｃ（10～12），壺Ｂ（14），甑，甕等がある。

iii　須 恵 器

須恵器はSD6060から総数10片，3個体分の破片が出土したのみである。器種には高杯，長頸壺，甕がある。高杯（200）は短脚三方透有蓋高杯で，脚部と杯部外面にカキメを施す。長頸壺（201）は頸部から上位を欠失するが，胴部に二条の沈線によって区画を作り，その中に櫛歯波状紋を施す。底部はナデで調整するが，手持ちヘラケズリの痕跡をとどめる。

B　奈良時代の土器 (PL. 60～62, Fig. 48)

発掘面積が広い割には奈良時代の土器の出土量は少なく，全般的に散在的な出土状況を示すが，調査地域東北部の馬寮東官衙域周辺の溝や包含層からは比較的集中して出土している。馬寮域内では，井戸や西辺にある長方形土壙SK6350，あるいは建物周辺の包含層から少量出土

1）器種名は『平城宮報告Ⅹ』にしたがって記述する。

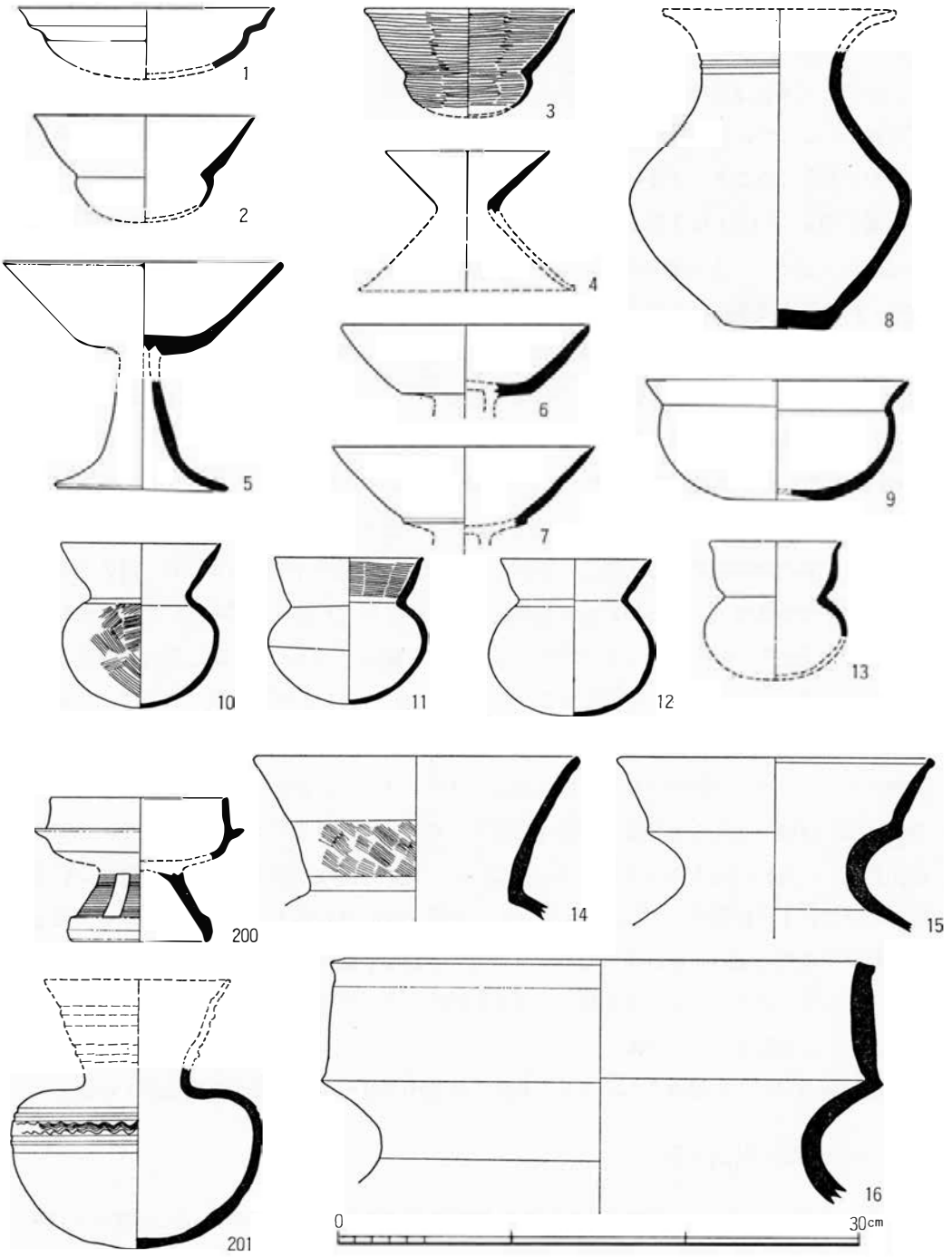


Fig. 47　宮造営以前の土器類実測図

しているに過ぎず,塵芥処理用の土壙がほとんど無いのが馬寮地域の一つの特色となっている。

＊　出土土器の内容からも馬寮域の特色を知ることができる。まず施釉陶器は1点（三彩），陶硯は2片と非常に少なく，一方漆容器の出土量がかなり多い点が一つの特色である。つぎに須恵器と土師器の比率をみると，7：3の割で須恵器が多く，しかも須恵器の大半は壺・甕であり，杯・皿等の供膳形態は少ない。杯B・杯B蓋等では，硯として利用した例が多いのも一つの特徴として把えられよう。なお，土器類の年代については，8世紀前半代のものは土壙SK6350，溝SD5950・6151・6152出土品以外は認められず，大半は後半代に属す。

i　包含層出土土器

土器類の大多数は遺物包含層から出土したものであり，総じて遺構から出土したものより残りが良い。ここでは包含層から出土した土器のうち，主として完形に近いものと形態の珍しいものをとりあげることにする。

土師器　土師器の皿AI (33) はⅠ群土器で，a_0 手法で調整する。底部外面には指頭痕および粘土紐の痕跡をとどめる。土師器椀A (32) はⅡ群土器で，底部外面から口縁部下半部をヘラケズリする。口縁部上半部には2段のヨコナデ痕跡をとどめる。

須恵器　須恵器の杯Bには BⅢ (231) と BⅣ (230) とがある。杯 BⅢは底部周縁よりかなり内側に断面梯形状を呈する短低な高台がつく。底部外面はロクロケズリで調整，杯 BⅣは底部不調整である。両者ともにⅠ群土器。杯 BⅣ蓋 (229) もⅠ群土器で，頂部外面はナデで調整する。壺E (232) は底部外面と体部外面をロクロケズリで調整する。底部外面のケズリは中心部まで及ばず，ヘラ切り痕をとどめる。体部外面はヘラケズリの後さらにロクロナデを施す。Ⅰ群土器。壺Gには，器高22cmを超える大型品 (238) と19cm程度の小型品 (237) とがある。両者ともにロクロケズリを施さず，底部外面には糸切り痕，体部にはロクロ目をとどめる。ロクロ水挽き法によるが一気に引き上げられたものではなく，体部と頸部を別々に引き出し接合したもの。壺M (235) は徳利形の小型壺。粘土塊から一気に引き上げられたもので，頸部内面にはしぼり目を残す。ロクロケズリは施さない。壺L (234) は横長の体部と外反する短い口縁部からなる。体部はロクロケズリで調整するが，底部外面はヘラ切りのまま調整しない。Ⅰ群土器である。壺H (236) は側面形逆台形状を呈する体部に大きく外傾する頸部がついた広口壺で，口縁部上位が外反し，端部は上方につまみ上げられている。底部外面は不調整。灰白色を呈する軟質の焼き上りで，Ⅰ～Ⅳ群のいずれにも属さない。壺蓋 (233) は口径よりやや小さい径の平底と若干内彎気味に立ち上る口縁部からなる。双耳瓶等の頸部の低い壺類の蓋と考えられる。口縁部はロクロケズリの後ロクロナデを施す。底部外面はロクロケズリで調整。Ⅰ～Ⅳ群のいずれにも属さない。東海産であろうか。

以上の包含層出土土器のうち，壺E・Lは平城宮土器Ⅱ～Ⅲ，他は平城宮土器Ⅴに属す。

ii　SD 6499 出土土器

馬寮東官衙の北限をなす築地 SA6510の北雨落溝である東西溝 SD6499から，量的には多くはないが，奈良時代末の土器類や土馬が出土した。

土師器　土師器の器種には杯C・椀A・壺B等がある。杯C (18) はⅡ群土器で，b_0 手法で調整する。椀Aの法量はほぼ均一だが，c_0 手法によるもの (21・22) と c_3 手法によるもの (19・20) がある。どちらもⅡ群土器である。壺B (23) は，一般に墨で人面を描きまじないに使用する甕と共通した特色をもつ。口径が胴径を上回る広口甕の形態をなし，体部中程よりやや上位の相対する位置に小さな粘土塊を貼り付けている。口縁部はヨコナデするが，体部はハケメなどの調整を施さず，粘土紐巻き上げ痕跡を残す。火を受けた痕跡はない。

須恵器　須恵器の器種にはⅠ群土器の杯 BⅣと壺蓋がある。杯 BⅣ (216) は底部ヘラ切りのまま不調整である。壺蓋 (213) は宝珠形のつまみを持つ広くて平坦な頂部とやや外方に開く短い縁部か

らなり，頂部外面をロクロケズリで調整する。

iii　SD 6477 出土土器

馬寮域の北を限る築地SA6475の北雨落溝SD6477から少量ながら土師器・須恵器が出土した。小片が多く，器形・法量を識別できる個体は図示したものにとどまる。すべて平城宮土器Ⅴに属す。

土師器

土師器の器種には杯AIと壺Bがある。杯AI(17)はI群土器で，b_0手法で調整する。壺B(24・25)は墨描人面土器[1]の甕と共通した形態で，口縁部をヨコナデするが，体部外面は不調整で粘土紐巻き上げ痕跡をとどめる。SD6499から出土した壺B(23)に較べ，体部上位が丸味を帯び，底部近くが屈曲する。

須恵器

須恵器には杯BIV蓋・壺・甕片がある。杯BIV蓋(215)は扁平で平坦な頂部と外反する縁部からなる。頂部外面はロクロケズリで調整。つまみ頂部に「井」の字の墨書を持つ。

iv　SD 5960 出土土器

馬寮東官衙南半部の西限をなす南北溝SD5960から奈良時代初頭（平城宮土器Ⅰ・Ⅱ）の土器が少量出土した。SD5960は総長160mを発掘したが，土器は散在的な出土状況を示し，全体で整理用木箱1杯にも満たない。

土師器

土師器の器種には杯A・皿A・高杯等があるが，いずれも小片で遺存状態も悪く観察に耐えない。

須恵器

須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・皿B・椀A・壺蓋・甕等の器種がある。杯AII_2(202)は口径の大きさの割に器高の低い杯で，底部外面をナデで調整するが，ヘラ切り痕跡が明瞭に残る。I群土器である。杯Aにはこの他I～IV群のいずれにも属さない杯AIIIが1点ある。杯BI(205)は底部の器壁がきわめて厚く，口縁部は内彎気味に立ち上る。III群土器に近い胎土組成を示す。杯BII(206～208)には3種ある。206は内彎する口縁部で，高台端面が外傾する。底部外面をロクロケズリで調整する。I～IV群のいずれにも属さない。207も口縁部が内彎するが端部近くで外反する。底部外面をロクロ回転を利用しないヘラケズリで調整する。208は外反する口縁部で，底部外面周縁よりやや内側に低短な高台を付ける。底部は高台部より突出する。杯BIII(209)は口縁部が直線的に外方に開き，底部外面周縁近くに外方に踏んばる低短な高台を付す。底部外面は不調整。I群土器である。底部外面を硯に転用。杯BII蓋は(204)I群土器で，平坦な頂部と内彎する縁部からなる。頂部外面はナデで調整する。内面を硯に転用している。杯BIII蓋(204)はI群土器で，傘形の頂部とわずかに屈曲する縁部からなる。頂部外面をロクロケズリで調整する。椀A(212)は器高に比して口径が小さく，口縁部の外傾度も小さい杯A形態で，底部外面をロクロケズリする。II群土器。壺蓋には，口径9,5cm，器高3.3cmの小型品(211)と，口径13.6cm，器高2.6cm程度の中型品(210)とがある。前者は平坦な頂部に比較的大きい宝珠形のつまみを持ち，口縁部は外反する。後者は扁平なつまみで，壺にかぶせて焼成するため口縁端を小さくつまみ上げている。両者ともI群土器。

---

1) 従来「墨書人面土器」と呼んでいたが，文字ではないので「書」を「描」に変更した。

v　SD6160 出土土器

第Ⅳ期の馬寮東限を画す築地SA5950Bの東雨落溝SD6160から少量の土器と祭祀用の小型カマド形土製品が出土した。土器類は平城宮土器Vに属し，須恵器が多く土師器は少ない。

土師器　土師器には杯B・皿A・椀A・高杯・盤・甕等の器種があり，すべて破片である。杯BⅡ(31)はc_0手法で調整する。椀A（30）もc_0手法で調整，底部外面に「主馬」の墨書を持つ。＊両者ともにⅡ群土器。

須恵器　須恵器の器種には杯A・杯B・同蓋・壺G・壺L・壺蓋・鉢C・甕等がある。杯AⅣ（226）は口縁上部が外反する。底部外面はロクロケズリで調整。Ⅰ群土器である。杯BⅠ（227）は頂部外面をナデで調整。Ⅰ群土器。杯BⅢ蓋（225）は頂部外面をナデで調整する。

vi　SD 6151・6152 出土土器　＊

馬寮東官衙の西を限る築地SA6150の東雨落溝SD6151と西雨落溝SA6152から土器が少量出土した。両溝から出土した土器には相互に接合するものがあるため，一括して扱う。出土土器中には若干量の奈良時代末～平安時代初めの資料が含まれるが，多くは奈良時代前半期（平城宮土器Ⅱ・Ⅲ）のものである。

土師器　土師器は量的に少ないが，杯A・皿A・壺A・甕等がある。いずれも細片で残りが悪い。＊

須恵器　須恵器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿B・壺A・壺K・壺L・壺Q等がある。Ⅰ～Ⅲ群土器があるが，Ⅰ群が圧倒的多数を占める。杯BⅣには，口径がやや大きく口縁部が内彎し，高台の外側面が内傾するもの（220）と，口縁部はほぼ真直ぐ外方に開き，高台が断面矩形で外方に踏んばるもの（221）とがある。両者とも底部外面はナデで調整する。221はⅠ群土器であるが，220はⅠ～Ⅳ群のいずれにも属さない。皿BⅡ（222）は底部周縁よりやや奥まった位置＊に外方に踏んばる低い高台を付す。Ⅰ～Ⅳ群のいずれでもない。杯BⅡ蓋は，いずれも縁部が屈曲しない形態であるが，端部が断面三角形で直角に折れるもの（218）と，端部が丸く収まるもの（217），端部が「く」の字形に屈曲するもの（219）の3種がある。すべて頂部外面をロクロケズリで調整する。218のみⅠ群土器。図示した以外に杯BⅡ蓋は10片あるが，そのうち7点は転用硯である。＊

vii　SK 6397 出土土器

馬寮地域西北部で検出した第Ⅳ期の二面廂付南北棟建物SB6400の東廂南端の柱穴を切る小さな円形土壙SK6397から，完形に近い状態の土器が出土した。平城宮土器Vに属し，SB6400の廃絶の年代の一端が知られる好資料である。

土師器　土師器には杯AⅠ1点，椀A2点，杯BⅠ蓋1点がある。杯AⅠ（26）はⅡ群土器で，c_3手＊法で調整する。底部外面を一方向に，口縁部外面は水平方向に4回に分けてミガキを施す。椀Aには，小さな平底と底部近くで一旦外反したのち内彎する口縁部からなるもの（27）と，それよりやや口径が大きく口縁部が内彎し外方に大きく開くもの（28）とがある。両者ともにⅡ群土器で，c_0手法で調整する。杯BⅠ蓋（29）は口径26.4cmを測る大型品で，Ⅱ群土器，c_3手法で調整する。頂部はつまみを四方から挟む形で4回に分け互に直交する方向にミガキを施＊し，頂部から縁部にかけても4回に分けてミガキを施している。

viii　SK 6350 出土土器

馬寮地域西北部にある南北に細長い大土壙SK6350から，少量ながらも土師器・須恵器が出土し，遺構の第Ⅲ期の年代を知る上で貴重な資料と考えられる。その大半は細片で，図示できるものは少ない。時期的には平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属す。

＊　土師器の器種には杯A・杯C・皿B・椀A・椀C・高杯・甕・竈などがある。杯AI（34）はⅠ群土器で，a_0手法で調整。口縁部内面に一段の細かい斜放射暗紋を，底部内面には螺旋暗紋を有する。　**土師器**

須恵器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿B蓋・皿C・鉢A・平瓶・壷A・壷A蓋・壷C・壷K・甕などがある。杯BI（242）はⅠ群土器で，底部をロクロケズリで調整，高台端部は外＊傾する。杯BⅢ（243）もⅠ群土器で，底部のヘラ切りをナデで調整している。杯BⅢ蓋（239）は扁平で広い頂部と短い縁部からなり，頂部には小さく丸味を有するつまみを持ち，縁部はほぼ直角に折り返す。杯BI蓋には，宝珠形のつまみを持つもの（241）と，環状つまみを持つ例（240）とがある。両者ともⅠ群土器で，頂部外面をロクロケズリで調整する。壷A（244）は完器で，平底で肩の張った球形の胴部と，ほぼ真直ぐ立ち上る短い口縁部からなる。口縁端部は内＊傾し高台は低く外方に踏んばる。底部外面をロクロヘラケズリで，胴部外面はロクロナデで調整する。肩部には自然釉が降着し，蓋をかぶせて焼成した痕跡をとどめる。小型の壷C（245）も完器で，平底と矩形に近い胴部にほぼ真直ぐ立ち上る短い口縁部がつく。胴部下半から底部外面をロクロヘラケズリで調整する。甕B（246）は胴部以下を欠損するが，口径22cmの比較的小型の甕である。甕C（247）は肩部に半環状の把手を持つ。胴部はヘラケズリで調整するが，＊部分的に叩き目が残る。胴部内面には墨が付着し磨滅していることから，破片になった後砥に転用されたものと判断できる。　**須恵器**

ix　SE 6166 出土土器

第Ⅲ～Ⅳ期の井戸SE6166から，少量ながら土師器・須恵器が出土した。その中には「主馬」の墨書を持つ土師器杯Aがある。後に詳しく論＊ずるが，「主馬」は天応元（781）年から大同元（806）年までみえる令外官である主馬寮に相当すると考えられ，今回取りあげている官衙域を馬寮に比定するに際し有力な根拠となる資料である。また編年上においても，既述のように，奈良時代末期の基準資料となっている。土師器・須恵器合わせて総数22点出土しているが（Tab.6），完形品は少ない。個々＊の資料については後に述べるが，全体的にみてこれまで平城宮土器Vとしてきた一群よりも長岡宮出土土器に近く，平城京における左京三条一坊十・十五坪の井戸SE877・967出土土器と共通する特徴をもつ。

土師器の器種には杯A・杯B・杯C・皿A・皿C・椀A・壷B・甕Aがあり，すべてⅡ群土器である。杯AI（35）は完形で，口径15.2cm，器＊高3.3cm。b_0手法で調整し，底部外面に「主馬」の墨書をもつ。杯AⅡ（36）は口径15.6cm，器高4.0cmで，c_0手法で調整。底部が狭く，口縁　**土師器**

	器種	点数
土師器	杯A	1
	杯B	1
	杯C	1
	皿A	2
	皿C	1
	椀A	5
	椀X	1
	甕A	2
須恵器	杯A	1
	杯B蓋	1
	杯CI	1
	高杯	1
	壺L	1
	壺M	1
	甕A	2
計		22

Tab.6　SE6166出土土器の器種と点数

1）『平城京左京三条二坊』（奈良国立文化財研究所学報第25冊）1975，p.25～27。

部は外傾度が高く内彎する。口縁端部がわずかに内側に肥厚する。椀形態に近い杯である。杯BⅡ（37）は完形で，口径20.5cm，器高7.6cm。器高の割に口径が小さく，径高指数の高い杯Bである。内彎する口縁部と断面逆三角形の小さな高台を付した底部とからなる。c_1手法で調整し，口縁部外面は4回に分けて水平方向に磨く。杯CⅠ（39）は口径18.8cm，器高3.6cmで，a_0手法で調整。皿AⅡよりわずかに大きく，口縁端部が内傾する点を特徴とする。皿AⅡ（40・41）は口径17.2～18.4cm，器高2.5cm前後，いずれもc_0手法で調整する。外傾度の大きい口縁部をもち，口縁端部はわずかに肥厚する。皿C（46）は完形で，口径9.0cm，器高2.3cm，e手法で調整。口縁部は外反し，端部は丸くおさまる。椀Aは口径13cm，器高4.0cm前後で，c_3手法で調整するもの（42・43）とc_0手法で調整するもの（44・45）とがある。後者の口縁部が内彎するのに対し，前者の口縁部は底部近くで一旦外反したのち内彎する形態であり，長岡宮から出土する椀Cと形態を一にする。椀X（38）は底部を欠損するが，口径16.2cmを測る。口縁端部はわずかに内側に肥厚する。c_0手法で調整。甕はいずれも小片であるが，口縁部が大きく外反し端部が外傾する比較的口径の小さいもの（48），と，口縁部が外反し端部を内側に折り返し丸く肥厚させるもの（46）がある。両者とも胴部外面をハケで調整するが，前者は内面を縦方向のヘラケズリで調整するのに対し，後者は胴部内面に当て板痕跡状のくぼみを持ち，粘土紐巻上げ後叩きによって成形したものと考えられる。

須恵器　須恵器の器種には杯A・杯B蓋・杯CⅠ・高杯・壺A蓋・壺L・壺M・甕Aがある。杯Aは底部の破片で，燈明器に用いている。底部外面はヘラ切りのまま調整しない。Ⅰ群土器。高杯（250）は杯部を欠損するが，脚台径15.2cmを測る。脚柱部中ほどに2条の沈線を有す。脚柱部内面を縦方向にヘラケズリする。Ⅰ～Ⅳ群のいずれにも属さない。壺L（251）は高台径8.5cm，胴部最大径16.0cm。胴部下位外面をロクロケズリで調整する。底部外面は不調整で，回転糸切り痕をとどめる。焼成堅緻であるが若干焼けひずむ。胴部外面には暗灰緑色の自然釉の降着をみる。東海地方産と考えられる。壺M（249）はロクロ水挽きによる小型壺で，口縁部を欠く。底部径4.6cm，胴部最大径7.2cm。胴部下位をロクロケズリで調整するが，底部外面はヘラ切りのまま不調整である。Ⅰ群土器。甕A（253）は口径39.0cm，器高45.3cm，卵形の器体と外反する口縁部からなる。口縁部は，一旦斜め上方に立ち上り，端部近くで大きく外反する。外面の叩き，内面の当て板痕跡の切り合いから，上部から下部に向って叩き出した状況が判る。胴部下位3分の1あたりの断面は周囲に比して肥厚しており，この部分を境に内・外面の当て板・叩きの原体を違えている。このふくらみは平底に成形した後底部を叩き出し丸底にした時の名残りと考えられる。Ⅰ群土器。甕（263）は，胴部下半を欠損するが，口径37.0cmを測る大型の甕である。外面を叩きによって調整するが，肩部と胴部の境をヘラケズリで調整する。Ⅰ～Ⅳ群のいずれにも属さない。東海産か。

x　漆付着土器

総数675点にのぼる漆付着土器が出土した。各地区毎の出土点数をTab.7に表示した。これによって漆付着土器の出土状況を見ると，第50次調査区（6ADD—N・M区）と，それに接する第71次調査区（6ADD—N区）とに集中する傾向があり，総個数の93%がこの地域

地区	点数	
6ADC-G区	1	
H区	5	
K区	2	36
O区	14	
P区	14	
6ADD-L区		
M区	86	
N区	501	639
P区	33	
Q区	12	
計	675	

Tab. 7　漆付着土器出土地点

から出土している。ほとんどすべてが破片であり，器種の判別可能なものは少ないが，Tab. 8にみるように圧倒的に須恵器が多い。須恵器では甕片が最も多く，ついで杯類，壺，横瓶，杯B蓋，壺蓋，皿A，皿Bの順となる。甕で器種が判別できるものには，甕A(1点)，甕B(3点)，甕C(1点)がある。壺類のうちわけは壺A(1点)，壺B(1点)，壺G(1点)，壺K(1点)，壺L(2点)，壺Q(2点)である。杯類は杯A(18点)，杯B(18点)，杯E(2点)である。

土師器の器種はすべて供膳形態であり，貯蔵形態はない。

以上の漆付着土器は，壺・甕は貯蔵容器として，杯・皿類はパレットとして使用されたものであろう。これら漆付き土器が馬寮域の東南部から集中的に出土することから，このあたりに馬寮に所属する漆工房の存在していた蓋然性は極めて高いと言えよう。

	器種	点数
土師器	杯	4
	杯B	1
	皿A	5
	不明	4
須恵器	杯	74
	杯B蓋	13
	皿	2
	壺	97
	壺A蓋	6
	横瓶	17
	甕	392
計		615

Tab. 8 漆付着土器の器種別個体数

xii 墨書土器

総数24点の墨書土器が出土した。このうち遺構に伴った例は，SE6166・SD6499から各2点，SD6160・6477・6151・5960から各1点の計8点であり，他は遺物包含層からの出土にかかる。

墨書土器の分布状況は転用硯のそれとほぼ一致している。すなわち墨書土器の多くは第Ⅲ期における馬寮の東限塀SA5950より以東の地域から出土しており，特にその北部に集中する傾向が認められるのである。SA5950以西では，わずか7点しか出土していない。判読可能なものは13点あり(Tab. 9)，中でも「主馬」・「内廐」の墨書は，当地域が馬寮であったことを示す貴重な資料である。

番号	出土地	墨書	器種・部位	時期	番号	出土地	墨書	器種・部位	時期
35	SE6166	主馬	土師杯AI 底外	平城宮土器V	227	6ADC-G	判読不能	須恵杯か皿底外	
50	〃	判読不能	土師坏か皿 底外		219	〃	八	〃 壺G胴部外	
30	SD6160	主馬	〃 椀A 底外	平城宮土器V	228	6ADC-H	判読不能	〃 杯 底外	
215	SD6477	非	須恵杯BⅣ蓋 つまみ頂部	〃	229	〃	授授	〃 杯B蓋頂外	
220	SD5960	代王	〃 杯A 口縁外	平城宮土器Ⅱ	230	〃	水	〃 壺 底外	
221	SD6499	因口	〃 杯B 蓋頂外		232	6ADC-K	備	〃 杯 底外	
222	〃	庶	〃 杯A 底外		232	〃	判読不能	〃 杯 底外	
51	SD6152	判読不能	土師杯AI 底外	平城宮土器V	233	6ADC-L	宮	〃 坏 底外	
223	6ADC-G	〃	須恵杯B蓋 頂外		217	6ADC-M	判読不能	〃 皿A底内外	
224	〃	太	〃 杯BⅣ蓋頂外		216	6ADC-P	(記号)	〃 杯AⅢ外面	
225	〃	右カ	〃 杯 底外		234	〃	内廐	〃 坏B蓋頂外	
226	〃	判読不能	〃 杯B 底外		218	〃	内	〃 杯C 底外	平城宮土器Ⅱ

Tab. 9 墨書土器一覧

xiii 特殊土製品

特殊土製品としては祭祀に使われた土馬・竈形土製品，土錘，硯が，また特殊土器としては三彩陶器等がある。

土馬 土馬は破片も含めて4点出土している。遺構に伴なうのは1点で，他の3点は包含層

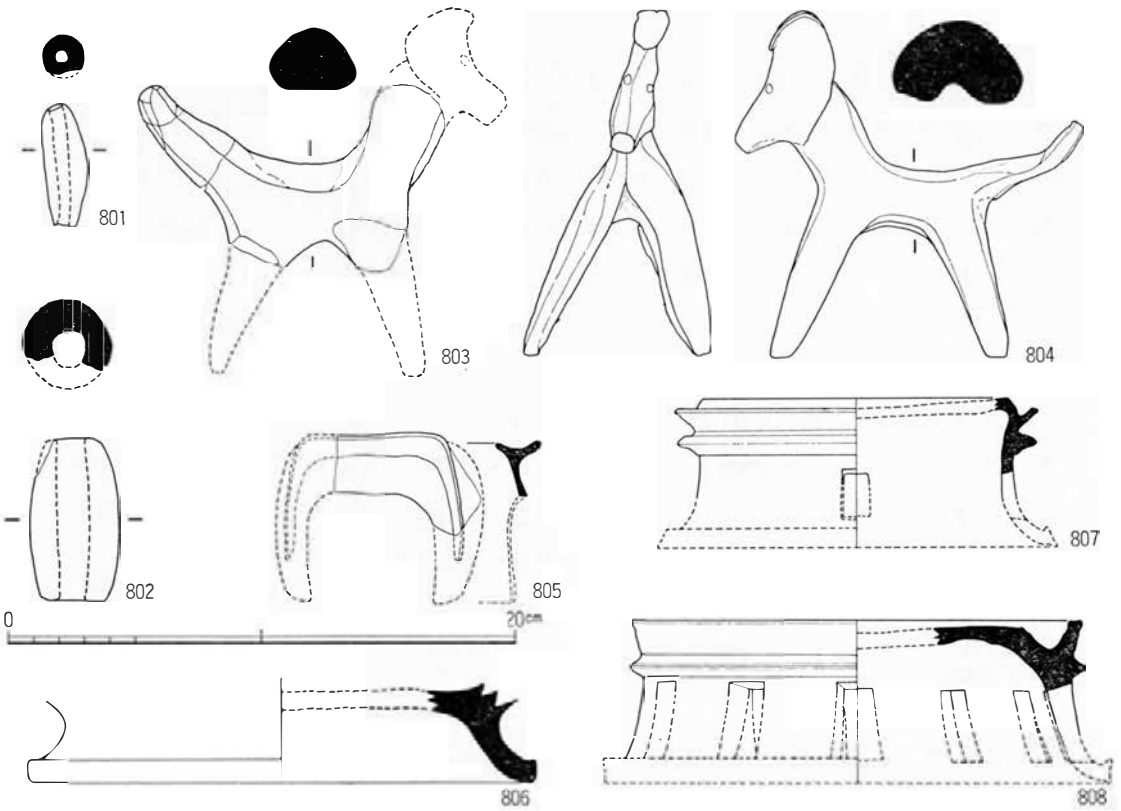


Fig. 48　特殊土製品実測図

から出土した。804は東西溝 SD6499から出土した完形品で，前足・後足とも逆V字形に開き，首をもたげ，胴部が短く，尾は先端を細め斜め上方にはね上げる。粘土塊から前足・後足・尾・首の部分をそれぞれつまみ出し，前後の足を適当な開き具合に内側に折り返したあと，頭部・腹部をナデで調整する。手綱・鞍の表現がなく，裸馬を表わしたものである。803は804とほぼ同様な形態を持つ土馬であるが，前足・後足・頭部を欠失する。全体に肉太で，腹部はナデによってくぼむ。6ADD-N区出土。他の2点は肢部の破片で，6ADC-H区から出土している。

土錘　土錘は南北溝 SD6152から1点 (802)，6ADD-N区から1点 (801)，計2点出土した。どちらも土師質の紡錘形で，棒状の芯に粘土紐を巻きつけて作った粗製品である。802は長さ6.4cm，最大径3.4cm，中心に径1cm前後の孔が通る。801は粗い調整で断面は正円形をなさない。長さ4.8cm，最大径1.6cmの細長い形態である。

竈形土製品　手捏ねで作った土師質の小型竈 (805) で，下底が広い台形状の体部の一個所を箆で切りとり焚口とし，周辺に粘土紐を貼り付け廂をつくる。南北溝 SD6160出土。

硯　出土した陶硯は台付円面硯2点のみである。どちらも破片であるが，陸と海の区別が明瞭な圏足硯であり，外堤外部下端に1条の突帯を，また脚台部に長方形透しを配す。808は6ADD-M 区の包含層から出土したもので，器壁が厚く，外堤部が陸部より突出する。脚台部の透しは縦長の長方形で，11ないし12個に復原できる。807は6ADD-L 区の包含層から出土したもので，全体に器壁が薄く作られている。外堤部は陸部より低く，外堤部下位に太い突帯が巡る。脚部台の透しの数は不明だが，3～4個程度と少ないようだ。

三彩陶器　破片1点が6 ADD-P区の包含層から出土した (303)。大型の瓶の脚台部の破片で，外面と底部内面に緑釉と褐釉が部分的に残る。白色の緻密な水簸粘土を使用しているが，挟雑物として長石・雲母・チャートの微砂を含む。

C　平城宮廃絶後の土器 (PL. 63～65, Fig. 49・50)

9世紀初頭，平城上皇が再び平城の地に還都し，旧馬寮域にも掘立柱建物群が建てられる。遺構の上では第Ⅴ期に相当し，建物は調査区北部に集中するが依然官衙的な性格を保持しているように思われる。この時期に属する遺物は極めて少なく，遺構に伴うものはほとんどない。

第Ⅴ期の終末以降，宮あるいは官衙的な性格は消失し，旧馬寮域を含む西一坊大路東辺一帯には集落が営まれるようになり，14世紀中頃まで続いたと思われる。第Ⅴ期以降の土器類はこれらの集落に住んだ人々が残したものであるが，14世紀後半頃から始まったたび重なる開田耕作のため，その大半は遺構から遊離し，包含層中に含まれることになった。遺構に伴った例は，井戸や土壙等深く掘り込まれたものから出土したものに限られる。第Ⅴ期以降の土器類には，土師器，黒色土器，瓦器，須恵器，灰釉陶器，白瓷系陶器（山茶椀），輸入陶磁器（青磁・白磁等）がある。ここでは主として遺構出土品を取り上げ，包含層から出土した灰釉陶器・白瓷系陶器・輸入陶磁器については節を改めて述べることにしたい。

i　SK 7040 出土土器

SK7040は馬寮域南辺のSB7027など小規模な掘立柱建物が集中する一画の東北に接して掘られた土壙である。奈良時代の土壙SK7041を切って掘られているため，SK7041の遺物も含んでいるが，大半は平安時代（10世紀末葉）の土器類である。これらは近辺の建物で生活した人々が投棄した遺物と考えられる。

土師器

出土した土器の多くは細片で，図示できる資料は少ない。土師器には皿と鍔釜がある。皿には口径15.8cm程度で口縁部が外反し端部がわずかに肥厚するⅠ類（51）と，口径10.9cm，器高1.4cm程度の小皿で，口縁部が外反気味に開き端部が丸くおさまるⅡ類（50），および口径10cm，器高1.5cm程度の小皿で，口縁部が大きく外反し端部が丸く肥厚するⅢ類（48・49）がある。Ⅰ類が胎土に多くの砂粒を含むのに対し，Ⅱ・Ⅲ類はまったく砂を含まない胎土で薄く作られているが，ひずみを持つ。Ⅰ類1個体，Ⅱ類1個体，Ⅲ類は10個体以上出土した。

黒色土器

黒色土器にはA・B両種があり，A類には椀と鉢がある。A類の椀（303）は口径15.1cm，器高6.4cm程度の大きさで，外方に踏んばる比較的長い高台を持ち，底部近辺から急激に内彎気味に立ちあがるのを特徴とする。径高指数42程度。器壁は比較的厚く，口縁部外面は丁寧にヘラケズリで調整する。図示したものについては，器面が荒れているため，ミガキの有無は定かでない。別の破片では，口縁部外面に粗いヘラミガキを加えた例がある。口縁部内面・底部内面については粗いヘラケズリを施す。高台部・底部にはヘラミガキはない。B類椀（304）の形態は基本的にはA類と同様であるが，調整手法が異なり，内外面とも細かく丁寧なヘラミガキを施している。A類椀は3個体，B類椀は2個体以上出土している。A類の鉢（305）は底部を欠損するが，蹴足が付いていた痕跡を有する。内面は丁寧にヘラミガキを施すが，外面はケズリ調整のみでミガキがない。同種の鉢は薬師寺西僧房から出土している。

須恵器

須恵器の器種には甕・鉢・壺があるが，いずれも細片である。鉢の口縁部は内彎気味に外方に開き，端部が玉縁状に丸くふくらむ。口縁部外面は不調整でロクロ目の凹凸をとどめ，底部

外面も不調整で糸切り痕が残る。

以上の他に灰釉陶器の長頸瓶の破片が1点出土している。

ii　SK 7097 出土土器

佐伯門SB3600の近くにある東西方向に延びる長方形土壙SK7097から，少量ではあるが，土師器・黒色土器・須恵器等が出土した。これらは，SD650B様式の後に続く型式である。 *

土師器　土師器の器種は杯A（70～74）のみで，約12個体ある。いずれも調整は口縁部上端のみを強くヨコナデするe手法によるもので，c手法によるものは皆無である。法量はほぼ同一で，口径14.4～15.0cm，器高3.0～3.2cmである。74は蒸籠として使用したもので，焼成後底面に小さな穴を穿孔している。

黒色土器　黒色土器には椀と甕がある。椀は小片で外面の器面が剝落しているため，ヘラミガキの有無は不明。内面には粗いヘラミガキを施す。甕（302）は平底で高台を持ち，外反する短い口縁部と長胴で内彎する体部からなる。体部外面にはヘラケズリを，内面には横方向のハケ目調整を施し，胴部上半部にのみ横方向のヘラミガキを加える。（301）は胴部上半を欠失し，やや小さいが302とほぼ同一形態で，調整も同様である。 *

須恵器　須恵器はすべて甕の小片で，奈良時代のものである。 *

iii　SE 7094 出土土器

SK7097の南約3mの位置にある石組井戸SE7094から，土師器の杯1点，皿1点，灰釉陶器皿1点が出土した。SK7097より新しい時期のものである。

土師器　土師器杯（68）は口径13.4cm，器高2.8cm，口縁部上位が外反し，端部はわずかに丸く肥厚する。皿（69）は口径10.0cm，器高1.2cmと小型である。口縁部上位が外反し，端部を上方につまみあげわずかに肥厚させている。両者ともe手法で調整。口縁部外面には粘土紐の巻き上げ痕跡を残す。 *

灰釉陶器　灰釉の皿（500）は口縁部上半を欠失するが，底部には低短な角高台が付つ。外面はロクロケズリで調整。灰釉は内面にのみ施し，暗黄緑色を呈す。この灰釉皿は前述の土師器よりも古い時代のもので黒笹14号窯型式に属す。 *

iv　SB 7060 出土土器

SB7060の柱掘形から少量の土師器・黒色土器・灰釉陶器の破片が出土した。土師器の器種には小皿がある。黒色土器にはSK7040と同様の椀と畝足の付く鉢，把手付甕，高台の付く大鉢等がある。黒色土器A椀（300）は器面が荒れていてミガキ等の調整は定かでない。灰釉陶器には椀(502)があり，口縁部外面をヘラケズリ調整せず，底部に糸切り痕跡を残すなど，末期段階灰釉陶器の諸特徴を備えている。焼成が甘いため，灰釉は灰白色に発色している。 *

v　SB 5958 出土土器

小規模な掘立柱建物SB5958の柱穴から，黒色土器B類の椀2点と瓦器の小椀1点が出土した。

黒色土器　黒色土器B類椀（312）は口径16.5cm，器高6.1cm，外方に開く比較的高い高台部近くから *

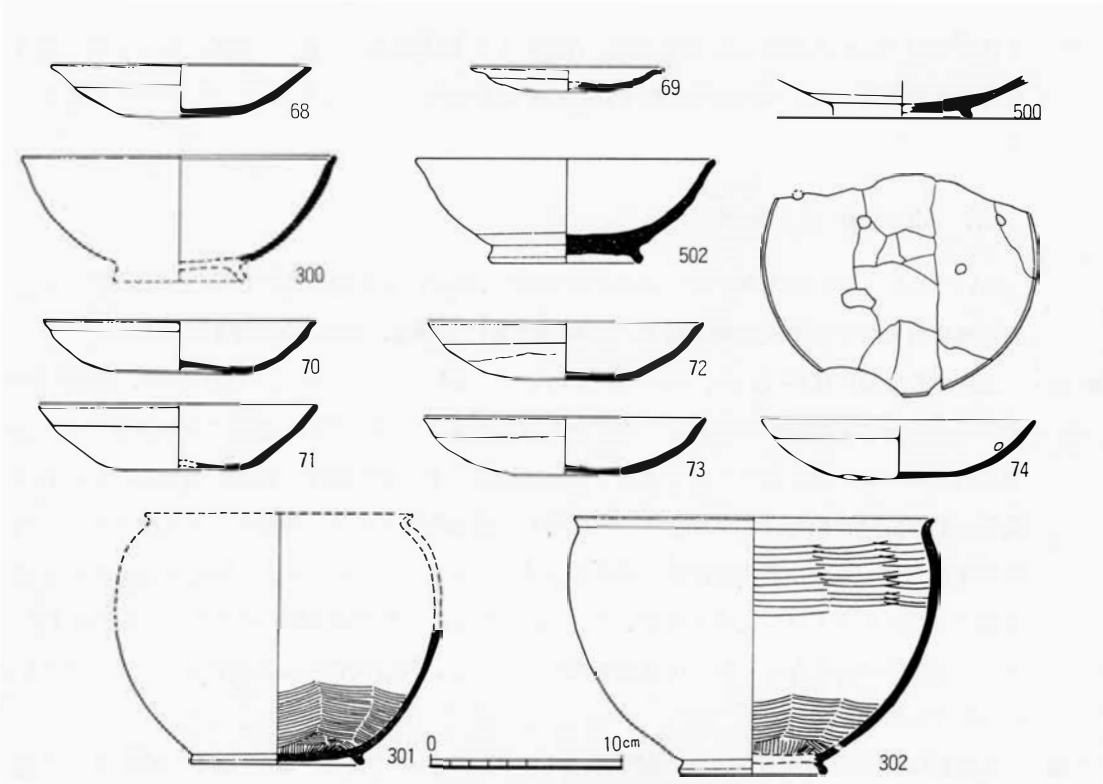


Fig. 49 SK7097・SK7094・SB7060出土土器

内彎気味に立ち上る口縁部で，端部が丸くおさまる。口縁部外面には4回に分け水平方向のミガキを，口縁部内面には連続回転ヘラミガキを施し，底部内面は一方向に粗くミガキを施している。底部外面・高台部にはヘラミガキを施さない。胎土は，SK7040やSB7026出土の黒色土器Bに比して砂っぽい。同小椀 (311) は口径9.4cm，器高4.1cmで，外方に踏んばる高台をもち，口縁部は下半から急に立ち上る。調整法・胎土は312と共通する。

瓦器の小椀 (400) は口径 10.3cm，復原高 4.1cm。高台を欠損するほかはほぼ完存する。口縁部外面上位の一部にヘラミガキが認められるが，以下の部位は器表面が剝落し，ミガキの様子を観察できない。口縁部内面は瓦器特有の回転ヘラミガキ，底部内面は直交する2方向にミガキを行なうが，底部全面には及ばない。灰白色の水簸粘土を胎土とする。 瓦　器

v1　SB 7026 出土土器

SB7026の柱穴から黒色土器A類の椀5個体，B類の椀1個体が出土した。後節で詳しく述べるが，これらすべては薬師寺西僧房床面土器の後に比定される型式であり，SB7026の年代を考えるにあたって貴重な資料となった。

A類椀 (306～309) は口径 15～16cm，器高 5.6～6.3cm。いずれも口縁部は底部近くから急激に内彎しつつ立ち上る形態で，内面の端部やや下位に浅い沈線もしくは段を有する。高台は比較的高く，外方に大きく開く。外面にはヘラケズリを施すが，308・309は口縁部上位を削り残し，ヨコナデ痕をとどめる。器面が荒れているため外面のヘラミガキの様子は定かでないが，308には横方向の粗いヘラミガキ痕が認められる。いずれも口縁部内面には連続回転ヘラミガキを施すが，総じて粗雑で，308のようにミガキの前段階で行なったヘラ状器具によるハケメ調整痕をとどめた例もある。

B類の椀（310）は高台を欠損するが，A類のものとほぼ同一法量で，細長く外方に開く高台を持つと考えられる。口縁部はA類と比べやや直線的であり，内外面のヘラミガキも密である。

vii　SE 6146 出土土器

6ADD-Q 区の SB3690の屋内にあたる位置に，相接して2基の井戸 SE6135・6146がある。共に縦板組みで平安時代後期に属す。SE6146からは土師器，瓦器，白磁片が出土した。

土師器　土師器の器種には杯（1点），小皿（2点）がある。杯（52）は完形で，口径14.8cm，器高3.5cmを測る。口縁部上端がやや屈曲し，端部を上方につまみ上げわずかに肥厚させる。e手法で調整，内面のヨコナデは底部にまで至らず，底部は単にナデで調整するのみ。口縁部外面に粘土紐巻き上げ痕跡，内面にコテを使用して調整した痕跡をとどめる。小皿はどちらも小片で，内彎気味に大きく外方に開く口縁部で端部の丸くおさまるもの（55）と，口縁部上端が屈曲し端部を上方につまみ上げて肥厚させたタイプ（56）がある。後者はSE7094のIII類の系統をひく。55は灰褐色系の発色を示し胎土に砂粒を含むのに対し，56は灰白色に発色，砂を全く含まないねっとりした胎土である。

瓦器　瓦器椀は約8個体分あり，うち完形品は2点（401・404）である。401・404はほぼ同一法量で，口径15.4cm，器高6.7cm，両者ともに外方に開く低短かつ太目の高台を持ち，口縁部外面に底部から口縁部に向って横方向のヘラミガキを3回に分けて施す。口縁部内面には水平方向の連続回転ヘラミガキを，見込み部分にはジグザグミガキを施す。401の口縁部外面および見込部のミガキは404に較べ粗い。402は底部を欠失するが，401と同様な調整法である。406は前述したものに較べ，口縁部があまり内彎せず，高台も細く高い。見込部分には互いに直交する2方向からジグザグミガキを施し，格子状に見せている。403は口縁部上位を欠くが，406と同様な高台を持ち，底部の中央付近に小さな突帯を巡らした珍しい例である。見込み部分には比較的細かいジグザグミガキを施す。405は口径18.2cmを測る大椀で，口縁内面上位には沈線がなく，端部も丸くおさまり，伴出した瓦器椀と形態を異にする[1]。口縁部外面には3段にわたって強いナデの痕跡を残すが，器表が荒れているため内外のミガキの有無は定かでない。胎土は他の瓦器椀と同様に水簸した白色の粘土である。小皿は小片で図示できないが，口縁部内面には横方向のヘラミガキを，見込み部分にはジグザグミガキを施している。外面にはヘラミガキはない。

viii　SE 6135 出土土器

SE6146の東南に接して存在する井戸 SE6135からも少量の土師器・瓦器が出土した。

土師器　土師器の器種には小皿と鍔釜各1点がある。小皿（54）は白色を呈し，よく焼き締っている。胎土は比較的ねっとりした粘土に粗砂を若干まじえる。口縁部上端のみをヨコナデ調整，底部内面はナデで調整。鍔釜（53）は頸部よりやや下位に幅2cmほどの鍔を付す。内縁端部は内外に折り返し丸く肥厚する。鍔の上下はヨコナデし，その他の外面はナデで調整。胴部内面はヘラケズリで調整。

1）同様な大椀は薬師寺から出土している。『昭和58年度平城宮概報』p.62。

瓦器椀（407）は完形品で，口径15.2cm，器高6.0cm。法量的にはSE6146出土の瓦器椀と同じであるが，外面のミガキはそれより粗く，また底部内面の見込み部分のジグザグミガキは粗雑である。SE6146の椀に比べ後出的な様相をもつといえよう。椀にはこの他，口縁部を欠失するが，見込みに多重の螺旋暗文を施した破片が1点ある。 瓦　器

＊　ix　SK 6470 出土土器

SB6430の東側にある円形土壙SK6470から少量ではあるが土師器・瓦器が出土した。土師器には皿（4片），鍔釜（1片）が，瓦器としては椀（5個体分の破片）と小皿（2点）がある。時期的にはSE6135より後出の型式である。

土師器皿には口径12.4cm，器高2.8cm程度の中皿（58）と，口径9.4cm，器高1.9cm程度の小 土師器
＊ 皿（57）がある。両者ともに灰白色を呈し，胎土に若干の砂粒を含み，堅く焼き締っている。いずれも口縁部上段をヨコナデ，底部内面をナデで調整する。

瓦器椀には口縁部がゆるやかに内彎する曲線で端部に至るもの（410）と，端部近くで急激に 瓦　器
立ち上るもの（411～413）とがある。両形態とも高台の断面は三角形だが，前者は後者に比べ高くて大きい。すべて口縁部外面に横方向の粗いヘラミガキを3回に分けて施す。口縁部内面
＊ の連続回転ヘラミガキは密であるが，見込みのジグザグミガキには細かいもの（410）とやや粗いもの（413）と差が認められる。小皿は口径 10cm，器高 2 cm 程度で，口縁部上位が外反する。口縁部内面に水平方向のミガキ，見込み部分にジグザグミガキを施すが外面にはない。

x　SK 6508 出土土器

SK6470の東方約12mの位置にある土壙SK6508から，SK6470よりやや古い時期の土師器・
＊ 瓦器が出土している。

土師器の器種には皿ＡⅠと皿ＡⅢがある。皿ＡⅠにはさらに口縁部が内彎気味に外方に開く 土師器
もの（59）と，外反気味に開くもの（60）の2種がある。いずれも口縁部外面をヨコナデするが，底部内面はナデで調整する。皿ＡⅢもまた，やや外反気味に外方に開くもの（61）と，口縁部が大きく屈曲し端部を上方につまみ上げて丸く肥厚させたもの（62）とがある。

＊　瓦器椀（415）は口径15.4cm，器高6.2cm。口縁部外面のミガキは3回に分けて，高台のすぐ 瓦　器
上方からほとんど隙間なく密に施する。見込部のジグザグミガキは粗い。高台は断面三角形状で比較的大きい。同椀（414）は口径14.4cm，器高5.9cmで，415に比べ幾分小型である。口縁部外面のヘラミガキが粗く，反対に見込み部のジグザグミガキは細くて密である。底部には断面三角形の小さな高台を付す。

＊　xi　SK 6509 出土土器

第Ⅳ期の掘立柱建物SB6430の東妻柱列の柱掘形（ニィ）を切る円形土壙SK6509から，12世紀前半期の土師器・瓦器が出土した。

土師器の器種には皿ＡⅡ（1点），同ＡⅢ（4点）がある。皿ＡⅡ（67）は口径15.0cm，器高 土師器
2.3cm でやや外反気味に外方に開く口縁部を持ち，口縁部上端のみをヨコナデ調整する。皿Ａ
＊ Ⅲには，ＡⅡを小型にした形態のもの（63・65・66）と，口縁部が内彎気味に立ち上るもの（64）

とがある。前者は灰白色，後者は赤褐色を呈する。

瓦　器　瓦器には椀（7個体）と小皿（1個体）がある。椀（416～420）は皆ほぼ同一法量で，口径が14.8～15.0cm，器高5.2～5.5cmである。断面逆三角形を呈す小さな高台を持つ。口縁部内面の沈線も端部近くに存在し，内面のヘラミガキも粗い。内面見込部のミガキは暗紋風に変化し，螺旋状を呈す。小皿（421）は口径9.3cm，器高1.7cmで，外方に開く口縁部を持つ。口縁部内面には横方向のミガキ，底部内面にはジグザグミガキを施す。 *

D　施 釉 陶 器

施釉陶器は，土師器・須恵器に比べ量的には少ないが，灰釉陶器・緑釉陶器・輸入陶磁器（青磁・白磁）がある。多くは遺物包含層から出土したもので，遺構に伴ったものは極めて少数である。 *

i　灰釉陶器・白瓷系陶器

灰釉陶器は総数65点出土したが，大半は小片で図上復原できるものは少ない。器種としては，椀・皿・唾壺・長頸瓶・広口瓶などがあり，椀・皿が多数を占める。これらは，胎土・形態・調整手法等からみて，後述する2点以外はすべて東濃産と考えられる。 *

灰釉陶器の大半は包含層から出土したものだが，比較的まとまりのある分布状況を示す。すなわち6ADD-N・G区に集中しており，ここはSB7024等の小規模建物が密集する箇所の東側にあたり，また井戸SB7094や長方形土壙SK7097にも近い。出土した灰釉陶器は，美濃地方の灰釉窯の編年に従えば，光ヶ丘1号窯式→大原2号窯式→虎渓山1号窯式の3型式にわたる。[1]

9世紀前半　9世紀前半代のSD650A型式は少なく，馬寮北辺のSB6430周辺からわずか2点しか出土していない。椀（545）は口縁部を欠失するが，腰の張る形態の小椀である。断面方形の高台が付く。刷毛によって内面にのみ施釉し，見込み部分には三叉トチンの当りを残す。外面には丁寧なロクロケズリを施す。皿（546）は，低短な角高台をもつ平底と内彎気味に外方に開き端部近くでわずかに外反する口縁部からなる。釉は546と同様刷毛により内面にのみ施す。外面のロクロケズリは口縁部の上位にまで及ぶ。両者は愛知県小牧市に所在する篠岡窯の産と見られる。 *

光ケ丘窯式　光ケ丘窯式にあたるものには，椀・皿・唾壺・長頸瓶などがある。椀（517）は，口縁部の外面数カ所に篦を押しつけて花弁状に見せる輪花椀である。口縁部は内彎し，端部近くで外反する。高台は比較的細長く，外側面が外傾し内側面が内彎するいわゆる「三日月型」高台である。外面はロクロケズリで調整し，釉は刷毛により内外両面に施すが，底部外面には施釉しない。皿（518・519）は，内彎気味に大きく外方に開き端部間近で外反する口縁部で，椀に比べて低短で太い三日月型高台を有する。口縁部上位を除く外面をロクロケズリで調整し，刷毛により口縁部内外面に施釉する。518は見込み部分にも施釉している。唾壺（548）は，残存する部分には釉がかかっていないが，ヘラミガキはなく，緑釉の生地とは思われない。体部と底部の境を一段くぼめて切高台風に見せている。底部および体部外面をロクロケズリで調整。長頸瓶（525）は胴部以下を欠失するが，外方に開く比較的短い頸部と外反する縁部が残る。口縁端 * *

1）灰釉陶器の産地・時期は斎藤孝正氏（名古屋大学文学部助手）の教示による。

遺物番号	出土地点	器種	外面ヘラケズリの有無 口縁部	外面ヘラケズリの有無 底部	釉掛け法	時期
500	6ADD-Q (SE7097)	皿	有	有	刷毛	K-14
501	〃	〃	有	—	〃	—
502	〃 (SB7060)	椀	無	無	漬け掛け	虎渓山
503	〃	椀	有	〃	—	大原2
504	〃	〃	〃	〃	漬け掛け	〃
505	〃	〃	〃	〃	〃	〃
506	〃	〃	—	有	〃	〃
507	〃	〃	有	〃	—	光ヶ丘
508	〃	〃	〃	〃	漬け掛け	大原2
509	〃	〃	無	—	無釉	—
510	〃	皿	—	—	漬け掛け	—
511	〃	椀	—	有	—	—
512	〃	〃	—	—	—	—
513	〃	皿	有	有	漬け掛け	大原2
514	〃	〃	—	〃	—	—
515	〃	把手付瓶	—	—	—	—
516	〃	椀	有	—	漬け掛け	—
517	〃	輪花椀	〃	有	刷毛	光ヶ丘
518	〃	皿	無	有	〃	〃
519	〃	〃	有	有	〃	〃
520	〃	〃	〃	〃	〃	〃
521	6ADD-N	椀	無	〃	漬け掛け	大原
522	〃	〃	〃	無	〃	虎渓山
523	〃	〃	〃	〃	—	—
524	〃	広口瓶	—	—	—	—
525	〃	長頸瓶	—	—	—	光ヶ丘
526	〃	広口瓶	—	—	—	—
527	〃	椀	無	—	無釉	光ヶ丘
528	〃	長頸瓶	—	有	—	—
529	〃	椀	無	無	—	—
530	〃	〃	〃	〃	漬け掛け	虎渓山
531	〃	〃	〃	〃	〃	〃
532	〃	〃	〃	—	—	—
533	〃	段皿	〃	—	—	光ヶ丘
534	6ADD-R	椀	有	有	—	—
535	6ADD-L	〃	—	—	漬け掛け	—
536	6ADC-H	小椀	無	無	—	—
537	〃	椀	有	—	—	—
538	〃	段皿	〃	—	—	—
539	6ADC-G	椀	無	無	無釉	西阪
540	〃	瓶	—	—	—	—
541	6ADC-N	椀	無	無	—	丸石
542	6ADC-P	椀	有	有	漬け掛け	—
543	6ADC-L	瓶	—	—	—	—
544	〃	段皿	有	有	刷毛	光ヶ丘
545	〃	小椀	〃	〃	〃	K-14
546	〃	皿	〃	〃	〃	〃
547	〃	手付瓶	—	—	—	—
548	〃	唾壺	—	—	—	光ヶ丘

Tab. 10 馬窪地域出土灰釉陶器一覧

部を一旦内側に折り反し，さらに上方に小さくつまみ上げてある。灰釉長頸瓶としては特異な口縁形態であり，猿投窯では今の所類例見出し難く，胎土から美濃産と判断した。灰釉は口縁部および頸部外面と口縁部内面の上位に施されている。528 は長頸瓶の底部破片で，底部外面と残存する胴部外面をロクロケズリで調整する。

＊　大原 2 号窯式に属するものには椀・皿がある。椀 (504・505) は，いずれも外方に踏んばる比較的高い断面矩形に近い高台を持つ。底部外面と底部よりやや上位の口縁部下位をロクロケ

大原 2 号窯式

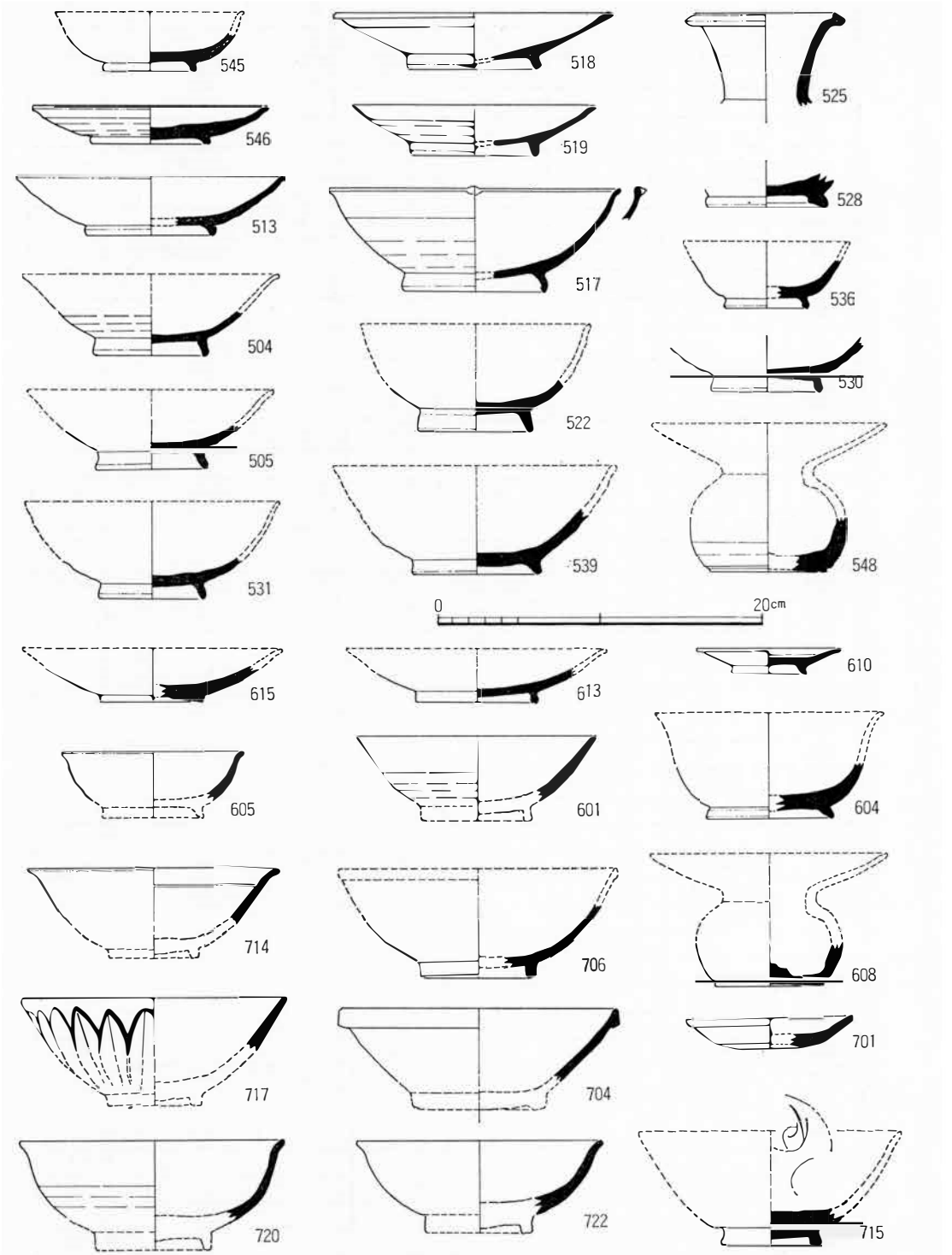


Fig. 50　施釉陶器実測図

ズリで調整。口縁部中位から上位にはロクロ目が残る。釉は漬け掛けにより口縁部内外面に施す。皿 (513) は外方に開く低短な高台を持ち，口縁端部は丸くおさまる。漬け掛けにより口縁部内外面に施釉する。椀と同様，口縁部下位から底部外面をロクロケズリで調整する。

虎渓山1号窯式

虎渓山1号窯式にあたるものとしては椀類がある。531 は八の字形に外方に開く高い高台と腰部からほぼ真直ぐ立ち上る口縁部からなり，深椀の形態である。外面が不調整で，口縁部外面にはロクロ目を，底部外面には糸切り痕をとどめる。釉は漬け掛けにより口縁部内外面に施す。536 は小椀で，内面に暗灰緑色の釉が掛る。

山茶椀

以上のほか，白瓷系陶器，いわゆる山茶椀も一点出土している (539)。灰釉陶器と同じく美濃産と目され，中でも西阪窯式の山茶椀に近い形態をもつ。

ii 緑釉陶器

緑釉陶器は包含層から総計16点が出土した。緑釉陶器も灰釉陶器と同様，小規模な掘立柱建物が集中分布する 6ADD-Q・N区周辺から出土している (Tab. 10)。

緑釉陶器の器種には椀・皿・唾壺がある。605 は口径11.2cm前後に復原できる小椀であり，内彎する口縁部は端部近くで外反する。外面は不調整でロクロ目をとどめ，内外面に濃緑色の釉が掛る。生地は暗灰色～灰褐色を呈する硬陶で，近江産と考えられる。601は口径1.15cm程の椀で，底部近辺が内彎し，それより上位が外反気味に開く口縁部をもつ。口縁部は丸くおさまる。口縁部外面下半をロクロケズリで，上半をロクロナデで調整し，内面にはヘラミガキを施す。内外面に薄黄緑色の釉が掛る。灰白色の胎の硬陶である。604 は八の字形に外方に開いた高台が付く平底と，外傾度の小さい口縁部からなる深椀の破片である。高台内側面はくの字形に屈曲する。底部内面には三叉トチンの痕跡，釉下に生地焼成時に生じた重ね焼きのあたり・輪状痕跡をとどめる。全面に暗濃緑色の釉が掛る。暗灰色の胎の軟陶である。615 は切高台の皿で，底部中央部が一段深く円形にケズリ出したいわゆる蛇ノ目高台を持つ。口縁部・底部外面をロクロケズリで調整し，内面にはヘラミガキを施す。釉の残りが悪く，口縁部内外面に部分的に遺存するに過ぎない。白色の粒子を多量に含む灰色の胎の硬陶である。613 は断面矩形を呈する貼付高台を持った皿の破片で，底部外面と口縁部下半のみをロクロケズリで調整。全面に薄緑色の釉が掛る。暗灰色の胎の硬陶で，東海産と考えられる。610 は口径9.6cm，器高1.5cmの小型の段皿で，外方に踏んばる細い高台を付した平底と，外反気味に外方に開く口縁部からなる。口縁部内面に浅い段を持つ。底部外面はナデにより，口縁部

遺物番号	出土地点	器種	焼成	産地
600	6ADC-G	椀	軟陶	
601	〃	〃	硬陶	
602	6ADC-L	段皿	〃	
603	〃	小椀	軟陶	近江
604	〃	椀	〃	〃
605	〃	小椀	硬陶	〃
606	〃	〃	〃	〃
607	〃	椀	〃	〃
608	〃	唾壺	〃	
609	6ADD-L	椀	軟陶	
610	6ADD-N	段皿	硬陶	東濃
611	〃	小椀	軟陶	
612	〃	稜椀	硬陶	
613	〃	皿	〃	東海
614	6ADD-L	〃	〃	京都
615	6ADD-Q	〃	〃	〃
616	〃	〃	軟陶	

Tab. 11 緑釉陶器一覧

外面はロクロナデで調整する。釉の残りが悪く，内面と口縁部外面，高台部外面に部分的に残る。灰白色の胎の硬陶で，東濃産と目される。608 は唾壺の下部の破片である。底部外面周辺部と体部にロクロケズリを施すが，底部中央部には及ばず糸切り痕をとどめる。青味の強い薄緑色の釉が外面全面に掛る。内面底部にも一部釉の発色が認められる。

iii　輸入陶磁器

出土した輸入陶磁器は総数26点ある。そのうちわけは青磁片10点，白磁片15点，雑陶 1 点で，遺構に伴ったものはわずかに 1 例 (700)，他はすべて包含層からの出土にかかる。出土地点は Tab. 11のとおりで，分布上特に顕著な傾向は認められない。時期的には11世紀から15世紀にわたる。多くは細片であり，器種さえ不明なものがある。

青　磁　青磁はすべて龍泉窯系であり，その器種には椀と，器形は不明であるが貼花による唐草紋を持つ破片などがある。椀には，蓮弁紋を口縁部外面に片彫りするものと，無紋のものとがある。蓮弁紋にはさらに，弁に鎬を持つもの (717) と持たないものの 2 種がある。他に蓮弁の形態は詳かでないが，見込みに花紋を片彫りしたもの (715) もある。無紋の椀 (714・720) はいずれも口縁部上端が外反する形態で，714は口縁部内面に一条の沈線をめぐらせる。

白　磁　白磁の大半を占めるのはやはり椀であり，他に三足の切立香炉片と皿があるが，これらはやや時期が下る。椀には，口縁部が内彎し，端部外面にの小型玉縁を持つもの (706)，外方に直線的に開く口縁部で，幅広の玉縁を持つもの (704)，口縁部が内彎し上端が外反し端部が丸くおさまるもの (722) の 3 種がある。玉縁口縁の椀は，口縁部下半以下が露胎で，口縁部外面はロクロケズリで調整する。皿 (701) は狭い平底と屈曲する口縁部からなる。口縁部下半以下は露胎で，釉調は青味を帯びる。

遺物番号	地　区	種　別	器　種
700	SE6146	青白磁	椀
701	6ADD-N	〃	皿
702	〃	青　磁	椀
703	6ADD-O	〃	不明
704	6ADD-P	白　磁	椀
705	〃	灰　釉	壷
706	6ADD-Q	白　磁	椀
707	〃	〃	〃
708	〃	〃	〃
709	〃	〃	〃
710	〃	〃	〃
711	6ADC-L	〃	切立香炉
712	〃	〃	壷
713	6ADC-K	青　磁	椀
714	6ADC-N	白　磁	〃
715	〃	〃	〃
716	6ADC-G	青　磁	不明
717	6ADC-O	〃	椀
718	〃	白　磁	椀
719	〃	青白磁	不明
720	6ACD-P	青　磁	椀
721	〃	〃	不明
722	6ADC-R	白　磁	椀
723	〃	〃	〃
724	6ADC-K	〃	不明
725	〃	〃	椀

Tab. 12　輸入陶磁器一覧

E　SK 1623 出土土器

第15次調査で検出した土壙 SK1623から多量の土器類が出土した。遺構については既に『平城宮報告IX』において報告済みだが，SK1623から出土した土器は総数 368 個体におよび，土師器・須

恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁があり，9世紀後半代の基準資料となりうるので，ここで出土遺物について紹介しておきたい。まず遺構の概要を述べる。

SK1623は平城宮西面南門（玉手門SB1616）の東方約20mの位置にあり，南北5.1m，東西4.0m，深さ1.0mの長方形の土壙である。近辺には，馬寮地区に見られるような宮廃絶後に建てられた小規模な掘立柱建物があり，それらの建物で使用されたものを投棄した塵芥処理用の穴と考えられる。

i 土 師 器

土師器の器種には杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・皿C・高杯・甕・鍔釜・竈があり，食器類が圧倒的多数を占める。皿Cを除き，いずれも同様な胎土組成をなし，Ⅱ群系統に属す。

杯Aは法量の上から杯AI～AⅢに分かれる（別表4）。杯AI (80～82) は口径16～17cm前後で，高さ2.5～3.3cm。口縁部は外傾度が高く，口縁部上端がくの字形に屈曲する。杯AIの調整にはc・eの2手法が認められ，c手法の方がやや多い。杯AⅡ (77～79) は口径14.0～15.5cm，高さ2.4～3.7cm。形態は杯AIと共通する。調整法にはc・eの両手法があり，その比は5.5：4.5でc手法が若干多い。杯AⅢ(80) は口径13～14cm，高さ2.4～3.1cm，調整法にはc・e両手法があり，その比は杯AⅡと同様でc手法がやや多い。杯AⅡ・AⅢの中には，燈明器として利用した痕跡をとどめる例が少数ある。

皿Aは法量によって皿AI・AⅡに分れる。皿AI (88～91) は口径16.8cm，高さ1.7～2.0cmで，広い平坦な底部とくの字形に外反する口縁部からなり，口縁部は内側に巻き込み大きく肥厚する。調整法にはc (91) とe (88～90) 両手法があり，その比は，7：3の割で前者が多い。皿AⅡ (83～87) は口径14.6～15.3cm，高さ1.7cm。形態はAIと同様であるが，AIよりも器壁が薄く，口縁端の巻き込み小さくわずかに上方に突出している。c・e手法の比率は3：2で，cが多い。燈明器として使用された痕跡を持つ例が若干ある。

皿Bは磁器系器種を模した形態で，比較的長く細い高台と浅い皿部からなる。口縁部が内彎し皿部が比較的深いもの (92・94) と，直線的な口縁部で皿部が非常に浅いもの (93) がある。すべて調整は c_0 手法による。

皿C (105～107) は口径10.3～10.6cm，高さ2.2cm程の小皿で，平坦な底部と大きく外反する口縁部からなる。調整はすべてe手

土師器	338	
杯AI	19	90
AⅡ	34	
AⅢ	37	
杯B	48	77
杯B蓋	29	
皿AI	34	107
AⅡ	73	
皿B	18	
皿C	8	
高杯	6	
甕	10	
鍔釜	1	
カマド	1	
須恵器	7	
皿B	1	
鉢A	3	
壺B	3	
黒色土器	23	
杯A	1	
杯B	10	
皿B	1	
鉢A	1	
甕	8	
壺	1	
硯	1	
中国製陶磁器	2	
青磁椀	1	
白磁椀	1	
灰釉陶器	14	
椀	9	
皿B	5	
緑釉陶器	4	
椀	3	
皿B	1	

土師器	318(86.8%)
須恵器	7(2.0%)
黒色土器	23(6.2%)
中国製陶磁器	2(0.5%)
灰釉陶器	14(3.5%)
緑釉陶器	4(1.0%)
計	368

Tab. 13 SK1623出土土器の器種構成

法による。ほとんど砂粒を含まない灰白色の粘土を胎土とし，すべてよく焼け締ってるいが，ひずみを持つ。

杯Bには底部と口縁部を共に備えた例が少ないため統計上から法量による分類は行ない得ないが，口径22.2cm，高さ5.7cmと大型で口縁部が内彎気味に立ち上るもの（100），口径19cm，高さ6cm前後で底部からほぼ真直ぐ外方に開く中型品（97・98），口径18.0cm，高さ4.0cmで口縁部上半部が屈曲する比較的小型のもの（99）の3種が認められる。いずれも口縁端部を内側に折り返し小さく肥厚させる。高台は低短で断面逆三角形状を呈するものが多い。すべて c_0 手法で，e手法で調整されたものはない。

土師器	調整			
	c手法	e手法	不明	
杯AⅠ	13	5	1	c…58%
AⅡ	18	15	1	e…42%
AⅢ	20	17		
皿AⅠ	24	10		c…64%
AⅡ	40	26	7	e…36%
杯B	48	0		
皿B	18	0		
皿C	0	6		

Tab. 14 SK1623出土土師器の調整手法

椀（96）はロクロ製で，灰褐色を呈し硬く焼け締っている。高台は比較的高く，外方に八の字形に開く。

高杯（101～104）は扁平な杯部に長大な脚部をそなえたものである。6個体以上出土しているが，杯部と脚部が接合する例はない。杯部と脚部の接合法はすべて心棒に粘土を巻き上げる方法で，心棒には上下で径があまり変らないものを使用している。104は杯部内面をヨコナデで，外面をヘラケズリで調整するが，粘土紐の巻き上げ痕跡をとどめる。裾部の縁部内外面はヨコナデで，それより上位の裾部内面はヘラケズリで調整。杯部・裾部ともミガキ調整は行なわない。脚柱部はヘラにより五面体に面取りする。杯部片（101）・裾部片（102・103）も108と同様な手法で調整する。

甕には，口径が胴径を上回るいわゆる広口の甕（108・109）と，口縁部がくの字形に屈曲し，口縁端部が内側に巻き込み，胴部が比較的丸味を持つもの（110～112）がある。前者は口縁部内外面ヨコナデ，胴部内面を水平方向ヘラケズリで調整する。外面にはかすかにハケメ痕をとどめるが，全面には及ばず雑な調整である。後者の甕は口縁部内面を横方向のハケメで，外面をヨコナデで調整。110は胴部内面をナデで調整するが，頸部直下の内外両面には叩き成形の痕跡が残る。

鍔釜（113）は甕Aの頸部直下に鍔を付した形態で，鍔は幅広の粘土帯を延して貼りつける。口縁部と鍔部をヨコナデで調整する。

118は載頭砲弾形に粘土紐を巻き上げ，その一側面を下方から方形に切開して焚口とした，移動式竈の焚口上辺の破片。口縁端部を内側に折り返し，口縁部内外面をヨコナデで，体部外面をハケメで，内面をヘラケズリで調整する。この他，同様な形態だがやや大形のものと，焚口部周縁に廂が付いた竈の破片がある。

ii 黒色土器

黒色土器の器種には杯A・杯B・皿B・椀・鉢A・壺・甕・硯がある。硯のみがB類で，他のすべてはA類である。多くは細片で器面が剝落しており，調整手法が観察できるものは少量しかない。

杯Aと認定できる破片は1片しかなく，供膳形態の大半は杯Bが占める。杯B（313～317）

の口縁部はすべて内彎するが，上端で外反するもの（313・316）と，しないもの（314・315）がある。口縁端部はみな丸くおさまり，沈線を有する例はない。外面の調整は口縁上端ヨコナデで調整するものが多い。c手法による例は少なく，また外面にヘラミガキを施した例は313・315の2点だけである。317は底部外面にもミガキを施す。

＊ 皿B（318）は内彎する浅い口縁部を持ち，上端でわずかに外反する。口縁部外面にはヘラミガキを施す。

鉢A（319）は小片であるが，口径15cm程度の小型の鉄鉢形に復原できる。

小壺（320）は口径9.4cm。卵形の胴部と外反する小さな口縁部からなる小型壺である。口縁部から肩部近辺にかけて横方向のヘラミガキを施す。

＊ 硯（323）はB類の風字硯で，縁部に沈線が巡る。底部外面には低短な脚が付く。

壺（224・225）は内彎する体部に外反する小さな口縁部がつく。いずれも胴部の大半を欠損するが，平城京東三坊大路東側溝（SD650）から出土した同種壺では断面逆三角形の小さな高台がついている。胴部上半部は横方向のヘラミガキを施す。

甕（321・322，326～328）は丸い体部と比較的長く外反する口縁部からなり，端部を上方に若＊ 干つまみ上げ肥厚させている。口径12～14cmの比較的大型のもの（326～328）と，口径9.5～10.5cmの小型のもの（321・322）がある。

iii 須恵器

須恵器の器種には皿B・壺・鉢・甕の他，混入品と思われる奈良時代の杯，杯B蓋，壺Kの破片がある。須恵器の大半は灰黒色を呈し，やや焼きが甘く，灰が降着した例でも十分に融けき＊ らず白く斑点状にふき出している。白色の粒子をかなり含むやや砂っぽい粘土を胎土とする。

皿B（236）はやや外方に開く断面矩形の高台に浅い皿部を付す。口縁部は，一旦内彎気味に外方に開き，端部近くでくの字形に外反する。口縁部内外面をロクロナデで調整。底部外面は不調整で，ヘラ切り痕をとどめる。

双耳瓶（263）は，口縁部を欠損するが，平底と卵形の体部からなる。肩部付近に相対する位＊ 置に粘土紐を貼り付けた耳をもつ。胴部外面ヘラケズリ，肩部上位はロクロナデ，底部外面はナデで調整する。壺類としてはこの他，平底で徳利形になる底部片（262）と，角高台で体部不調整のもの（261）がある。262は底部糸切りのまま不調整。

鉢には，平底で外傾度が小さく内彎気味に立ち上る体部に外傾する短い口縁部を付すもの（259）と，広い平底でほぼ直線的に外方に開き端部近くで内彎する口縁部をもつもの（260）と＊ がある。前者は口縁部から体部外面をロクロナデで調整。底部外面は不調整で糸切り痕をとどめる。後者は口縁部外面の下半部をロクロケズリで，上半部をロクロナデで，底部外面はナデで調整する。

iv 灰釉陶器

灰釉陶器の器種はすべて供膳形態で，椀と皿がある。椀・皿とも製作技法の上で共通する特＊ 色を示すので，先に一括して技法上の特色について述べることにしたい。施釉法はすべて刷毛塗りにより，内面にのみ施釉している。重ね焼き焼成であり，器物同士の融着を防ぐため，底

部には断面が縦長で端部が尖る三角形を呈する高台，いわゆる「三日月形高台」が付いている。後述する1例を除き外面はロクロケズリで丁寧に調整する。胎土も共通した要素を持ち，全体的に暗灰白色を呈するやや砂っぽい粘土で，黒色の微粒子を含む。東濃産の灰釉と思われる。

椀は法量によってⅠ～Ⅳに区分される。椀Ⅰ（552・553）は口径10.3～11.5cm，器高3.7cm程度で，口縁部上位が外反する。553の外面調整は幾分雑で，ロクロケズリは底部と口縁部下位に限られ，上半部には及ばない。他の椀に比べ若干時期が降る可能性が高い。椀Ⅱ（551）は口径8.8cm，器高3.2cm。口縁部は内彎気味に端部に至り，上半部はほとんど外反しない。ロクロケズリは口縁部上位まで及ぶ。椀Ⅲ（550）は椀Ⅱと同一形態で，口径8.0cm，器高2.7cm。椀Ⅳ（549）は口径6.8cm，器高2.1cmで，口縁部上端部が外反する。口縁部外面には非常に細かいロクロケズリを施す。

段皿（554・556）の口縁部は直線的に大きく外傾し，内面に段を有する。いずれも底部を欠失するが，大小2種あり，大は口径11.7cm，小は9.8cmほどである。

皿（557・558）は内彎気味に外方に開き，端部近くが外反する口縁部をもつ。椀類に比べると，やや太い三日月形高台を付す。557は口径10.7cm，器高1.7cm。

v　緑釉陶器

緑釉陶器は3点出土した。617は腰が折れた稜椀に近い形態の椀の口縁部片で，口縁端部を外方に薄く引き出している。口縁部外面はロクロケズリで調整。口縁部内外面にヘラミガキを施す。暗灰緑色の釉が掛り，内部面が灰黒色を呈する硬陶緑釉である。618は稜椀の底部近辺の破片で，端面が幅広くわずかに内側にくぼむ低い貼付高台を付し，切高台風に見せている。見込みおよび高台部にはトチンの痕をとどめる。灰緑色の釉が掛り，内部面が暗灰白色の硬陶緑釉である。619はほぼ完形の深椀。口径19.8cm，器高6.2cm。蛇の目の切高台が付く。全体的に分厚く，口縁端部の引出しもにぶい。見込みには生地焼成時の重ねのあたり（輪状痕跡）とトチンの痕を残す。口縁部外面をロクロケズリ，内面をロクロナデで調整したのち，両面および見込部に細かいヘラミガキを加える。黄色味の強い淡緑色の釉が全面に掛り，断面が灰白色を呈する軟陶緑釉である。

vi　磁　　器

輸入陶磁器としては青磁・白磁があり，器種には椀がある。各1点ずつ出土。

青磁椀（726）は底部を欠損するが，ほぼ直線的に外方に開き上端部がわずかに外反する口縁部を持つ。オリーブ色を帯びた暗緑色の釉が掛る。白磁椀は口縁部の小片で，小さな玉縁を持つ。図示できないがやや新しい時期の白磁とみられ，混入品の可能性もある。

4 木 製 品 (PL. 66・67, Fig. 51)

木製品は，SE6166（第52次調査 6ADC-K区），SE7110（第71次調査 6ADD-P区），SD6482（第52次・62次調査 6ADC-G・H区）などの遺構から出土した。なかでもSE6166からは比較的多くの木製品が出土した。まず奈良時代の木製品について種類ごとに述べ，次に奈良時代以降の木製品を一括して述べる。

A 奈良時代の木製品

祭 祀 具

削掛け（1～9）

削掛けはSE6166，SD6151・6482・5960の各遺構から出土した。

SE6166からは1～6の6本の削掛けが出土した。1～4はヒノキの薄板の一端を削って圭頭状にし，他端をとがらせている。いずれも側面に各々1箇所ずつ切込みを施こすB2型式に属する。1箇所の切込み回数は，1が3回，2・4も割れ口からみて3回，3は1回である。3・4は両面を割り面のままとし，1・2は片面のみを荒く削り平滑とする。

	全 長	最大幅	最大厚	材 質	型 式
1	31.5	2.95	0.3	ヒノキ	B_2
2	30.7	3.2	0.25	ヒノキ	B_2
3	26.8	3.6	0.2	ヒノキ	B_2
4	(19.8)	3.15	0.4	ヒノキ	B_2
5	(26.4)	0.95	0.7	ヒノキ	不明
6	25.1	0.85	0.55	ヒノキ	不明
7	23.1	2.5	0.3	ヒノキ	B_2
8	(15.5)	2.2	0.3	ヒノキ	B_2
9	(14.9)	2.75	0.2	ヒノキ	B_1

Tab. 15 削掛け計測表（単位 cm）

5・6は薄板の側面に切込みを入れるものと異なり，角棒の稜に切込みを入れる。厚さ1cm内外の板から角棒を割り取り，頭部を斜めに削り角錘状とし，一端をとがらせる。5は割放しのままで6は四面を削る。切込みの位置・回数はほぼ同じである。各々対角線上の2本の稜に，2カ所と3カ所の切込みを入れる。切込み回数は各所とも1回である。SE6166出土の削掛け6本は，型式や大きさからみて，1と2，3と4，5と6の2本ずつ3組にわけることができる。

7は下端を欠失するがほぼ完形である。頭部側面の左右一カ所に一回の切込みを入れる。側面のみに削りを行ない，表・裏面は割り面のままとする。B2型式。SD6482出土。8もB2型式で側面の左右一カ所に一回の切込みを入れる。切込みはひじょうに深く左側の切込みで5.7cmに達する。下端を欠失し腐蝕が著しい。SD6151出土。9は破損により全形をとどめない。頭部の左右が欠失しており，切込みの有無は不明である。ただし欠失の状態からみて，頭部上端から切込みを入れるB1型式になると思われる。下端を欠失し腐蝕が著しい。SD5960出土。

---

1) 『平城宮報告IX』p. 76。

2) 黒崎直「斎串考」(『古代研究』10) 1976では本例をF型式としている。

ii 食 膳 具

杓子（10・11）　10はB型式の大形杓子である。薄い板目材を用い，身の表面は荒く削り，裏面は割り面のままとする。身の側縁部は斜めに削り薄くしている。柄の大部分と身の半分を欠失する。全長（22.7cm），身幅（4.3cm），身厚0.4cm。ヒノキ。SD6159出土。11も同じく身の先端を半円形とするB型式の杓子である。薄い割り材を加工して仕上げる。身中央はさらに丁寧に削ってくぼませる。表面と側面は荒く削り，裏面は割り放ちのままとする。全長（13.6cm），幅（2.3cm），最大厚0.3cm。スギ。SE6166出土。 *

iii 容　　器

曲物容器（13～15，17，20）　13はSE6166から出土した完形の曲物である。厚手の材を用いた堅牢なつくり。側板上端部がつぶれて内傾しており，本来の高さをとどめない。直径22.8cm，厚さ0.8cmの底板に，高さ13.2cm，厚さ0.35cmの側板をつける。側板は幅0.8cmの樺皮で，6段潜り一列で縫いつけ，横に一段引きだして縫いおわる。側板内面の一部に縦および斜め方向の刻線（シラビキ）がある。側板下端には幅2.2cm，厚さ0.2cmのタガをまわし，9カ所を木釘で留める。タガは重ね合わせを長くとり，2カ所を樺皮1段潜りで縫いつける。重ね合わせ部分にシラビキを施す。側板・底板内面を黒く塗る。14は第Ⅱ期の南北棟掘立柱建物SB5955の東側柱列南から2番目の柱掘形から出土した。直径16.6cmの底板に，高さ6.95cmの側板をつける。側板は上端を小さく切り欠いて，3段潜り一列で縫いつけ，横へ引きだして縫い終わる。底板は柾目材で6カ所に木釘を打ち込んでとめる。タガはない。側板の内面には重ね合わせ部分を中心にシラビキを施す。側板・底板内面を黒く塗る。15・17は曲物底板。15はほぼ全容をうかがえるが，割れ・腐蝕が著しく木釘穴をとどめない。柾目材。直径（21.6cm），最大厚0.5cm。6ADD-P区出土。17は柾目材で一カ所に木釘穴をとどめる。側縁は斜めにたつ。表面には刃物のあたりのような刻線が縦横にはしる。裏面には腐蝕による凹凸がある。全長（11.35cm），幅（3.55cm），厚さ0.6cm，復原径16.4cm。SD5960出土。20はSE7110から出土した大形の曲物。直径38.8cmの底板，高さ27.8cmの側板をつける。上下2段にタガをまわす。上段タガ幅4.9cm，下段タガ幅5.2cm。側板は幅0.8cmの樺皮を用いて2列に縫いつける。側板上端から下端へ向かって左列を4段潜りで縫い，右列へ移り下から上へ向って3段潜りで縫いつける。底板とは木釘で固定する。側板下端に上下2列に木釘穴がめぐり，そのいずれにも木釘の残るものがある。上段の釘穴を用いて底板をとめ，下段の釘穴にうった木釘で補強したものであろう。底板内面には側板のとりつけ位置を示した円形の刻線がある。側板内面にシラビキはない。側板・底板内面を黒く塗る。この他SE7008からは井戸枠として用いられた曲物が出土している。底板は無く，直径34cm，高さ18cmの側板下端に，幅6cmのタガがまわる。10の底板がスギ，あとはすべてヒノキ。 *

押敷底板（16）　大形の隅丸長方形もしくは方形の押敷の底板であるが破片のため全容は不明である。綴穴の痕跡を一カ所に残す。長さ（17.3cm），幅（9.8cm），厚さ0.6cm。ヒノキ。SE6166出土。 *

1）『平城宮報告Ⅶ』p.119。

iv　そ　の　他

黒漆塗部材 (12)　柾目材を削り出した断面楕円形の棒状部材。一端は角を落とし丸く仕上げる。表面中央に幅 1.7cm にわたり一段削り込んだ部分があり，黒漆はこの部分に施されている。下地はなく木地に直接黒漆を塗ったものと思われる。他端は折損・腐蝕しているが，斜めに他の部材を組合わせられるような溝が切られている。さらにこの部分の外面にも漆が厚く塗られている。全長 (16.2cm)，上端幅2.3cm，下端幅2.7cm　ケヤキ。SE6166出土。

板状木製品 (24)　柾目の板状品。木口には切断面をそのままとどめる。その他の面は削りによって平滑にする。ただし裏面を中心に腐蝕がすすみ凹凸が著しい。全長22.3cm，幅 3.4 cm，厚さ 0.85cm。SD6181出土。

NO.	長　さ	最大幅	材　質
22	(17.6)	1.1	ヒノキ
23	(19.2)	2.15	ツバキ
24	22.3	3.4	ヒノキ
25	(24.3)	1.3	不　明
26	(31.2)	1.8	ヒノキ
27	(31.9)	1.45	ス　ギ
28	22.3	3.4	ヒノキ

Tab. 16　板状・棒状木製品計測表
（単位 cm）

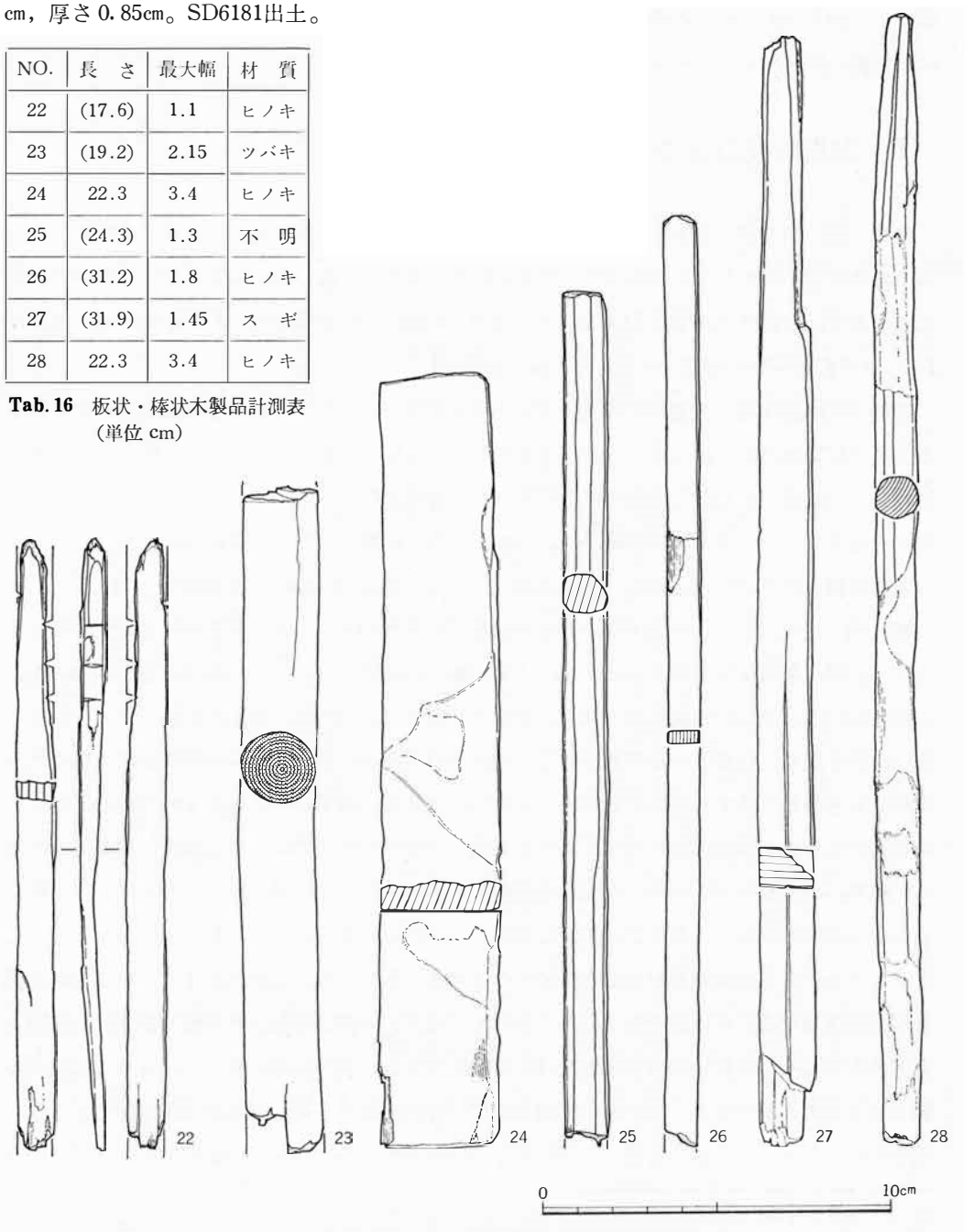


Fig. 51　板状・棒状木製品実測図

棒状木製品（22・23・25～28）　SE6166からは割材を加工した棒状木製品が５本出土した（22・23・25～27）。22は両端を折損する。厚さ1.1㎝の板材から割り取った棒状材の６カ所に切込みを入れる。上部両側面は，右側面３カ所，左側面２カ所に浅く切込みを入れるが，腐蝕のため切込みの基部を残すのみである。下部の切込みは１カ所で削掛け5･6のように稜に斜め上方から切込まれる。削掛けの一種とも考えられる。23は心持材の表面を丁寧に削り，断面円形の棒状としたもの。両端を折損する。25は角材を荒く面取りし，丸棒状とする。一端を折損する。26は一端を削りによって丸く整え，他端を折損する。表裏・側面ともに削りによって平滑にする。27は一端に出枘を作る。斜めに別の部材と組み合わせたものと思われる。他端を折損する。28はSD6482から出土したもので，一端をやや細く作りそこから８㎝下がった点を中心に，上下約5.5㎝にわたる腐蝕し細くなった部分がある。この腐蝕部分を側板のあたりとすれば，枘杓の枘と考えることができる。

B　奈良時代以降の木製品

横櫛（21）　鋸で細い歯を挽きだした挽歯の横櫛である。平面形は長方形のＡ型式に属する。ムネはゆるやかに弧をなし，断面は半円形となる。歯の挽き通し線はムネに平行してゆるやかに弧をなす。歯数は２㎝当り24本である。全長（4.1cm），厚さ0.8㎝，ムネ高0.95㎝，歯長3.1㎝。９世紀末～10世紀初。イスノキ。SE 7094出土。

漆椀（18）　横木取り挽き物の漆椀。底部と体部の境がはっきりし，体部は直線的に立ち上がる。高さ1.35㎝の高台がつく。内面はゆるやかに彎曲し半球状となる。そのため底部と体部の境目付近の器壁が厚くなる。内外面とも黒色の下地を施した上に朱漆を塗る。高台内の底部外面に黒漆で「二」と書く。口径12.5㎝，高さ6.35㎝。中世。ブナ。SK6169出土。

曲物容器　SE6123は井戸枠に大形の曲物を用いる。直径約70㎝，高さ約10㎝。11世紀。

靫（19）　心持材の表面を荒く削り断面を長方形にしたのち，中央から山形に曲げて作る。３カ所で折損し左端を欠失する（以下上下・左右は靫を装着した状態を，牛の背後から見た場合を指し，前後は進行方向による）。中央の屈曲部と左右の先端部とは，比較的丁寧な削りを行なう。右の先端部は細く削り，ゆるやかに彎曲させる。中央部の下面から前・後面にかけて顕著な紐ずれの痕跡をとどめる。紐ずれ痕は左右17㎝にわたる。全体では紐ずれの痕跡を４カ所にとどめる。中央部から左右の直線部分にうつるあたりには，内側へむかってゆるやかに隆起する箇所がある。幅38.1㎝，全高（31.2㎝），中央部断面幅4.7㎝×厚さ3.8㎝。靫の類例としては藤原宮西方官衙地域SK1380から，むながい棒および轅との連結部材を伴って出土した完形品[2]をあげることができる。７世紀末の藤原宮造営時のものと考えられている。藤原宮出土のものは，轅と靫とが連結部材を介して直結する長轅式のものであるが，本例は連結部材がなく紐ずれの痕跡をとどめるところから短い轅の先端から，綱（横綱）が伸び，靫の両端に結びつけられる短轅式の靫と考えることができる。轅からの横綱を結びつけた痕跡が右端に残る紐ずれ痕跡であろう。絵巻物によれば，しりがいも同一箇所に結びつけられている。むながいは左右の直線部分中位

1）『平城宮報告Ⅶ』p.113。
2）『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告Ⅱ』1978　p.77～78。

に残る紐ずれ痕跡に結びつけられたと考えられる。ただし中央部に残された顕著な紐ずれ痕跡の機能は不明である。11世紀。SK6509出土。

C 部　　材

今回の調査では，掘立柱の柱根・礎板・木樋暗渠・井戸枠などの部材が出土している。小形の木製品とは別に，部材としてまとめて述べることにする。樹種鑑定，計測を行なった資料は柱根88本，礎板25点，井戸枠12点，木樋３点である。

i 柱　　根

いずれも心持丸太材の表面を手斧によって縦に削る。そのため断面が不整形な多角形となるものが多い。ただし現在のこっているのは地中に埋め込まれた部分であり，地上で柱として機能する部分については，ヤリガンナなどで円形に仕上げられていたものと思われる。下端の小口面は手斧削りでととのえられ，鋸で切断したものは見られなかった。手斧による削りは全体に荒いもので，小口面に段差のつくものや，斜めになるものがある。

樹種は調査した88本のうち，ヒノキ47本（53%），コウヤマキ35本（40%），ツガ２本，不明４本である。ヒノキとコウヤマキの比率について平城宮内の平均値ヒノキ61%，コウヤマキ35%とくらべると，ヒノキがやや少ない傾向を示していると言える。またSB6172は６本の柱のうち２本がツガ，他４本も広葉樹で，本調査区内では特異な存在である。第Ⅱ期の南北棟掘立柱建物SB5955・5956は，柱根の残りの良い建物であるが（柱根残存率SB5955：85%，SB5956：45%），当初に造営されたSB5956にはコウヤマキが用いられ，増築されたSB5955にはヒノキが用いられている。次に述べる時期的な用材の変遷もあわせて興味深い結果である。

年代的に見ると，古い建物にコウヤマキの使用が多い傾向をうかがうことができる。第１次大極殿地域においても，第一期の東楼SB7802と南北塀SA3777にコウヤマキが用いられ，第二期の掘立柱建物SB6640・6650・6660などにはヒノキが用いられている。ただし宮内の他の地域では資料点数が少なくはっきりしないが，今のところこのような傾向は認められない。

柱根の径は建物毎に特定の数値に集中する傾向を見せる。本調査地域内で特徴的な桁行の長い建物では，平均径が20.42cm（SB5951），20.85cm（SB5955），18.00cm（SB5956），23.05cm（SB6100）と，いずれも20cm前後の比較的細い材を用いている。これに比べ桁行・梁行とも３間で総柱となるSB6140やSB6340では，径30cm前後の材が用られており，倉庫としての荷重を考慮した用材となっている。また南北塀SA5950は３本残った柱根の平均径が41.07cmと宮内でも大形の部類に属する。同様な機能を持つ掘立柱塀では，第１次大極殿東面を画するSA3777の柱根平均径が44.06cmで，40cmを超える太い材を用いている。

柱根下端に筏穴のあるものは少ないが，SB6425では残存する５本の柱根すべてに筏穴が残る。さらにSB6425の筏穴は宮内の柱根に一般的に見られる手斧であけた大形の筏穴と異なり，ノミであけたと思われる小形の筏穴となっている。

---

1) 島地謙・伊東隆夫「古代における建造物柱材の使用樹種」（『木材研究資料』第14号 1979）p. 49～76。

2) 『平城宮報告XI』p. 139。

ii 礎　　盤

礎盤は25点出土した。いずれも不整形な割り材を用いている。礎盤と言うものの角材状のものが多く，井桁状に組みあげた上に柱を載せている。樹種はヒノキ13点（52%），コウヤマキ7点（28%），スギ5点（20%）となり，スギの比率がいくぶん高い。今回は明らかに転用材と認められる礎板の出土はないが，SA5950の礎盤には筏穴の痕跡を残すものがある。 *

iii 井 戸 枠

3基の井戸について井戸枠の計測，樹種鑑定を行なった。いずれも11世紀後半から12世紀の井戸である。SE6300の枠板は横板井籠組井戸枠一段分が残り，南北の枠板は両端中央に突出を作り，東西の枠板はそれに応じた欠き込みを作って組み合わせる。内面には手斧による削り痕跡が残る。SE6130・6146は縦組井戸で，縦板と横桟が同一樹種でできている。 *

iv 木　　樋

底板1枚と側板2枚が残っている。腐蝕が著しく本来の長さをとどめない。底板中央の両側縁近くと側板の対象位置に枘穴と考えられる長楕円形の穴があいており，底板と側板とを太枘で連結していたと推定される。

種類	遺構番号	柱位置	長　さ	径(幅)	樹　種	種類	遺構番号	柱位置	長　さ	径(幅)	樹　種
柱根	SB3690	六　イ	90.6	34.8	コウヤマキ	礎盤	SA5950	八十	72.5	19.0	ス　ギ
		十一イ	83.5	30.5	〃				92.3	26.0	ス　ギ
		十四イ	72.4	30.0	〃			九十三	31.3	8.5	ヒ　ノ　キ
		一　ハ	56.6	34.4	〃	柱根	SB5951	八　ロ	23.0	9.1	ヒ　ノ　キ
		六　ハ	76.8	31.7	〃			五　ニ	72.6	17.5	コウヤマキ
		十二ハ	46.5	26.4	〃			六　ニ	35.8	22.7	ヒ　ノ　キ
柱根	SA5950	NJ　49	(91.5)	38.7	コウヤマキ			八　ニ	49.8	20.8	〃
		GC　49	(88.6)	41.5	〃			十　ニ	66.8	20.3	〃
		HH 50	(64.2)	43.0	〃			十一ニ	61.9	20.8	〃
礎盤	SA5950	六十二	59.5	16.9	ヒ　ノ　キ	柱根	SB5955	一　イ	60.9	16.4	ヒ　ノ　キ
		〃	47.5	17.2	〃			二　イ	51.5	19.5	〃
		〃	47.7	16.8	〃			三　イ	65.6	20.9	〃
		〃	45.1	7.3	〃			四　イ	63.0	21.0	〃
		〃	30.2	13.8	〃			五　イ	52.4	18.4	〃
		〃	47.2	16.8	〃			六　イ	44.6	20.9	〃
		六十三	37.4	6.6	コウヤマキ			七　イ	46.6	22.6	〃
		〃	51.0	16.9	〃			八　ロ	48.5	19.8	〃
		〃	55.2	16.3	?			一　ハ	73.2	20.9	ヒ　ノ　キ
		六十八	68.4	18.1	ス　ギ			二　ハ	42.1	18.3	〃
		〃	71.8	18.2	〃			三　ハ	56.1	19.3	〃
		八十	102.7	26.1	ス　ギ			四　ハ	56.8	21.2	〃

Tab. 17　木製部材一覧（単位 cm）

種類	遺構番号	柱位置	長　さ	径(幅)	樹　種
柱根	SB5955	五　ハ	46.4	21.8	ヒ　ノ　キ
		六　ハ	48.5	16.6	〃
		七　ハ	54.0	23.5	〃
		八　ハ	37.4	21.2	〃
		九　ハ	36.1	23.4	〃
柱根	SB5956	二　イ	89.0	14.5	コウヤマキ
		六　イ	124.5	17.3	〃
		八　イ	79.1	18.3	〃
		十　イ	(61.6)	19.7	〃
		一　ハ	91.0	16.0	〃
		四　ハ	54.3	18.2	〃
		六　ハ	64.4	17.0	〃
		七　ハ	79.0	19.3	〃
		八　ハ	(60.8)	19.8	〃
		十　ハ	45.1	16.1	〃
柱根	SB6100	十五イ	50.1	21.6	コウヤマキ
		四　ハ	56.7	24.5	〃
柱根	SB6120	四　イ	75.9	23.8	コウヤマキ
		五　イ	64.4	23.0	〃
		七　イ	82.5	23.2	〃
		八　イ	53.6	13.2	ヒ　ノ　キ
		九　イ	86.5	25.6	コウヤマキ
		二　ニ	41.1	23.9	コウヤマキ
		四　ニ	50.5	24.2	〃
		五　ニ	101.6	23.6	〃
		六　ニ	110.0	23.4	〃
		七　ニ	49.4	25.9	ヒ　ノ　キ
		八　ニ	41.1	23.9	コウヤマキ
柱根	SB6130	二　イ	46.1	34.6	ヒ　ノ　キ
柱根	SB6140	三　イ	30.6	37.9	ヒ　ノ　キ
		四　ロ	31.7	31.0	〃
		三　ハ	31.3	18.6	〃
		一　ニ	62.5	35.8	〃
		三　ニ	53.1	27.4	〃
礎盤	SB6171	一　イ	28.0	11.5	コウヤマキ
柱根	SB6172	二　イ	79.0	23.3	ツ　　ガ

種類	遺構番号	柱位置	長　さ	径(幅)	樹　種
柱根	SB6172	三　イ	36.8	15.5	不明(広葉樹)
		四　イ	44.4	—	不明(広葉樹)
		三　ハ	33.6	10.5	不明(広葉樹)
		四　ハ	18.9	9.6	不明(広葉樹)
		九　ハ	64.6	23.5	ツ　　ガ
柱根	SB6175	一　ハ	49.3	23.8	ヒ　ノ　キ
		五　ホ	53.6	33.5	〃
		六　ホ	17.9	17.1	〃
礎盤	SB6185	二　イ	35.4	18.3	コウヤマキ
		三　ハ	20.6	17.1	〃
		三　ホ	33.7	13.6	ヒ　ノ　キ
柱根	SB6330	四　ロ	50.6	20.4	コウヤマキ
		一　ハ	74.8	28.4	〃
		三　ニ	57.7	29.2	〃
礎盤	SB6340	一　ロ	32.5	9.6	コウヤマキ
		二　ニ	27.8	15.7	〃
柱根		三　ニ	39.2	30.3	ヒ　ノ　キ
	SB6345	六　ハ	39.8	22.8	ヒ　ノ　キ
礎盤	SB6400	三　ロ	38.0	14.5	ヒ　ノ　キ
			28.2	15.2	〃
			44.0	7.6	〃
			36.5	9.8	〃
柱根	SB6401	三　ロ	52.2	22.1	コウヤマキ
柱根	SB6425	一　イ	110.8	27.8	ヒ　ノ　キ
		二　イ	100.1	28.9	不明
		七　イ	55.8	19.7	ヒ　ノ　キ
		一　ロ	58.5	25.7	〃
		二　ハ	116.7	27.8	〃
柱根	SB6428	一　ニ	38.7	7.6	ヒ　ノ　キ
柱根	SB6450	五　ロ	62.7	24.2	不明
		五　ハ	64.2	25.2	〃
		五　ニ	82.2	25.0	〃
		五　チ	49.0	23.7	ヒ　ノ　キ
柱根	SA6994	一	56.1	18.6	ヒ　ノ　キ
		二	42.3	15.0	〃

Tab. 17　木製部材一覧（単位 cm）

5　金属製品・石製品・土製品 (PL. 68)

今回報告する地域から出土した奈良時代の金属製品・石製品・土製品は少なく，しかもその多くは床土下の遺物包含層からの出土である。以下種類ごとに述べる。

鉄鋤先（1）　U字形の鉄板2枚をあわせ，叩いて整形したものである。先端部を折損しており歯先の状態は不明であるが，外縁部は使用のため磨滅している。袋部は先端で推定の深さ＊が約2.2cmあり，一部に木質をとどめる。全長16.8cm，全幅16.8cm。SB6166出土。この種の鉄鋤先の類例としては，静岡県伊場遺跡から出土した木製の身部を伴った例が有名である。本例も木製身部の先端に装着したもので，推定第1次朝堂院地域のSD3765からは柄と身を一木でつくる完形品が出土している。ただし伊場遺跡出土品は歯先がほぼ直線となるもので，形態的には奈良県阿部六ノ坪遺跡や鳥取県伯耆国庁跡SK04の出土品が本例に最も類似する。特に阿＊部六ノ坪遺跡では井戸内から木簡・削掛けなどと共に出土し，出土状態の類似が注目される

鉄釘（2・3・4）　いずれも鍛造の角釘である。頭部のつくりによってA～Dまでの4種に分類される。このうちの端部を折り曲げて頭部とするA（2・4）と，平形の丸頭をつくるD（3）がみられる。2は頭部と先端部を折損する。断面は一辺1.2cmの方形となる。全長（17.1cm）。6ADD-Q区出土。3は楕円形の釘頭をつくる。断面は一辺0.8cmの略方形となる。全長15.1＊cm。6ADC-G区出土。4は先端を折損する。全長6.1cm。6ADD-Q区出土。

鉄鑿（8）　断面長方形の鉄棒の先端を偏平に細くし楔状とする。頭部は丸くなる。頭部の敲打痕と先端部の磨滅ははっきりしない。全長8.1cm，断面幅1.0cm，厚さ0.8cm。6ADD-Q区出土。

鉄鏃（4・7）　4は平根式の鉄鏃である。先端部を折損するが良く原形をとどめている。鏃＊身は斧箭式となる。茎は0.4cm角で細長く，先端をとがらせる。全長（15.1cm），身最大幅3.1cm。6ADC-H区出土。7は両端を折損する。厚さが0.2cmしかない偏平なものであるが，鉄鏃の茎と考えここに含めた。全長（7.4cm），最大幅0.9cm。6ADC-H区出土。

鋳銅製品（10）　青銅製。左右に大きなバリが残り，上部にも溶銅がはみだしている。香炉の脚部か。左右のバリを欠失する他には二次的な破損はなく，本体の鋳込みに至る前に鋳造＊に失敗し，廃棄されたものと思われる。高さ4.7cm，下端幅2.6cm。6ADC-G区出土。

砥石（5・6）　5は両端を折損する。表裏に剝離が見られる。表面は平滑でよく研磨されている。全長（9.9cm），幅3.1cm，最大厚1.0cm。砂岩片岩。6ADD-P区出土。6は方柱状の砥石。表裏二面を研面としている。下端を折損する。全長（12cm），幅3.1cm，最大厚3.8cm。砂岩片岩。6ADD-P区出土。＊

鞴羽口・鉱滓　発掘区西端の長方形土壙SX6350と掘立柱建物SB6360内のピット群からは，鞴羽口や鉱滓が多量に出土している。鞴羽口は小片に破砕したものが多く，図化できるものはない。鉱滓は分析の結果鉄滓が大部分を占め，一部に銅滓が混っている。

1）浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編Ⅰ』1978 p.13～14。
2）『平城宮報告Ⅺ』p.201～202。
3）関川尚功「桜井市阿部六ノ坪遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報　1982年度　第1分冊』1983) p.233。
4）倉吉市教育委員会『伯耆国庁跡発掘調査概報（第3次）』1976　p.14～15。
5）『平城宮報告Ⅸ』p.78。

6 銭　　貨 (PL. 68)

銭貨は8種18点，銭文不明1点が出土している。

和同開珎（1・2）　1は背面内郭縁の四隅が丸い和同開珎E。保存状態は良く銭文は鮮明である。6ADC-H区出土。2は和同開珎Aである。鋳上がりがあまり良くなく背面の内郭縁
＊ がずれている。SA5950の柱穴（北から16番目）から出土した。

萬年通寶（3）　外縁幅が広く「潤縁」とよばれる萬年通寶B。鋳上がり，保存状態ともに悪く，銭文は腐蝕のため不鮮明である。6ADC-H区出土。

神功開寶（4・5）　4は功の旁を「力」につくり，開は「開」につくる。「力功神功」とよばれる神功開寶B。6ADC-G区出土。5は「長力」と呼ばれ「刀」の第2画が長く伸びる
＊ 神功開寶E。SD6482出土。

隆平永寶（6）　銭型の大小でわけた場合の「大様」に属する隆平永寶A。3片に割れており隆を欠失するが，鋳上がりは良く銭文は鮮明である。背面は鑢の仕上を行なわず，鋳造時に生じた細い隆起線がある。6ADC-G区出土。

開元元寶（7）　銭文の磨滅が著しい。武徳4 (621) 年初鋳。6ADC-G区出土。

＊ **祥符元寶**（8・9）　2枚とも同じ銭文である。祥符元 (1008) 年初鋳。6ADC-H区。6ADD-N区出土。

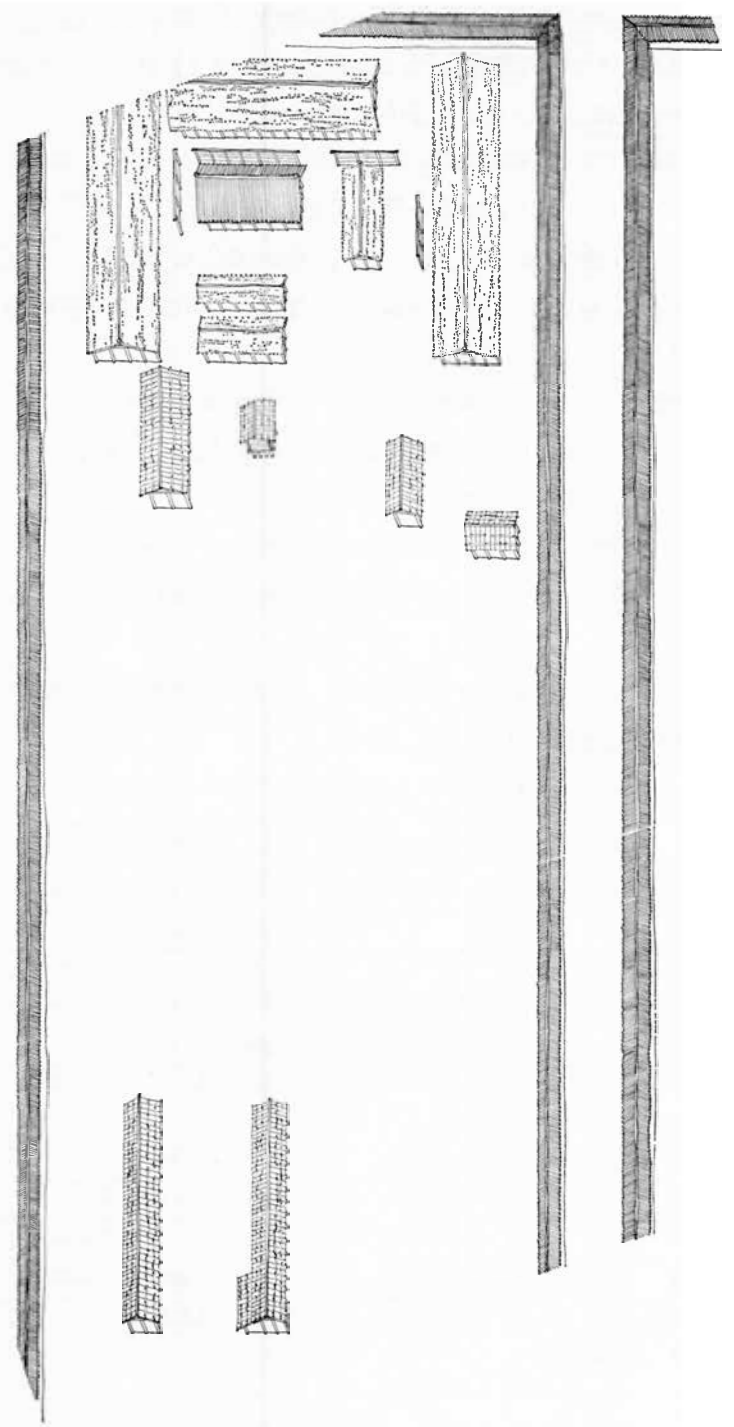
治平通寶 (10)　銭文には真書と篆書の2種があり，そのうちの篆書のもの。銭文は肉厚である。治平元 (1064) 年初鋳。6ADC-H区出土。

寛永通寶 (11〜17)　7枚ある。計測値，出土地区を表示するにとどめる。

番号	銭貨名	(W) g	(G) mm	(N) mm	(g) mm	(n) mm	(T) mm	(t) mm	(出土地点)	初鋳年	備　考
1	和同開珎	1.515	24.28	21.08	7.53	6.58	1.02	0.19	6ADC-H	708	和同開珎E
2	〃	2.834	24.73	21.13	8.03	6.10	1.42	0.61	SA5950	〃	和同開珎A
3	萬年通寶	2.729	25.43	20.58	8.38	6.43	1.16	0.48	6ADC-H	760	萬年通寶B
4	神功開寶	4.467	25.55	20.50	8.65	5.95	1.52	0.82	6ADC-G	765	神功開寶B
5	〃	1.470	24.20	21.18	8.83	6.45	0.83	0.27	SD6482	〃	〃　E
6	隆平永寶	1.930	—	—	—	—	1.57	0.80	6ADC-G	796	隆平永寶A
7	開元通寶	2.855	23.95	19.68	8.60	6.55	1.27	0.52	6ADC-G	621	背面無文
8	祥符元寶	3.397	24.45	19.10	7.35	6.23	1.26	0.82	6ADC-H	1008	
9	〃	3.184	25.05	18.75	7.73	6.23	1.14	0.60	6ADD-N	〃	
10	治平元寶	3.477	23.75	18.65	8.13	6.60	1.31	0.72	6ADC-H	1064	篆書体
11	寛永通寶	2.410	25.05	20.28	7.30	5.83	1.24	0.62	6ADC	1626	
12	〃	3.066	25.30	19.50	7.98	6.03	1.21	0.64	6ADC-P	〃	
13	〃	2.492	24.38	20.08	7.90	6.03	1.16	0.69	6ADC	〃	
14	〃	0.943	(21.65)	18.78	7.88	6.53	(0.51)	0.31	6ADD-K	〃	
15	〃	2.234	22.90	17.25	8.00	6.58	0.92	0.53	6ADD-K	〃	
16	〃	4.147	23.63	18.90	7.75	5.58	1.31	1.03	6ADC-O	〃	
17	〃	2.460	—	—	—	—	1.10	0.52	6ADC-O	〃	

Tab. 18　銭貨一覧

1) 『平城宮報告VI』 p. 97〜99。銭貨計測値についても本書を参照。



馬窯第Ⅳ期の遺構の想定図

第Ⅴ章　考　　察

1　馬寮地域の変遷

馬寮官衙域内における平城宮関係の遺構が第Ⅰ～第Ⅴの５期に区分できることは第Ⅲ章 2Gにおいてすでに指摘したところである。ここでは各時期の遺構にみられる配置計画とその特性について検討を加えるとともに，各時期の絶対年代比定を試みる。その過程において，いくつかの時期がさらに２小期に細分できることを明らかにしてゆく。

A　第Ⅰ期の遺構

宮造営当初，まだ大垣や官衙建物は未完成の段階である。検出した遺構としては地割りのためのものと思われる溝 SD6980と仮設の塀 SA3680などがあるに過ぎない。

SD6980 は馬寮地域南辺で検出した東西溝である。西面中門（佐伯門）SB3600 の南北中軸線（すなわち宮の中軸線）上にあり，宮内道路の一部と思われる礫敷 SX7000の下層において検出された。また，馬寮東官衙南半部の西を限る第Ⅱ期の西北溝 SD5960との切り合いでも，SD6980は古いと判断できる。断面U字形をなす素掘りの溝で，下半部には２～３層の堆積土が認められるが，上半部の埋土は一様であり，第Ⅱ期の遺構造営にあたって一気に埋め戻されたものと考えられる。当溝の心の座標はN13.80くらいであるが，次項で述べるように第Ⅱ期の遺構はこの溝を基線とした75尺方眼に従って造営されており，地割溝と見て誤りあるまい。　**地割溝**

西面大垣のすぐ内側にあって馬寮地域を南北に貫く掘立柱塀 SA3680は，柱穴の切り合い関係ではどの遺構よりも古く，第Ⅱ期の75尺方眼の計画線とは合致しない。柱間寸法も一定とは思われず，柱はすべて抜き取られている。また，西面中門に対応する部分は途切れ，以南へは振り分けの形で延びる（SA3590）。これらの点から，西面大垣造営中に仮設的に設けた遮閉施設であると判断した。　**仮設の塀**　北面大垣（SA2300）においては，大垣構築前に同位置に掘立柱塀 SA2330が存在した。この点に関しては，宮の外郭を掘立柱塀で画することは藤原宮にもあるため前代の遺制とも考えられるが，『続日本紀』和銅４年９月４日条の「宮垣未だ成らず云々」の記載にみえる宮垣を宮城大垣を指すと捉え，造営工事の進捗上の理由によって北面において臨時的措置として塀で画したものと解釈した。SA3680を同様の仮設物とみれば，北面大垣のばあいとは違って大垣予定地をあらかじめ避けて内側に設けたことになり，臨時的措置にも別種のあり方が存したことになるが，この方が合理的であろう。

第Ⅰ期の年代を直接物語る物証はない。しかし，遷都の詔（和銅元(708)年）からさほど隔らない時点におさえることができよう。

---

1)『平城宮報告Ⅸ』p.83。

B　第Ⅱ期の遺構

馬寮官衙としてはじめて体裁が整った時期である。掘立柱建物6と土壙1があり，正殿・前殿と西脇殿からなる正庁ブロックを北半中央に配し，南方両脇に馬房・倉庫および馬の水洗場と思われる長大な土壙を加えた構成をなす。南半中央部は広場状の空間となる。周囲を区画する施設は検出されていない。ただし西面に関しては，仮設の塀SA3680が一時その役を果し，大垣構築後には大垣自身が西限を画した。また，発掘した範囲内ではこの時期に属する井戸はない。未発掘地である西北隅部に存在した可能性も考えられようが，不確実である。

上記の遺構は，重複関係・出土遺物の点からは勿論，遺構の配置状況，柱間寸法，柱掘形などの類似性，基準尺などの面からも同一時期に属し，かつ最古の官衙遺構であると考えられる。なお，何棟かの建物には増築の形跡が認められ，増築前をⅡa期，増築後をⅡb期と細分できるが，配置の点では変更がないようなので，まずa・b両期をまとめて取り扱うことにしたい。

i　配置計画

SB6450は馬寮地域北半中央にある正庁殿舎群中の二面廂付東西棟建物である。桁行7間，柱間も10尺等間であり，正殿とみるにふさわしい。このSB6450を東西に分ける中軸線(W44.95)および身舎南側柱筋(N236.70)を配置計画の基準線とみると，すべての遺構が一定の配置計画に則って，極めて整然と配置されていることが判る。

まず，先述の地割溝SD6980との関係を見てみよう。溝心(N13.80)から南北基準線までの距離は222.90m，これは1尺＝0.297mとすると750.5尺になる。西面中門から同北門までの計画寸法は900尺であり，建物配置の南北基準線は両門心間を75尺間隔で12等分した線上に乗る。また，東西基準線から西面大垣の推定心(W111～112)までの距離は66～67mで，先の基準尺で除すると222.22～225.58尺となり，225尺すなわち75尺×3の値に近似する。これらから，75尺方眼を配置の大枠としていることが想定できよう。

75尺方眼

では次に，他の建物がこの75尺方眼に則しているかどうか検討してみよう。東西基準線から脇殿SB6425の東側柱筋までは21.80m，これは1尺＝0.297mとすると73.40尺となり，値は若干小さいが75尺と大差ない。SB6425と東側柱筋を揃えた倉庫SB6330のばあいもほぼ同様である。正庁殿舎群の東南方にある東廂付南北棟SB6170の東廂柱筋までは21.85m，73.57尺とやはり若干小さい値となる。南妻は基準線から55.15m，185.69尺離れているが，これは75尺×2.5の値187.5尺に近似する。東南方に遠く離れた馬房SB5956・5955の棟通りまでは22.65m，すなわち76.26尺で，やや大きい値ではあるがこれも75尺に近い。また，SB5956の振分心の位置は基準線から111.6m，375.7尺で75尺×5となる。なお，SB6425の増築前の北妻柱筋が基準線と合致する。

一方，前殿SB6180は上記の75尺方眼に乗らない。しかし，SB6180は西妻を正殿SB6450の西妻に揃え，しかも南側柱筋は基準線から29.50m，ほぼ100尺の位置にあり，正殿と密接な関

1)『平城宮報告Ⅸ』p.86。

2)　75尺にするためには基準尺を1尺＝0.291m以下とせねばならず無理か。

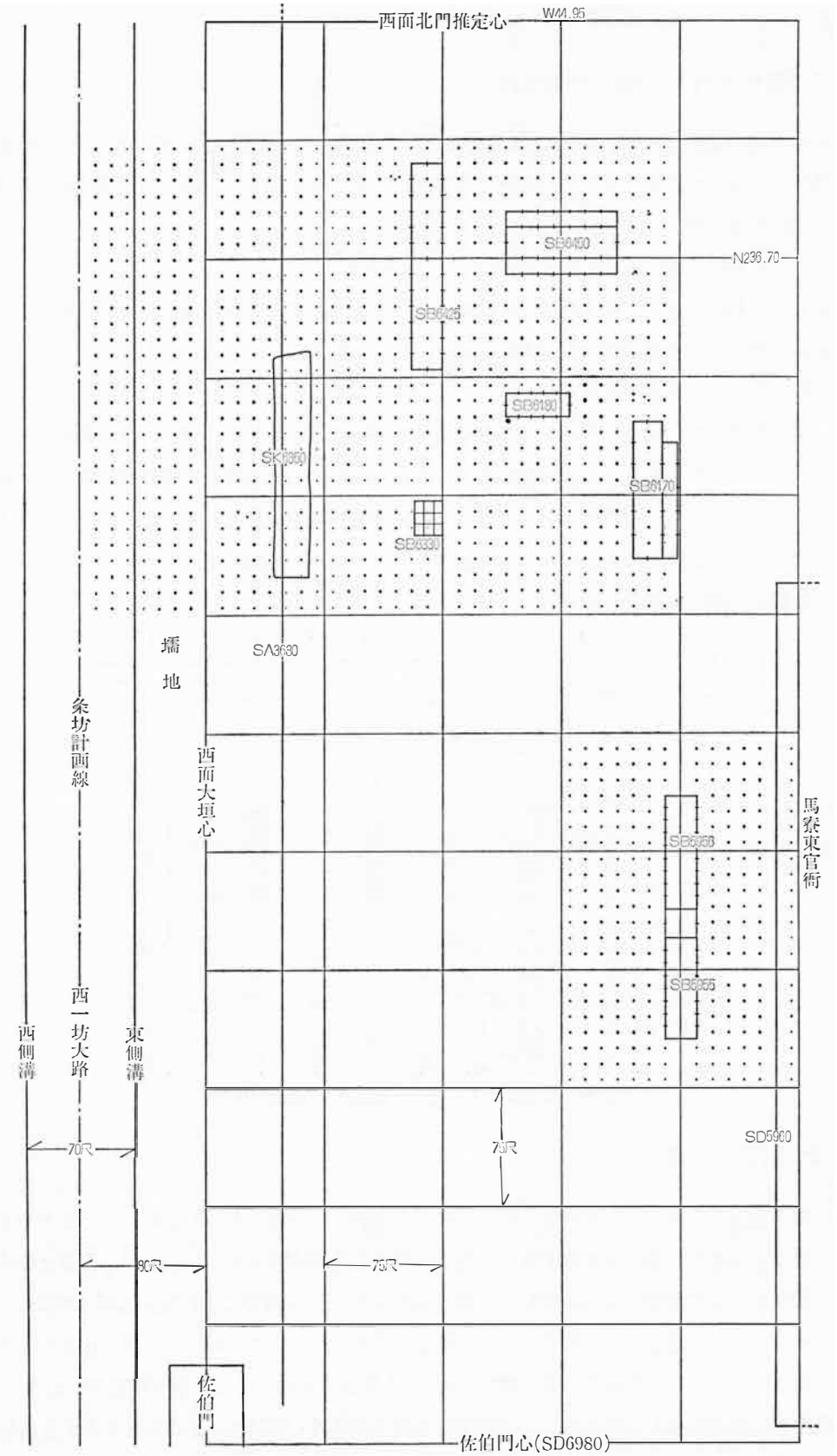


Fig. 52 第Ⅰ・Ⅱ期の遺構配置

係にある。これには別種の規制が働いているとみるべきであろう。あるいは後に建て増しされたもの，すなわちⅡb期に属する可能性も強い。

ii　藤原宮西方官衙との類似性

藤原宮西方官衙（B期）と平城宮馬寮とは，共に宮の西端に配置され，建物配置等に類似点の多いことはすでに指摘されているところである。[1)] そこで類似しているとして掲げられたのは次の諸点であった。 *

a）共に宮の西端を占め，南北長900尺が一致する。

b）桁行18間を超える長大な南北棟建物を配し，その間に広い空閑地をとっている。

c）四至を画する施設がない（西面大垣のみ）。

d）長大な矩形土壙を伴う。 *

一方，藤原宮では西面中門と同南門間に占地しているのに対して平城宮では西面中門と同北門間であり，また東西長さは藤原宮が2倍大である等の相違点も同時に指摘されており，両者の性格をただちに同一視することはできないという慎重な態度がとられている。ここでは上の類似点のほかに，さらに両者に共通する特徴として次の点を追加しておく。

e）75尺方眼の配置計画の存在。 *

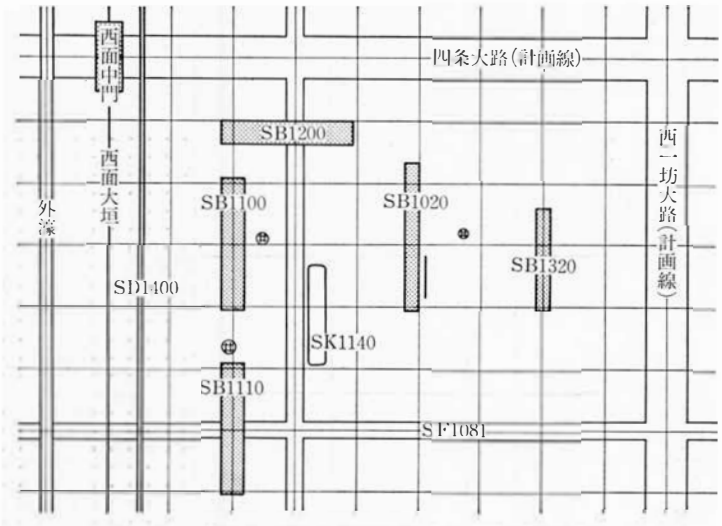


Fig. 53　藤原宮西方官衙の建物配置（方眼は75尺角）

iii　第Ⅱ期の細分

建て増し　第Ⅲ章および本節iで既述のように，何棟かの建物には増築の形跡が認められ，またやや遅れて建て増しされた建物も存在するようだ。まず正殿SB6450のばあいには，身舎および南廂の柱掘形に比して北廂のものは著しく小型でしかも浅い。同様のことは脇殿SB6425についても指摘でき，南7間分に比べ北6間分の柱掘形は小さく浅い。これら小さく浅い柱掘形は後に付け加えられたものであろう。SB6425の南から7間目の棟通りには大型の柱掘形があり，ここを当初の北妻と考えるのである。東南方の馬房SB5956・5955は一見馬道を共有する同時存在の建物のようにみえる。しかし，棟通りは互いに一致するものの，柱間寸尺に違いがあり， *

1)『藤原宮報告Ⅱ』p. 84～86。

SB5956の方が若干短いのである。また基準尺も，SB5955が1尺＝0.300mであるのに対して，SB5956のばあいは1尺＝0.296mであり，SB5955が後の増補である可能性は極めて高いと言えよう。なお，75尺方眼の計画線に乗らない建物が1棟ある。前殿SB6180がそれで，遅れて建て増しされたと考えたい。

＊ a・b両小期建物の部材（主として柱根）を観察してみると（Tab.17参照），a・b期を通じて共通する要素と，両期で相違する点とがあるようだ。共通点としては，遺存する柱根の大部分が多角形（八角形が多い）に面取りしたものである点が挙げられる。これは第Ⅲ期以降には認められない特徴である。地下に埋もれた部分だけが遺存しているに過ぎないので，柱全体の形態にまで及ぼすわけにはいかないが，意図的に多面体としたものではなく単にハツリ整形しただ＊けで，チョーナやヤリガンナ削りによって丸く整形する手順を省略したものと理解できよう。

相違点の一つとして用材の問題がある。a期とした建物のうちSB5956・6330はコウヤマキ **用材の違い** を用いる。これに対してb期の増補とみたSB6450の北廂とSB5955はヒノキを用材とする。少数の資料によって統計的な結論を導き出すべきではないが，一応の傾向はあると理解しておきたい。第1次大極殿地域においても，比較的古い時期にはコウヤマキが優勢で，ヒノキの使＊用はやや遅れて始まるような傾向があらわれている。基準尺についても，限られた数値での対 **基準尺** 比は危険性があるが，第Ⅰ期・Ⅱa期が1尺＝0.297mであるのに対して，Ⅱb期になると1尺＝0.298mほどとなり，若干長くなっている。

iv　第Ⅱ期の年代

第Ⅱ期の年代を決定づけるに足る遺物は得られなかったが，上限に関しては宮造営開始からさほど時を経ない時点に求めることができよう。馬寮東官衙南半部の西を画する溝SD5960から和銅5（712）年と推定される木簡が出土しており，この頃には少なくとも造営は開始されたことになる。下限については第Ⅲ期の開始時期の前段をもってこれにあてざるを得ない。すなわち恭仁遷都（天平12(740)年）の時点である。ⅡaからⅡbへの移行の時期や建て増しの理由についても明らかになし得ないが，馬寮において，増築を必要とする組織上の理由やあるいは＊飼馬の増加のような事態が生じたことは明らかであろう。宮内他官衙における拡充の時期を勘案すると神亀年間（724～728）頃と考えられようか。

C　第Ⅲ期の遺構

馬寮域北半中央に主要殿舎を建て並べてその東に脇殿風の南北棟建物を配し，その南および南半東西に馬房・倉庫を加え，中間を広場的空間にするという基本的な構成は第Ⅱ期と変らない。ただ，東限を掘立柱塀SA5950で画したほか，微視的な配置状況はかなり変化しており，＊また正庁域西南方に工房を設けた。なお，第Ⅱ期の建物のうち馬房SB5955・5956はこの時期まで存続した可能性があり，大土壙SK6350は機能を変えたが残存した。

i　配置計画

1)『平城宮報告XI』p.131のTab.6参照。

北半中央に3棟の東西棟建物SB6185・6195・6385が並列して建てられる。これらは桁行規模が等しく，両妻柱筋を揃え，しかも棟方向が東で北にやや振れるという共通した特徴をもつ。最も南に位置するSB6185が北廂を有し，柱掘形も大きいため中心建物と考える。このSB6185の身舎南側柱筋（N199.85）を南北の基準線，また3棟の建物の西妻柱筋（W74.20）を東西の基準線と仮定してみると，以下のような配置計画が浮び上ってくる。 *

3棟のうち北端の建物SB6385の北側柱筋までは35.50mあり，1尺＝0.298mとすると119.53尺となる。中央のSB6195の南側柱筋はちょうどその中間に位置する。これらの東方に配された2棟の南北棟建物SB5951・6172は西側柱筋を揃えて建つが，東西基準線からこの柱筋までが47.20m，すなわち158.92尺を測り，2棟のうち南にあるSB5951の桁行中央の間仕切柱筋までは11.65m（39.23尺）ある。また，殿舎群の西南にあって工房等の目隠しとなっている南北塀SA6341までがやはり11.8m（39.73尺），官衙東限の南北塀SA5950までの距離は60.00m（202.02尺）である。 *

40尺方眼 以上の結果を総合すると，40尺の倍数に基づいて計画がなされている。つまり40尺方眼の基本計画があったように思われる。南方に目を転じてみると，中央やや西寄りに倉庫SB6140と南北棟建物SB6120がある。このうちSB6120の西側柱筋まで基準線から23.55mを測り，これは79.29尺と40尺×2に極めて近い。東方にある倉庫SB6140とは互いに東妻を揃える。SB6140の南には目隠塀と思われる東西塀SA6138があるが，これは基準線から95.50m，すなわち321.55尺の位置を占める。これは40尺×8の値と近似する。北方の中心建物群ばかりではなく，馬寮域全体が同一規格のもので造営されていることは明白であろう。 *

なお，梁行3間の南北に長い建物が2棟（SB5951，SB6120）存在することもこの時期の特徴である。 *

ii　部材と基準尺

多角形に面取りした柱根はSB6140の1本（一ニ）だけで，ほかはすべて断面円形状である。用材としては同一建物でヒノキ・コウヤマキが混在する傾向を示し（SB6140のみすべてヒノキ），SB6120のように広葉樹材（ツガ2，他は不明）を用いたものもある。SA5950の遺存する3本の柱根もコウヤマキ2，スギ1で用材に規格性がない。 *

基準尺については，遺存する柱根が少ないため確実なことは言い難い。唯一，距離をあけて柱根が遺存していたSA5950のばあいには，1尺＝0.2984mの値が得られた。

iii　第Ⅲ期の年代

長方形大土壙SK6350は第Ⅱ期末に当初の機能を失い，第Ⅲ期には西方の鍛冶工房からの塵芥捨て場となっていた。これは第Ⅳ期の建物造営に先立って一気に埋め戻されたと考えられるが，埋土の下層にある堆積土や底部近くから出土した土器は平城宮土器Ⅱ・Ⅲのものに限られる。平城宮土器Ⅲは天平勝宝2（750）年を中心に，天平宝字5（761）年より下ることはないとみられている。馬寮東官衙北端で検出された東西溝SD6499の溝底からは天平10・11（728・9）年の年紀を有する木簡が出土している。第Ⅲ期の年代は天平後半代から天平勝宝・宝字年間頃に置くことができよう。 *

遺構から見たばあい，第Ⅱ期から第Ⅲ期への転換はかなり大規模なものであり，宮の大改作の一環と捉えるのが妥当であろう。天平後半代でこの状況に合致するのは恭仁宮からの還都に伴う造営である。還都が行なわれたのは天平17（745）年のことであった。先に馬寮東官衙西面築地には軒瓦6296A—6691Aの組合わせが使用されていたと考えた。これらの軒瓦は恭仁宮と密接に結びついており，還都直後の造営にふさわしい。馬寮においても同時に新たな造営が行なわれたであろう。

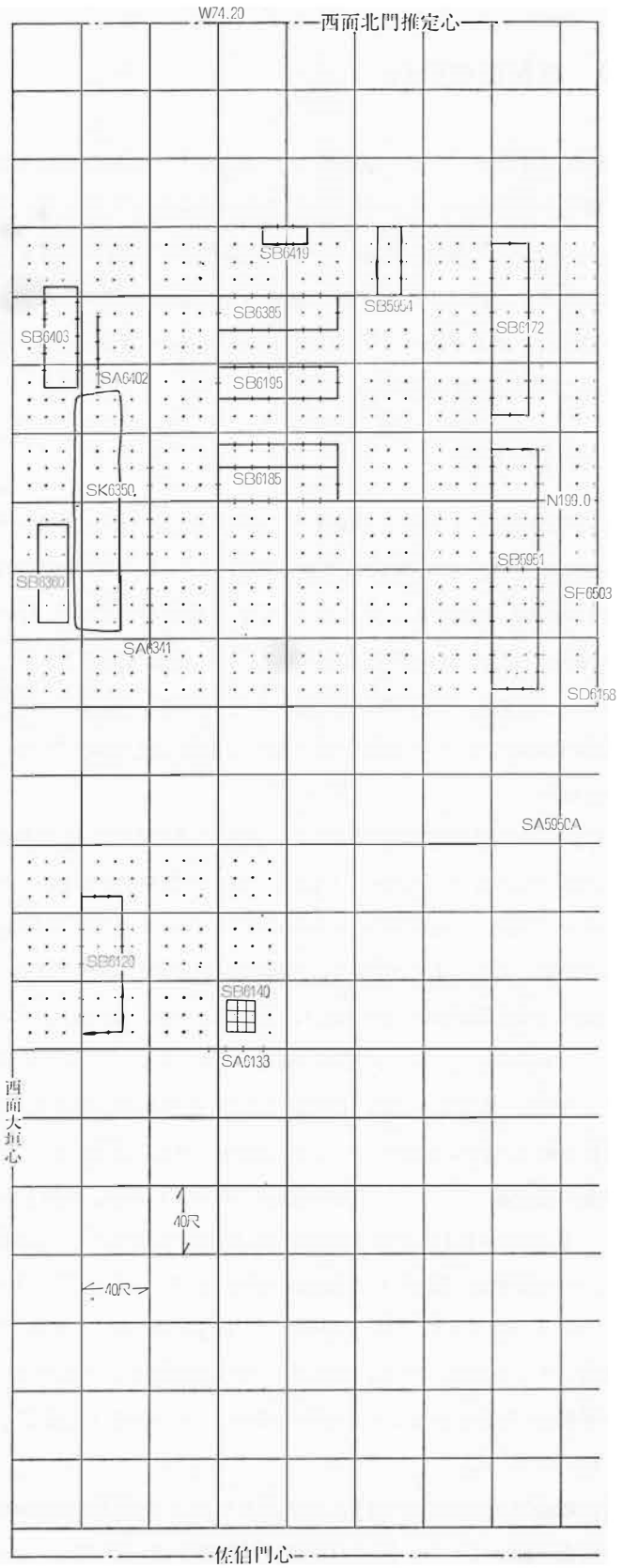


Fig. 54　第Ⅲ期の遺構配置

D　第Ⅳ期の遺構

馬寮域北半中央に正庁一郭を置き，南辺西半に2棟の馬房を並列する。この基本構成は第Ⅱ・Ⅲ期と変りない。しかし，正庁部分の状況には大きな違いが生じた。最も大きな変化は，一面廂付の長大な建物を北および東・西に配して冂状に外郭を形成，その内側にさらに掘立柱塀による区画を設け正殿と2棟の前殿および脇殿を囲って内郭とした点である。また，東限の塀は同位置で築地となり（SA5950B），北限にも築地（SA6475）が構築された。なお，井戸SE6166はこの時期まで存続する。

i　配置計画

東・西に配されて外郭を形成する2棟の二面廂付南北棟建物SB6175とSB6400それぞれの内側の廂柱筋間の距離は53.60mである。これは1尺＝0.298mとすると179.9尺(≒180尺)になる。正殿SB6420の東妻はちょうどこの中間に位置するので，これを東西方向の基準線とみなす(W61.30)。一方，SB6175とSB6400は互いに南妻を揃える。しかも，前殿南棟SB6190の南側柱筋および区画東西塀SB6186は前記2棟の南妻を結ぶ線上に乗る。つまり，SB6175・SA6186・SB6190・SB6400はその南面を同一線上に揃えて建つのである。これを南北の基準線とみる(N216.40)。

正庁内郭を画する掘立柱塀のうち，南面のSA6186が基準線上に位置することは既に指摘した。北面の東西塀SA6456・6317は同一線上にあり，基準線からは北へ37.10m（N253.50）の位置にある。東面・西面の南北塀SA6455とSA6318は共に基準線から22.70m（76.23尺）離れ，対称の位置にある。したがって，内郭は南北125尺，東西152尺の大きさになる。なお，外郭の外法規模は南北52.00m（174.61尺），東西76.10m（255.54尺）である。東面築地SA5950Bは前代の位置を踏襲しているので配置計画には則らない。しかし，北面築地の推定心はN278くらいに求められ，基準線からは61.6m（205尺）を測る。大枠として90尺方眼の計画があるようだ。

90尺方眼

各建物相互の間にも次のような相関関係がある。正殿SB6420と2棟の前殿SB6190・6381とは西妻柱筋を揃え，ここまで基準線から17.8m（60尺），前殿どおしは東妻も揃える（基準線から10尺）。脇殿SB6451の北妻はSB6420の北側柱筋と揃い，基準線から32.7m（110尺）である。また，SB6400には南から6間目に間仕切柱があり南北に2分されるが，この間仕切柱筋とSB6451の南妻が揃う（基準線から北へ60尺）。以上のように，内郭においては，建物の桁行柱間が10尺等間であるためすべての柱位置が10尺の方眼割りに合致する。なお，内郭のすぐ南にある倉庫SB6340の西側柱筋まで基準線から30尺，北妻柱筋まで同じく40尺を測り，これも同じ規格にしたがっている。

馬寮域南辺近く西半部には2棟の長大な南北棟建物SB3690とSB6100がある。これらは互いに南妻を揃えており，両者の東側柱筋間の距離は24.20m（80尺）である。このうち西側のSB3690の東側柱筋は基準線から西26.7m（90尺）の位置にあり，北方の二面廂付建物SB6400の東廂柱筋とぴったり合致する。またSB3690の振分心は基準線から160m，540尺，すなわち90尺×6の位置にあたる。これら2棟にも正庁一郭の配置計画が及んでいるものと考えられる。

なお，南北基準線からこのSB 3690の北妻までの距離は139.1m(475尺)で10尺の倍数とはならない。

ii 基準尺

先述のように，第IV期の遺構配置計画は大枠として90尺方眼の規格があったようだ。これは1尺＝0.298mとみるとうまく合致する。また，柱根が遺存するばあいは極めて少ないが，SB 3690ではやはり1尺＝0.298m強である。

128頁に復原図をのせてある。

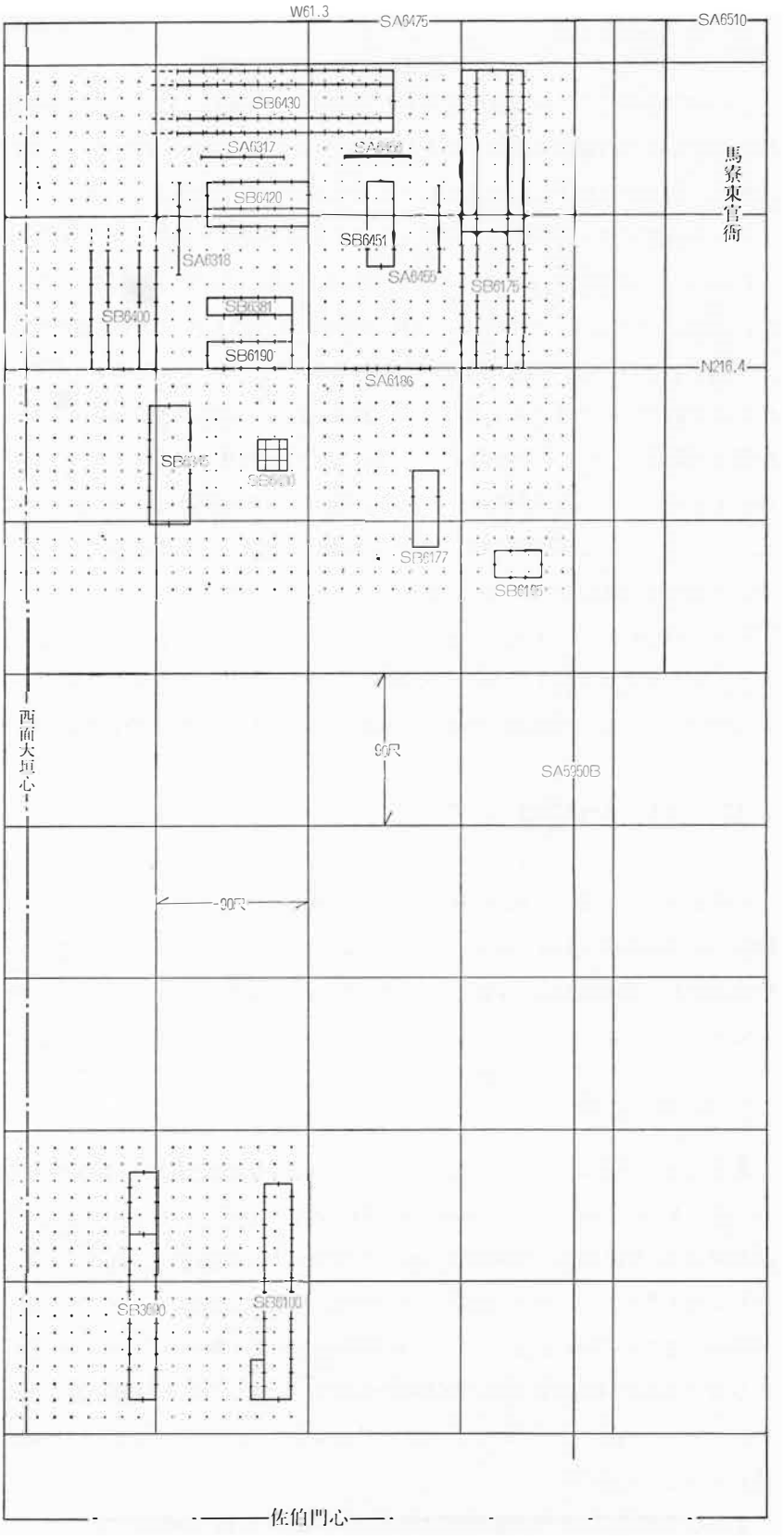


Fig. 55 第IV期の遺構配置

iii　第Ⅳ期の年代

この時期の年代を決める良好な資料がSK6397・6166など多くの遺構から出土している。SK6397は正庁外郭西部の二面廂付南北棟SB6400の東廂南端の柱穴を切って掘られた小さな円形土壙で，埋土から出土した土師器はすべて平城宮土器Ⅴに属す。SE6166からは少量ながら土師器・須恵器が出土したが，これらは平城宮土器Ⅴよりやや年代が下り，長岡宮出土土器（すなわち平城宮土器Ⅵと併行）に近いと考えられる。中に「主馬」の墨書を有する土師器杯があるが，「主馬」は天応元（781）年から大同元（806）年まで存在した主馬寮に相当すると考えられ，土器編年と矛盾しない。井戸の廃絶を第Ⅳ期の下限とみれば，780年代前半，すなわち平城宮の廃絶と軌を一にすると考えられよう。以上のほか，築地SA5950B・6475・6150の雨落溝や暗渠SX6505から出土した土器は，一部に平城宮土器Ⅱ・Ⅲも混じるが，ほとんど平城宮土器Ⅳ～Ⅴのもので，築地SA6150を切るC字形の溝SD6155からは平城宮土器Ⅴ～Ⅵの土器が出土している。また，SB6430の柱掘形から平城宮土器Ⅳ～Ⅴが出土している。以上から，第Ⅳ期は平城宮土器Ⅳ段階の後半頃に始まり，Ⅴ～Ⅵへの移行期頃まで続いたと考えられる。

第Ⅳ期の遺構はすべて整地土上面において検出されており，大規模な改修を経たものと思われる。天平宝字元（757）年の「大宮改修」，天平宝字4～6（760～762）年の「平城宮改作」，あるいは左右馬寮の主馬寮への統合（宝亀10(779)年以前）の時期のいずれかに相当しよう。

E　第Ⅴ期の遺構

第Ⅳ期までは一貫して南北900尺の地域を全体として1官衙が占有していたが，この時期には東西溝SD5961によって南北に二分し，2つの官衙ブロックを設けている。SD5961は旧馬寮域南限から約485尺の位置にあり，南半の方が広いことになるが，遺構は北半に比してまばらである。

i　配置計画

北半部　北半部中央付近に，東・西に振り分けて東西両廂付南北棟SB6173・6401を配する。ともに身舎梁行2間，10尺等間で，東西に柱間11尺の廂が付く。桁行も両者とも7間であるが，柱間はSB6173が9尺等間，SB6401が8尺等間であるため桁行総長は異なる。しかし，両者は北妻柱筋を揃えており，これを南北方向の基準線とみることができる（N233.20)。北限の築地SA6475の心まで44.95mを測り，1尺＝0.2997mとすると150尺になる。東方のSB6173はやや小振りの東西両廂付南北棟建物SB6460を伴なう。両者は西廂の柱筋を揃えており，間隔は6.0m（20尺）ある。西方のSB6401の北側は未発掘であるが，同様に小型の二面廂付南北棟建物が付随していた可能性はあろう。

これら東西に配された二面廂付南北棟の中間に東西棟SB6386がある。この建物は桁行6間，10尺等間であるが，梁行は2間しかなく，しかも柱掘形が小型であるうえ棟方向が若干振れるため，正殿相当建物とは考え難い。しかしながら，このSB6386の東西両妻は東西にある二面廂建物から等距離にある。つまりSB6386の中心は建物群の東西中軸線上に乗るのである。こ

のSB6386の北方には2棟の小型の東西棟SB6469・9552が配されている。SB6469の西妻はSB6386の東妻と，またSB9552の西妻はSB6386の西妻と揃う。しかもこれら2棟の南側柱筋は互いに一致し，南方東西にあるSB6173・6401の北妻柱筋から30.00m（100尺）の位置にあたる。なお，SB6386とSB6469はともに梁行2間の東西に細長い建物で，各々東側3間分と2間分には棟通りに柱が立つという共通の特徴をもつ。

中央から南寄りは何らの遺構もない空閑地で，南辺を画する東西溝SB5961の北側には，中心からやや西に寄って1棟の南北棟建物SB5945が建つのみである。このSB5945は東面に広廂を有する身舎4間×2間の建物だが，身舎棟通りが北方のSB6386・9552の西妻柱筋の延長線上に乗り，北方建物群と同一の規格下にあると言えよう。

南半部では，東北方に寄って2棟の建物SB6130・6141がある。SB6130は北面に広廂を有する身舎5間×2間の東西棟建物，SB6141はその西南にある5間×2間の南北棟建物である。両者は共に方位が北で東へ2°強振れており，配置状況からSB6130が正殿，SB6141が脇殿の関係にあると考えられよう。SB6130の西妻は北半部建物群の東西中軸線から東へ15.00mの位置にあるが，振れを考慮すると配置計画における一致点は見出し難い。北半部とは別個の官衙とみなした所以の一つはここにある。なお，6141はSB6130から南へ3.6m（12尺），西へ5.4m（17尺）離れている。

南半部

11 第Ⅴ期の年代

SB6401の柱掘形から平城宮土器Ⅵ・Ⅶの土器が出土しているほか，SE7110・SK6155から奈良時代中頃の土器に混じって同Ⅶまでの土器が出土している。第Ⅴ期は平城上皇の還都によって造営されたものと考えられよう。建築構造上からも，広廂付の建物が多いことから平安時代に入っていることが窺える。また，基準尺も1尺＝0.300mと長い。

北半部に関しては，第Ⅳ期までの建物配置と基本的な変化は認められず，規模は縮小しているものの馬寮的な性格の官衙であると考えられる。

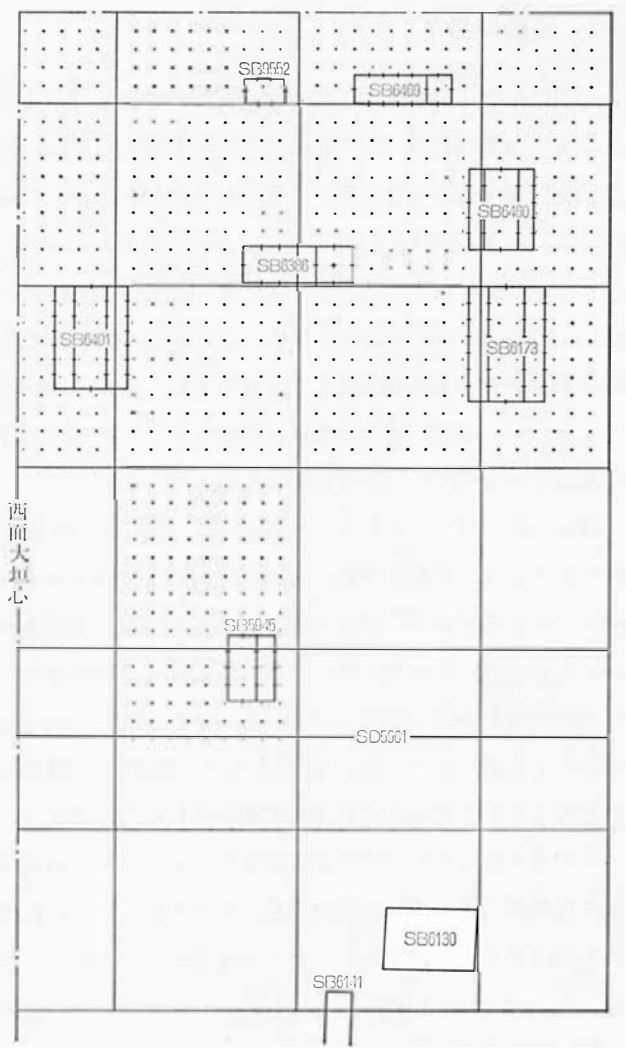


Fig 56 第Ⅴ期北半部の遺構配置

2　馬寮についての史料的検討

前節まで，平城宮の西面中門（佐伯門）と西面北門（伊福部門）の間の西面大垣内側に位置する官衙区画の遺構と遺物について調査結果を報告し，併せて遺構については若干の考察を加えてきた。この官衙区画は奈良時代初期（第Ⅱ期）から平安時代初頭（第Ⅴ期）に至るまで，一貫して北に正殿・前殿・脇殿から成る正庁ブロック，南に馬房状建物・倉庫・広場的空間という配置をとっていた。こうした構成をもつ官衙区画を令制官司の（左・右）馬寮と推定して記述してきたわけだが，この官衙区画がどのような性格をもつものであるのか，文献史料によって知られる左右馬寮ないし主馬寮のあり方とどのように対応するものなのか，以下奈良時代の馬寮が果した機能を中心に若干の考察を試みてみよう。

A　馬寮の沿革と機能

ここではまず奈良時代の左右馬寮の沿革と機能について史料をひもとくことにする。

i　馬寮の沿革

令制以前の馬官

令制以前の中央官制の中にもすでに馬のことを管掌する官司があったことは周知の通りである。有名な聖徳太子（厩戸豊聡耳皇子）の生誕伝承には，母后穴穂部間人皇女が「禁中を巡行し諸司を監察するに馬官に至りてすなわち厩戸にあたりて労せずして忽に産む」（『日本書紀』推古元（593）年四月己卯条）とみえる。また，天平神護元（765）年の播磨国賀古郡人馬養造人上の奴状にも，先祖の牟射志が「能く馬を養うを以って上宮太子に仕えて馬司に任ぜらる」（『続日本紀』同年五月庚戌条）と伝えており，絶対年代が推古朝であるかどうかはともかく，令制以前に馬の飼養を管する原初的な官司が存在したことがうかがえる。この「馬官」は，倭馬飼造・首のもとの倭馬飼部，河内馬飼造・首のもとの河内馬飼部など職業部としての馬飼部が官司制的に編成される過程に位置するものとされている。[1]

馬寮監

推古朝の「馬官」が大宝令・養老令の官制において左右馬寮として律令官僚機構中に位置づけられてゆくのだが，浄御原令制下においては過渡期として馬寮がまだ左・右に分化していなかった可能性がある。奈良時代初頭に左右馬寮の他に令外の「馬寮監」も置かれたことがあるが，これについて坂本太郎は馬寮の左右分化以前に固有の総括的な厩馬担当職が存在したことをその設置理由の一つに挙げている。[2]また，唯一の例として，藤原宮東面北門地区東外濠から出土した木簡の中に〔表〕「謹啓今忽有用處故醬」〔裏〕「及末醬欲給恐々謹請　馬寮」[3]と左・右を付さない馬寮名による文書木簡がみられるのである。

令制下の左右馬寮

大宝令・養老令官制での左右馬寮をみよう。養老職員令左馬寮条では，長官の職掌として，閑（うまや）の馬の調習と飼養，供御の乗具，穀草の配給，さらに飼部の戸口名籍のことを挙げている。職員には頭1人，助1人，大允・小允各1人，大属・小属各1人の四等官の下に，馬医2人，

1)　井上光貞「部民の研究」（『日本古代史の諸問題』1949）p.26～28。
2)　坂本太郎「馬寮監」（『続日本紀研究』1巻7号，1954）p.168。
3)　奈良国立文化財研究所『藤原宮出土木簡(四)』1980，p.4 上段。

馬部60人，使部20人，直丁２人，そして飼丁があった。実際の馬の調習・飼養にあたる馬部・飼丁は前代の馬飼部の体制の系譜を引いており，馬飼造戸（左馬寮236戸，右馬寮230戸）中から伴部にあたる馬部が，馬甘（左馬寮302戸，右馬寮260戸）中から雑戸である飼丁がそれぞれ上番して仕えることになっていた（『令集解』職員令左馬寮条古記所引官員令別記）。一方，諸国の牧や兵馬，公私の馬牛については兵部省被管の兵馬司が管掌するところとなっており，また東宮には主馬署が別に置かれた。左右馬寮は諸国の牧馬のことは扱わず，諸国の牧から中央に送られてきた馬の調習・飼養を主な職掌としていたわけである。

官制上の位置づけ

以上のような左右馬寮の，官制上の位置づけの特徴は次の諸点にまとめられよう。まず第一に，左右馬寮は各々大寮にあたる四等官をもち，他の一般の寮が八省の被管となっているのとは異なり，太政官の下に直接位置づけられていることである（左右兵庫も同じ）。すなわち，五衛府などと並んでいわば太政官直属の性格が付与されていることが指摘できる。第二には，左右馬寮の官人が武官であることが挙げられる。『令集解』公式令内外諸司条の古記によると，「諸の仗を帯するものを武（官）とせよ」の説明に「馬寮・兵庫・諸物部等なり。防人もまた武と為す」としており，大宝令において左右馬寮の官人（四等官）は仗を帯びる武官であったことが知られるのである。さらにこのことと関連する特徴の第三として，左右馬寮は，別に兵司が置かれたにもかかわらず，軍事的性格をもっていたことを指摘したい。すなわち，兵馬司は諸国の牧・兵馬の間接的管理や馬牛帳による官私馬牛の把握を任としたが，実際の馬の飼養は行なわず，中央における馬の飼養は左右馬寮が中心的にその任にあたったのである。のちに兵馬司が廃止され，その機能を引き継いだ左右馬寮が平安時代前期に軍事的性格をさらに強くするに至るが，馬自体がもつ軍事的性格から奈良時代にも同じくそうした側面を備えていたと思われる。平安時代前期に左右馬寮が自ら「夫れ馬は軍国の用，非常の備。掌守の司，備無かるべからず」と述べたり，「馬牛は軍国の資，暫くも無かるべからず」といわれたりすることは，時代を超えてあてはまる一面をもつものであろう。以上のように，左右馬寮が有した諸特徴は，前代の「馬官」以来の馬寮の重要性を示しているのである。

内厩寮

大宝令・養老令官制の左右馬寮はその後どのように展開したであろうか。奈良時代に左右馬寮を統括する形の令外の官職「馬寮監」が置かれたのは先述のとおりである。のち天平神護元（765）年には左右馬寮の姉妹官司ともいうべき「内厩寮」が設けられた（『続日本紀』同年二月甲子条）。内厩寮は左右馬寮と同じ四等官構成とその官位相当をもち，勅旨牧ないしその前身牧を管して天皇など皇室に関わる馬を扱った官司と考えられる。ただし，内厩寮の頭・助には官位相当よりも高位の近衛府次将級の武官が多く兼官しており，左右馬寮より上位の官司として位置づけられていたようであり，また内厩寮の設置は藤原仲麻呂没落後の軍事制度再編政策の一環として捉えることができる。内厩寮はのち大同元（806）年正月の頭補任例以後姿を消し，

1) 日本思想大系『律令』官位令補注参照。
2) 森田悌「平安前期の左右馬寮について」（『日本歴史』271号，1970）。
3) 『令集解』職員令左馬寮条所引弘仁４年３月13日太政官符。
4) 『類聚三代格』巻17，延暦８年９月４日太政官符。
5) 西岡虎之助「武士階級結成の一要因としての「牧」の発展」（『荘園史の研究』上巻所収，もと『史学雑誌』40編２・３・５・７・８号）。
6) 亀田隆之「内厩寮考」（『続日本紀研究』５巻５号，1958）。内厩寮が左右馬寮より上位にあったらしいことは，宝亀４（773）年２月25日太政官符案（『大日本古文書』21巻278頁）中で掲げられた三寮の順序からもうかがえる。

まもなく再置された左右馬寮に統合されたものと考えられる。

ところで，記述が前後するが，宝亀10（779）年9月から大同3（808）年6月にかけての期間左右馬寮官人の補任例が全くみられなくなるのに対し，ほぼ同期間である天応元（781）年5月から大同元（806）年4月にかけて，かわって「主馬寮」の頭・助の補任例が史料に散見される。[1] このことから，宝亀10年から天応元年までのある時点から大同元年以降の遅くとも大同3年に左右馬寮長官が補任される時（『日本後紀』大同3年6月庚申条）までの間は左右馬寮が主馬寮に一本化されていたという官制の変遷がうかがえるのである（Tab. 16参照）。これは，左右馬寮官人に武官のコースをたどる者が少ないのに対して，主馬寮官人には中衛府などを経る者が多くみられることから，やはり軍事的性格に一層重点を置いた官制改編であったものと推定されている。主馬寮設置以後は，従前の内厩寮・左右馬寮体制にかわって，内厩寮と主馬寮の併存というあり方になったのである。

主馬寮の統合

大宝令制		左・右馬寮	兵馬司
天平神護元年（765）	内厩寮	↓	
宝亀十年～天応元年（779～781）	｜	主馬寮	
大同元年～大同三年（806～808）	└──→	左・右馬寮	←┈┈

Tab. 19 馬寮官制の変遷

上述のごとく，遅くとも大同3年6月には内厩寮・主馬寮とも廃止され，再び左右馬寮の体制となった。一方，大同3年正月20日の詔書（『類聚三代格』巻4，弘仁4年7月16日太政官符所引）によって兵部省被管の兵馬司が廃止され，兵部省にその司務が移されているが，馬に関する実務については再置の左右馬寮にその職掌が引き継がれたものと考えられている。[2] 『延喜式』の左右馬寮式はこの段階以後の制度を示している。

左右馬寮の再置

ii 奈良時代の馬寮の機能

続いて左右馬寮が果した機能について整理し，左右馬寮の諸施設の構成を考えてみよう。

養老職員令左馬寮条では，頭の職掌として，（左の）閑の馬の調習と飼養，供御の乗具，穀草の配給，飼部の戸口名籍の事の4つを挙げていた。ここではもう少し立ち入って，上述のような官制変遷後の編領になるけれどもより詳しい規定を載せる『延喜式』左右馬寮式から検討する。諸条はⒶ馬の収領，Ⓑ馬の調習・飼養，Ⓒ馬の用途の3つの面に分けて考えることができる。まずⒶ馬の収領の面では，

延喜式

a）御牧（勅旨牧）からの年貢御馬

b）諸国が貢する繋飼馬牛

を領することになっている。Ⓑ馬調習・飼養には，

c）畿内近国の諸国に託す国飼御馬

d）櫪飼と称して左右馬寮の厩で飼うもの

e）放飼と呼んで寮牧―いわゆる近都牧で飼うもの

の3つの方法が採用されていた。Ⓒ馬の用途についても同様々な条文がみられるが，

1) 亀田前掲論文参照。
2) 西岡前掲論文，森山前掲論文参照。
3) 1) に同じ。また，佐藤虎雄「平安時代前期における馬政」（『延喜天暦時代の研究』，1968）も参照のこと。

f）年中諸祭の祓馬

g）行幸御馬と馬具

h）年中行事（正月七日青馬，四月二十八日覧駒，五月五日節・同六日競馬并騎射等）用の馬

i）衛府（看督馬，行夜の馬）に充てる馬牛

＊ などを用意することが主な内容である。なお，西岡虎之助は，Ⓐ馬の収領について，a）勅旨牧からの240～320疋，b）諸国繋飼馬の105疋，そしてc）諸国官牧からの馬の貢上を推計して約100疋余とし，年々500疋前後が中央に集まるものと推測している。

さて，以上のような『延喜式』にうかがえる左右馬寮の機能は，Ⓐのa）勅旨牧からの貢馬が内厩寮の左右馬寮への統合以前の段階では考えにくい点を除くと，時代的に多少の出入りは

＊ あったとしても大勢としては奈良時代にもほぼあてはまると考えてよかろう。以下では，奈良時代の左右馬寮の機能として確認できる点をいくつか挙げてみる。まず，Ⓐのb）諸国からの繋飼馬の貢進は，「常進公牧繋飼牛馬」(『続日本紀』天平4(732)年8月壬辰条）の言葉にうかがえ，天平6（734）年尾張国正税帳に「陸奥国進上御馬」(『大日本古文書』1巻611頁)，天平10（738)年淡路国正税帳に「淡路国進上御馬」(同2巻105頁）とみえるのがそれにあたるものと思われる。

＊ そして天平6年出雲国計会帳に記される「繋飼馬帳一巻」(同1巻59 8頁)はまさに当国におけるその管理に関わる公文であることから，一般的な制度として存在したことが知られるのである。次にⒷ中央における馬の飼養については，宝亀3（772）年5月22日太政官符（『類聚三代格』巻18）で「国飼御馬，設為機速」として国司長官に専当させることとしたことからうかがえるように，国飼（大和・河内・摂津・山背・伊勢・近江・美濃・丹波・播磨・紀伊の諸国，『延喜式』では播磨・

＊ 紀伊が除かれる）の制は奈良時代にもあったであろうし，また職員の馬部や飼丁のあり方から近都牧や左右馬寮自身の厩舎における馬の飼養も当然存在したものと考える。馬の飼養に不可欠な飼料については，大宝令・養老令の廐牧令廐細馬条に細かい飼育規定があり，同令馬戸分番条に調草輸進規定があるが，後者について『令集解』職員令左馬寮条古記では「調草，正丁二百圍，次丁百圍，少丁五十圍。但今行事，馬一匹日料，乾草三圍宛。雑穀之類，不給養。調草

＊ 止輸官，仰畿内交易充也。」と天平10（738)年頃の今行事を記している。この今行事と対応するのが九条家本延喜式裏文書の宝亀4（773）年2月25日太政官符案（『大日本古文書』21巻278頁）で，左右馬寮解・内厩寮解を受けた太政官が民部省に符して摂津国調銭をもって乾草を交易・運送させている。さて，次にⒸ馬の用途に関して，諸祭や行事そして年中行事の際に利用する馬は，奈良時代にも左右馬寮が用意したものと推定するのが自然であろう。年中行事，例えば

＊ 競馬に関しては，平城宮の推定第1次朝堂院地域内に馬場の柵である可能性をもつ遺構が検出されていることを指摘しておこう[2]。その他，平城宮跡出土木簡の中にも若干馬の用途をうかがわせるものが存在する。その一つは，〔表〕「請縄参拾了　右為付御馬并夜行馬所請」〔裏〕「如件　神護景雲三年四月十七日番長非浄(ママ)浜」，「□人馬行夜…[3]」のように，『延喜式』左右馬寮式にもみえた兵衛等による行夜の際の馬の提供である。もう一つは，官人の召喚状にあたる木

＊ 簡の中に「（前略）和銅六年五月十日使葦屋／椋人大田充食馬」とあるもので，至急の召喚の使自身にも馬を用意した可能性を示している。前者の行夜の馬の例では馬の警察的機能が明らか

1) 西岡虎之助前掲論文。

2) 平城宮第140次調査。『昭和57年度平城宮跡発掘調査概報』，p.12 ～82。

3) 『平城宮発掘調査出土木簡概報（五）』p.9 上段，『同（六）』p.7 下段 。

となるが，上述のような軍事的性格もあったからであろう。『令集解』宮衛令開閉門条古記には左右衛士府の衛士が分配防守する「所部」として御垣廻や大蔵・内蔵・民部などとともに馬寮が挙げられているのである。

以上のような機能に即して左右馬寮の施設について考えると，まず櫪飼馬のための厩舎や馬の調習のための広場のほか，大量の飼料を貯積する倉や馬具を納める庫などの倉庫，官庁としての政務を行なう正殿・脇殿等の正庁建物，官人の食事や飼料を調理するための厨的施設や井戸，そして馬具の簡単な修繕等にあたる工房施設などを推定することができる。本報告に述べた官衙区画の遺構・遺物の様相はこうした推定と矛盾しない。

B　平城宮における馬寮

平城宮における左右馬寮の位置については，それを確定する証拠となる資料はない。しかし，以下の諸点から総合的に判断して，本報告で扱った宮西辺部の官衙区画がそれにあたるものと推定できるのである。

i　墨書土器

官衙名を記した墨書土器には，第52次調査の井戸SE6166から出土した「主馬」（土師器杯A・底外），第63次調査の南北溝SD6160から出土した「主馬」（土師器椀A・底外），および第51次調査の包含層出土の「内厩」（須恵器杯B蓋・頂外）の3点がある。検出遺構はそれぞれ，官衙域北半の馬房と推定される建物の脇にある井戸，官衙域の東を限る溝，官衙域中央部東辺付近で東を限る南北溝SD5760付近の包含層である。

主　馬　「主馬」は天応元（781）年5月から大同元（806）年四月まで官人補任のみられる主馬寮か，東宮の主馬署，いずれかの可能性がある。しかし，土器の年代が奈良時代末に属すること，およびこの官衙区画の占地が広い点をあわせると，主馬寮である蓋然性の方が高いと考える。そして「主馬」の墨書土器が2点とも本官衙区画から出土したことから，ここを奈良時代末の主馬寮に比定することができよう。

内　厩　「内厩」も，天平神護元（765）年2月に設けられ大同元（806）年正月まで補任例のみられる

1)　この古記の記し方が「所部，謂依別式，左右衛士府中門并御垣廻，及大蔵，内蔵，民部，外司，喪儀，馬寮等，以衛士分配防守，以時検行。」とあることから，「外司」を宮外の官司ととり，喪儀司（寮）とともに馬寮が宮外にあったものと想定することも可能ではあるが，「外司」の語義に疑問があり，また平安宮で左右馬寮が宮内にあることとの関係が理解しにくくなることなどから，本文のように考える。ちなみに唐の官制においては日本の左右馬寮に相当する官司として，ⓐ尚書省兵部の下の駕部，ⓑ殿中省の下の尚乗局，ⓒ大僕寺とその下のⓓ乗黄署・ⓒ典厩署などがある（『二中歴』第七官名歴など）。唐長安城図をみると（平岡武夫編『唐代研究のしおり第七　長安と洛陽地図』，1956所収の呂大防長安城図㈡・徐松長安皇城図㈠・長安県志長安皇城図㈡），上記のうちでは，ⓒ大僕寺が皇城南部中央にあることが知られるのみだが，「騏驎馬坊」と称するおそらく厩舎を主にすると思われる官衙区画が皇城西辺南部にやはり南北に細長い占地をもってみられ，日本の左右馬寮の位置と対応しており興味深い。

2)　平安宮跡からも推定左兵衛府跡の調査で，溝から「主馬」銘のある墨書土器（土師器・底部外面）が出土している（京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報X』平安宮左兵衛府跡，1978）。主馬寮と兵衛府との関係は，『延喜式』左右馬寮式に左右馬寮が馬手を衛府に分充する規定がみえることから推測できる。

内厩寮を指す。内厩寮ははじめ左右馬寮と併存し，やがて左右馬寮を統合した主馬寮と併立したが，左右馬寮・主馬寮とはその機能から考えて密接に関連する官司であることは間違いない。したがってこれらの墨書土器からは，上記の推定のように，この官衙地区が奈良時代末には主馬寮であったこと，そしてさらに主馬寮設置以前は左右馬寮であったものと考えることができるのである。

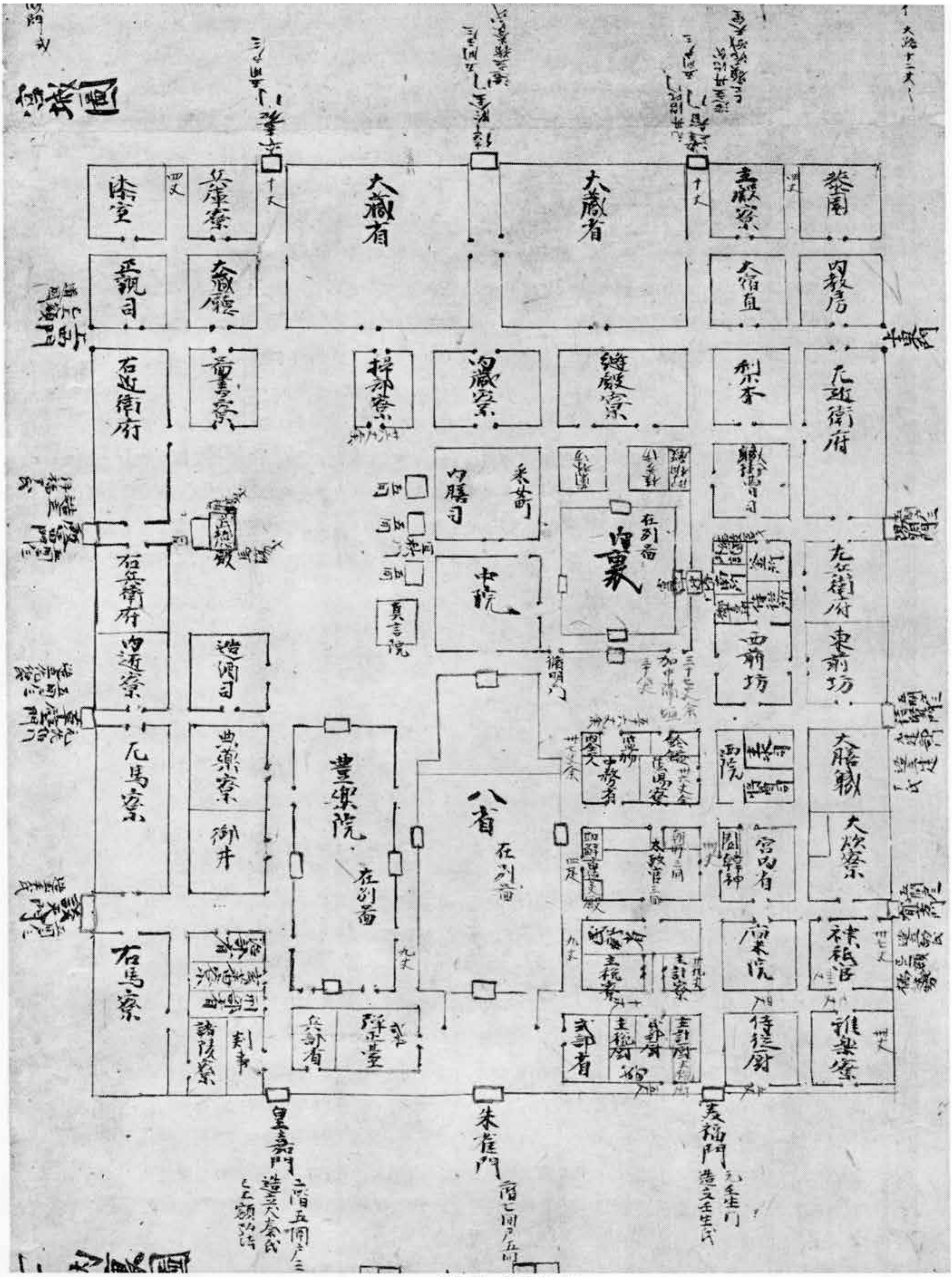
ii　宮内における位置と占地

この官衙は平城宮の西面中門（佐伯門）と同北門（伊福部門）の間の西面大垣内側に位置し，南北約252m（900尺），東西約84m（320尺）の南北に細長い地域を占めている。平安宮古図によって平安宮内の対応する地域の官衙をみると，西面中門（藻壁門）と同北門（殷富門）の間の西端には右兵衛府と内匠寮があり，その南の西面中門と同南門(談天門）内には左馬寮が，また談天門と南面大垣との間には右馬寮がみえる（Fig.57)。占地の規模は右兵衛府・内匠寮が南北40丈×東西35丈であるのに対して，左・右馬寮が南北84丈×東西35丈と南北に細長い地域を占めている。このことは，平安宮の左右馬寮が平城宮における本官衙地域のあり方と極めて類似する位置と占地をもつことを示しており，平城宮における本官衙を左・右どちらかの馬寮と推定すれば平安宮の官衙配置との連続が無理なく理解できるのである。なお，藤原宮においても，平城宮・平安宮とよく似た位置に「西方官衙」と仮称している南北に細長い占地の官衙区画を確認している。

iii　遺構の状況

第Ⅲ章および第Ⅴ章1で述べたように，検出した遺構の状況も上述した左右馬寮のあり方にきわめてよく適合する。すなわち，官衙区画北部に正殿・前殿と脇殿からなる正庁ブロックがあり，南半中央部に広場的空間，その東西両脇に馬房・倉庫様の掘立柱建物が位置し，さらに馬の水洗場かとも想像できる長大な土壙が存在するという遺構配置は奈良時代を通して一貫して変化しておらず（第Ⅴ期，平安時代初頭には北半部のみが官衙区画となり面積は半減するが建物配置は前を踏襲している)，上述した文献史料からうかがえる左右馬寮の施設の構成と非常に近似しているのである。また，藤原宮西方官衙の遺構配置も，広場・長大な矩形土壙の存在など，本官衙とくに第Ⅱ期のものと似た構成をもっている。なお，第Ⅳ期には正庁部分が内郭と外郭に整備され，東限の掘立柱塀が築地に替り（SA5950B)，北限も築地で画されるようになるなど，施設構成の整備がかなり進められている。この現象は前節における実年代比定から考えると，あるいは左右馬寮の主馬寮への統合という官制改編の時期に相当するかもしれない。もしそうだとすれば，その時期は官人補任例から宝亀10（779）年から天応元（781）年にかけてのある時点ということになる。

以上の3点を中心として，本報告ではこの官衙区画を馬寮と推定した。当地域が左馬寮・右馬寮のいずれに該当するかという問題をはじめとして，なお問題点を残しているが，今後の平城宮西部地域における発掘調査の進展，長岡宮・平安宮等における同様の調査・研究の進展によって，馬寮地域の性格はより明らかになってゆくものと思われる。



大蔵省
大蔵省
漆室
正親司
内教坊
大宿直
右近衛府
左近衛府
縫殿寮
内蔵寮
掃部寮
采女町
内膳司
内裏
中院
真言院
右兵衛府
左兵衛府
西前坊
東前坊
造酒司
典薬寮
豊楽院
八省
大膳職
大炊寮
宮内省
中務省
御井
右馬寮
左馬寮
神祇官
主計寮
式部省
兵部省
侍従厨
雅楽寮
皇嘉門
朱雀門
美福門

Fig. 57　平安宮古図

3　土　器——旧平城京域における平安時代の土器とその変容——

平城宮・京から出土した平安時代の土器のうち，平城上皇期の遺構にともなう土器群（SE311B・SK238等）およびそれに続く東三坊大路東側溝上下両層の土器群（SD650A・B）については既に報告を行ない，また9世紀から10世紀初頭頃までの土器の変容についても考察している。[1]

＊ また，1974年には薬師寺西僧房の発掘調査で天禄4（973）年の火災で焼失した僧房跡を確認し，その床面や焼土層から大量の土器群（以下，西僧房床面土器）を検出した。これについても一部既に報告し，10世紀後葉の基準資料として周知されているところである。[2]

今回報告した馬寮地域や平城京域の調査によってSD650Bの土器群に続く土器群や西僧房床面土器に続く土器群の出土例が増え，10世紀から11世紀初頭にかけての時期の土器の様相が

＊ 次第に明らかになってきた。ところで，11世紀前半から中頃にかけて，窯業史において中世的表象と捉えられる瓦器が出現することはほぼ確実であり，ここでは，その前史とも言うべき10世紀から11世紀の土器，特に在地で生産され普遍的な存在である土師器・黒色土器の食器を中心にその変容過程を整理してみたい（別表4・5・6参照）。

A　SD650B の土器

＊ SD650Bの土器群は伴出した銭貨から9世紀後半から10世紀初頭頃に位置付けられ，木簡や墨書土器等の内容から何らかの官署もしくは寺院に関連するものと考えられている。[3] SD650Bの土器群は出土遺構が溝であるという制約があるため，必ずしも純粋な型式ではなく，前後の時期のものを含んでいる。今回，SD650Bのものより純粋な土器群として玉手門付近の大土壙SK1623の土器について報告した。SK1623の土器には，大量の土師器の他に施釉陶器（灰

＊ 釉・緑釉・青磁・白磁等）の高級品も含まれ，平安京の事例と比較しても遜色なく，当時の大和の貴族層が使用したものと考えられよう。ここでは，SK1623とその前段階に位置づけられるSD650Aとの比較を中心に，この土器群の特徴を明らかにしたい。

土師器

土師器の器種には，杯A・杯B・同蓋・皿A・皿B（磁皿）・皿C・高杯・甕・鍔釜・竈などがあり，総体的に見れば前代の SD650A と相似た組成であるが，壺E・鉢などの貯蔵器形は

＊ みられない。

杯Aには，口径15.5～17.5cm，器高2.5～3.5cmの杯AI，口径14.0～15.5cm，器高2.5～3.5cmの杯AII，口径14cm未満，器高2.5～3.0cmの杯AIII（もしくは椀）に分化している。杯AI～IIIの調整法にはc・eの両手法があり，その比は66：34でc手法が多い。SD650Aの杯AIにはe手法はまったくなかったが，この段階で，杯AIにはじめてe手法が登場するのである。

＊ しかし杯AIに限れば，c手法とe手法の割合は72：28でc手法が依然として多数を占める。一方，杯AII・AIIIでは，両者の比は55：45でe手法の増加が極立っている。e手法の増加にともない，AII・AIIIでは器高が前代に較べ低下する傾向にある。

1）『平城宮報告IV』p.24～30。
2）『平城宮報告VI』p.145～150。
3）『昭和49年度平城宮概報』p.42～43，『年報1975』p.31。

杯Bには，口径20cm以上のものと口径17cm前後のものがあり，前代とほぼ相似た法量分布を示すが，杯Aと同じく器高が低下する傾向を示している。杯Bにはe手法によるものはなく，すべてc手法であるが，ヘラミガキの技法はすでに消失している。

皿Aは，口径17cm以上，器高2.5cm以下の皿AIと，口径15cm前後で器高2.5cm以下の皿AIIの2種があるが，AIの量は少なくなり，AIIが増加する。皿Aの調整にはcとeの両手法があるが，AIでは，c：eは71：29でe手法は少ない。AIIではc：eは60：40で，前代に較べるとeの割合が増している。皿Aについてもe手法の増加に対応して，器高が低くなる傾向が見られる。

皿Bは，量的に少ないが，皿Aに高台を付す形態ではなく，磁器系の皿を模した器形である。すべてc手法で調整する。

黒色土器

黒色土器の器種には，杯A・杯B・皿A・皿B・椀・鉢A・鉢C・小壺・甕・硯等がある。組成の上では前代と大差ないが，杯Aが著しく減少し，杯Bが相対的に増加している。杯Bの法量分布を見ると，前代の杯Aの法量分布とほぼ一致し，杯Aの欠を補填している状況が知られるが，それに応じて器高が低下している。

次に杯A・杯Bの調整をみると，外面をヘラケズリするものが少なくなり，同時にヘラミガキを施す例も少なくなっている。内面に施す暗紋は，底部においては減少し，口縁部の暗紋も単純な螺旋紋に変化している。従前の報告で杯Bと一括したものの中には，灰釉・緑釉器形をうつした椀が含まれ，これらの出現もこの時期における黒色土器の特色の一つである。

B　SD650B に続く土器群

SD650Bに後続する土器群としては，馬寮地域の土壙SK7094，平城京左京六条三坊十三坪の土壙SK21・同十五坪の井戸SE01等から出土したものがある。この他，飛鳥地方では坂田寺の井戸SE110B上層出土の一括，平吉遺跡の木棺墓SX16の蓋上に副葬された一括遺物等がある。上記の土器群は，在地の一般民衆あるいは土豪達の使用したものとみなされ，一括性については問題がないが，いずれも量的に少なく，また組成的にみても全器種を網羅しているわけではない。したがって，前述のSK1623や後述する西僧房床面土器との対比は，必ずしも十分に行なえないきらいがあるが，この欠を補うものとして平安京の事例を採用することにしたい。

平安京における10世紀中頃の土器群としては，左兵衛府の溝SD01，右京二条二坊SX01，上京区烏丸通出水下楼鶴円町で検出された井戸（以下，立会17—井戸1と略記する）等の土器群[7]が知られている。

---

1) 『平城宮発掘報告VI』PL76，689など。

2) 奈良市教育委員会『昭和58年度　奈良市埋蔵文化財調査報告書』1984，p.63～65。

3) 同上　p.68～69。

4) 奈文研『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』1978。p.42

5) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査概報』（京都市埋蔵文化財研究所概報集1978—II）1978，p.82～85，図版35・82・83。

6) 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所『昭和56年度　平安京発掘調査概報』1983 p.39～42，44，図版38。SX01からは天暦7(953)年の紀年銘をもつ墨書土器（緑釉陶器）が出土しており，平安京の中でも10世紀中頃を代表する資料となっている。

7) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『1978年度京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報II』1981。p.167～170，表36，図版43・106～107。

また前掲の大和の土器群についても，それぞれに前後関係が認められるが，資料数が少ないため，その点は今後の課題として保留し，SD650Bと西僧房床面土器との間におさまる土器群として一括し，この時期の特徴を捉えるにとどめたい。

土師器

土師器の器種には，杯A・皿A・甕・鍔釜等がある。この他，平安京においては，杯B・皿B等も知られているが，高杯はすでにその組成から消失している。

杯・皿ともすべてe手法による調整でc手法によるものはない。また，杯・皿とも器壁が薄くつくられ，ひずみをもつものが多いのもこの時期の一つの特徴である。杯Aには，口径17cmを超える杯AIも平安京では知られているが，多くは口径14～15cm，器高3cm前後の杯AIIである。皿類における最大の変化は，奈良時代の伝統を引く広く平坦な底部と外傾する短い口縁部からなる皿Aが姿を消すことであり，それに替って杯Aの器高を低くした形態の皿が登場する。e手法で調整するため，屈曲する口縁部で丸底に近い形態に変っている。したがって，杯・皿の区別は極めて困難であるが，法量的なまとまりをみると器高2.5cmを基準にそれ以上のものを杯，以下のものを皿として区別可能である。皿Aでは，口径17cmを超える皿AIが姿を消すとともに，皿AIIは法量が小さくなる傾向を示す。

杯Bは，口径15cm前後の例と20cmを超える例が知られているが，e手法で調整するため器高が著しく低下している。

食器類には，この他，口径10～12cm，器高2cm未満の小皿が新しく登場する。大和ではこの種の小皿に該当するものはないが，10世紀中頃でもやや新しい時期とされる平安京立会17—井戸1において出現している。

黒色土器

黒色土器の器種には，杯B・椀・甕などがあり，杯A・皿A等がみられない。杯Bは前代に較べ量的に少なくなり，口径16cm，器高4cm前後の法量になる。調整法については前代と大差ない。杯Bは，この時期でも比較的古い段階，例えば平安京左兵衛府SD01・平城京左京六条三坊十五坪のSE01・飛鳥坂田寺SE110B等に認められるが，全体的にみれば，杯Bが消失してゆく傾向がこの時期の特徴となっている。

杯Bに替って登場するのが，前代にその先駆けがあった灰釉・緑釉を模した椀類である。椀には，口径16cm前後のものと13cm程のものがあり，すべてA類に限られている。

C　薬師寺西僧房床面土器

土師器

土師器の器種には，杯A・杯B・皿A・鉢・甕・鍔釜の他に前代までは極めて少なかった瓷器系器形を模した椀・皿類が多数あり，この時期を特徴づける遺物となっている。杯A・杯B・皿Aは，胎土組成ならびに器形から複数の産地からもたらされたことが知られ，極めてバラエティに富んでいる。それらは器高の高い杯と器高の低い2～3種の皿からなるが，産地の差を超えて比較的まとまりのある法量分布を示す。e群を除き，杯と皿の関係は前代と同様器高の差で区別される。杯Aには，口径17～19.5cm，器高3～4.3cmの杯AIと，口径13～15cm，器高2.8cm以上の杯AIIがある。皿には，口径13～15cm，器高2.5cm未満の皿AIIの他，口径10～12cm，器高2.5cm未満の小皿の2種がある。杯A・皿Aの法量の分布は前代と同様なあり方を示す。杯Bは，量的に少ないが，前代同様器高の低い形態である。

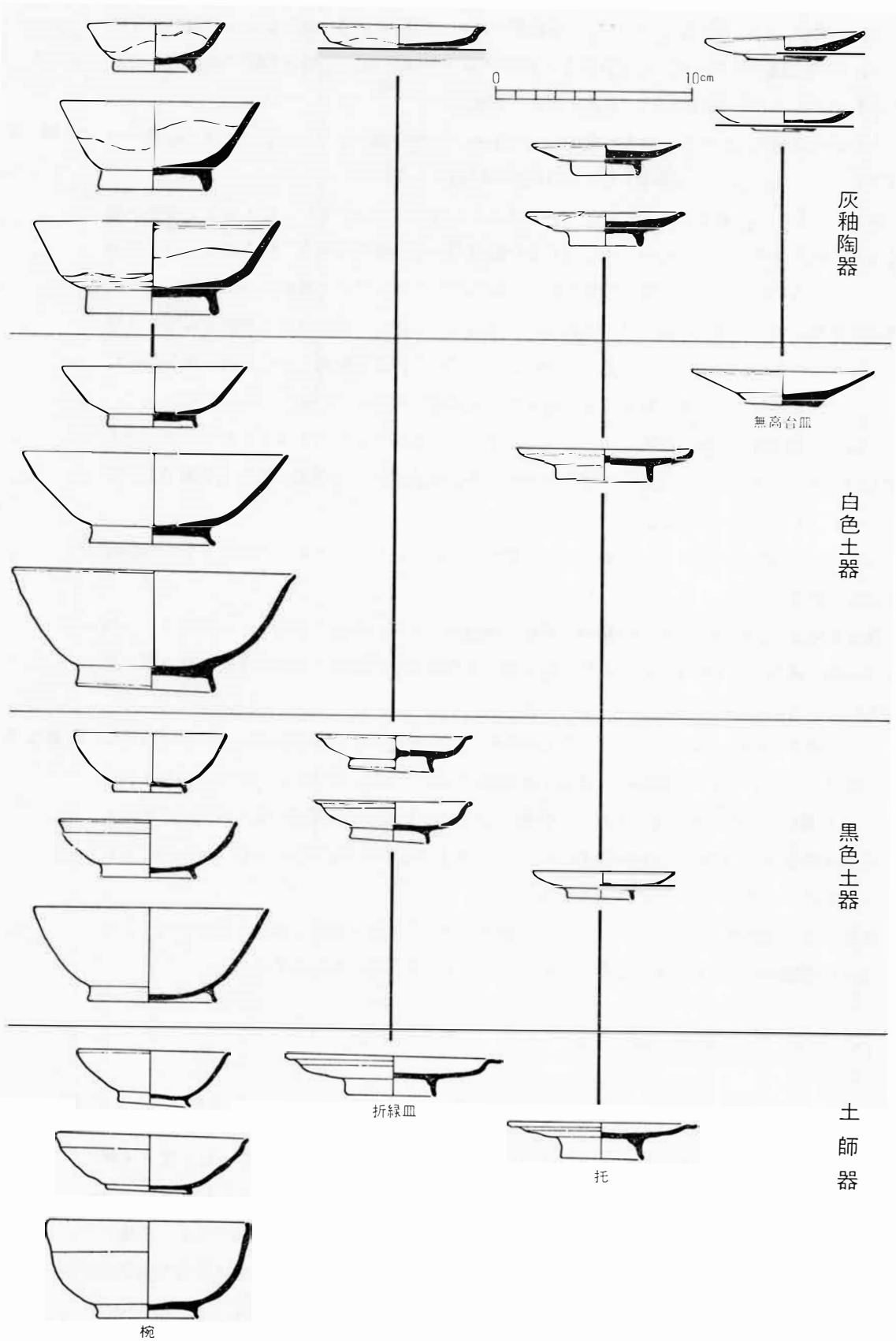


Fig. 58　薬師寺西僧房床面土器と灰釉陶器との対応関係
（灰釉陶器は恵那市正家１号窯出土品　同報告書掲載図面を原図とした）

黒色土器の食器においては，杯Bが完全に消失し，瓷器系形態の椀・皿類のみになる。この他，鉢A・鉢C・火舎・把手付甕・甕Aなどがある。また，前代では黒色土器B類は皿B等に若干見られたが，この時期から椀にもB類が登場し，B類の増加もこの時期の一つの特色となっている。椀には，口径15～16cm，器高5～7cmの椀Iと，口径13～14cm，器高4cm前後の椀II，口径10～11cm，器高3.5～4.0cmの椀III（小椀）の3種に分化している。椀Iは，径高指数40程度で口径に較べ器高が高く，外傾度も低く，内彎する口縁部からなる深椀であり，従前の瓷器系器種にはなかったものであり，近江系緑釉や灰釉末期にみられる深椀を写したものである[1]。また皿Bにも口縁部が立ち上り，端部近くで外反する折縁皿があり，これについても灰釉陶器の写しであることは言うまでもない。

黒色土器

土師器・黒色土器の他に，砂をほとんど含まない白色の胎土を用いロクロで成形した土器があり，他と区別する意味で仮に「白色土器」と呼ぶ。軟陶緑釉の生地に通じ，おそらく窯で還元炎焼成されたものである。その器種は，瓷器系の椀と皿のみである。皿には，瓷器系の皿類と共通する高台付皿と，高台をつけず糸で切りはなしたままのものや，皿部が極端に浅い托とされている器形がある。

白色土器（仮称）

D　西僧房以降の土器群

西僧房床面土器に後続するものとしては，薬師寺金堂付近の井戸SE48や馬寮SB7026掘形出土のものがある。

土師器の器種からは，杯Bや瓷器系の椀・皿・甕等が消失し，杯A・皿A・羽釜のみの組成となるようである。

土師器

杯Aは口径15cm前後・器高2.5～3.5cmの杯AIのみとなる。

皿Aは口径12～14cm，器高2.5cm未満の皿AIIと，口径10～12cm，器高2.5cm未満の小皿の2種になる。

黒色土器の器種も，椀・皿のみの組成になる。ともにA・B両類がある。椀は前代同様，椀I～IVに分化しているが，II・IIIは量的に少なく，良好な資料はない。椀Iは前代同様，深椀形態で，口径15～16cm，器高5～6cmである。A・B両類ともに前代に較べ器壁が厚くなる。A類の椀については，口縁部外面に粗いヘラケズリやヘラミガキを施す例もあるが，総じて調整を加えないものが多い。口縁部の内面のミガキは，従来の手法と異なり，瓦器椀に一般に見られる連続回転ミガキに変る。先が丸味をもつミガキ原体を使用するため，ミガキの幅は広い。この連続回転ミガキも雑で，ミガキ残しの部分が多く，ハケ目調整痕が残るばあいが多い。底部内面のミガキも雑でジグザグ暗紋風になる。

黒色土器

一方，B類の椀は，外面のミガキが丁寧で，3回程度に分けて横方向にみがく。高台内外面，底部外面までミガキを施す。口縁部内面のミガキは，A類と同様に連続回転ミガキに変る

1)　緑釉・灰釉にみられる深椀も，本来，森田勉の分類による青磁椀II類を写したものである。

2)　多治見市教育委員会『平尾遺跡・虎渓山遺跡』1950，恵那市教育委員会『正家1号窯発掘調査報告書』1983，等の報告を参照されたい。深椀・折縁皿については，猿投窯でも生産されているが，床面土器の灰釉陶器のそれはいずれも東濃系諸窯である。名古屋大学文学部助手　斎藤孝正氏の教示による。

が，先の尖った細い原体で丁寧にみがく。底部内面は，一方向のミガキで密に施し，A類に較べ調整は極めて丁寧である。

平城京左京六条三坊十三坪井戸SE14・15の一括品は，SE48に続く一群で瓦器出現直前にあたる時期に比定できる。

土師器 土師器は前代に較べ器壁が厚くなる。口径17cm前後，器高4cm前後の大皿と，口径15cm前後，器高2cm程の中皿，口径10～11cm，器高1.6cm前後の小皿がある。大皿・中皿は，平底と内彎する口縁部からなる形態に変り，前代同様e手法で調整するが器壁が厚いためほとんど屈曲しない。小皿についても扁平で口縁部がくの字形に屈曲し，端部が内側に丸く肥厚する新しい形態となる。これらの大・中・小の皿は古手の瓦器とセット関係をなす土師器皿と共通する器形であることは言うまでもない。

黒色土器 黒色土器にはA・B両類あるがA類については良好な資料はない。量的に見ればB類が増加するのがこの時期の特徴である。器種は椀だけで，皿はすでに消失しているようである。椀には大椀・小椀の2種があるが，内外面のミガキは雑になり，高台部・底部外面にはミガキを施さなくなる。底部内面のミガキも同様粗くなり，ジグザグ暗紋風に変る。

E 小 結

以上，10世紀から11世紀にいたる時代の土師器・黒色土器の食器類の変容について概観した。最後に，今問題にしたこの時期の土師器・黒色土器の両部門における生産動向とそれを導き出した社会経済的な要因について考察してみたい。

10世紀中頃（続SD650B）を境にして，それまで成立していた器種構成は次第に崩壊していく。その一方では，土師器・黒色土器の両部門とも量産化をめざし，調整手法の簡略化と器形の規格化が一層進行し，前者は杯・皿・煮沸具を，後者は瓷器系器形の椀・皿を専業的に生産するようになる。

そもそも，瓷器系の器種である椀・皿は，中国陶磁器（青磁・白磁）の影響下に成立したものである。これらは，平安時代の初め律令国家体制を担う支配者層の食膳に供されるべく生産されたものである。平安前期の土器類の生産状況を見ると，土師器・黒色土器の部門では，若干瓷器系器形も生産しているが，基本的には奈良時代の系譜を引く器形を生産している。また須恵器も同様に奈良時代の系譜を引く器形を生産しているが，食器類の生産は減少している。それに対し緑釉・灰釉の部門では，もっぱら磁器系器種を生産している。すなわち平安前期においては，瓷器系器種は緑釉・灰釉陶器として生産供給するのが原則であったとみなされよう。では，平安時代中期と言われるこの時期ではどうであったろうか。ここでは，旧京にとりのこされたとは言え，依然として古代権力の一端を担っていた薬師寺の僧侶達の食器を例にとり，その実体をみることにしょう。

天禄4（973）年に焼失した西僧房床面出土土器の食器をみると瓷器は極めて少なく，土師器・黒色土器が圧倒的に多くを占めている。そして，土師器・黒色土器・白色土器の瓷器系器種（椀・皿）が相当量存在する点に注意したい。これら瓷器の写しの存在は瓷器類の供給が十分に

1) 奈良市教育委員会『昭和58年度　奈良市埋蔵文化財調査報告書』1984，p.62～65。

行なわれなくなった状況を反映したものである。前述したように，土師器・黒色土器が写した瓷器は，近江系緑釉（深椀）や東濃の虎渓山窯式の灰釉陶器であり，両者とも瓷器生産の末期的段階に位置付けられている。こうしてみると土師器・黒色土器の工人が在地で瓷器系器形を生産するようになった事実は，結局の所，前代に成立していた瓷器生産体制の崩壊と表裏一体の関係にあると言えよう。

このような瓷器系器形の在地生産供給化は，土師器と黒色土器との間での淘汰を経たのち，黒色土器＝椀，土師器＝皿という器形別分業生産に移行し，器形の規格化と量産化を計り，やがて在地向けの供給をめざす生産を志向していく。こうした帰結点が，瓦器の出現と言えよう。

4　馬寮地域出土の柱根の年輪年代学による研究

1959年にはじまった発掘調査によって，平城宮跡からすでに500本以上の掘立柱建物の柱根が出土している。これらの柱根のほとんどすべては，8世紀～9世紀初頭の間に使用されたことが確実なものであり年輪年代学の研究に適した資料と考えられる。また柱根の主要樹種はヒノキとコウヤマキであるが，これらは樹種の面からみても年輪年代学の研究に適することが判明している。したがって，平城宮跡出土の柱根は年輪年代学の研究を進めるにあたって貴重な資料になるものと思われる。現在，これらの柱根を用いて，ヒノキ材で725年分，コウヤマキ材で668年分の標準（平均）年輪曲線を作成済みである。この標準年輪曲線はまだ実年代と対応していないが，おおむね紀元後1世紀から8世紀にわたるものと推定される。この2樹種の標準年輪曲線に基づき，馬寮地域から出土した柱根のうち遺存状況の良好な12本を選び，年輪年代学の方法によって年代測定を試みた。

A. 試料と方法

馬寮地域から出土した柱根88本の樹種は，ヒノキ47本，コウヤマキ35本，ツガ2本，不明4本であり，ヒノキの占める割合がやや高い。これらのうち，4つの遺構から各々3本ずつ，合計12本を選んで試料とした。ヒノキ材6本，コウヤマキ材6本である。ヒノキ材はSB5955・6425（遺構時期区分第Ⅱ期）から，コウヤマキ材はSA5950（第Ⅲ期）・SB3960（第Ⅳ期）のものである。これらはいずれも心持材であり，横断面はほぼ円形ないし多角形状に加工されている。

試料の調整と年輪幅の測定　12本の柱根を下端から30～50cmの部位で切断し，木口面を電気ベルトサンダー等で研磨した。研磨面に2～4方向の測線を設定し，年輪幅を測定した。測定には年輪読取器（アメリカ・ヘルソン社製，双眼実体顕微鏡付，0.01mmまで読取り可能）を用い，各測線について外縁部の年輪から始めて中心に至る方向で行なった。測定した年輪データをパーソナルコンピューターに入力し，各測線の測定結果を同一年ごとに合計，平均値をその年の年輪幅とした。偽年輪については，生物用顕微鏡を用いて晩材類似の組織か否かを区別することにより判定した。

1）『年報1984』p.50～51。光谷拓実「日本における年輪年代学」（名古屋営林局『みどり』312号 1984）p.28～37。

年輪グラフの作成　年輪幅をグラフ表示するばあい，片対数グラフを用いる。このグラフは，横軸には5mm 間隔でふつうの数列で年代を入れ，縦軸に年輪幅の値（0.01mm 単位）を対数に直してプロットするものである。この方式によると，広い年輪幅が相対的に縮小され，狭い年輪幅が逆に拡大されるので，ヒノキ材のような狭い年輪幅を表現するのに適している。なお，グラフ用紙は，各柱根の年輪グラフを相互に照合する便をはかるため，半透明のトレース紙を用いた。

標準年輪曲線とのクロスデーティング　クロスデーティング（crossdating）とは，1本の木の年輪パターンと他の木の年輪パターンを照合し，相互の年代的関係を決定することで試料年輪の相対的あるいは絶対的な年代を決定するための基本的な方法である。クロスデーティングは，試料の年輪数が多ければ多いほど行ないやすい。一概には決められないが，信頼するに足る成果を得るためには，試料の年輪数は少なくとも50年輪は必要と考えられている。ここでは，ヒノキとコウヤマキの標準年輪曲線を基本とし，これと12本の柱根試料の年輪曲線とを照合し，試料の曲線パターンが標準曲線パターンと重複する位置（以下重複位置と呼ぶ）を決定した。クロスデーティングはコンピューターと目視との2方式で行なった。コンピューターによる方式は樹齢差や個体差を除去するためにあらかじめ標準化処理した指標値をもとに相関係数 r を求め，ついで t 検定（t は類似度）を行ない，$t \geqq 3.5$ の箇所を検出する方法を採用しているが，$t \geqq 3.5$ の箇所が数回以上検出されるばあいが少なくない。一般的には最大の値を示すところを真の重複位置と判定するのだが，試料の年輪数が少ないばあいには真の重複位置ではないこともあり得る。そのため，透視台の上では2枚の年輪グラフを重ね合わせ，コンピューターによって検出した結果をもとに，目視によって重複位置を再確認することにしたのである。

B. 結果と考察

Tab. 20は，ヒノキおよびコウヤマキの標準年輪曲線の年輪パターンと12本の柱根の年輪パターンとの類似度を t 値で表わし，標準年輪曲線の最終年輪と各柱根の重複位置との差を年輪数で示したものである。

遺構番号	遺構時期区分	柱位置	樹種	樹齢	t 値	最終年輪との差
SB6425	第 IIa 期	二	ヒノキ	100	4.9	185
〃	〃	一 ロ	〃	118	10.3	193
〃	〃	一 イ	〃	149	4.2	239
SB5955	第 IIb 期	九 イ	〃	180	3.6	114
〃	〃	六 ハ	〃	151	4.5	115
〃	〃	九 ハ	〃	143	4.4	131
SA5950	第 III 期	NJ 49	コウヤマキ	207	10.0	226
〃	〃	HH 50	〃	207	6.2	233
〃	〃	GC 49	〃	418	5.2	251
SB3690	第 IV 期	十四イ	〃	330	4.8	15
〃	〃	十二ハ	〃	222	4.4	59
〃	〃	十一イ	〃	187	3.9	69

Tab. 20　標準年輪曲線と試料柱根との t 値および最終年輪との差

1) M. G. L. Baillie & J. R. Pilcher : "A Simple Crossdating Program for Tree-ring Research", *Tree-ring Bulletin*, vol. 33, 1973, pp. 7～13。

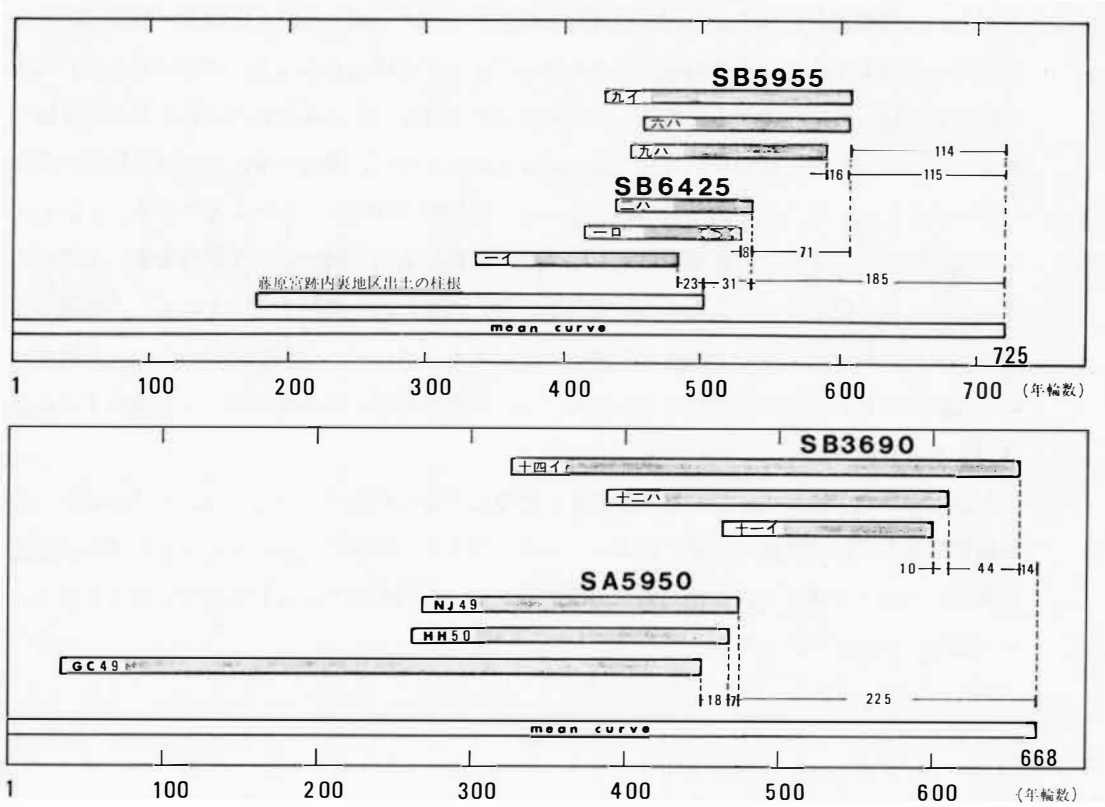


Fig. 59 標準年輪曲線と試料柱根との重複位置（上；ヒノキ，下；コウヤマキ）

ところで，藤原宮跡の内裏地域から出土したヒノキ材の柱根は，Fig. 59上に示したように，標準年輪曲線の最終年輪から216年輪さかのぼった位置で重複し，SB6425の柱根と藤原宮跡の例は極めて近い位置にある。これらは同じグループとみなしてよかろう。SB6425の3本の柱根は，もともと藤原京時代に使用されていた柱であり，平城京への遷都に際して抜き取られ，
* 平城宮に運ばれて再使用されたものと判断することも可能であるとすれば，SB5955とSB6425との柱根の年輪差は，平城宮の用材として新たに伐採した時期と，藤原宮あるいはそれ以前に伐採された時期の年代差を示す可能性がある。このことは，SB6425を遺構時期区分Ⅱa期とし，SB5955をⅡb期になって増築されたものと考えたことと矛盾しない。

Fig. 59下はコウヤマキ材の標準年輪曲線と馬寮地域出土の6本の柱根との重複位置を示した
* ものである。SA5950とSB3690とは，ヒノキ材のばあいと同様に別個のグループに分れた。SA5950のなかで最も新しい年代を示したのはNJ49で，標準曲線の最終年輪との差は225年分である。同様に，SB3690の十四イとの差は14年分である。したがって，SA5950とSB3690との年輪差は211年となる。このばあいもヒノキ材と同様で，遺構の時期差とは直接結びつかない。また，藤原宮跡出土のコウヤマキ材柱根の年輪解析を行なっていないため，藤原宮所用の
* 柱根が標準年輪曲線のどのあたりで重複するかは不明であるが，ヒノキ材のばあいから判断して，SA5950の柱根はいずれも藤原京時代ないしそれ以前に使用されていた材である可能性も想定できる。とすれば，SA5950を第Ⅲ期とすることを疑わねばならなくなる。あるいは再々使用であろうか。SA3690の柱根は，その重複位置から判断して，奈良時代になって伐採されたものと考えられる。

以上，馬寮地域から出土した12本の柱根を資料として，年輪年代学と建物遺構の時期区分との関係を検討してみた。その結果，クロスデーティングには成功しても，表面を加工された柱根においては，同一建物でもその重複位置にかなりのばらつきがみられた。このため，平城宮のように短期間しか存続しなかった遺跡を対象としたばあい，樹皮つきないしは辺材部を残した材が出土しない限り，年輪年代学的方法による年代測定は容易でないことになる。しかし，たとえ丸柱に加工された柱根類であっても，この方法によって同一遺構の柱根をすべて調べあげ，その重複位置が集中するところに着目し，発掘所見と比較検討することによって遺構の相対的な時期関係を捉えることは可能であると思われる。さらに，今回の例のように，遺構相互の年代差が開き過ぎて時期区分ができなくても，再使用と思われる柱根の一群を抽出することはできるのである。

今後年輪年代学による年代測定の精度をあげるため特に解決すべきことは，辺材部に占める年輪数である。樹種や産地の違いによって差があろうが，多数の資料にあたるならばある程度の概数が判明するはずで，この年輪数が判明すれば，外側を削り取られた材でも最外年輪までの年輪数の推定が可能となろう。

5 結　　語

平城宮西端部に位置する南北900尺・東西320尺の官衙区画を馬寮に比定した。ここでは，その理由を改めて列挙し，結語にかえたい。

まず，宮内における位置と占地の問題がある。この官衙は西面中門（佐伯門）と同北門（伊福部門）の間にあって，大垣沿いに南北に細長い地域を占めている。平安宮古図によると，西面中門と同南門の間に左馬寮がまたその南に右馬寮がみえる。左・右馬寮は共に南北84丈・東西35丈と南北に長い。平城宮における本官衙のあり方は平安宮における左右馬寮のばあいと極めて類似しているといえよう。また，藤原宮においても，平城・平安両宮とよく似た位置に「西方官衙」と仮称している南北に細長い官衙区画が確認されており，平城宮における本官衙を左・右いずれかの馬寮と推定することによって藤原宮から平安宮に至る官衙配置の連続性が理解できる。

検出した遺構の状況から，次の諸点が判明した。官衙区画北部に正殿・前殿・脇殿からなる正庁ブロックがあり，南半中央部は広い空閑地としている。これは馬の調教場にふさわしい。東西両脇には桁行の長い建物および倉庫が建つ。これらは馬房および馬具を収める庫と考えられよう。また，馬の水洗場かと想像できる長大な土壙が存在する。以上の建物規模・配置・長大な土壙の存在は藤原宮西方官衙と共通する。

出土遺物のうち特に土器の面からは次の点が指摘できる。土器類の出土量は相対的に少なく，土師器・須恵器の比率は4：6で，他の官衙のばあいと様相を異にしている。また「主馬」2点および「内厩」1点の墨書土器が出土している。「主馬」は天応元(781)年から大同元(806)年まで官人補任のみられる主馬寮に，また「内厩」は天平神護元（765）年に設けられ大同元年まで補任例のみられる内厩寮を指す。内厩寮は左右馬寮・主馬寮と密接に関連する官司である。したがって，これらの墨書土器から，この官衙区画は奈良時代末には主馬寮であったこと，そしてさらに主馬寮設置以前は左右馬寮であったと考えられる。

遺構時期区分の第Ⅳ期は天平宝字頃に想定されるが，正庁部分が内郭と外郭に整備され，官衙区画北面と東面が築地で画されるなど，かなり大規模に施設構成が整備されている。これは左右馬寮の主馬寮への統合という官制改編の時期に相当するかもしれない。このように馬寮の歴史的変遷が遺構の上からも辿れることも当官衙区画を馬寮とすることの一つの傍証となろう。

以上の諸点から，本報告ではこの官衙区画を馬寮と推定した。しかしながら，左・右馬寮のいずれに該当するのか，あるいは両者がこの区画に共存していたのかという問題をはじめとして，なお多くの問題点が残っている。今後の平城宮西部地域における発掘調査の進展を待たねばならぬ点も多く，また長岡宮・平安宮等における同様の調査・研究の進展に期するところ大である。

補論　平城宮跡資料館および収蔵庫の建設

平城宮跡資料館等が建設されるに至った経過についてはすでに第Ⅰ章1において述べたところであり，ここでは建設の実際的手順についてとりまとめることとし，あわせて遺構模型の製作についても触れておきたい。

1　敷地の選定

資料館や収蔵庫を建設する敷地としては，宮域中央部や重要遺構が密集する地域を避けねばならないことは勿論，周囲からなるべく目立たない場所が望ましい。その候補地として，A：宮域西辺沿い，B：北辺東部（水上池尻から通称一条通りの間），C：北辺中央部（推定大膳職地域），D：西南隅，の4カ所があげられた。平城宮跡保存整備準備委員会の収蔵庫新営計画部会（部会長　浅野清）における討議の結果，

i)　将来，平城宮は南を正面とすべきであるから，南からのヴィスタをさまたげぬこと。

ii)　平城宮は西ノ京等と共に西奈良観光の一環に位置づけられるので，西からの導入が必要。

iii)　宮西部は東に比べて遺構が稀薄らしい。

iv)　東の覆屋ブロックとは連絡道路で結べばよい。

等の理由からA地区を第1候補とするが，遺構面を損うことのない工法の検討や地耐力調査の結果を待つ，との結論に達した。

2　地耐力調査

調査は，遺構の検出された土層および遺跡を覆っている土の土質工学的性質を明らかにし，展示用・収蔵用構造物の設計施工上の資料を得ることを目的とし，株式会社応用地質調査事務所に依頼して行なった。調査内容には次の3種がある。

i)　平板載荷試験（A・B地点）

ii)　土壌のブロックサンプリング（A・B地点各2個）

iii)　土質試験（物理的性質試験，力学的性質試験）

調査期間は1968年7月8日～31日である。

調査地は奈良盆地北端に位置し，西方および北方には標高70～100mの比較的なだらかな丘陵地帯が広がり，これら丘陵地周辺には古墳，溜池が多く分布している。南方には標高50～70mの奈良盆地が広がり，その上面は盆地中央に向って緩やかに傾斜する。一方，東方は奈良市街地を経て三笠山・春日山・花山等の標高300～400mの山岳地帯となっている。地質分布はこれらの地形と良く一致し，盆地には沖積層，丘陵地帯には大阪層群および段丘堆積物，山岳地帯には安山岩・花崗岩類が分布している。

平城宮跡は丘陵地帯と盆地部との境界域にあたるため，段丘堆積物と沖積層が共に分布しており，北から南に向い層厚を増している。今回の調査は沖積層を対象とし，まず平板載荷試験を実施した後，載荷試験地点を試掘し，地質状況の観察ならびにブロックサンプリングを行なった。

＊ **A地点**　馬寮地域第47次調査地区内である。近年まで水田耕作が行なわれていたところで，耕土および沖積層が分布する。平板載荷試験は沖積層の砂質シルト層で実施した。既存資料によれば，沖積層は深度ＧＬ－５～６ｍ以浅に分布し，比較的軟弱な粘土層で構成されており，部分的に砂～砂礫層の薄層が挟在している。一方，洪積層は深度ＧＬ－５～６ｍ以深に分布し，密な砂礫層および粘土層である。遺構面は深度ＧＬ－0.5～0.6ｍ以深に分布しており，砂質土
＊ および砂質シルトで構成されている。試験終了後，載荷試験地点を約 1.2ｍ 掘削し，地質状況を観察した。地質柱状図を Fig. 60—左に示す。

B地点　水上池尻の南方，現況は水田である。既存資料によれば，東西に小丘がありここには段丘堆積物が分布している。調査地はこれら小丘に挟まれた南北にのびる谷部にあたる。地質状況は深度ＧＬ—0.2ｍ までは耕土，ＧＬ—0.5ｍまでは盛土である。深度ＧＬ—0.5ｍ以深に
＊ は粘性土層が分布し，平城宮の遺跡はこの粘性土層および盛土中に形成されている。地質柱状図を Fig. 60—右に示す。

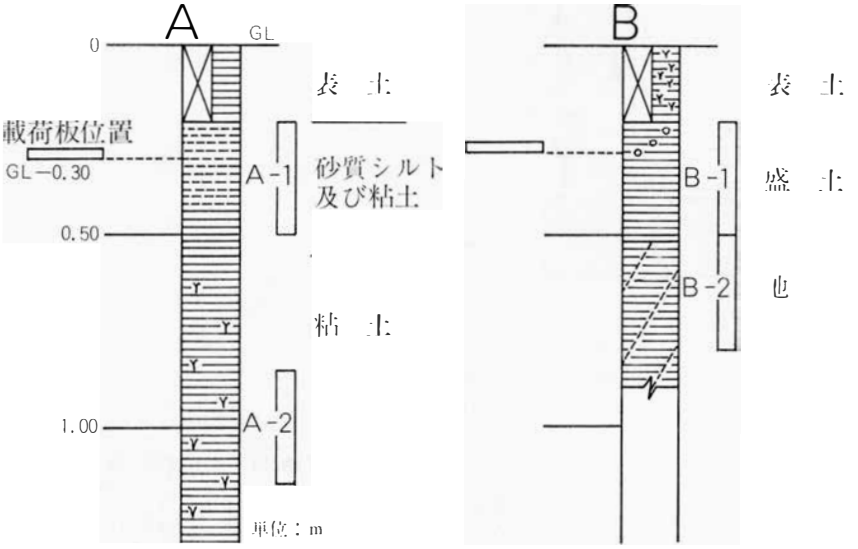


Fig. 60　地質柱状図（左：A 地点，右：B 地点）

平板載荷試験結果　本調査で採用した試験装置をFig. 61—に示す。載荷重としてはドラム缶に水を張ったものを使用し，荷重はオイルジャッキによって加圧，フルービングリングによって載荷重強度を読み取った。載荷板は 30×30×2.5㎝の鋼板を使用し，沈下量は 1 /100mm 読み
＊ ダイヤルゲイジで測定した。載荷方法は緩速載荷とし，順次 0.5ｔずつ増量していった。最大荷重はＡ地点・Ｂ地点とも実荷重で 3.5ｔとした。

Ａ地点での降伏点は 8t/㎡，Ｂ地点では 7.5t/㎡である。また，総沈下量20mm に達した荷重はＡ地点で21t/㎡，Ｂ地点では20t/㎡である。以上から長期許容支持力を計算すると，Ａ地点では 4t/㎡，Ｂ地点では 3.75t/㎡となる。なお，Ａ地点では最大荷重 38.9t/㎡のとき沈下量は
＊ 50mm であった。試験終了後載荷面中央を垂直にカットした結果，今回の載荷により遺構面は

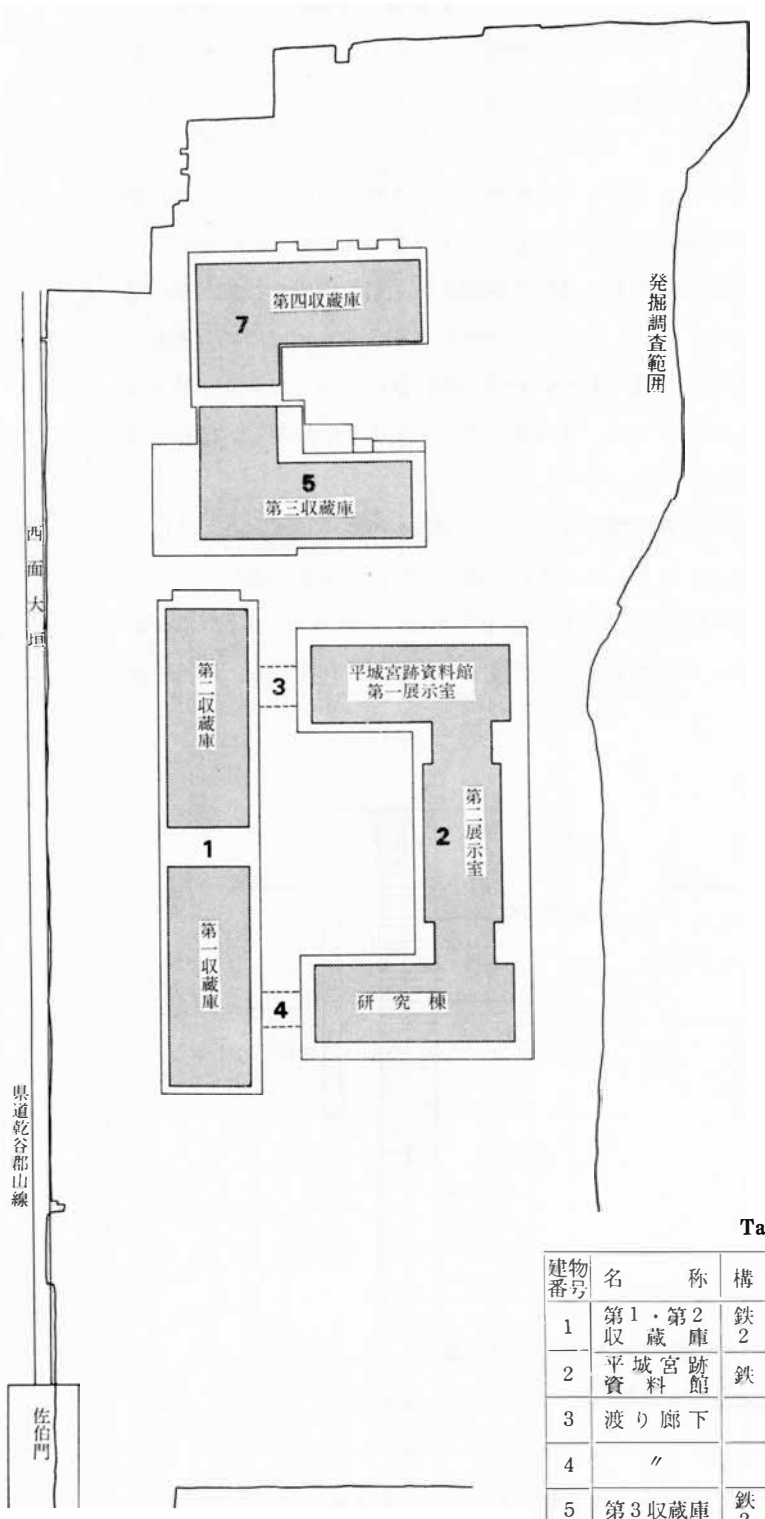
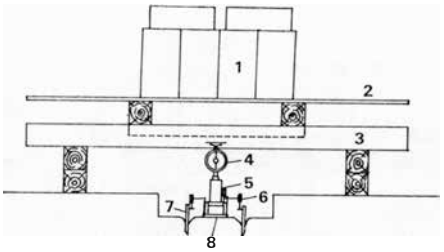


Fig. 61　平城宮跡資料館等建物配置図

Tab 21　建築概要と構造

建物番号	名称	構造	面積 建面積 m²	面積 延面積 m²	備考
1	第1・第2収蔵庫	鉄骨造2階建	1552	2700	昭44. 3 新築
2	平城宮跡資料館	鉄骨造	1943	1943	昭45. 3 〃
3	渡り廊下	〃	84	84	昭47. 3 〃
4	〃	〃	84	84	〃 〃
5	第3収蔵庫	鉄骨造2階建	1099	1927	昭50. 4 〃
6	ポンプ室	コンクリートブロック	8	8	〃 〃
7	第4収蔵庫	鉄骨造2階建	848	1693	昭52.11 〃
8	油庫	コンクリートブロック	8	8	〃 〃
9	便所	鉄骨造	68	68	昭56. 3 〃
計			7811	10632	



1 ドラムカン(25本)　5 オイルジャッキ
2 足場板　6 ダイヤルゲージ
3 尺角　7 支持脚
4 ブルービングリング　8 載荷板(0.3×0.3m)

Fig. 62 平板載荷試験装置

ほとんど影響を受けていないことが明らかとなった。

土質試験結果　平板載荷試験を実施した地点から各2個のブロックサンプルを採取し，試験室にて各種の試験を行なった。物理的性質については，A・B両地点ともほぼ同じ性質を示している。粒度分布は良好で，Casagrande, A. の塑性図によれば，いずれも塑性大で有機物を含まぬ粘土に相当する。力学的性質については，一軸圧縮強度値（qu）がA地点とB地点とで異なる。A地点ではqu＝1.07～1.24kg/c㎡であるのに対して，B地点では qu＝0.41～0.49kg/cm²と著しく低く，著しく弱い粘土であることを示している。鋭敏比は両地点とも 1.1～1.6 と低く，乱されても強度の低下は少ない土といえる。

遺構面の沈下について　地耐力調査の結果，A地点の方が有利であることが判明したが，構造物建設に際し遺構面に及ぼす影響について別途明らかにする必要があり，載荷重を 4t/㎡ として粘土層の圧密沈下計算を行なった。4t/㎡ の上載荷重を加圧したばあい，地盤沈下は全体で0.43cm，また遺構面では0.16～0.20cmに過ぎず，この程度の沈下は遺跡保存上さしたる問題ではないと考えられた。

3　設計と施工

基本設計　基本設計は入江三宅設計事務所に委嘱した。設計にあたっては，1）遺構面を損うことのない構造とする，2）環境を著しく損うような目立つ意匠は避け，7 m以下の高さとする，3）将来撤去可能な構造とする，の3点が基本的な要請となった。展示および収蔵施設を建造する範囲は東西 80m，南北 160mとし，進入路は北からとり，西側県道からはできるだけ離して排気汚染に対処し，東限は馬寮官衙域内に納める，等を勘案した。建物配置はFig. 61に示したように，第1・第2収蔵庫を西側に南北棟として配し，展示・研究棟は東側に北・東・南3棟をコ字形に並べて接続し，全体として中庭を囲む□形に構成した。この北に接して第3・第4収蔵庫を増設し，資料館を中心とする発掘調査用施設として完結させた。

構　造　建物は鉄骨造で資料館は1階平家建，収蔵庫は総2階建である。構造はラーメンまたはトラス構造，屋根は各棟切妻造，鉄板葺で，壁体にはＡＬＣ板（軽量コンクリート板）を使用した。これは，材料と構造を吟味することによって建物の重量を出来る限り軽減し，遺構面の保護に留意したためである。柱1本分の最大荷重は基礎まで含めて19.8ｔと概算されたが，これにその荷重を直接支える基壇土（遺構面で約2mにひろがる台形断面と考える）6.4ｔを加えても，合計26.2ｔ，即ち3.275t/㎡であって，許容地耐力以内におさまっている。なお，瓦のバラ積のような重量物は，荷重が構造体にかからぬよう考慮されている。各建物の建築概要をTab. 21に示した。

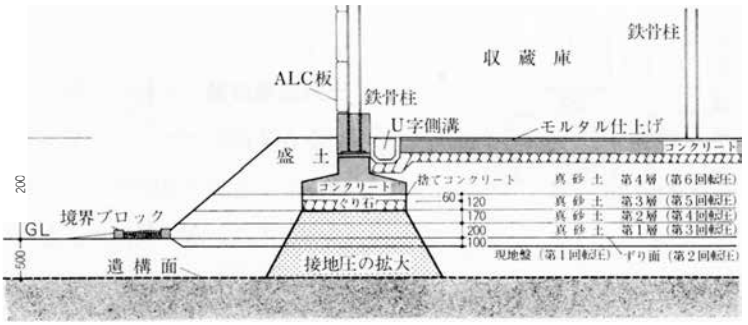


Fig. 63　遺構面の保護と基礎工事

実施設計と施工　実施設計および工事監理は建設省近畿地方建設局が，また施工は株式会社森組が行なった。遺跡の発掘調査後，Fig. 63に示したように遺構面から約50cmを埋め戻し，この上に高さ約1 mの基壇を4層に分けて積層し，各層毎に転圧した。基礎は底面の幅が1.0～1.2mの布基礎とし，基壇中に据えられている。収蔵庫では，外壁はALC板であるが，一部をコンクリートブロック積みとし，屋根は耐候性鋼山型プレートを使用して屋根裏には断熱材を吹きつけている。天井は軽量鉄骨で下地をフレキシブルボードまたはプラスターボード仕上げとし，床はモルタルコテ押え仕上げ，一部フローリング張りで納めている。保存処理をほどこした木器や木簡などを収納するため，空気調和設備を備えた特別の収蔵室，水浸状態の木製遺物を収容するための水槽等を備えた。

4　馬寮遺構模型の製作

1965年度から文化庁記念物課の予算によって宮殿宮衙建築等の復原模型の製作が続けられている。すでに堺積基壇建物一郭，内裏正殿周辺部が完成しており，1968年度には3回目として馬寮地域の遺構模型を製作した。馬寮域東南部の東西80m，南北90mの範囲を縮尺1/50で製作したものである。平城宮跡発掘調査部が仕様を作成し，株式会社京都科学標本が製作にあたった。

遺構面の製作は，遺構図面に基づき，まず切り抜いた合板（厚3mm）を井桁状に組み，間に粘土を詰めて原型を成形した。次にこの粘土製の原型の上に石膏を流し，遺構面の雌型を作製した。柱穴については4つのタイプに分類し，合板を精密に貼り合わせて雌型の状態で成形，石膏の遺構面雌型の所定の位置に接着した。その上に離形剤を塗布し，グラスファイバークロスを補強材として成形用樹脂とともに積層した。さらに角材を取り付け，模型底面と見付面を9 mm 合板で補強した。樹脂面の仕上げについては，実際の遺構と同質の砂を採集し，顔料で着色後遺構面に接着，さらにビニール塗料によって固定させた。

架台骨組は木材で，見付面は化粧合板仕上げとし，遺構面にはプラスチックが被覆してある。大きさは160cm×180cm，見付面の高さは22cmで金属パイプの足がついており，上端までの高さは88cmである。また架台と遺構面はダボによって接合されており，適ぎ取りはずしが可能となっている。また，透明アクリル板を資料館等建物の形に切り重ねることによって遺構との位置関係を表示した。

別　　表

1　主要建物一覧表
2　軒丸瓦分類表
3　軒平瓦分類表
4　土器法量表
5　土師器編年表
6　黒色土器編年表

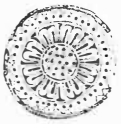
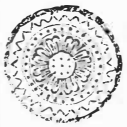
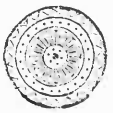
別表1　主要建物一覧表

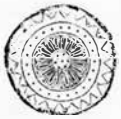
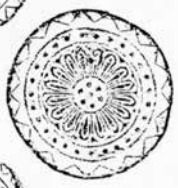
時期／地区	建物	規模	棟方向	廂	桁行 m(尺)	梁間 m(尺)	廂 m(尺)	柱穴 m	備考
Ⅱ期	SB6450	7×4間	WE	NS	20.5(70尺)	11.7(40尺)	3(10)	方1.2	
	SB6425	13×2	NS		38.4(130)	5.9(20)		方1	北半部増築 間仕切あり
	SB6180	5×2	WE		12.0(40)	4.4(15)		方1	SB6450 前殿
	SB6170	6×3	NS	E	24.8(84)	8.8(30)	3(10)	身舎方1，廂0.6	廂桁行7尺等間
	SB6330	3×3			6.3(21)	5.7(19.5)		方1	総柱
	SB5955	8×2	NS		19.2(64)	5.9(20)		方1	SB5956 と一連
	SB5956	9×2	NS		21.3(72)	5.5(19)		方1	SB5955 と一連
Ⅲ期	SB6185	7×3	WE	N	20.9(70)	10.2(34)	4.2(14)	方1	
	SB6195	7×2	WE		20.9(70)	5.4(18)		方0.5～0.8	
	SB6385	7×2	WE		20.9(70)	6.0(20)		方0.8	
	SB6172	10×2	NS		28.6(95)	6.6(22)		方0.8	
	SB5951	14×3	NS		40.6(140)	8.1(27)		0.8×1.5～1.8	柱掘形，長方形
	SB6120	8×3	NS		23.3(80)	7.9(27)		0.6×0.8	柱掘形，長方形
	SB6140	3×3			5.4(18)	4.5(15)		方0.8	総柱
Ⅳ期	SB6420	6×3	WE	S	17.9(60)	7.8(26)	3(10)	方0.8	
	SB6175	22×4以上	NS	WE	52.4(176)以上	10.8(36)	2.7(9)	方0.5～0.8	間仕切あり
	SB6430	14×4	WE	NS	33.3(112)	10.8(36)	2.4(8)	方0.8	
	SB6435	6×2	NS		21.1(72)	7.1(24)		方1～1.2	
	SB6340	3×3			5.4(18)	4.5(15)		方0.9	総柱
	SB3690	15×2	NS		39.7(135)	5.3(18)		方1.2	間仕切・床束
	SB6100	16×2	NS		38.2(126)	4.8(16)		方0.8～1.2	
Ⅴ期	SB6386	6×2	WE		17.6(60)	6.0(20)		方0.4～0.7	一部床張
	SB6173	7×4	NS	WE	18.9(63)	12.7(42)	3.3(11)	方1	
	SB6460	5×4	NS	WE	13.6(45)	10.8(36)	2.7(9)	方0.5～0.8	
	SB6469	7×2	WE		16.6(56)	4.8(16)			
	SB6401	7×4	NS	WE	17.0(56)	12.4(42)	3.3(11)	方0.6～0.8	塼の礎盤
	SB6130	5×3	WE	N	15.0(50)	10.2(34)	4.2(14)	方0.8～1.1	大甕の跡
	SB6141	5×2	NS		10.4(35)	4.2(14)		方1	

別表 2　軒丸瓦分類表

型式		直径	外区 中房径	外区 蓮子数	外区 弁区径	外区 弁幅	外区 弁数	外区広	外区 内縁 副	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	玉縁長	6ADC	6ADD	6ADE	計	%
6018 B											19	13				1			1	0.3
6130 B		135	30	1＋8	79	15	T 16	28	16	S 24	12	10	LV				1		1	0.3
6131 A		166	40	1＋8	124	21	T 16	21	8	S 22	13	11	RV 22				2		2	0.6
6133 A		168	34	1＋5	96	17	T 12	36	19	S 13	17	9	—	400	50		1		1	0.3
6133 B		160	36	1＋6	90	17	T 12	35	17	S 15	18	9	—	406	58	1			1	0.3
6133 Da		157	40	1＋6	111	17	T 16	23	14	S 24	10	10	—			1			1	0.3
6133 Db		163	43	1＋6	111	19	T 16	26	16	S 24	10	10	—				1		1	0.3
6133 M		168	37	1＋6	112	16	T 16	28	16	S	12	9	—				1		1	0.3
6133 P		167	36	1＋4	117	18	T 16	25	13	S 16	12	8	—			1	1		2	0.6
6131 A		161	36	1＋8	96	11	T 12	32	19	S 16	13	13	LV 16	400	59	2	2		4	1.3
6225 A		166	68	1＋8	116	36	F 8	25	12	K	13	8	RV 24	373	48	14	6		20	6.5
6225 B		174	68	1＋8	128	32	F 8	23	6	K	17	7	RV			1	3		4	1.3
6225 C		155	62	1＋8	111	29	F 8	22	7	K	15	7	RV 32			4	2		6	1.9
6225 E		165	61	1＋8	119	30	F 8	23	11	K	12	6	RV				1		1	0.3
6225 L		254	93	1＋8	204	51	F 8	25	8	K	17	6	RV 40	422	52		1		1	0.3
6231 B		210	61	1＋6	140	34	F 8	35	20	S 34	15	12	—			6			6	1.9
6235 C		183	56	1＋5	123	31	F 8	30	19	S 16	11	8	—			1	3		4	1.3
6273 B		180	64	1＋5＋9	128	32	F 8	26	13	S 40	13	12	RV 64				4		4	1.3
6274 Ab		177	61	1＋5＋9	127	34	F 8	25	12	S 40	13	13	LV 42	404	68		1		1	0.3

	6ADC	6ADD	計	%
6133 A〜6133 P	3	4 (7)	7 (10)	2.3 (3.2)
6225 A〜6225 E	19 (26)	13 (15)	32 (41)	10.3 (13.2)

型式		直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区広	外区 内縁 副	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	主縁長	6ADC	6ADD	6ADE	計	%
6275 A		182	57	1+4+12	116	29	F 8	33	12	S 43	21	11	LV 32			1	2		3	1.0
6275 C		183	59	1+8+15	115	32	F 8	38	13	S 43	25	13	LV				1	9 (11)	1 9 (11)	0.3	2.9 (3.5)
6275 D		196	54	1+4+8	108	28	F 8	44	13	S 36	31	14	LV 21	464	44		5		5	1.6
6278 B		185	61	1+5+10	131	34	F 8	30	16	S 35	14	9	LV 52				5		5	1.6
6278 Cb		183	62	1+6+10	137	34	F 8	23	11	S 39	12	9	LV 33	353	51		10	18 (19)	10 18 (19)	3.2	5.8 (6.1)
6278 E		180	62	1+8+12	146	37	F 8	17	9	S 40	8	9	LV 35	359	51		3		3	1.0
6279 A		176	47	1 + 8	104	26	F 8	36	12	S 31	24	13	LV 27	431	59		2	8	2 8	0.6	2.6
6279 B		175	46	1 + 6	107	27	F 8	34	17	S 28	17	8	LV				6		6	1.9
6281 Ab		164	57	1+4+8	102	26	F 8	31	14	S 32	17	10	LV 46	490	80		3	5	3 5	1.0	1.6
6281 B		184	62	1+8+8	120	29	F 8	32	13	S 32	19	11	LV 37				2		2	0.6
6282 Ba		162	45	1 + 6	86	31	F 8	38	20	S 24	15	9	LV 24	361	53	2	5		7	2.3
6282 Db		132	27	1 + 6	64	24	F 8	34	20	S 24	14	9	LV 24	341	39		1		1	0.3
6282 Fa		158	40	1 + 6	92	32	F 8	33	20	S 24	13	14	LV 24	360	42	1	7	16 (21)	8 25 (34)	2.6	8.1 (11.0)
6282 Fb		158	40	1 + 6	92	32	F 8	33	20	S 24	13	14	LV 24	360	42	9 (13)	1		1	0.3
6282 G		160	46	1 + 6	90	24	F 8	35	17	S 24	18	11	LV			5	2		7	2.3
6282 Hb		174	40	1 + 6	96	23	F 8	39	23	S 24	16	16	LV 22			1			1	0.3
6284 A		155	35	1 + 6	83	30	F 8	36	18	S 24	18	13	LV 23			1	2		3	1.0
6284 C		155	40	1 + 6	89	23	F 8	33	20	S 24	13	11	LV 16	375	48	2 (3)	2	7	3 9 (10)	1.0	2.9 (3.2)

型式		直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区広	外区 内縁 副	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	玉縁長	6ADC	6ADD	6ADE	計	%
6284 D		164	38	1 + 6	92	24	F 8	36	17	S 20	19	14	LV 16				3		3	1.0
6285 A		161	33	1 + 6	87	24	F 8	37	21	S 23	16	16	LV 22	370	55	2	1 (2)		3 (4)	1.0 (1.3)
6291 A		161	35	1 + 6	87	24	F 8	37	18	S 16	19	8	LV 16	370	41	7	2		9	2.9
6296 A		166	36	1 + 8	99	28	F 8	33	16	S 16	17	12	LV 17			1	3	1	5	1.6
6301 C		160	48	1+5+10	102	26	F 8	29	16	S 20	13	8	LV 33	383	35	19	1		20	6.5
6303 B		157	34	1 + 6	91	24	F 8	33	15	S 20	18	10	LV 20	389	50	1	3	2	6	1.9
6304 A		162	35	1 + 6	99	37	F 8	31	15	S 17	16	16	LV 16				2		2	0.6
6304 L		255	61	1 + 6	159	43	F 8	48	23	S 27	25	14	LV 17				3 (4) 1		3 (4) 1	1.0 (1.3) 0.3
6307 B		168	42	1 + 6	92	28	F 8	38	15	S 19	23	13	LV 19			6			6	1.9
6307 I				1 +			F	33	14	S	19	7	LV			1	7		1	2.3 0.3
6308 A		162	35	1 + 6	94	27	F 8	34	11	S 16	23	8	LV 16	371	52	3			3	1.0
6308 D		163	36	1 + 6	92	25	F 8	32	15	S 22	13	5	LV 16	405	55	1	4 (7)		4 (7) 1	1.3 (2.3) 0.3
6311 A		161	40	1 + 6	96	26	F 8	32	15	S 26	17	11	LV 23	395	56	6			6	1.9
6311 B		162	43	1 + 6	92	27	F 8	33	13	S 26	20	13	LV 23	376	58	5	13	0 (2)	13 (15) 5	4.2 1.6 (4.8)
6311 D			38	1 + 6	96	21	F 8		15	S 26			LV			2			2	0.6
6313 A		123	24	1	71	32	F 4	26	16	S 16	10	8	LV 16	312	42	2			2	0.6
6313 B		116	17	1	70	32	F 4	23	10	S 16	13	8	LV 16	257	43		1	2	1 4	0.3 1.3
6313 C		95	15	1	57	29	F 4	18	8	S 16	9	6	LV 16	333	38		1		1	0.3
6314 B		121	23	1 + 5	67	32	F 4	27	15	S 19	12	10	LV			2			2	0.6
6316 K		160	46	1 + 8	110	30	F 9	25	12	S	13	7					1		1	0.3
																不明型式	30	34	65	21.0
																総計	147	160	3	310	89.7(99.8)

別表3　軒平瓦分類表

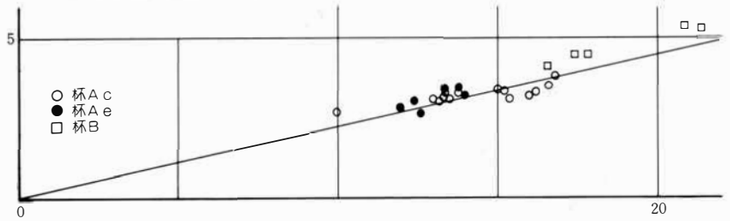
型式		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇巾	脇区文様	文様の深さ	全長	顎の形態 直	曲	段	6ADC	6ADD	6ADE	計	%
6575 A					72		J										○		3			3	0.5
6641 Ab					49	21	H K	21	S 23	7	—			3				○		2		2	0.4
6641 C		284	56	325	52	24	H K	13	S 23	15	LV 19	59	LV 4	2	397			○	14	107	2	123	21.9
6641 E		314	63	306	50	24	H K	15	S 21	12	LV 26	72	LV	2				○		4 } 121 (124)	} 3	4 } 138 (141)	0.7 } 24.6 (25.1)
6641 F		324	77	324	50	20	H K	16	S 24	14	LV 26	70	LV 5	2.5	371			○		7	1	8	1.4
6641 O						31	H K	12	S		LV			1				○		1		1	0.2
6642 A					46	21	H K	12	S 20	13	S 19		S 5	2				○		4		4	0.7
6642 B				305	46	22	H K	13	S 22	11	S	58	S 4	3	366			○		3 } 9		3 } 11	0.5 } 2.0
6642 C		290	62	295	45	25	H K	8	S 22	12	S 22	61	S 4	1	429			○	1	2	1	4	0.7
6643 Aa		299	78	294	45	23	H K	11	S 22	11	S 23	65	S 4	2	343			○		4		4	0.7
6643 B			49	341	49	23	H K	13	S	13	S 20	48	S 4	2				○	} 0 (1)	3 } 9 (10)		3 } 9 (11)	0.5 } 1.6 (2.0)
6643 C		305	78	309	51	25	H K	13	S 22	13	S 23	68	S 4	5	383			○		2		2	0.4
6647 A		335		332	64	35	H N	15	S	14	LV	64	—	3				○		3		3	0.5
6647 C		295	46	299	49	24	H N	13	S 27	10	LV 38	51	—	4				○	} 2	2 } 12		2 } 15	0.4 } 2.7
6647 D		311	60	323	57	29	H N	15	S 31	13	LV 42	49	—	2.5	366			○	1	7	1	9	1.6
6647 G		290	75	300	42	25	H N	9	S 34	8	LV	47	—	2				○	1			1	0.2
6661 C		322	81	345	70	37	K K	18	G S 17	15	LV 24	72	L 4 LV R 2	7				○		1		1	0.2
6663 A		284	77	286	57	27	K K	15	K	15	K	62	K	2		○	○		4	1		5	0.9
6663 B		301	66	308	59	23	K K	18	K	18	K	64	K	2	353	○	○	○	15 } 33 (37)	4 } 21 (27)	} 2 (3)	19 } 56 (67)	3.4 } 10.0 (11.9)
6663 C		270	72	282	53	26	K K	14	K	13	K	73	K	3	376	○	○		14	16	1	31	5.5
6663 F					55	30	K K	13	K	12	K		K	3			○				1	1	0.2

型式		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇巾	脇区文様	文様の深さ	全長	顎の形態 直	曲	段	6ADC		6ADD		6ADE		計		%	
6664C		240	62	252	51	24	K K	14	S 21	13	S 21	62	S 3	4	376			○	11		7				18		3.2	
6664D		240	60	269	60	22	K K	20	S 17	18	S 19	74	S 3	5	358			○	17		1				18		3.2	
6664F		245	61	275	58	27	K K	14	S 19	17	S 21	78	S 3	5	375			○	34	63	7	33		6	41	102	7.3	18.1
6664Ga		263	80	265	60	23	K K	20	S 17	17	S 17	59	S 3	6	371			○	1	(64)					1	(103)	0.2	(18.3)
6664H		272	68	281	57	24	K K	17	S 21	16	S 21	78	S 3	6	376			○			3		1		4		0.7	
6664I		236	51	276	52	24	K K	16	S 21	12	S 21	50	S 3	4	383			○			15		5		20		3.6	
6666A		222	57	232	51	22	K K	15	S 19	14	S 18	62	S 3	5	321			○	1		1				2		0.4	
6671C		288	66	294	58	18	K K	19	GS 10	21	LV 22	66	GS 2	5	296	○			13		5				18		3.2	
6681B		274	80	273	55	22	K K	15	K	18	K	58	K	3	355		○		6		1				7		1.2	
6681C		253	73	259	47	17	K K	16	K	14	K	58	K	3			○		6	13		3			6	16	1.1	2.8
6681E		262	64	262	47	17	K K	16	K	14	K	63	K	7			○		1	(14)					1	(17)	0.2	(3.0)
6681S					33	14	K K	7	K	12	K	31	K	2		○					2				2		0.4	
6682A		245	78	273	52	24	K K	15	S 17	13	S 17	78	S 3	5	350		○	○	1		2				3		0.5	
6685D		193	45	199	36	15	K K	11	S 3 1	10	S 15	45	S 2	3	326			○			1				1		0.2	
6691A		270	55	293	55	25	K K	14	S 21	16	S 21	58	S 3	4	345		○		4		4				8		1.4	
6694A		235	67	275	60	32	K K	17	S 15	11	S 14	70	S 3	4	395			○			2				2		0.4	
6704A					66	28	K K	20	S 3 1 1	18	S 13		S	3			○		1						1		0.2	
6710A		264	55	270	56	22	K K	15	S 3 X 4	19	S 11 X 4	57	S 3	4	347	○			5						5		0.9	
6714A						28	K K	16	S 20		S 18		S 4	8			○		1		6				7		1.2	

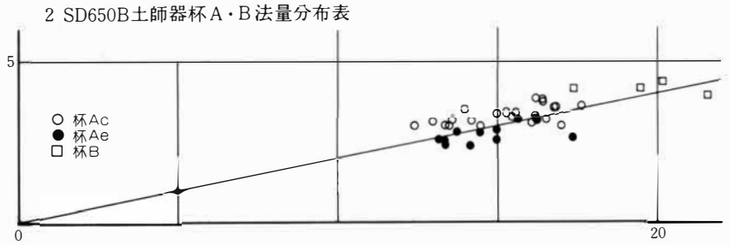
型式		瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇巾	脇区文様	文様の深さ	全長	顎の形態 直	曲	段	6ADC		6ADD		6ADE	計		%	
6719A		287	49	280	32	22	KK	0.5	—	0.5	—	33	—	2	370	○			1		23		1	25		4.4	
6721C		265	49	280	53	25	KK	15	S26	13	S32	60	—	3	359		○		13		5			18		3.2	
6721D		272	54	277	53	22	KK	14	S26	17	S32	55	—	3			○		5					5		0.9	
6721F		289	65	297	52	26	KK	13	S33	13	S34	65	—	3			○		11	38		10		11	48	2.0	8.5
6721Ga		260	60	280	47	24	KK	11	S34	12	S35	52	—	3	368	○	○		3	(19)	2	(12)		5	(61)	0.9	(10.9)
6721Gb																			2		2			4		0.7	
6721H		285	69	293	51	21	KK	14	S33	16	S34	57	S3	3			○		4		1			5		0.9	
6727A				271	54	23	KK	15	S14	16	S17	74	S3	4				○	1	4				1	8	0.2	1.4
6727B		244	64	274	59	25	KK	18	S10	16	S13?	69	S1	4				○	3		4			7		1.2	
6732A		285	47	305	69	36	KK	15	S9	18	S9	75	S3	4	382		○		1					1		0.2	
6732C		305	44	307	60	30	KK	14	S9	16	S9	65	S3	3	397		○		2	4				2	4	0.4	0.7
6732Q					68	33	KK	19	S	16	S		S	4		○			1					1		0.2	
6734A					48	26	KK	9	K	13	K	57	K	4		○					1			1		0.2	
6761A		270	61	289	66	32	KK	15	S9	19	S9	77	S3	4	368		○				7			7		1.2	
6763A		247	45	268	63	29	KK	20	S9	14	S9	64	S3	3			○				1			1		0.2	
6775A		298	54	298	61	28	KK	15	S10	18	S10	55	S3	4			○		2					2		0.4	
																			不明型式		21		16		37		6.6
																			総数		243		304	15	562		94.3(99.9)

別表 4　土器法量分布表

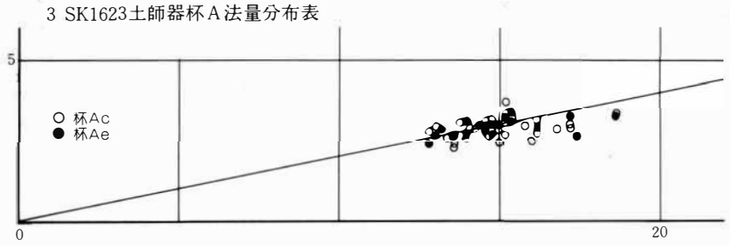
1 SD650A土師器杯A・B法量分布表



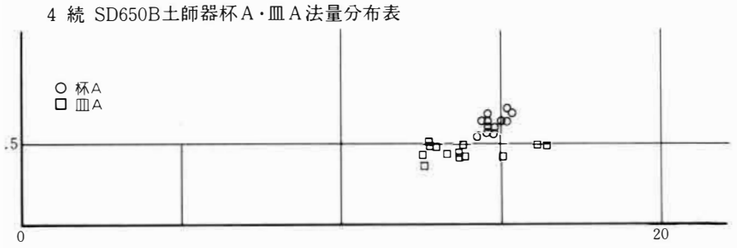
2 SD650B土師器杯A・B法量分布表



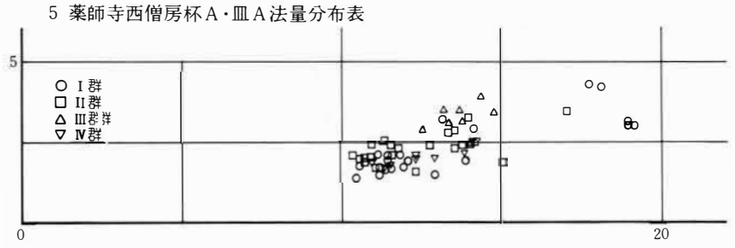
3 SK1623土師器杯A法量分布表



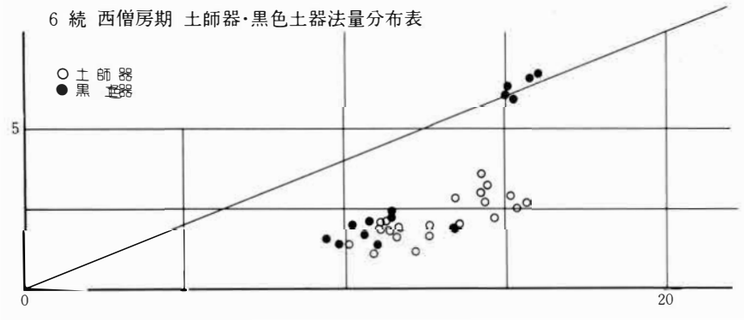
4 続 SD650B土師器杯A・皿A法量分布表



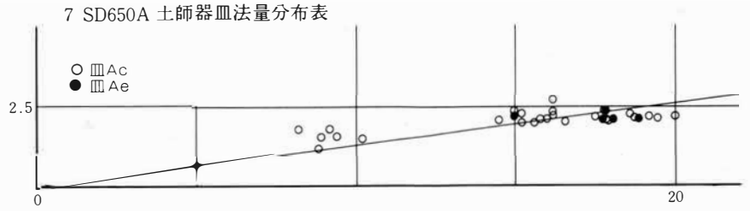
5 薬師寺西僧房杯A・皿A法量分布表



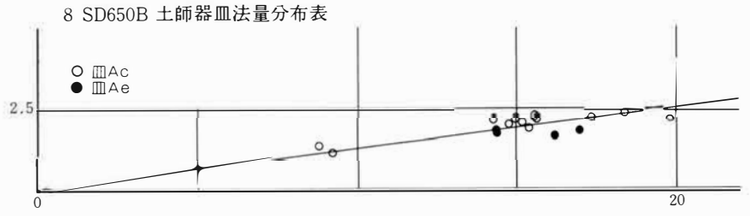
6 続 西僧房期 土師器・黒色土器法量分布表



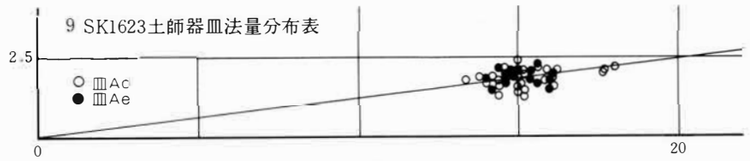
7 SD650A 土師器皿法量分布表



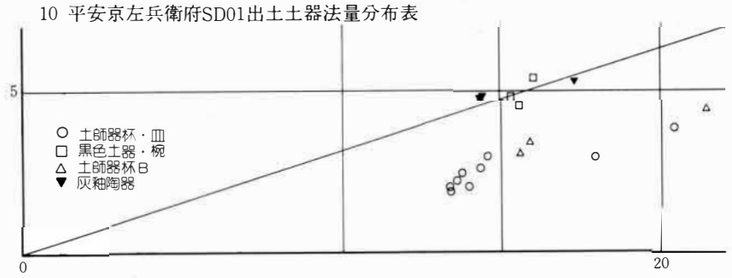
8 SD650B 土師器皿法量分布表



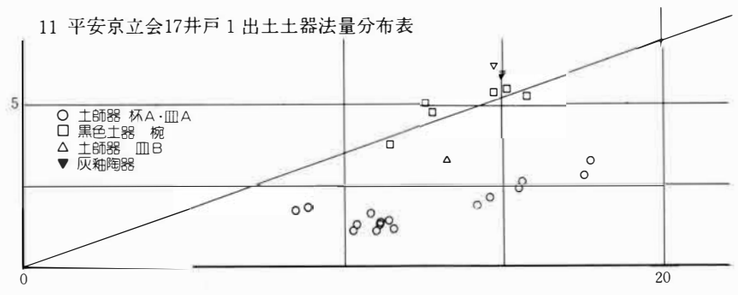
9 SK1623土師器皿法量分布表



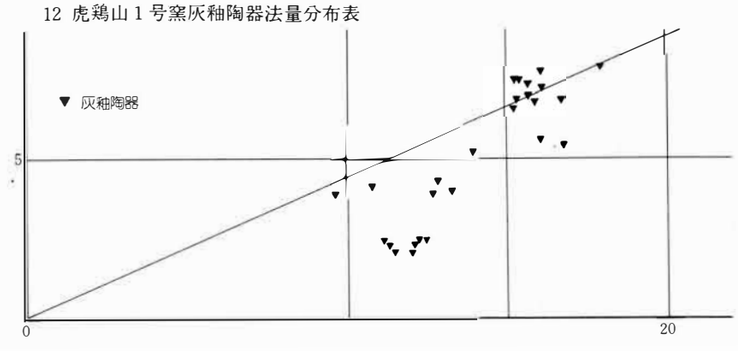
10 平安京左兵衛府SD01出土土器法量分布表



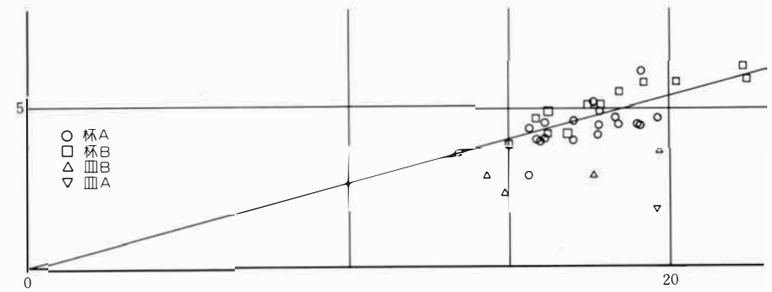
11 平安京立会17井戸 1 出土土器法量分布表



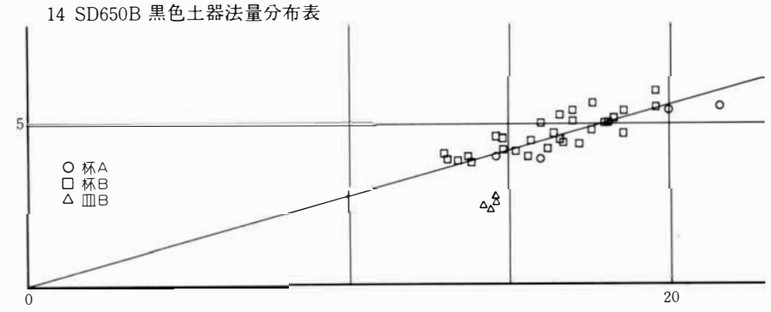
12 虎鶏山 1 号窯灰釉陶器法量分布表



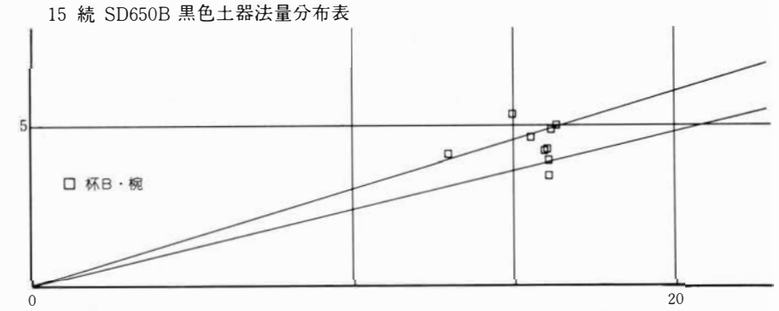
13 SD650A 黒色土器法量分布表



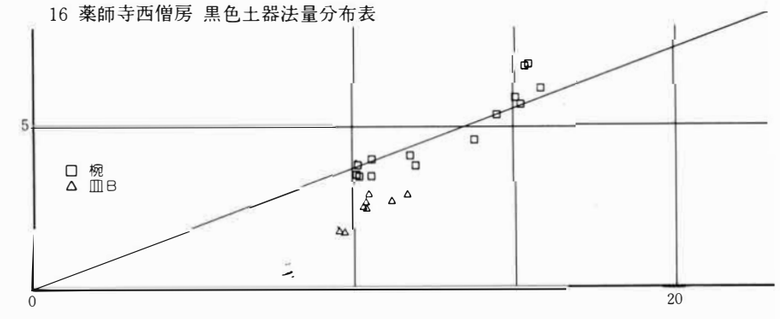
14 SD650B 黒色土器法量分布表



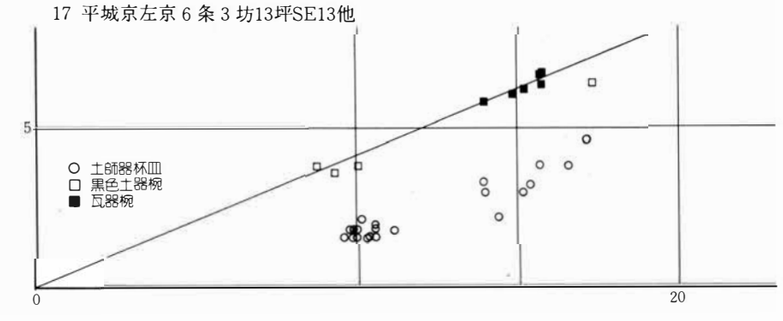
15 続 SD650B 黒色土器法量分布表



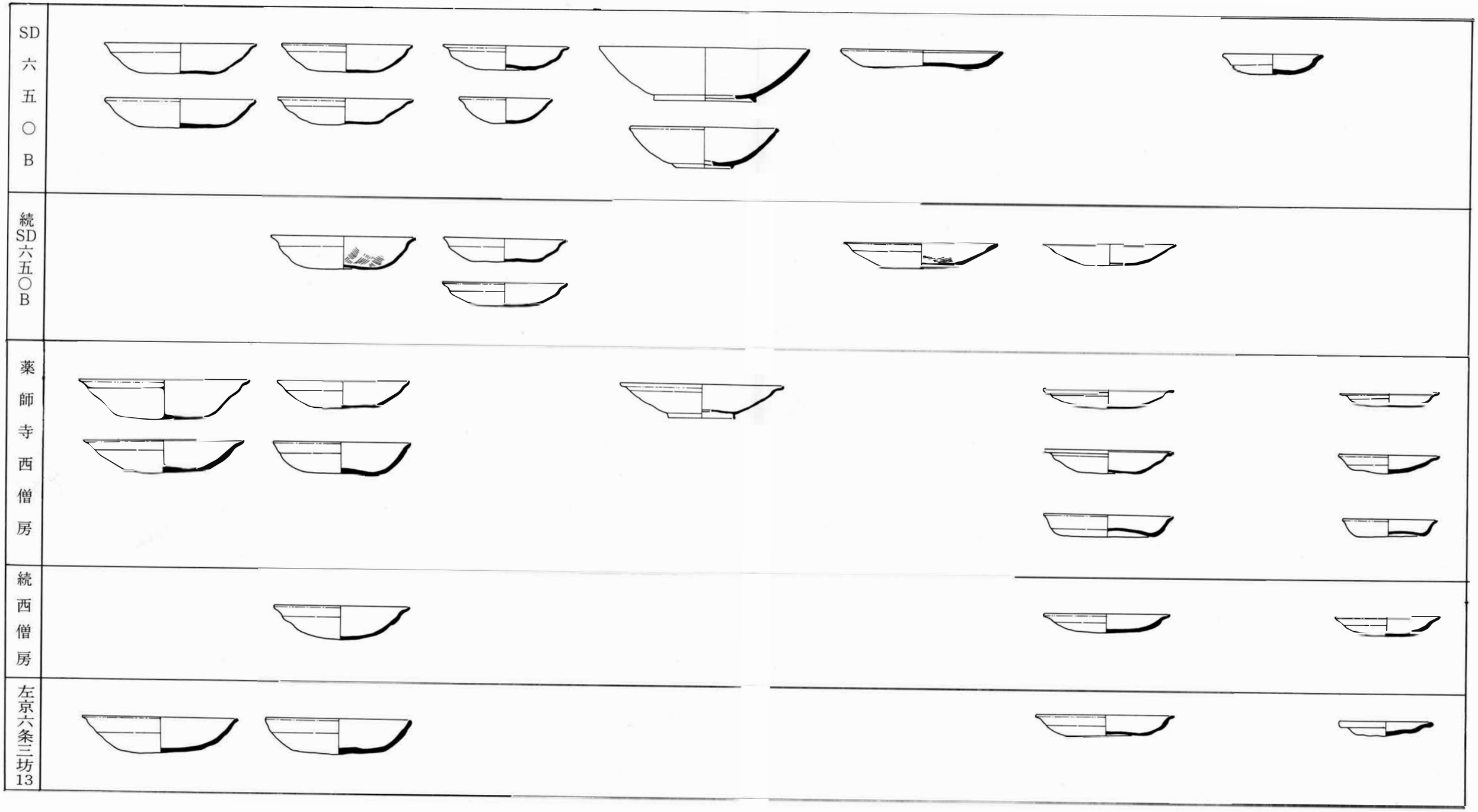
16 薬師寺西僧房 黒色土器法量分布表



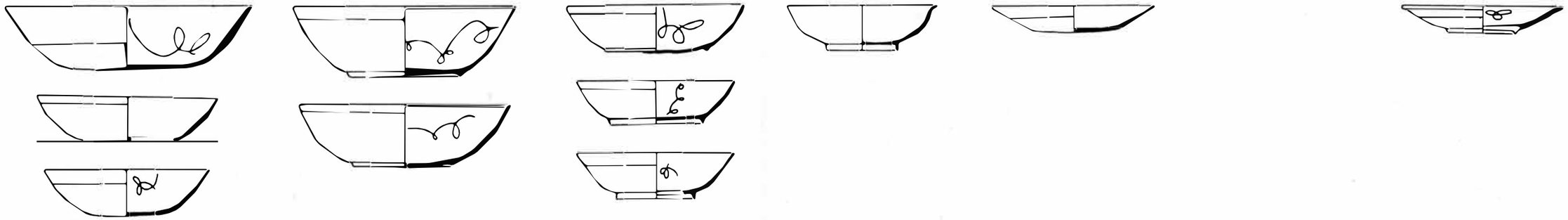
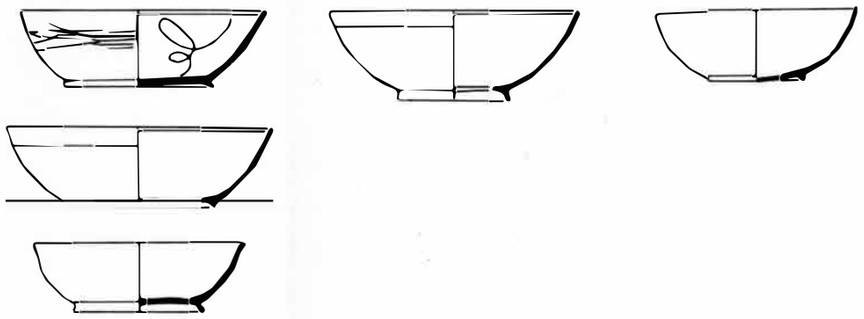
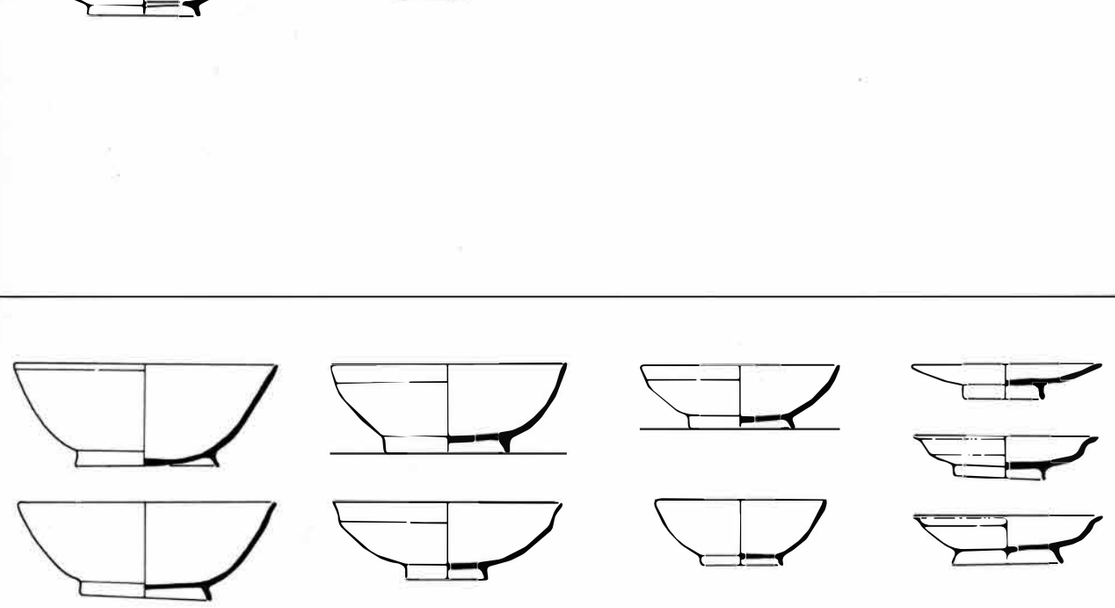
17 平城京左京 6 条 3 坊13坪SE13他



別表５　土師器編年表



別表6　黒色土器編年表

SD六五〇B	
続SD六五〇B	
薬師寺西僧房	
続西僧房	
左京六条三坊13	

RESEARCH REPORT OF NARA NATIONAL CULTURAL
PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE, NO. 42

NARA IMPERIAL PALACE SITE
EXCAVATON REPORT XII

SURVEYS AT THE LOCATION OF THE IMPERIAL STABLE BUREAU

ENGLISH SUMMARY

NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE 1985

CONTENTS

		Page
Chapter I	Introduction	1
	1. Aims of excavation	1
	2. Progress of recent excavations	2
	3. Preservation and maintenance of the site	5
	4. Publication of the report	6
Chapter II	Outline of Excavation	7
	1. Excavation areas	7
	2. Order of excavation	9
	A. Excavation No. 47	9
	B. Excavation No. 50	9
	C. Excavation No. 51	10
	D. Excavation No. 52	11
	E. Excavation No. 59	12
	F. Excavation No. 63	13
	G. Excavation No. 71	14
	H. Excavation No. 127	14
	I. Excavations of the western first avenue in the Nara capital grid plan of streets	14
	3. Excavation diary	15
	A. Excavation No. 47	15
	B. Excavation No. 50	16
	C. Excavation No. 51	17
	D. Excavation No. 52	18
	E. Excavation No. 59 (north)	19
	F. Excavation No. 59 (south)	21
	G. Excavation No. 63	21
	H. Excavation No. 71	23
	I. Excavation No. 127	24
Chapter III	The Site	25
	1. Constitution of the site	25
	A. Topography prior to the excavation	25
	B. Features dating to the period prior to the Palace construction	26
	C. Ancient topography	28
	2. Features	29
	A. Features of Phase I (period of Palace construction)	30
	B. Features of Phase II (early Nara period)	31
	C. Features of Phase III (middle Nara period)	35
	D. Features of Phase IV (late Nara period)	40
	E. Features of Phase V (earliest Heian period)	47

F. Features after the Palace's abandonement and other indifinable ones 50
G. West boundary wall of the Palace and the western first avenue in the Nara capital..... 61
3. Relative chronology of the features 62

Chapter IV Artifacts 66
1. Wooden tablets 66
A. from posthole for fence SA5950..... 66
B. from ditch SD5960 66
C. from ditch SD6155 67
D. from ditch SD6477 67
E. from ditch SD6499 67
2. Roof tiles and bricks..... 69
A. Classification of eaves-tiles 70
B. Rounded eaves-tiles 70
C. Flat eaves-tiles 79
D. Special rooftiles and bricks 86
E. Rounded and flat rooftiles and those with written character impression 87
F. Some arguements..... 89
3. Pottery 93
A. Pottery prior to the Palace construction 96
B. Pottery of Nara period 96
C. Pottery after the Palace's abandonment 105
D. Glazed pottery 110
E. from disposal pit SK1623(excavation No. 25)... 112
4. Wooden objects 119
A. Nara period..... 119
B. after Nara period..... 122
C. Building materials 123
5. Metal and stone objects 126
6. Coins 127
Chapter V Articles 129
1. Changing configurations at the location of the Imperial Stable Bureau 129
A. Phase I features 129
B. Phase II features 130
C. Phase III features 133
D. Phase IV features 136
E. Phase V features 138
2. The nature of the location of the Imperial Stable Bureau seen from the written resources 140
A. History and function 140
B. Imperial Stable Bureau in the Nara Palace ... 144

3. Consideration of the Heian period pottery unearthed from the area of the ancient Nara capital 147
A. Pottery types from ditch SD650B 147
B. Pottery types following those from SD650B .. 148
C. Pottery types from the floor of the western monk quarters, Yakushi-ji Temple 149
D. Pottery types posterior to the western monk quarters 151
E. Some arguements 152
4. Dendrochronological study on the pillars used in the location of the Imperial Stable Bureau 153
A. Samples and method 153
B. Resuls and some considerations 154
5. Conclusions 157
SUPPLEMENT : Construction of the Nara Palace Site Museum and the storage 158
1. Selection of the construction place 158
2. Resisting pressure investigation 158
3. Plan and execution..... 161
4. Making of the site model 162
SUPPLEMENTARY TABLES 163
ENGLISH SUMMARY 177

ILLUSTRATIONS IN TEXT

Fig. Page
1. Areal divisions of the excavated area 8
2. Areal divisions of excavation No. 47 and major features 15
3. Areal divisions of exɔavation No. 50 and major features 16
4. Areal divisions of excavation No. 51 and major features 17
5. Areal divisions of excavation No. 52 and major features 19
6. Areal divisions of excavation No. 59(north) and major features 20
7. Areal divisions of excavation No. 59(south) and major features 21
8. Areal divisions of excavation No. 63 and major features 22
9. Areal divisions of excavation No. 71 and major features 23
10 Areal divisions of excavation No. 127 and major features 24
11. Stratigraphic profile of the earthen platform for the resting place for a portabl shrine 25
12. Ancient topography and features prior to the Palace construction ... 28
13. Stratigraphic imposition of gravel pavement SX7000 and ditch SD6980 30
14. Stratigraphic imposition of pit SK6350 and posthole for fence SA3680 31
15. Stratigraphic imposition of ditch SD5960 and pit SK6098 32

16. Posthole shapes for fence SA5950 35
17. Interior situation of the smithy SB6360 38
18. Posthole shape for building SB6401 48
19. Scale drawing of one of the feature SX6137 49
20. Features relating to the western first avenue of the capital 62
21. Superimposition of postholes 64
22. Rounded eaves-tiles with concentric circles pattern 70
23. Rounded eaves-tiles with single petal lotus pattern 71
24. Rounded eaves-tiles with dual petal lotus pattern (1) 72
25. Rounded eaves-tiles with dual petal lotus pattern (2) 73
26. Relation between petals and partitions 73
27. Rounded eaves-tiles with dual petal lotus pattern (3) partition type A ... 74
28. Rounded eaves-tiles with dual petal lotus pattern (4) partition type B ... 76
29. Rounded eaves-tiles with dual petal lotus pattern (5) partition type C ... 78
30. Flat eaves-tiles with double square pattern 79
31. Flat eaves-tiles with oneway arabesque pattern (1) 79
32. Classification of minor leaves 79
33. Flat eaves-tiles with oneway arabesque pattern (2) 80
34. Flat eaves-tiles with oneway arabesque pattern (3) 80
35. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (1) 81
36. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (2) 82
37. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (3) 83
38. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (4) 83
39. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (5) 84
40. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (6) 84
41. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (7) 84
42. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (8) 85
43. Flat eaves-tiles with symmetrical arabesque pattern (9) 86
44. Demon-faced roof tiles 87
45. Written character impression on roof tiles 88
46. Regional difference of the distribution of eaves-tiles 92
47. Scale drawing of the pottery prior to the Palace construction 97
48. Scale drawing of the special earthen objects 104
49. Scale drawing of the pottery excavated from SK7097 · 7094 and SB7060 107
50. Scale drawing of the glazed earthenware 111
51. Scale drawing of the miscellaneous wooden objects 121
52. Layout of structural remains of Phase I and II 131
53. Arrangement of structural remains at the Western Government Quarters in Fujiwara Palace site 132
54. Layout of structural remains of Phase III 135
55. Layout of structural remains of Phase IV 137
56. Layout of structural remains of Phase V 139
57. Oldmap of Heian Palace 146
58. Relation between pottery and glazed-earthenware excavated from

the western monk quarters, Yakushi-ji temple 150
59. Crossdating of mean curve and samples 155
60. Columnar figure of soil analysis 159
61. Relation between the excavated area and museum buildings 160
62. Schematic drawing of testing provision 161
63. Protection of the surface and foundation work 162

TABLES IN TEXT

Tab. Page
1. Duration of excavations and excavated area quantifications 7
2. Relative chronology of the major features 65
3. Chronology of principal types of eaves-tiles 90
4. List of eaves-tiles excavated from the features 91
5. Phase divisions of pottery from the Nara Palace 95
6. Composition of pottery from well SE6166 101
7. Provenience of pottery with lacquer 102
8. Quantities of pottery with lacquer 103
9. List of pottery with brush writings 103
10. List of grey-glazed earthenware 112
11. Provenience of green-glazed earthenware 113
12. List of imported ceramics and porcelain 114
13. Composition of pottery from pit SK1623 116
14. Methods of manufacture of *Haji* ware excavated from pit SK1623 .. 116
15. Measurements of *Kezurikake* 119
16. Measurements of board- and pole-shaped wooden objects 121
17. List of building materials of wood ..... 124·125
18. List of coins 127
19. Revision of bureaucratic system of *Meryô* 141
20. Difference between mean curve and the newest tree-ring of the samples 154
21. Outline of museum buildings and their structure 160

SUPPLEMENTARY TABLES

1. Tabulation of the important buildings 164
2. Classification of rounded eaves-tiles 165
3. Classification of flat eaves-tiles 168
4. Quantilies of pottery 171
5. Chronology of *Haji* ware 173
6. Chronology of black pottery 175

PLANS

PLAN

1. Topographical map of entire Nara Palace site
2. Distribution of features in the location of the Imperial Stable Bureau
3. Areas 6ADC-G (eastern half) and 6ADC-H (north-eastern portion)
4. Areas 6ADC-H (south eastern portion) and 6ADC-K (eastern half)
5. Areas 6ADC-G (western half) and 6ADC-H (north western portion)
6. Area 6ADC-H (western half)
7. Areas 6ADC-K (western half) and 6ADD-L (northern half)
8. Areas 6ADC-L and M (northern end)
9. Area 6ADC-M (central portion)
10. Area 6ADC-M (southern portion)
11. Areas 6ADC-K and N (western end)
12. Areas 6ADC-M and O (western end)
13. Areas 6ADC-O (southern end) and 6ADC-P
14. Area 6ADD-L (eastern half)
15. Areas 6ADD-L (southern end), 6ADD-P (eastern end) and 6ADD-M (northern end)
16. Areas 6ADD-L (southern portion), 6ADD-M (eastern half) and 6ADD-N (north eastern part)
17. Areas 6ADD-N (eastern half), 6ADE-A and B (north eastern corner)
18. Areas 6ADD-L (western half) and 6ADD-O (eastern half)
19. Areas 6ADD-P (central part)
20. Areas 6ADD-P (central part) and 6ADD-M (western half)
21. Areas 6ADD-N (western half) and 6ADE-B
22. Area 6ADD-O (western half)
23. Area 6ADD-P (western half)
24. Areas 6ADD-Q (eastern half) and 6ADD-P (southern end)
25. Areas 6ADD-Q (western half) and 6ADD-P (southern end)
26. Areas 6ADD-Q (southern end) and 6ADE-K

PLATES

PL

1. Airscope of the Nara Palace site
2. Area 6ADC-G·H
   1. Overview from east
   2. Juncture of the compound walls SA6510 and SA6150 (wooden conduit SX6505) from east
   3. Compound wall SA6150 from south
3. Area 6ADC-G·H
   1. Building SB6487 from north-east
   2. same from north
   3. Building SB6500 and compound wall SA6519 from north
4. Area 6ADC-G

1. Juncture of the compound walls SA6475 and SA5950B(wooden conduit SX6504) from south-west
2. same from east
3. Detail of the wooden conduit SX6505 from south

5. Area 6ADC-G·H
   1. Fence SA5950 from south
   2～5. Postholes for fence SA5950
6. Area 6ADC·L·M
   1. Overview from east
   2. Ditch SD6473 (upper stratum) from east
   3. same (lower stratum) from east
   4. Building AB9553 and fence SA9554 from east
   5. same from west
   6. Building SB6453 from east
7. Area 6ADC-G·H·L·M
   1. Building SB6430 from east
   2. Building SB9552 from south
   3. same from west
   4. Building SB6429 (northern half) from south
   5. same from east
   6. Building SB6453 from east
8. Area 6ADC-H·M
   1. Phase II main hall SB6450 and overlapping structures SB6451·6454 from south
   2. same from east
   3. same from north-east
9. Area 6ADC-H·K
   1. Superimposition of buildings SB6460 and SB6175 from south
   2. Building SB6175 from north
   3. Superimposition of buildings SB6172·6173·6175 from south
10. Area 6ADC-H
    1. Superimposition of buildings SB6172 and SB6171 from south
    2. same from north
    3. Building SB6172 (northen half) from north
11. Area 6ADC-H·K·M·N
    1. Phase II front hall SB6180 and phase III main hall SB6185 (eastern half) from west
    2. Buildings SB6195·6185 (eastern half) from north
    3. Building SB6180 from east
12. Area 6ADC-M
    1. Phase II side hall SB6425 from south
    2. same (nothern half) from south
13. Area 6ADC-M
    1. Overview from south-east
    2. Phase IV main hall SB6420 from east

3. Phase III rear hall SB6385 and phase II side hall SB6425 from south

14. Area 6ADC-M
    1. Phase III rear hall SB6385 from west
    2. Phase IV front halls SB6381·6190 from south-west
    3. same from west
15. Area 6ADC-O
    1. Overview from east
    2. same from thsou
    3. Central part of building SB6401
16. Area 6ADC-O·P
    1. Rectangular pit SK6350 and fence SA3680 from north
    2. same from south
17. Area 6ADC-M·N
    1. Phase III storage SB6340 and Western part of building SB6185 from south
    2. same from west
    3. Phase II storage SB6330 from south
    4. same from west
18. Area 6ADC-M·N·O·P
    1. Building SB6345 and fence SA6341 from east
    2. same from south
    3. same from north
19. Area 6ADC-P; Smithy SB6360
    1. Overview from south
    2. same from north
    3. same from east

    4～6. Detail
20. Area 6ADC-H·K
    1. Overview from east
    2. Superimposition of buildings SB6170・6168 and 6169
    3. Fence SA5950 from north

    4·5. Postholes for fence SA5950
21. Area 6ADC-H·K
    1. Ditch SD6155 crossing over the compound wall SA6150 from north
    2. same from east
    3. Northernmost part of ditch SD5950 from north
    4. Wooden conduit SX6514 from west
22. Area 6ADC-H·K
    1. Superimposition of buildings SB6165·6169·6170 and others from south
    2. same from north
    3. Superimposition of buildings SB6171·6172·6173 and 6175 from north
23. Area 6ADC-H·K
    1. Overview from east
    2. Superimposition of buildings SB6171 and 6172 from south
    3. Superimposition of buildings SB6173 and 6175 from south

24. Area 6ADC-H·M
    1. Superimposition of buildings SB6187·6188·6191 from west
    2. same from east
    3. Ditch SD6181 and buildings around it
25. Area 6ADD-O·P·Q
    1. Fences SA3680 and 6315 from south
    2. Fence SA3615 from east
    3. Northern extention part of excavation No. 51 from south
    4. Northern partion of excavation No. 59 (South) from south
    5. Southern partion of excavation No. 59 (South) from north
    6. Superimposition of fence SA3680 and building SB6120 from south
    7. Phase III building SB6120 from south
26. Area 6ADD-L·D
    1. Overview from east
    2. Fence SA5950 and ditch SD5960 from north
    3. Group of small buildings after Palace's abandonment; SB5944·5953 and others from north
    4. Southern low of pillars for building SB5941 from east
27. Area 6ADD-M·N·P·Q
    1·2. Overview of excavation No. 50 from east
    3. Fence SA5950 from north
    4. Juncture of ditch SD5960 and pit SK6098 from north
28. Area 6ADD-M·N·P·Q
    1. Overview from west
    2. Group of small buildings after palace's abandonment; SB6075·6080 and others from north
    3. Building SB6095 from west
29. Area 6ADD-P
    1. Overview of eastern half of excavation No. 51 from west
    2. Juncture of ditch SD5960 and pit SK6098 from south
    3. Fence SA5950 from south
30. Area 6ADD-L·M·P
    1. Phase II stables SB5955·5956 and fence SA5950 from south
    2. same from south
    3·4. Postholes for building SB5955
31. Area 6ADD-P
    1. Group of small buildings to the south of SB6130; SB6131 and 6134 from south
    2. Phase V main building SB6130 from south
    3. same from west
32. Area 6ADD-P
    1. Phase V side building SB6141 and phase III storage SB6140 from south
    2. Building SB6141 from north
    3. same from north
    4. Building SB6140 from south

5. Posthole for SB6140

33. Area 6ADD-P·Q
    1. Phase IV stable SB3690 (northern half) from north
    2. same from south
    3. Building SB3690 (southern half) from south
34. Area 6ADD-P·Q
    1. Overview from north
    2. Fence SA3680 and small buildings around it; SB6101·6102 from east
    3. Fence SA3680 and building SB6302 from east
35. Area 6ADD-M·Q; Phase IV stable SB6100
    1. Overview from south
    2. Southern portion from south
    3. Northern half from north
    4. Southern half from north
    5. same from west
36. Area 6ADE-A·B·C·K
    1. Ditch SD6980 from east
    2. same (weatern half) from east
    3. Northern end of ditch SD5960 from east
37. Area 6ADD-N, 6ADE-A
    1. Southern end of fence SA5950 from south
    2. same from north
38. Area 6ADD-N, 6ADE-A
    1. Southern end of fence SA5950 from north
    2. Postholes for fence SA5950 from west
39. Area 6ADD-N·Q
    1. Overview from east
    2. Small buildings after palace's abandonment; SB7026·7030 and others from east
    3. Building SB6100 from north
40. Area 6ADD-N
    1. Small buildings after palace's abandonment; SB7024·7026·7030 and others from west
    2. same from east
    3. Heian period pits SK7040 and 7041 from north
    4. Heian period pit SK7097 from east
41. Area 6ADC-K; Well SE6166
    1. Overview from west
    2. same from south
    3. South-eastern corner
42. Area 6ADD-P·Q, 6ADE-A
    1. Well SE7094, overview from south
    2. same, detail from east
    3. Well SE6123 from east
    4. Well SE6300 from north

5. Well SE6988, overview from east
6. same, detail from north

43. Area 6ADD-P
    1. Wells SE6143 and 6144 from north
    2. Detail of well SE6143 from east
    3. Detail of well SE6144 from north
    4. Wells SE6135 and 6146 from west
    5. Detail of well SE6135 from east
    6. Detail of well SE6146 from north
44. Area 6ADD-N·P·Q; Features of the Yayaoi period
    1. Superimposition of dwelling SB6122, pit SK6121 and Nara period building SB6120 from south
    2. Dwelling SB6122 from north-east
    3. Pit SK7124 from west
    4. Pit SK7123 from north
    5. Pit SK7101 from north
45. Area 6ADD-M·N·P·Q; Features of the Kofun period
    1. Pits SK7080 7088 and others from east
    2. Pit SK7088 from north-east
    3. Pit SK7098 from east
    4. Ditch SD6060 (northern part) from south
    5. Ditch SD6060 (central part) from north-west
46. Wooden tablets (1)
47. Wooden tablets (2)
48. Rounded eaves-tiles (1)
49. Rounded eaves-tiles (2)
50. Rounded eaves-tiles (3)
51. Rounded eaves-tiles (4)
52. Rounded eaves-tiles (5)
53. Rounded eaves-tiles (6)
54. Flat eaves-tiles (1)
55. Flat eaves-tiles (2)
56. Flat eaves-tiles (3)
57. Flat eaves-tiles (4)
58. Flat eaves-tiles (5)
59. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
60. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
61. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
62. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
63. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
64. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
65. Demon-faced and other miscellaneous kinds of roof-tiles
66. Wooden objects (1)
67. Wooden objects (2)
68. Metal and stone objects, and coins

ENGLISH SUMMARY

1

The Nara National Cultural Properties Research Institute has been carrying out a continuous series of archaeological investigation at the site of the Nara Imperial Palace since 1959. Results of these investigations have been published in Nara Palace Site Excavation Report, Nos. I～XI. The present report is the following one, No. XII, containing the results of nine excavations (excavation Nos. 47, 50, 52, 59 north·south, 63, 71, and 127) carried out between 1967 and 1980.

The investigation area dealt with in this report is the westernmost locus of the palace grounds along the west enclosure wall between central gate (*Saeki-mon* 佐伯門) and north gate (*Kusakabe-mon* 藻壁門) measuring 280 meters north to south and 110 meters east to west. Since there is no paddy placename or land division in this area, it was previously considered to be the Western Palace (*Saigû* 西宮) based on Tadashi Sekino's expectation. However, as the excavations of this area progressed, it became apparent that the ground plans of architectural structures were not equivalent to *Saigû* but one of the government bureaus.

The results of excavations are first described dividing into two categories; features and artifacts. By means of using those results it is going to be made clear that this area is the site of the Imperial Stable Bureaus (*Meryô* 馬寮).

2

Topographically this area lies on the alluvial apron of the Nara basin lowlands and is almost flat (70.5 m msl at the north-western corner and 69.5 m msl at the south-eastern corner). During Yayoi and Kofun periods peoples seem to have inhabited in this area because 1 dwelling, 2 ditches and 6 pits of early Yayoi period and 5 ditches and 6 pits of Kofun period were uncovered, most of which were concentrated in the soutern portion of the area. The ditches of both periods can be considered to have flowed from north-west to south-east, that means the topography prior to the Palace construction was almost same as present.

The features uncovered can be assigned to five phases between the biginning of the Nara period and the early Heian period. They represent the construction and layout of a palace compound with special characteristics not changing throughout whole phases. And after the palace's abandonment around 835, this area was begun to be continuously used for inhabitation until about the 14 th century (Phase VI), therefore many features of different phases are complicatedly overlapped.

Phase I (beginning of the Nara period)

The construction of the Palace started; the ground was prepared and alloted and some provisional structures such as fence SA3680 were erected, but no structures for administrative use had not been completed.

Phase II (early Nara period)

This is the period in which the layout of the Imperial Stable Bureau was first settled. At the center of the northern sector was built a main hall SB6450 which was accompanied by side hall SB6425 and front building SB6280. These com-

posed the administrative headuaqrter. To the south, on both sides, there situated stables SB6170·5955·5956 and storage SB6330. All these structures were arranged accordingly to the 75 shaku grid plan. The central part of the southern sector formed a kind of courtyard without any architectural structures whatsoever. This can be supposed to be a riding ground. To the west of the headquarters there found a large rectangular pit SK6350 which fits to the washing pond for horses.

Phase III (middle Nara period)

In this phase most of the structures were rebuilt according to the same idea of layout as that of the Phase II. However, the composition of the structures was different somehow, as well as the east boundary of the compound was first emcompassed by wooden fence SA5950. In all eleven architectural structures were regularly laid out on a grid plan of 40 shaku basic units; these structures included three administrative buildings on north to south axes lined up in a row in the center of the northern sector, stables SB6172·5951·6120, storage SB6140 and smithy building SB6360 on either side.

Phase IV (late Nara period)

Basic layout followed the previous one, but composition was drastically changed. The administrative office buildings situated in the northern one-third of this area became more intensive with doublefold composition; three long buildings SB6175·6430·6400 being placed to the north, east and west formed a outlineal division, while wooden fences surrounded inner quarter. For the boundary of east and north there constructed compound wall SA5950B and SA6475.

Phase V (early Heian period)

The extent of the area enclosed by compound wall was same as previous ones, but by the ditch SD5961 running west to east near the center the area divided into two sectors, north and south. In the northern half there existed several buildings in the same manner as those of phases I～IV; the main building SB6386 at northern center and two long buildings on each side (SB6173·6460·6401), and the front of main building was left to be a open space. On the contrary the southern half seems to have had different characteristics. There were only two buildings SB6130·6141 at the northeast corner and remaining part was vacant.

3

Artifacts unearthed are relatively scarce.

Wooden tablets are only 18 and most of them seem to concern with the nature of the neighboring ministry or bureau to the east of the area.

There were unearthed 873 pieces of eaves-tiles. These consist of 54 types and 110 sub-types. In comparison with the other excavated areas in the Palace, it can be pointed out that the numbers of types and sub-types are so many considering about the total amount that the specific parings of rounded and flat eaves-tiles can not be extracted.

The earthenware was discovered evenly throughout the excavated area in great number. Those include various kind of pottery dating from Yayoi period down to the 14th century.

Wooden objests, metal objects and coins are very scarce.

4

After recording above factual information, the report attempts some interpretations. At first changing configurations at the location of the Imperial Stable Bureau and the absolute chronology are examined. Secondly the nature of the location is studied in accordance with the written resources. Thirdly the Heian period pottery types are considered by using the specimens unearthed from the ancient Nara capital. Fourthly the pillars used in the location of the Imperial Stable Bureau are studied by dendrochronological method. And lastly conclusive phrases come.

Among the artifacts, the pottery sherds with brush writing play a very important role in reconstructing the use of this area. There are two kinds of writings; one is "*shume* 主馬" and the other is "*naikyû* 内厩". In case of shume it indicates two possibilities, *Shume-ryô* 主馬寮 and *Shume-shô* 主馬署. *Shume-ryô* appeared in historical records between the 1st year of *Ten'nô* (天応, 781A. D.) and the 1st year of *Daidô* (大同, 806A. D.). Since the pottery type on which brush writings are is belonged to the end of the Nara period, and the extent of location is too extensive for *Shume-shô* that is a branch of the Crown Prince's office, *Shume-ryô* is more probable than *shume-sho*.

Naikyu means *Naikyû-ryô* 内厩寮 which had established in the 1st year of *Ten'pyô-jingo* (天平神護, 765A. D.) and appeared in historical records down to the 1st year of *Daidô*. This bureau was closely related to *Meryô* and *Shume-ryô* on account of their function. So it is clear that *Shume-ryô* situated in this area at the end of Nara period. And as *Shume-ryô* can be considered to have followed *Meryô* conforming to the regal cords having edited at latest in the late 7 th century, it is natural to consider that before *Shume-ryô's* establishment *Meryô* also had been here

The location and size of this bureau is similar to those of the *Meryô* in the old map of the Heian Palace. And in the Fujiwara Palace site situates so-called "western government quarters" at the same location and it shows the same composition and layout of the architectural structures as both side of the area must be the stables, and storages were probablly for storing horse furnitures.

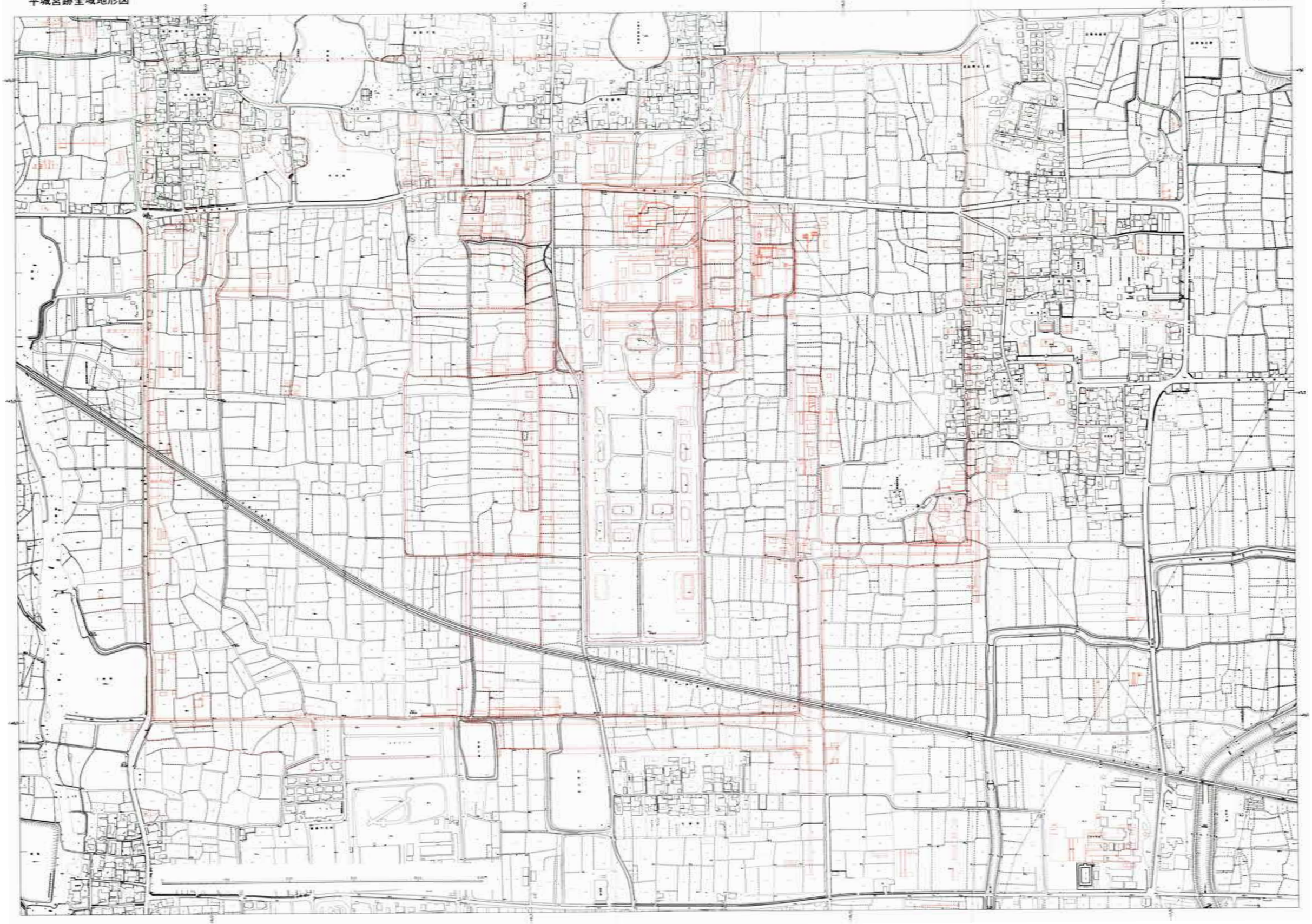
By the reasons cited above, this report intended to conclude that the bureau discovered in this area is the site of *Meryô* and *Shume-ryô* of Nara period and early Heian period. But according to the regal cords, *Meryô* was divided into two, (left)-*Sameryô* and (wright)-*Umeryô*, to which this area merges we do not have sufficient bases yet.

図面・図版

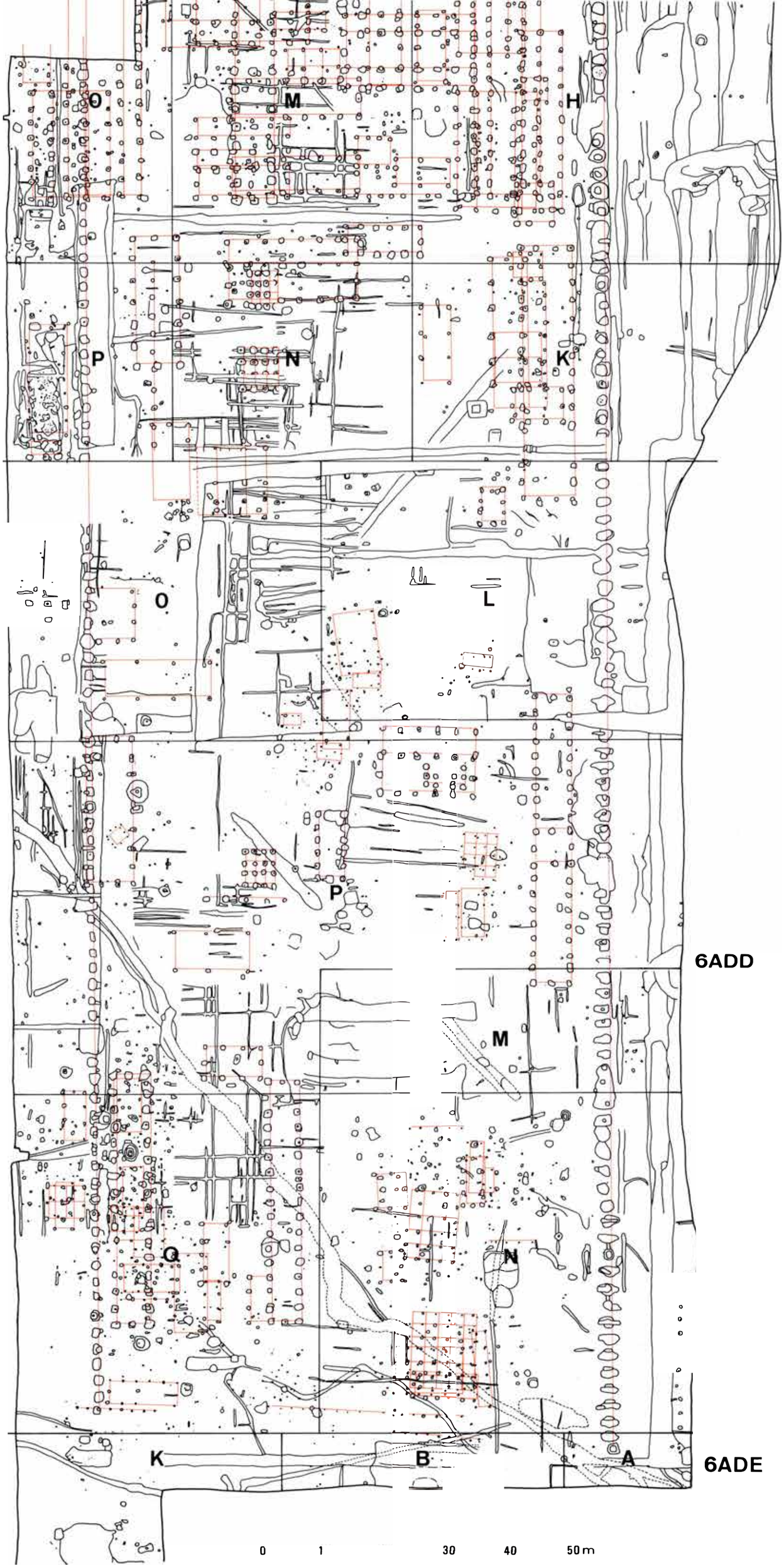
1. 遺構には一連番号をつけ，その前にSA：築地・塀，SB：延物，SC：廓，SD：溝，SK：土壙，SX：その他などの分類記号を付記する。
2. 遺構の寸法数字は単位である。
3. mPLAN 3～26の実測図の縮尺には1/200 と 1/300 の 2 種類がある。PLAN 3・4・18・21・26 が 1/300 でその他は 1/200 である。
4. 遺物写真の Plate 番号は，対向ページの実測図にもおよぶことにする。ただし，写真をかかげず実測図のみをしめすもの，また写真に対応する実測図が，他のページに入っていることもある。

平城宮跡全域地形図

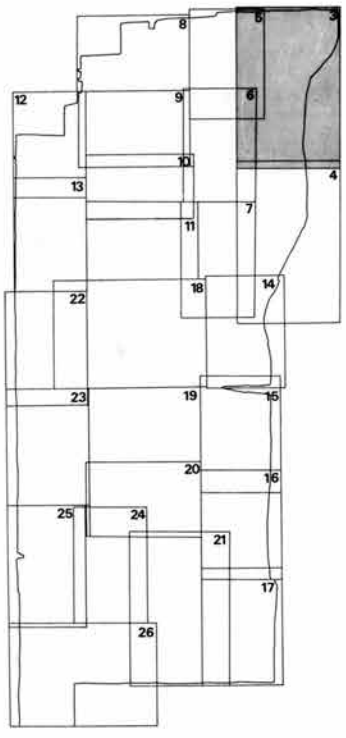
PLAN I

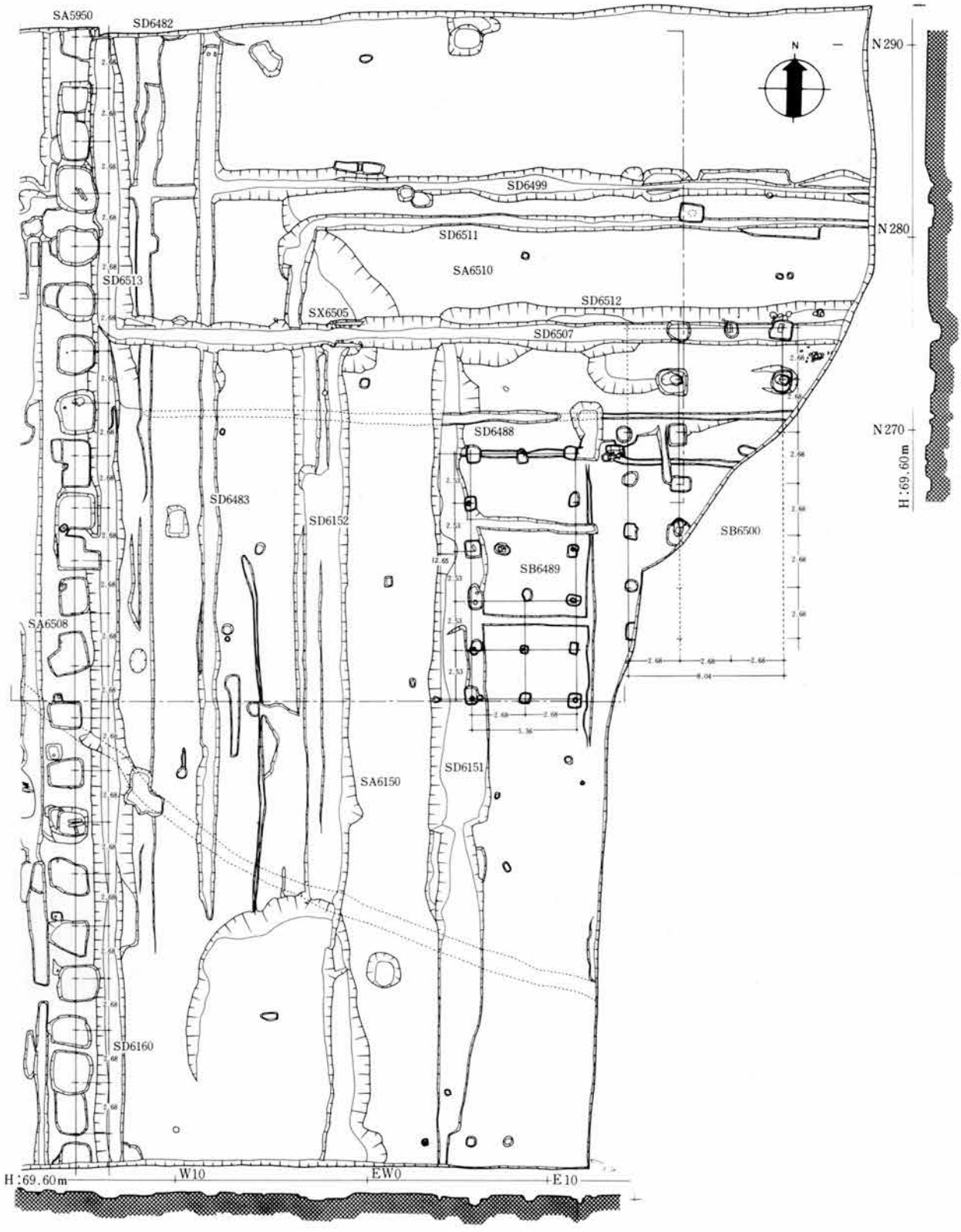


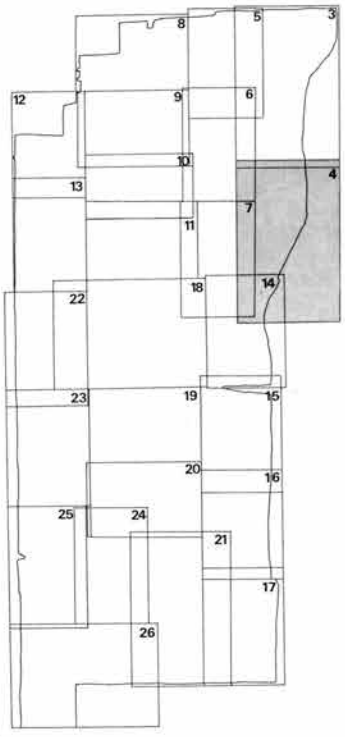
馬寮地域実測図

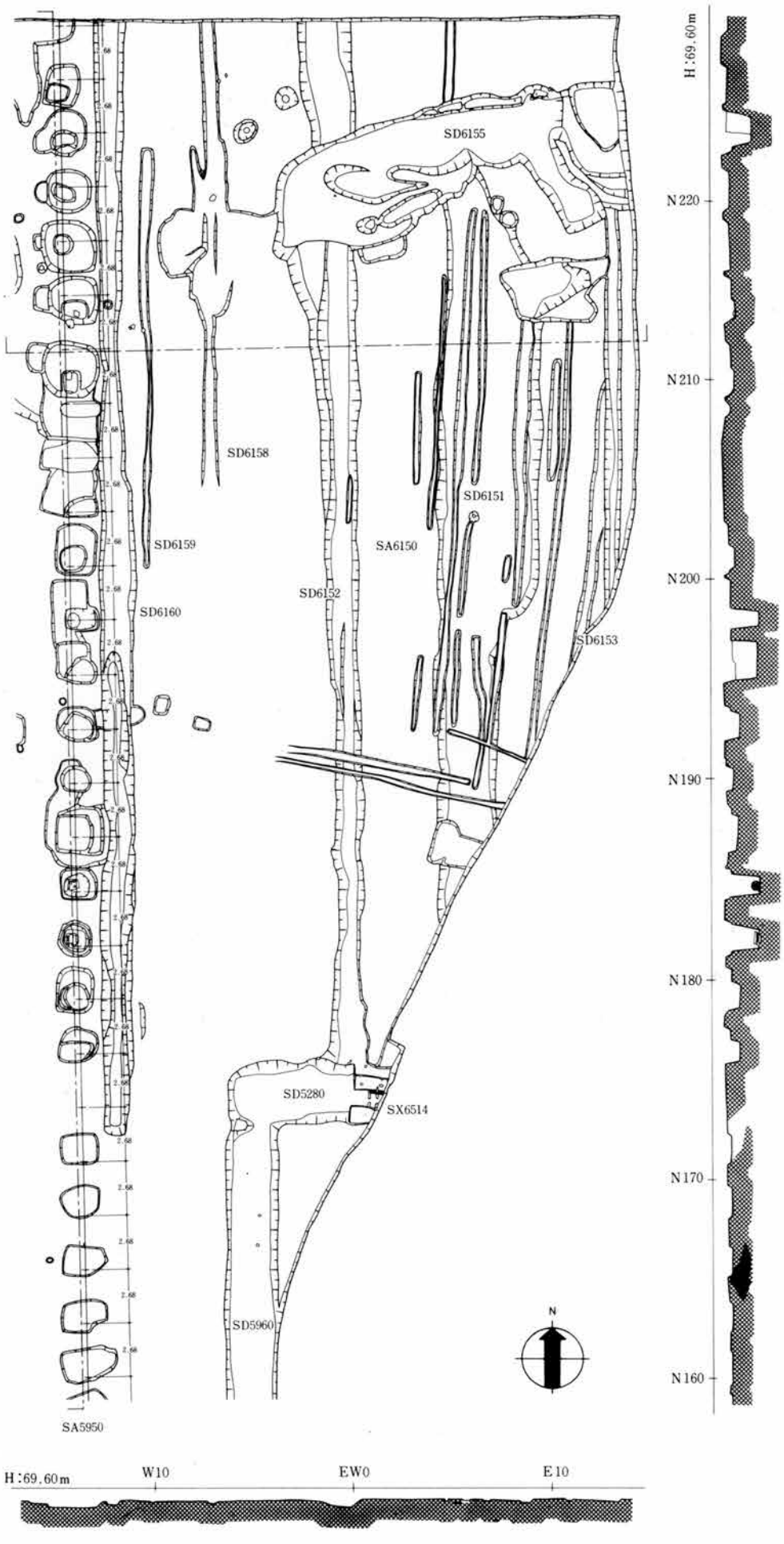


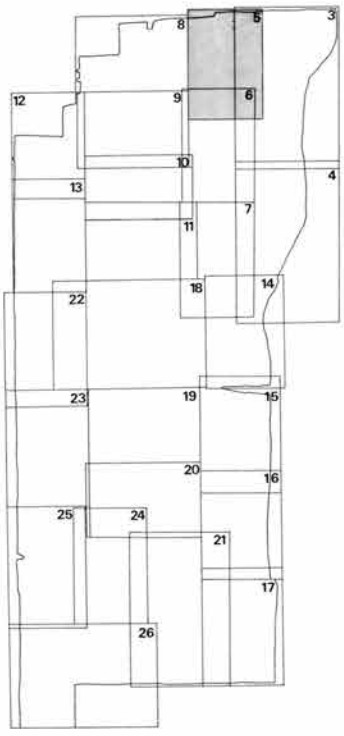
PLAN 2

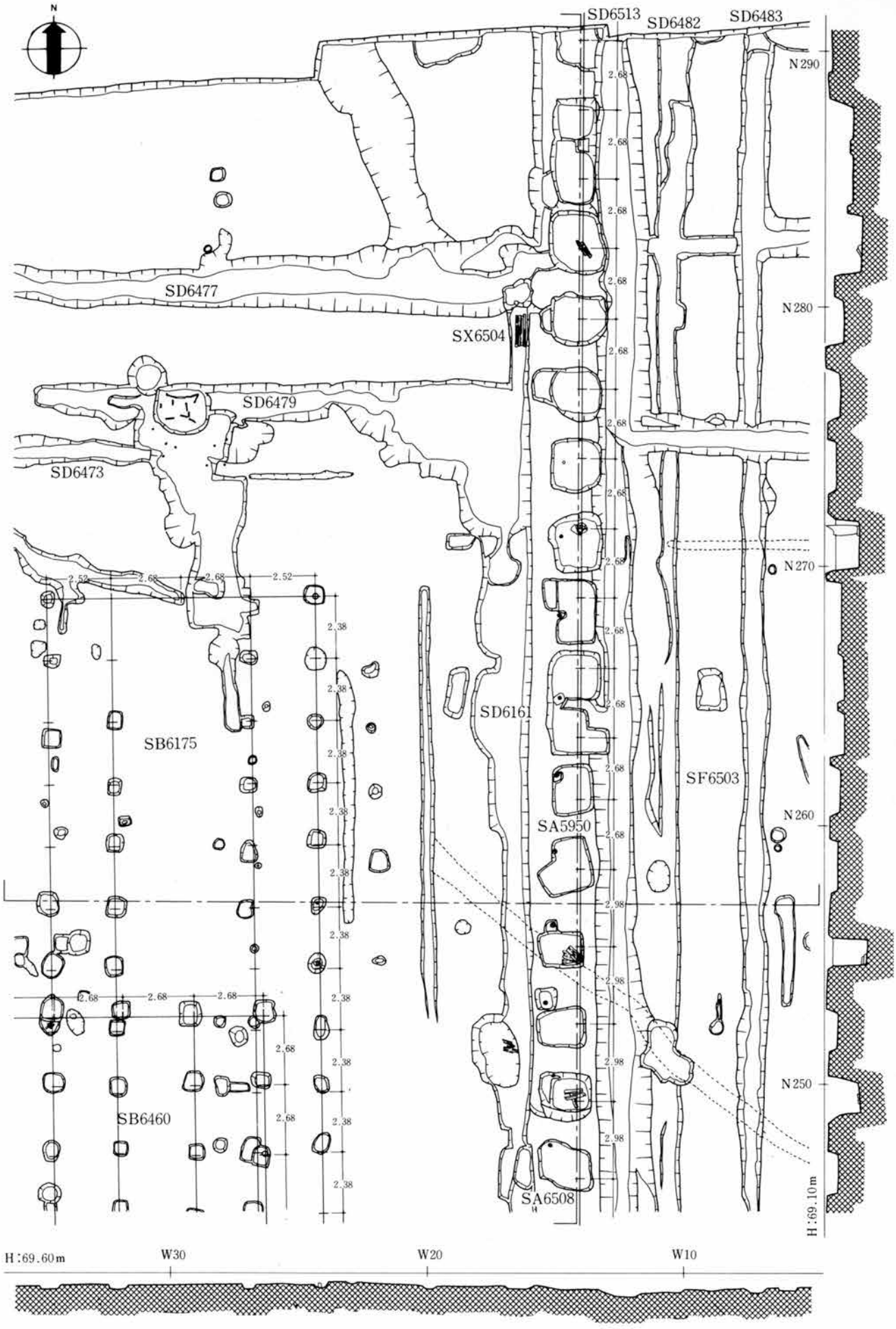

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

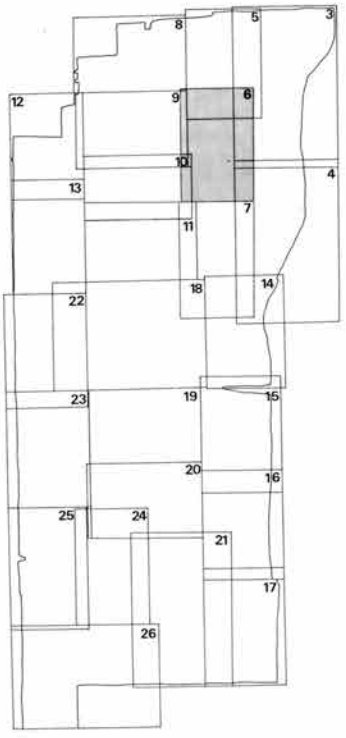

SA5950
SD6482
N
N 290
SD6499
N 280
SD6511
SA6510
SD6513
SD6512
SX6505
SD6507
SD6488
N 270
H:69.60m
SD6483
SD6152
SB6500
SB6489
SA6508
SD6151
SA6150
SD6160
H:69.60m
W10
EW0
E 10

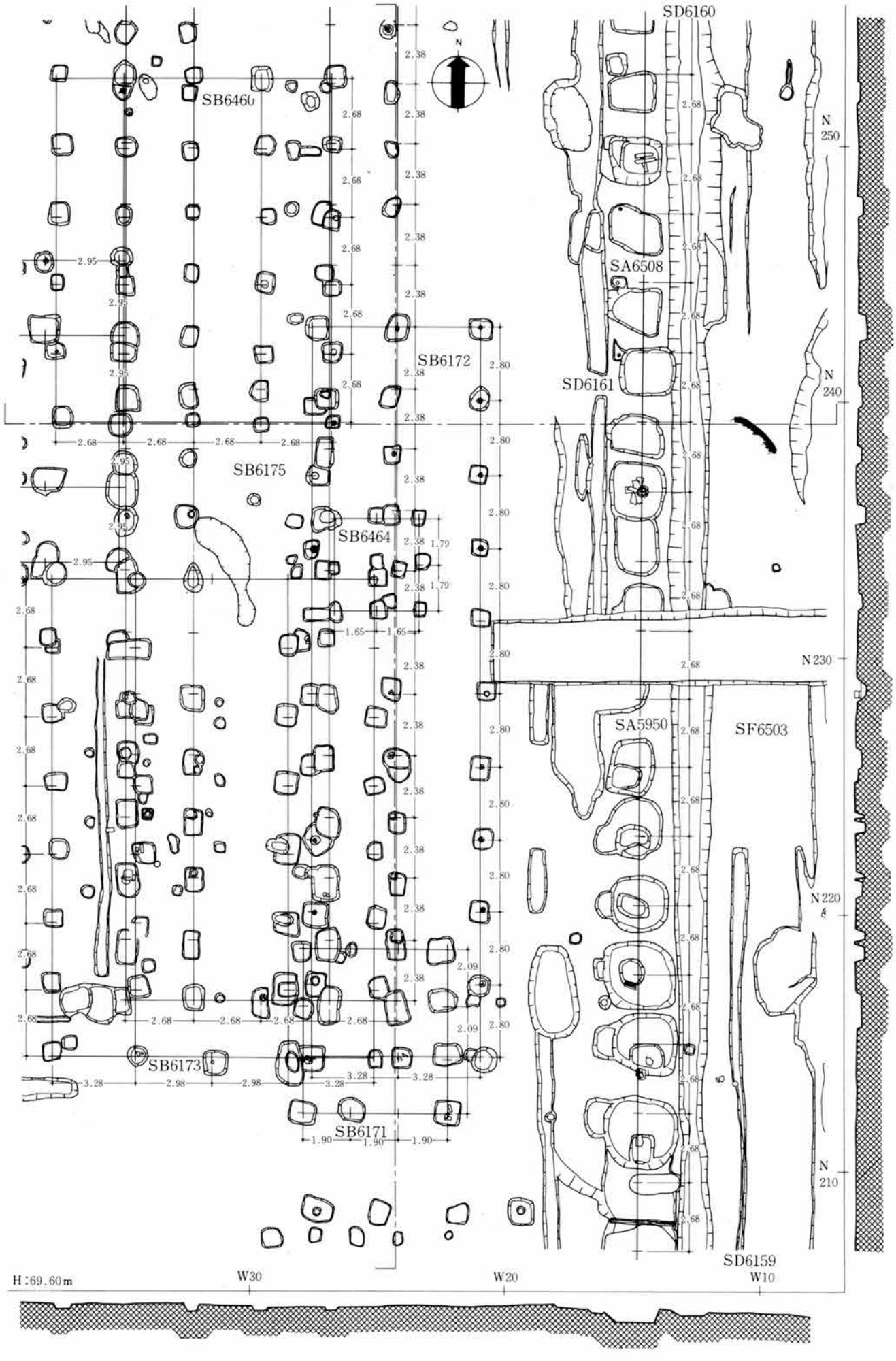

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
14
18
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

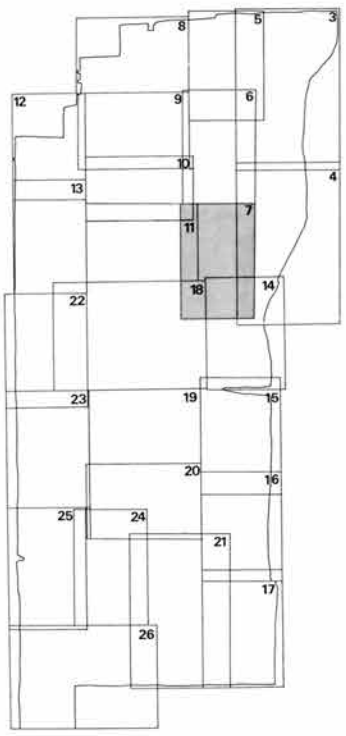

SD6155
SD6158
SD6159
SD6160
SD6151
SA6150
SD6152
SD6153
SD5280
SX6514
SD5960
SA5950
N
H:69.60m
N220
N210
N200
N190
N180
N170
N160
H:69.60m
W10
EW0
E10

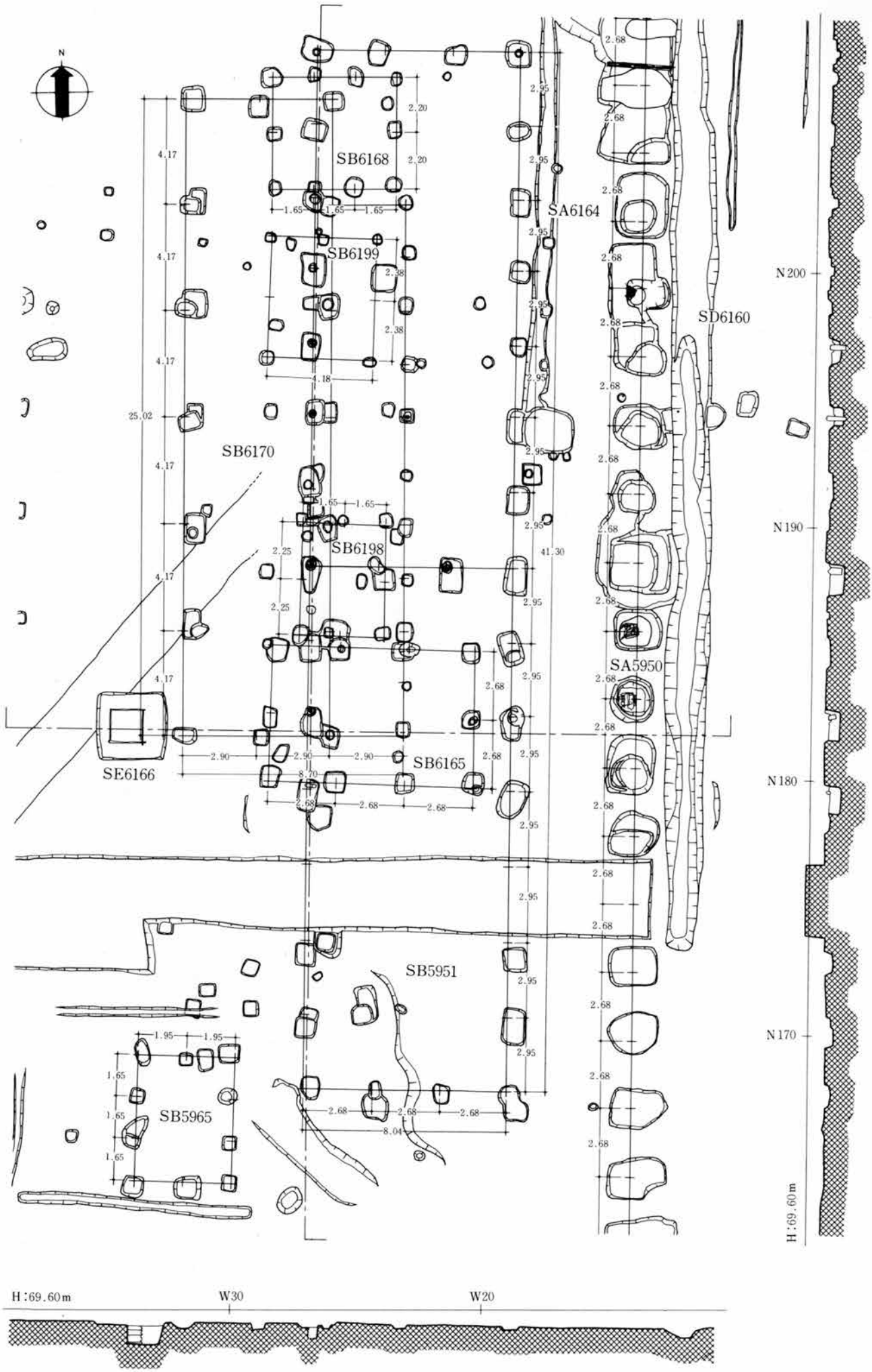

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

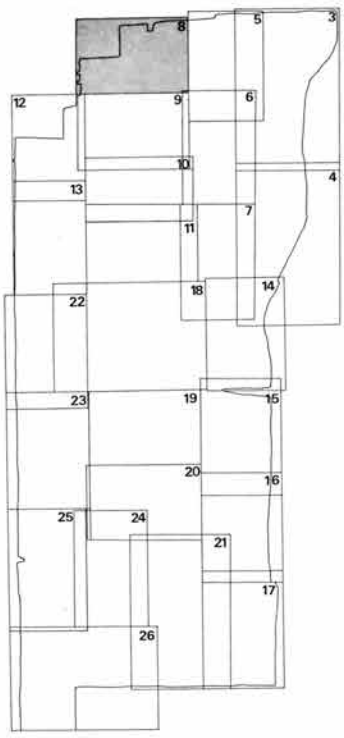

N
SD6513
SD6482
SD6483
N290
N280
N270
N260
N250
SD6477
SX6504
SD6479
SD6473
SB6175
SB6460
SD6161
SF6503
SA5950
SA6508
H:69.10m
H:69.60m
W30
W20
W10

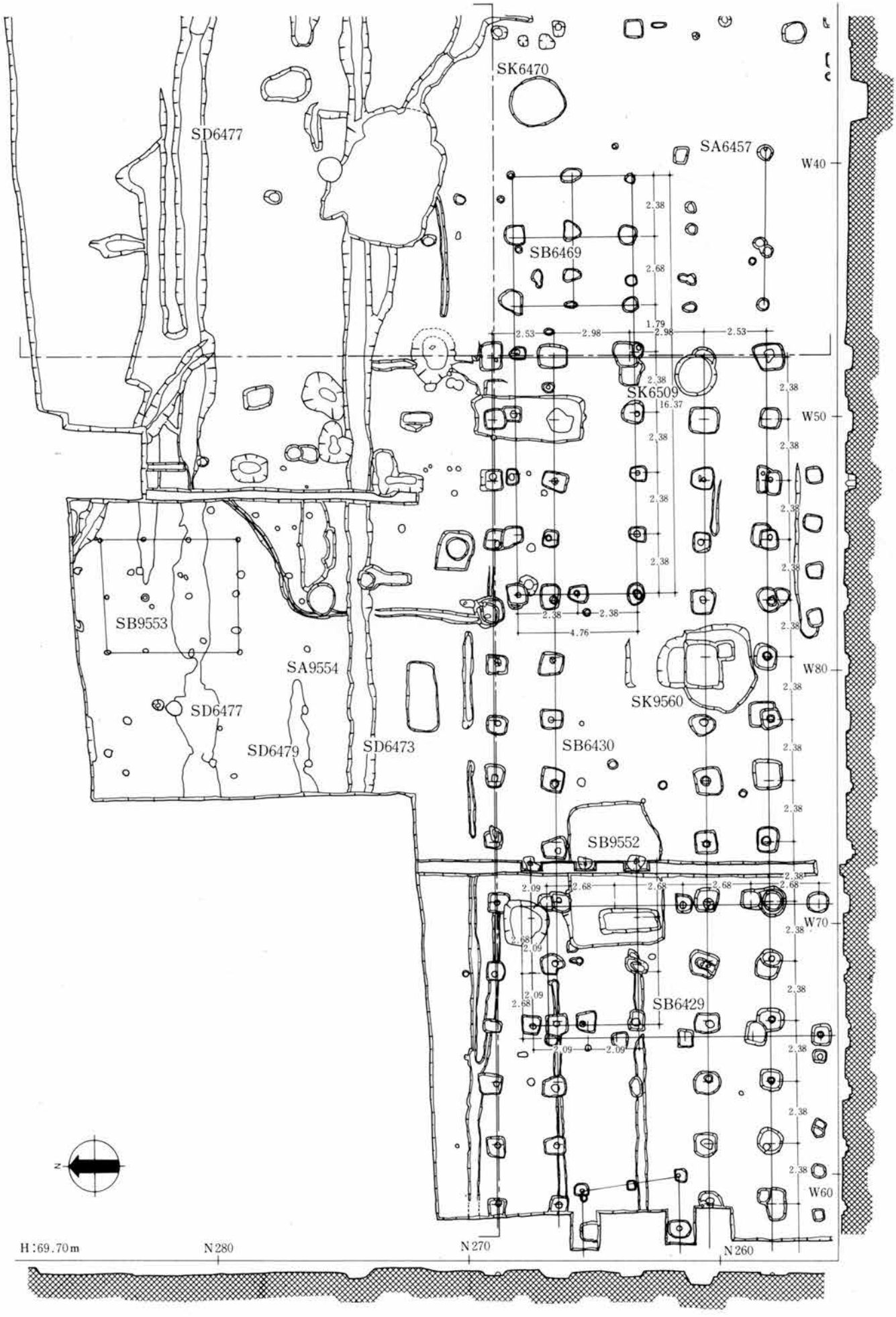

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

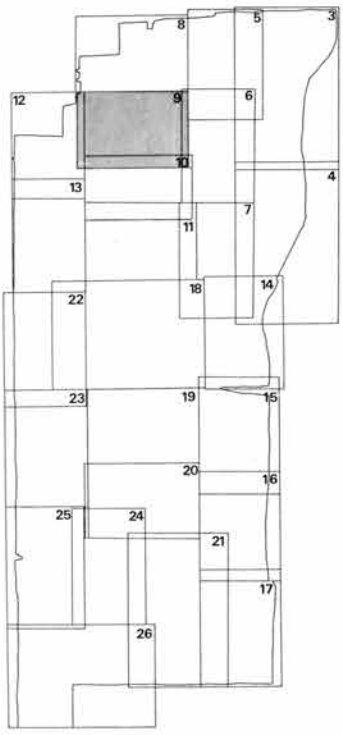

SD6160
SB6460
SA6508
SB6172
SD6161
SB6175
SB6464
SA5950
SF6503
SB6173
SB6171
SD6159
N 250
N 240
N 230
N 220
N 210
H:69.60m
W30
W20
W10


3
5
8
6
9
12
10
4
13
7
11
14
18
22
15
19
23
16
20
25
24
21
17
26


N
SB6168
SB6199
SB6170
SB6198
SB6165
SE6166
SB5951
SB5965
SA6164
SD6160
SA5950
N200
N190
N180
N170
H:69.60m
H:69.60m
W30
W20

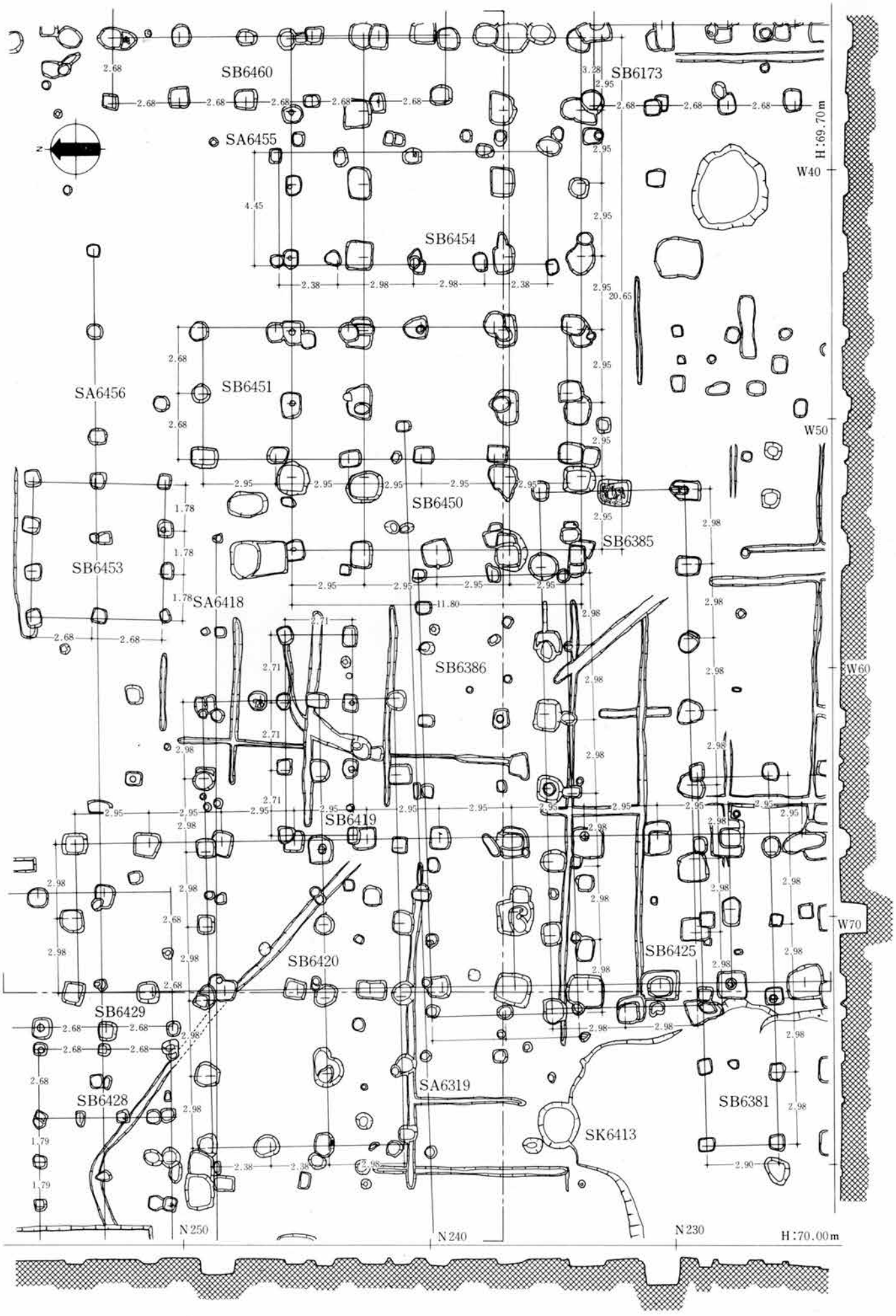

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

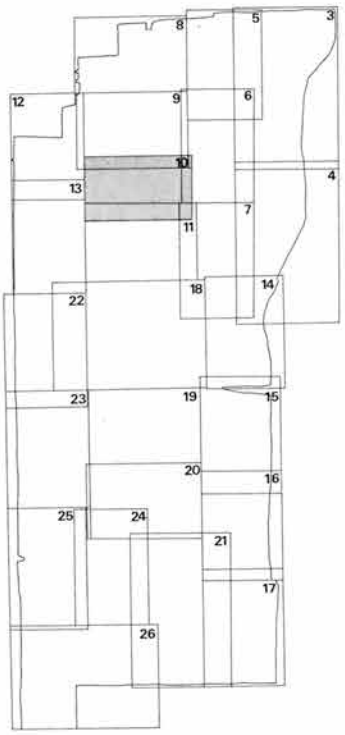

SK6470
SD6477
SA6457
W40
SB6469
2.38
2.68
1.79
2.53
2.98
2.98
2.53
SK6509
16.37
W50
SB9553
SA9554
SD6477
SD6479
SD6473
4.76
SK9560
W80
SB6430
SB9552
2.09
2.68
W70
SB6429
W60
N
H:69.70m
N280
N270
N260

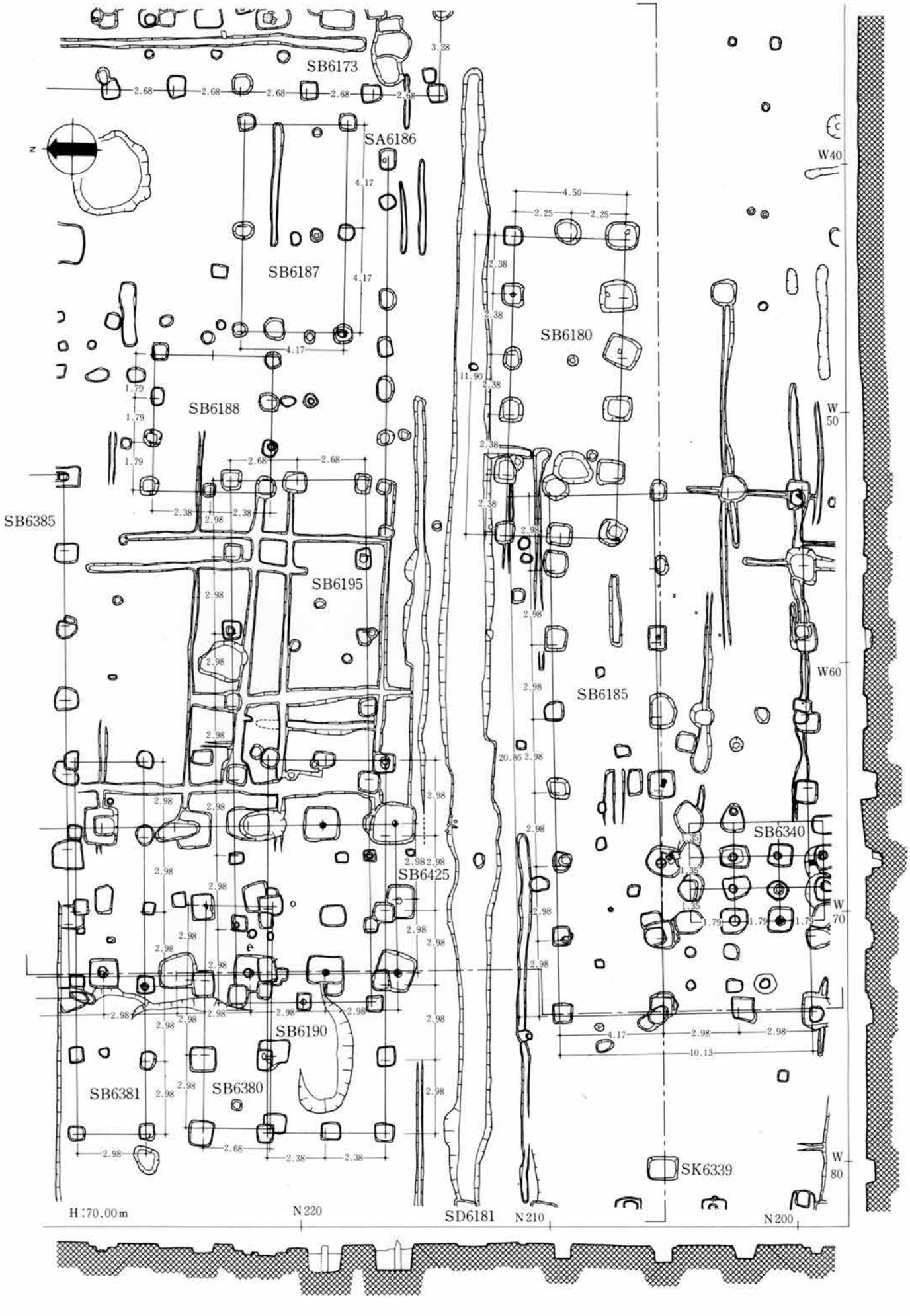

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
19
15
23
20
16
25
24
21
17
26

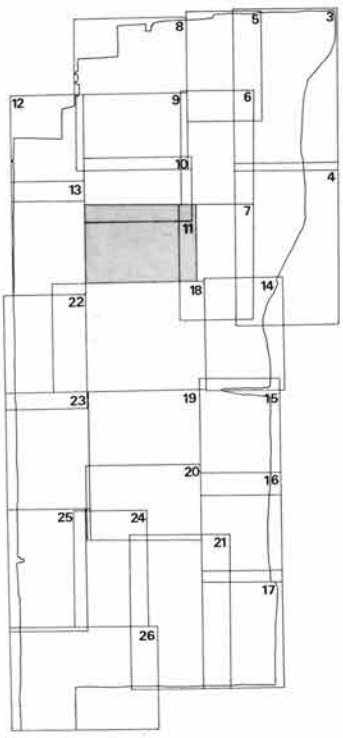
6ADC-M区中央部実測図

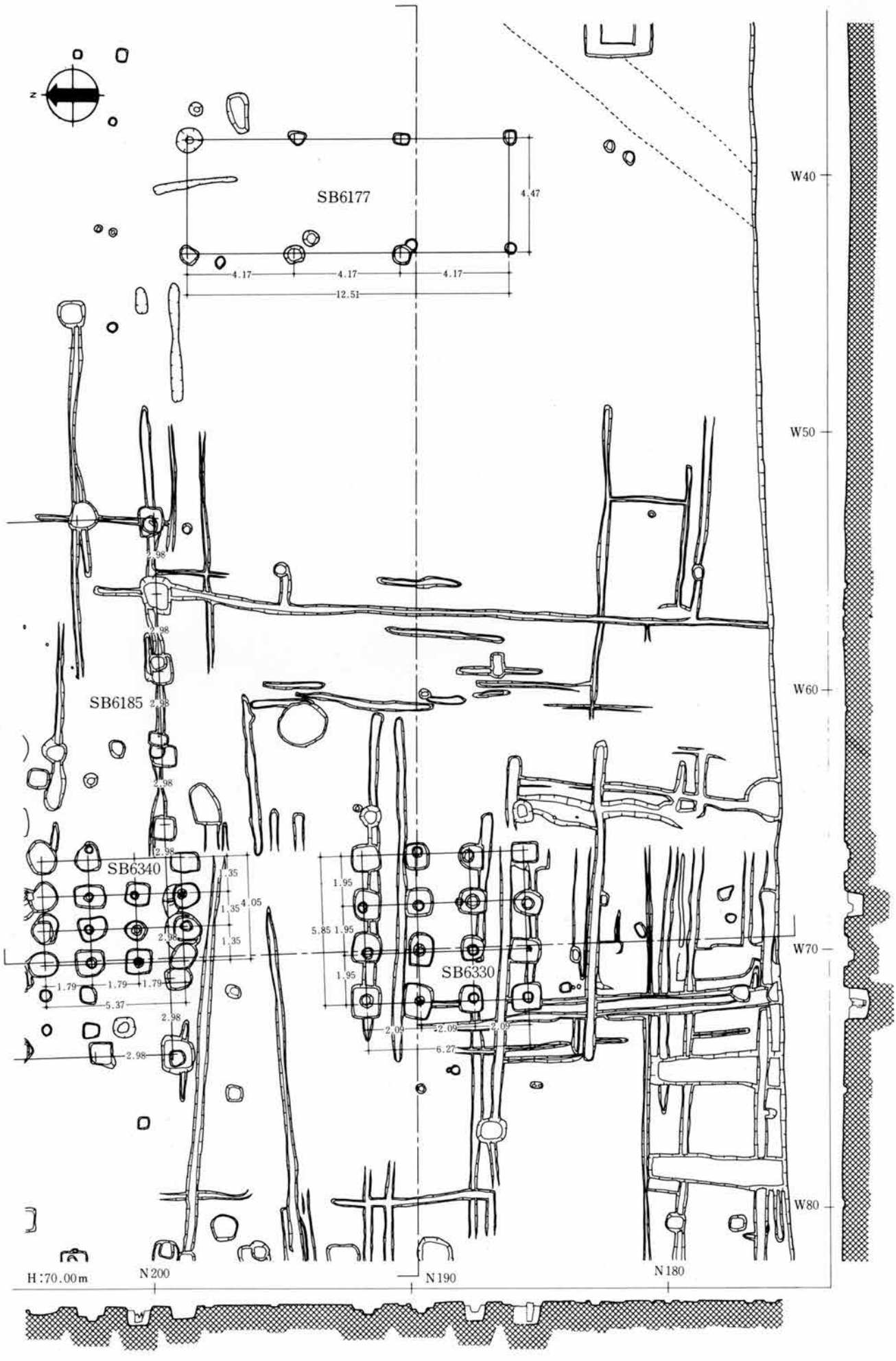
PLAN 9

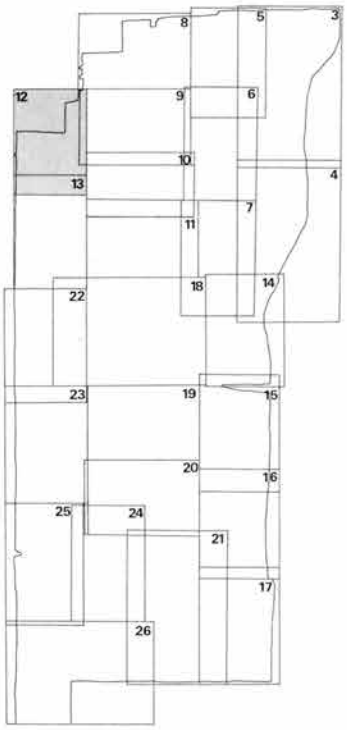


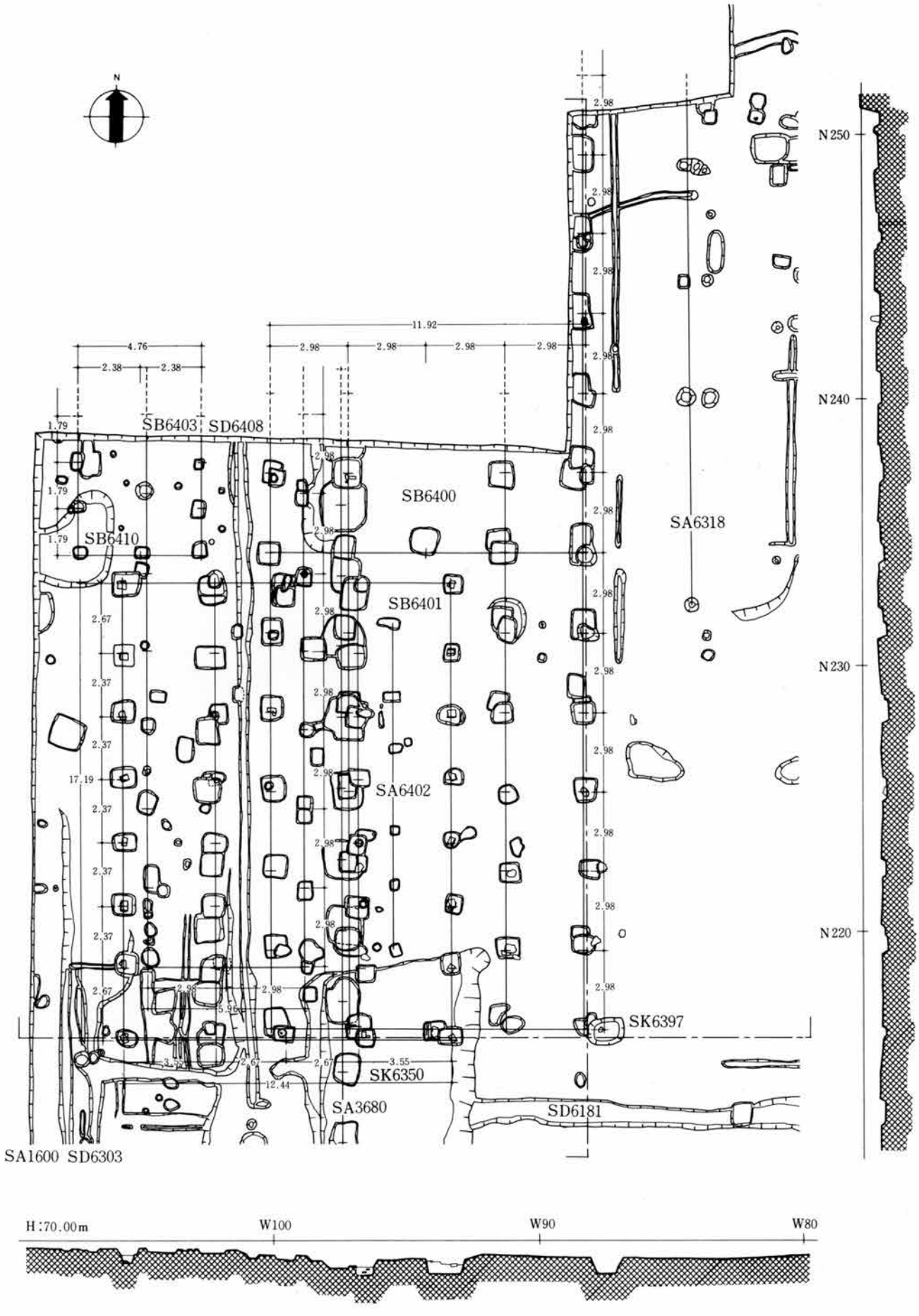

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26


SB6173
SA6186
SB6187
SB6188
SB6385
SB6195
SB6180
SB6185
SB6340
SB6425
SB6190
SB6381
SB6380
SK6339
SD6181
W40
W50
W60
W70
W80
N220
N210
N200
H:70.00m

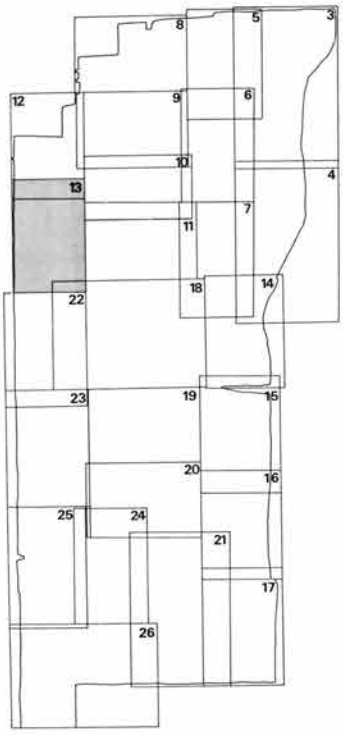

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

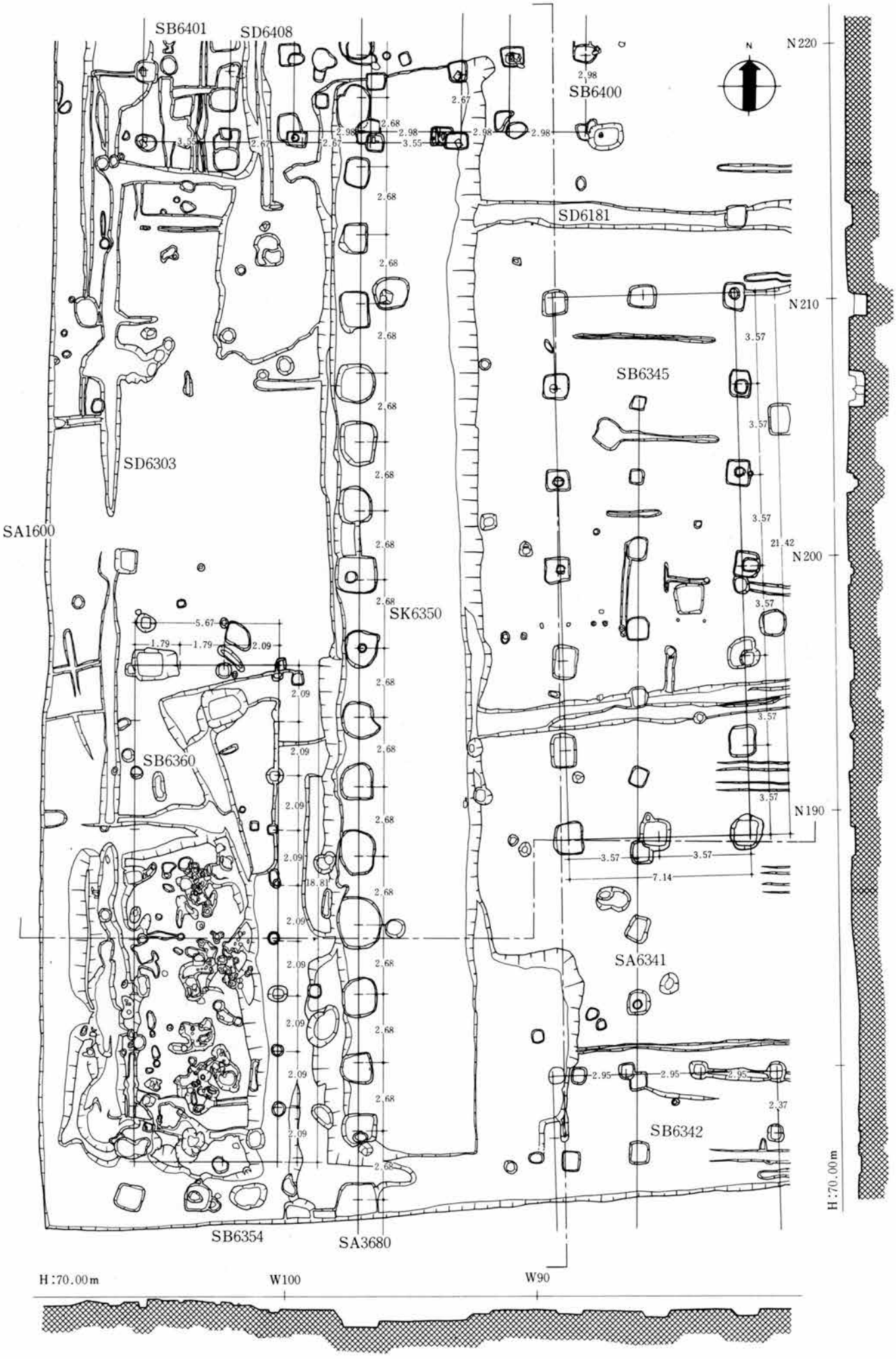

N
SB6177
4.47
4.17
4.17
4.17
12.51
SB6185
SB6340
SB6330
1.79
1.79
1.79
5.37
1.35
1.35
1.35
4.05
1.95
1.95
1.95
5.85
2.09
2.09
2.09
6.27
2.98
W40
W50
W60
W70
W80
H:70.00m
N200
N190
N180

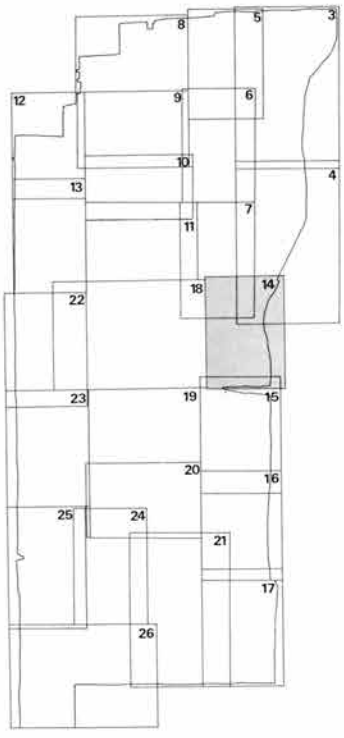

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

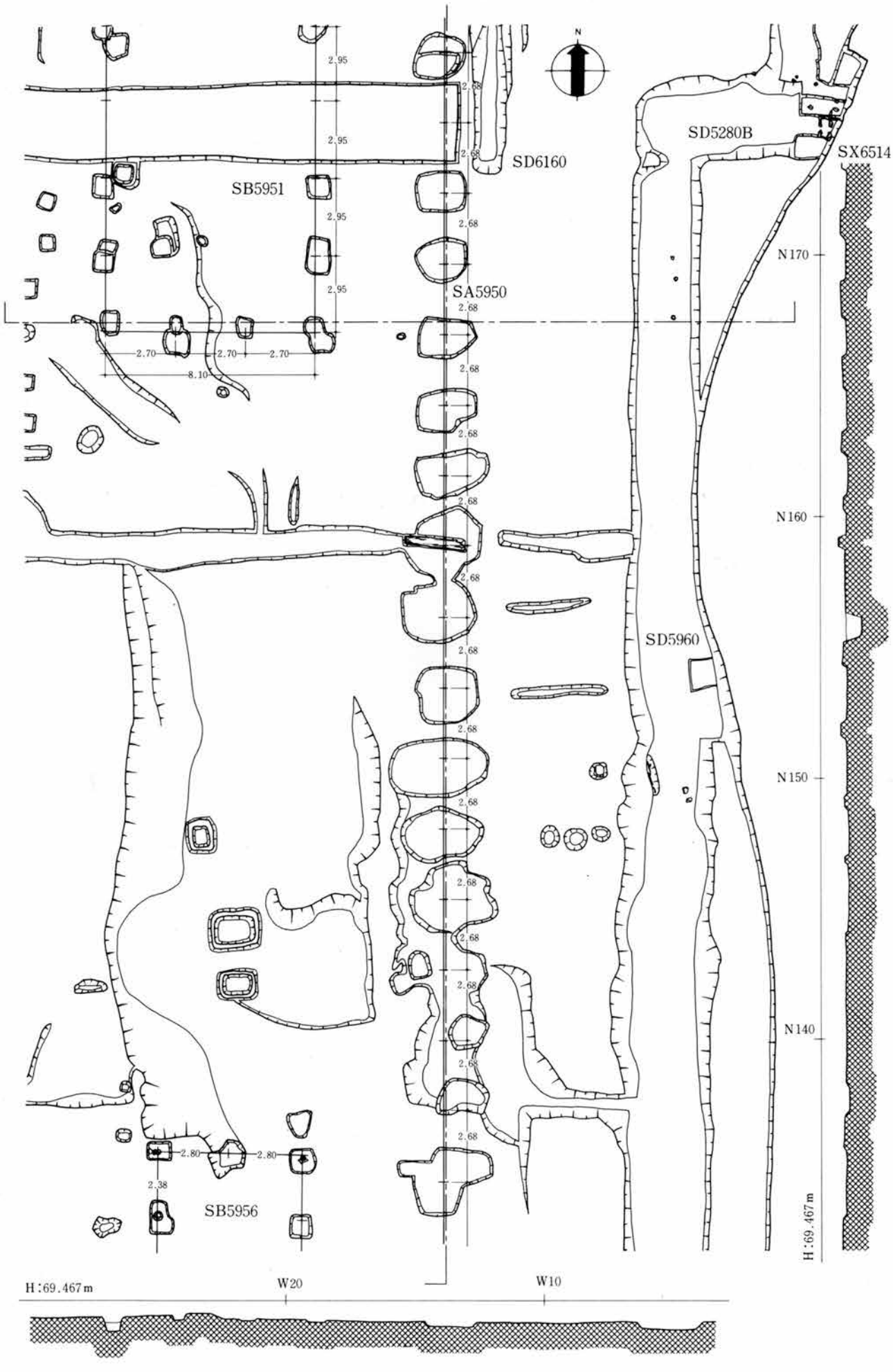

N
N250
N240
N230
N220
SB6403
SD6408
SB6400
SB6410
SB6401
SA6318
SA6402
SK6397
SK6350
SA3680
SD6181
SA1600
SD6303
11.92
4.76
2.38
2.98
1.79
2.67
2.37
17.19
5.96
3.55
12.44

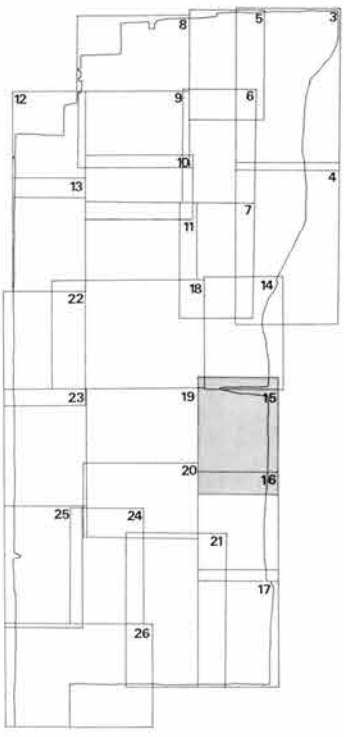
H:70.00m
W100
W90
W80

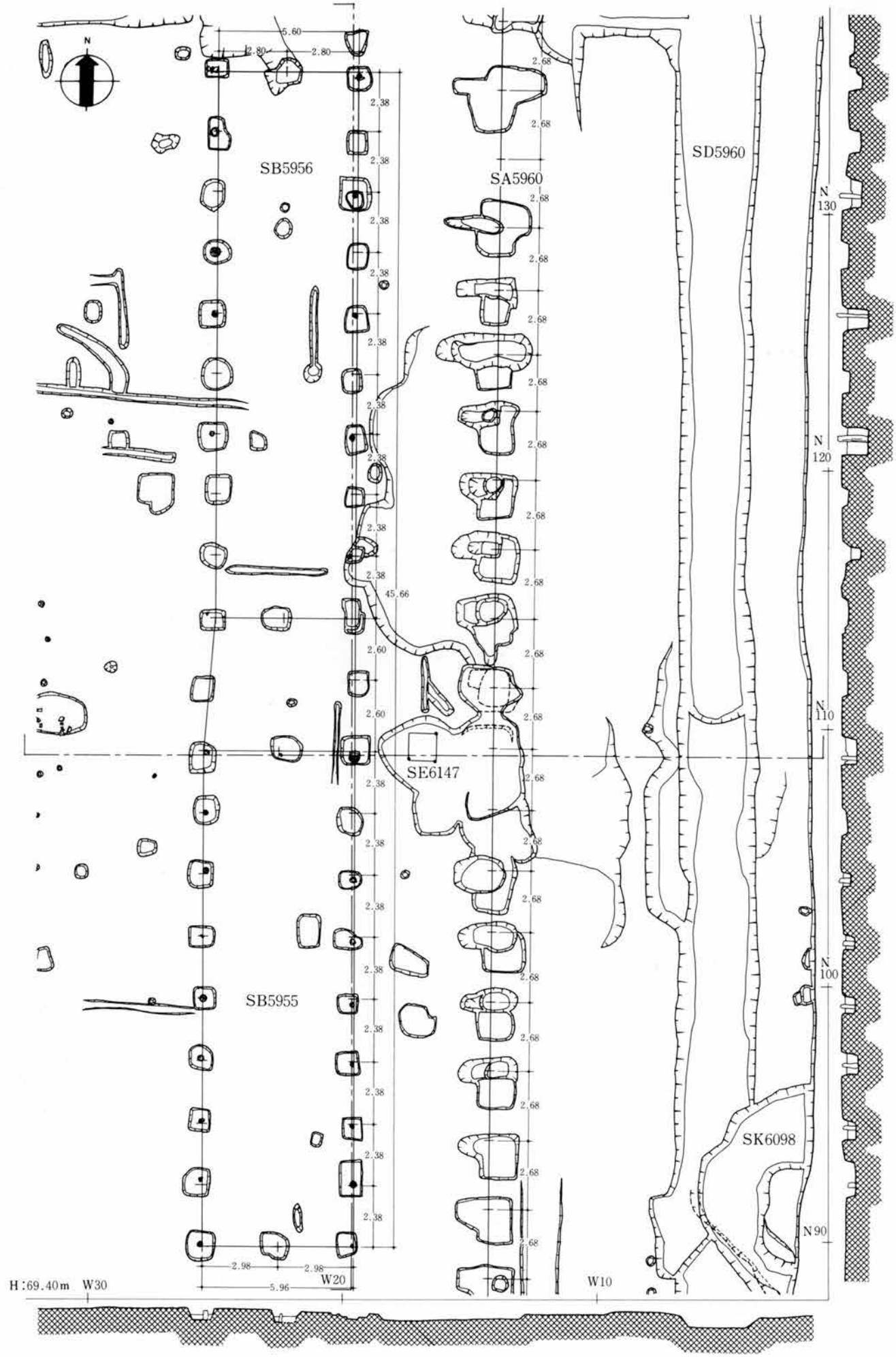

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

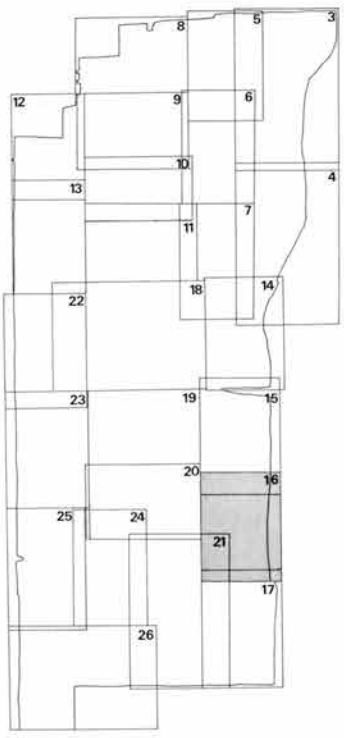

SB6401
SD6408
SB6400
SD6181
SB6345
SD6303
SA1600
SK6350
SB6360
SA6341
SB6342
SB6354
SA3680
N220
N210
N200
N190
N
W100
W90
H:70.00m
H:70.00m

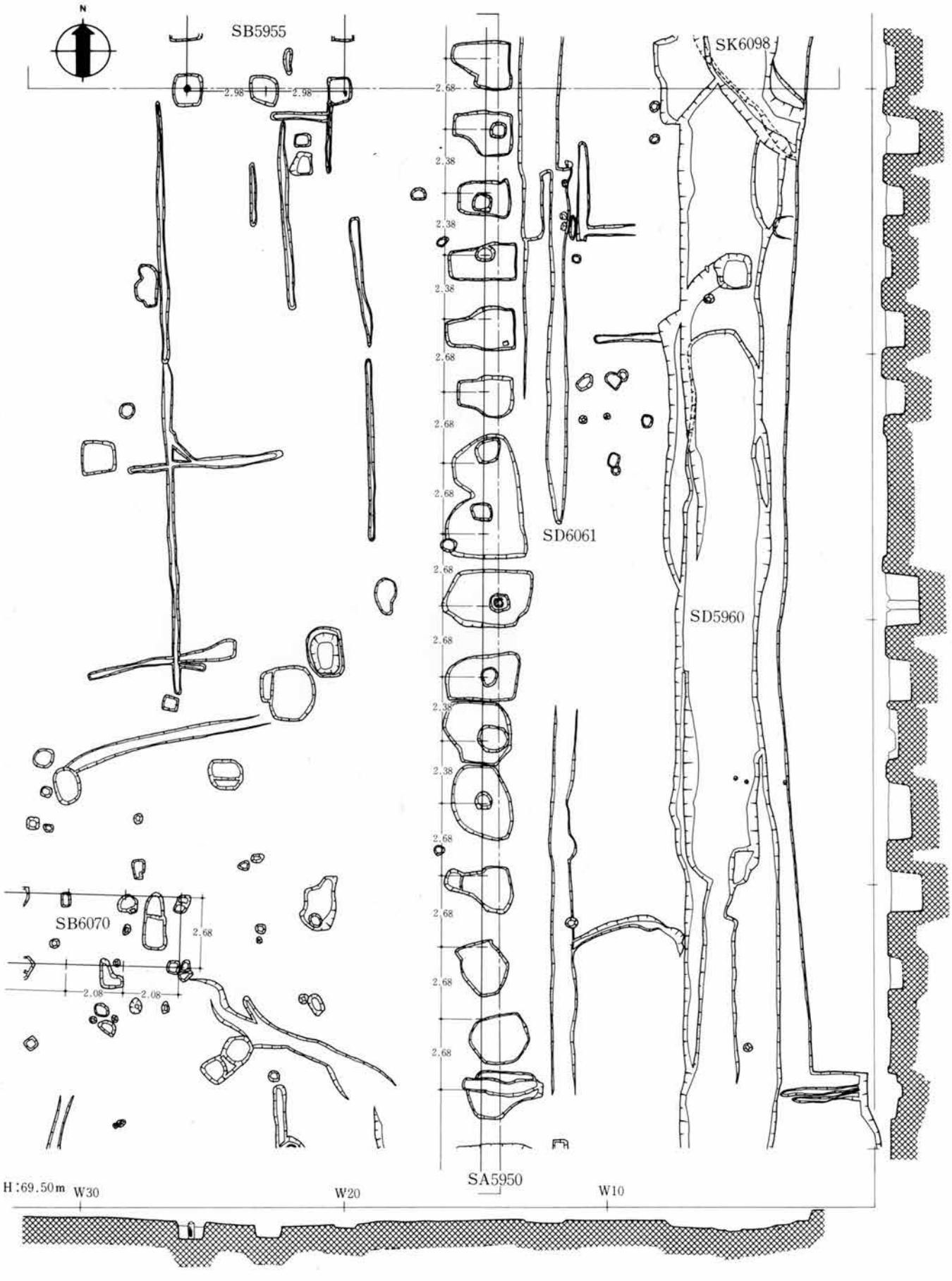

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

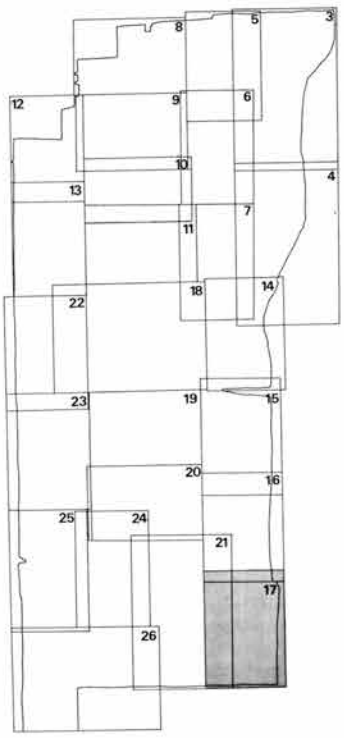

N
SD6160
SD5280B
SX6514
SB5951
SA5950
SD5960
SB5956
N170
N160
N150
N140
H:69.467m
W20
W10
2.95
2.68
2.70
8.10
2.80
2.38

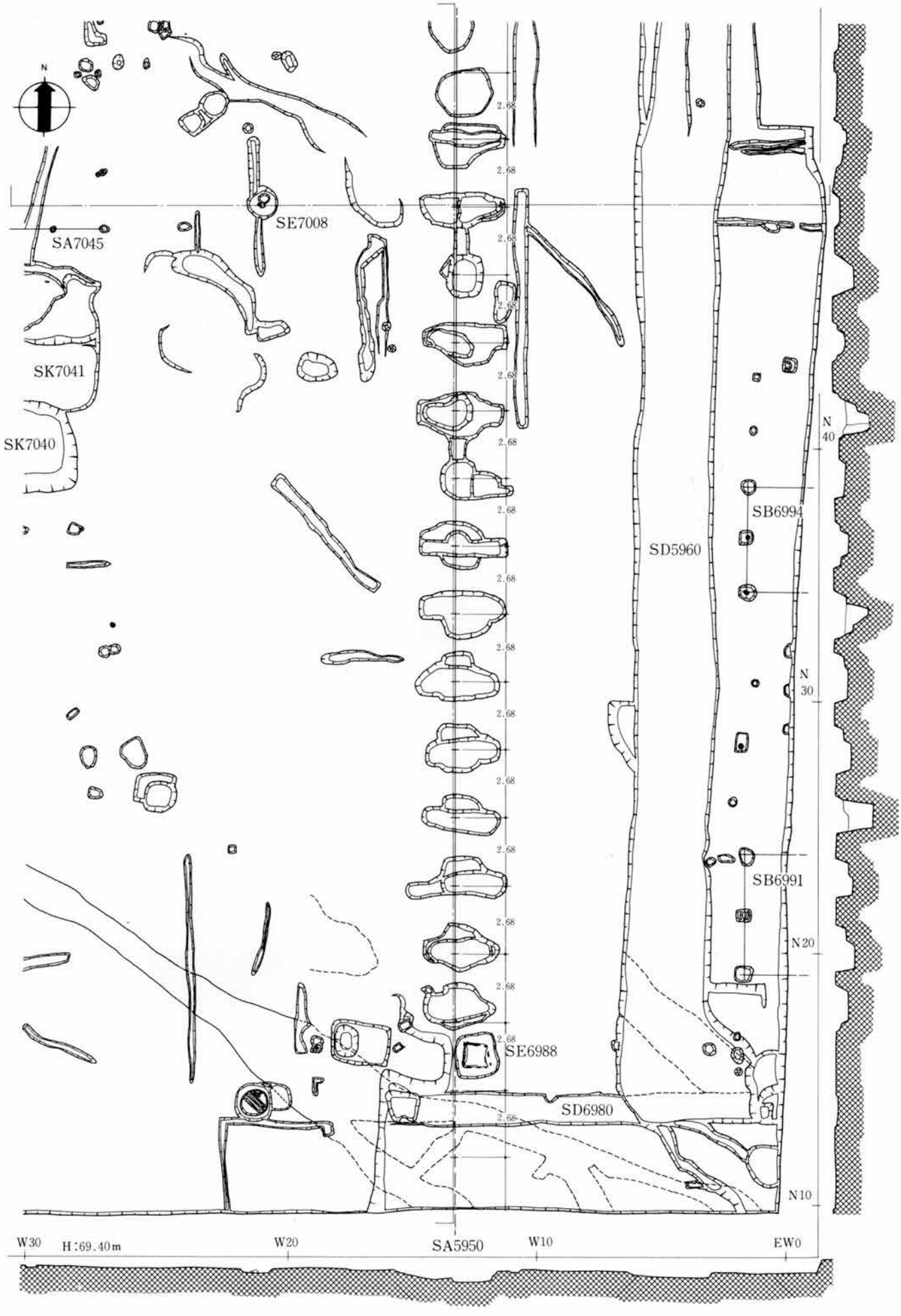

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
19
15
23
20
16
25
24
21
17
26

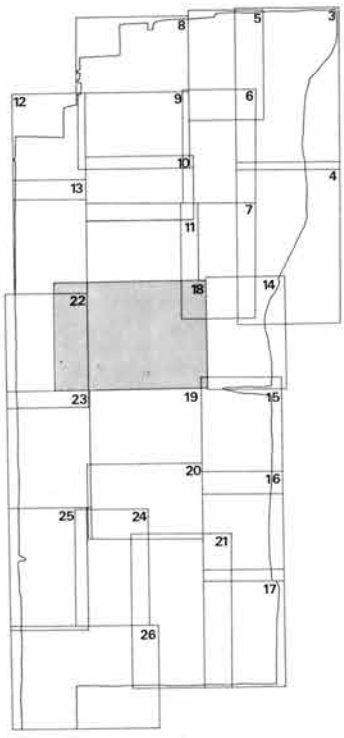

N
SB5956
SA5960
SD5960
SE6147
SB5955
SK6098
N 130
N 120
N 110
N 100
N 90
W30
W20
W10
H:69.40m

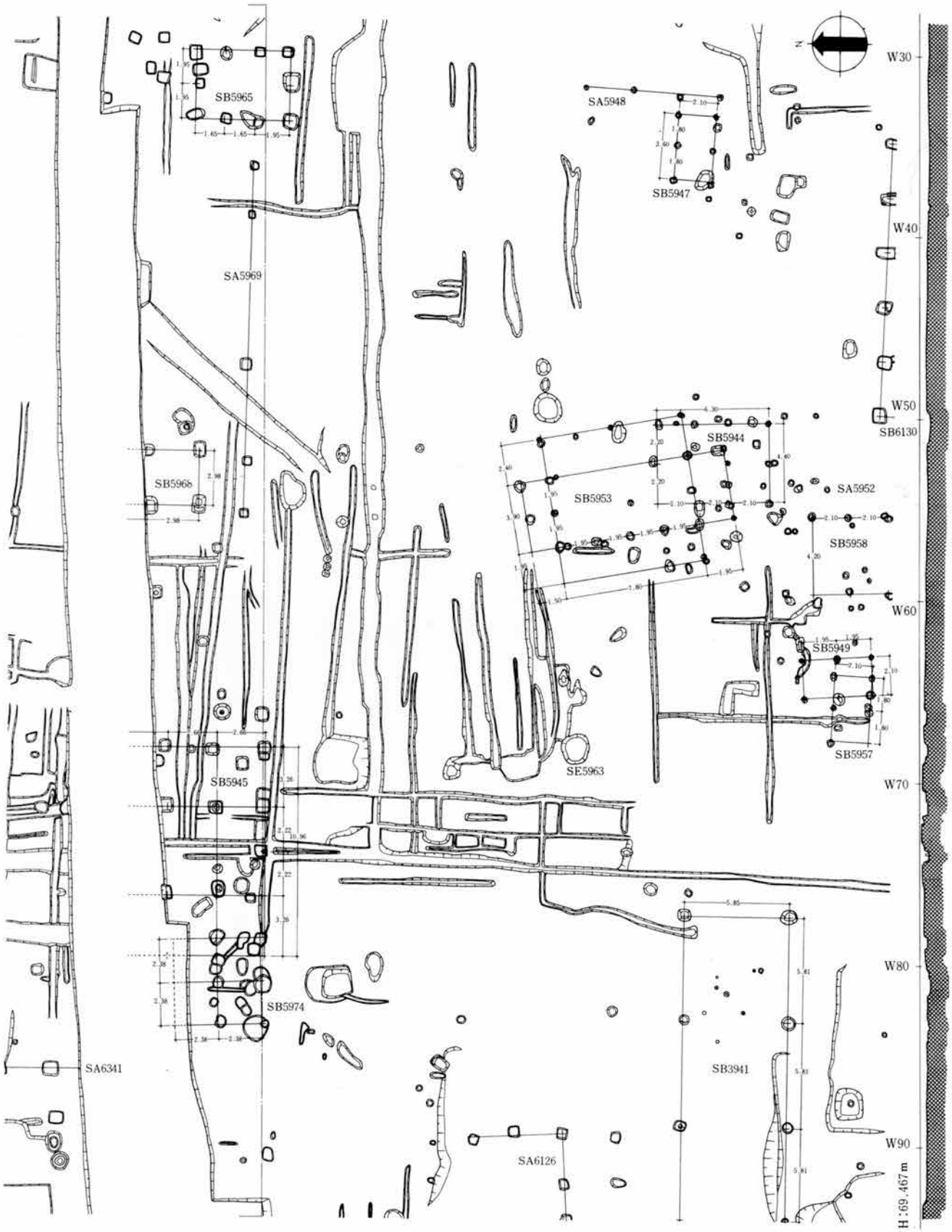

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

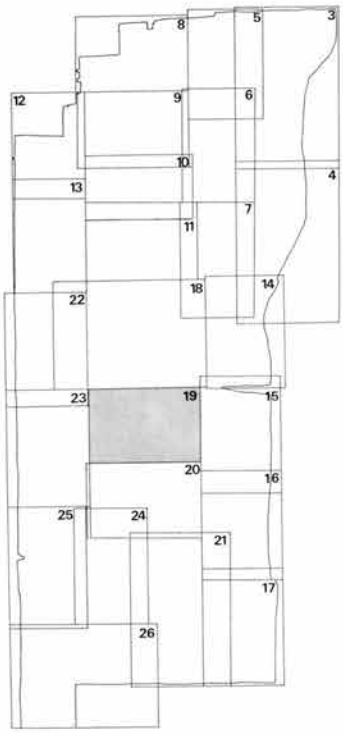

N
SB5955
SK6098
SD6061
SD5960
SB6070
SA5950
H:69.50m
W30
W20
W10
2.98
2.98
2.68
2.38
2.38
2.38
2.68
2.68
2.68
2.68
2.38
2.38
2.68
2.68
2.68
2.68
2.68
2.08
2.08

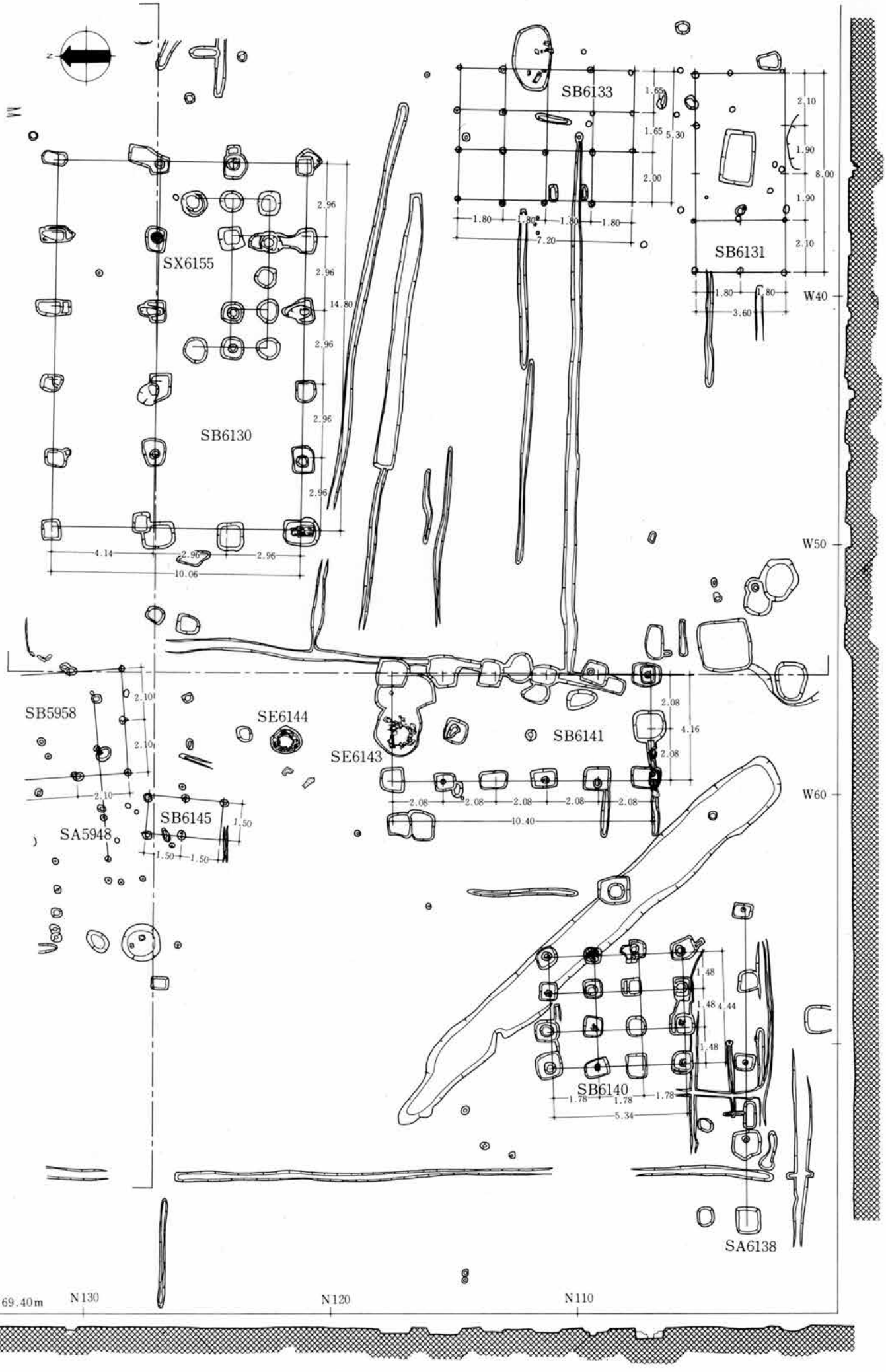

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

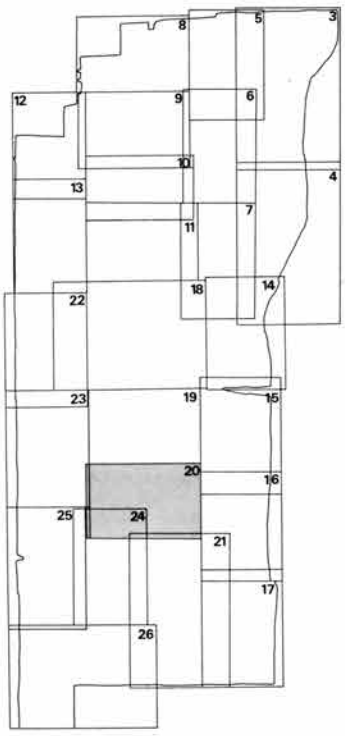

N
SA7045
SE7008
SK7041
SK7040
SD5960
SB6994
SB6991
SE6988
SD6980
SA5950
2.68
N 40
N 30
N20
N10
W30
H:69.40m
W20
W10
EW0

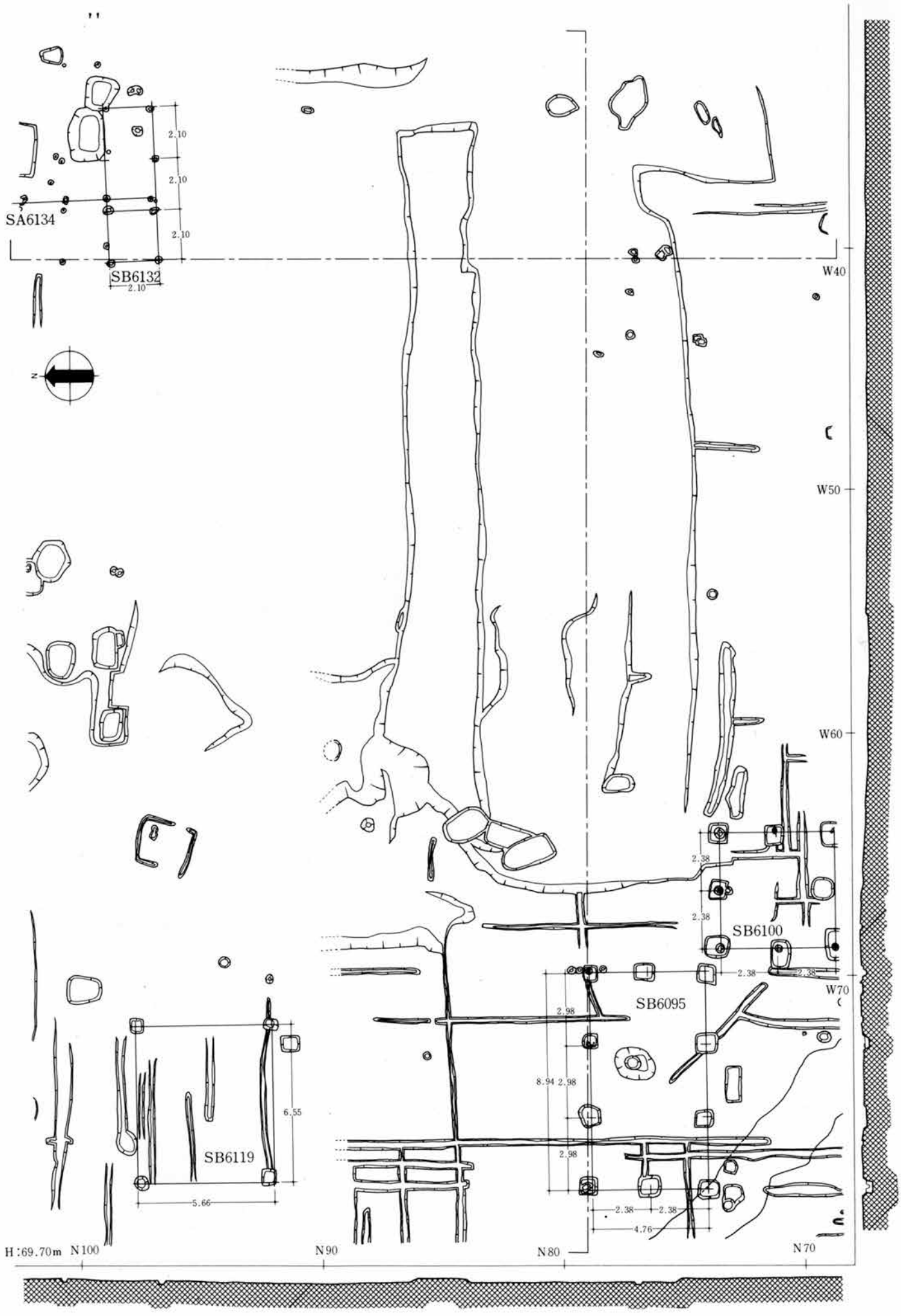

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
22
18
14
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

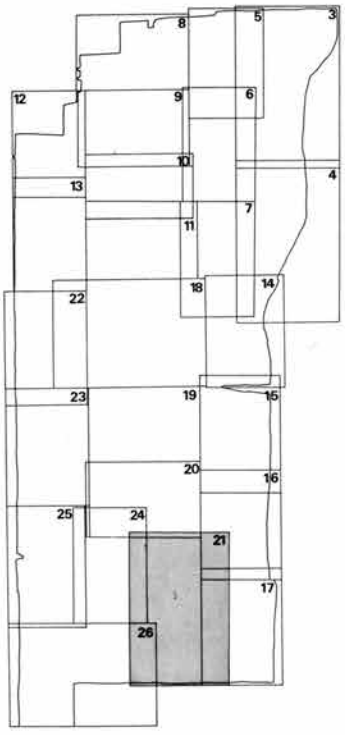

N
W30
W40
W50
W60
W70
W80
W90
SB5965
SA5948
SB5947
SA5969
SB6130
SB5944
SB5953
SA5952
SB5958
SB5968
SB5949
SB5957
SE5963
SB5945
SB5974
SA6341
SB3941
SA6126
H:69.467m

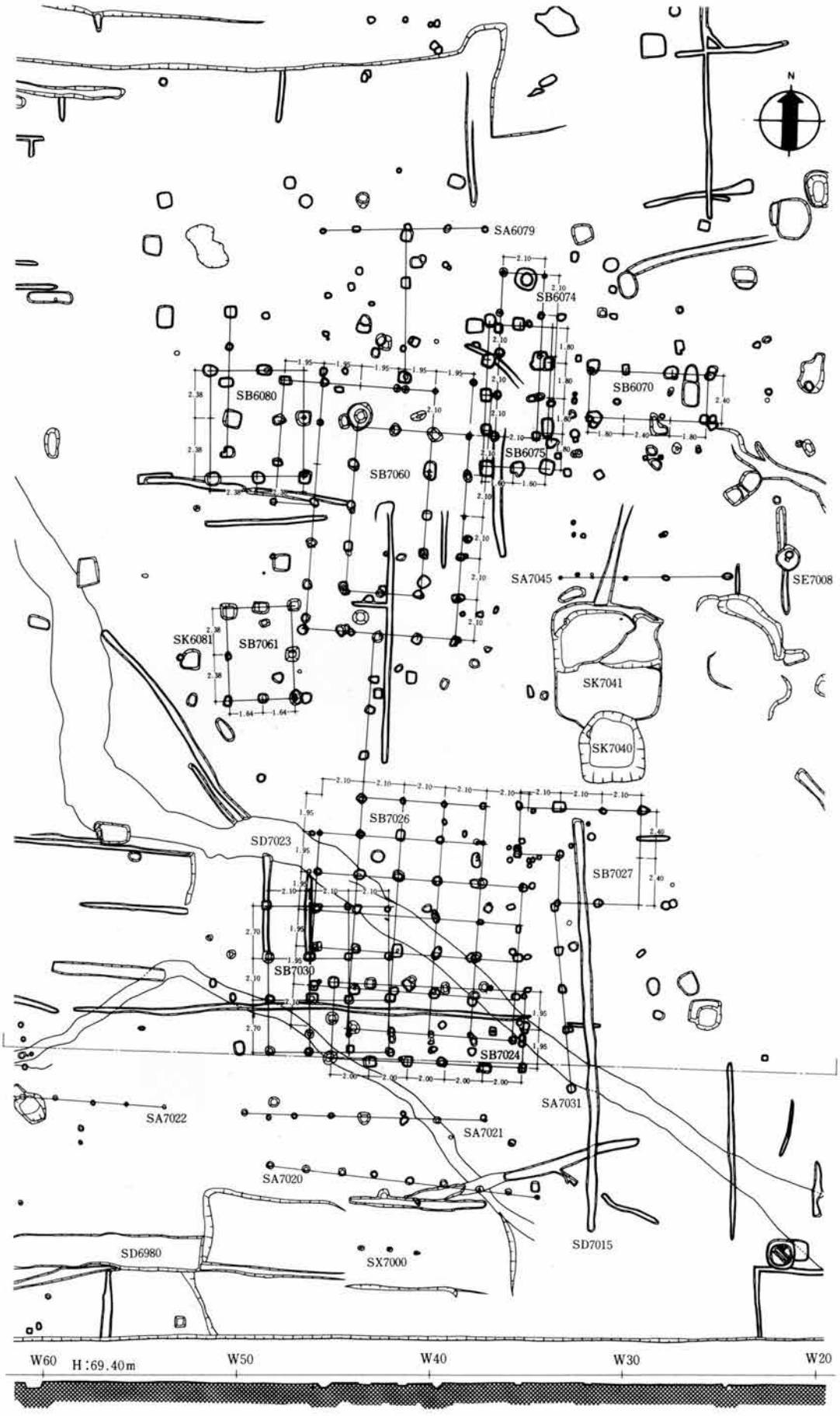

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

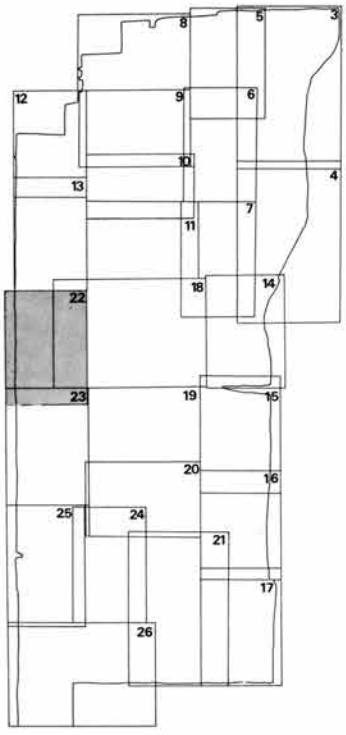

SB6133
SB6131
SX6155
SB6130
SB5958
SE6144
SE6143
SB6141
SB6145
SA5948
SB6140
SA6138
W40
W50
W60
N130
N120
N110
H:69.40m

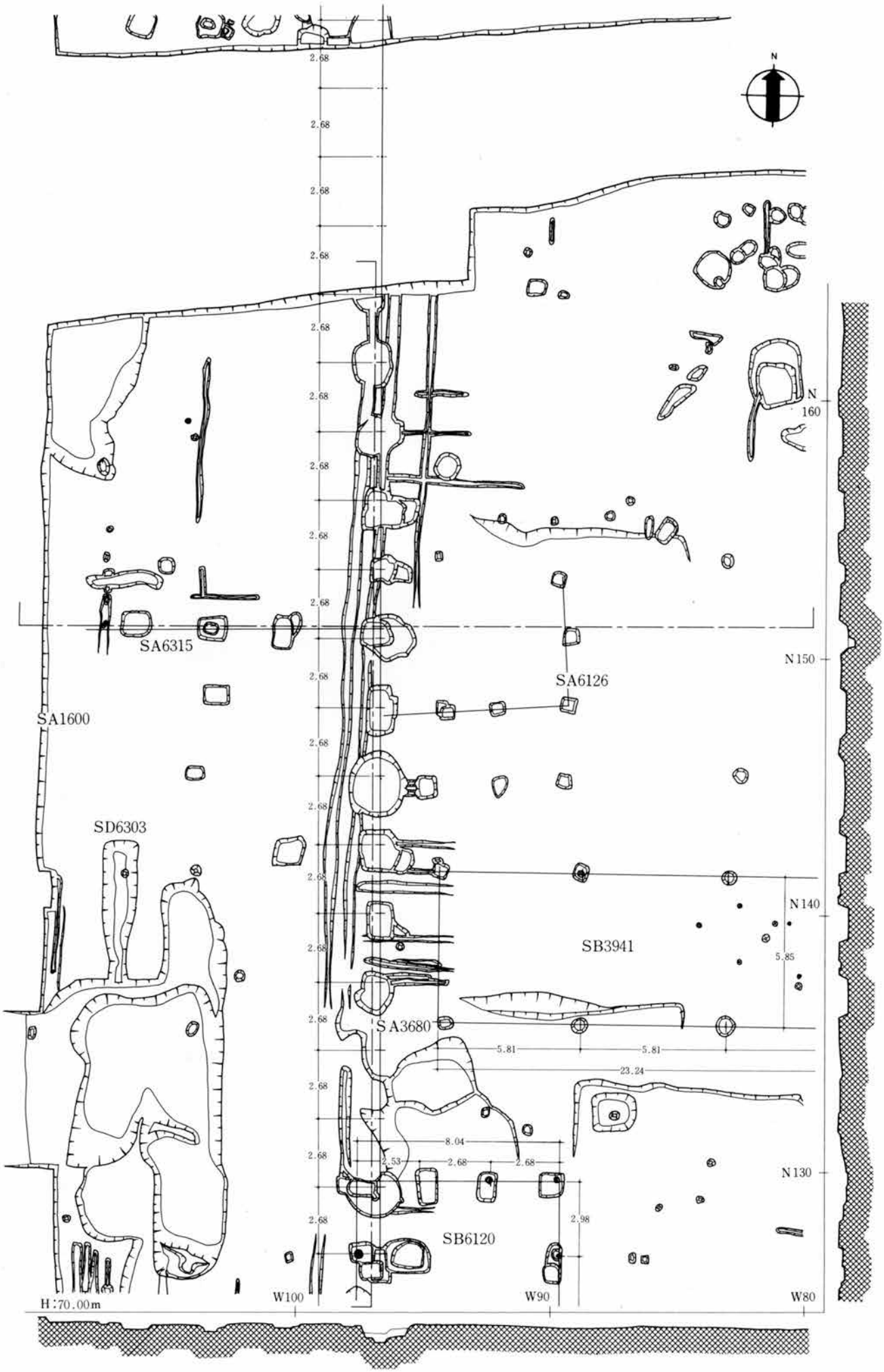

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

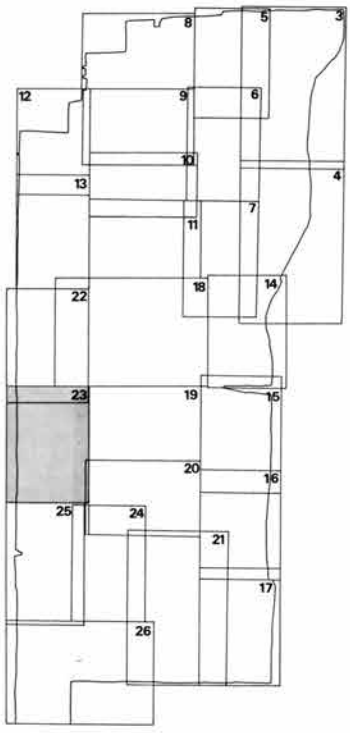

SA6134
2.10
2.10
2.10
SB6132
2.10
N
W40
W50
W60
W70
SB6100
2.38
2.38
2.38
2.38
SB6095
2.98
8.94
2.98
2.98
2.38
2.38
4.76
SB6119
6.55
5.66
H:69.70m
N100
N90
N80
N70

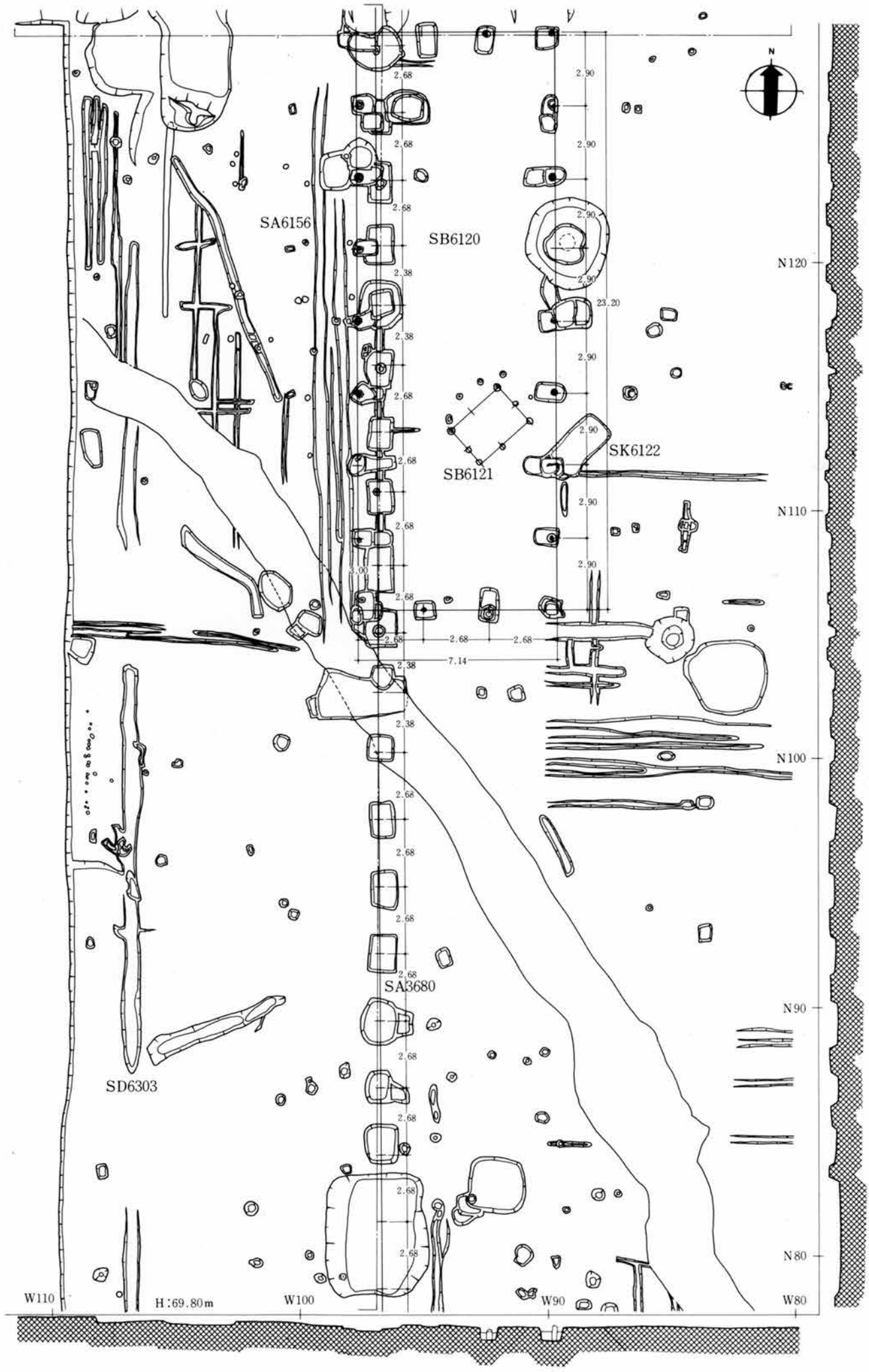

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

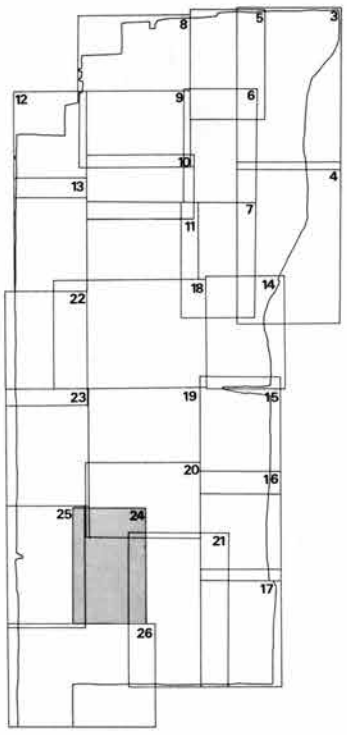

N
SA6079
SB6074
SB6080
SB6070
SB6075
SB7060
SA7045
SE7008
SK6081
SB7061
SK7041
SK7040
SB7026
SD7023
SB7027
SB7030
SB7024
SA7031
SA7022
SA7021
SA7020
SD6980
SX7000
SD7015
W60
H:69.40m
W50
W40
W30
W20

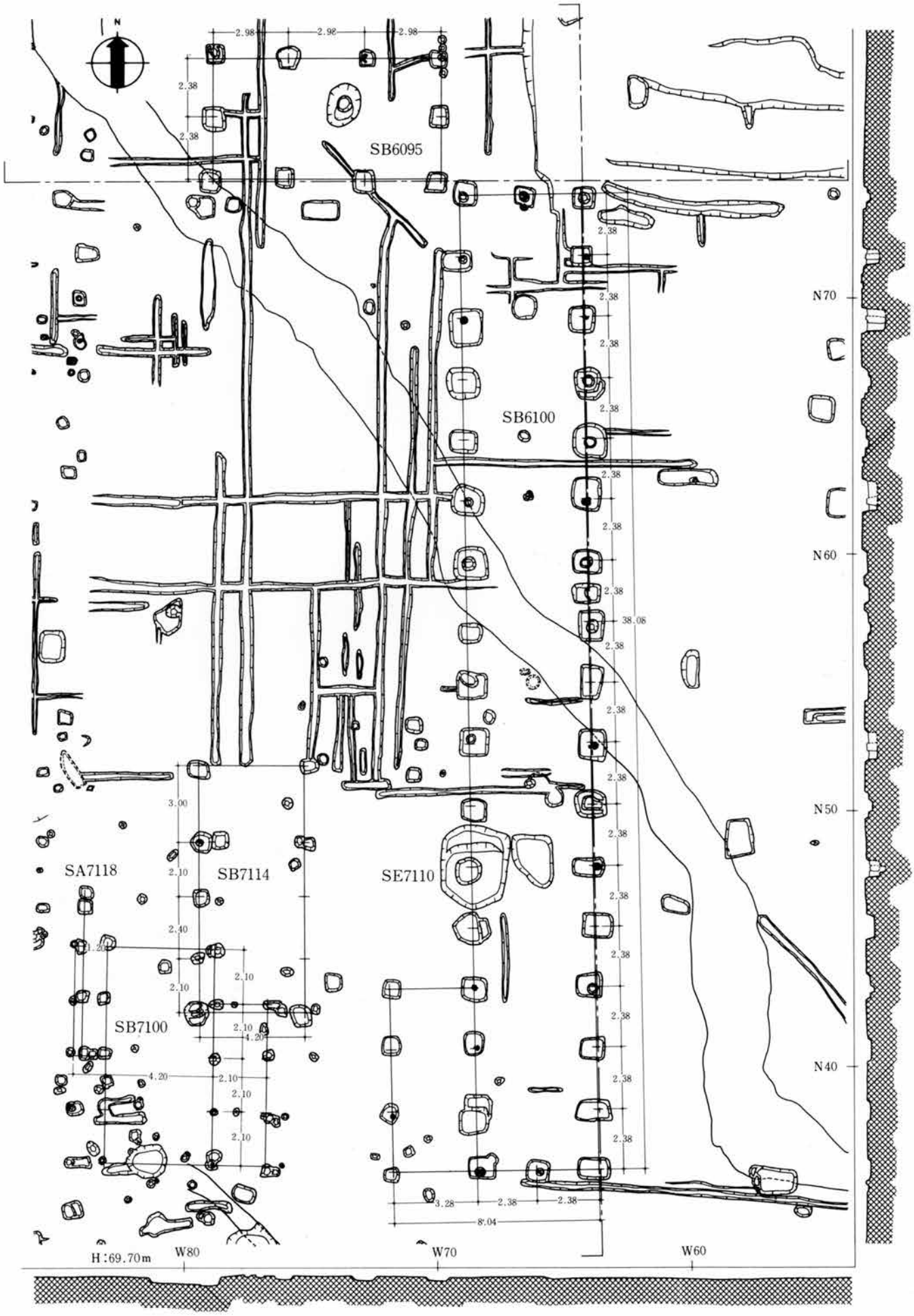

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26

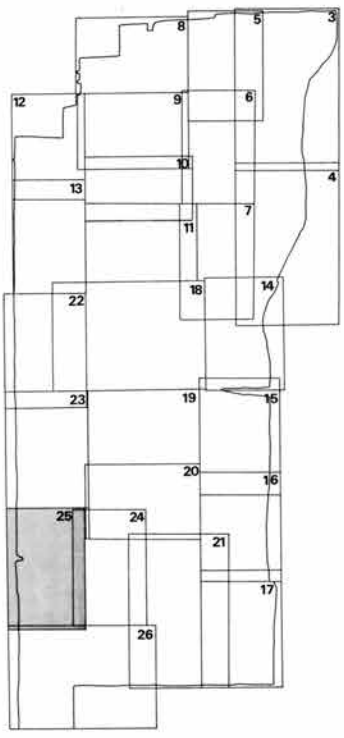

N
N 160
N150
N140
N130
SA6315
SA6126
SA1600
SD6303
SB3941
SA3680
SB6120
5.85
5.81
5.81
23.24
8.04
2.53
2.68
2.68
2.98
2.68
H:70.00m
W100
W90
W80

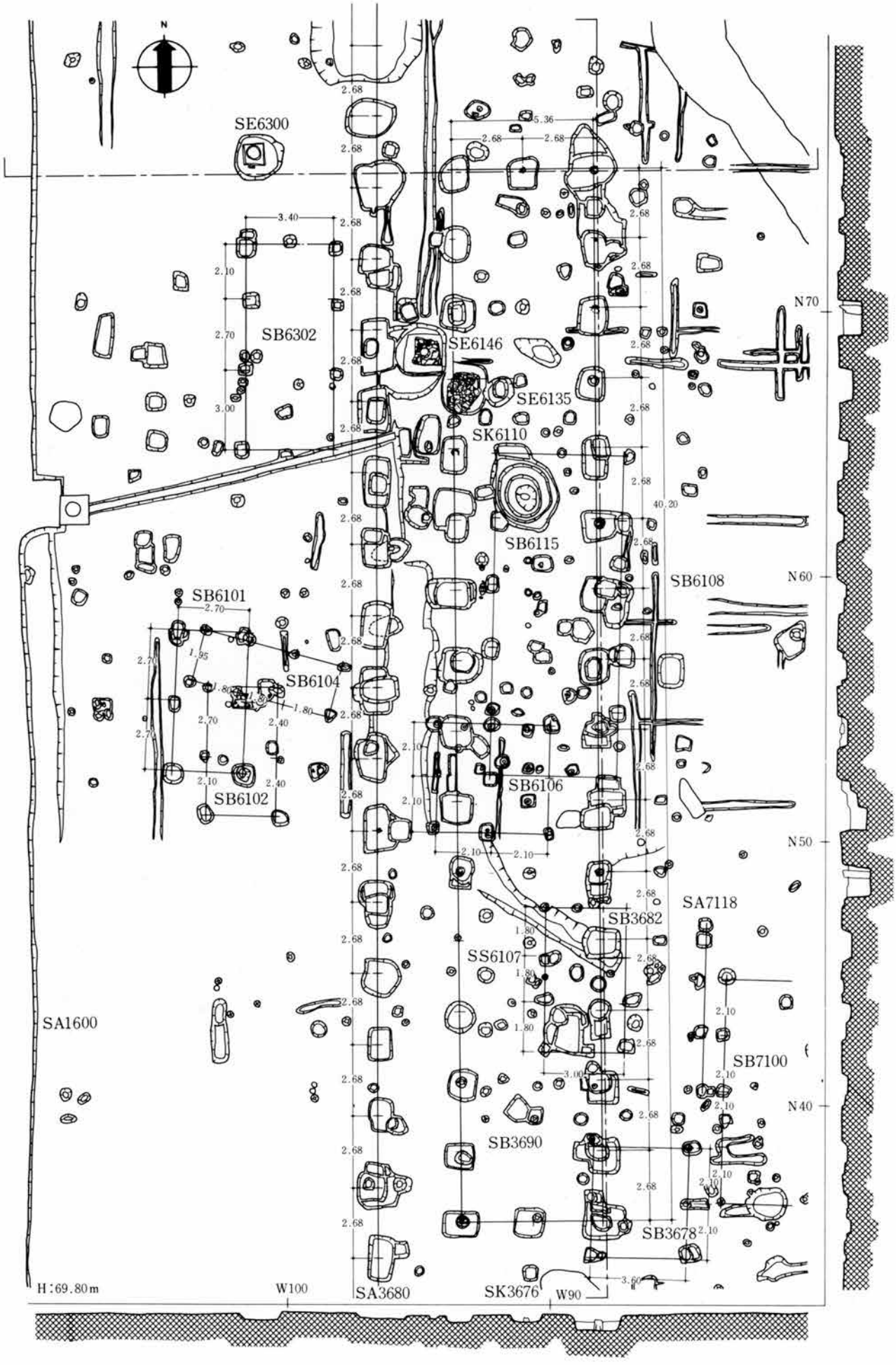

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

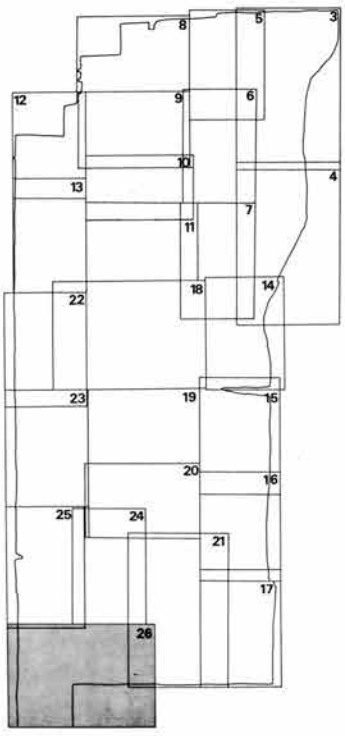

SA6156
SB6120
SB6121
SK6122
SA3680
SD6303
N120
N110
N100
N90
N80
W110
W100
W90
W80
H:69.80m

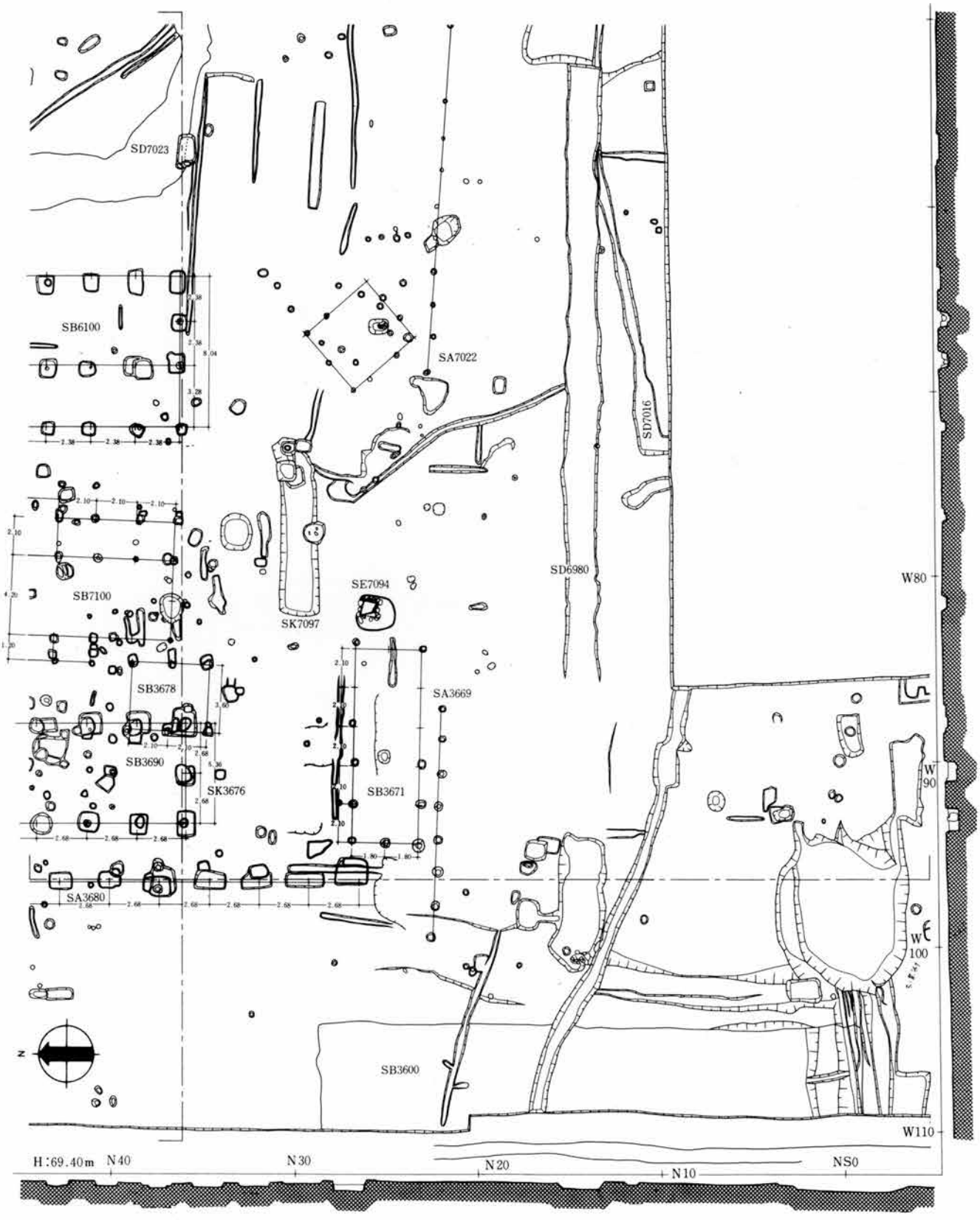

8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26


N
SB6095
SB6100
SA7118
SB7114
SE7110
SB7100
N70
N60
N50
N40
W80
W70
W60
H:69.70m


8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26

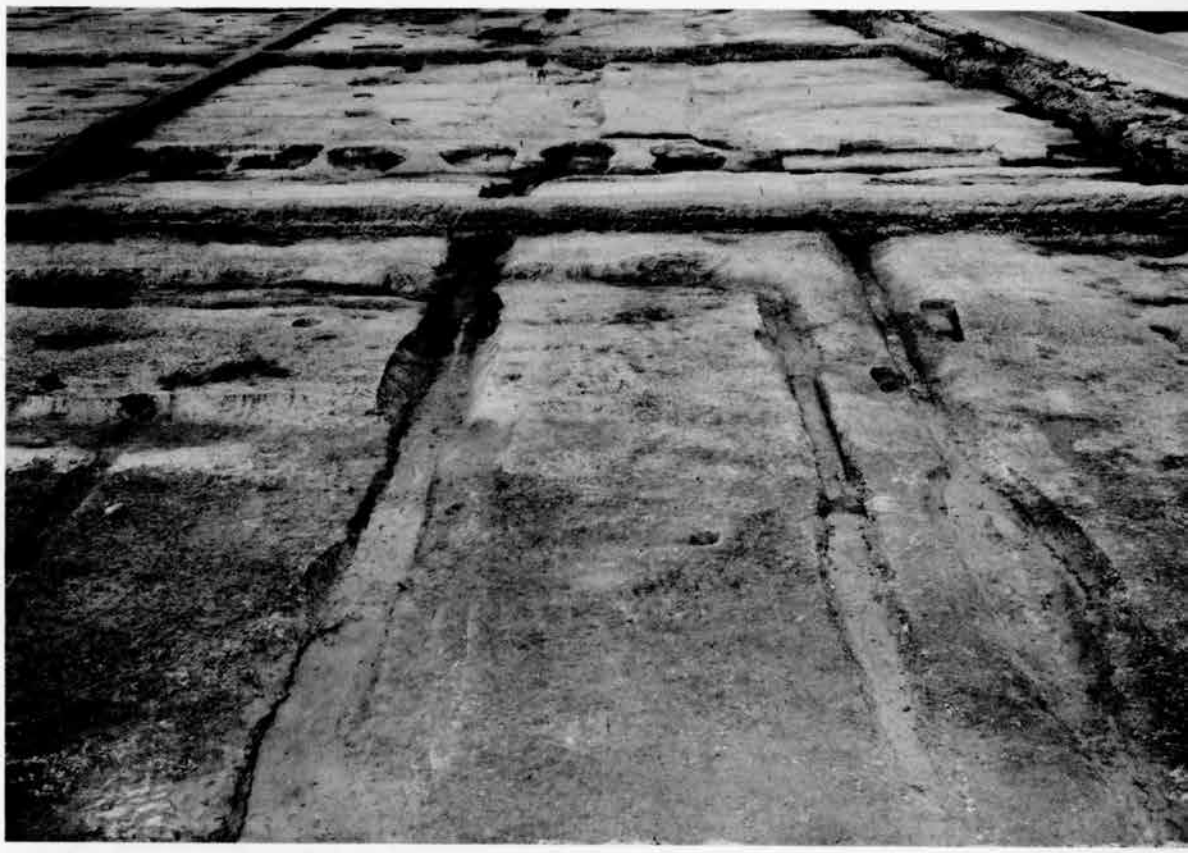

N
SE6300
SB6302
SE6146
SE6135
SK6110
SB6115
SB6108
SB6101
SB6104
SB6102
SB6106
SA7118
SB3682
SS6107
SA1600
SB7100
SB3690
SB3678
SA3680
SK3676
H:69.80m
W100
W90
N70
N60
N50
N40


8
5
3
12
9
6
10
4
13
7
11
18
14
22
23
19
15
20
16
25
24
21
17
26


SD7023
SB6100
SA7022
SD7016
SD6980
SE7094
SK7097
SB7100
SB3678
SA3669
SB3690
SK3676
SB3671
SA3680
SB3600
W80
W90
W100
W110
N
H:69.40m
N40
N30
N20
N10
NS0

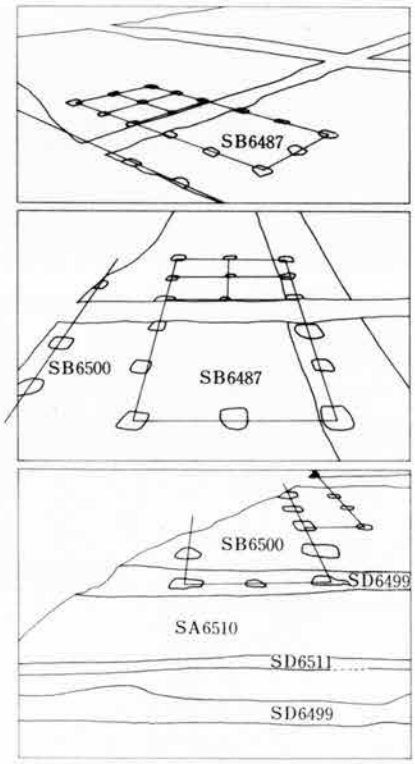
水上池
大膳職
佐紀池
内裏
第一次大極殿・朝堂院
第二次大極殿・朝堂院
東院
西一坊大路
東一坊大路
一条大路
朱雀大路
縮尺 1:10,000

1．第63次調査区中央部
全景　東から



2．築地SA6510と
SA6150の交点
（暗渠SX6505）
東から

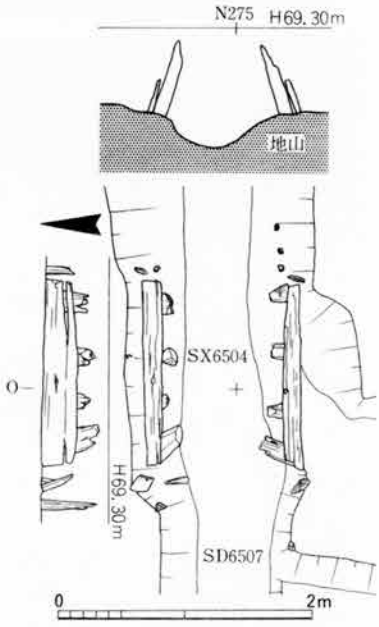
3．築地SA6150
南から

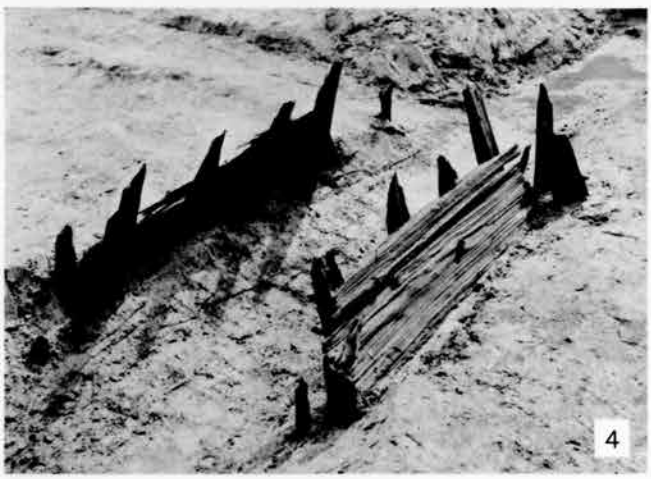

SB6487
SB6500
SB6487
SB6500
SD6499
SA6510
SD6511
SD6499

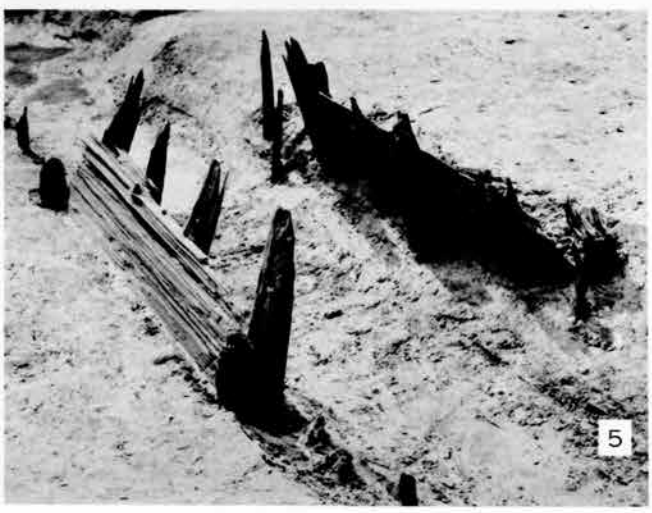
1．馬寮東官衙建物
SB6487
東北から

2．同上　北から

3．馬寮東官衙建物
SB6500　北から
（手前は築地
SA6510）


N275
H69.30m
地山
SX6504
H69.30m
SD6507
0
2m





1．築地SA6475とSA5950Bの交点
（暗渠SX6504）　西南から

2．同上　東から

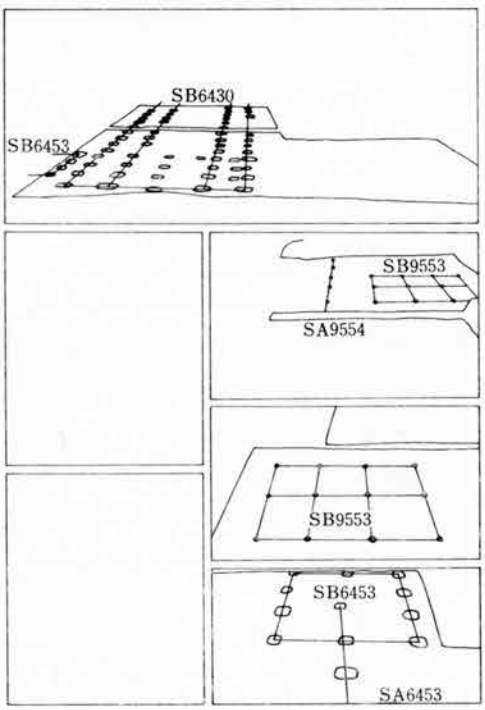
3．暗渠SX6504細部　南から

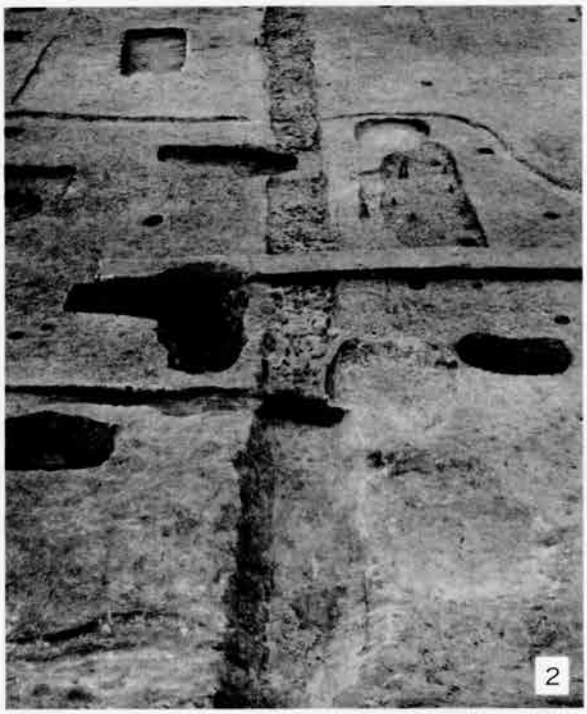
4．暗渠SX6505細部　東北から

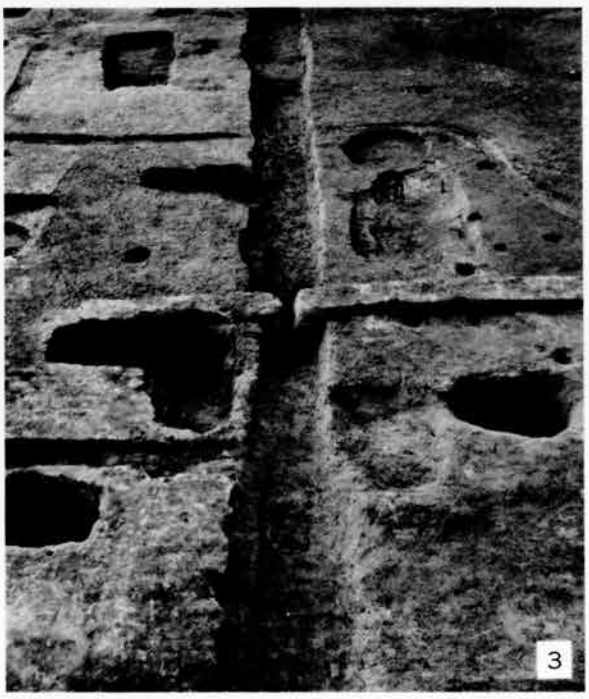
5．同上　西南から

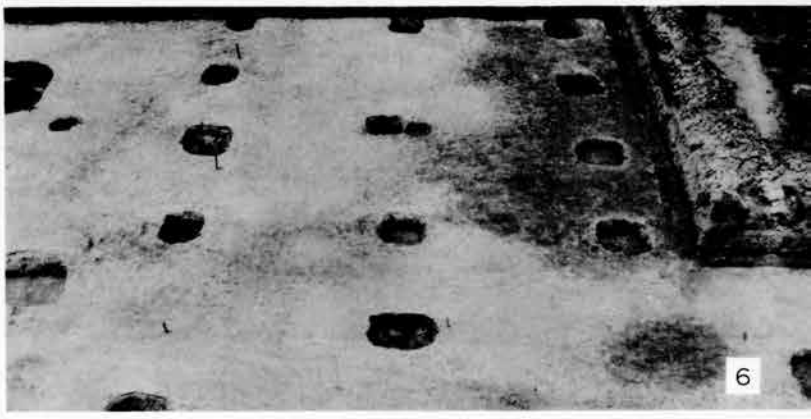
1．南北塀SA5950
南から

2～5．SA5950Aの
柱根と礎板

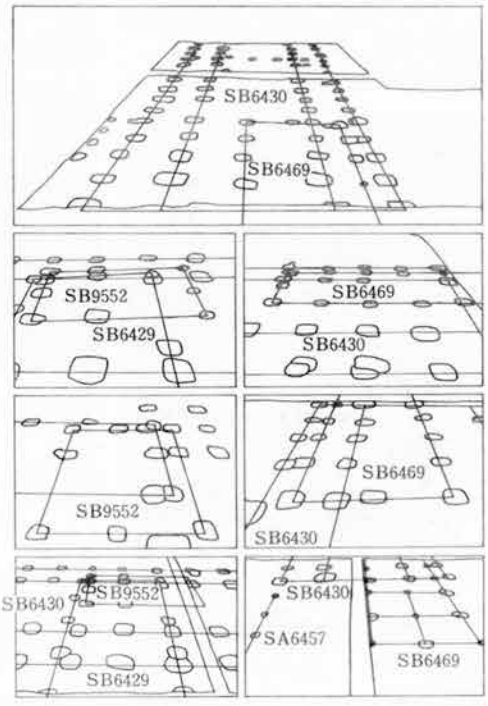

SB6430
SB6453
SB9553
SA9554
SB9553
SB6453
SA6453



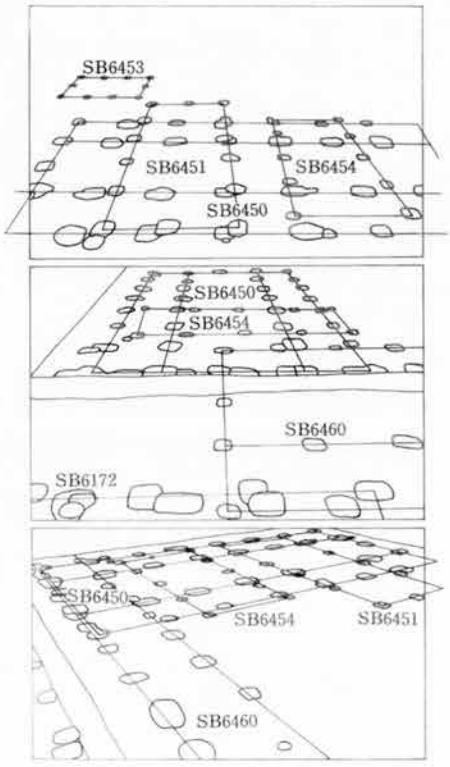




1．第127次調査区　全景　東から
2．溝SD6473上層　東から
3．同上　下層　東から
4．建物SB9553と塀SA9554　東から
5．同上　西から
6．建物SB6453　東から


SB6430
SB6469
SB9552
SB6429
SB6469
SB6430
SB9552
SB6469
SB6430
SB6430
SB9552
SB6429
SB6430
SA6457
SB6469

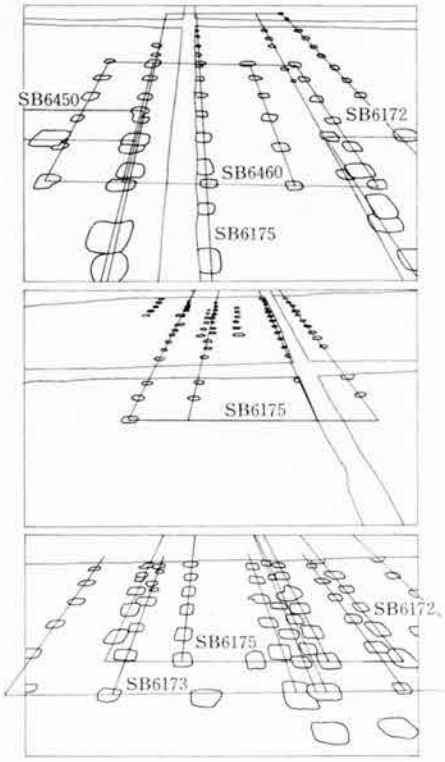
1．建物SB6430　東から
2．建物SB9552　南から
3．同上　東から
4．建物SB6429北半部　南から
5．建物SB6469西半部　南から
6．同上　西から
7．同上　東半部　東から


SB6453
SB6451
SB6454
SB6450
SB6450
SB6454
SB6460
SB6172
SB6450
SB6454
SB6451
SB6460

1．第Ⅱ期正殿SB6450と
建物SB6451・6454
南から

2．同上　東から

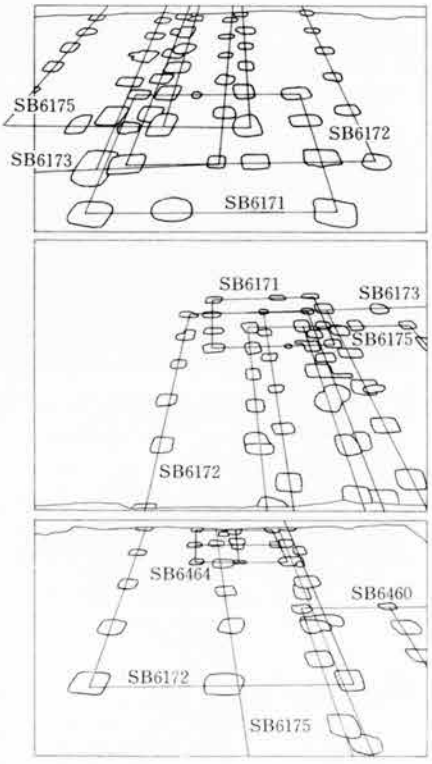
3．同上　北東から


SB6450
SB6172
SB6460
SB6175
SB6175
SB6172
SB6175
SB6173

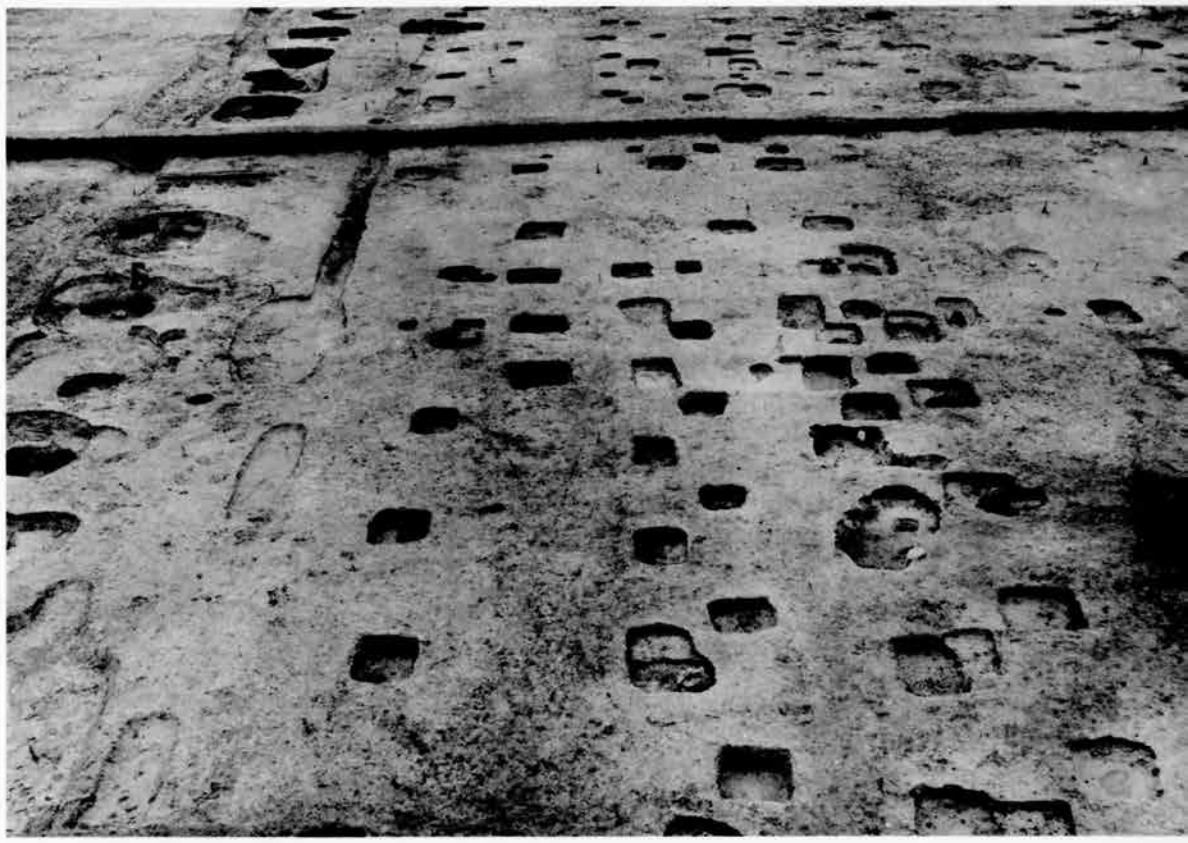
1．第Ⅴ期二面廂付
建物SB6460
南から

2．第Ⅳ期二面廂付建物
SB6175　北から

3．SB6172・6173・
6175重複状況
南から

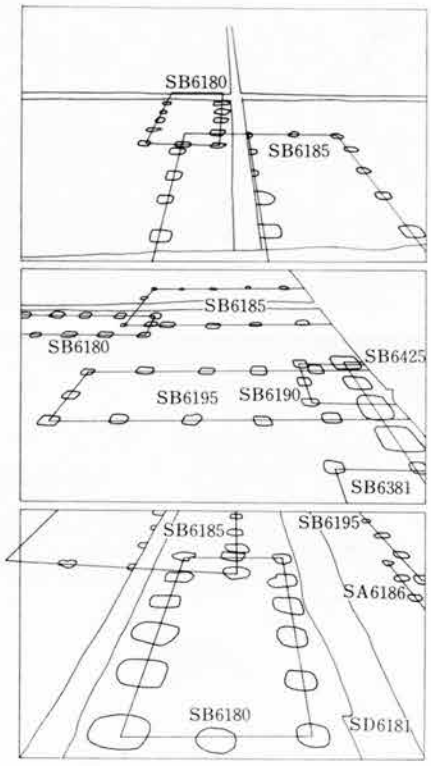

SB6175
SB6172
SB6173
SB6171
SB6171
SB6173
SB6175
SB6172
SB6464
SB6460
SB6172
SB6175

1．第Ⅱ期馬房SB6172
南半部と第Ⅴ期建物
SB6171との重複状況
南から



2．同上　北から

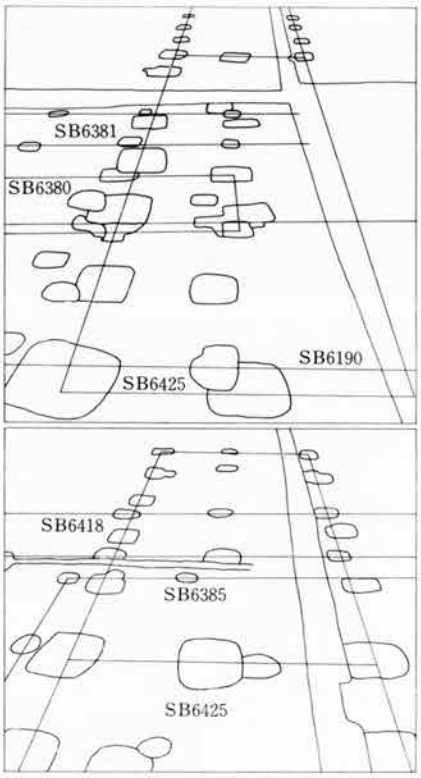
3．SB6172北半部
北から


SB6180
SB6185
SB6185
SB6180
SB6425
SB6195
SB6190
SB6381
SB6185
SB6195
SA6186
SB6180
SD6181

1．第Ⅱ期前殿SB6180
と第Ⅱ期正殿SB6185
（東半部） 西から

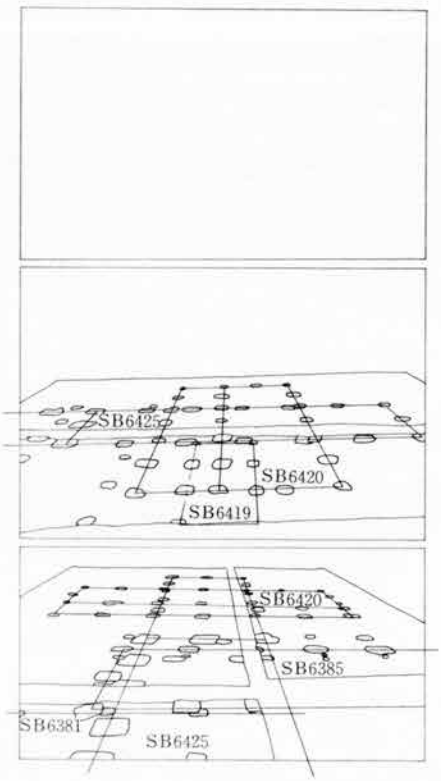
2 SB6185・6195
東半部 北から

3. SB6180
東から


SB6381
SB6380
SB6190
SB6425
SB6418
SB6385
SB6425

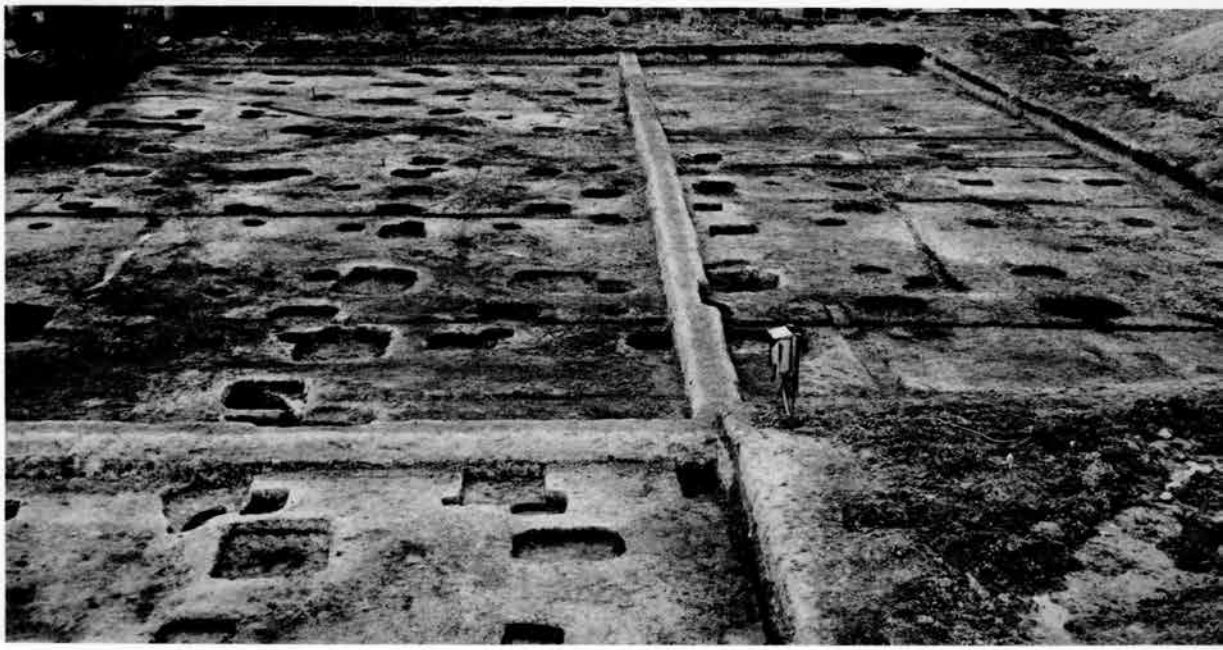
1．第Ⅱ期脇殿SB6425
南から

2．同上　北半部
南から

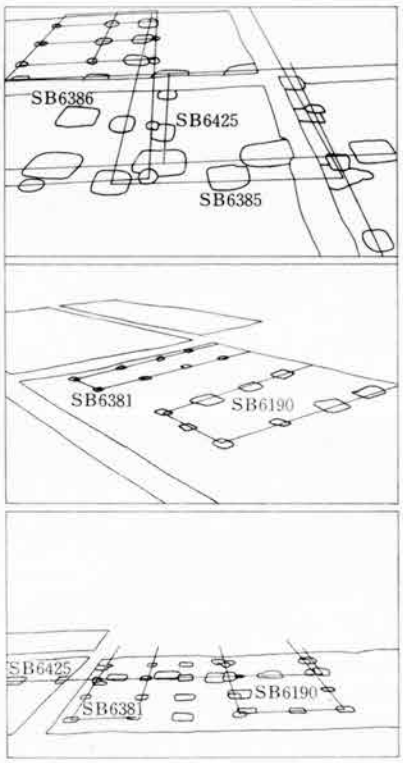

SB6425
SB6420
SB6419
SB6420
SB6385
SB6381
SB6425

1. 第59次北調査区
北部全景　東南から

2. 第Ⅳ区正殿SB6420
東から



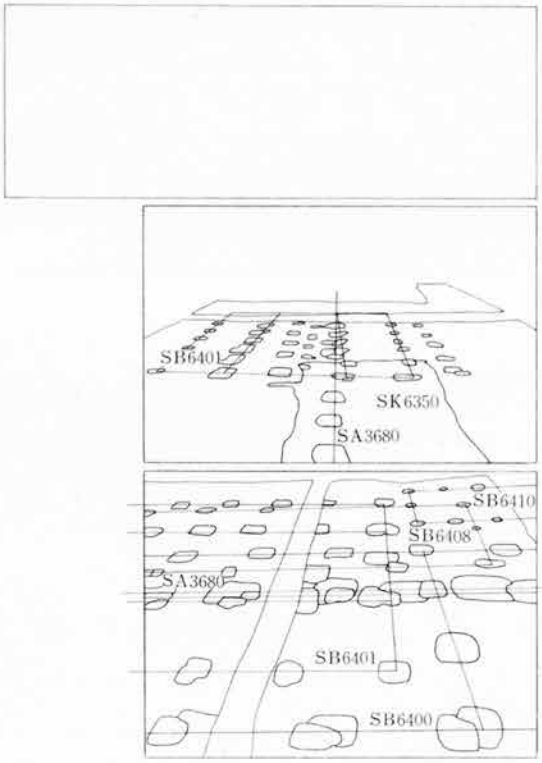
3. 第Ⅱ期後殿SB6385
と第Ⅱ期脇殿SB6425
（北半部）重複状況
南から


SB6386
SB6425
SB6385
SB6381
SB6190
SB6425
SB6381
SB6190

1．第Ⅲ期後殿SB6385
西から

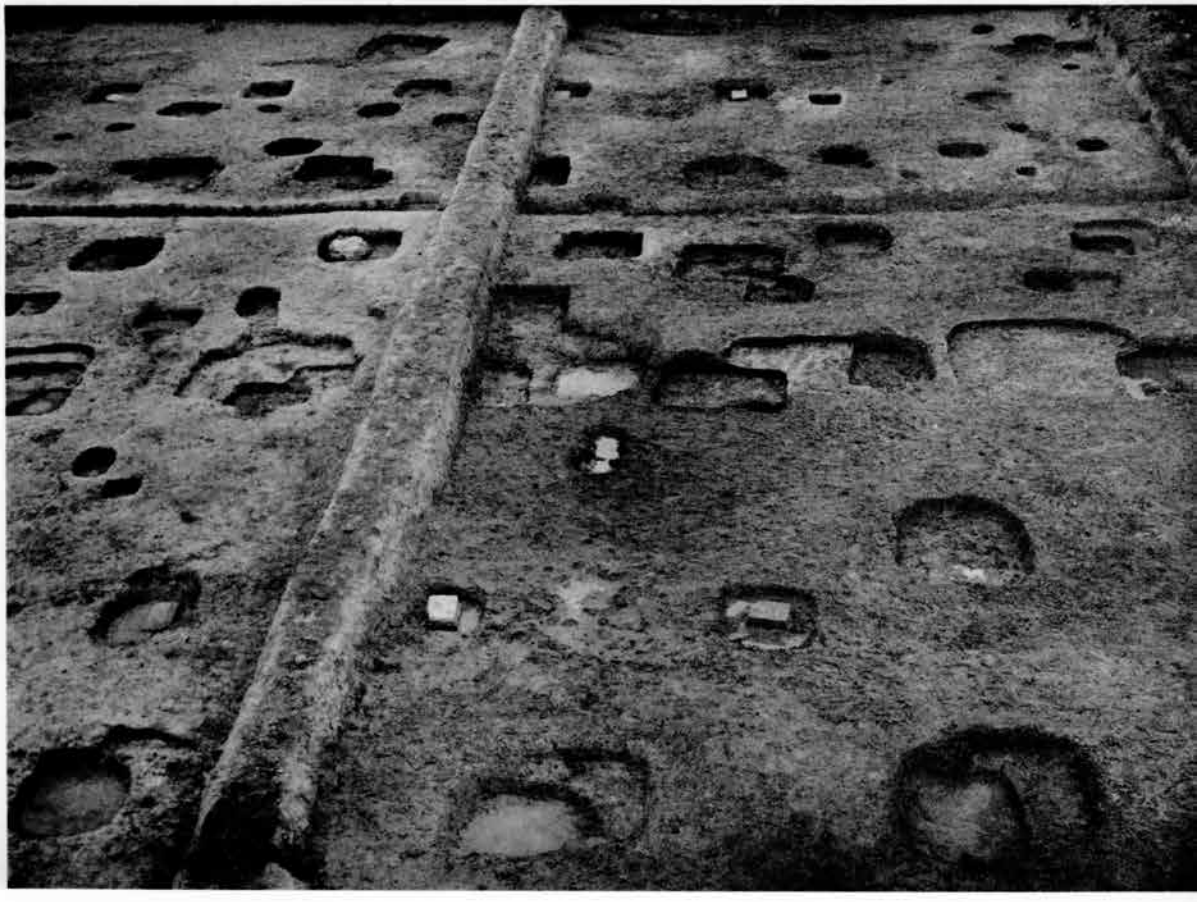
2．第Ⅳ期前殿SB6181・
6190併存状況
西南から

3．同上　西から

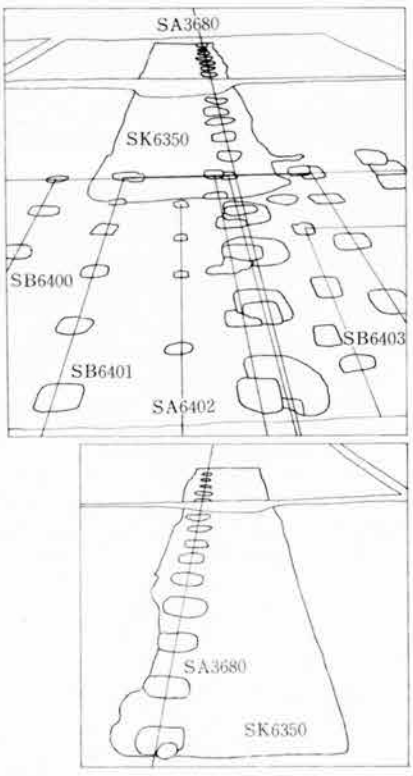

SB6401
SK6350
SA3680
SB6410
SB6408
SA3680
SB6401
SB6400

1．全景
SB6400・6401・
6403　東から

2．同上　南から

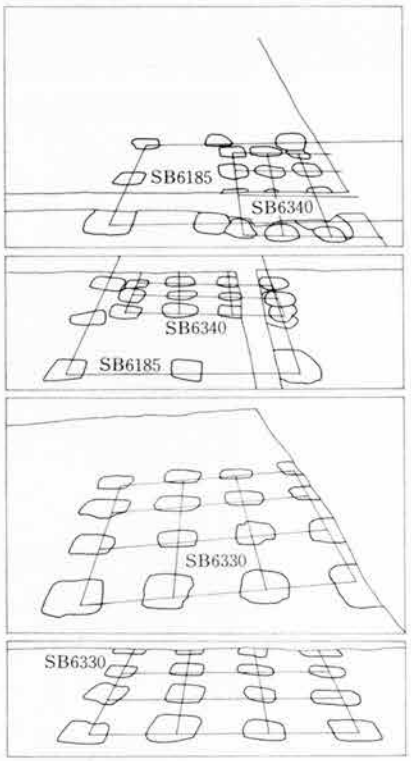


3．SB6401 中心部分
礎板(博)使用状況


SA3680
SK6350
SB6400
SB6403
SB6401
SA6402
SA3680
SK6350

1．長方形土壙SK6350と
南北塀SA3680
北から

2．同上　南から

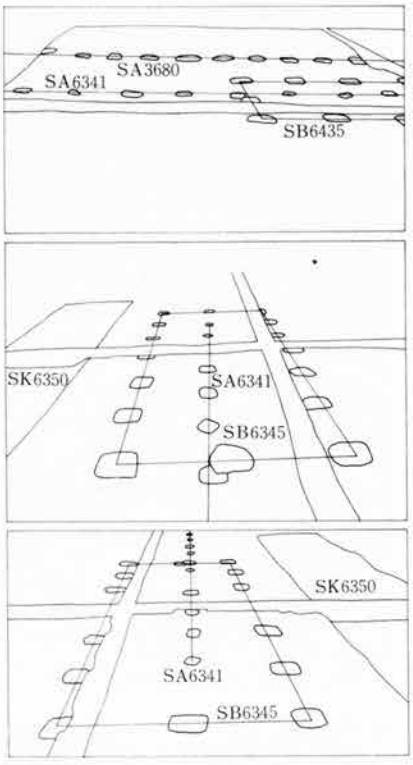

SB6185
SB6340
SB6340
SB6185
SB6330
SB6330

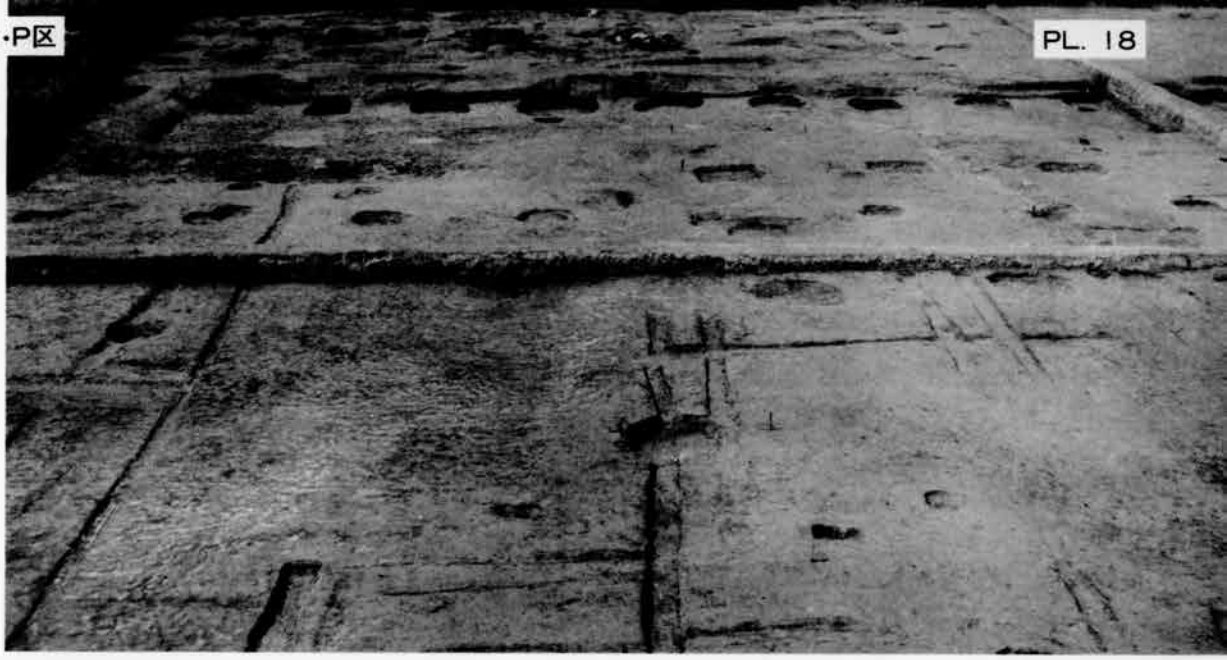
1．第Ⅱ期倉庫SB6340と建物SB6185西妻部分
南から

2．同上　西から

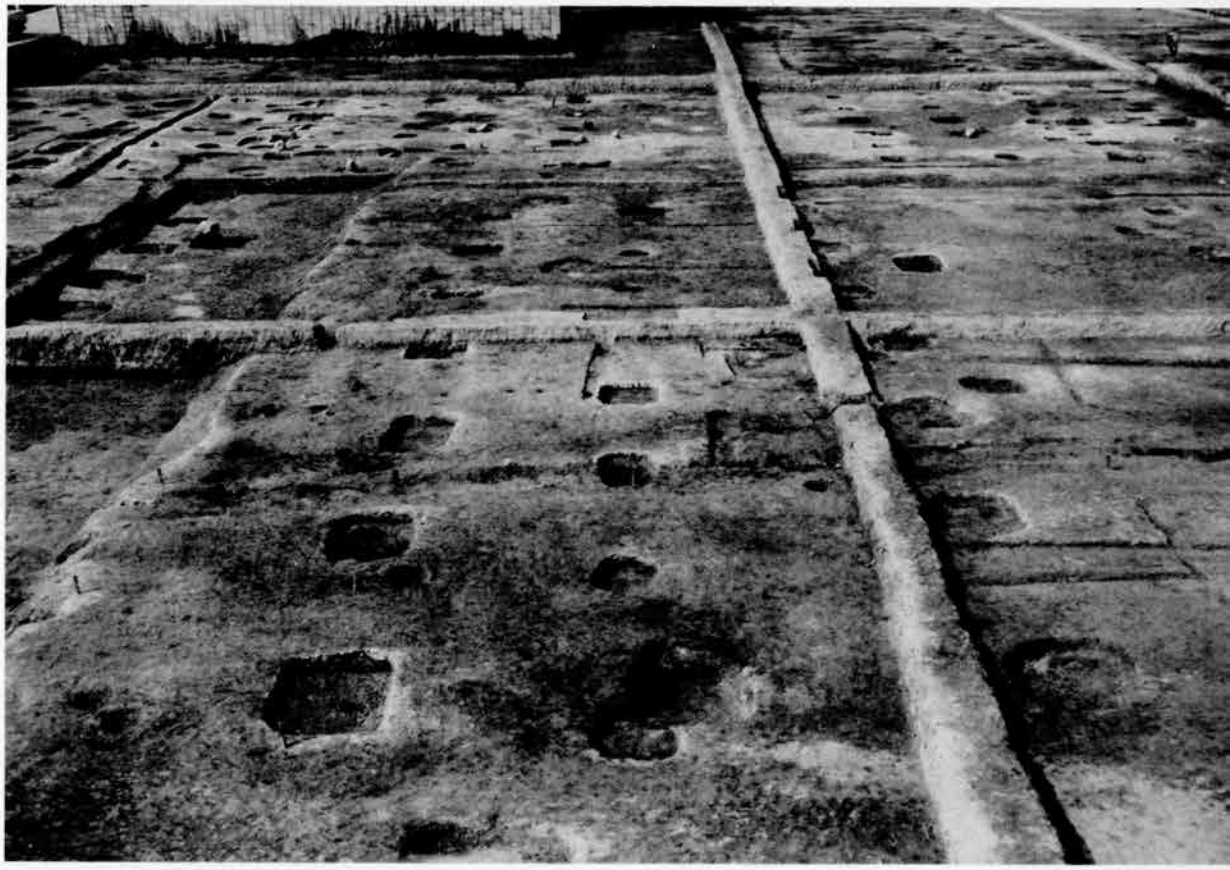
3．第Ⅱ期倉庫SB6330
南から

4．同上　西から


SA3680
SA6341
SB6435
SK6350
SA6341
SB6345
SK6350
SA6341
SB6345

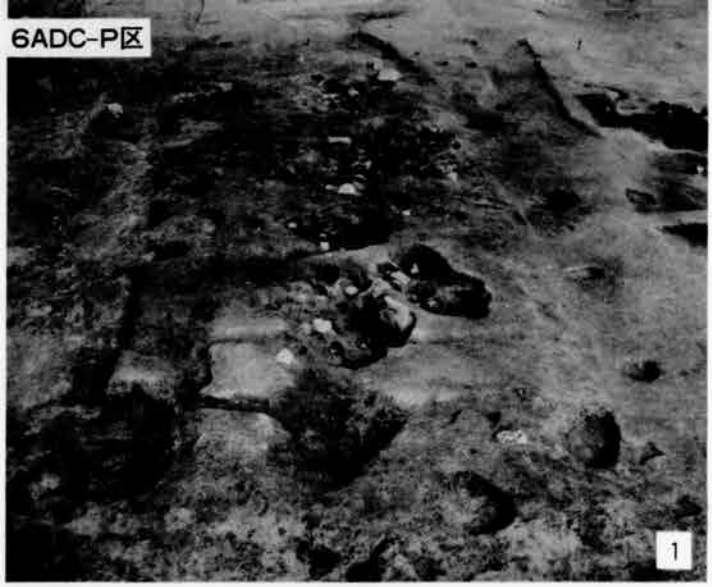


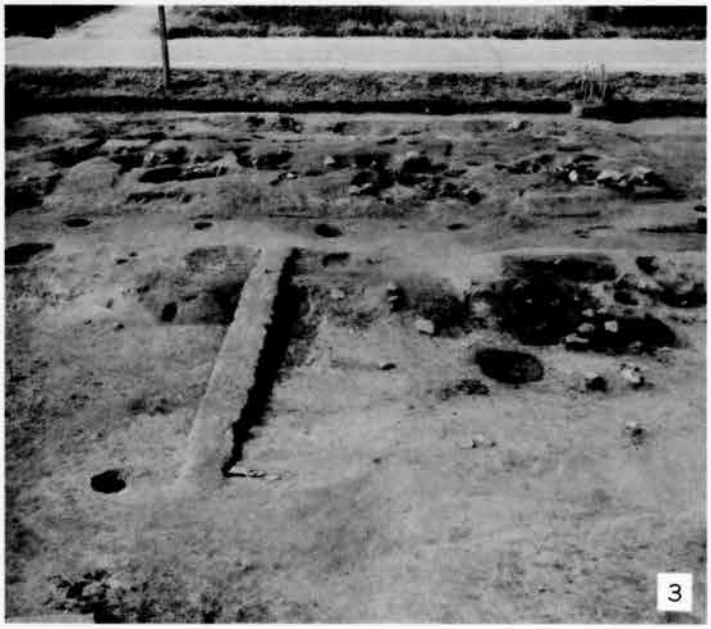
1．第Ⅳ期南北棟建物
SB6345と第Ⅲ期
南北塀SA6341
東から



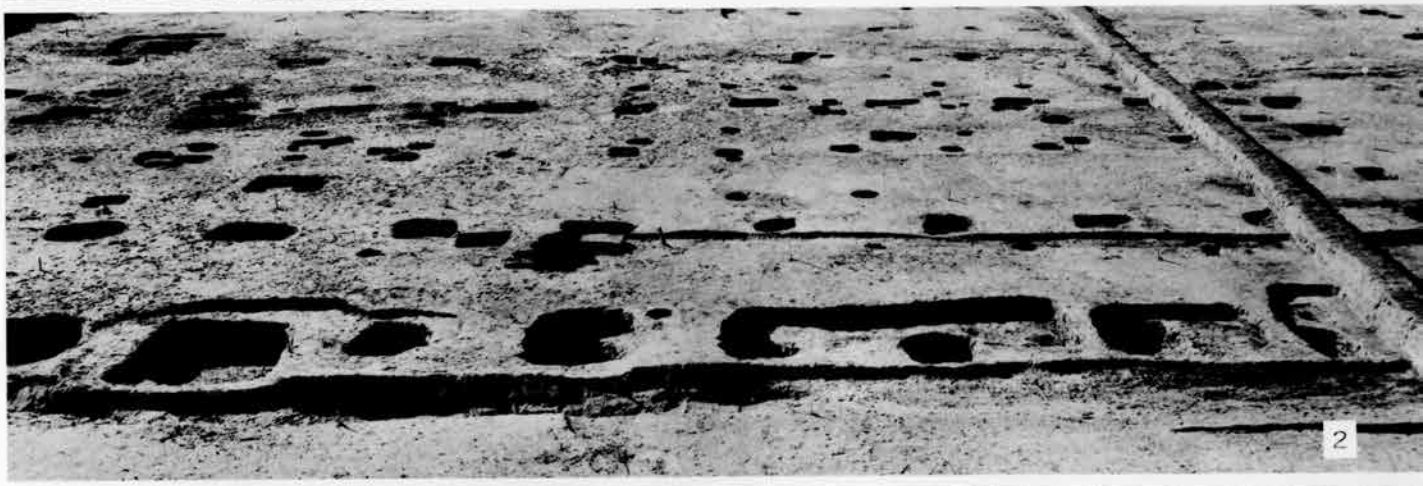
2．同上　南から

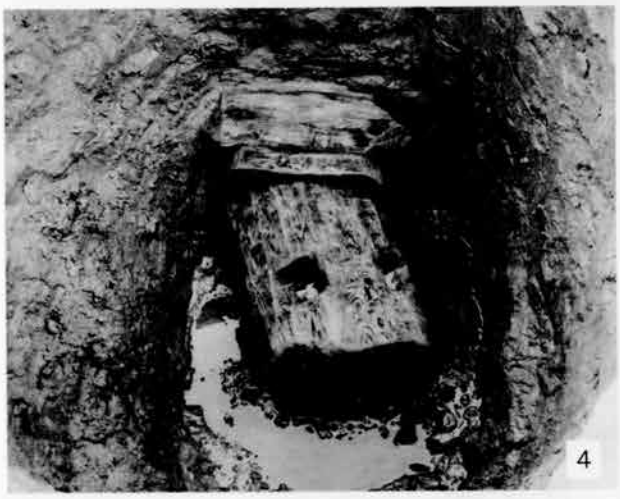
3．同上　北から





工房SB6360　1．全景　南から
2．同上　北から
3．同上　東から
4．細部　南から
5．同上　北から
6．同上　北から



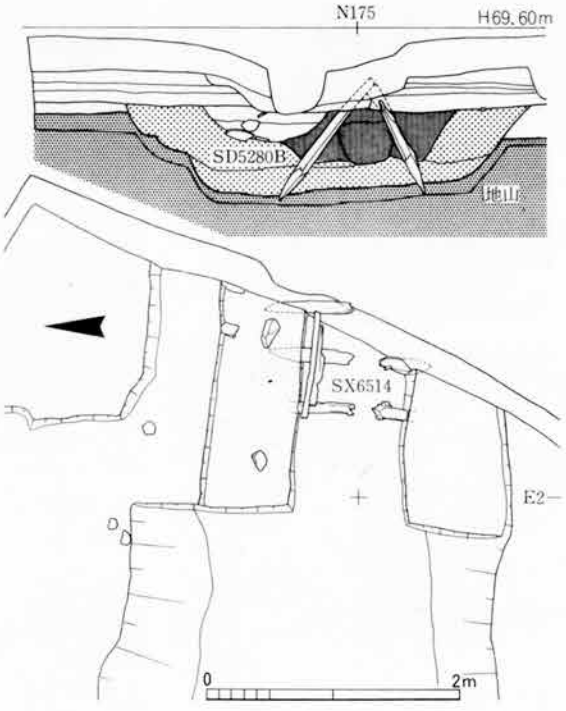


1．第52次調査区全景　東から

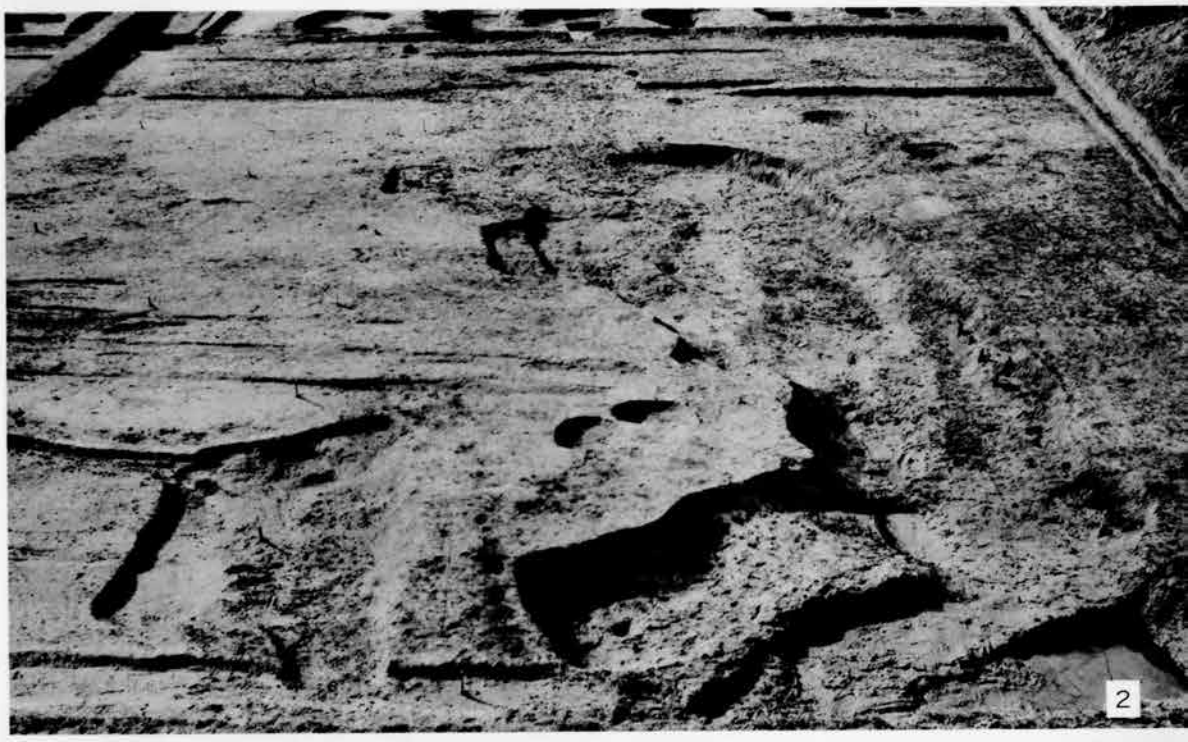
2．第Ⅰ期馬房SB6170と小規模建物
SB6168・6169の重複状況

3．南北塀SA5950　北から

4・5．同上　礎板


N175
H69.60m
SD5280B
地山
SX6514
E2
0
2m

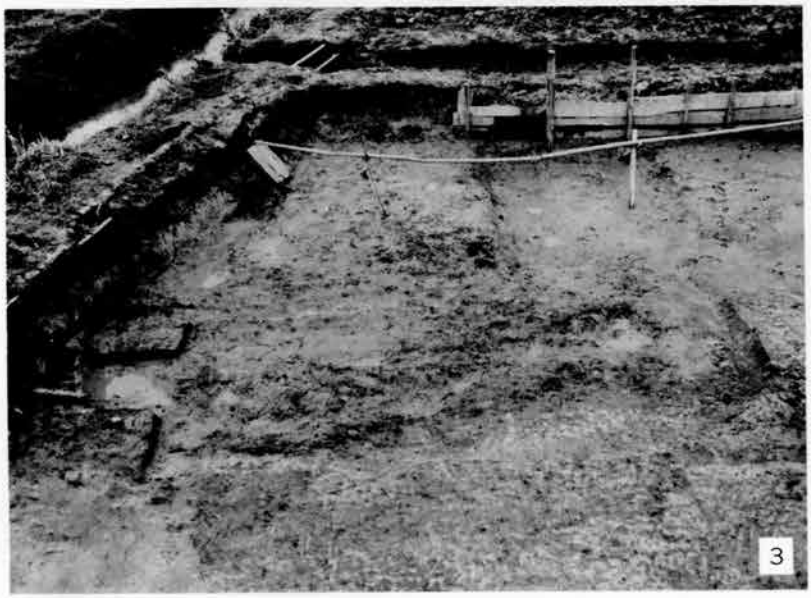
1．馬寮東官衙西限築地
SA6150を切る溝
SD6155　北から

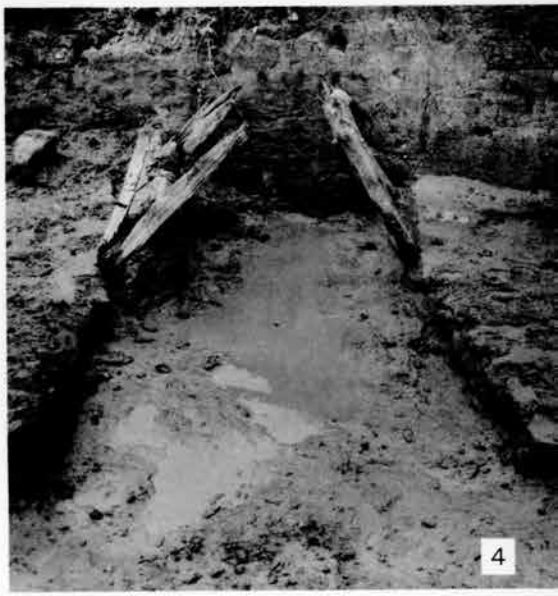


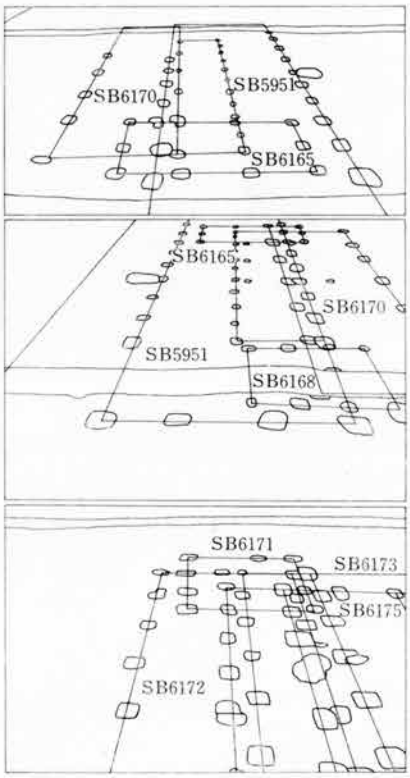
2．同上　細部　東から

3．馬寮東官衙西限溝
SD5960の北端届曲点
北から

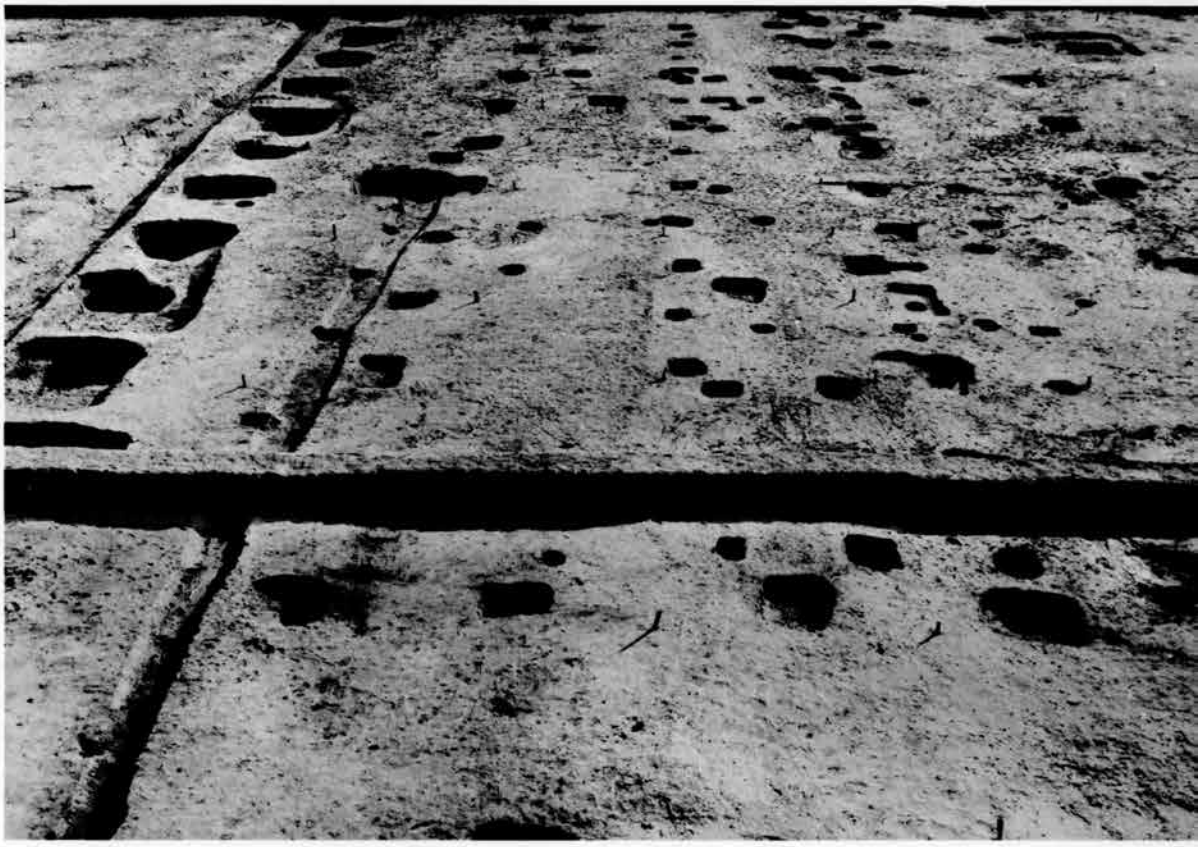
4　暗渠SX6514　西から





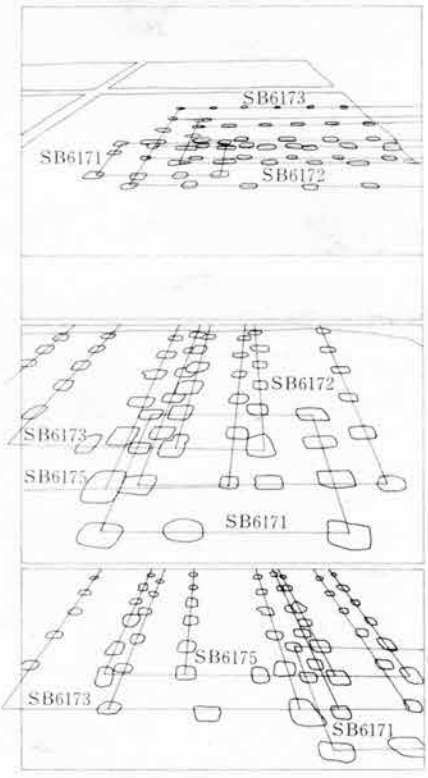

SB6170
SB5951
SB6165
SB6165
SB6170
SB5951
SB6168
SB6171
SB6173
SB6175
SB6172

1．SB6165・6169・6170等重複状況
南から



2．同上　北から

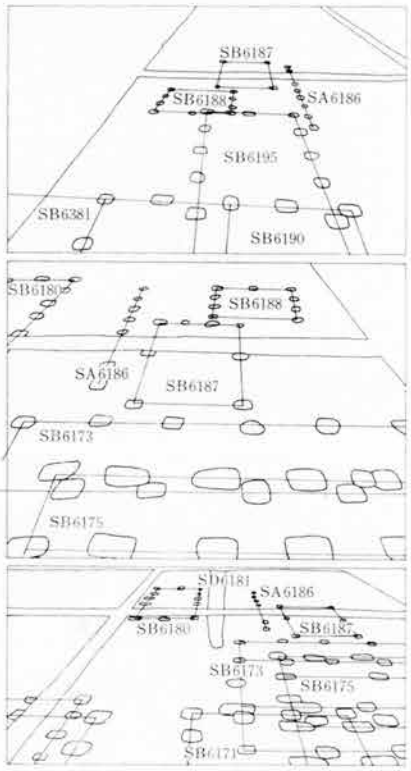
3．SB6171・6172・6173・6175
重複状況　北から


SB6173
SB6171
SB6172
SB6172
SB6173
SB6175
SB6171
SB6175
SB6173
SB6171

1．第52次調査区北部全景
東から

2．SB6171・6172
重複状況　南から

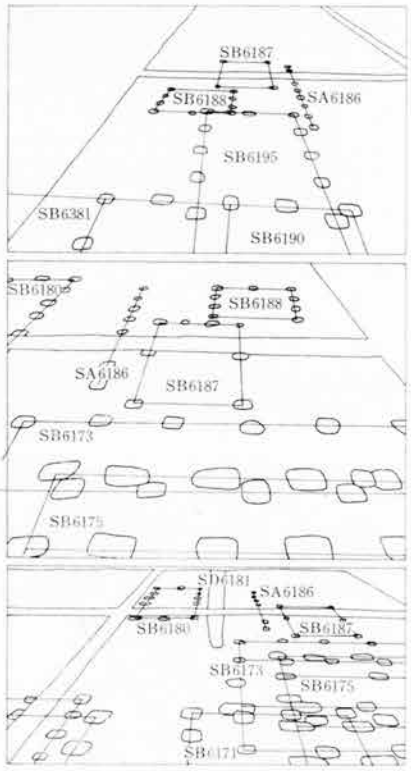
3．SB6173・6175
重複状況　南から


SB6187
SB6188
SA6186
SB6195
SB6381
SB6190
SB6180
SB6188
SA6186
SB6187
SB6173
SB6175
SD6181
SA6186
SB6180
SB6187
SB6173
SB6175
SB6171

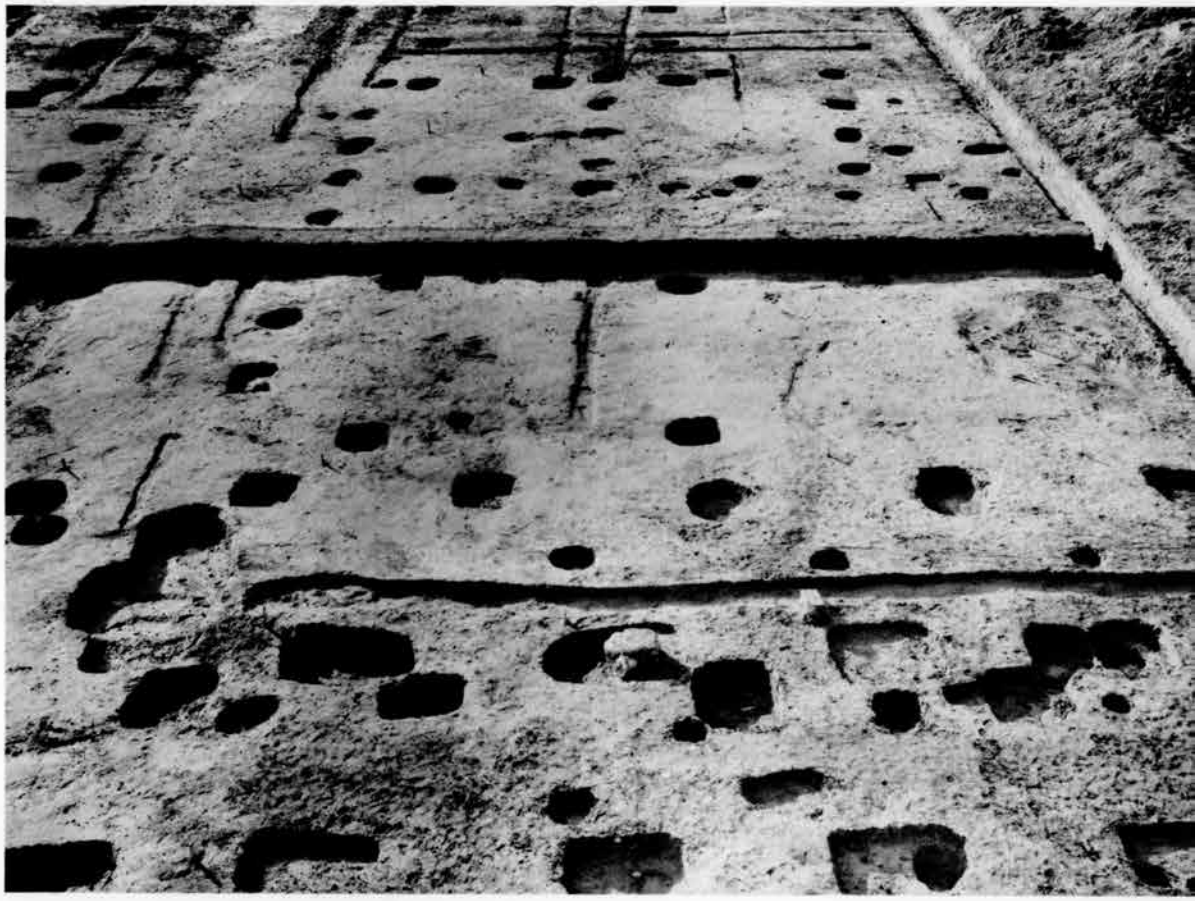
1．第52次調査区北部全景
東から

2．SB6171・6172
重複状況　南から

3．SB6173・6175
重複状況　南から

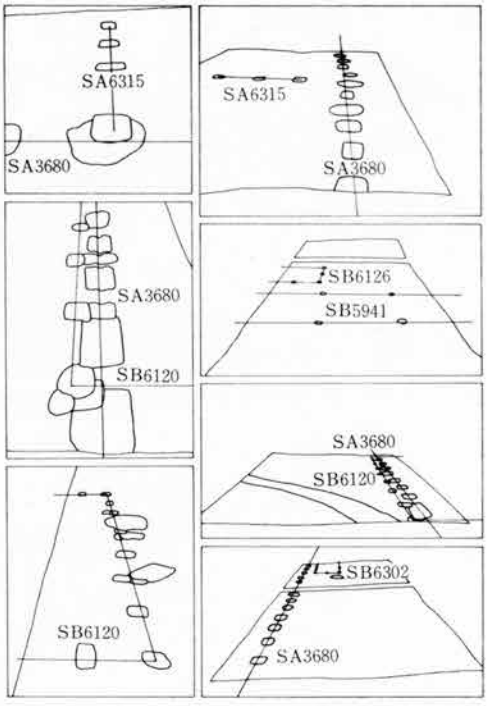

SB6187
SB6188
SA6186
SB6195
SB6381
SB6190
SB6180
SB6188
SA6186
SB6187
SB6173
SB6175
SD6181
SA6186
SB6180
SB6187
SB6173
SB6175
SB6171

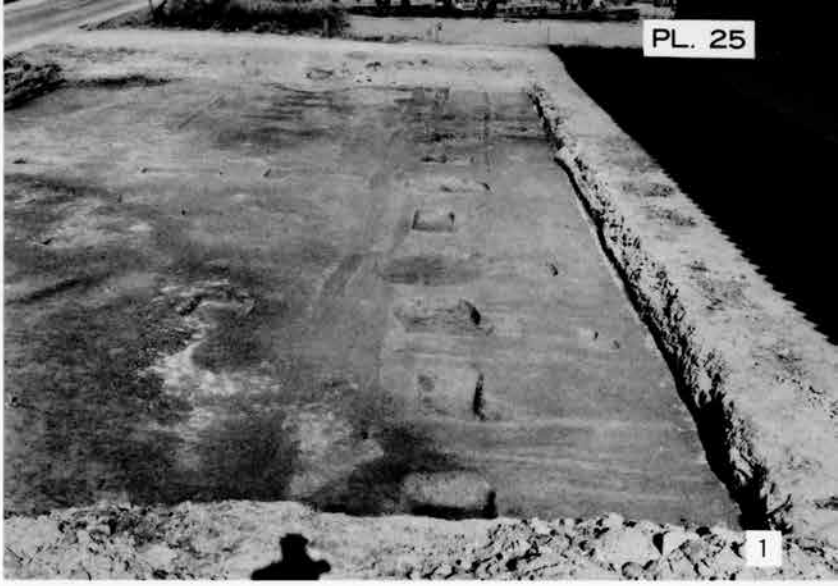
1．SB6187・6188・6191重複状況
西から

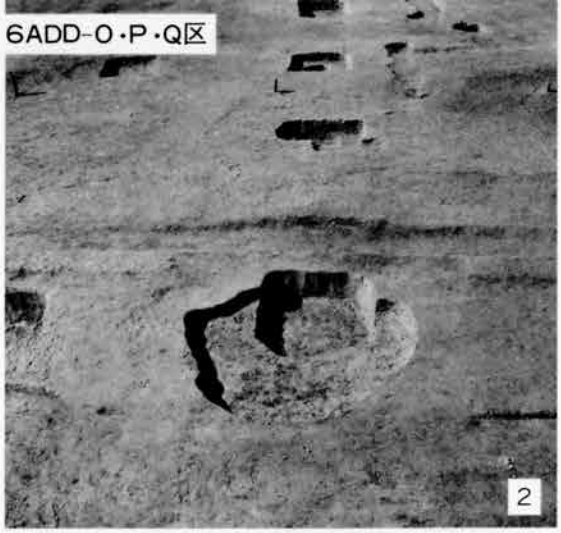


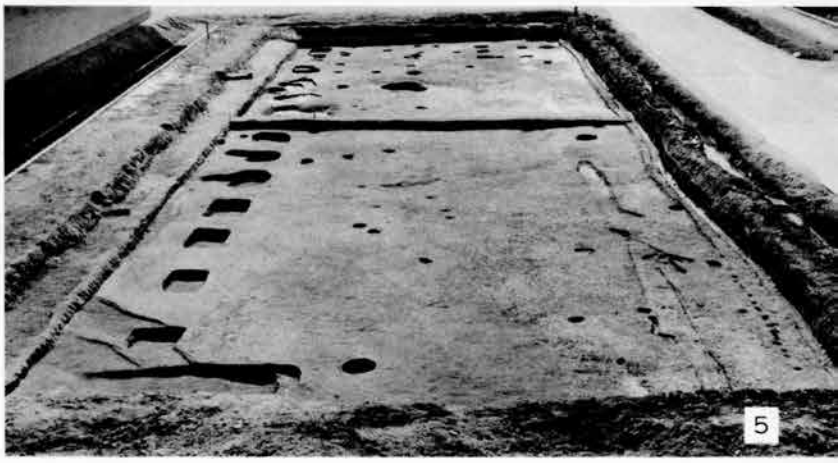
2．同上　東から

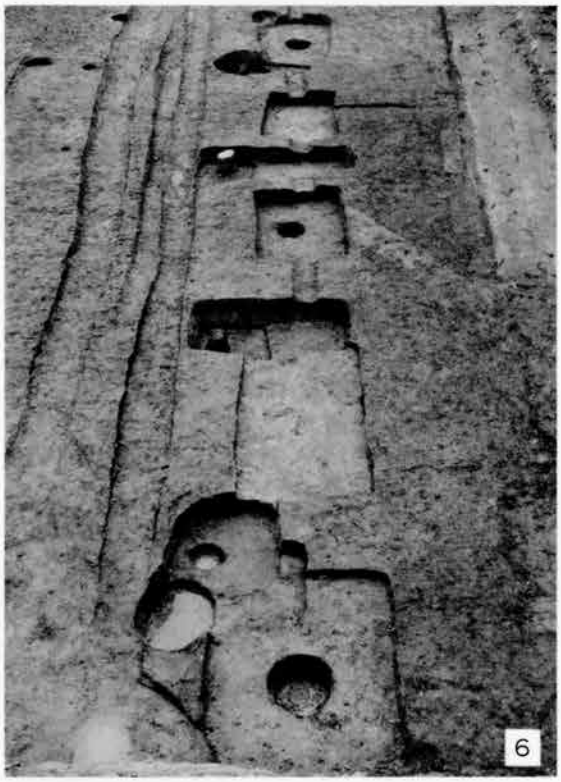
3．SD6181とその南北の建物群
東から


SA6315
SA3680
SA6315
SA3680
SA3680
SB6120
SB6126
SB5941
SA3680
SB6120
SB6120
SB6302
SA3680

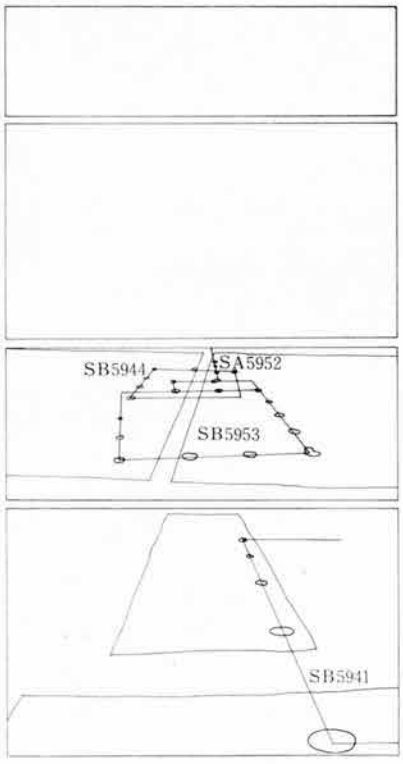








1．南北塀SA3680と東西塀SA6315　南から
2．SA6315　東から
3．第51次調査区北張出部全景　南から
4．第59次南北半全景　南から
5．同上　南半全景　北から
6．南北塀SA3680とSB6120の重複状況　南から
7．第Ⅱ期建物SB6120　南から

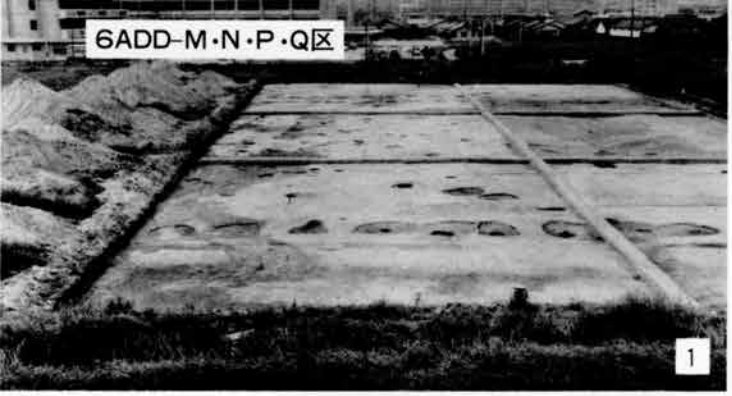

SB5944
SA5952
SB5953
SB5941

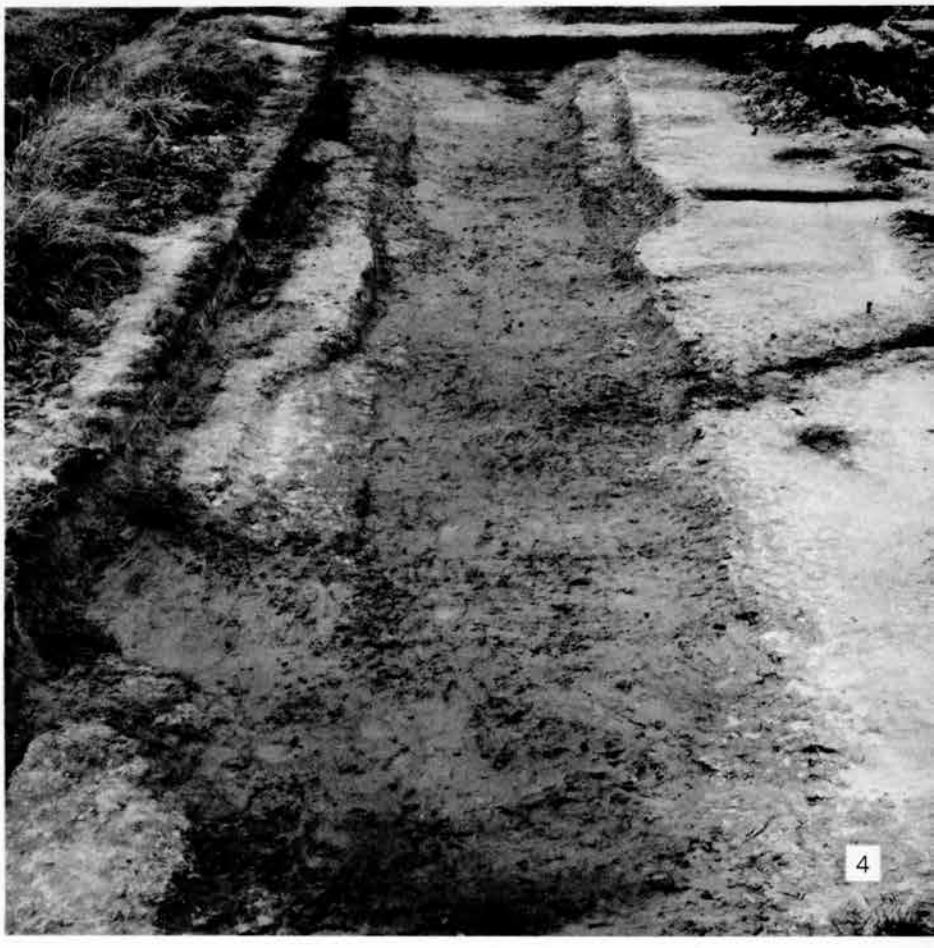
1．第47次調査区全景
東から

2．南北塀SA5950と
馬寮東官衙西限溝
SD5960　北から

3．SB5952・5953等
宮廃絶後の小規模建物群
北から

4．SB5941北側柱列
東から

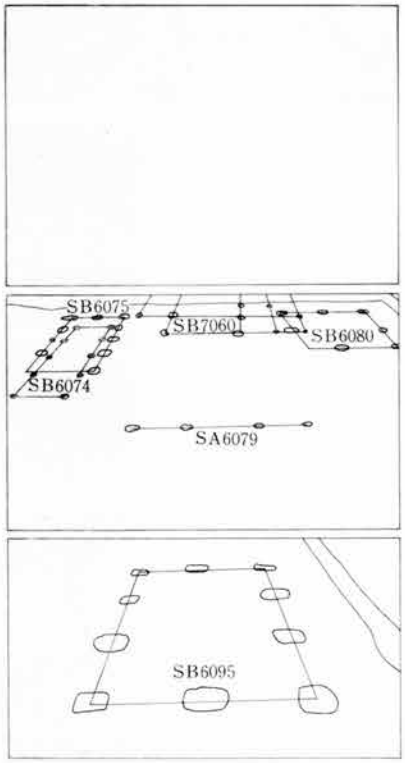




1・2．第50次調査区全景
東から

3．南北塀SA5950
北から

4．南北溝SD5960と土壙SK6098
の交点　北から


SB6075
SB7060
SB6080
SB6074
SA6079
SB6095

1．第50次調査区北部中央
西から

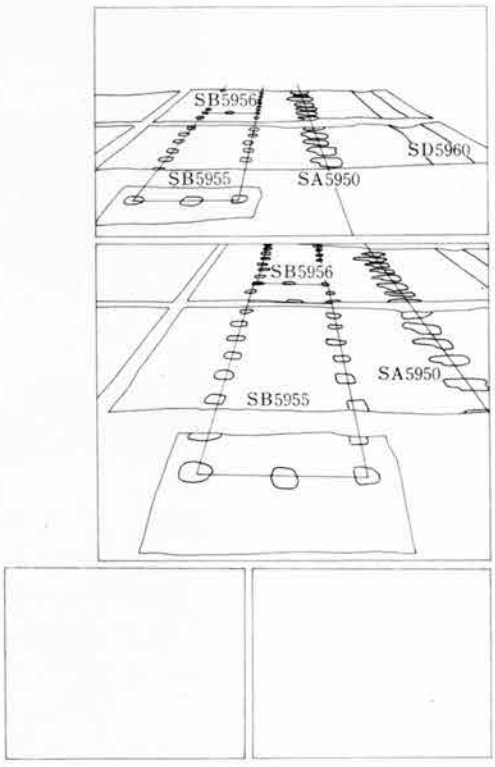
2．SB6075・6080等
宮廃絶後の小規模建物群
北から

3．SB6095 西から

1．第51次調査区東部全景　西から

2．南北溝SD5960と土壙
SK6098の交点　南から

3．南北塀SA5950
南から

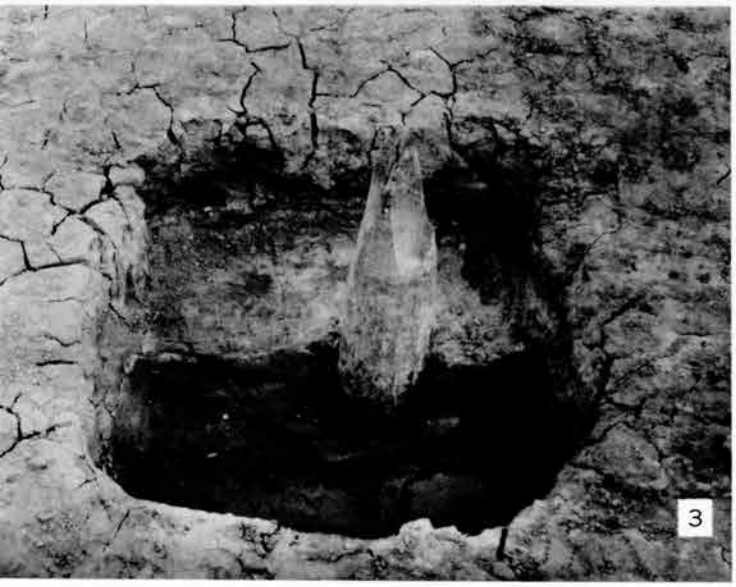

SB5956
SD5960
SB5955
SA5950
SB5956
SA5950
SB5955

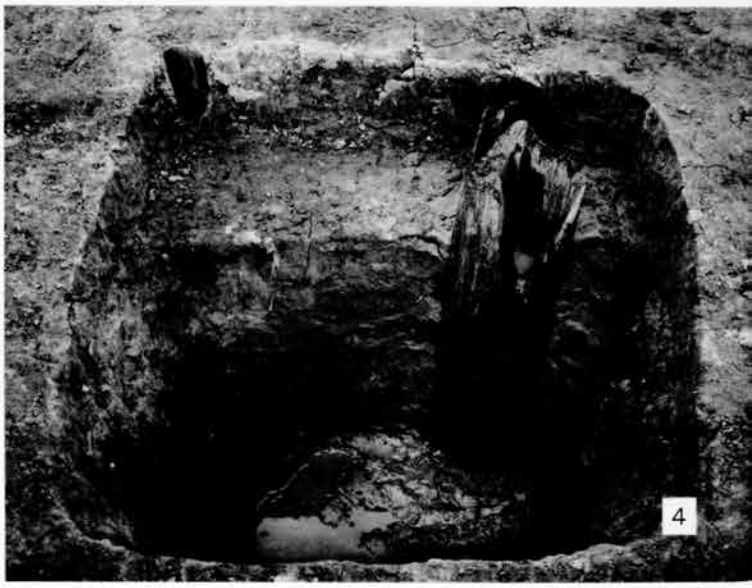
1．第Ⅱ期馬房SB5955・5956と南北塀SA5950　南から

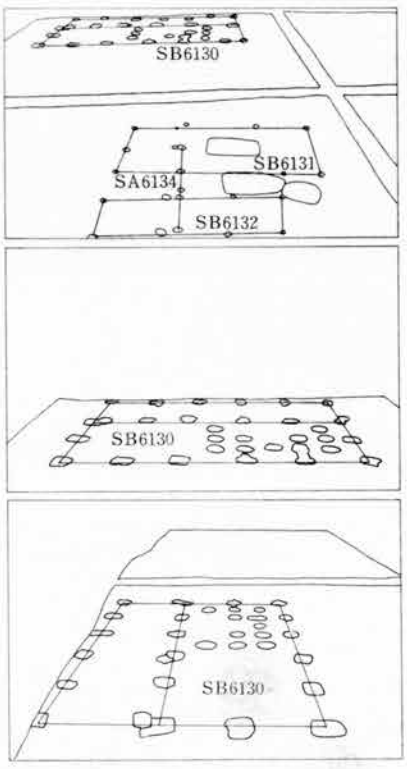
2．同上　細部　南から

3．SB5955の柱根　南から

4．同上　南から



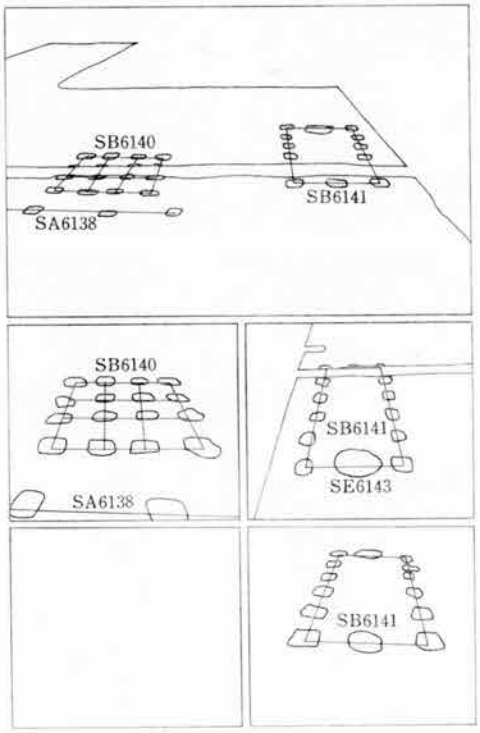


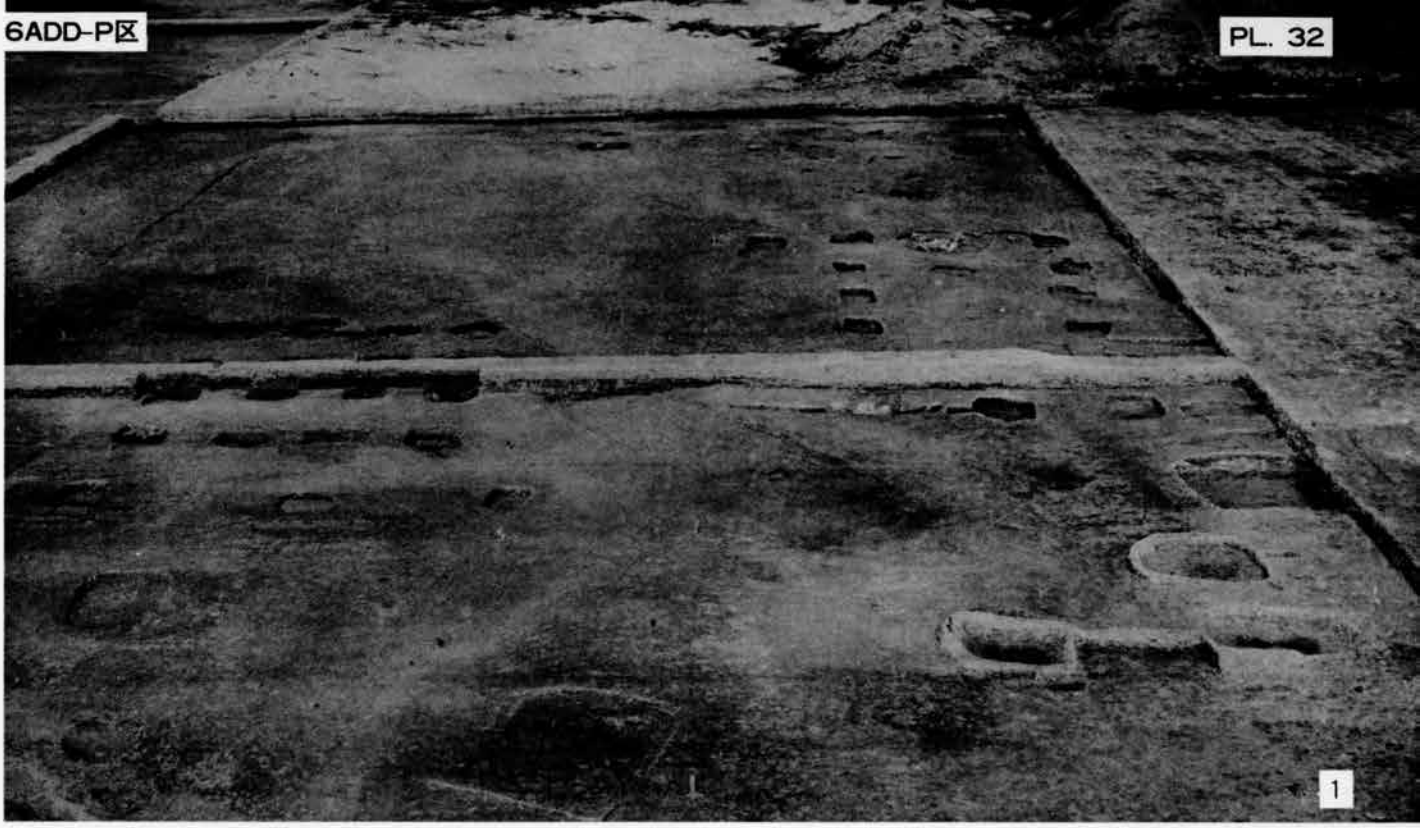

SB6130
SB6131
SA6134
SB6132
SB6130
SB6130

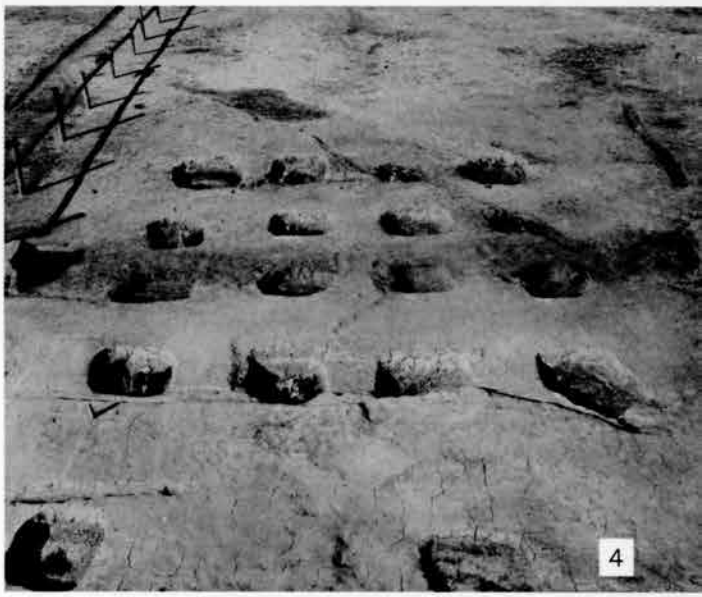
1．SB6130南方の
小規模建物群
SB6131～6134
南から

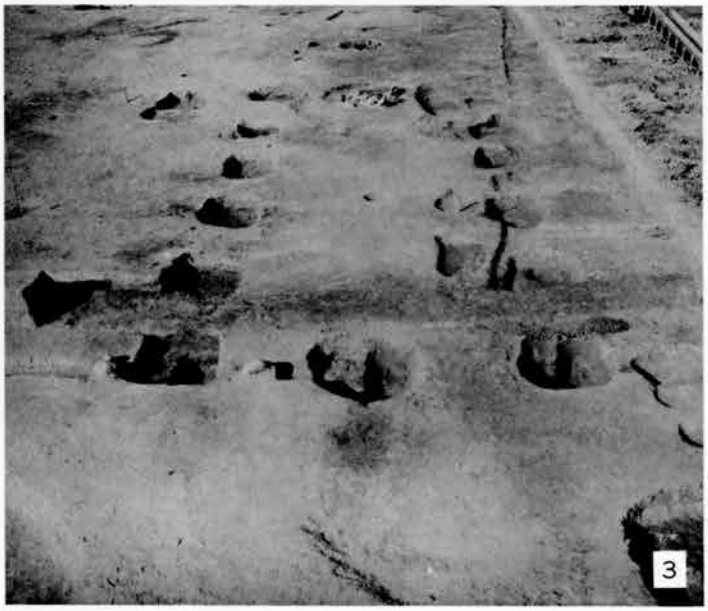
2．第Ⅴ期南半部正殿風
建物SB6130　南から

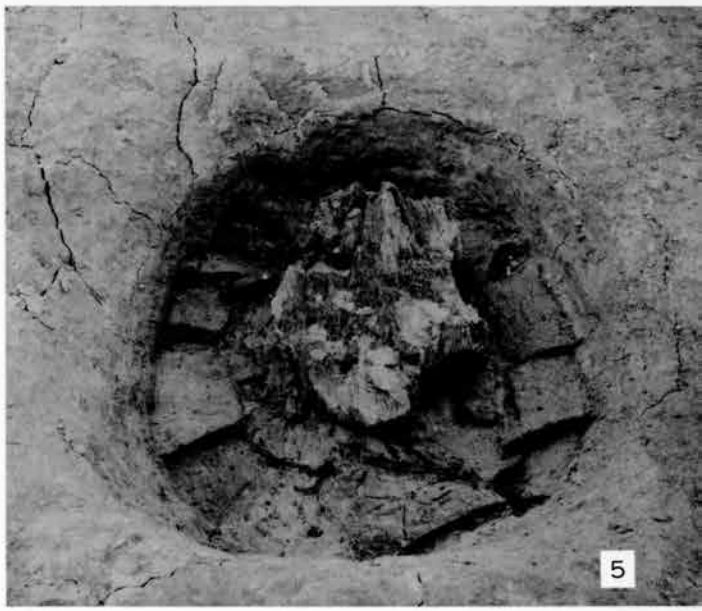
3．同上　西から


SB6140
SB6141
SA6138
SB6140
SB6141
SE6143
SA6138
SB6141

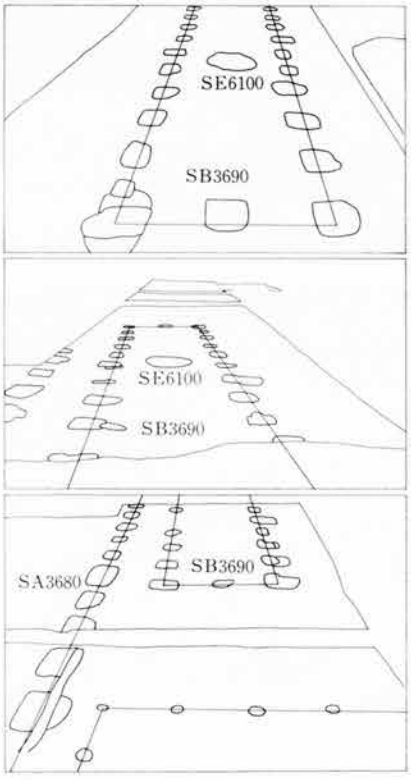








1．第Ⅴ期脇殿風建物SB6141と第Ⅱ期倉庫SB6140　南から
2．SB6141　北から　　3．同左　（アゼ除去後）　北から
4．SB6140　南から　　5．同左　柱根


SE6100
SB3690
SE6100
SB3690
SA3680
SB3690

1．第Ⅳ期馬房SB3690
北半部　北から

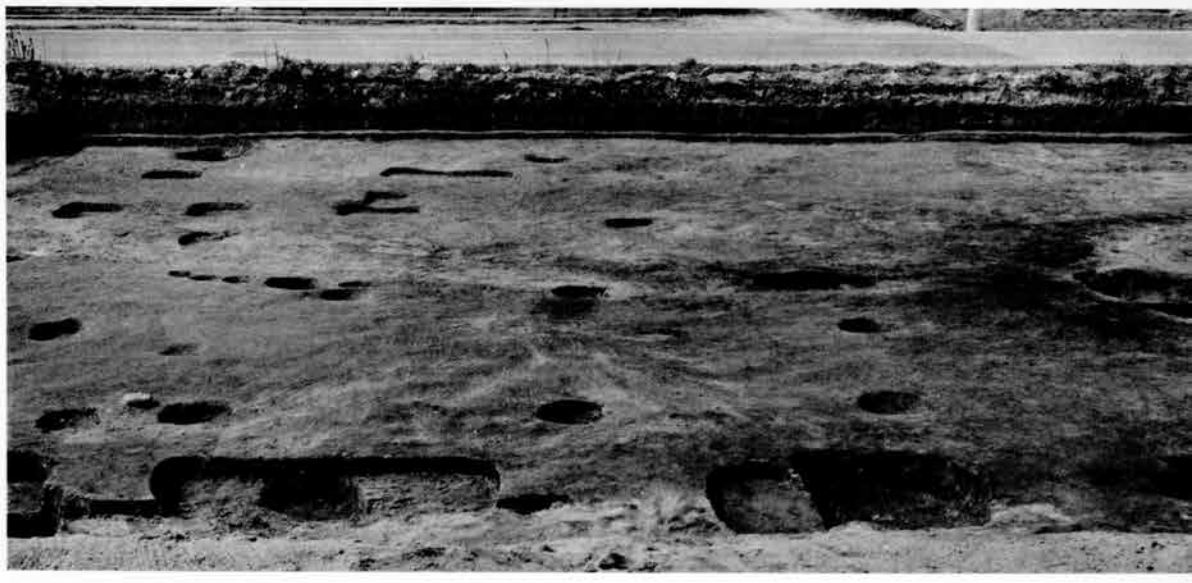
2．同上　南から

3．SB3690南半部
南から

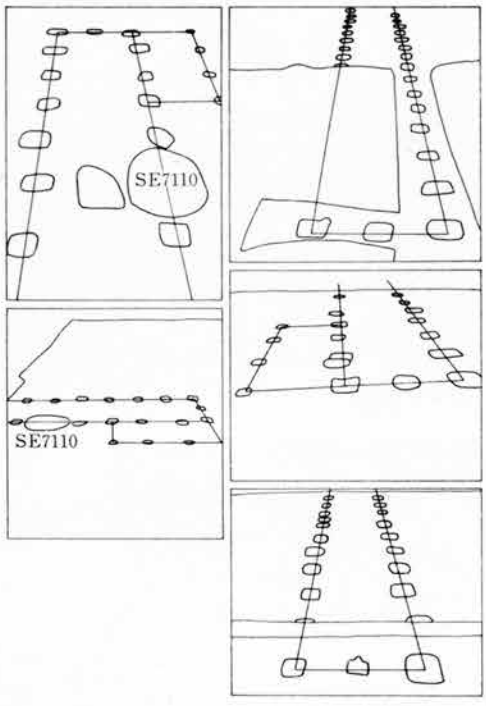
SA1600基壇
SB6102
SB6101
SB6104
SA3680
SB3690
SS6107
SB6106
SB6302
SA3680

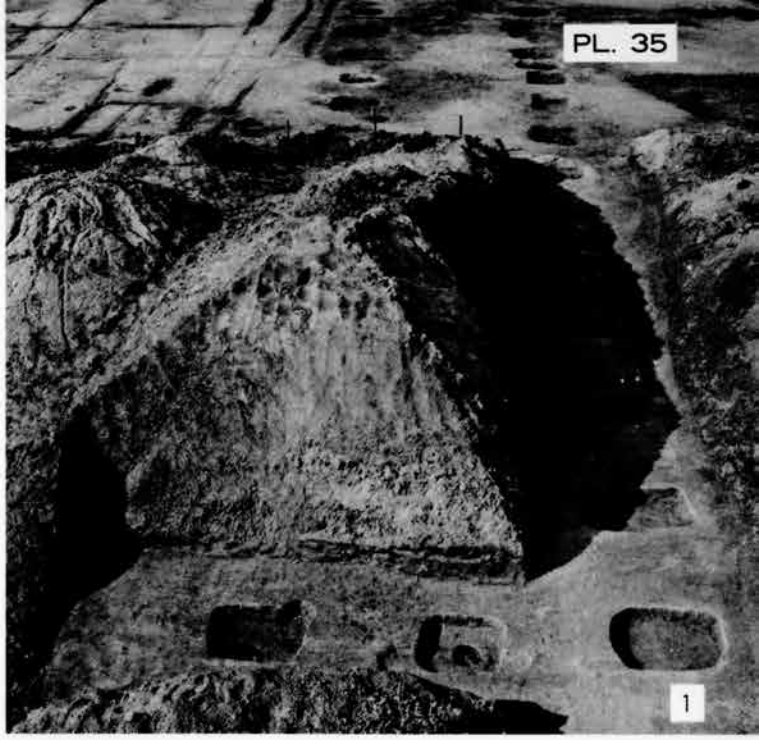
1．第51次調査区西半部全景
北から

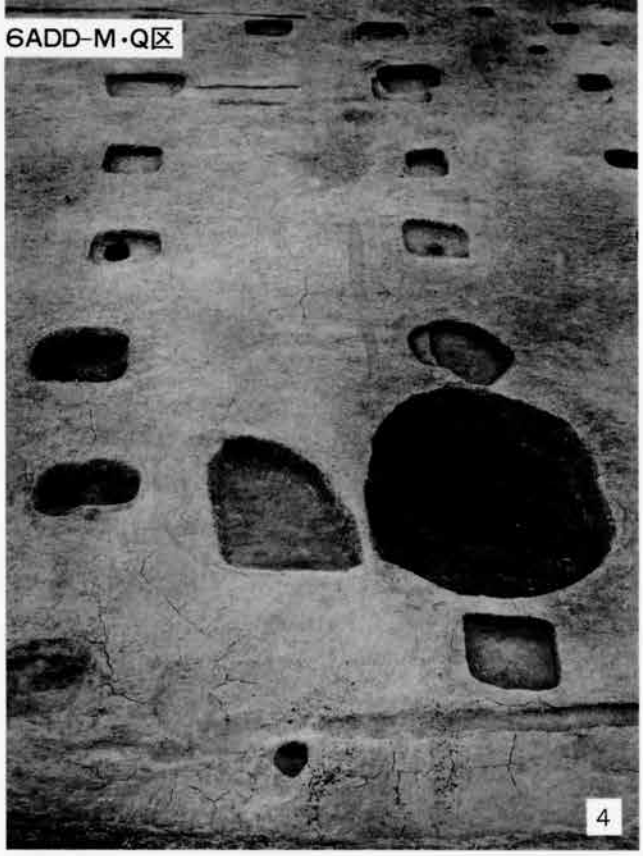
2．南北塀SA3680とその
東西にある小建物群
SB6101・6102
東から

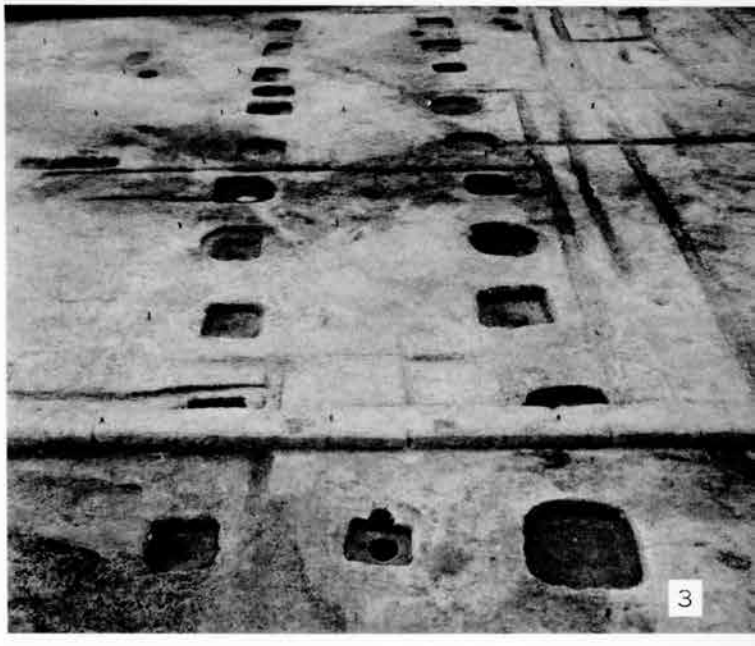


3．南北塀SA3680と
建物SB6302　東から


SE7110
SE7110







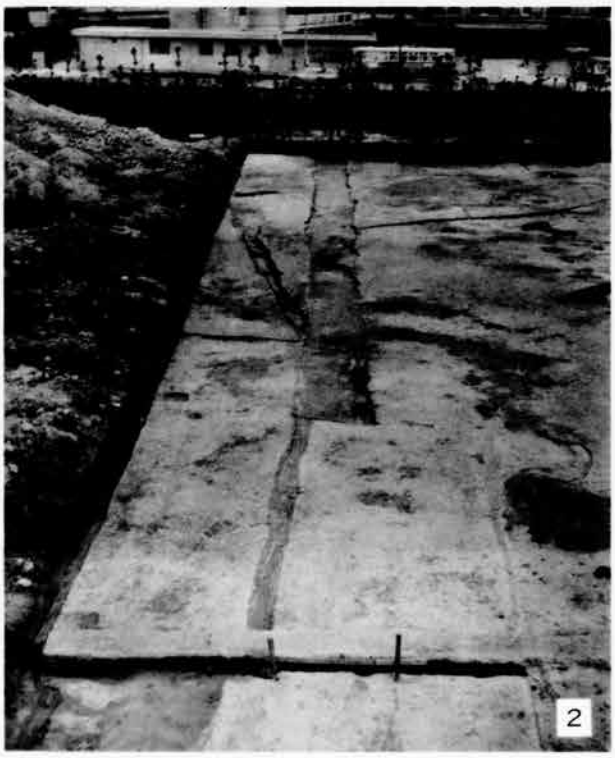
第Ⅳ期馬房SB6100

1．全景　南から
2．南半部と西廂　南から
3．北半部　北から
4．南半部と西廂　北から
5．同上　西から

1．第Ⅰ期地割溝SD6980
全景　東から

2．同上　西半部　東から

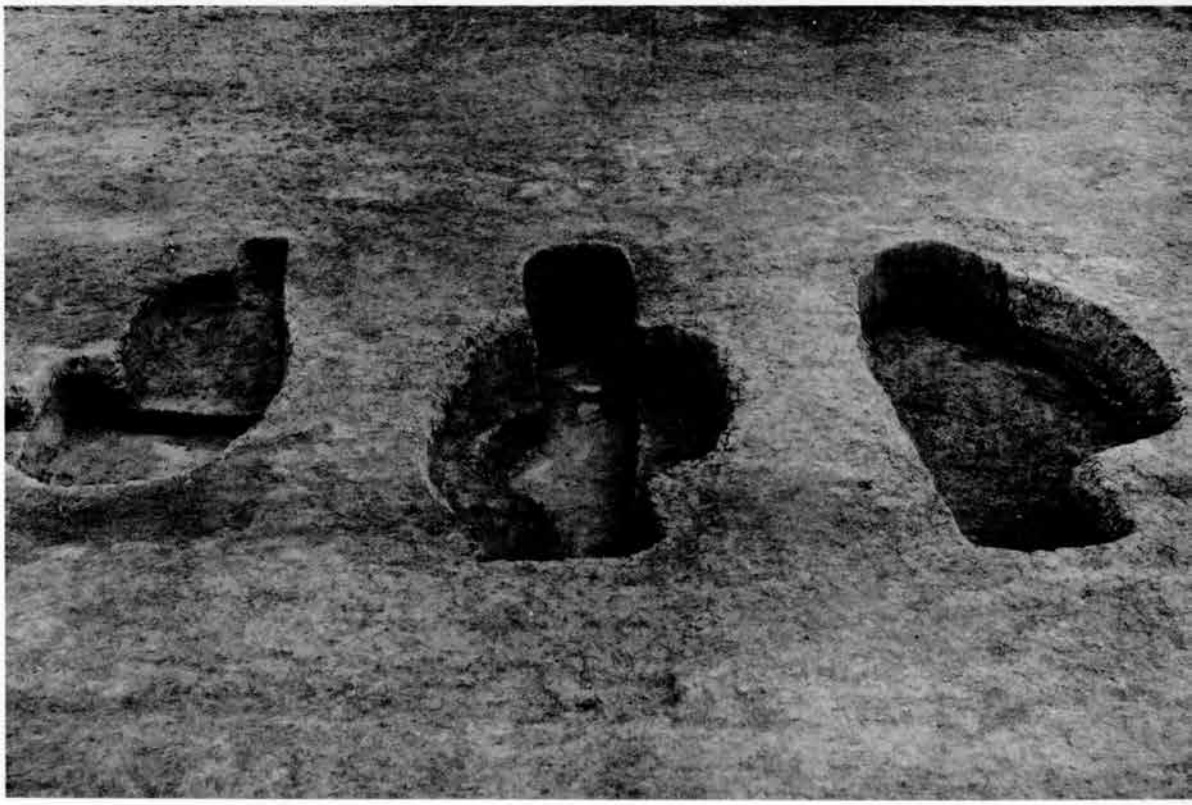
3．馬寮東官西衙限溝
SD5960南端屈曲点
（断割後）　東から



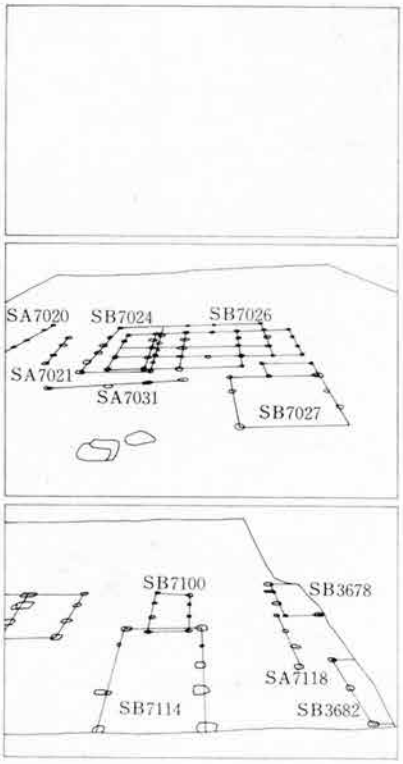
1．南北塀SA5950南端部
南から

2．同上　北から

1．南北塀SA5950南端部
北から



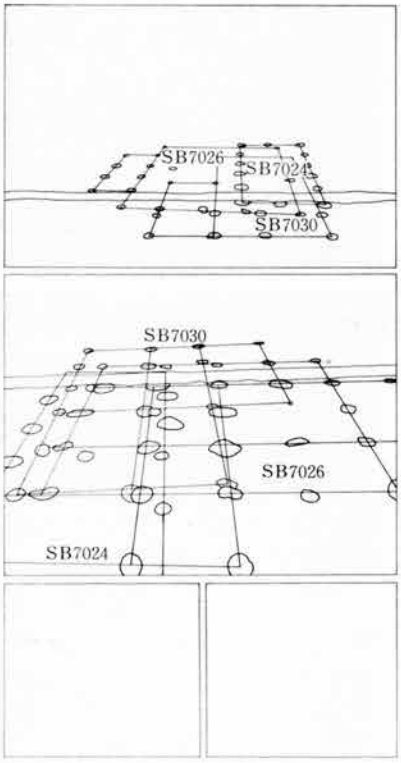
2．同上　南から七・八間目
細部　西から


SA7020
SB7024
SB7026
SA7021
SA7031
SB7027
SB7100
SB3678
SA7118
SB7114
SB3682

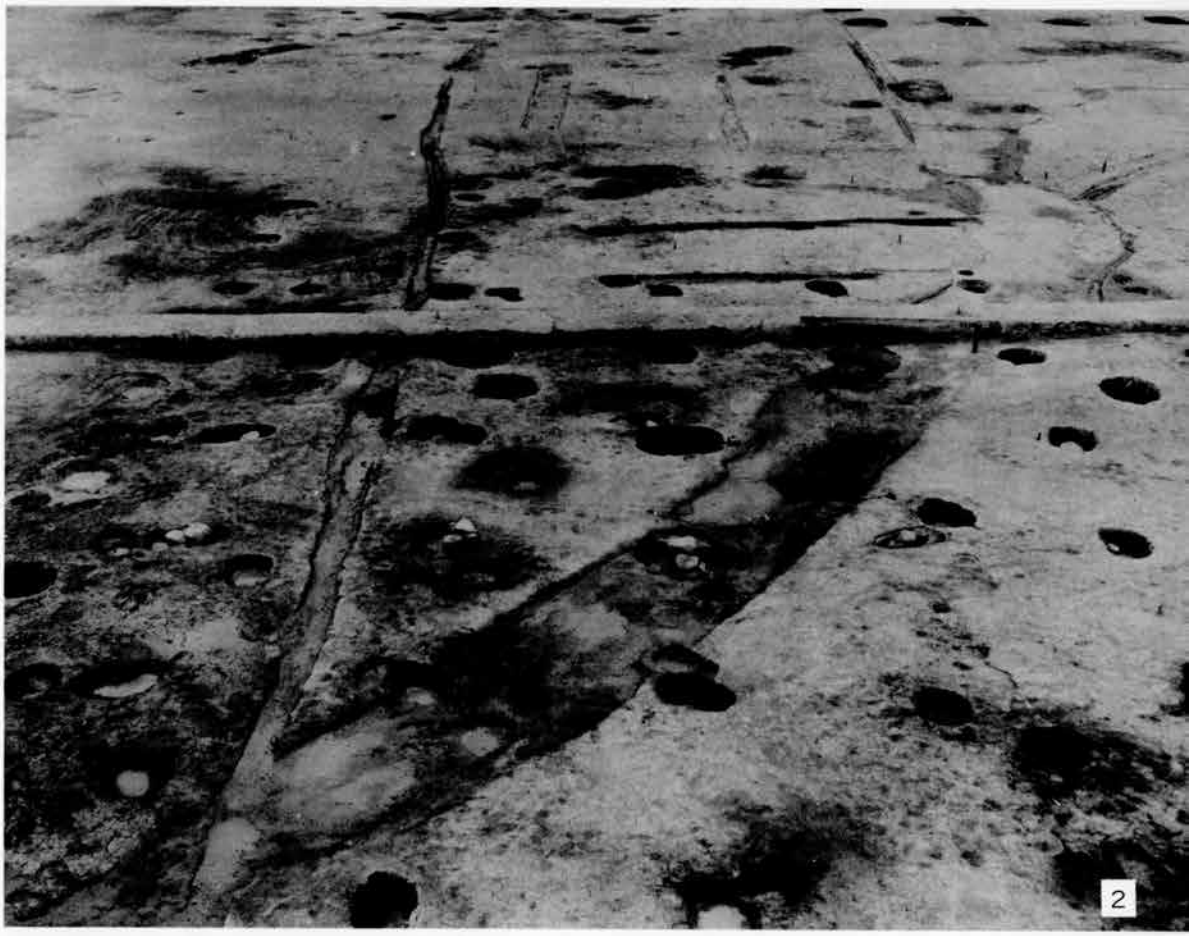
1．第71次調査区全景
東から

2．宮廃絶後小規模建物群
SB7024・7030等
東から

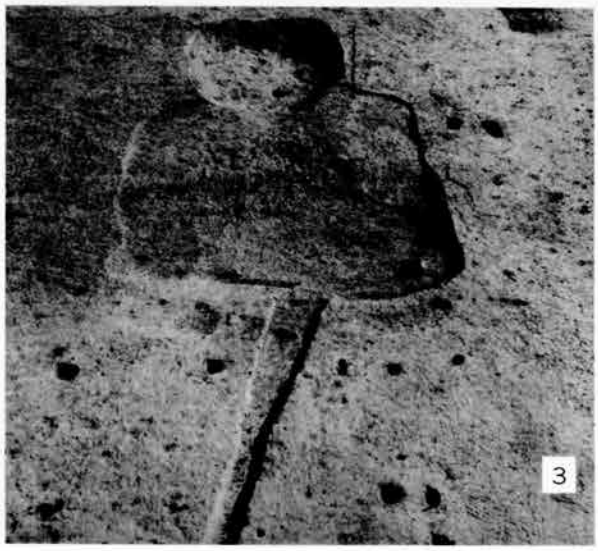
3．SB7114等宮廃絶後の
外規模建物群
北から


SB7026
SB7024
SB7030
SB7030
SB7026
SB7024

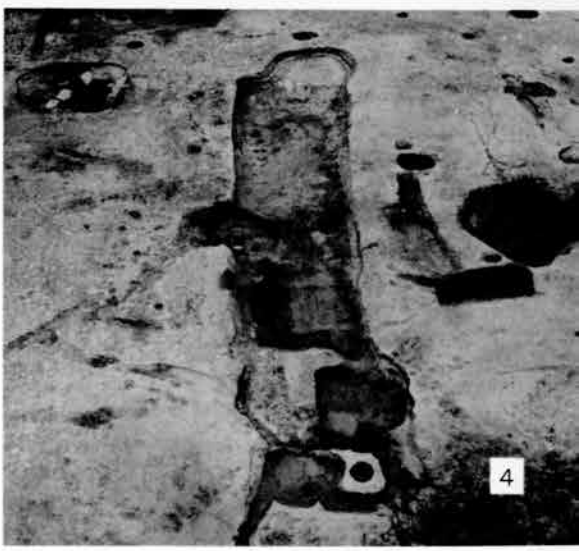
1．宮廃絶後小規模建物群
SB7024・7026・
7030等 西から



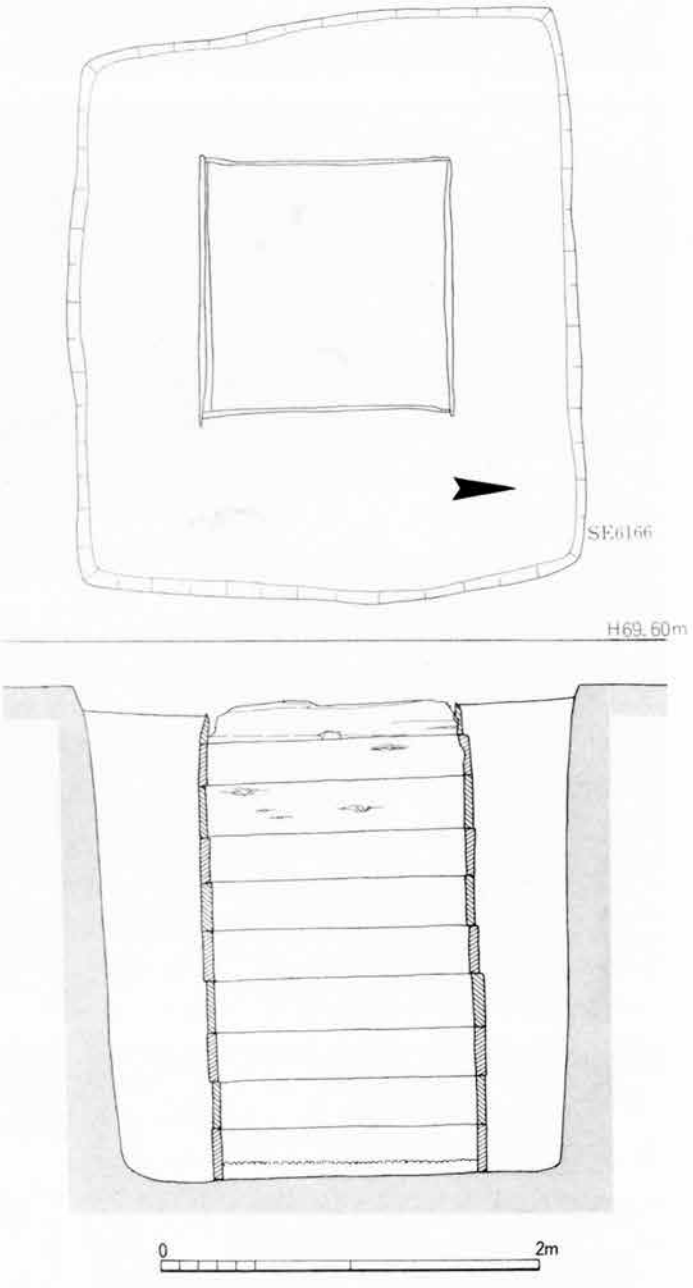
2．同上 細部
東から

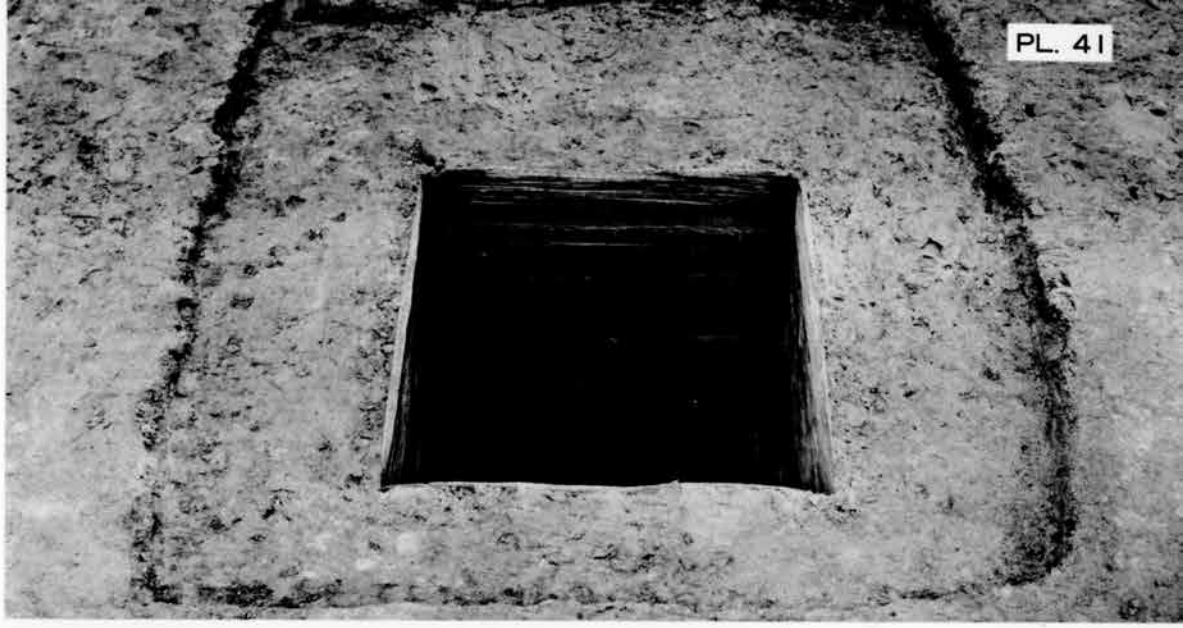


3．平安時代土壙
SK7040・7041
北から

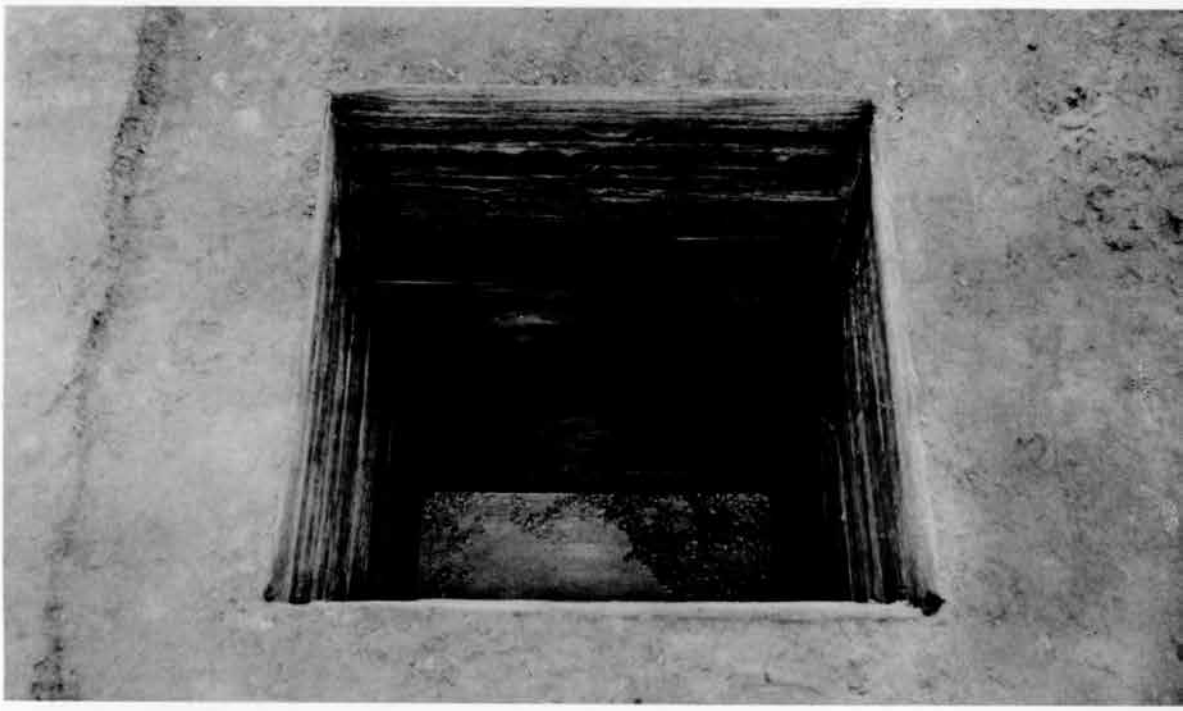


4．SK7097 東から


SE6166
H69.60m
0
2m

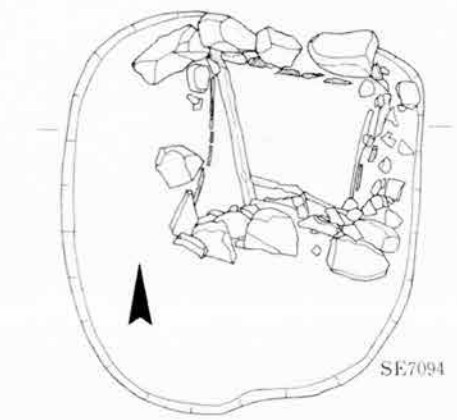


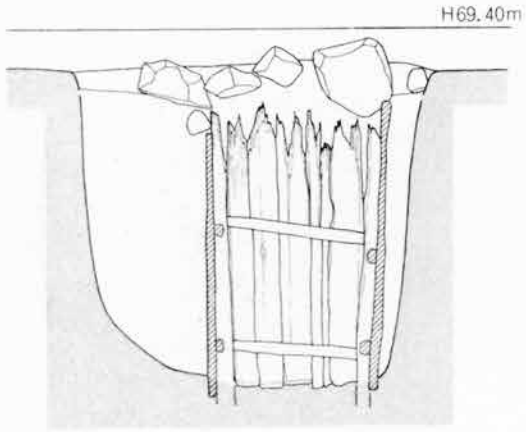
1．井戸SE6166全景
西から

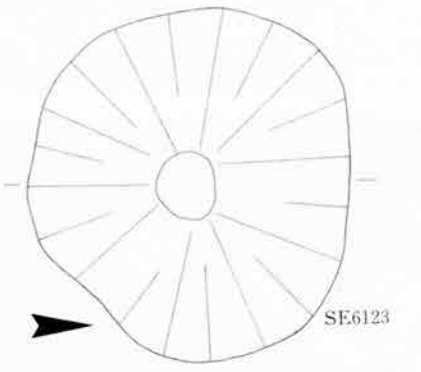


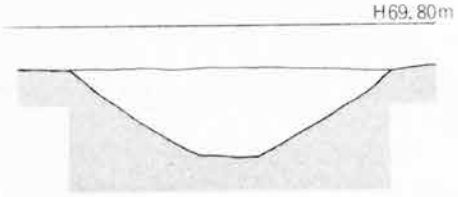
2．同上　南から

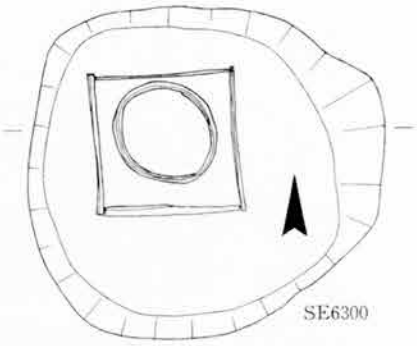
3．同上
東南隅井戸枠組方の状況

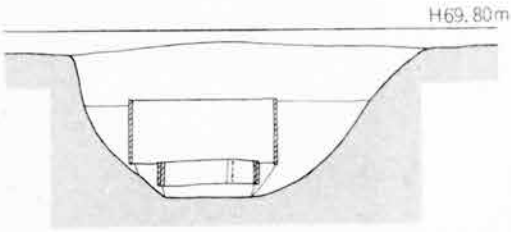

SE7094


H69.40m

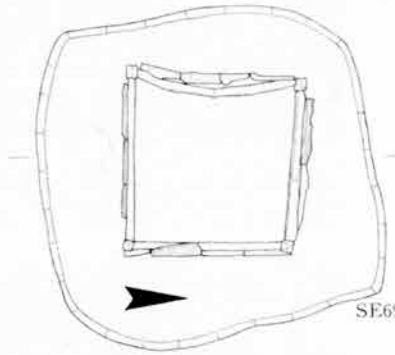

SE6123

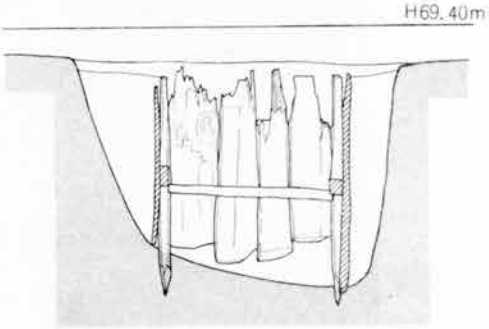

H69.80m

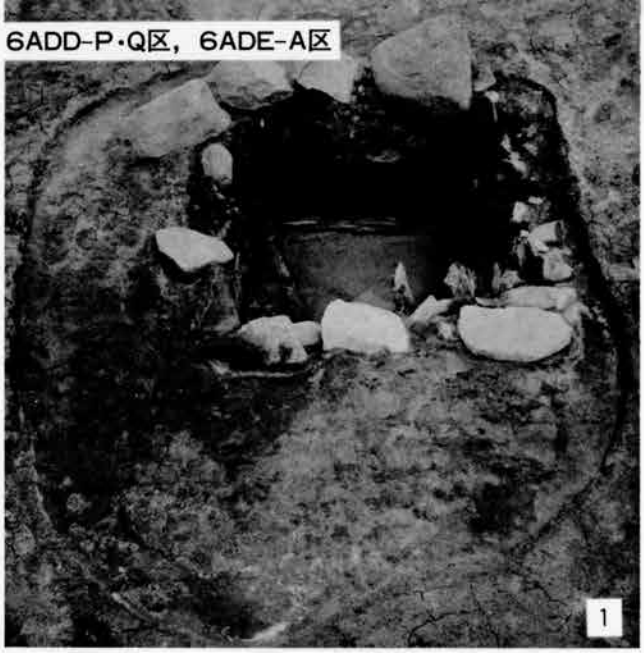

SE6300

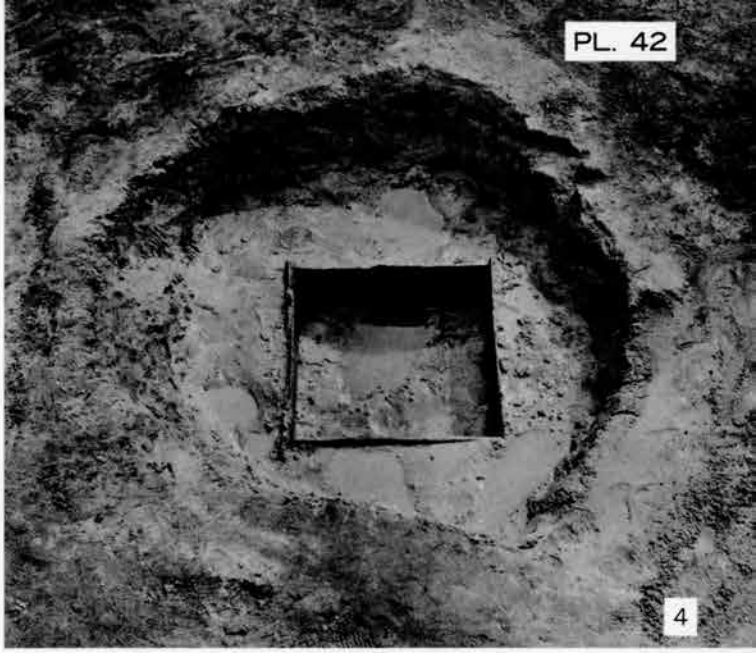

H69.80m

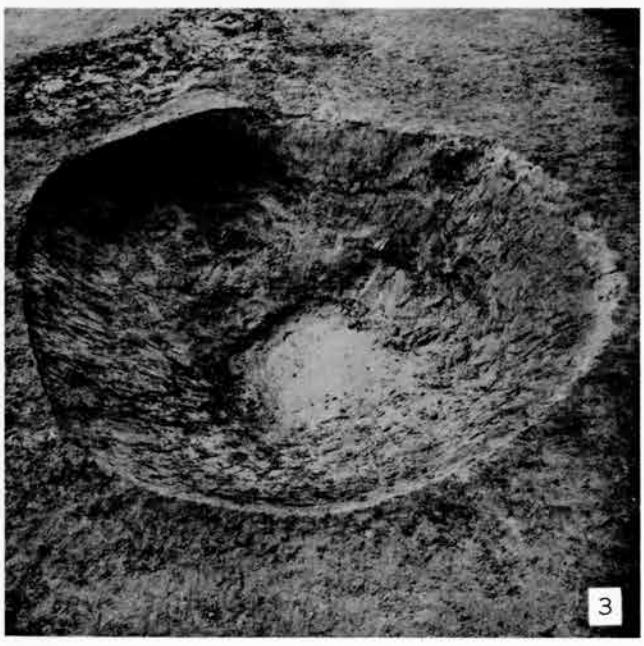
0
2m


SE6988


H69.40m







1．井戸SE7094全景　南から

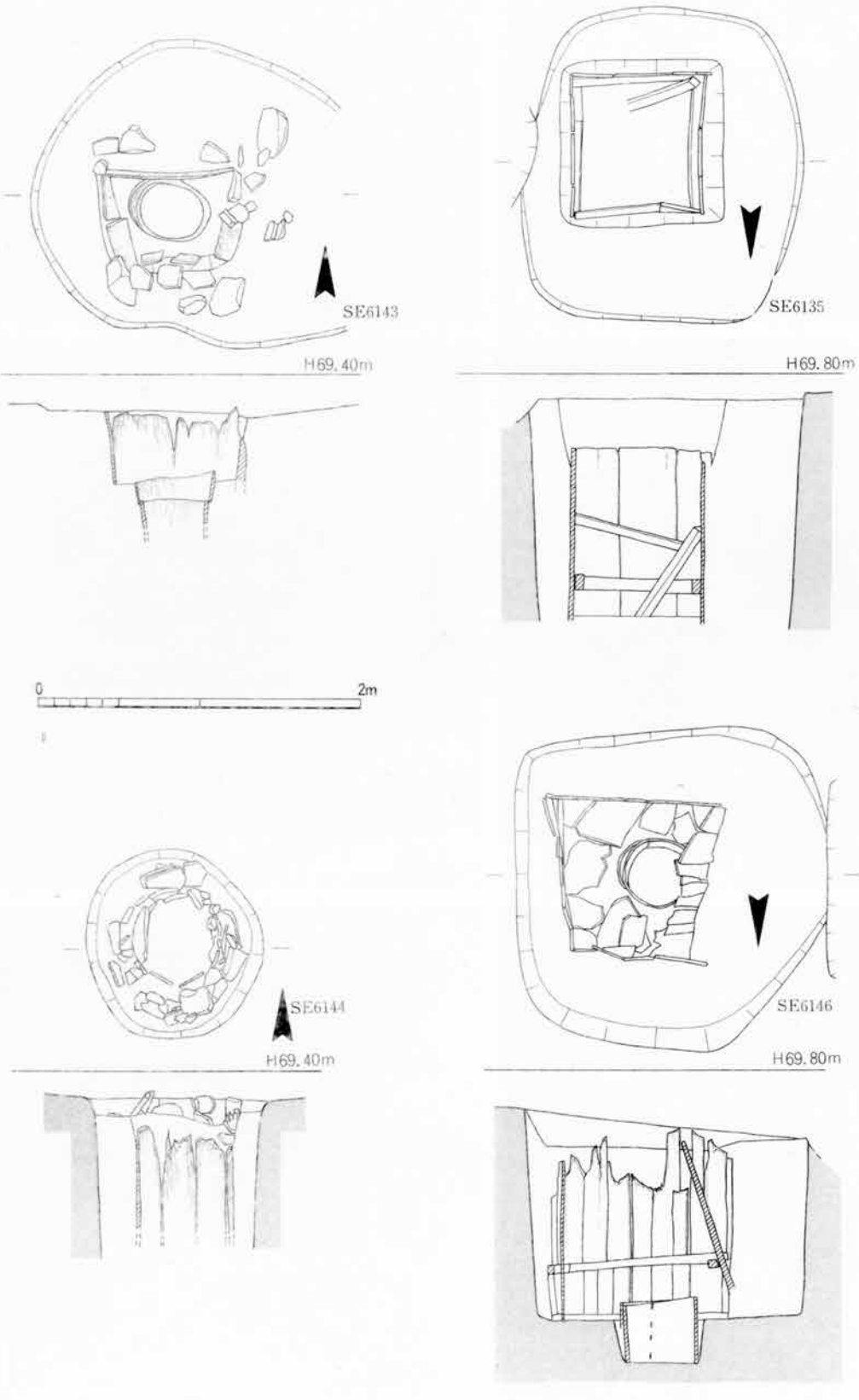
2．同上細部　東から

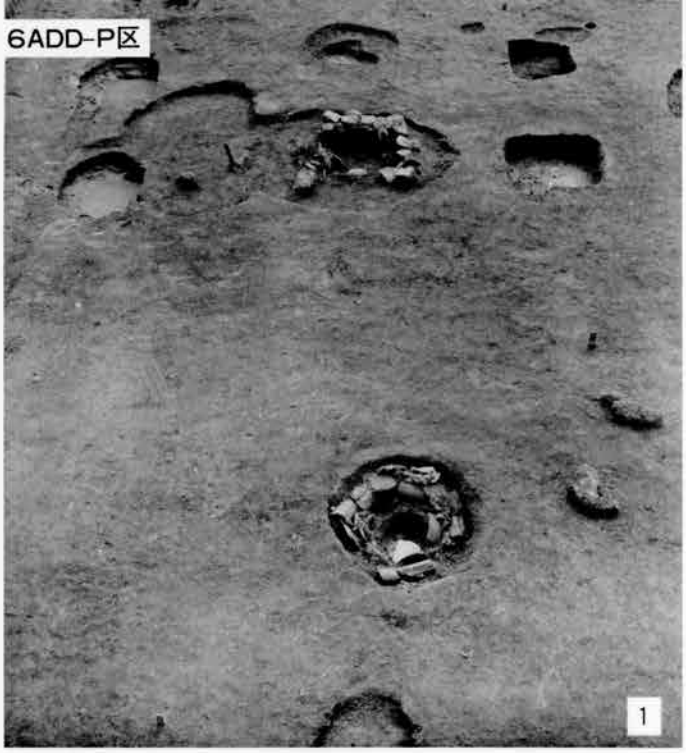
3．井戸SE6123　東から

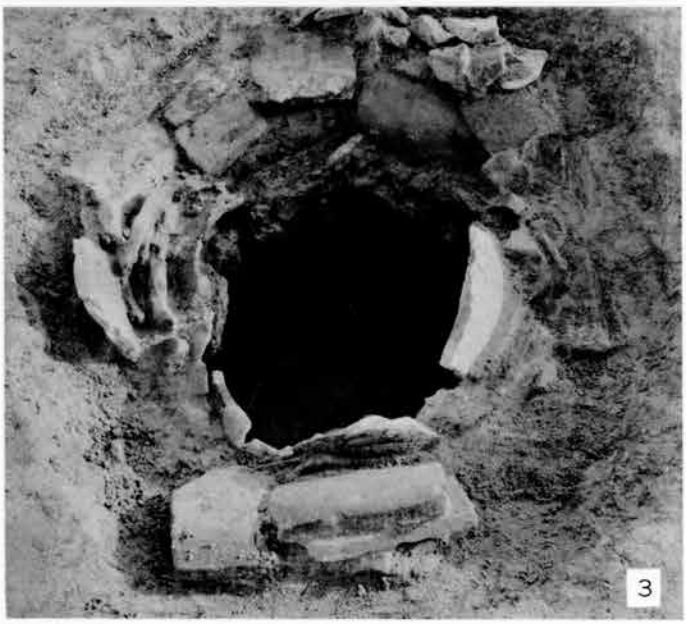
4．井戸SE6300　北から

5．井戸SE6988全景　東から

6．同上細部　北から


SE6143
H69.40m
SE6135
H69.80m
0
2m
SE6144
H69.40m
SE6146
H69.80m

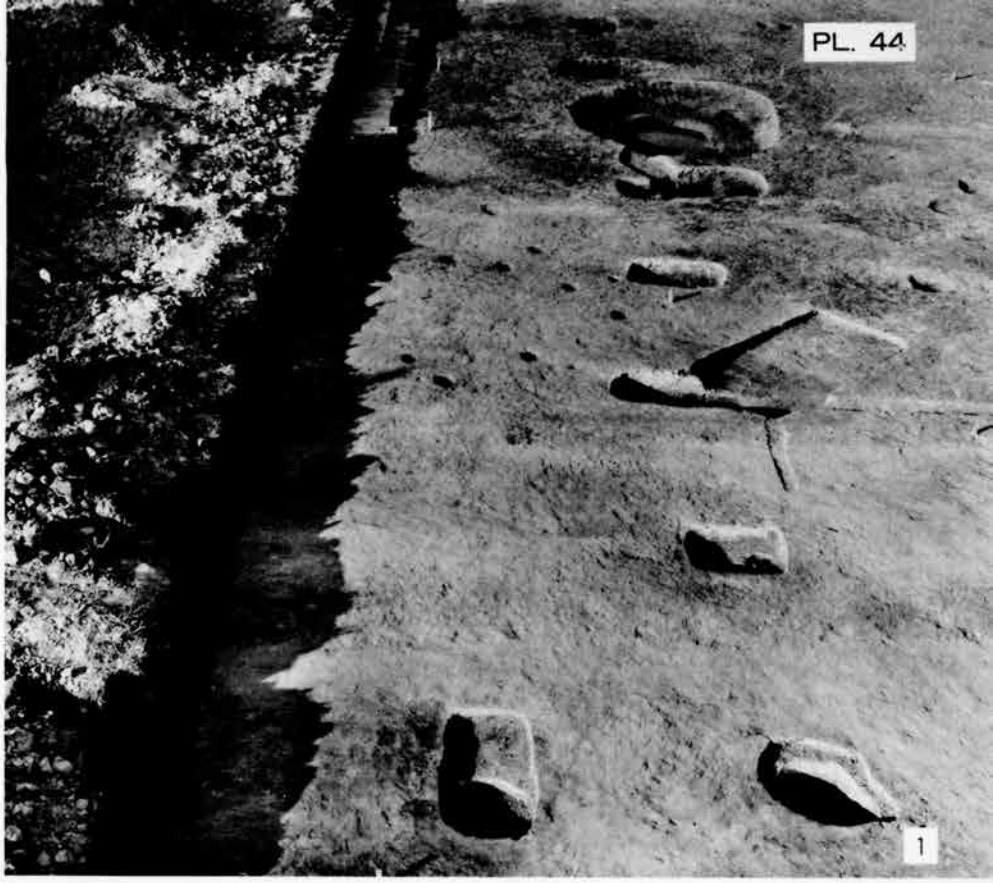




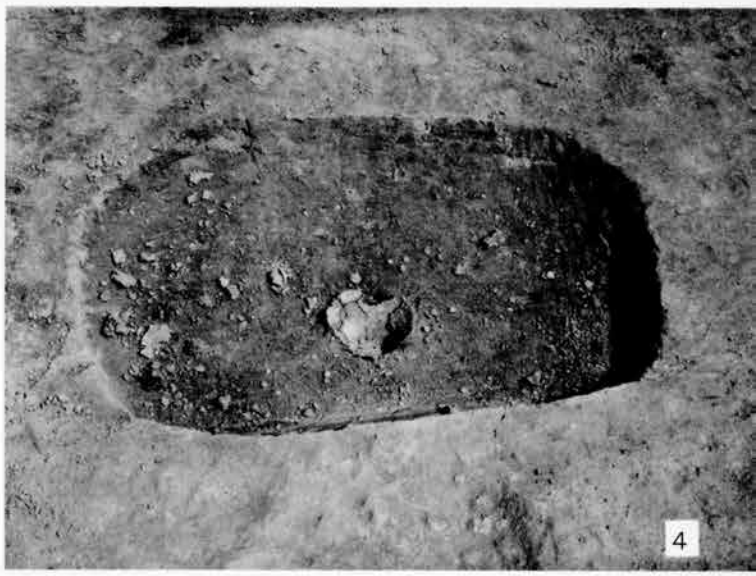
1．井戸SE6143（上）・SE6144（下）　北から
2．SE6143細部　東から
3．SE6144細部
4．井戸SE6135（右）・SE6146（左）　西から
5．SE6135細部　東から
6．SE6146細部　北から

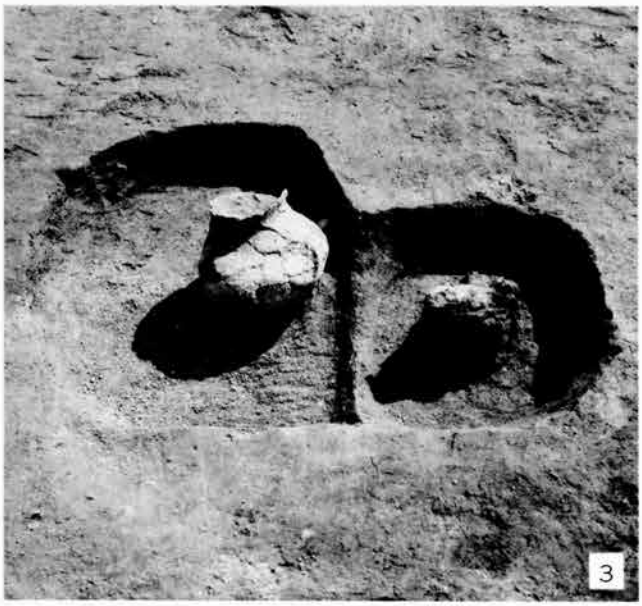
弥生時代の遺構

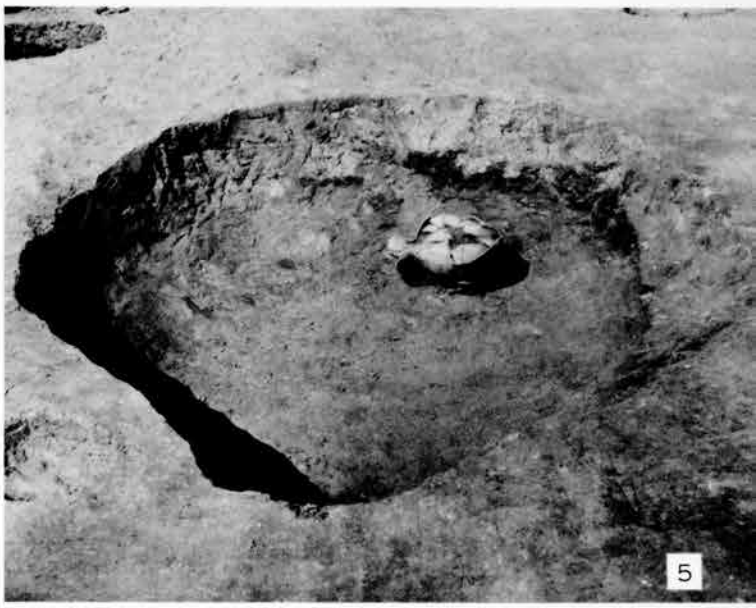
1. 住居SB6122・土壙SK6121と奈良時代建物SB6120の重複状況　南から
2. SB6122　東北から
3. 土壙SK7124　西から
4. 土壙SK7123　北から
5. 土壙SK7101　北から

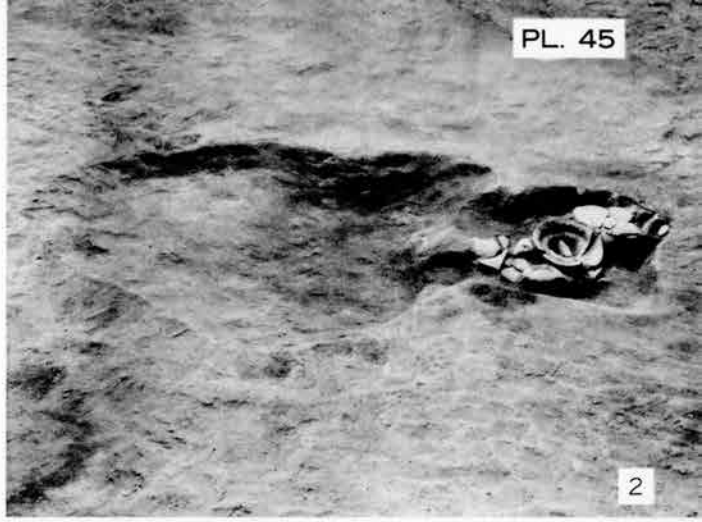

1

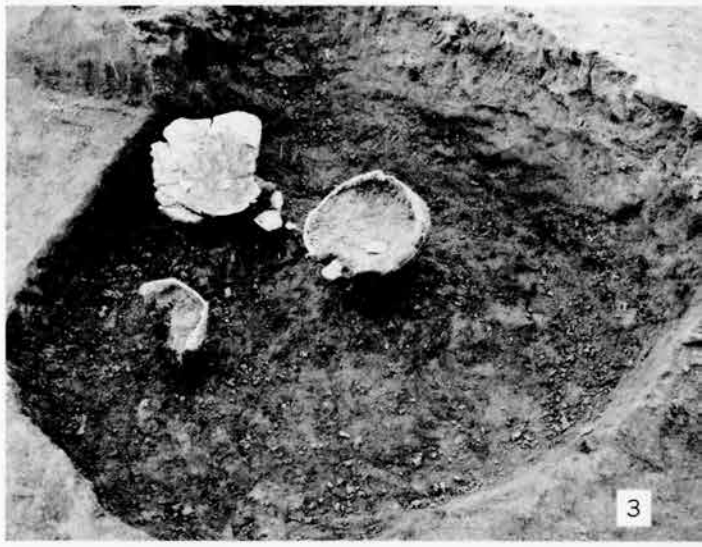
2


4


3


5





古墳時代の遺構

1．土壙SK7080・7088を
中心とした小穴群　東から

2．土　壙SK7088　北東から

3．土　壙SK7098　東から

4．溝SD6060北部　南から

5．同　上　中央部　西北から

2
志摩國志摩郡手節里戸主大伴部□人〔荒ヵ〕□□
□藻根二斗
和□□五年四月廿日

3
阿波國阿波郡秋月鄉庸米物部小龍一俵

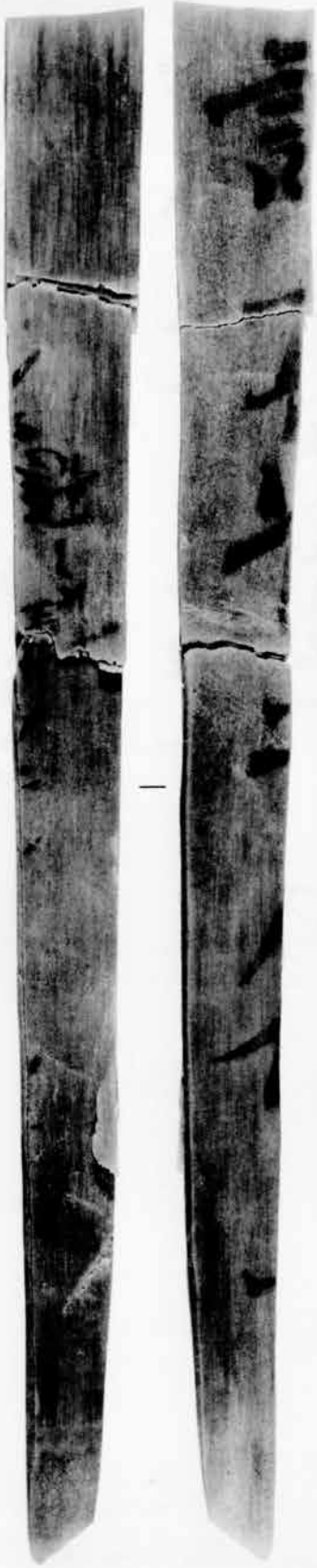
1
・詰□□□□□□
・「□〔総々齬〕□□□」

9
・嶋掃進□
・□以移□

8
・□進兵士四人依人□
・□以移□

9

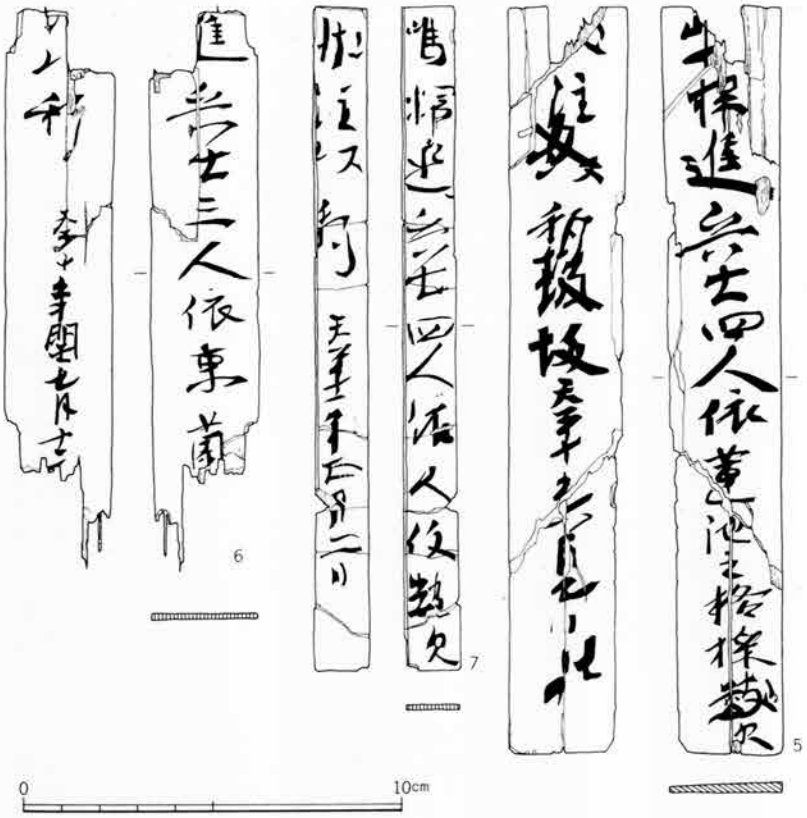
8



1

3

2



5
・〔嶋カ〕□掃進兵士四人依蓮池之格採數欠
・〔状カ〕(異筆)□注「坂」以移〔異筆〕「坂坂」天平十年六月九日

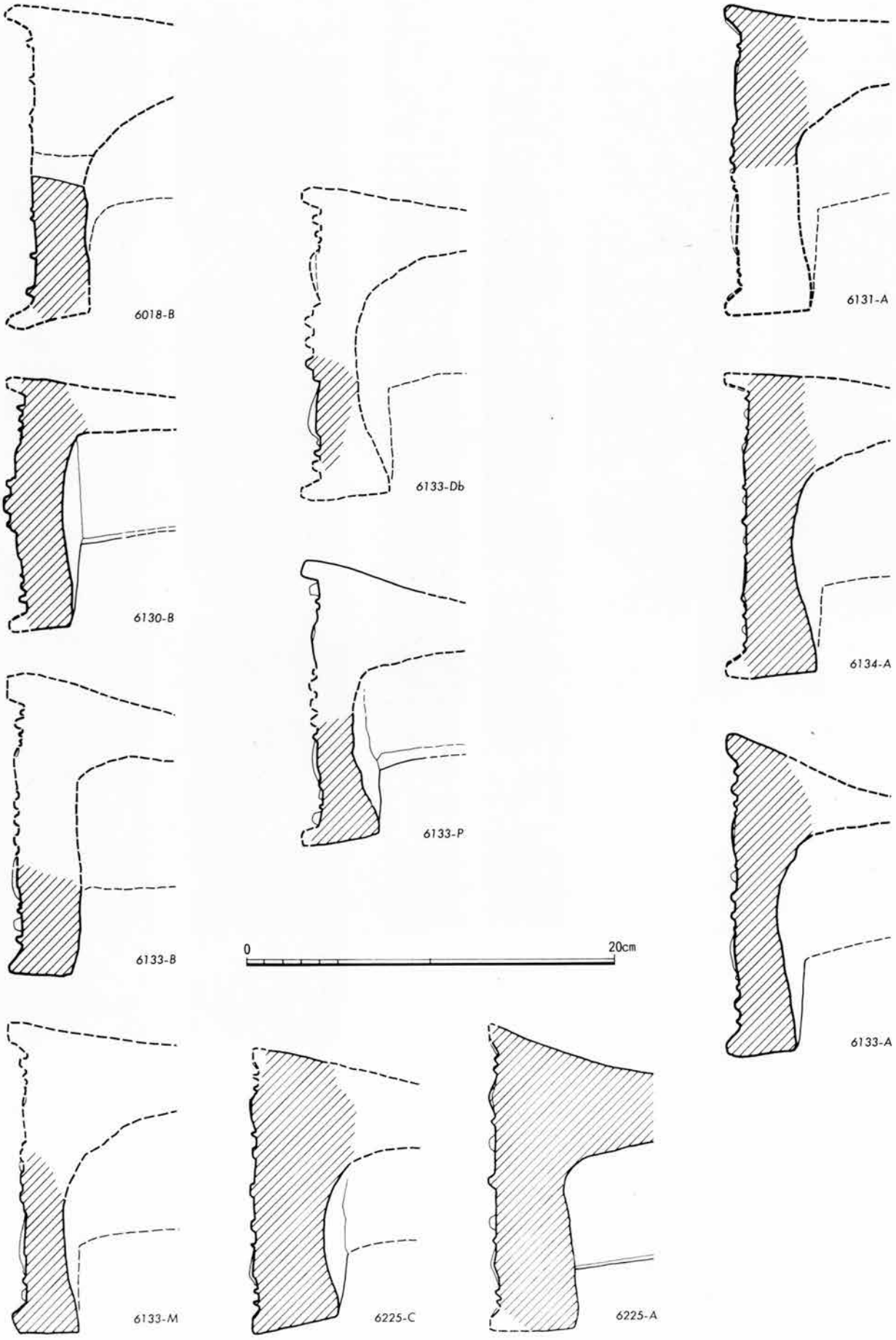
7
・嶋掃進兵士四人依人役數欠
・状注以移　天平十一年正月三日

6
・□進兵士三人依東薗□
・□以移　天平十年閏七月十二□

6

7

5


6018-B
6133-Db
6131-A
6130-B
6133-P
6134-A
6133-B
0
20cm
6133-A
6133-M
6225-C
6225-A

6018B

6131A

6130B

6134A

6133B

6133Db

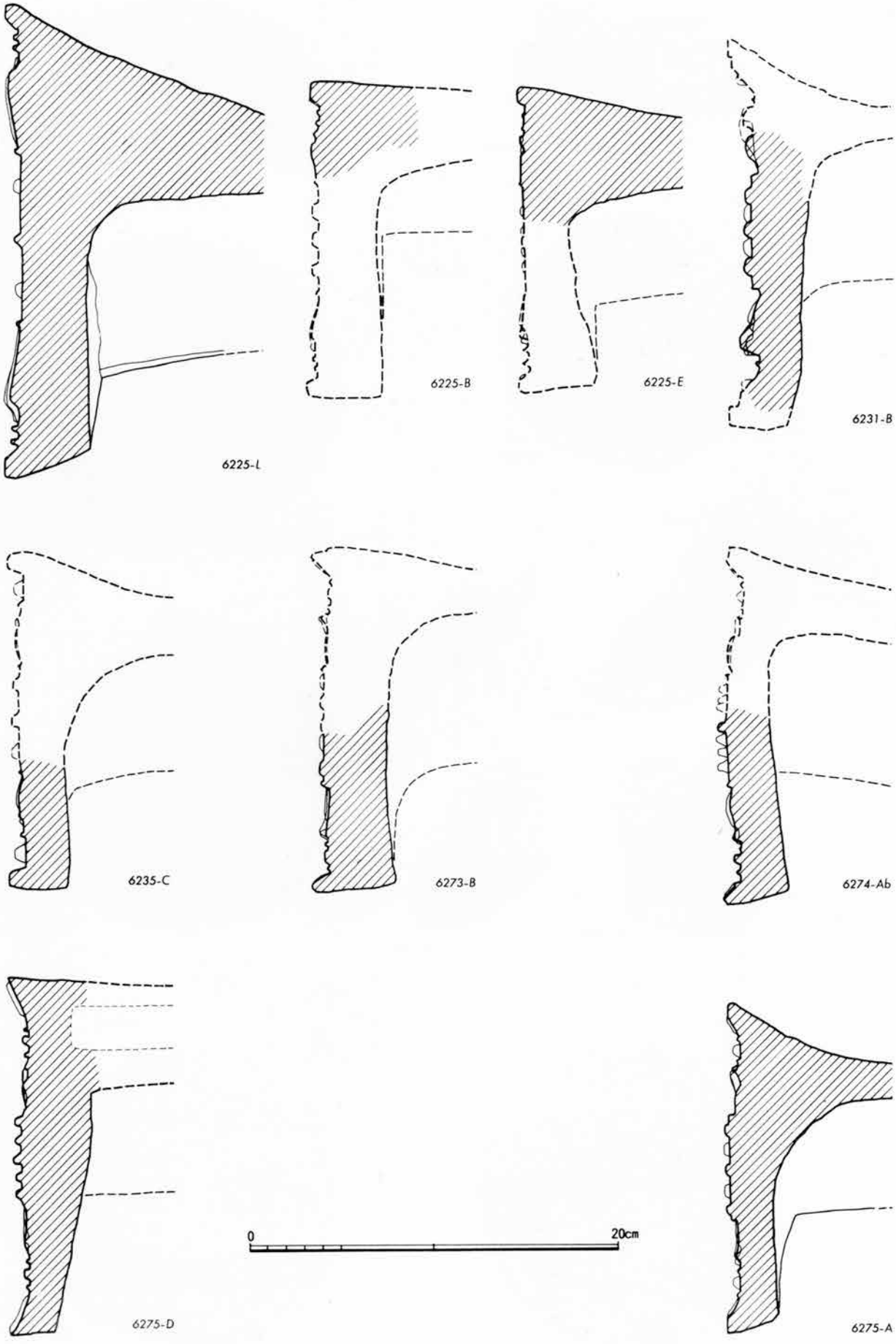
6133A

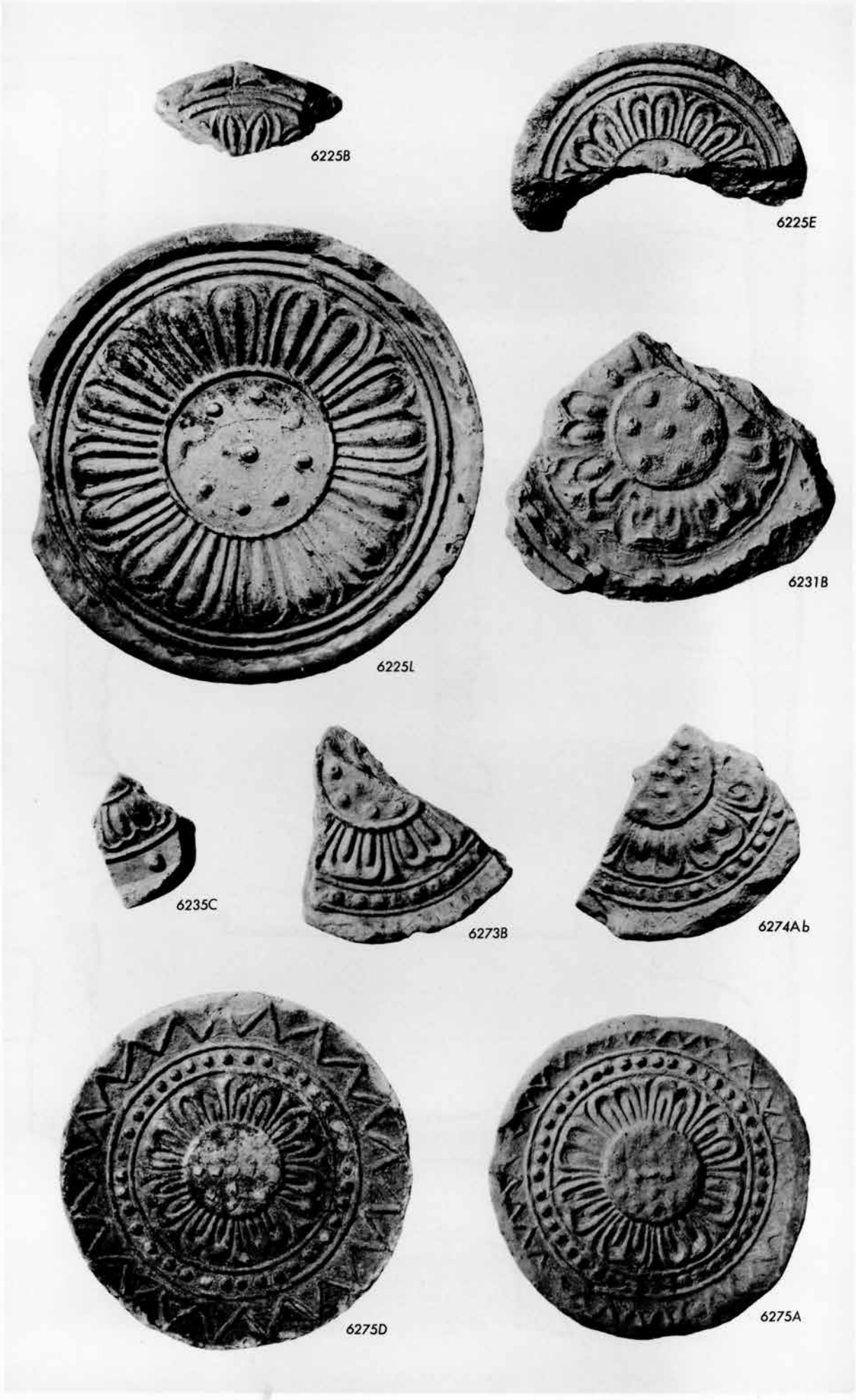
6133M

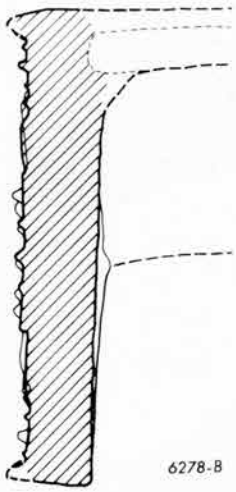
6133P

6225C

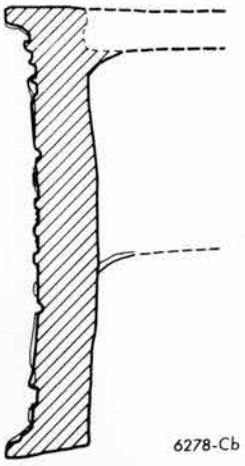
6225A


6225-L
6225-B
6225-E
6231-B
6235-C
6273-B
6274-Ab
6275-D
0
20cm
6275-A

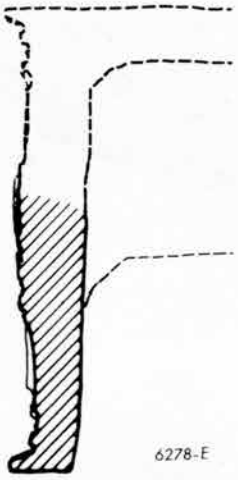

6225B
6225E
6225L
6231B
6235C
6273B
6274Ab
6275D
6275A



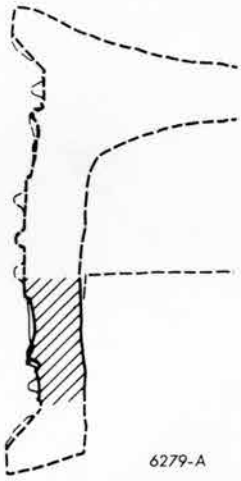
6278-B



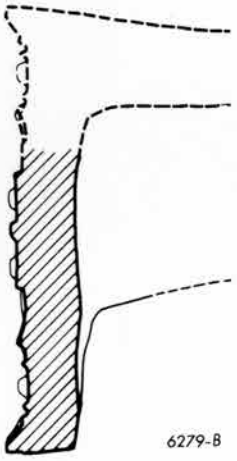
6278-Cb



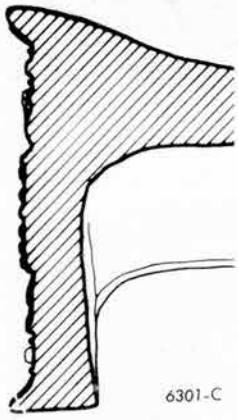
6278-E



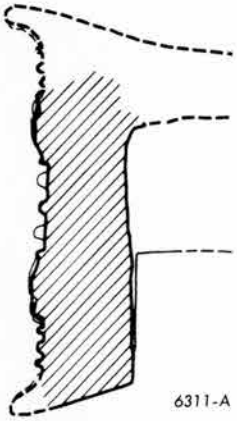
6279-A



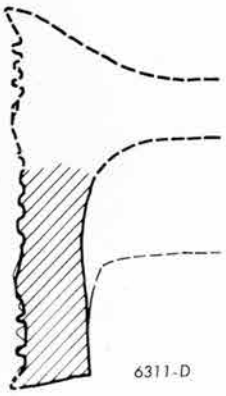
6279-B



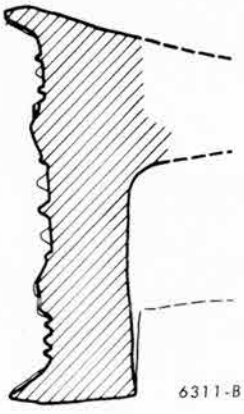
6301-C



6311-A



6311-D



6311-B

6278B

6278Cb

6278E

6279A

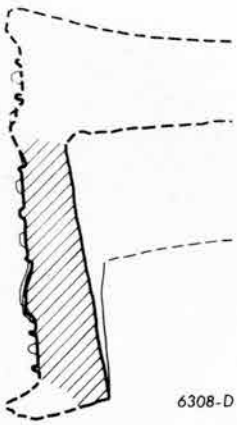
6279B

6301C

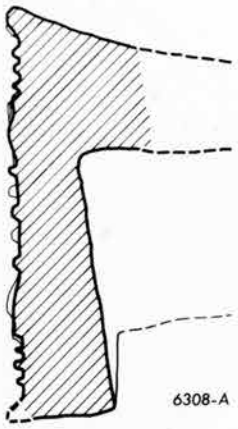
6311A

6311D

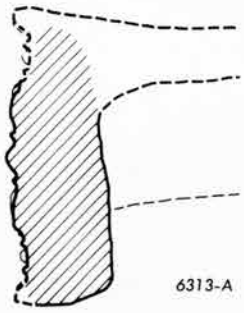
6311B



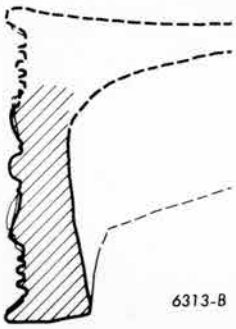
6308-D



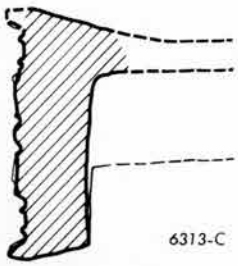
6308-A



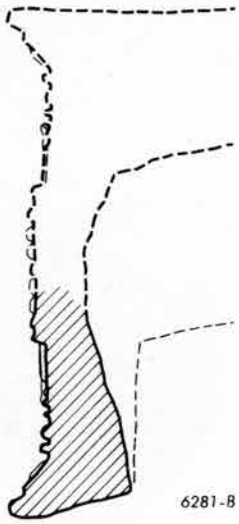
6313-A



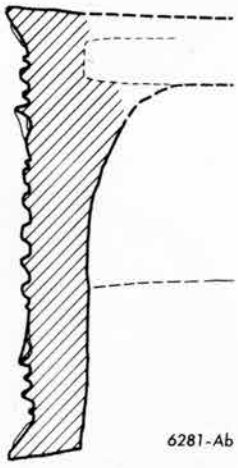
6313-B



6313-C

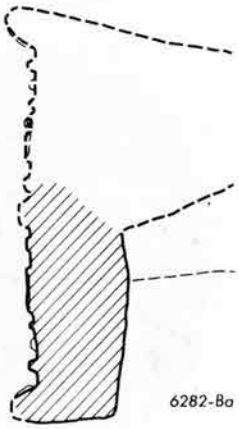


6281-B

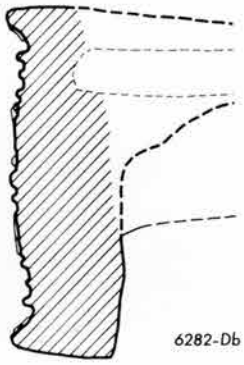


6281-Ab

0 20cm



6282-Ba



6282-Db

6308D

6308A

6313A

6313B

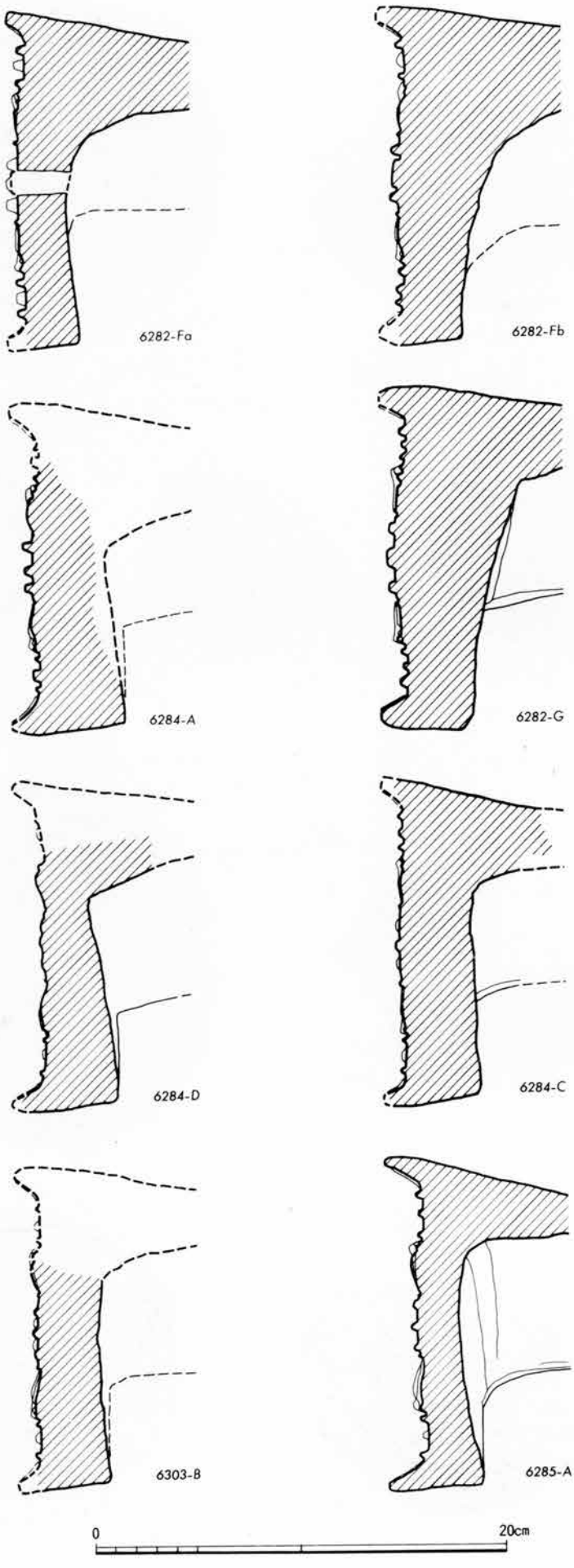
6313C

6281B

6281Ab

6282Ba

6282Db


6282-Fa
6282-Fb
6284-A
6282-G
6284-D
6284-C
6303-B
6285-A
0
20cm

6282Fa

6282Fb

6284A

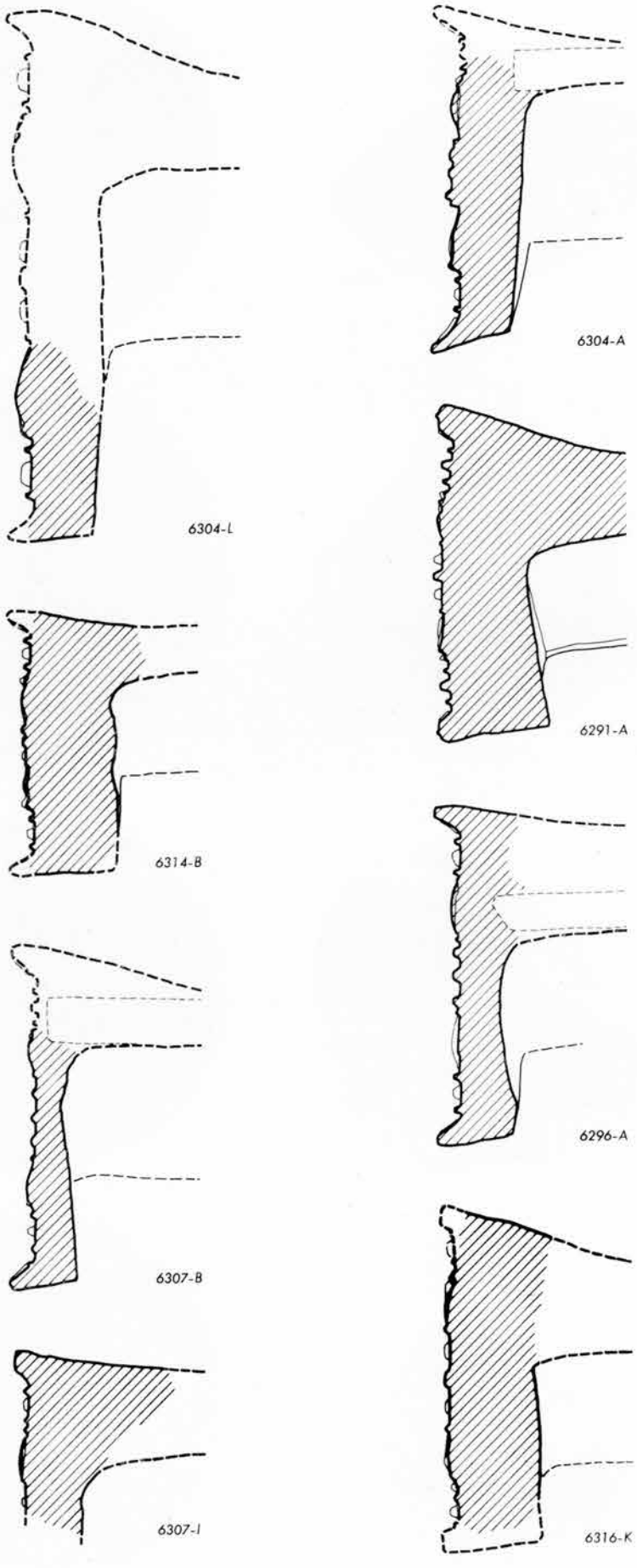
6282G

6284D

6284C

6303B

6285A


6304-L
6304-A
6314-B
6291-A
6307-B
6296-A
6307-I
6316-K
0
20cm

6304L

6304A

6314B

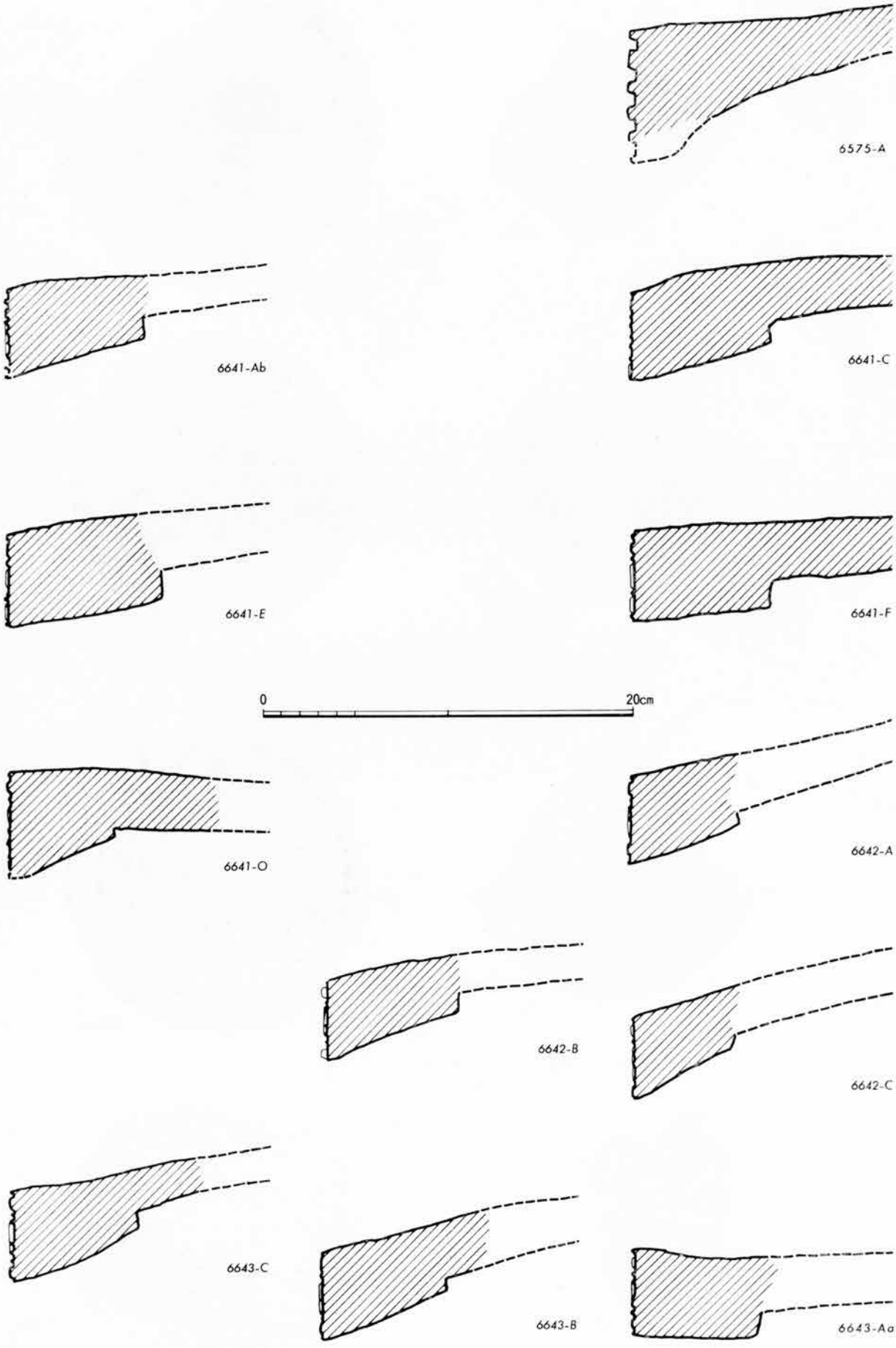
6291A

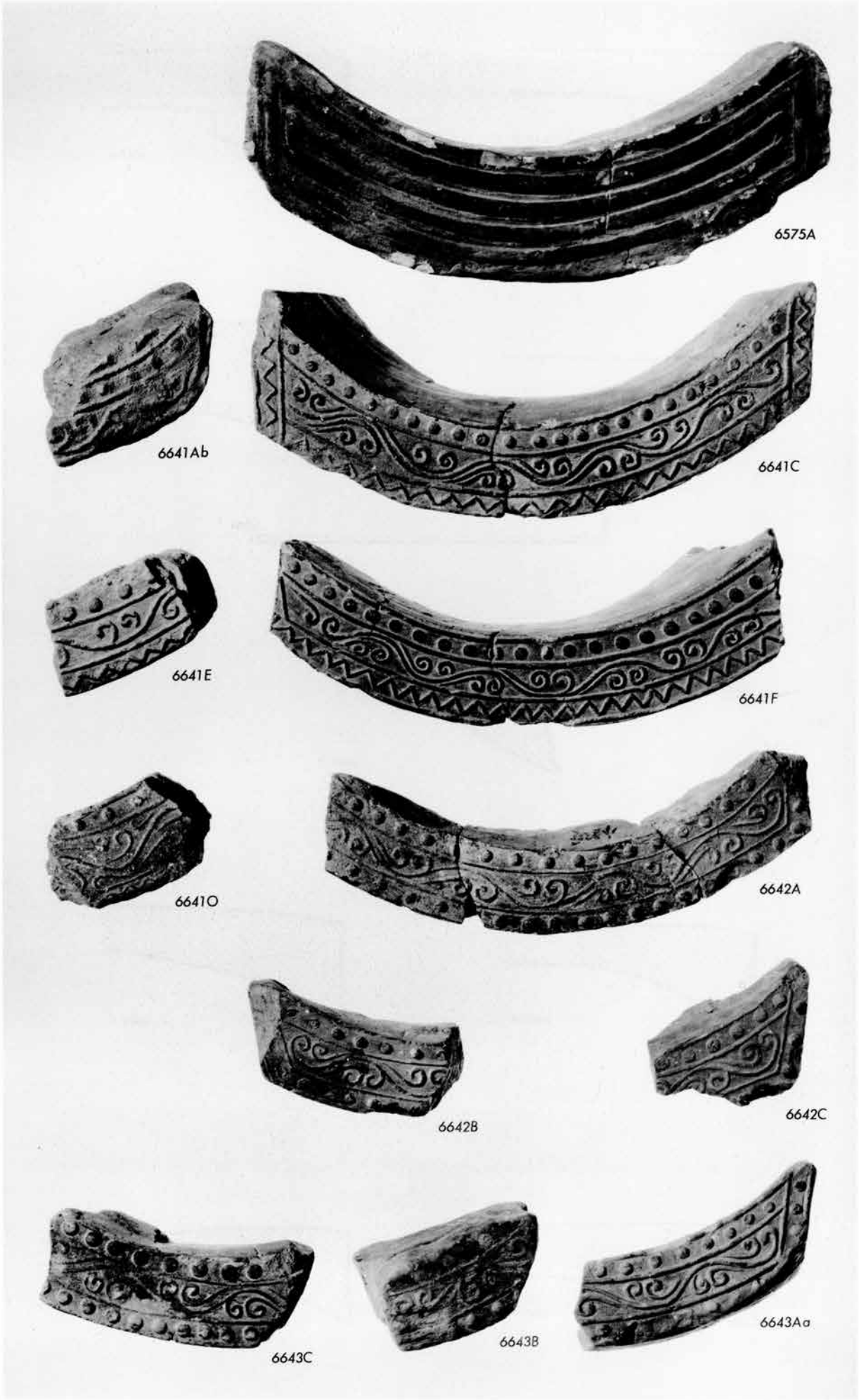
6307B

6296A

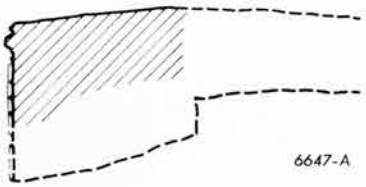
6307I

6316K

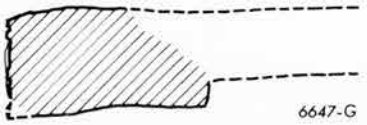

6575-A
6641-Ab
6641-C
6641-E
6641-F
0
20cm
6641-O
6642-A
6642-B
6642-C
6643-C
6643-B
6643-Aa


6575A
6641Ab
6641C
6641E
6641F
6641O
6642A
6642B
6642C
6643C
6643B
6643Aa

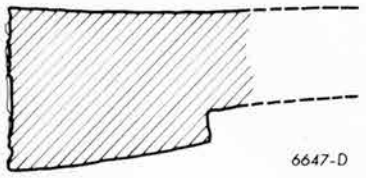
6647-C



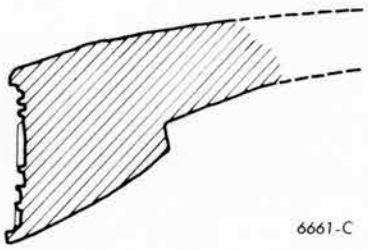
6647-A



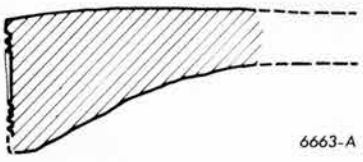
6647-G



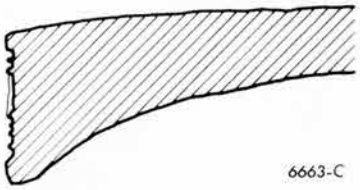
6647-D



6661-C

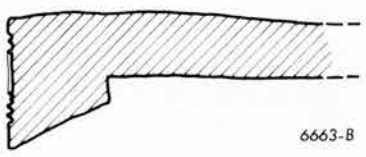


6663-A



6663-C

6663-F



6663-B

6647C

6647A

6647G

6647D

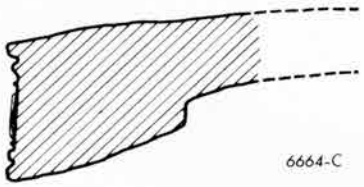
6661C

6663A

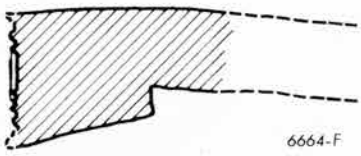
6663C

6663F

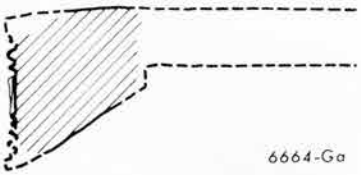
6663B



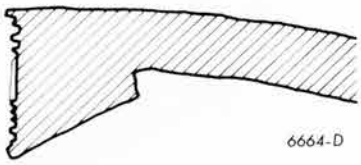
6664-C



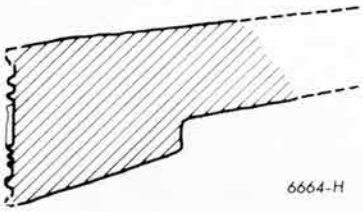
6664-F



6664-Ga

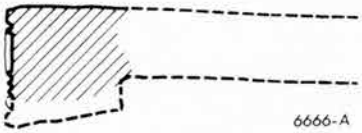


6664-D

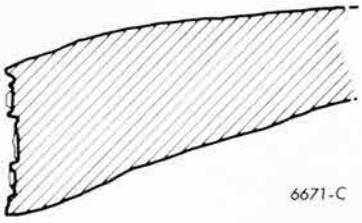


6664-H

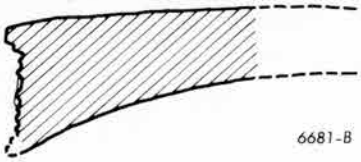
6664-I



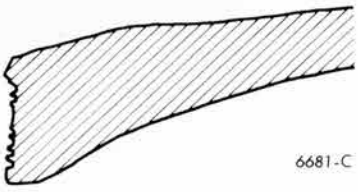
6666-A



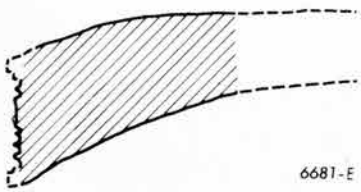
6671-C



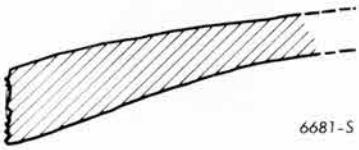
6681-B



6681-C

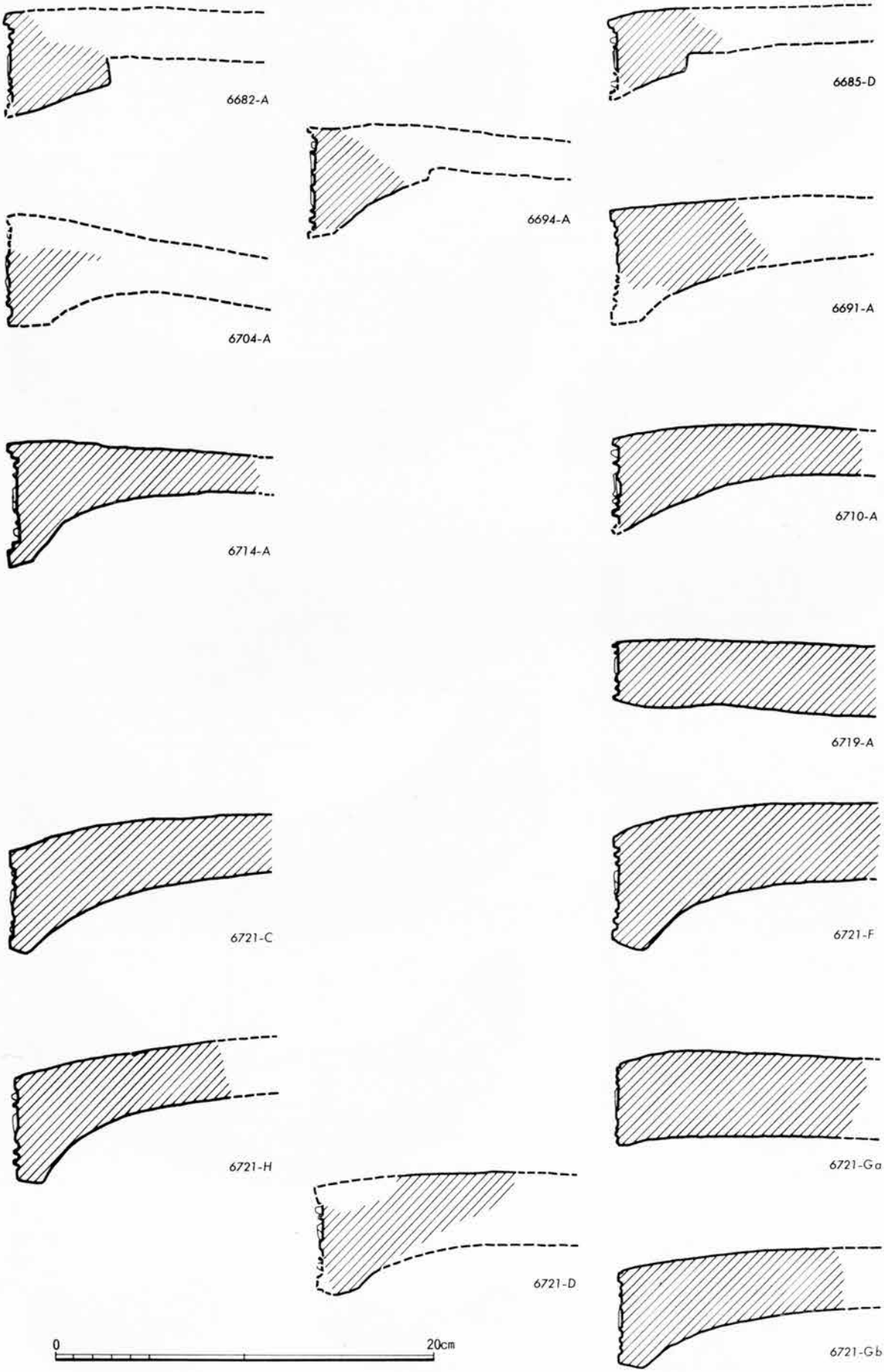


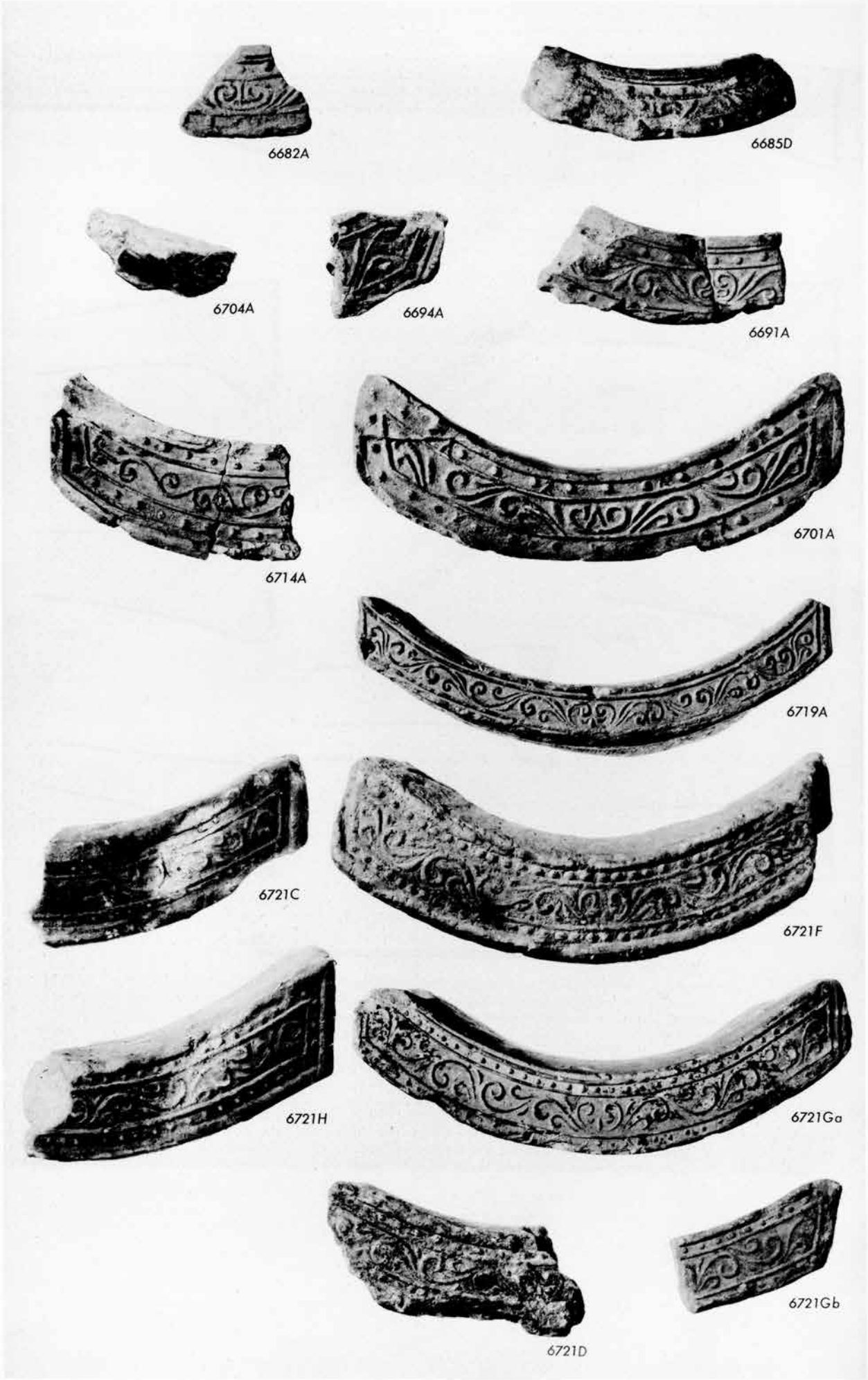
6681-E

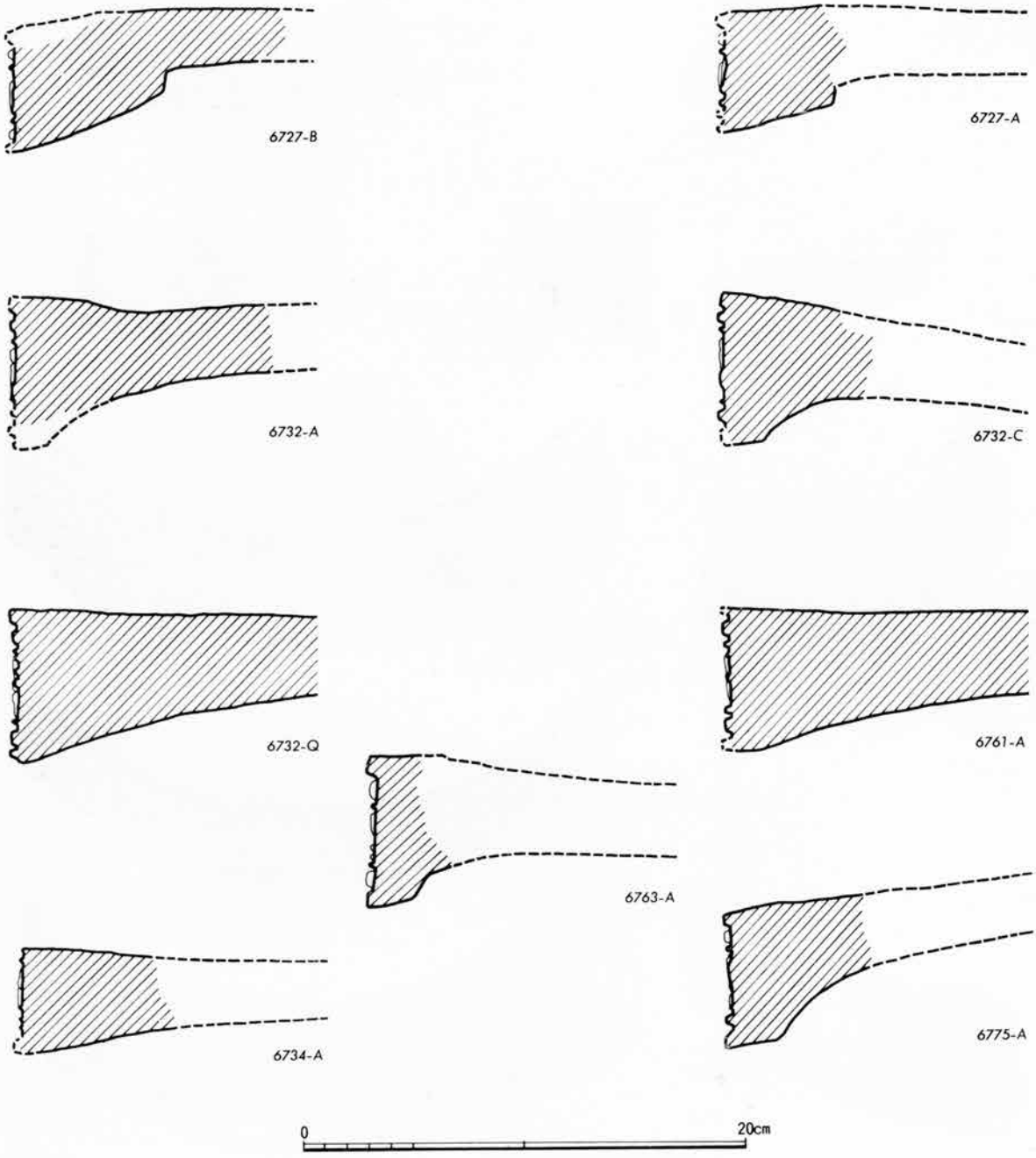


6681-S

6664C
6664F
6664Ga
6664D
6664H
6664I
6666A
6671C
6681B
6681C
6681E
6681S
6681S


6682-A
6685-D
6694-A
6704-A
6691-A
6714-A
6710-A
6719-A
6721-C
6721-F
6721-H
6721-Ga
6721-D
6721-Gb
0
20cm


6682A
6685D
6704A
6694A
6691A
6714A
6701A
6719A
6721C
6721F
6721H
6721Ga
6721D
6721Gb


6727-B
6727-A
6732-A
6732-C
6732-Q
6761-A
6763-A
6734-A
6775-A
0
20cm

6727 B

6727A

6732 A

6732C

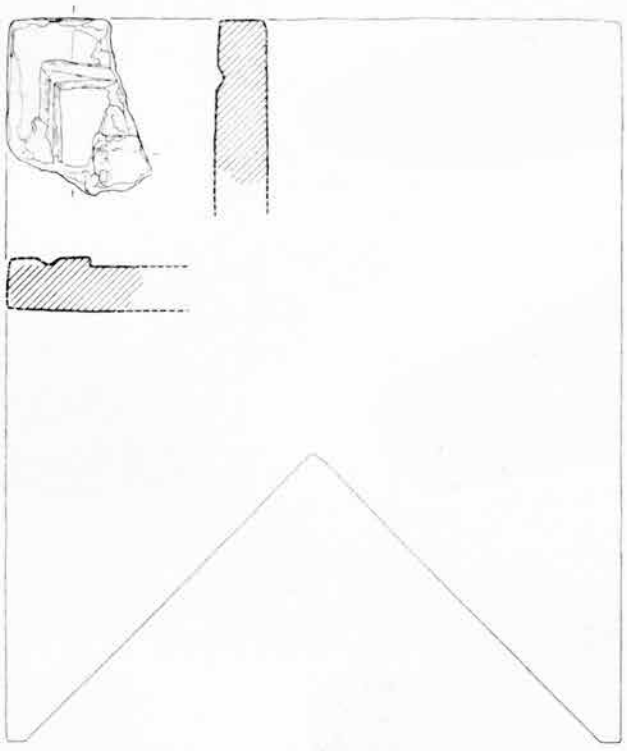
6732Q

6761A

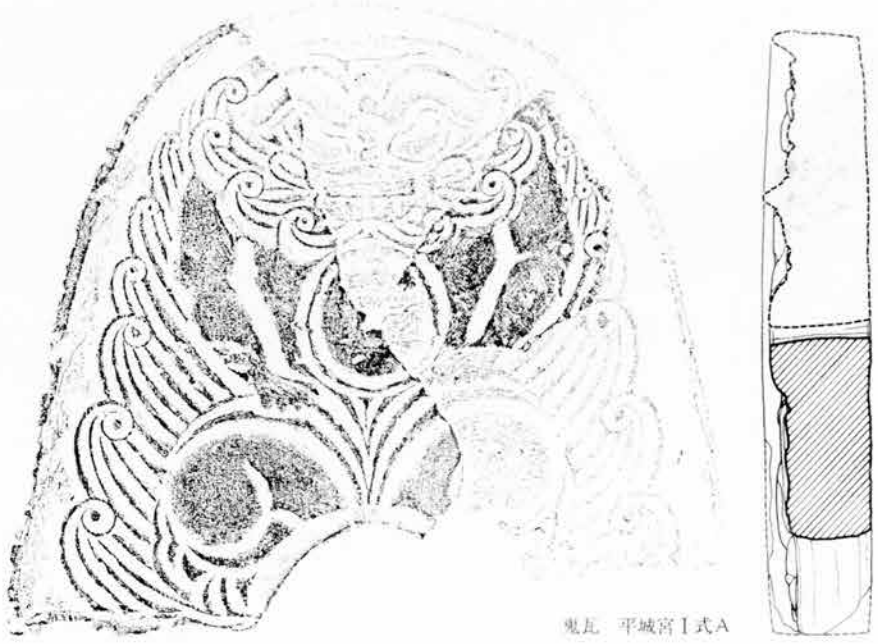
6734A

6763A

6775A



隅木蓋瓦



鬼瓦　平城宮Ⅰ式A

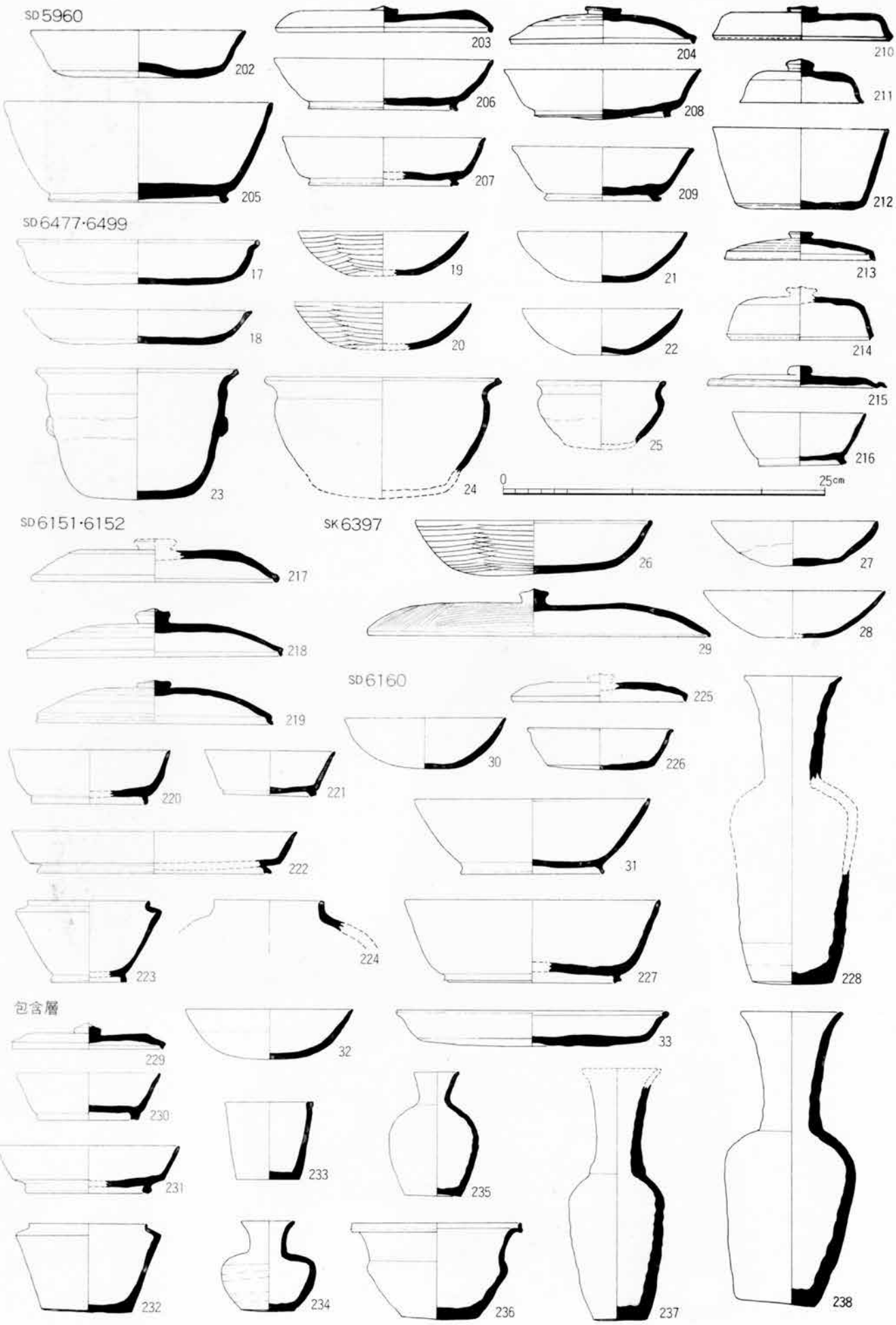
縮尺 1：5

隅木蓋瓦

鬼瓦
平城宮Ⅱ式A1

面戸瓦

鬼瓦
平城宮Ⅰ式A

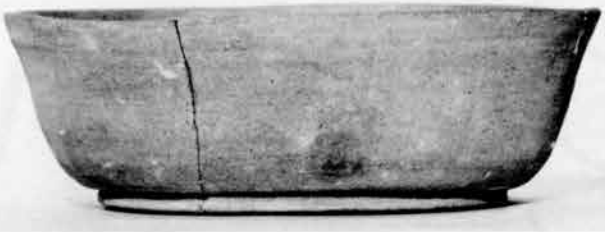

SD5960
202
203
204
210
206
208
211
205
207
209
212
SD6477·6499
17
19
21
213
18
20
22
214
23
24
25
215
216
0
25cm
SD6151·6152
SK6397
217
26
27
218
29
28
SD6160
219
225
30
226
220
221
31
222
223
224
227
228
包含層
229
32
33
230
231
233
235
232
234
236
237
238

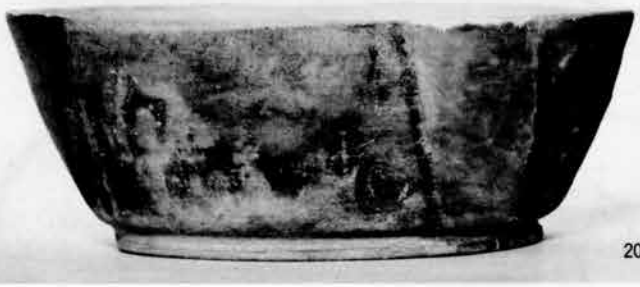
17

18

26

31


227


205

238

211

233

234

210

204

203

207

208

209

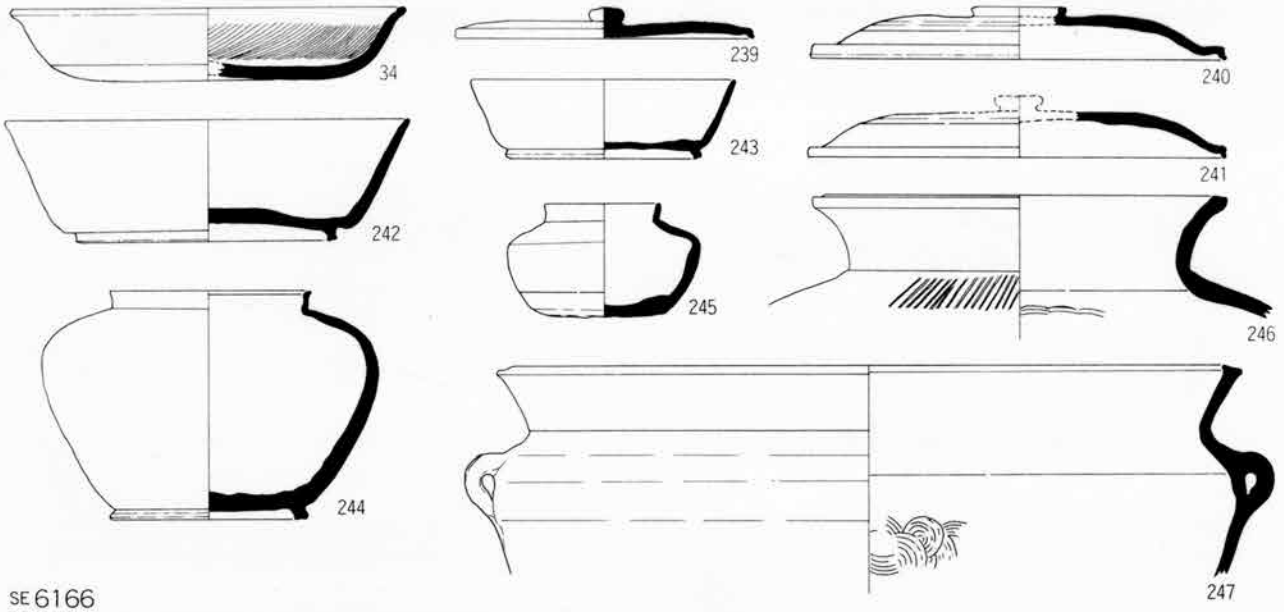
22

21

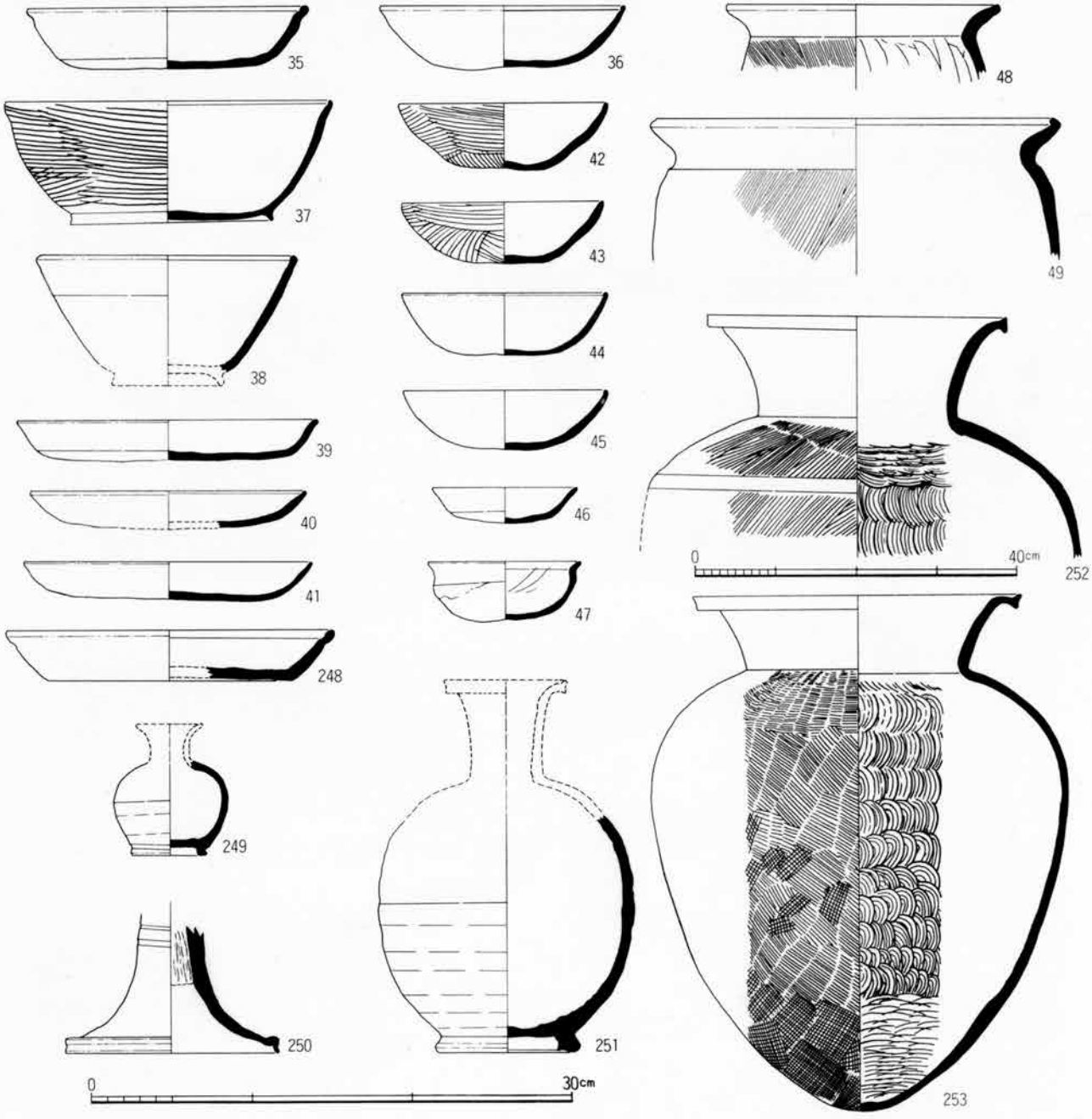
236

23

SK 6350



SE 6166



239

240

243

34

245

244

249

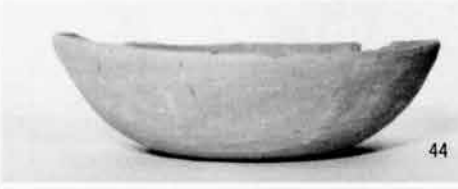
46

42

45

47

43


44

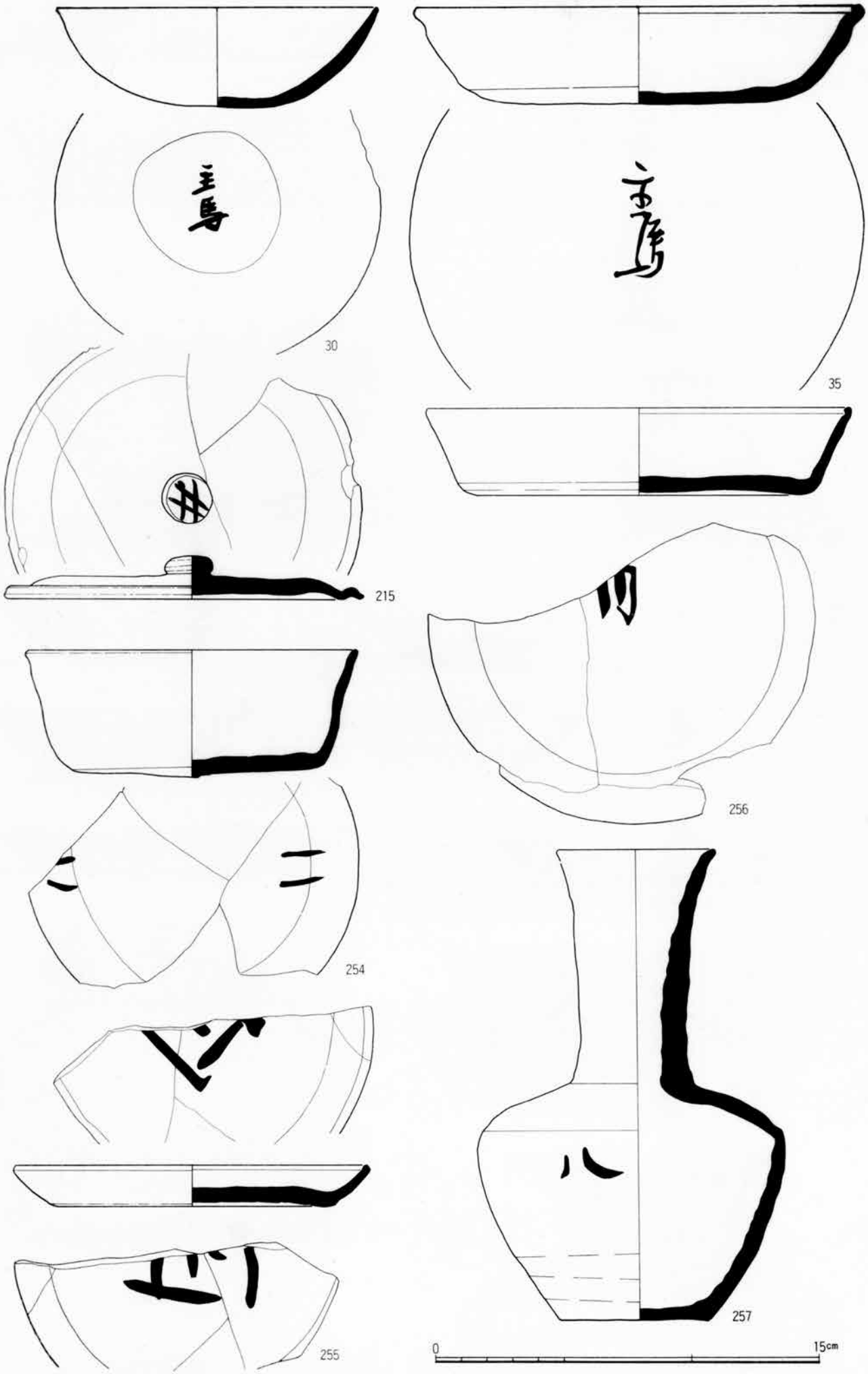
36

41

37

252

253


30
35
215
256
254
257
255
0
15cm

257

35

30

257

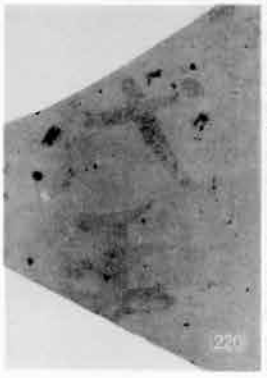
256

35

231

233

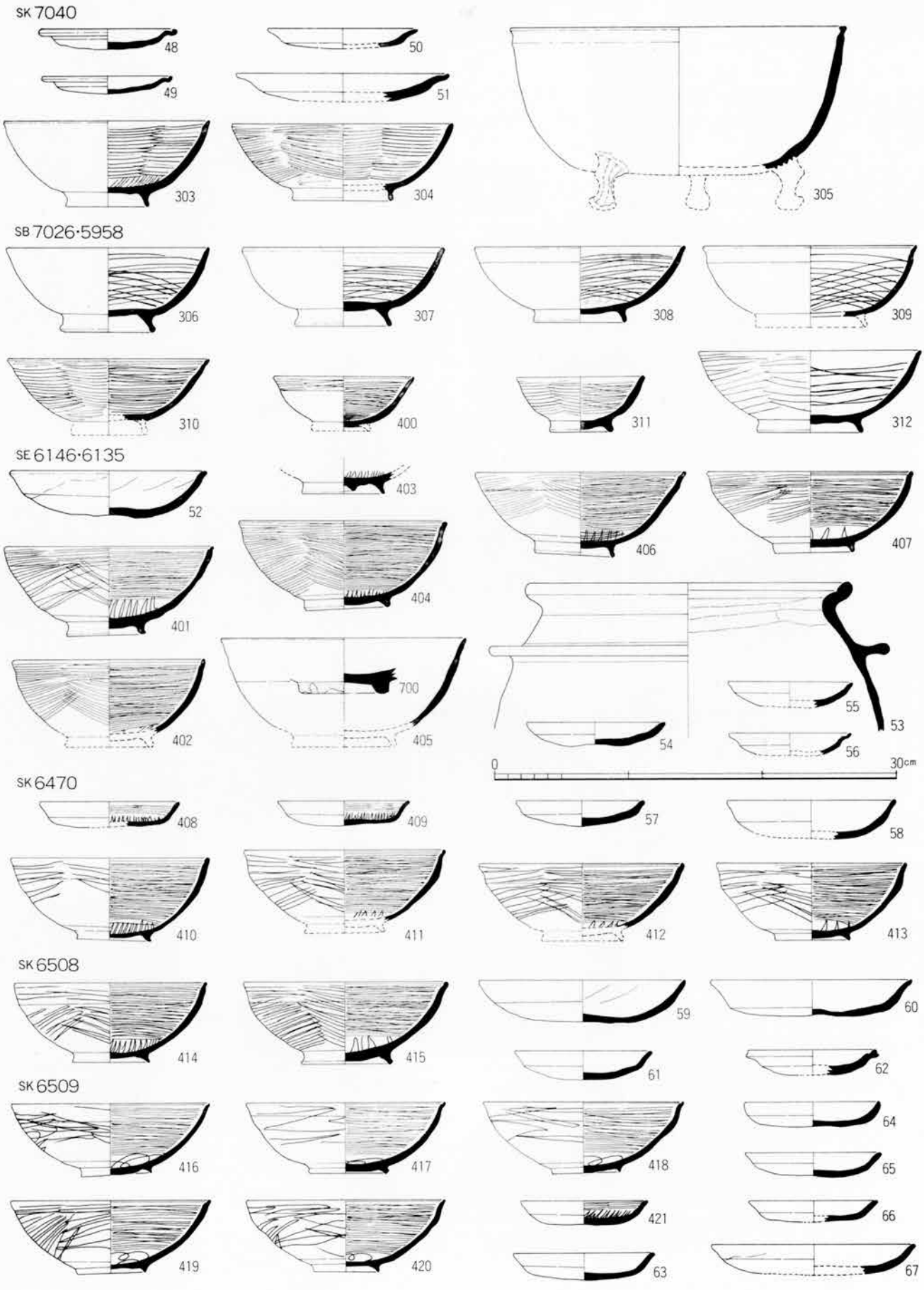
230


220

225

234

229


SK 7040
48
50
49
51
303
304
305
SB 7026·5958
306
307
308
309
310
400
311
312
SE 6146·6135
52
403
406
407
401
404
700
405
402
55
53
54
56
0
30cm
SK 6470
408
409
57
58
410
411
412
413
SK 6508
414
415
59
60
61
62
SK 6509
416
417
418
64
65
421
66
419
420
63
67

49

48

400

61

64

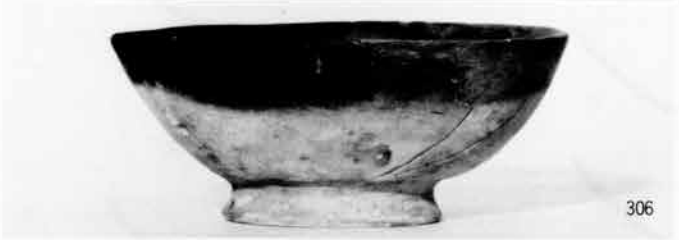
311

57

409

59

52


306

303

307

308

312

404

410

414

406

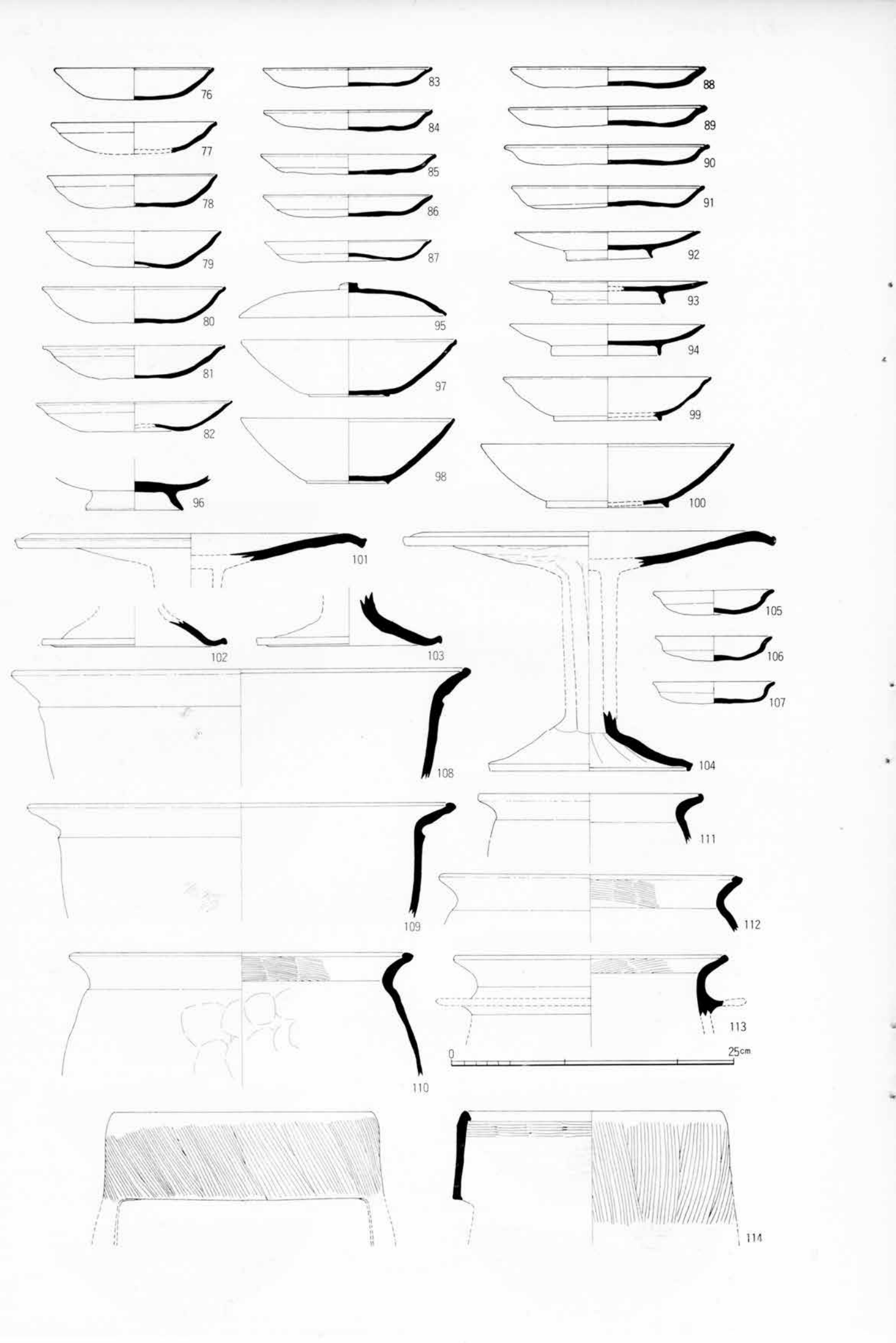
415

417

413

420

419


76
77
78
79
80
81
82
96
83
84
85
86
87
95
97
98
88
89
90
91
92
93
94
99
100
101
102
103
105
106
107
104
108
111
109
112
113
0
25cm
110
114

80

81

79

106

107

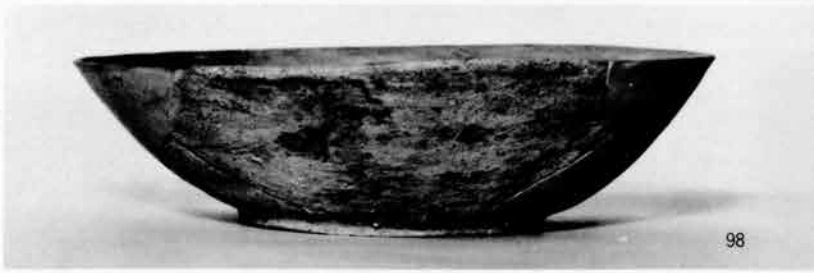
85

84

94

95

97


98

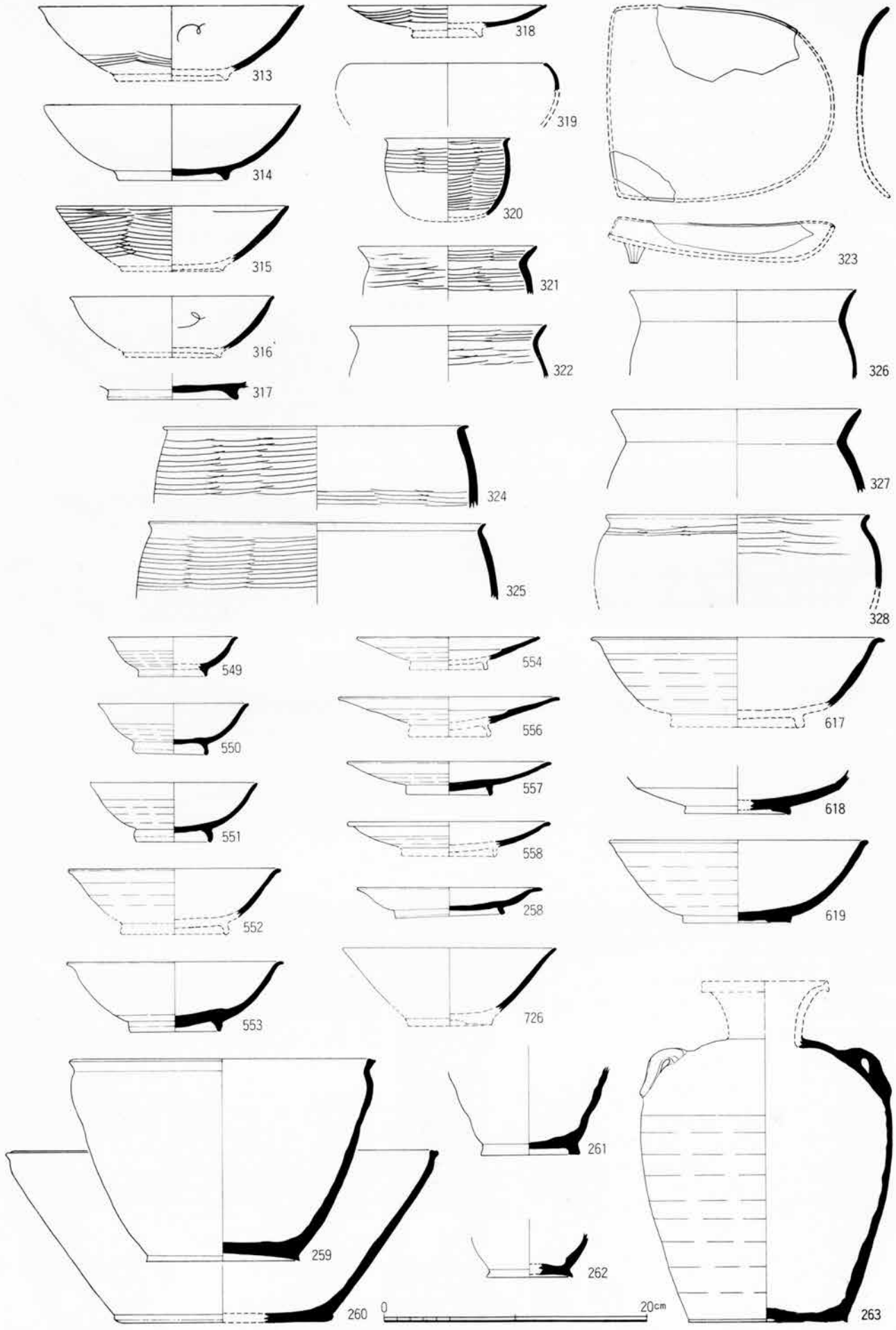
88

89

93

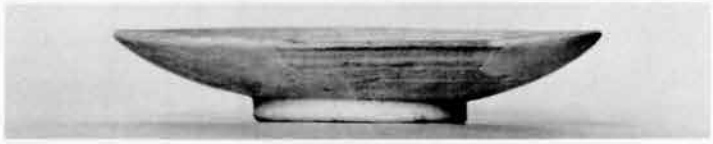
92

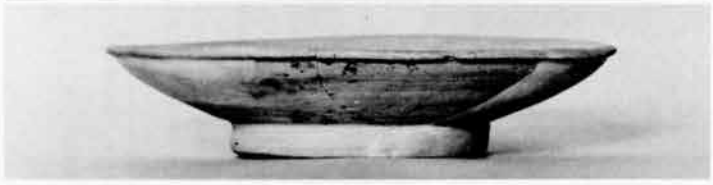
104


313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
549
550
551
552
553
554
556
557
558
258
726
617
618
619
259
260
261
262
0
20cm
263

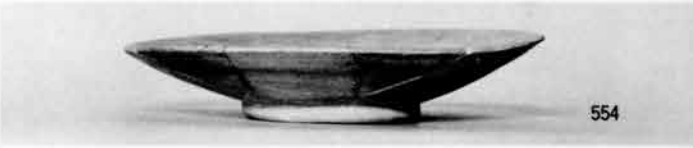
314

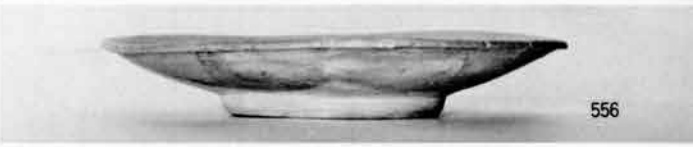
553

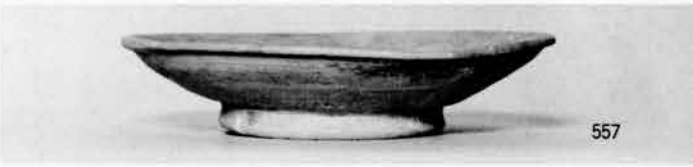




323


554


556

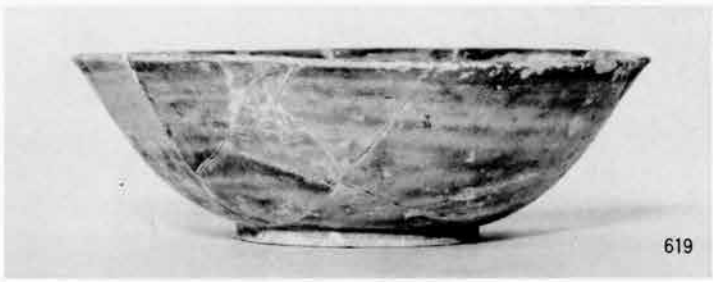

557

258

550

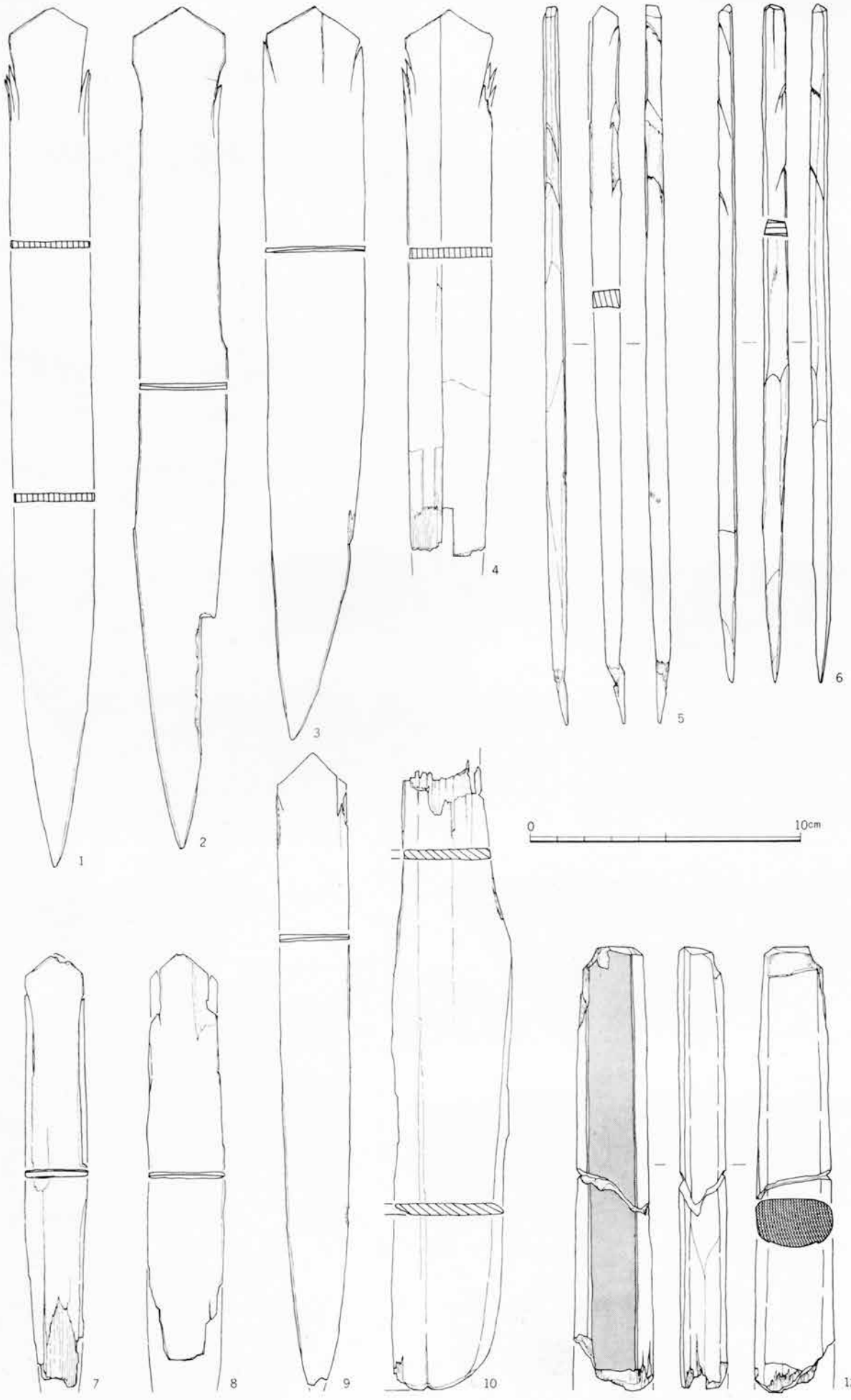
551

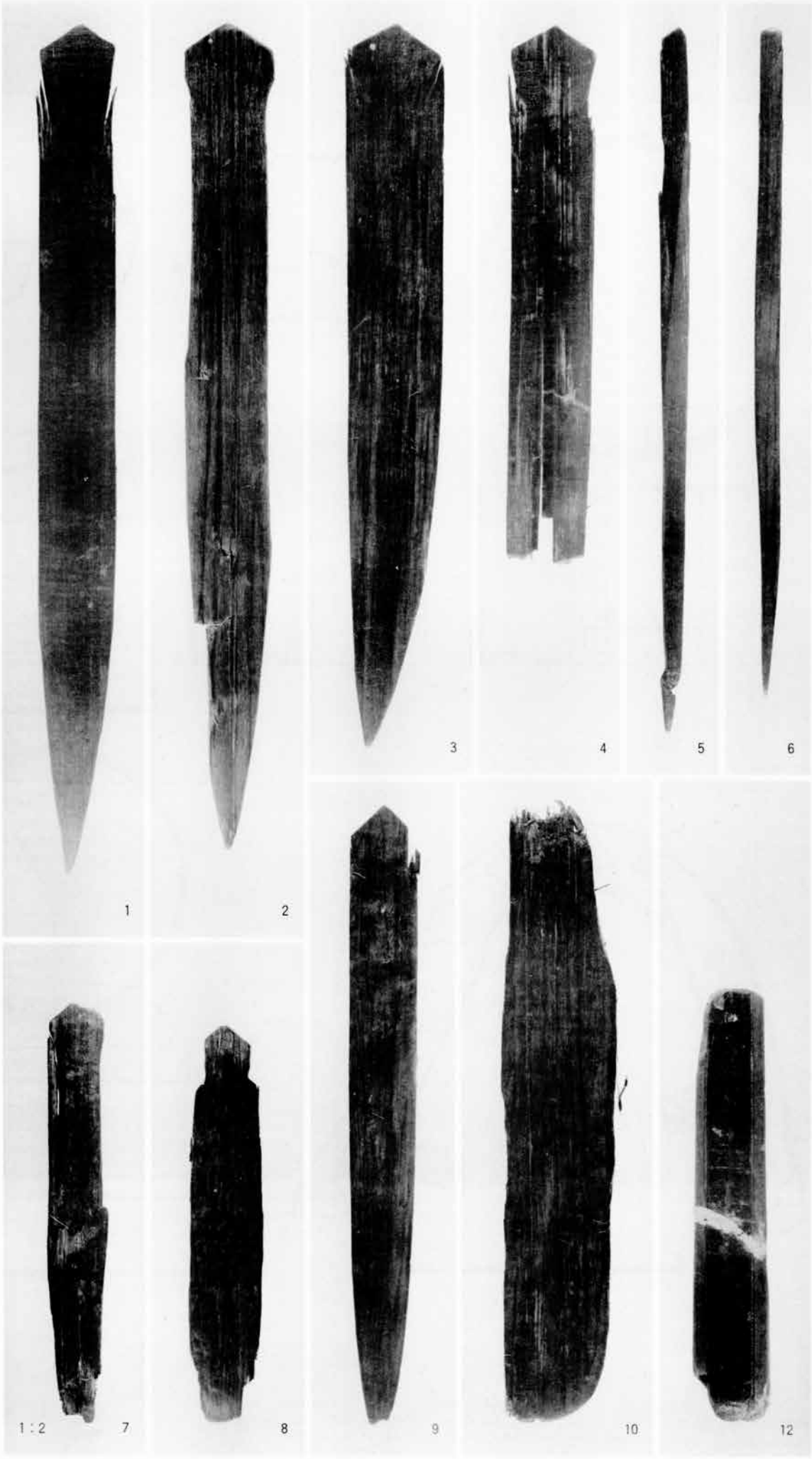
260

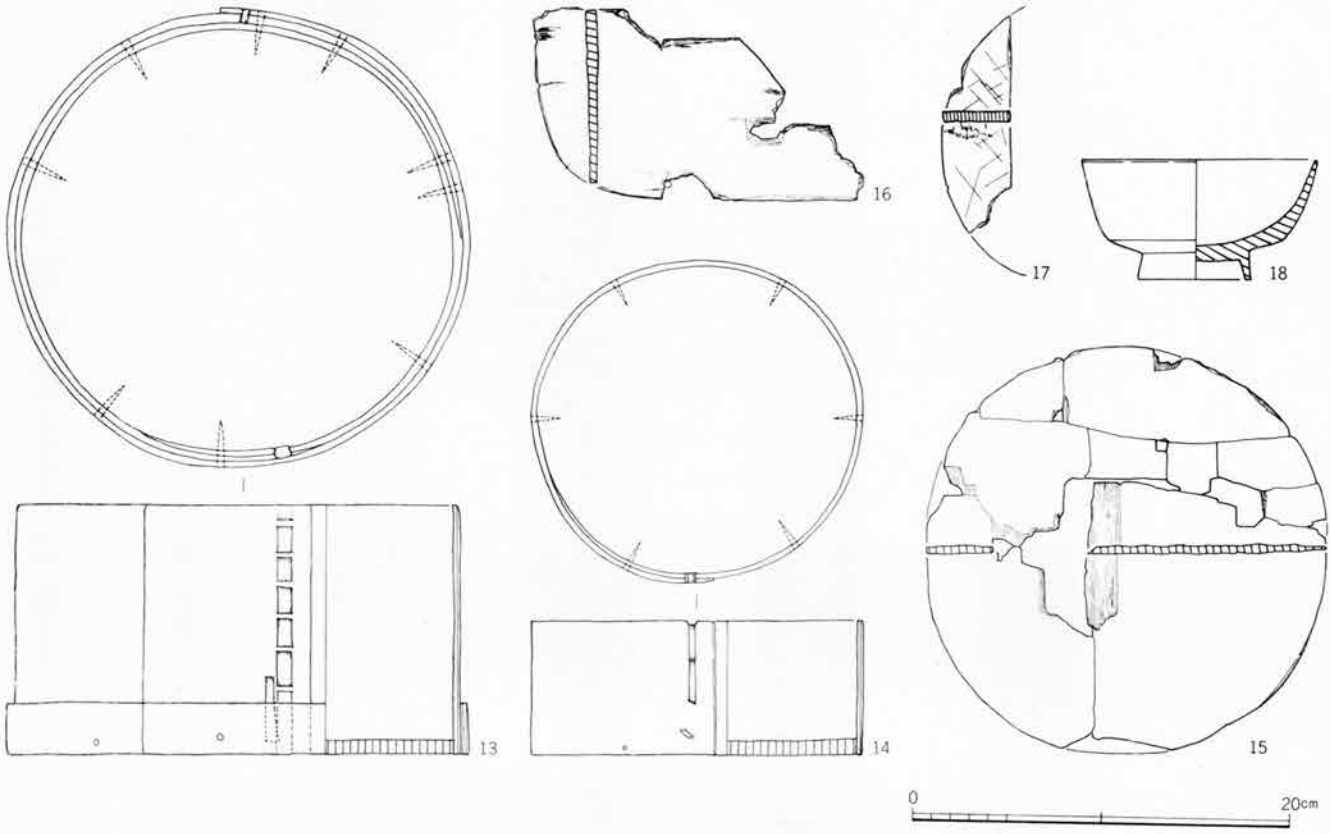

619

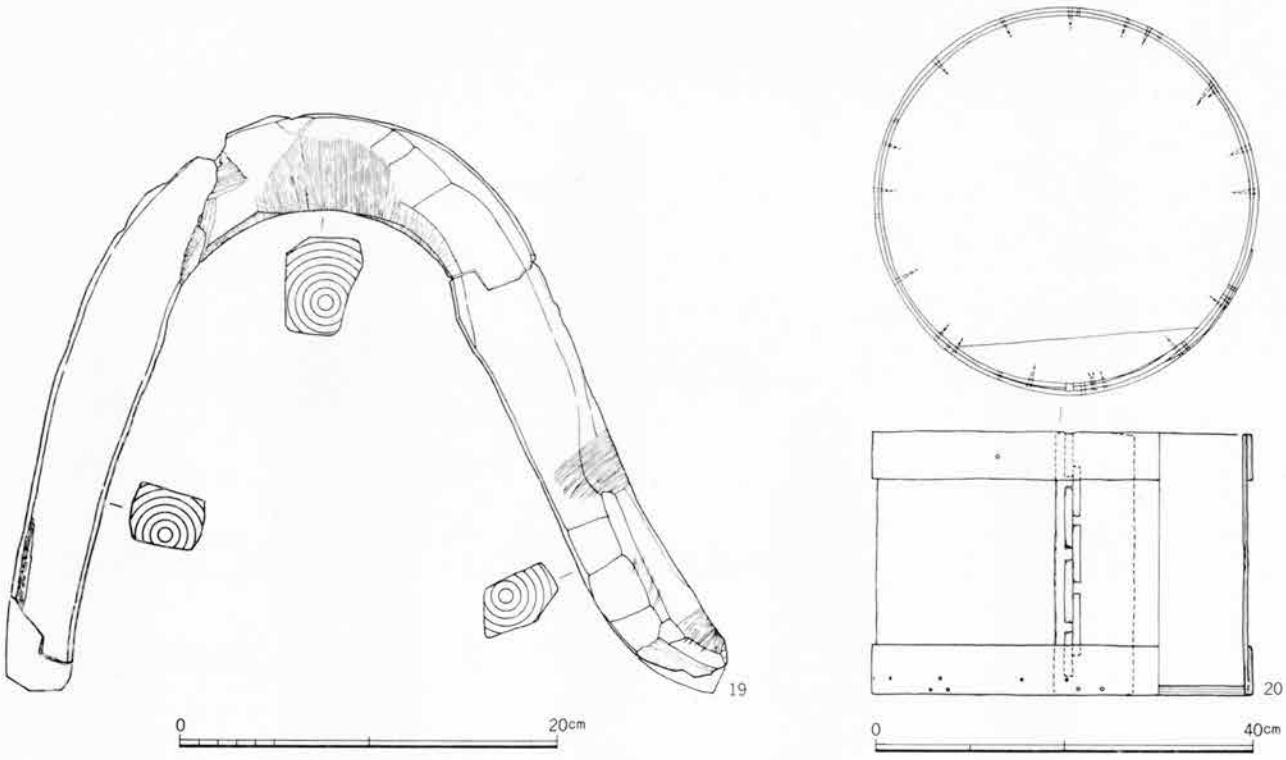
259

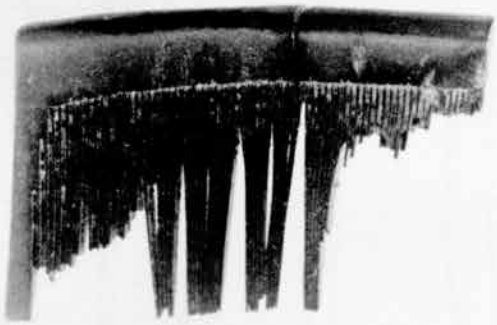
263


1
2
3
4
5
6
0
10cm
7
8
9
10
12


1
2
3
4
5
6
1:2
7
8
9
10
12


13
14
15
16
17
18
0
20cm


19
20
0
20cm
0
40cm



1 : 1 21

1 : 2 18

1 : 2 11

1 : 2 17

1 : 4 14

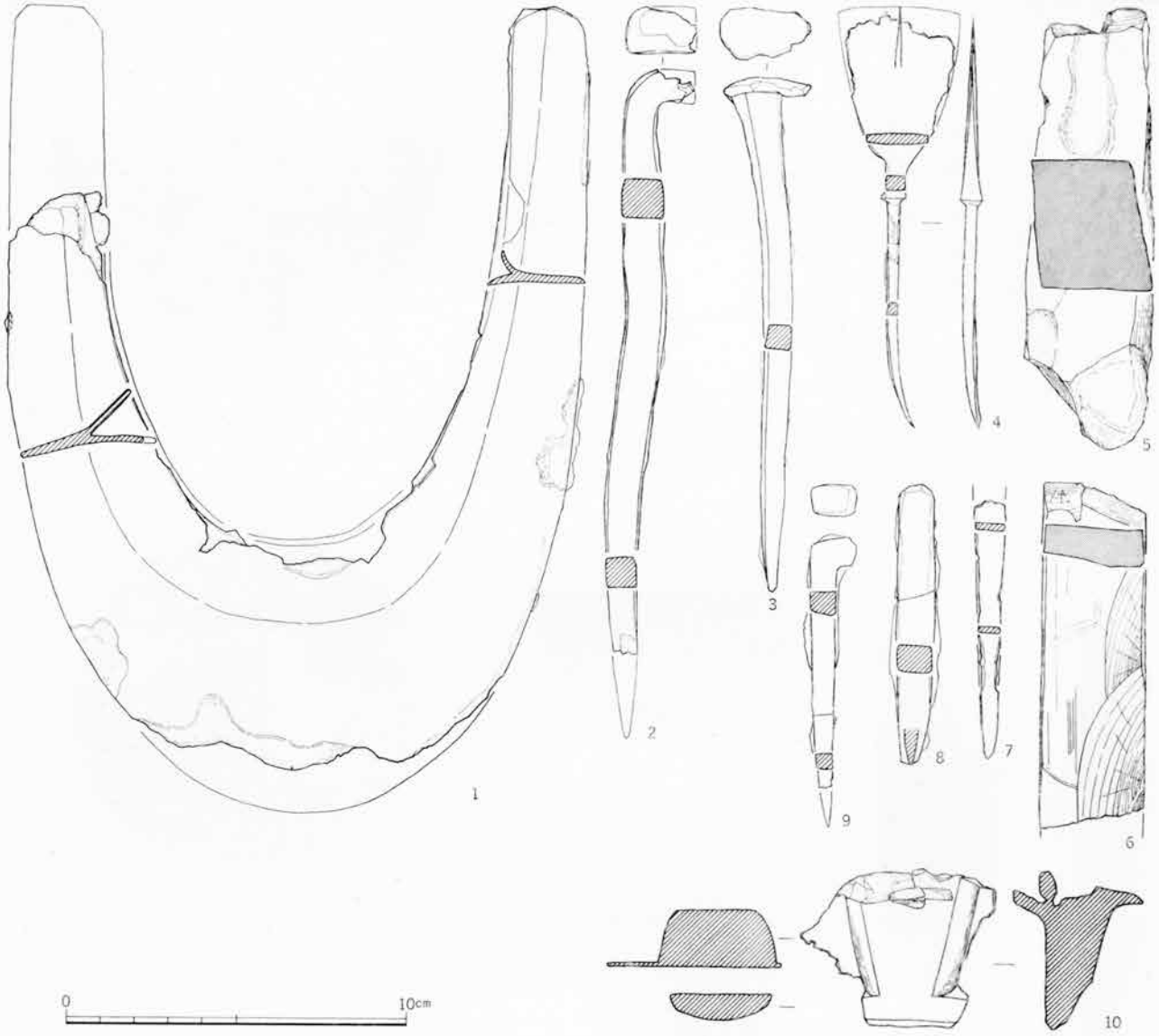
1 : 4 16

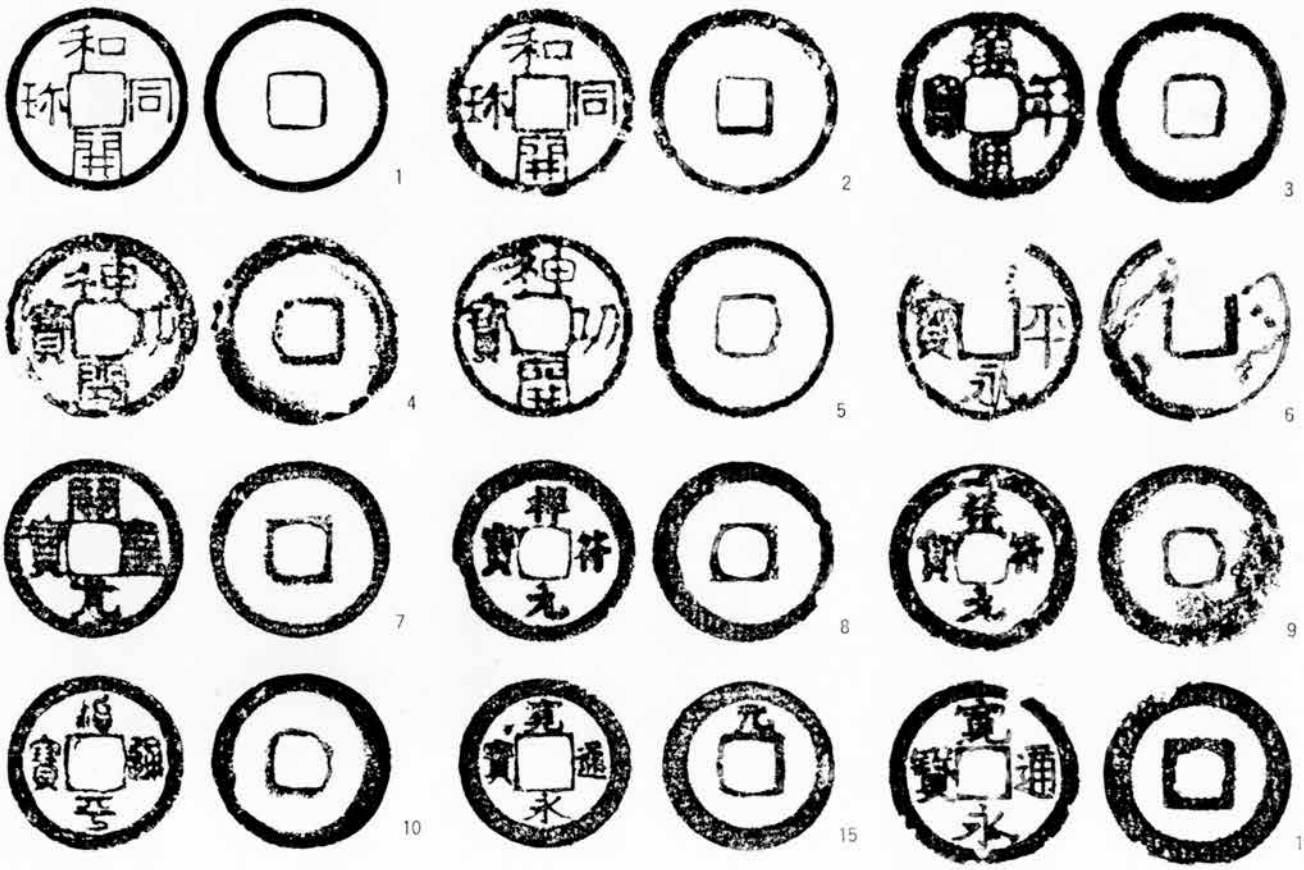
1 : 4 15

1 : 8 20

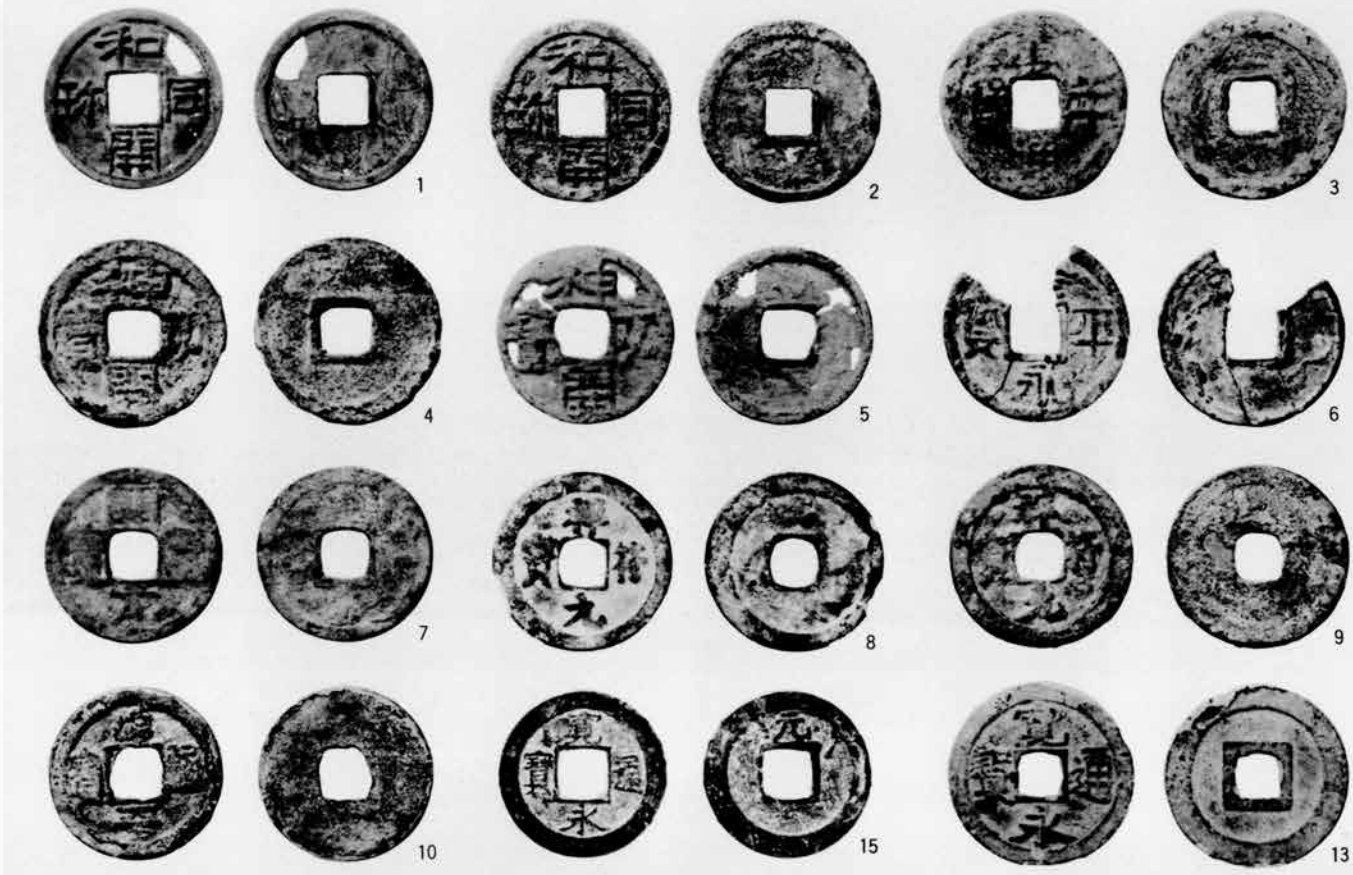
1 : 4 19

1 : 4 13


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
0
10cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
15
13

1 : 2



1 : 1

1985年 3 月15日　　印刷

1985年 3 月30日　　発行

平城宮発掘調査報告　XII

奈良国立文化財研究所学報　第42冊

奈良市二条町二丁目九番一号

著作権所有
発 行 者　　奈良国立文化財研究所

京都市下京区油小路通仏光寺上ル

印 刷 者　　有限会社 真 陽 社